三雲遺跡

Ⅳ

糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査

福岡県文化財調査報告書

第６５集

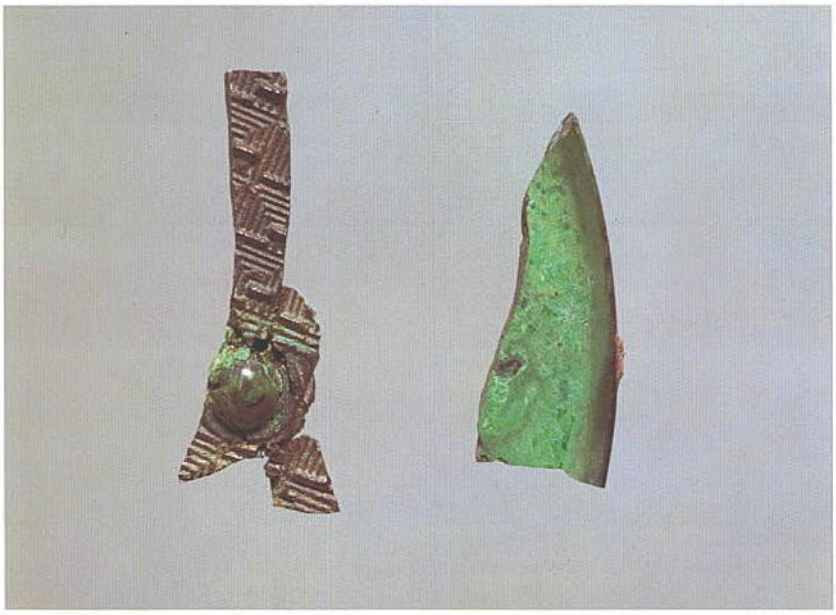
１９８３

福岡県教育委員会

三　雲　遺　跡

糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査

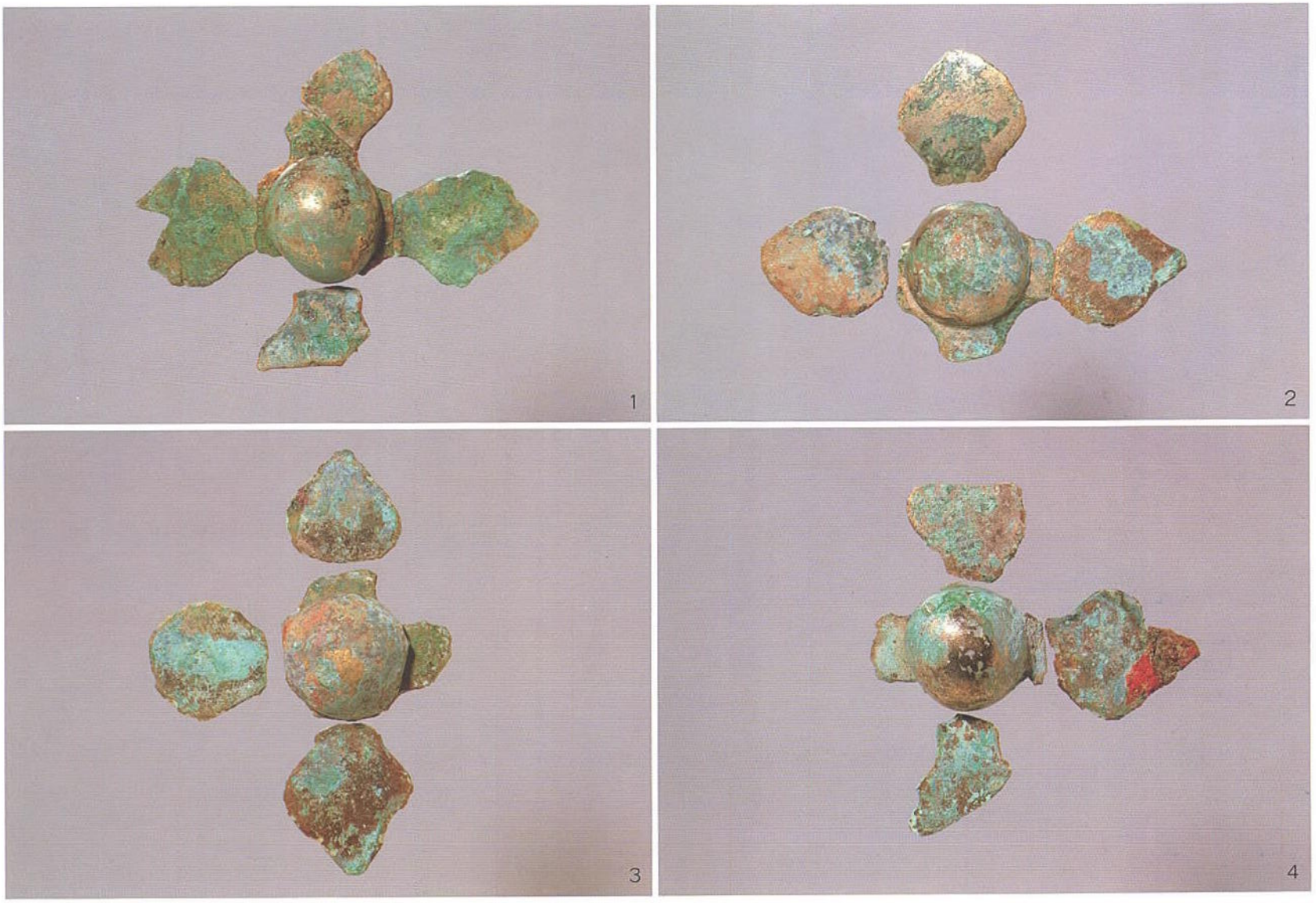
1



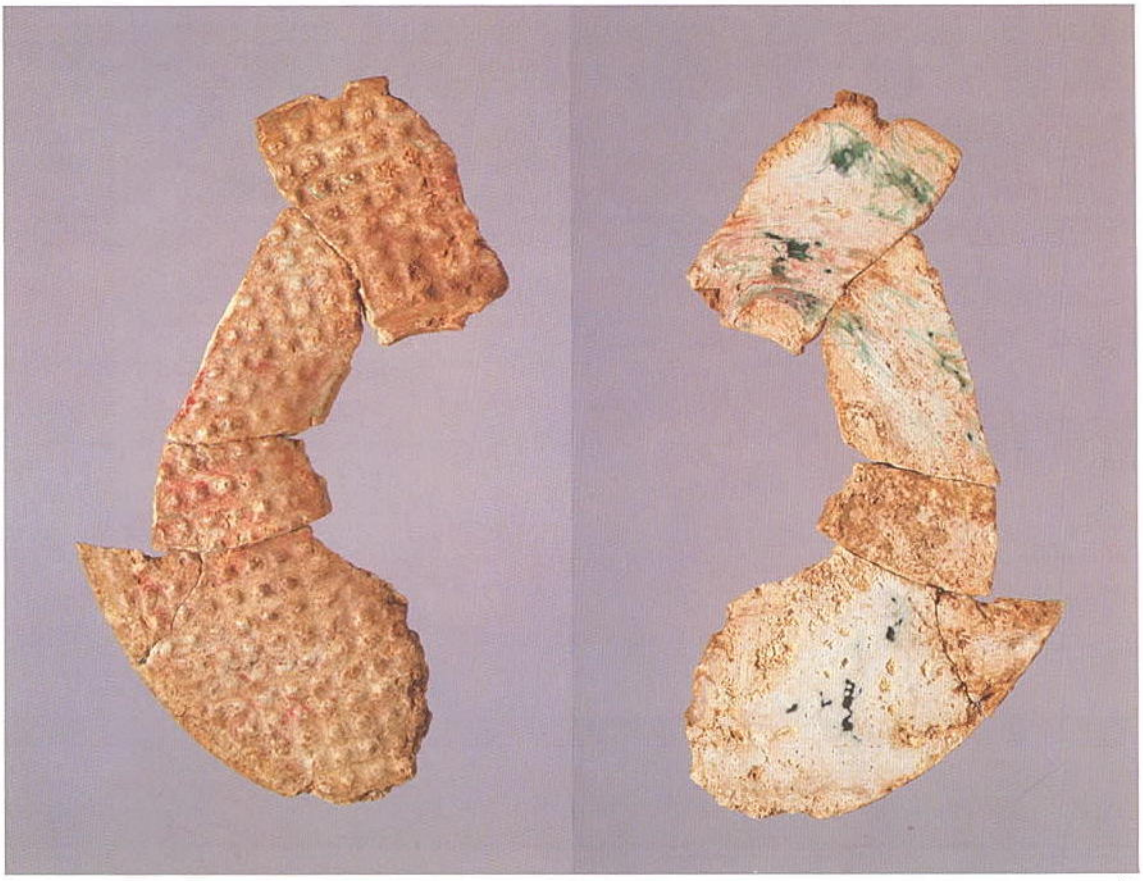
2

3

1　南小路1号甕棺墓出土重圏彩画鏡　　2　雷文鏡　　3　ガラス勾玉



1号甕棺墓出土金銅四葉座飾金具



1

2

1　1号甕棺墓出土ガラス璧　　2　2号甕棺墓出土ガラス勾玉

1

2

3

4

5

1　2号甕棺墓出土連弧文日光鏡　2　連弧文日光鏡　3　連弧文昭明鏡　4　ガラス垂飾　5　硬玉勾玉

序

この報告書は，糸島郡前原町三雲地区圃場整備事業に際し，前原町土地改良区と協議の結果，遺跡の大半を保存することができましたが，やむなく破壊される埋蔵文化財を昭和49年度から福岡県教育委員会が発掘調査した記録の一部であります。

今回の報告は，前原町大字三雲地区の昭和49年度から昭和57年度までに実施した予備調査と圃場整備で削平あるいは道路敷となる部分の調査の一部を内容とするもので，『三雲遺跡』Ⅳとして公刊することになりましたが，同地区の圃場整備関係の報告書としては最終刊となります。

発掘調査の記録としては満足のいくものではありませんが，本報告書を通して埋蔵文化財に対し，一層の御協力をいただければ幸いです。

なお，遺跡の保存と調査及び報告書作成に対して御協力いただいた前原町土地改良区と地元の方々をはじめ，前原町教育委員会や関係各位の御援助と御配慮により最終刊を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

昭和58年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　　友　野　　隆

例　言

1．本書は，昭和49年11月25日から昭和58年３月31日までに，福岡県教育委員会が国庫補助を受けて，前原町三雲地区圃場整備事業のために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した４冊目の報告書である。

2．本書の執筆分担は次のとおりである。

第１章……柳田康雄

第２章　第１節……柳田康雄・森田　勉・桜井康治
小池史哲・川村　博・荒武麗子

第２節……柳田康雄・森田　勉・木下　修
児玉真一・新原正典・馬田弘稔
小池史哲・池辺元明・立石雅文
川村　博・荒武麗子・片岡宏二

第３節……小池史哲

第４節……柳田康雄・副島邦弘・馬田弘稔
小池史哲・池辺元明・宮崎貴夫
立石雅文・丸山康晴・川村　博

第５節……柳田康雄・橋口達也・副島邦弘
小池史哲・丸山康晴

第６節……柳田康雄・橋口達也・森田　勉
小池史哲・川村　博

第３章　第１節……望月明彦

第２節……望月明彦

第３節……森　　彬

第４節……布目順郎

第５節……江本義理

3．遺物の整理・復原は岩瀬正信，図面作成においては職員担当者の外に平田春美・荒武麗子・豊福弥生が従事し，掲載の写真のうち遺物撮影は九州歴史資料館の石丸洋主任技師とその指導のもとに平島美代子が担当した。なお，写真の撮影，実測図の作成および製図は，図版目次・挿図目次に示すとおりである。

4．本書の編集は，小池が担当した。

本　文　目　次

序

第１章　調査組織と調査の経過

１．調査組織…… 1

２．調査の経過…… 6

第２章　三雲遺跡の遺構と遺物

第１節　寺口地区の調査…… 11

１．はじめに…… 11

２．Ｉ－８トレンチ…… 11

３．II−17の遺構と遺物…… 12

(1)　大　溝…… 12

(2)　甕棺墓と石棺墓…… 21

(3)　住居跡と包含層の遺物…… 34

(4)　歴史時代の遺構と遺物…… 50

４．小　結…… 56

第２節　八龍地区の調査…… 57

１．はじめに…… 57

２．Ｉ－３・11の調査…… 59

(1)　大　溝…… 59

(2)　歴史時代の遺構と遺物…… 78

３．Ｉ－７…… 83

(1)　墓　地…… 83

(2)　住居跡…… 87

４．Ｉ−18の遺構と遺物…… 97

(1)　住居跡…… 97

(2) 竪　穴…… 120
(3) 墓　地…… 121
(4) 歴史時代の遺構と遺物…… 125
5．II—10…… 126
(1) 甕棺墓…… 126
(2) その他の遺物…… 160
6．小　結…… 161

第3節　中川屋敷地区の調査 …… 163
1．はじめに…… 163
2．I-12の住居跡…… 164
3．小　結…… 176

第4節　堺地区の調査 …… 177
1．はじめに…… 177
2．I－2・3 …… 178
(1) 石棺墓…… 178
(2) 住居跡…… 182
3．I－4 ……194
(1) 石棺墓…… 194
(2) 住居跡…… 196
(3) その他の遺構と遺物…… 202
4．I－6～8・13 …… 207
(1) I－6～8 …… 207
(2) I-13…… 213
5．II-27…… 215
6．II-30～32…… 216
(1) 土壙墓…… 216
(2) 木棺墓…… 221
(3) 甕棺墓…… 223

7．小　結…… 229

第5節　上覚・ヤリミゾ地区の調査 …… 232

1．はじめに…… 232

2．上覚Ⅰ－1・2・6 …… 232

(1)　Ⅰ－1トレンチ…… 232

(2)　Ⅰ－2トレンチ…… 235

(3)　Ⅰ－6トレンチ…… 236

(4)　Ⅰ－6ｂトレンチ…… 239

3．上覚Ⅰ－9・12のトレンチ…… 241

4．ヤリミゾのトレンチ…… 247

5．小　結…… 250

第6節　南小路地区の調査 …… 251

1．はじめに…… 251

2．Ⅰ－3 …… 252

3．Ⅰ－5 …… 254

4．Ⅲ－3・4 …… 257

5．小　結…… 265

第3章　科学的分析

第1節　三雲出土の青銅鏡のＩＣＰ分析……望月明彦…… 267

第2節　ガラスのＩＣＰ分析 ……望月明彦…… 271

第3節　三雲南小路1号甕棺出土の赤色顔料分析について
…… 森　　彬 …… 276

第4節　三雲遺跡出土の平織物について……布目順郎 …… 277

第5節　ガラス製品の材質について ……江本義理 …… 278

図 版 目 次

巻頭図版　1　(1)　南小路1号甕棺墓出土重圏彩画鏡（石丸洋撮影）
　　(2)　雷文鏡（石丸撮影）
　　(3)　ガラス勾玉（石丸撮影）
　　2　　南小路1号甕棺墓出土金銅四葉座飾金具（石丸撮影）
　　3　(1)　南小路1号甕棺墓出土ガラス璧（石丸撮影）
　　(2)　2号甕棺墓出土ガラス勾玉（石丸撮影）
　　4　(1)　南小路2号甕棺墓出土連弧文日光鏡（石丸撮影）
　　(2)　連弧文日光鏡（石丸撮影）
　　(3)　連弧文昭明鏡（石丸撮影）
　　(4)　ガラス垂飾（石丸撮影）
　　(5)　硬玉勾玉（石丸撮影）

本文対照頁

図　版　1　　瑞梅寺川・川原川と三雲遺跡（パシフィック航業株式会社撮影）
図　版　2　(1)　寺口Ⅰ－8トレンチ（柳田康雄撮影）…… 11
　　(2)　Ⅱ－17全景（柳田撮影）…… 12
図　版　3　(1)　寺口Ⅱ－17大溝（柳田撮影）…… 12
　　(2)　大溝（柳田撮影）…… 12
　　(3)　大溝（柳田撮影）…… 12
図　版　4　(1)　寺口Ⅱ—17　調査区南半（柳田撮影）…… 12
　　(2)　石棺墓群と祭祀遺構（柳田撮影）…… 21
図　版　5　(1)　寺口Ⅱ－17　1号甕棺墓（柳田撮影）…… 21
　　(2)　1号石棺墓（柳田撮影）…… 24
　　(3)　2号石棺墓（柳田撮影）…… 25
図　版　6　(1)　寺口Ⅱ－17　3号石棺墓（柳田撮影）…… 27
　　(2)　4号石棺墓（柳田撮影）…… 27
　　(3)　石棺墓と祭祀遺構（柳田撮影）…… 28
図　版　7　(1)　寺口Ⅱ－17　1号石棺墓祭祀（柳田撮影）…… 28
　　(2)　2号石棺墓祭祀（柳田撮影）…… 28
　　(3)　2号石棺墓祭祀（柳田撮影）…… 28
図　版　8　(1)　寺口Ⅱ－17　1号石棺墓祭祀の土器と鉇（柳田撮影）…… 28
　　(2)　2号石棺墓祭祀横穴式石蓋土壙（柳田撮影）…… 28

(3) 横穴式石蓋土壙（柳田撮影）…… 28
図 版 9 (1) 寺口II－17　5号石棺墓（柳田撮影）…… 28
(2) 5号石棺墓（柳田撮影）…… 28
(3) 2号土壙墓（柳田撮影）…… 52
図 版 10 (1) 寺口II－17 大溝と1・3・4・8号住居跡（柳田撮影）…… 34
(2) 1号住居跡（柳田撮影）…… 34
図 版 11 (1) 寺口II－17　2号住居跡（柳田撮影）…… 36
(2) 3号住居跡（柳田撮影）…… 36
(3) 3・4号住居跡（柳田撮影）…… 36
図 版 12 (1) 寺口II－17 大溝と5～7号住居跡（柳田撮影）…… 39
(2) 6号住居跡（柳田撮影）…… 40
(3) 7号住居跡（柳田撮影）…… 44
図 版 13 (1) 寺口II－17　5号石棺墓と1号土壙墓（柳田撮影）…… 51
(2) 1～4号土壙（柳田撮影）…… 53
図 版 14 (1) 寺口II－17　2号土壙（柳田撮影）…… 53
(2) 3号土壙（柳田撮影）…… 53
(3) 4号土壙（柳田撮影）…… 53
図 版 15 寺口II－17 大溝出土土器（平島美代子撮影）…… 13
図 版 16 (1) 寺口II－17　2号石棺墓出土後漢鏡（柳田撮影）…… 25
(2) II－17出土石器（小池史哲撮影）…… 47
(3) II－17出土玉類（柳田撮影）…… 27
図 版 17 (1) 寺口II－17　1号甕棺（平島撮影）…… 22
(2) 石棺墓出土鉄器（小池撮影）…… 24
(3) 寺口II－17出土鉄器（小池撮影）…… 36
図 版 18 寺口II－17　1号石棺墓祭祀出土土器（平島撮影）…… 29
図 版 19 寺口II－17　1・2号石棺墓祭祀出土土器（平島撮影）…… 29
図 版 20 (1) 寺口II－17出土瓦質・陶質土器（小池撮影）…… 21
(2) 6号住居跡出土陶質土器（石丸撮影）…… 40
(3) 6号住居跡出土瓦質紡錘車（小池撮影）…… 41
(4) II－17出土須恵器（小池撮影）…… 46
図 版 21 寺口II－17　1号・2号住居跡出土土器（平島撮影）…… 34
図 版 22 寺口II－17　3・4・6～8号住居跡，包含層出土土器（平島撮影）…… 37
図 版 23 (1) 八龍I－3大溝上層土器出土状態（柳田撮影）…… 59
(2) 大溝土層断面（柳田撮影）…… 59

図　版　24　　八龍Ⅰ－3大溝出土土器①（柳田撮影）…… 59
図　版　25　　八龍Ⅰ－3大溝出土土器②（平島撮影）…… 63
図　版　26　　八龍Ⅰ－3大溝出土土器③（平島撮影）…… 64
図　版　27　　八龍Ⅰ－3大溝出土土器④（平島撮影）…… 65
図　版　28　　八龍Ⅰ－3大溝出土土器⑤（平島撮影）…… 74
図　版　29　　八龍Ⅰ－3大溝出土土器⑥（平島撮影）…… 74
図　版　30　(1)　八龍Ⅰ－3　1号竪穴（柳田撮影）……78
　　(2)　Ⅰ－11　2号竪穴と大溝（柳田撮影）…… 82
図　版　31　(1)　八龍Ⅰ－11　4号竪穴（柳田撮影）…… 78
　　(2)　Ⅰ－3大溝出土砥石（小池撮影）…… 77
　　(3)　Ⅰ－3　1号竪穴出土土器（平島撮影）…… 78
図　版　32　(1)　八龍Ⅰ－7全景（柳田撮影）…… 83
　　(2)　墓地群（柳田撮影）…… 83
図　版　33　(1)　八龍Ⅰ－7甕棺墓（馬田弘稔撮影）…… 83
　　(2)　1号土壙墓（柳田撮影）…… 86
図　版　34　(1)　八龍Ⅰ－7石蓋土壙墓（柳田撮影）…… 85
　　(2)　1号土壙墓（柳田撮影）…… 86
　　(3)　2号土壙墓（柳田撮影）…… 86
図　版　35　(1)　八龍Ⅰ－7　1号住居跡（柳田撮影）…… 87
　　(2)　2号住居跡（柳田撮影）…… 89
　　(3)　2号住居跡内土器出土状態（柳田撮影）…… 89
図　版　36　(1)　八龍Ⅰ－7　3号住居跡（柳田撮影）…… 92
　　(2)　4号住居跡（柳田撮影）…… 94
　　(3)　4号住居跡内土器出土状態（柳田撮影）…… 94
図　版　37　　八龍Ⅰ－7甕棺（平島撮影）…… 85
図　版　38　　1～4号住居跡出土土器（平島撮影）…… 87
図　版　39　(1)　八龍Ⅰ－7出土石器・縄文土器（小池撮影）…… 95
　　(2)　Ⅰ－7出土鉄器（小池撮影）…… 89
　　(3)　Ⅰ－7出土玉類（小池撮影）…… 96
図　版　40　(1)　八龍Ⅰ－18全景（柳田撮影）…… 97
　　(2)　Ⅰ－18調査区南半（池辺元明撮影）…… 97
　　(3)　調査区南半（池辺撮影）…… 97
図　版　41　(1)　八龍Ⅰ－18　1号住居跡（池辺撮影）…… 98
　　(2)　1号住居跡内ピット（柳田撮影）…… 98
　　(3)　3号住居跡（池辺撮影）…… 108

図　版　42　(1)　八龍Ⅰ－18　2・5号住居跡付近（池辺撮影）…… 103
(2)　2号住居跡（柳田撮影）…… 103
(3)　4号住居跡（柳田撮影）…… 108
図　版　43　(1)　八龍Ⅰ－18　5号住居跡（池辺撮影）…… 111
(2)　6号住居跡（池辺撮影）…… 111
(3)　7号住居跡（池辺撮影）…… 112
図　版　44　(1)　八龍Ⅰ－18　8号住居跡（池辺撮影）…… 113
(2)　9号住居跡（池辺撮影）…… 113
(3)　6・9・10号住居跡（池辺撮影）…… 116
図　版　45　(1)　八龍Ⅰ－18　11号住居跡（池辺撮影）…… 116
(2)　1号竪穴（池辺撮影）…… 120
(3)　2号竪穴（池辺撮影）…… 120
図　版　46　(1)　八龍Ⅰ－18石棺墓（池辺撮影）…… 121
(2)　石棺墓（池辺撮影）…… 121
(3)　1号土壙墓（池辺撮影）…… 121
(4)　2号土壙墓（池辺撮影）…… 121
図　版　47　(1)　八龍Ⅰ－18　1・2号土壙（池辺撮影）…… 122
(2)　2号土壙（池辺撮影）…… 122
(3)　製鉄遺構（柳田撮影）…… 125
図　版　48　八龍Ⅰ－18　1号住居跡出土土器（平島撮影）…… 98
図　版　49　八龍Ⅰ－18　1・2号住居跡出土土器（平島撮影）…… 103
図　版　50　八龍Ⅰ－18　2号住居跡出土土器（平島撮影）…… 103
図　版　51　八龍Ⅰ－18　3・4号住居跡出土土器（平島撮影）…… 108
図　版　52　(1)　八龍Ⅰ－18　4号住居跡出土土器（平島撮影）…… 108
(2)　5号住居跡上層出土土器（平島撮影）…… 116
(3)　2号竪穴出土土器（平島撮影）…… 170
(4)　Ⅰ－18出土鉄器（小池撮影）…… 117
図　版　53　(1)　八龍Ⅰ－18出土石器（小池撮影）…… 117
(2)　Ⅰ－18出土玉類（小池撮影）…… 123
図　版　54　(1)　八龍Ⅱ－10甕棺墓群（柳田撮影）…… 126
(2)　Ⅱ－10甕棺墓群（柳田撮影）…… 126
図　版　55　(1)　八龍Ⅱ－10甕棺墓群（柳田撮影）…… 126
(2)　6・7・24号甕棺墓（柳田撮影）…… 134
図　版　56　(1)　八龍Ⅱ－10　1号甕棺墓（柳田撮影）…… 126

図　版　56　(2)　2号甕棺墓（柳田撮影）…… 129
(3)　4号甕棺墓（柳田撮影）…… 131
図　版　57　八龍Ⅱ－10　3号甕棺墓（柳田撮影）…… 129
図　版　58　(1)　八龍Ⅱ－10　5号甕棺墓（柳田撮影）…… 132
(2)　6号甕棺墓（池辺撮影）…… 134
(3)　7・21号甕棺墓（柳田撮影）…… 135
図　版　59　(1)　八龍Ⅱ－10　8号甕棺墓（柳田撮影）…… 135
(2)　9・10号甕棺墓（柳田撮影）…… 136
(3)　11号甕棺墓（柳田撮影）…… 137
図　版　60　(1)　八龍Ⅱ－10　12号甕棺墓（柳田撮影）…… 137
(2)　13号甕棺墓（柳田撮影）…… 139
(3)　14・15号甕棺墓（柳田撮影）…… 139
図　版　61　(1)　八龍Ⅱ－10　16号甕棺墓（柳田撮影）…… 142
(2)　16号甕棺墓（柳田撮影）…… 142
(3)　17号甕棺墓（柳田撮影）…… 144
図　版　62　(1)　八龍Ⅱ－10　18号甕棺墓（柳田撮影）…… 144
(2)　19号甕棺墓（柳田撮影）…… 145
(3)　21号甕棺墓（柳田撮影）…… 146
図　版　63　(1)　八龍Ⅱ－10　16・20号甕棺墓（柳田撮影）…… 146
(2)　22号甕棺墓（柳田撮影）…… 147
図　版　64　八龍Ⅱ－10　22号甕棺墓（柳田撮影）…… 147
図　版　65　(1)　八龍Ⅱ－10　22号甕棺墓（柳田撮影）…… 147
(2)　23号甕棺墓（柳田撮影）…… 147
(3)　25号甕棺墓（柳田撮影）…… 150
図　版　66　(1)　八龍Ⅱ－10　6・24号甕棺墓（柳田撮影）…… 148
(2)　6・7・24号甕棺墓（柳田撮影）…… 148
図　版　67　(1)　八龍Ⅱ－10　26号甕棺墓（柳田撮影）…… 151
(2)　27号甕棺墓（柳田撮影）…… 152
(3)　28号甕棺墓（柳田撮影）…… 153
図　版　68　八龍Ⅱ－10　2・3・5・6号甕棺（平島撮影）…… 134
図　版　69　八龍Ⅱ－10　7～9号甕棺（平島撮影）…… 135
図　版　70　八龍Ⅱ－10　11～14号甕棺（平島撮影）…… 136
図　版　71　八龍Ⅱ－10　15・17・18・21号甕棺（平島撮影）…… 141
図　版　72　八龍Ⅱ－10　16・19・20号甕棺（平島撮影）…… 142

図　版　73　　八龍II－10　22・24～26号甕棺（平島撮影）…… 147
図　版　74　(1)　中川屋敷Ⅰ－12北トレンチ全景（小池撮影）…… 163
　　(2)　北トレンチ全景（小池撮影）…… 163
　　(3)　2号住居跡と3号住居跡カマド（小池撮影）…… 165
図　版　75　(1)　中川屋敷Ⅰ－12　3号住居跡カマド（小池撮影）…… 167
　　(2)　4号住居跡（小池撮影）…… 168
図　版　76　　中川屋敷Ⅰ－12　2・3号住居跡出土土器・鉄器（小池撮影）…… 166
図　版　77　　中川屋敷Ⅰ－12　4号住居跡出土土器・石器（小池撮影）…… 169
図　版　78　(1)　中川屋敷Ⅰ－12南トレンチ（小池撮影）…… 173
　　(2)　6号住居跡遺物出土状況（小池撮影）…… 173
　　(3)　6号住居跡遺物出土状況（小池撮影）…… 173
　　(4)　6号住居跡遺物出土状況（小池撮影）…… 173
図　版　79　　中川屋敷Ⅰ－12　6号住居跡他出土土器（平島撮影）…… 174
図　版　80　(1)　堺Ⅰ－3発掘区全景（柳田撮影）…… 178
　　(2)　Ⅰ－2発掘区全景（柳田撮影）…… 178
図　版　81　(1)　堺Ⅰ－2　1号石棺墓（柳田撮影）…… 178
　　(2)　1号石棺墓（柳田撮影）…… 178
　　(3)　1号石棺墓供献土器出土状態（柳田撮影）…… 178
図　版　82　(1)　堺Ⅰ－2　1号石棺墓供献土器（柳田撮影）…… 178
　　(2)　2号石棺墓（宮崎貴夫撮影）…… 181
　　(3)　2号石棺墓（宮崎撮影）…… 181
図　版　83　(1)　Ⅰ－3　1号住居跡（丸山康晴撮影）…… 182
　　(2)　Ⅰ－2　3号住居跡（柳田撮影）…… 184
　　(3)　4・5号住居跡（柳田撮影）…… 188
図　版　84　　堺Ⅰ－2・3　1～3号住居跡出土土器（平島撮影）…… 182
図　版　85　　堺Ⅰ－2　3号住居跡出土土器（平島撮影）…… 184
図　版　86　　堺Ⅰ－2　4号住居跡・溝出土土器（平島撮影）…… 188
図　版　87　　堺Ⅰ－2溝出土土器（平島撮影）…… 191
図　版　88　　堺Ⅰ－2・3出土鉄器・縄文土器・玉（小池撮影）…… 181
図　版　89　(1)　堺Ⅰ－4発掘区全景（柳田撮影）…… 194
　　(2)　発掘区3層（柳田撮影）…… 194
　　(3)　3号石棺墓（柳田撮影）…… 194
図　版　90　(1)　堺Ⅰ－4　6号住居跡（柳田撮影）…… 196
　　(2)　6号住居跡（柳田撮影）…… 196
　　(3)　7号住居跡（柳田撮影）…… 200

図 版 91 (1) 堺Ⅰ－4楕円形ピット（柳田撮影）…… 203
(2) 円形竪穴（柳田撮影）…… 204
(3) 方形竪穴（柳田撮影）…… 202
図 版 92 堺Ⅰ－4 6号住居跡出土土器（石丸撮影）…… 196
図 版 93 (1) 堺Ⅰ－4 6・7号住居跡出土土器（石丸撮影）…… 196
(2) 堺Ⅰ－3・4出土土製品（小池撮影）…… 183
図 版 94 (1) 堺Ⅰ－6・7発掘区全景（副島邦弘撮影）…… 207
(2) Ⅰ－6・7発掘区全景（副島撮影）…… 207
図 版 95 (1) 堺Ⅰ－6 1・2号集石と1号石棺墓（副島撮影）…… 207
(2) 1号石棺墓（副島撮影）…… 207
(3) 2号石棺墓（池辺撮影）…… 207
図 版 96 (1) 堺Ⅰ－6 1号甕棺墓（副島撮影）…… 208
(2) 1号甕棺墓（副島撮影）…… 208
図 版 97 (1) 堺Ⅰ—6 1号甕棺（石丸撮影）…… 209
(2) 1号甕棺墓供献鉄器（小池撮影）…… 210
(3) 1号甕棺墓供献土器（平島撮影）…… 210
(4) Ⅰ－6出土土器（平島撮影）…… 211
(5) Ⅰ－6出土石器（小池撮影）…… 212
図 版 98 (1) 堺Ⅰ－13 2号甕棺墓（柳田撮影）…… 213
(2) 2号甕棺墓（柳田撮影）…… 215
(3) 2号甕棺下甕（石丸撮影）…… 216
図 版 99 (1) 堺Ⅱ－30～32発掘区南半（柳田撮影）…… 216
(2) 1号土壙墓（柳田撮影）…… 218
(3) 3号土壙墓（柳田撮影）…… 218
(4) 4号土壙墓（柳田撮影）…… 218
図 版 100 (1) 堺Ⅱ－30～32 5号土壙墓（柳田撮影）…… 218
(2) 9号土壙墓（柳田撮影）…… 218
(3) 10号土壙墓（柳田撮影）…… 218
(4) 石剣出土状態（柳田撮影）…… 220
(5) 磨製石剣切先（小池撮影）…… 220
図 版 101 (1) 堺Ⅱ－30～32 1・2号木棺墓（柳田撮影）…… 221
(2) 1号木棺墓（柳田撮影）…… 221
(3) 1号木棺墓横断土層図（柳田撮影）…… 221
図 版 102 (1) 堺Ⅱ－30～32 2号木棺墓（柳田撮影）…… 221

(2) 2号木棺墓土器出土状態（柳田撮影）…… 221
(3) 2号木棺墓出土土器（石丸撮影）…… 222
図 版 103 (1) 堺II－30～32 1号甕棺墓（柳田撮影）…… 223
(2) 2号甕棺墓（柳田撮影）…… 223
(3) 3号甕棺墓（柳田撮影）…… 225
(4) 4号甕棺墓（柳田撮影）…… 225
図 版 104 (1) 堺II－30～32 5号甕棺墓（柳田撮影）…… 227
(2) 6号甕棺墓（柳田撮影）…… 227
(3) II－27甕棺墓（柳田撮影）…… 225
図 版 105 堺II－30・32 1・2・5・6号甕棺（石丸撮影）…… 223
図 版 106 (1) 上覚I－1トレンチ（橋口達也撮影）…… 232
(2) I－2トレンチ（橋口撮影）…… 235
(3) I－6トレンチ（橋口撮影）…… 236
図 版 107 (1) 上覚I－1 P1（橋口撮影）…… 232
(2) I－6甕棺墓（橋口撮影）…… 237
(3) I－6石棺墓（橋口撮影）…… 238
図 版 108 (1) 上覚I－6トレンチの墓地（橋口撮影）…… 237
(2) I－6bトレンチ（副島撮影）…… 239
(3) I－6bトレンチ石棺墓（副島撮影）…… 239
図 版 109 (1) 上覚I－6甕棺（平島撮影）…… 237
(2) I－6甕棺内出土玉類（小池撮影）…… 238
(3) I－1・2・6出土石器（小池撮影）…… 234
(4) I－6b出土土器（小池撮影）…… 240
図 版 110 (1) 上覚I－9 2号住居跡出土土器・鉄器（平島・小池撮影）…… 241
(2) I－9・12出土縄文土器（小池撮影）…… 246
図 版 111 (1) ヤリミゾI－2 W377トレンチ（小池撮影）…… 247
(2) I－2 W383トレンチ（小池撮影）…… 247
(3) I－2・3，II－6出土土器（小池撮影）…… 250
図 版 112 (1) 井原ヤリミゾ南端調査区全景（小池撮影）…… 249
(2) 南トレンチ（小池撮影）…… 249
(3) 中トレンチ（小池撮影）…… 249
(4) 北トレンチ（小池撮影）…… 249
図 版 113 (1) 南小路I－3調査区全景（小池撮影）…… 252
(2) 調査区東部（小池撮影）…… 252

図　版 113 (3)　Ⅰ－3出土古銭（石丸撮影）…… 253
図　版 114 (1)　南小路Ⅰ－5調査区全景（柳田撮影）…… 254
(2)　1・2・4号竪穴（柳田撮影）…… 254
図　版 115 (1)　南小路Ⅰ－5　2号竪穴（柳田撮影）…… 254
(2)　3号竪穴（柳田撮影）…… 256
(3)　Ⅰ－5出土古銭（小池撮影）…… 257
図　版 116 (1)　南小路Ⅲ－3aトレンチ（橋口撮影）…… 257
(2)　Ⅲ－3cトレンチ（橋口撮影）…… 261
(3)　Ⅲ－4aトレンチ（橋口撮影）…… 264
図　版 117 (1)　南小路Ⅲ－3a　3号住居跡出土土器（平島撮影）…… 259
(2)　4号住居跡出土土器（平島撮影）…… 259
(3)　Ⅲ－3出土鉄器（小池撮影）…… 259
図　版 118 (1)　南小路Ⅲ－3c　1号住居跡出土土器（平島撮影）…… 261
(2)　Ⅲ－3～5出土石器（小池撮影）…… 259

挿　図　目　次

第 1 図　三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡
（国土地理院発行・柳田康雄作成）…… 2
第 2 図　三雲遺跡地籍及び地区割図
（前原町土地改良区発行・豊福弥生製図）……折込み
第 3 図　国場整備実施前と実施後の水田区画と標高
（前原町土地改良区発行・豊福製図）……折込み
第 4 図　八龍Ⅱ-10発掘調査風景（柳田撮影）…… 6
第 5 図　重機による表土剝ぎ作業（小池史哲撮影）…… 7
第 6 図　南小路Ⅰ-9発掘調査風景（小池撮影）…… 8
第 7 図　中川屋敷Ⅰ-12発掘調査風景（柳田撮影）…… 8
第 8 図　土器復原作業風景（石丸洋撮影）…… 8
第 9 図　糸島の弥生時代主要遺跡分布図（柳田作成，豊福製図）…… 10
第 10 図　寺口Ⅰ-8トレンチ実測図　（木下修実測，豊福製図）…… 11
第 11 図　寺口Ⅱ-17遺構配置図
（宮小路賀宏・柳田・馬田弘稔実測，豊福製図）……折込み
第 12 図　大溝断面土層図（清水聖子実測，豊福製図）…… 13

第 13 図　大溝中・下層出土土器実測図（荒武麗子実測，柳田製図）…… 13
第 14 図　大溝上層出土土器実測図①（荒武実測，柳田製図）…… 15
第 15 図　大溝土層出土土器実測図②（荒武実測，平田春美製図）…… 16
第 16 図　大溝上層出土土器実測図③（荒武実測，製図）…… 17
第 17 図　大溝最上層出土土器実測図①（荒武実測，製図）…… 18
第 18 図　大溝最上層出土土器実測図②（荒武実測，平田製図）…… 19
第 19 図　大溝最上層出土土器実測図③（荒武実測，製図）…… 20
第 20 図　1・2号甕棺墓実測図（宮小路・諫山佳明・川村博実測，豊福製図）…… 21
第 21 図　1・2号甕棺実測図（荒武実測，平田製図）…… 22
第 22 図　石棺墓配置図（柳田実測，豊福製図）……折込み
第 23 図　1号石棺墓実測図（柳田実測，豊福製図）…… 23
第 24 図　2号石棺墓実測図（柳田実測，豊福製図）…… 24
第 25 図　石棺墓出土鉄器実測図（柳田実測，製図）…… 25
第 26 図　2号石棺墓出土連弧文「長宜子孫」銘鏡復原実測図（柳田実測，製図）…… 26
第 27 図　3号石棺墓実測図（柳田実測，豊福製図）…… 27
第 28 図　4号石棺墓実測図（樗木弘明実測，豊福製図）…… 27
第 29 図　5号石棺墓実測図（桜井康治・小池実測，豊福製図）……折込み
第 30 図　祭祀遺構実測図（児玉真一・馬田実測，豊福製図）……折込み
第 31 図　1号石棺墓祭祀遺構出土土器実測図①（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 30
第 32 図　1号石棺墓祭祀遺構出土土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 31
第 33 図　1・2号石棺墓祭祀遺構出土土器実測図（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 32
第 34 図　2号石棺墓祭祀遺構出土土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 33
第 35 図　1・2号住居跡実測図（柳田実測，豊福製図）…… 35
第 36 図　1号住居跡出土土器実測図①（荒武実測，製図）……折込み
第 37 図　1・2号住居跡出土土器実測図（荒武実測，製図）…… 37
第 38 図　3・4号住居跡実測図（柳田実測，豊福製図）…… 38
第 39 図　5号住居跡実測図（柳田実測，豊福製図）…… 38
第 40 図　3・4号住居跡出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 39
第 41 図　6号住居跡実測図（柳田実測，豊福製図）…… 40
第 42 図　6号住居跡出土瓦質紡錘車実測図（柳田実測，製図）…… 41
第 43 図　6～8号住居跡・包含層出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 42
第 44 図　II-17出土瓦質土器・陶質土器実測図（柳田・平田実測，柳田製図）…… 43
第 45 図　7号住居跡実測図（柳田実測，豊福製図）…… 44
第 46 図　住居跡他出土鉄器実測図（柳田実測，製図）…… 45
第 47 図　包含層出土土器実測図②（荒武実測，豊福製図）…… 46
第 48 図　II-17出土須恵器実測図（平田実測，豊福製図）…… 46

第 49 図　II-17出土玉類実測図（柳田実測，製図）…… 47
第 50 図　II-17出土石器実測図①（小池実測，製図）…… 49
第 51 図　II-17出土石器実測図②（小池実測，製図）…… 50
第 52 図　1号土壙墓実測図（桜井実測，豊福製図）…… 51
第 53 図　2号土壙墓実測図（川村実測，豊福製図）…… 51
第 54 図　1・2号土壙実測図（柳田実測，豊福製図）…… 52
第 55 図　3・4号土壙実測図（柳田実測，豊福製図）…… 53
第 56 図　II-17出土歴史時代の土器・陶磁器実測図（森田勉・平田実測，豊福製図）…… 54
第 57 図　八龍Ⅰ-3・11遺構配置図（諫山・清水実測，豊福製図）…… 58
第 58 図　大溝上層出土土器実測図①（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 60
第 59 図　大溝上層出土土器実測図②（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 61
第 60 図　大溝上層出土土器実測図③（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 62
第 61 図　大溝上層出土土器実測図④（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 63
第 62 図　大溝上層出土土器実測図⑤（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 64
第 63 図　大溝上層出土土器実測図⑥（柳田・荒武実測，豊福製図）……折込み
第 64 図　大溝上層出土土器実測図⑦（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 65
第 65 図　大溝上層出土土器実測図⑧（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 66
第 66 図　大溝上層出土土器実測図⑨（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 67
第 67 図　大溝上層出土土器実測図⑩（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 68
第 68 図　大溝上層出土土器実測図⑪（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 69
第 69 図　大溝上層出土土器実測図⑫（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 70
第 70 図　大溝上層出土土器実測図⑬（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 71
第 71 図　大溝上層出土土器実測図⑭（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 72
第 72 図　大溝上層出土土器実測図⑮（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 73
第 73 図　大溝上層出土土器実測図⑯（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 74
第 74 図　大溝上層出土土器実測図⑰（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 75
第 75 図　大溝上層出土土器実測図⑱（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 76
第 76 図　大溝上層出土瓦質土器実測図（柳田・平田実測，豊福製図）…… 77
第 77 図　大溝上層出土石器実測図（小池実測，製図）…… 77
第 78 図　1号竪穴出土土師器実測図（森田・平田実測，平田製図）…… 79
第 79 図　1号竪穴出土瓦器・陶磁器実測図（森田・平田実測，平田製図）…… 80
第 80 図　Ⅰ-3第3層出土土師器・陶磁器実測図（森田・平田，豊福製図）…… 81
第 81 図　2号竪穴断面土層図（清水実測，豊福製図）…… 82
第 82 図　2号竪穴・Ⅰ-11第3層出土土師器・陶磁器実測図
（森田・平田実測，豊福製図）…… 82
第 83 図　八龍Ⅰ-7遺構配置図（柳田・丸山康晴・川村実測，豊福製図）……折込み

第 84 図　甕棺墓実測図（立石雅文・小林美孝実測，豊福製図）…… 83
第 85 図　甕棺実測図（荒武実測，馬田製図）…… 84
第 86 図　石蓋土壙墓実測図（川村実測，豊福製図）…… 85
第 87 図　1 号土壙墓実測図（川村実測，豊福製図）…… 86
第 88 図　2 号土壙墓実測図（川村実測，豊福製図）…… 86
第 89 図　2 号土壙墓出土瓦器実測図（平田実測，豊福製図）…… 86
第 90 図　1 号住居跡実測図（柳田・立石実測，豊福製図）…… 87
第 91 図　1 号住居跡出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 88
第 92 図　2 ～ 4 号住居跡実測図（柳田・立石・小林実測，豊福製図）…… 折込み
第 93 図　2 号住居跡出土土器実測図①（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 90
第 94 図　2 号住居跡出土土器実測図②（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 91
第 95 図　3 号住居跡出土土器実測図（荒武実測，平田製図）…… 92
第 96 図　3 ・ 4 号住居跡出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 93
第 97 図　南西地区出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 94
第 98 図　Ⅰ－7・18出土縄文土器拓影（小池実測，製図）…… 95
第 99 図　Ⅰ－7 出土石器実測図（小池実測，製図）…… 95
第 100図　Ⅰ－7 出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 96
第 101図　Ⅰ－7 出土玉類実測図（小池実測，製図）…… 96
第 102図　八龍Ⅰ－18遺構配置図（柳田・新原正典・池辺元明実測，豊福製図）…… 折込み
第 103 図　Ⅰ－18土層実測図（池辺・岡部正巳実測，豊福製図）…… 97
第 104 図　1 ・ 3 号住居跡実測図（池辺・内田恵三実測，豊福製図）…… 98
第 105 図　1 号住居跡出土須恵器実測図（平田実測，豊福製図）…… 99
第 106 図　1 号住居跡出土土器実測図①（柳田・荒武実測，柳田製図…… 100
第 107 図　1 号住居跡出土土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 101
第 108 図　1 ・ 2 号住居跡出土土器実測図（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 102
第 109 図　2 号住居跡実測図（池辺・内田実測，豊福製図）…… 103
第 110 図　2 号住居跡出土土器実測図①（荒武実測，池辺製図）…… 104
第 111 図　2 号住居跡出土土器実測図②（荒武実測，池辺製図）…… 105
第 112 図　2 号住居跡出土土器実測図③（荒武実測，池辺製図）…… 106
第 113 図　2 号住居跡出土土器実測図④（荒武実測，池辺製図）…… 107
第 114 図　3 ・ 4 号住居跡出土土器実測図（荒武実測，池辺製図）…… 109
第 115 図　4 ・ 5 号住居跡実測図（池辺・岡部実測，豊福製図）…… 110
第 116 図　4 号住居跡出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 折込み
第 117 図　6 号住居跡実測図（柳田・岡部実測，豊福製図）…… 111
第 118 図　6 ・ 8 号住居跡出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 112
第 119 図　6 ・ 7 号住居跡出土土器実測図（荒武実測，池辺製図）…… 113

第120図　9号住居跡出土土器実測図（荒武実測，池辺製図）…… 114
第121図　7～10号住居跡実測図（柳田・池辺実測，豊福製図）…… 115
第122図　11号住居跡実測図（柳田・池辺実測，豊福製図）…… 116
第123図　住居跡外出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 117
第124図　Ⅰ-18出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 117
第125図　Ⅰ-18出土石器実測図（小池実測，製図）…… 118
第126図　臼玉実測図（小池実測，池辺製図）…… 120
第127図　2号竪穴実測図（柳田・池辺実測，豊福製図）…… 120
第128図　2号竪穴出土土器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 120
第129図　石棺墓実測図（岡部実測，豊福製図）…… 折込み
第130図　1・2号土壙墓実測図（岡部実測，豊福製図）…… 折込み
第131図　1・2号土壙実測図（小池・池辺実測，豊福製図）…… 122
第132図　玉類出土位置図（池辺実測，豊福製図）…… 123
第133図　土壙出土玉類実測図（池辺実測，製図）…… 124
第134図　掘立柱遺構実測図（片岡宏二・氏松昌平実測，豊福製図）…… 125
第135図　製鉄遺構実測図（内田実測，豊福製図）…… 125
第136図　土師器・鞴羽口実測図（平田実測，豊福製図）…… 126
第137図　八龍Ⅱ-10遺構配置図（児玉・新原・馬田・小池・池辺実測，豊福製図）…… 折込み
第138図　1～3号甕棺墓実測図（馬田・池辺・岡部実測，豊福製図）…… 127
第139図　1・2・4・10号甕棺実測図（児玉・平田・荒武実測，児玉製図）…… 128
第140図　3・22号甕棺実測図（馬田・小池実測，馬田製図）…… 130
第141図　4・5号甕棺墓実測図（児玉・池辺・岡部，豊福製図）…… 132
第142図　5～7号甕棺実測図（小池・池辺・片岡実測，小池・片岡製図）…… 折込み
第143図　6号甕棺墓実測図（児玉・小池実測，豊福製図）…… 133
第144図　7～10号甕棺墓実測図
（児玉・小池・池辺・岡部・片岡実測，豊福製図）…… 折込み
第145図　8・9・14号甕棺実測図（新原・小池・池辺実測，製図）…… 折込み
第146図　11～13・17号甕棺墓実測図（児玉・新原・岡部・片岡実測，豊福製図）…… 137
第147図　12・13号甕棺実測図（児玉・新原実測，児玉製図）…… 138
第148図　14・15号甕棺墓実測図（新原実測，豊福製図）…… 140
第149図　15号甕棺実測図（新原実測，馬田製図）…… 141
第150図　16号甕棺墓実測図（児玉・馬田・小池実測，豊福製図）…… 142
第151図　17・21号甕棺実測図（馬田実測，豊福製図）…… 144
第152図　16・18・19号甕棺実測図（児玉・荒武実測，児玉・馬田製図）…… 折込み
第153図　18・21号甕棺墓実測図（池辺・岡部実測，豊福製図）…… 145
第154図　19・20号甕棺墓実測図（児玉・小池実測，豊福製図）…… 折込み

第155図　20・23・24号甕棺実測図（児玉・小池・片岡実測，製図）…… 折込み
第156図　22号甕棺墓実測図（柳田・岡部実測，豊福製図）…… 折込み
第157図　23号甕棺墓実測図（片岡実測，豊福製図）…… 148
第158図　24号甕棺墓実測図（小池・池辺実測，豊福製図）…… 149
第159図　25号甕棺墓実測図（岡部実測，豊福製図）…… 150
第160図　25・27・28号甕棺実測図（馬田・片岡実測，製図）…… 折込み
第161図　26・27号甕棺墓実測図（児玉・馬田・片岡実測，豊福製図）…… 152
第162図　26号甕棺実測図（片岡実測，製図）…… 153
第163図　28号甕棺墓実測図（片岡実測，製図）…… 153
第164図　甕棺墓模式配置図（馬田作成，豊福製図）…… 159
第165図　II-10出土石器実測図（小池実測，製図）…… 160
第166図　II-10出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 161
第167図　中川屋敷Ⅰ-12遺構配置図（小池実測，豊福製図）…… 折込み
第168図　1号住居跡出土土器実測図（小池・荒武実測，小池製図）…… 164
第169図　2号住居跡出土土器実測図①（荒武実測，小池製図）…… 164
第170図　2号住居跡出土土器実測図②（荒武実測，小池製図）…… 165
第171図　2号住居跡出土土器実測図③（荒武実測，小池製図）…… 166
第172図　3号住居跡カマド実測図（小池実測，豊福製図）…… 167
第173図　3号住居跡出土土器・鉄器実測図（小池・荒武実測，小池製図）…… 169
第174図　4号住居跡出土土器実測図①（荒武実測，小池製図）…… 170
第175図　4号住居跡出土土器実測図②（荒武実測，小池製図）…… 171
第176図　4号住居跡出土土器・石器実測図（小池・荒武実測，小池製図）…… 172
第177図　6号住居跡出土土器実測図（荒武実測，小池製図）…… 折込み
第178図　7号住居跡他出土土器実測図（荒武実測，小池製図）…… 175
第179図　堺Ⅰ-2～4遺構配置図
（柳田・宮崎貴夫・立石・丸山・川村実測，豊福製図）…… 折込み
第180図　Ⅰ-2・4土層実測図（丸山・立石実測，豊福製図）…… 179
第181図　1号石棺墓実測図（宮崎・丸山実測，豊福製図）…… 180
第182図　1号石棺墓供献土器実測図（荒武実測，平田製図）…… 181
第183図　2号石棺墓実測図（宮崎・丸山実測，豊福製図）…… 182
第184図　1号住居跡実測図（宮崎・丸山実測，豊福製図）…… 183
第185図　2号住居跡実測図（丸山・立石実測，豊福製図）…… 183
第186図　3号住居跡実測図（丸山・立石実測，豊福製図）…… 184
第187図　1～3号住居跡出土土器実測図（柳田・荒武実測，平田製図）…… 185
第188図　3号住居跡出土土器実測図①（柳田・荒武実測，平田製図）…… 186
第189図　3号住居跡出土土器実測図②（柳田・荒武実測，豊福製図）…… 折込み

第190図　Ⅰ-2・3出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 188
第191図　4・5号住居跡実測図（宮崎・立石実測，豊福製図）…… 188
第192図　4号住居跡出土土器実測図（荒武実測，平田実測）…… 189
第193図　4・5号住居跡出土土器実測図（荒武実測，平田製図）…… 190
第194図　Ⅰ-2出土玉類実測図（小池実測，製図）…… 191
第195図　溝状遺構出土土器実測図①（荒武実測，平田製図）…… 192
第196図　溝状遺構出土土器実測図②（荒武実測，平田製図）…… 193
第197図　3号石棺墓実測図（馬田・川村実測，豊福製図）…… 194
第198図　Ⅰ-4出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 195
第199図　6号住居跡実測図（丸山・川村実測，豊福製図）…… 196
第200図　6号住居跡出土土器実測図①（柳田・荒武実測，平田製図）…… 197
第201図　6号住居跡出土土器実測図②（柳田・荒武実測，平田製図）…… 198
第202図　6号住居跡出土陶質土器実測図（柳田・平田実測，柳田製図）…… 199
第203図　Ⅰ－3・4出土土製品実測図（柳田実測，製図）…… 199
第204図　7号住居跡実測図（丸山・川村実測，豊福製図）…… 200
第205図　6・7号住居跡出土土器実測図（柳田・平田・荒武実測，平田製図）…… 201
第206図　Ⅰ－4歴史時代の遺構配置図（川村実測，豊福製図）…… 203
第207図　Ⅰ－4出土土師器実測図（荒武実測，豊福製図）…… 205
第208図　Ⅰ－4出土陶磁器実測図（森田・平田実測，川村製図）…… 206
第209図　Ⅰ－2～4出土の縄文土器拓影（小池実測，製図）…… 206
第210図　堺Ⅰ－6～8・13遺構配置図（副島・岡部実測，豊福製図）…… 折込み
第211図　1号石棺墓と1・2号集石遺構実測図（副島・岡部実測，豊福製図）…… 折込み
第212図　1号石棺墓副葬鉄器実測図（副島実測，製図）…… 207
第213図　2号石棺墓実測図（池辺実測，豊福製図）…… 208
第214図　1号甕棺墓とP13実測図（副島実測，豊福製図）…… 209
第215図　1号甕棺実測図（副島実測，製図）…… 210
第216図　1号甕棺墓供献鉄器と土器実測図（副島・荒武実測，副島製図）…… 211
第217図　Pit出土土器実測図（平田実測，副島製図）…… 212
第218図　Pit12出土土器実測図（副島・平田実測，副島製図）…… 212
第219図　Ⅰ－6～13出土石器・石製品実測図（副島・小池実測，副島製図）…… 213
第220図　2号甕棺墓実測図（橋口達也実測，豊福製図）…… 214
第221図　2号甕棺実測図（橋口実測，平田製図）…… 214
第222図　Ⅱ－27甕棺墓実測図（柳田実測，豊福製図）…… 215
第223図　Ⅱ－27甕棺実測図（柳田実測，製図）…… 216
第224図　堺Ⅱ－30～32遺構配置図（副島・池辺実測，豊福製図）…… 折込み
第225図　1～4号土壙墓実測図（副島・諫山実測，豊福製図）…… 217

第226図　5～8号土壙墓実測図（池辺・諫山実測図，豊福製図）…… 219
第227図　9～11号土壙墓実測図（副島・池辺実測，豊副製図）…… 220
第228図　10号土壙墓出土石剣実測図（小池実測，池辺製図）…… 220
第229図　1・2号木棺墓（池辺・岡部実測，豊福製図）…… 折込み
第230図　2号木棺墓出土土器実測図（荒武実測，池辺製図）…… 222
第231図　1・3～6号甕棺墓実測図（池辺・岡部実測，豊福製図）…… 224
第232図　2号甕棺墓実測図（副島実測，豊福製図）…… 225
第233図　1～3号甕棺実測図（副島実測，製図）…… 226
第234図　4～6号甕棺実測図（副島実測，製図）…… 228
第235図　II－32出土石器実測図（小池実測，製図）…… 229
第236図　華明洞7号墳出土把手付短頸壺（「平安博物館研究紀要」7 定森秀夫原図）…… 230
第237図　上覚Ⅰ－1・2トレンチ実測図（平嶋勇夫実測，豊福製図）…… 233
第238図　Ⅰ－2出土歴史時代土器実測図（平田実測，橋口製図）…… 234
第239図　Ⅰ－1・2出土石器実測図（小池実測，製図）…… 234
第240図　Ⅰ－2出土土器実測図（荒武実測，小池製図）…… 235
第241図　上覚Ⅰ－6トレンチ実測図（平島実測，豊福製図）…… 235
第242図　甕棺墓実測図（橋口実測，豊福製図）…… 236
第243図　甕棺実測図（荒武実測，橋口製図）…… 237
第244図　玉類実測図（小池実測，製図）…… 238
第245図　石棺墓実測図（橋口実測，豊福製図）…… 238
第246図　Ⅰ－6出土石器実測図（小池実測，製図）…… 239
第247図　Ⅰ－6b トレンチ実測図（副島実測，豊福製図）…… 239
第248図　Ⅰ－6b石棺墓実測図（副島実測，豊福製図）…… 239
第249図　Ⅰ－6b出土土器実測図（平田実測，豊福製図）…… 240
第250図　上覚Ⅰ－9トレンチ実測図（丸山実測，豊福製図）…… 242
第251図　2号住居跡出土土器実測図①（平田実測，小池製図）…… 243
第252図　2号住居跡出土土器実測図②（小池・平田実測，小池製図）…… 244
第253図　2号住居跡出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 245
第254図　上覚Ⅰ－12トレンチ実測図（丸山実測，豊福製図）…… 245
第255図　Ⅰ－9・12出土縄文土器拓影（小池実測，製図）…… 246
第256図　上覚II－1トレンチ実測図（柳田実測，豊福製図）…… 246
第257図　ヤリミゾⅠ－2・3トレンチ断面土層図（小池実測，豊福製図）…… 247
第258図　II－6，1・2トレンチ実測図（宮崎・丸山実測，豊福製図）…… 248
第259図　Ⅰ－2・3，II－6出土土器実測図（小池実測，製図）…… 250
第260図　南小路Ⅰ－3遺構配置図（小池実測，豊福製図）…… 252
第261図　Ⅰ－3出土遺物実測図（小池実測，製図）…… 253

第 262 図　Ⅰ－5遺構配置・土層実測図（柳田・川村実測，豊福製図）…… 255
第 263 図　Ⅰ－5出土陶磁器実測図（森田実測，川村製図）…… 256
第 264 図　Ⅰ－5出土古銭拓影（小池手拓）…… 257
第 265 図　南小路Ⅲ－3a•cトレンチ実測図（橋口・平島実測，豊福製図）…… 258
第 266 図　Ⅲ－3a　1号住居跡出土土器実測図（荒武実測，橋口製図）…… 259
第 267 図　Ⅲ－3a　3号住居跡出土土器実測図（荒武実測，橋口製図）…… 260
第 268 図　Ⅲ－3a　4号住居跡出土土器実測図（荒武実測，橋口製図）…… 261
第 269 図　Ⅲ－3c　1号住居跡出土土器実測図（荒武実測，橋口製図）…… 262
第 270 図　Ⅲ－3a•c出土石器実測図（小池実測，製図）…… 263
第 271 図　Ⅲ－3a•4a•5出土石器実測図（小池実測，製図）…… 263
第 272 図　Ⅲ－3a•c出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 263
第 273 図　Ⅲ－4aトレンチ実測図（橋口実測，豊福製図）…… 264
第 274 図　貯蔵穴土層断面実測図（平島実測，豊福製図）…… 265
第 275 図　三雲遺跡南小路1号甕棺出土の内行花文清白鏡鏡背縁に付着の平織物
（布目順郎撮影）…… 277

表　目　次

表　1　寺口Ⅱ-17 出土ガラス小玉計測表（柳田康雄作成）…… 48
表　2　寺口Ⅱ-17 4号土壙出土小皿法量表（森田勉作成）…… 55
表　3　八龍Ⅰ-3•11 1号竪穴出土小皿・杯法量表（森田作成）…… 78
表　4　八龍Ⅰ-3•11 1号竪穴出土瓦器椀法量表（森田作成）…… 81
表　5　八龍Ⅰ-3•11 2号竪穴出土小皿・瓦器椀法量表（森田作成）…… 83
表　6　八龍Ⅰ-7 出土玉類計測表（小池史哲作成）…… 96
表　7　八龍Ⅰ-18 出土ガラス小玉計測表（池辺元明作成）…… 124
表　8　八龍Ⅰ-18 出土管玉計測表（池辺作成）…… 124
表　9　八龍Ⅰ-18 出土水晶玉計測表（池辺作成）…… 124
表　10　八龍Ⅱ-10 甕棺墓一覧表（馬田弘稔作成）…… 144
表　11　堺Ⅰ-4 出土小皿・杯法量表（川村博作成）…… 204

第１章　調査組織と調査の経過

１．調査組織

昭和54年度の発掘調査構成

福岡県教育委員会

総　括	教育長	浦山太郎
	教育次長	友野　隆
	管理部長	岩下光弘
	文化課長	藤井　功
	同課長補佐	武久耕作
	同技術補佐	松岡　史
	調査第１係長	宮小路賀宏
庶　務	庶務係長	大渕幸夫
	主任主事	入江智徳
発掘調査	主任技師	柳田康雄
	技師	池辺元明

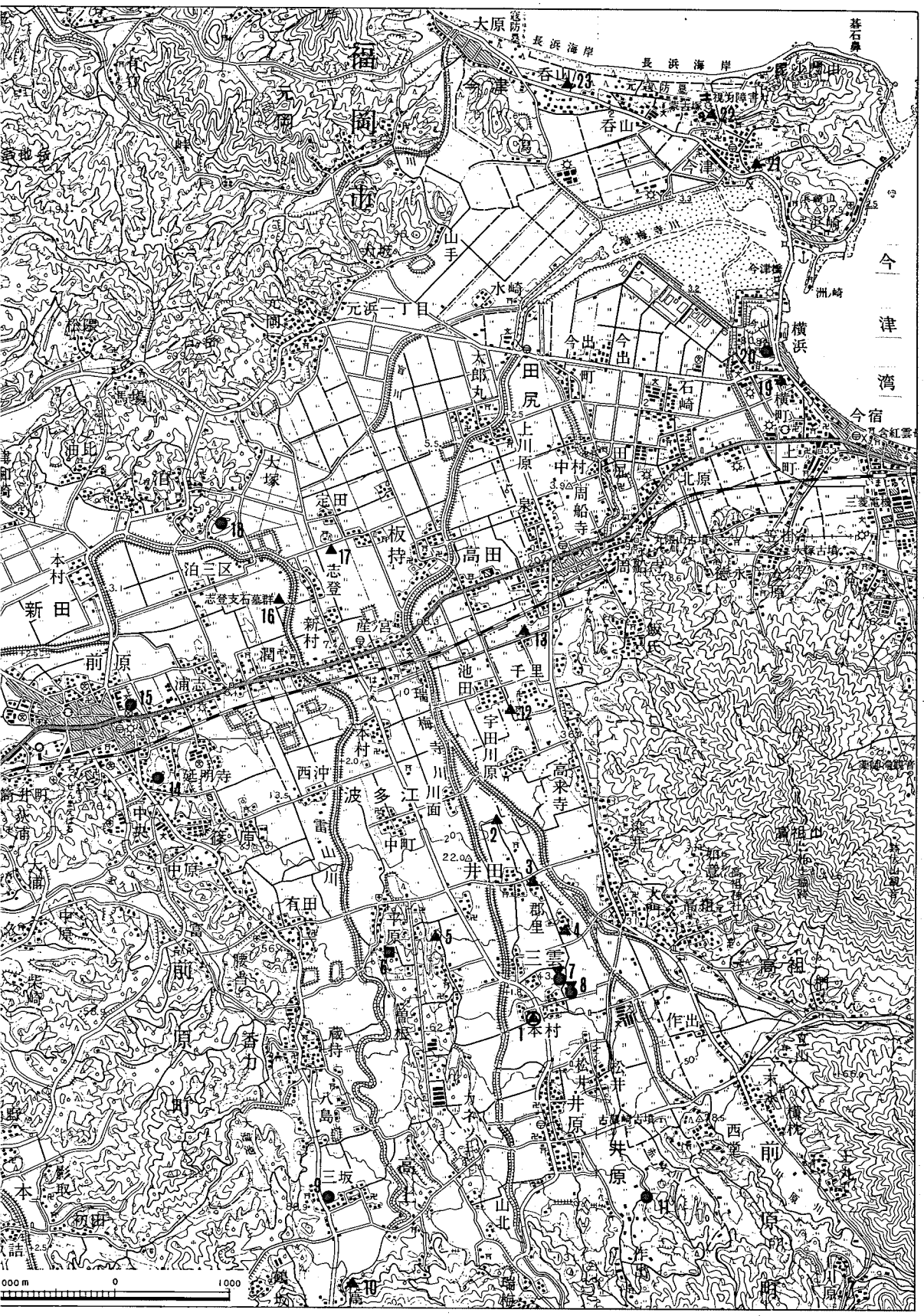
調査補助員として，片岡宏二・氏松昌平が参加した。

なお，調査においては下記に示す方々の協力があった。

中村敬治郎・井上克己・吉住誠(前原町土地改良区)，豊島禮蔵・西孝明・川村博(町教育委員会)，三島正己(三雲区長)。

昭和54年度の報告書作成

執筆担当	文化課	主任技師	柳田康雄
		同	橋口達也
		技師	児玉真一
		同	馬田弘稔
		同	小池史哲
	九州歴史資料館	技師	森田　勉
遺物整理・復原			岩瀬正信（土器復原指導）



第 1 図　三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡（1/50,000）

1 三雲南小路遺跡　2 井田用会支石墓　3 井田御子守支石墓　4 三雲加賀石支石墓　5 曽根石ヶ崎支石墓　6 平原遺跡
7 端山古墳　8 築山古墳　9 三坂七尾遺跡　10 高野遺跡　11 井原赤崎遺跡　12 千里支石墓
13 千里シビナ遺跡　14 篠原新建遺跡　15 向原遺跡　16 志登坂本支石墓群　17 志登神社支石墓　18 泊城崎遺跡
19 今宿横浜遺跡　20 今宿今山遺跡　21 今津貝塚　22 野々花学園遺跡　23 長浜貝塚

九州歴史資料館　主任技師　横田義章（鉄器保存処理）
遺物実測補助　荒武麗子・平田春美・田崎博之
遺構図製図補助　豊福弥生・印丸久美子
遺物写真撮影　九州歴史資料館　主任技師　石丸洋
補助　平島美代子

昭和55年度の発掘調査構成

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野隆
	教育次長	守屋尚
	管理部長	森英俊
	文化課長	藤井功
	同課長補佐	蓮尾謙吉
	調査第1係長	宮小路賀宏
庶務	参事補佐兼係長	大渕幸夫
	主任主事	三瓶寧夫
発掘調査	主任技師	柳田康雄
	技師	小池史哲

なお，馬田弘稔・川村博・赤川正秀・樗木弘明各氏の手伝いもあった。

調査においては，下記に示す方々の協力があった。

中村敬次郎・井上克己・吉住誠（前原町土地改良区），豊島禮蔵・野坂猷英・西孝明・川村博（町教育委員会），平山武美・牧野虎雄・窪隆志・相部金之助（三雲地区土地所有者）。

昭和55年度の報告書作成

執筆担当	文化課	主任技師	柳田康雄
		同	木下修
		同	児玉真一
		同	新原正典
		同	馬田弘稔
		同	中間研志
		技師	小池史哲
		同	池辺元明

九州歴史資料館　主任技師　　森　田　　勉

なお，調査当時補助員であった，立石雅文（現久留米市教育委員会）・丸山康晴（現春日市教育委員会）・荒武麗子も執筆分担した。

遺物整理・復原　　岩　瀬　正　信（土器復原指導）

九州歴史資料館　主任技師　　横　田　義　章（鉄器保存処理）

遺物実測補助　　荒　武　麗　子・平　田　春　美

遺構図製図補助　　豊　福　弥　生・須　山　富　子

遺物写真撮影　九州歴史資料館　主任技師　　石　丸　　洋

補　　助　　平　島　美代子

昭和56年度の発掘調査構成

福岡県教育委員会

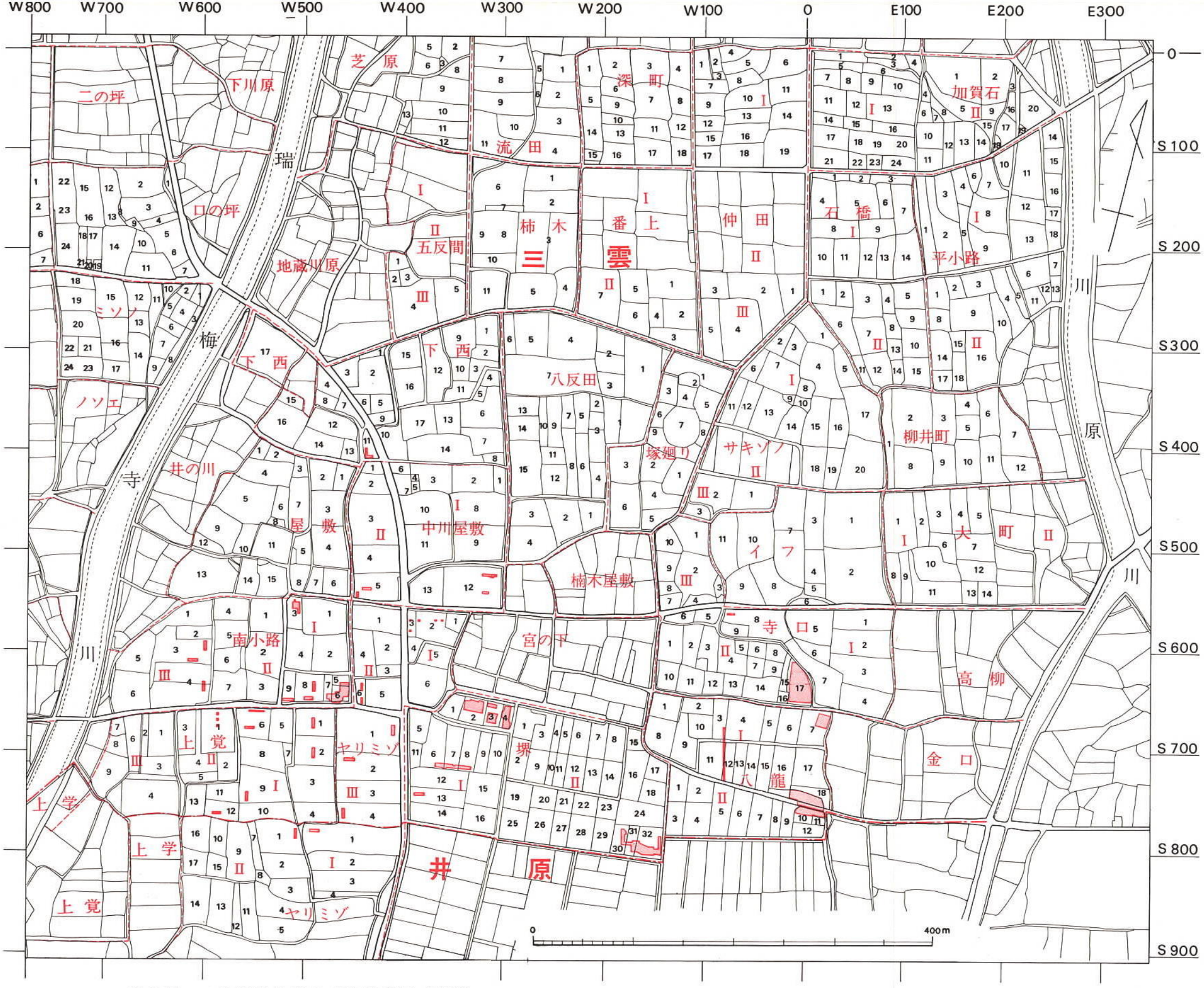
総　括	教育長	友野　隆
	教育次長	守屋　尚
	管理部長	森　英俊
	文化課長	藤井　功
	同課長補佐	蓮尾謙吉
	調査第1係長	宮小路賀宏
庶　務	参事補佐兼係長	内山孝之
	主任主事	長谷川伸弘
発掘調査	技術主査	柳田康雄
	主任技師	小池史哲

なお，調査においては下記に示す方々の協力があった。

豊島禮蔵・野坂猷英・吉村耕治・川村博（前原町教育委員会），造田昭枝・平山武児・佐藤幸吉（三雲地区土地所有者）。

昭和56年度の報告書作成

執筆担当	文化課	技術主査	柳田康雄
		主任技師	橋口達也
		同	児玉真一
		同	馬田弘稔
		同	小池史哲



第２図　三雲遺跡地籍及び地区割図 (1/4000)

第３図　圃場整備実施前と実施後の水田区画と標高　(1/4000)

九州歴史資料館　主任技師　　森　田　　勉

なお，調査当時補助員であった，丸山康晴・平田定幸（以上現春日市教育委員会）・立石雅文（現久留米市教育委員会）・川村博（現前原町教育委員会）も執筆分担した。

遺物整理・復原　　岩　瀬　正　信（土器復原指導）

九州歴史資料館　主任技師　　横　田　義　章（鉄器保存処理）

遺物実測補助　　平　田　春　美・荒　武　麗　子

遺構図製作補助　　豊　福　弥　生

遺物写真撮影　九州歴史資料館　主任技師　　石　丸　　洋

補　　助　　平　島　美代子

昭和57年度の発掘調査構成

福岡県教育委員会

総　　括	教　育　長	友　野　　隆
	教育次長	森　　英　俊
	管理部長	安　倍　　徹
	文化課長	藤　井　　功
	同課長補佐	中　村　一　世
	調査第1係長	宮小路　賀　宏
庶　　務	参事補佐兼係長	内　山　孝　文
	主任主事	長谷川　伸　弘
発掘調査	技術主査	柳　田　康　雄
	主任技師	小　池　史　哲

なお，調査においては下記に示す方々の協力があった。

豊島禮蔵・野坂猷英・吉村耕治・川村博（前原町教育委員会），中村萬義・牧野虎雄（三雲地区土地所有者）。

また，本年度の報告書作成については，本報告書の例言に示すとおりの分担で行った。

第3章の科学的分析については，昭和51年度以来，南小路甕棺出土品の整理が進むなかで，東京国立文化財研究所の江本義理部長に分析依頼をしていましたが，江本部長も公務多忙のおりから，これ以上の分析資料の追加が不可能となり，昭和54年度以後に整理のできた資料については，筑波大学岩崎卓也助教授を通じ国立沼津工業高等専門学校の望月明彦教諭に分析依頼した。

30

また，資料提供として東京国立博物館の原史室長本村豪章氏に南小路１号甕棺出土の銅鏡細片，同じく銅鏡付着の布痕を京都工芸繊維大学教授の布目順郎氏に分析していただいた。なお，布目先生には早くから分析原稿をいただきながら，今回の報告まで掲載が遅れたことをお詫びします。

また，文化課との共同研究の一環として，福岡県衛生公害センターに南小路１号甕棺墓出土の朱を分析依頼し，森彬氏に分析結果の報告をいただいた。

２．調査の経過

(1) 昭和54年度の調査

昭和54年度の調査は，昭和53年度調査で八龍II-10地区の甕棺墓調査未了分を調査継続するかたちで，４月当初から発掘調査を実施した。

また，三雲地区圃場整備の現地工事も本年度で完了することになっており，発掘調査としても圃場整備に関係する調査を完了することになった。したがって，本年度は八龍II-10地区の調査で終わることになるが，昭和53年度に調査した八龍Ⅰ-18とII-10は道路を隔てているだけで，両者は同一遺跡である。しかも，現在の道路をII-10地区に付け替えるために，現在の道路敷は削平される計画となった。工事と調査の工程計画としては，II-10地区の発掘調査を先行，調査完了後に道路を新設することにし，交通路を確保後に旧道路敷を発掘調査することになった。

第４図　八龍II-10 発掘調査風景

旧道路敷の調査は，工事完了後の年度末になって実施した。

昭和54年度からは，発掘調査の規模が縮小することもあって，国庫補助金には本報告書の印刷も計上した。報告書作成にあたっては，昭和49年度の調査以来小規模ながら出土品の整理を行って来たが，三雲遺跡全体を総合して以後４カ年で４分冊の報告書刊行の計画をたてた。計画としては，毎年500箱前後の小型土器に加え，甕棺や石器・鉄器・玉類・青銅器などの重要遺物を処理しなければならなくなった。

出土遺物は，九州歴史資料館において整理・復原作業を行い，現在も同館に保管している。

遺物整理や遺構図製図は，本年度から年間を通じて実施するが，報告書作成にかかる執筆等は各担当者の職務分担から年度末の短期間に集中することになった。

なお，圃場整備完了にあたって，前原町土地改良区の作製した最終出来上がり図面を第3図として掲載した。第3図は，圃場整備前の旧地籍図と新地籍図を重ねて作図し，それぞれに新旧の水田面の高さを示した。三雲地区の圃場整備事業は，地元土地所有者と前原町土地改良区の協力と努力によって埋蔵文化財を全面的に保護する事業となったことは，この種の事業としてはこれまでにない成果として，関係者一同が誇れるものである。

(2) 昭和55年度の調査

本年度は，遺物整理を九州歴史資料館において年度当初から昨年度の継続として土器復原を実施し，現場調査も4月から実施した。

本年度からの発掘調査は，圃場整備工事が完了したこともあって，三雲地区重要遺跡確認調査として，圃場整備を行わなかった住宅地域内の遺跡確認を目的とするものである。ところが実際には，住宅地域だけにこちらの希望する地区の調査は不可能で，折から国土法に基づく線引きの前とあって，不動産業者の活躍が目ざましく，住宅建築申請が提出されたものを試掘調査するかっこうになった。

本年度の調査地点は，中川屋敷II-5，下西II-10，屋敷I-10，塚廻りII-6の4ヵ所となり，トレンチ調査で終わらざるをえなかった。

試掘の結果，各地点ともに遺構が確認されたため，住宅建築など構造物の建造に際しては，十分な客土をして下部遺構を破壊することのないように条件を付け，土地所有者に協力依頼した。したがって，遺構は保存されることになり，4地点ともに試掘調査で終わることになった。

第5図 重機による表土剝ぎ作業（下西）

(3) 昭和56年度の調査

本年度も4月から現地の発掘調査と九州歴史資料館において遺物整理を同時並行させて実施した。

現地の発掘調査は，ヤリミゾI-3，南小路I-3，南小路I-9，井原ヤリミゾ，五反間III-5，上覚II-1の6カ所の試掘調査となった。このうち，ヤリミゾI-3，井原ヤリミゾでは遺

構面が深いうえに，遺構の性格が不明であったために，住宅建設等に対する条件は付加しなかったが，他の4カ所は遺構面を破壊することのないように土地所有者に協力願った。

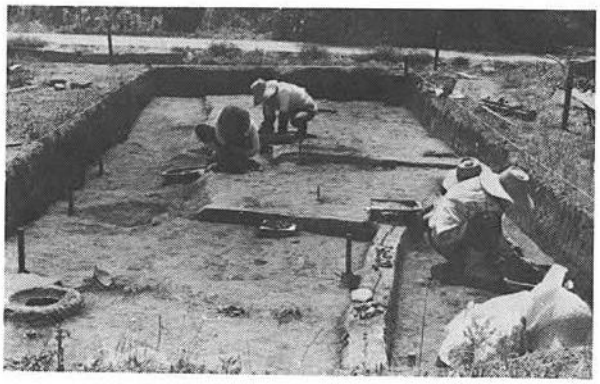
報告書作成については，本年度はとくに番上II-5地区など膨大な土器量となるために，担当者の一部は10月から遺物整理・実測を行った。

(4) 昭和57年度の調査

本年度は，三雲重要遺跡確認調査の最終年度であると同時に，報告書も第4冊目となり最終刊となった。報告地点としては，本年度はとくに重要地点が多く含まれているだけに，最終刊にふさわしい報告書作成を目標に計画したが，実際は各担当者ともに各職務分担の発掘調査が急務で，報告書作成にかかったのは例年より遅い年度末となってしまった。

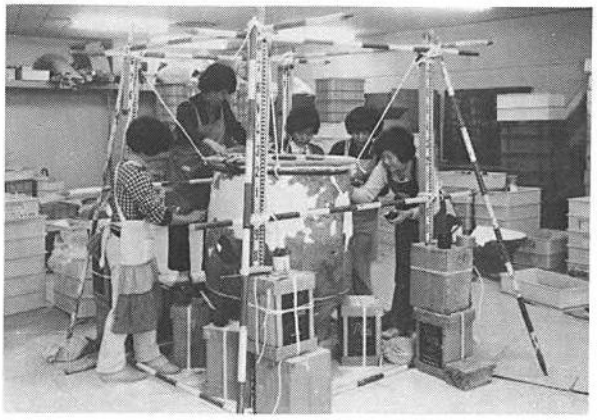
したがって，単なる遺構・遺物の羅列に終わり，まとまりのないものになることが残念でならないが，緊急調査で繁多な現状では大規模遺跡の報告書作成は困難なだけに，関係者各位の協力と努力でここまでこぎつけられたことを慰めとしなければならない。

調査地点は，中川屋敷I-12，下西II-11の2地点で，今回も試掘調査となったが，中川屋敷では住居群が検出されたのに比較して，下西では



第6図　南小路I-9 発掘調査風景

第7図　中川屋敷I-12 発掘調査風景



第8図　土器復原作業風景

まったく遺構が検出されず，地山面も深かった。

なお，昭和54年度から昭和57年度までの調査期間などは下のとおり。

昭和54年度

調査地区	調査期間	調査面積	調査担当者	掲載報告書
八　龍II-10	昭和54年4月3日～54年4月14日	113m²	柳田康雄・児玉真一 新原正典・馬田弘稔 小池史哲・池辺元明	Ⅳ
八　龍I-18	昭和55年2月25日～55年3月14日	321m²	柳田康雄・池辺元明	Ⅳ

昭和55年度

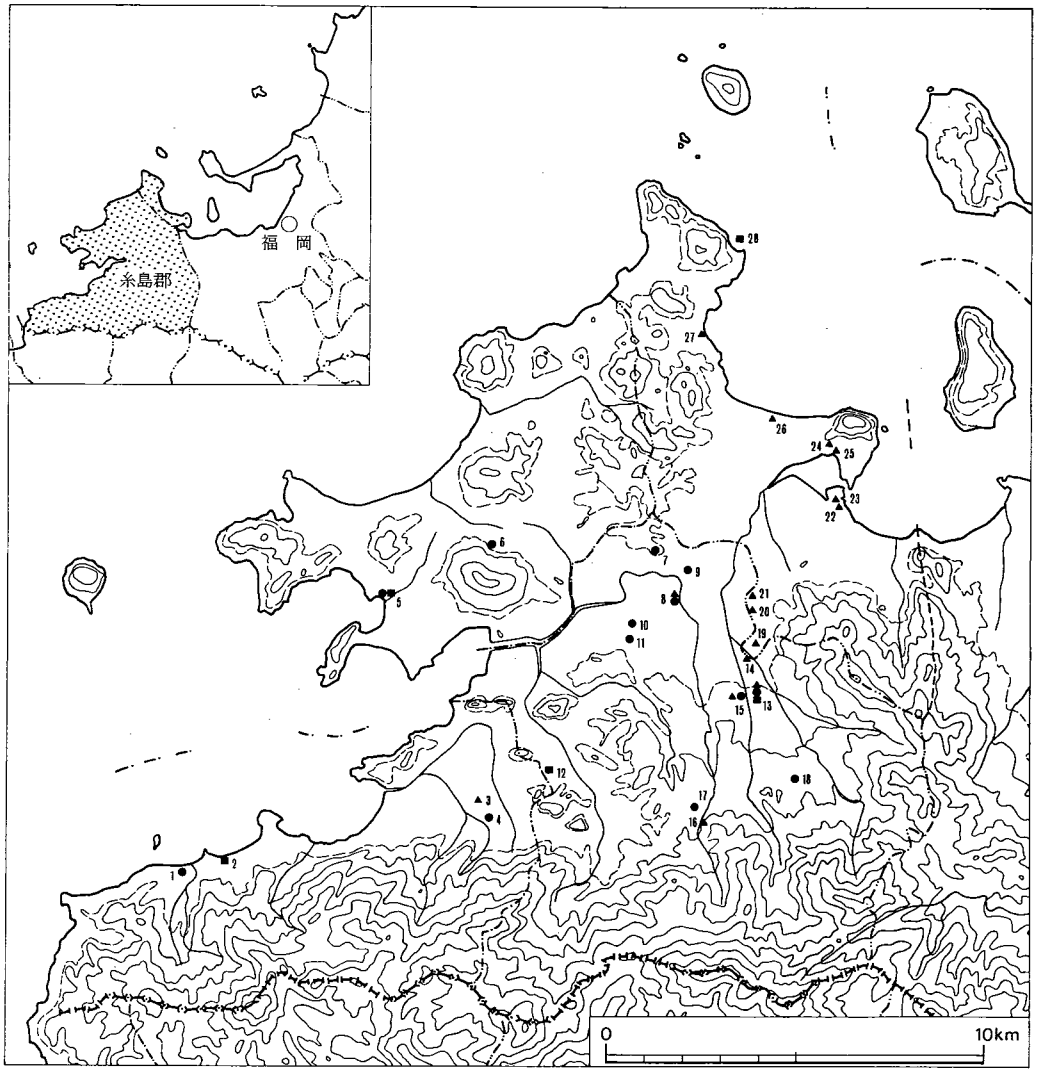
調査地区	調査期間	調査面積	調査担当者	掲載報告書
中川屋敷II-5	昭和55年4月25日～55年5月1日	180m²のうち31m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅳ
下　西II-10	昭和55年5月1日～55年5月31日	1,067m²のうち134m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅲ
屋　敷I-10	昭和55年5月1日～55年5月31日	368m²のうち98m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅲ
塚廻りII-6	昭和55年6月1日～55年6月10日	1,166m²のうち92m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅲ

昭和56年度

調査地区	調査期間	調査面積	調査担当者	掲載報告書
ヤリミゾI-3	昭和56年4月25日～56年4月30日	200m²のうち12m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅳ
南小路I-3	昭和56年4月28日～56年5月25日	519m²のうち72m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅳ
南小路I-9	昭和56年5月11日～56年5月29日	387m²のうち48m²	柳田康雄・小池史哲	
井原ヤリミゾ	昭和56年5月29日～56年5月30日	269m²のうち16m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅳ
五反間III-5	昭和56年7月26日～56年7月27日	1,145m²のうち84m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅲ
上　覚II-1	昭和56年7月30日～56年7月31日	1,491m²のうち12m²	柳田康雄	Ⅳ

昭和57年度

調査地区	調査期間	調査面積	調査担当者	掲載報告書
中川屋敷I-12	昭和57年4月5日～57年4月19日	1,200m²のうち48m²	柳田康雄・小池史哲	Ⅳ
下　西II-11	昭和57年4月19日～57年4月20日	1,067m²のうち25m²	小池史哲	Ⅳ
ヤリミゾI-2	昭和57年4月19日	1,110m²のうち8m²	小池史哲	Ⅳ



▲ 前 期
● 中 期
■ 後 期

1	吉井西古川遺跡	2	福井番所遺跡	3	曲り田遺跡	4	石崎小路遺跡
5	御床松原遺跡	6	小金丸大上戸遺跡	7	泊城崎遺跡	8	志登坂本支石墓群
9	志登神社支石墓	10	向原遺跡	11	新建遺跡	12	東二塚遺跡
13	三雲・井原遺跡群	14	井田用会支石墓	15	石ヶ崎支石墓	16	高野遺跡
17	三坂七尾遺跡	18	井原赤崎遺跡	19	宇田川原遺跡	20	千里支石墓
21	千里シビナ遺跡	22	今宿横浜遺跡	23	今山遺跡	24	野々花学園遺跡
25	今津貝塚	26	長浜貝塚	27	小田支石墓	28	唐泊海底遺跡

第 9 図 糸島の弥生時代主要遺跡分布図 (1/20,000)

第２章　三雲遺跡の遺構と遺物

第１節　寺口地区の調査

１．はじめに

寺口地区の調査は，昭和49年度の試掘調査と昭和53年度の圃場整備に伴う新設道路敷と削平地区の調査で，築山古墳周辺とII-17地区を実施した。

今回報告するのは，『三雲遺跡』IIIで報告した築山古墳関係以外の地区であるが，Ｉ－８のトレンチは前回の報告に漏れているので今回掲載した。II-17では，弥生中期に掘られた大溝の最上層には古式土師器群があり，この大溝は八龍Ｉ－３地区に続くことも確認された。寺口で重要なのは，祭祀土器群を持った石棺群であった。

なお，寺口Ｉ－８地区の調査は木下修が，II-17地区は柳田康雄・児玉真一・馬田弘稔が担当し，櫻井康治・丸山康晴・川村博・諫山佳明・樗木弘明・清水聖子が参加した。　（柳田）

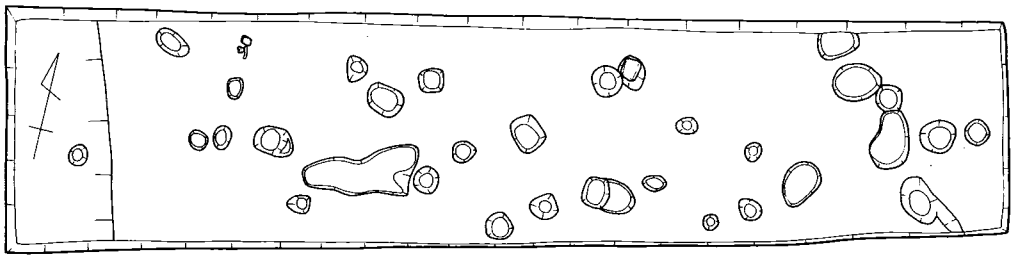
２．Ｉ－８トレンチ（図版２－１，第10図）

築山古墳の主軸の方向および規模を明らかにするために設定されたトレンチの１つで，後円部の南東側にあたる。

東西８ｍ，南北２ｍのトレンチで，表土下30～50cmで遺構面に達する。

遺構は，トレンチの西端に溝状の落ち込み肩部が検出された。遺物は何ら出土していないが，位置的に見て，築山古墳の周湟の可能性が強い。

他には，柱穴が30ヵ所ほど検出されたが，調査区の関係から性格等は不明である。糸切りの小皿が遺構検出面から出土しており，中世期の時期であろうか。　（木下）



第 10 図　Ｉ－８トレンチ実測図（1/60）　0　2m

3．II-17の遺構と遺物 （図版２－２，第11図）

寺口II-17は，南北方向の新設道路敷部分とその東側の削平部分を774m²調査し，弥生時代の大溝・甕棺墓２基・石棺墓５基・祭祀遺構，古墳時代竪穴住居跡７軒，歴史時代の土壙やピット多数を検出した（第11図）。

(1) 大　溝（図版３，第11・12図）

遺　構

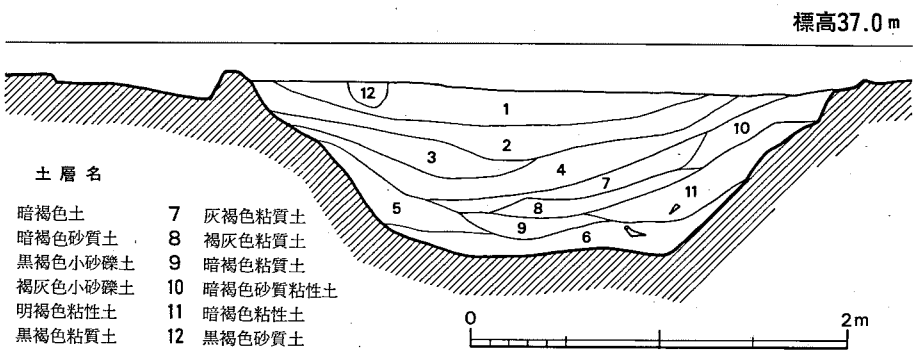
大溝は，調査区のほぼ中央で検出され，北東に向かって傾斜する。大溝は長さ 26m を検出したが，部分的に残して完掘しなかった。大溝の横断面形は逆台形をし，底部は割合平坦にできている。大溝の幅は，現況上幅3.6m，底面幅 2m～2.4m の規模で，深さ平均 1m となっている。検出した大溝には，中央付近に両側の地山を削って，両側から突堤状に築いた部分がある。突堤と突堤の間は1.1mの幅となり，上流の西側より1.2m，下流の東側より1.1m狭くなっている。この施設は，突堤の上流（西側）が地山自体から狭くなっていることから、大溝掘削当初から計画されたものである。大溝掘削当初から計画された施設とすれば，大溝の機能に大きく関係するものであらねばならないので，大溝の性格が問題になってくる。

大溝は，東側の低地にもほぼ同じ方向で続き，寺口Ｉ－７の田の幅である約20mまで延びるが，Ｉ－３では消滅していた。これはＩ－７の表土剝ぎで判明したものであるが，この地区はそれ以下に削平しないために溝の深さは確認しなかった。また，南西側は八龍Ｉ－３の南瑞で同時期・同規模・同方向の大溝を確認していることから，大溝は同方向で三雲遺跡を貫通する可能性を含んでいる。同じことは２号住居跡の下層で検出した深い遺構も大溝とすれば，八龍Ｉ-11で検出した大溝と連続し，さきの大溝と平行することになる。ただし，後者の大溝はほとんど遺物がないが弥生後期に属するようで，前者より新しい。すなわち，この大溝はおそらく多目的な水路として，直接ではないにしろ瑞梅寺川から水を引いたものであろう。

このような大溝に設けた施設は，一時的な水溜や小魚を捕獲する施設であってもよい。この施設付近に杭跡などの存在を確認したのであるが，この付近の地山は砂礫層となっていて，その確認も不可能であったが，大きな柱穴状のものがないのは確実である。

大溝の堆積土は，水の流れを示す砂質土が多いが，上層以下にはほとんど遺物が含まれておらず，最下層に弥生中期後半の土器片，中層に弥生終末前後の土器片がわずかに含まれていた。この大溝は中期後半以前に掘削されたものであるが，埋まり始めたのは後期も終末近くになってからであり，最上層の多量の土師器が埋まるころには，１・２号住居跡も造られているので，意識的に埋めたものであろう。

第 11 図　寺口 II-17 遺構配置図 (1/100)



第 12 図　大溝断面土層図 (1/40)

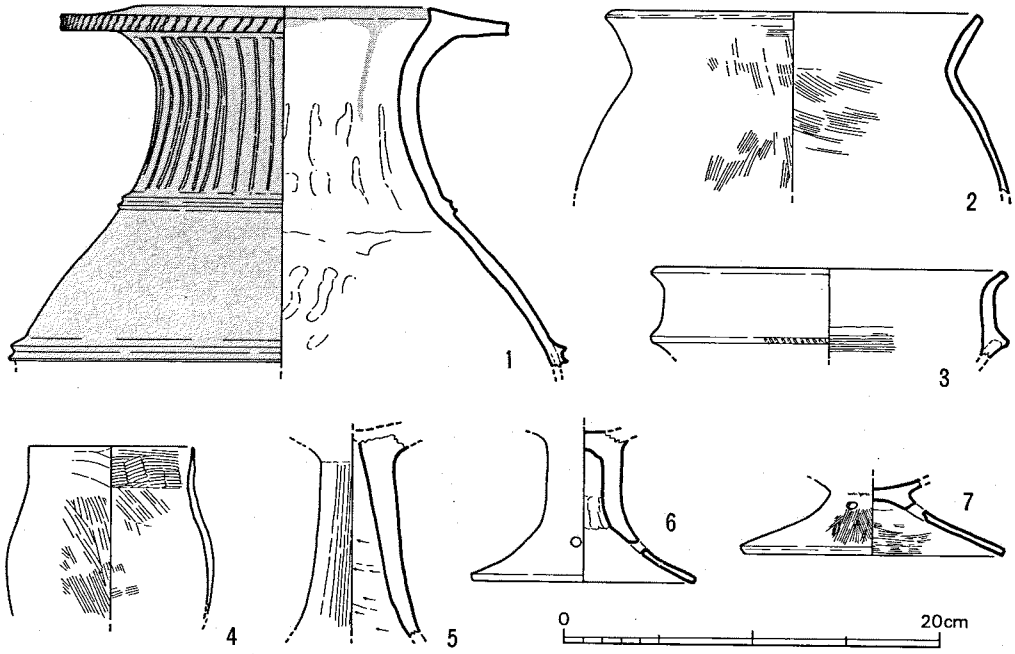
土　器（図版15，第13～19図）

最下層土器（第13図１）

実測可能な破片はこの１片で，口径23.6cmの丹塗磨研壺である。口縁は鋤先状を呈し，先端にキザミ目を施す。頸部には縦にヘラ描き暗文を施すが，他の丹塗りの部分は研磨しない。胎土に細砂を含み赤褐色を呈す。弥生中期後半のもの。

中層土器（第13図２～７）

これらの土器片は最上層から上層の土器群とは分離できるもので，弥生終末から土師器に多少併行するものである。とくに６などは確実に古式土師器とすることができる。



第 13 図　大溝中・下層出土土器実測図 (1/4)

寺　口

上層土器（図版15，第14～16図）

大形甕（1～5）　1は口縁が割合立つもので，胴部はあまり張らない。1と2は同一個体と思われるので，退化した扁平凸帯が3本めぐることになり，口縁先端と口縁下の凸帯に粗いキザミ目を施す。胎土は淡褐色で，粗砂・細砂（石英・角閃石）を含む。口径53cmの大きさ。

3～5は各々別個体で，4・5は1・2とさほど違わない粗いハケ目と退化した凸帯であるが、3は口径60.6cmの割りに薄手の作りで，口縁端が内湾ぎみである。

壺（6・7・11）　6・7は弥生終末の袋状口縁が変化して上部が直立したもので，7は屈曲部が凸帯状を呈し，新しい要素を持つことから6から7に変化する。

11は，明らかに上記土器と胎土が違い，明るい赤褐色を呈し，細砂(石英・金雲母)を少量含む。表面の荒れがひどく，調整仕方不明。

甕（8～10）　8は口縁が直立に近い粗製土器で，器面調整のハケ目も粗い。

9・10は，胴部内面をヘラケズリする布留系の甕で，胎土は11の壺と同じ。

高　杯(12・13) 12は径23.6cmの大きさで，杯受部に丸味のある深い杯部の高杯。器表面は磨滅し，暗文等の調整法は不明。13は別個体の脚部で，これも調整法等不明。

台付椀(14・15) 14は口径14.9cm，器高8.4cmの口縁部の外反するもの。磨滅して調整は不明であるが，淡褐色の胎土に細砂・粗砂を含む。15は，細かいハケ目と暗文の調整がわかる。

器　台(16)　口径23.4cm，器高11.3cmの鼓形器台で，台部内面のヘラケズリ以外の器面には粗い暗文が施されている。胎土は，くすんだ薄茶色の中に暗灰褐色の部分もあり，細砂・金雲母・角閃石・赤褐色粒をかなり含む。

鉢(17・18) 口縁端部を平坦にするもので，丸底となろう。

最上層土器（図版15，第17～19図）

甕(19～26)　19～21は，西新式系統の甕で内面はハケ目調整をする。三者に共通するのは，長い口縁部と胴部外面の粗いタタキ目であるが，19はとくに粗いタタキをハケ目でほとんど消していない。19の口縁の外のふくらみは布留式に共通する特徴。

22～26は，胴部内面のヘラケズリと口縁先端の摘上げが共通し，口縁は庄内式の特徴を残す。胴部外面肩部は，タテハケ目をヨコハケ目で消している。

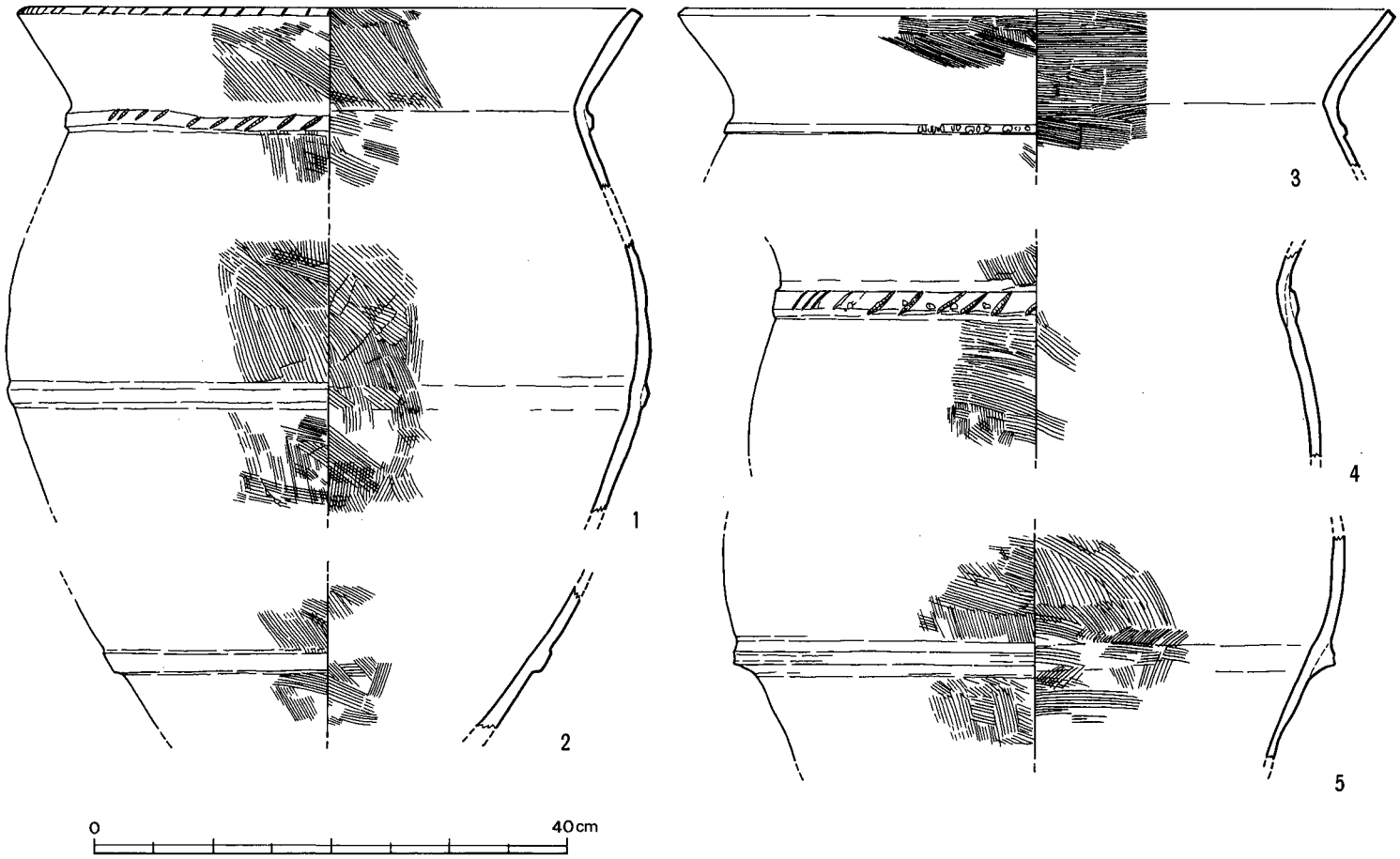
壺(27・28) 二重口縁壺で，27は中型で口縁が直立し，28は小型で口縁が開く。27は粘土帯の接合状態が明瞭で，かなり粘土帯を重複させて接合している。

高　杯(29・30) 29は西新式の系統を引くもので，杯部の立ち上がりが長く，受部が短くなっている。30は高杯とするには脚部が台状であるが，杯部の屈曲は高杯と同様である。

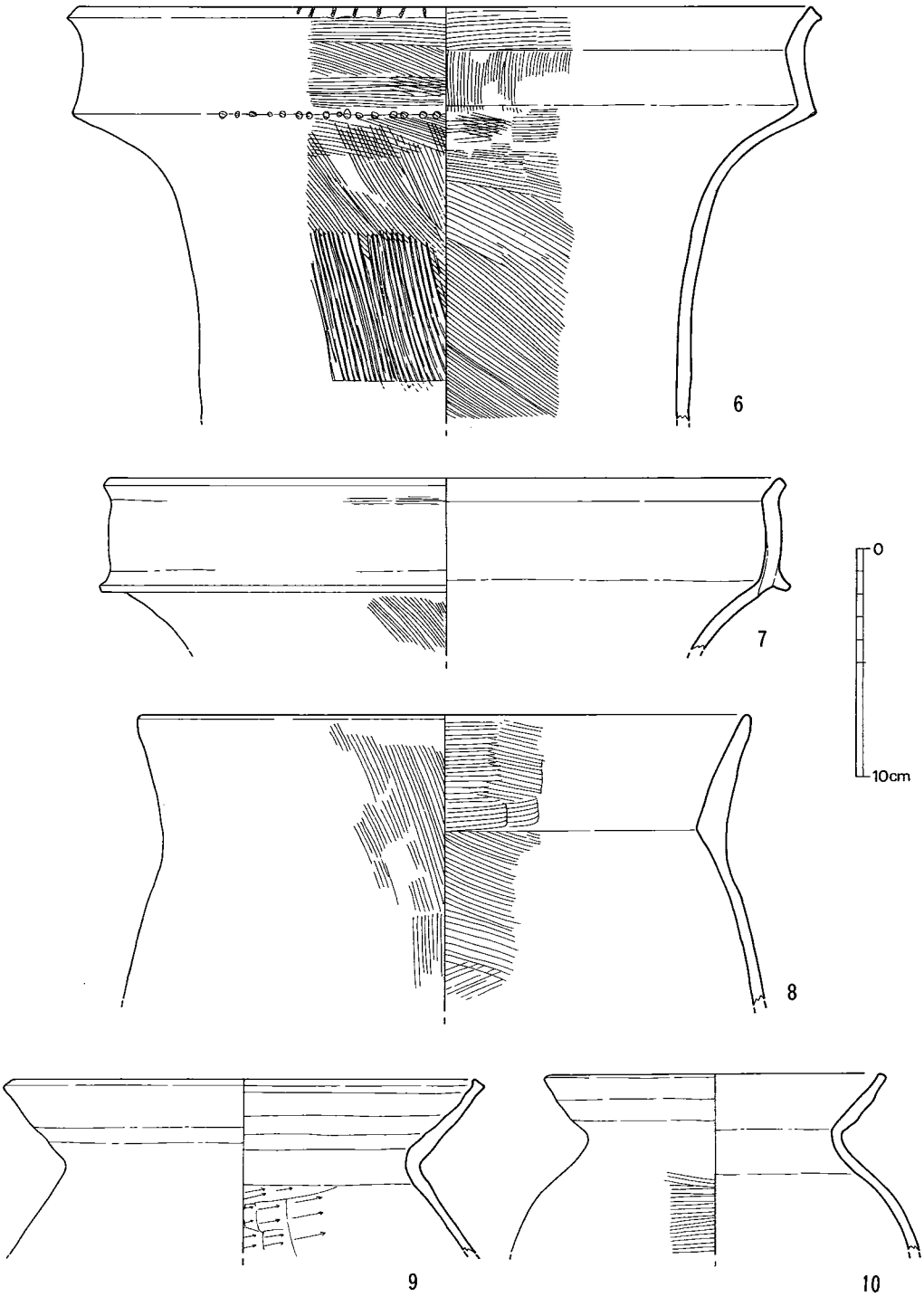
小形丸底坩(31)　口径12.2cm，復原器高8cmの坩で，調整法は不明。

支　脚（32）　高さ10.6cm，裾径13cmの西新式系統の粗いタタキ目の残る支脚。

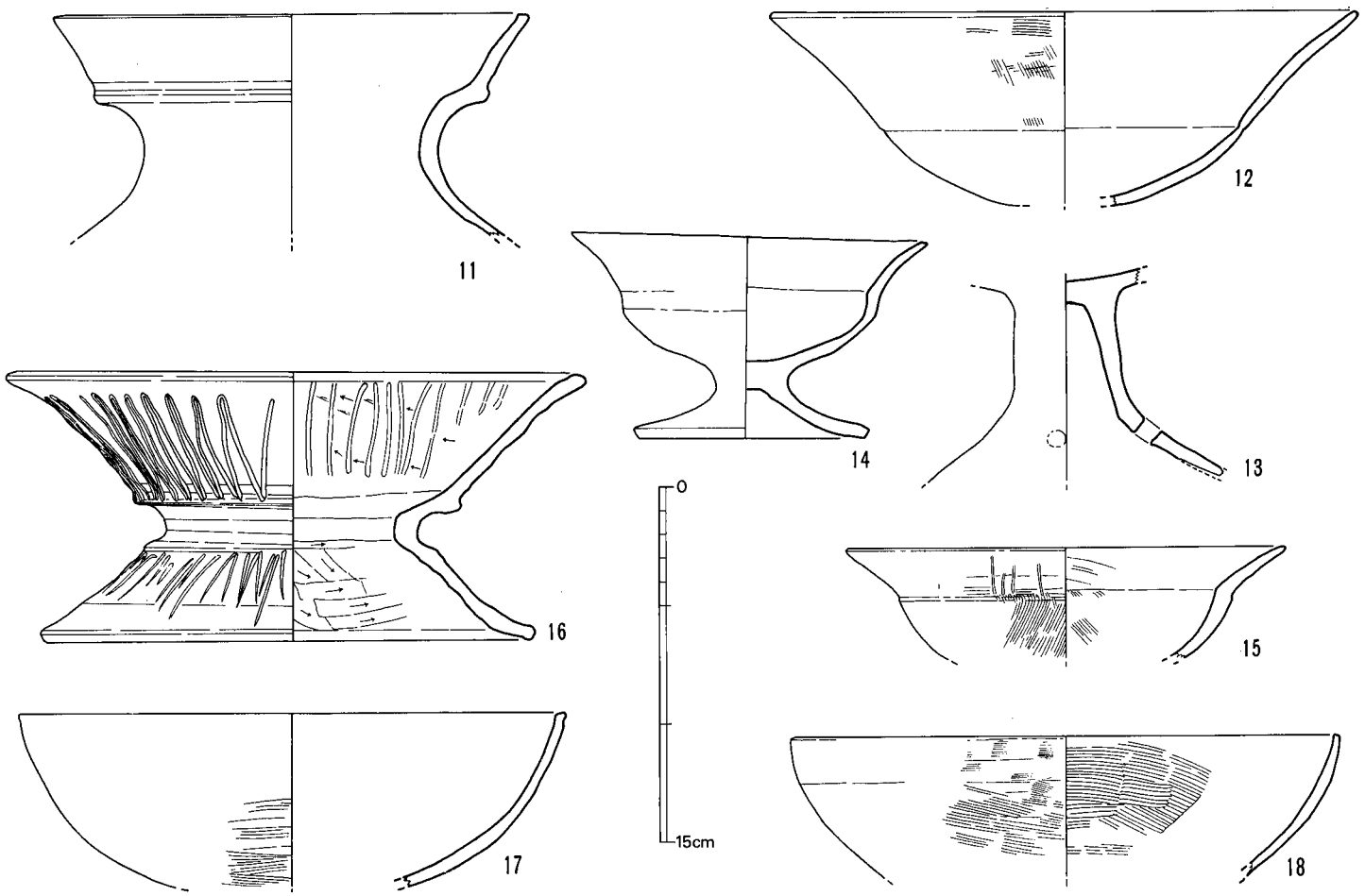
器　台(33・34) 2点ともに鼓形器台で，33は高さ9.4cm，口径16.5cmの大きさで，台部内面の



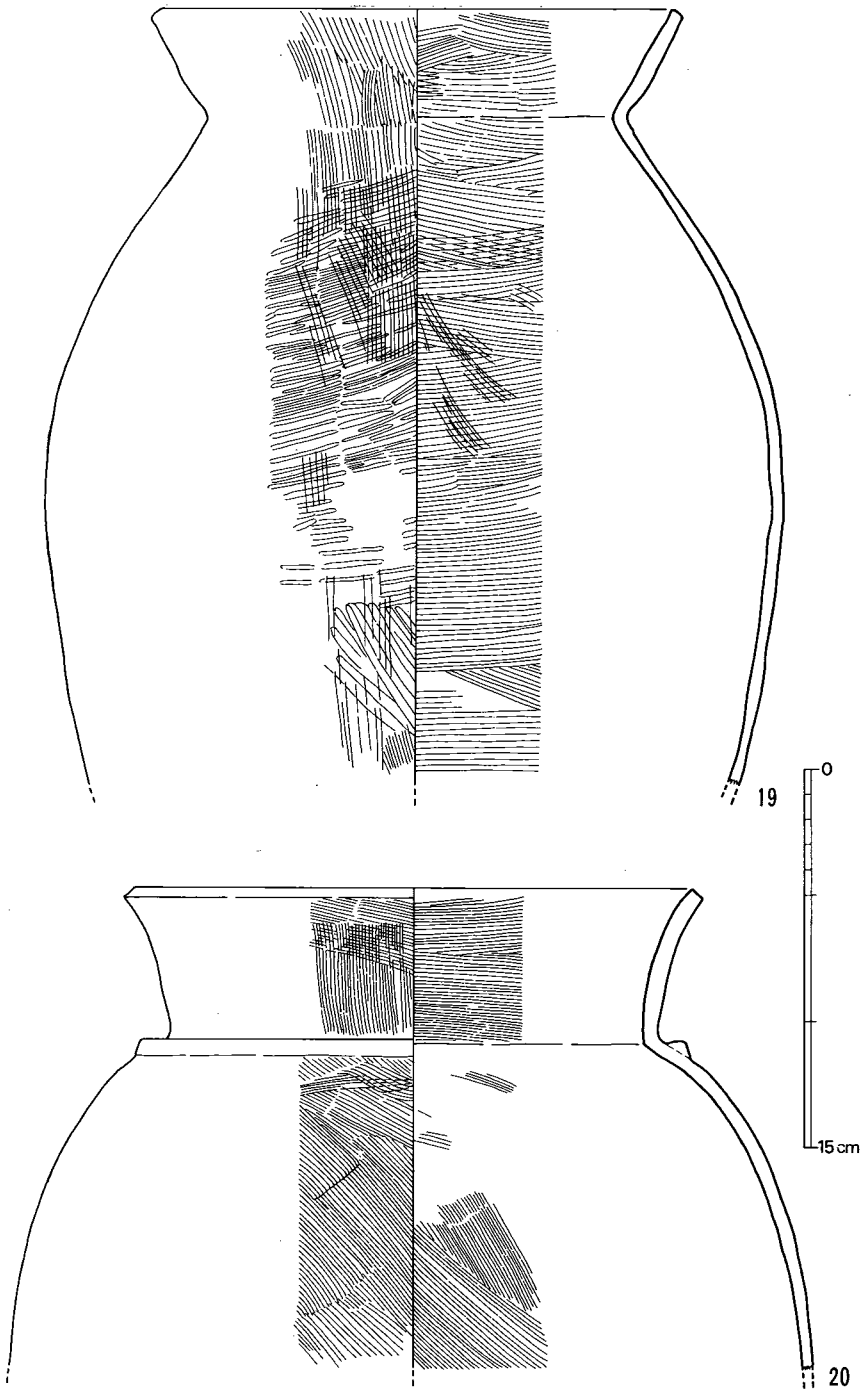
第 14 図　大溝上層出土土器実測図①　(1/6)



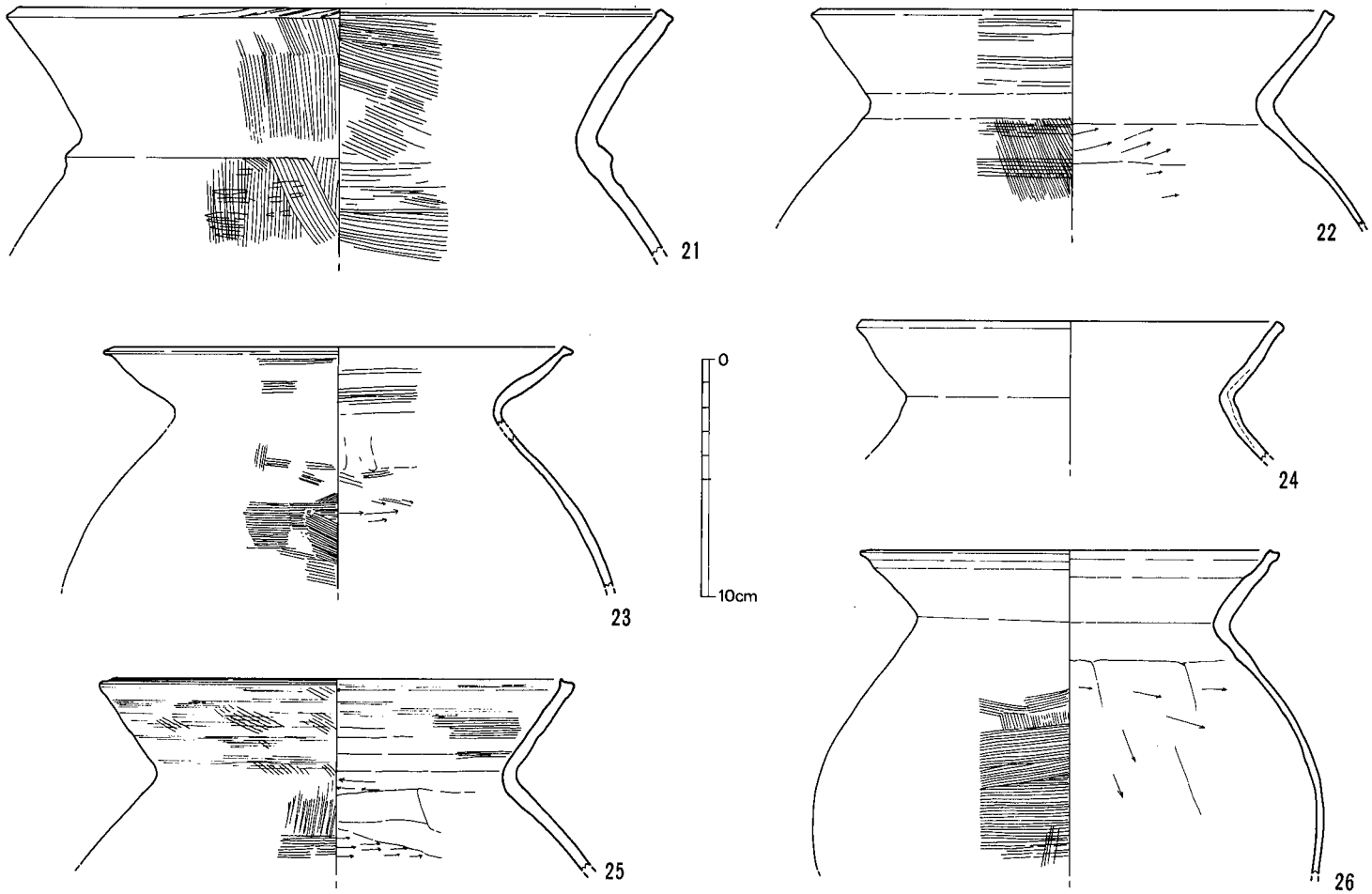
第 15 図　大溝上層出土土器実測図② (1/3)



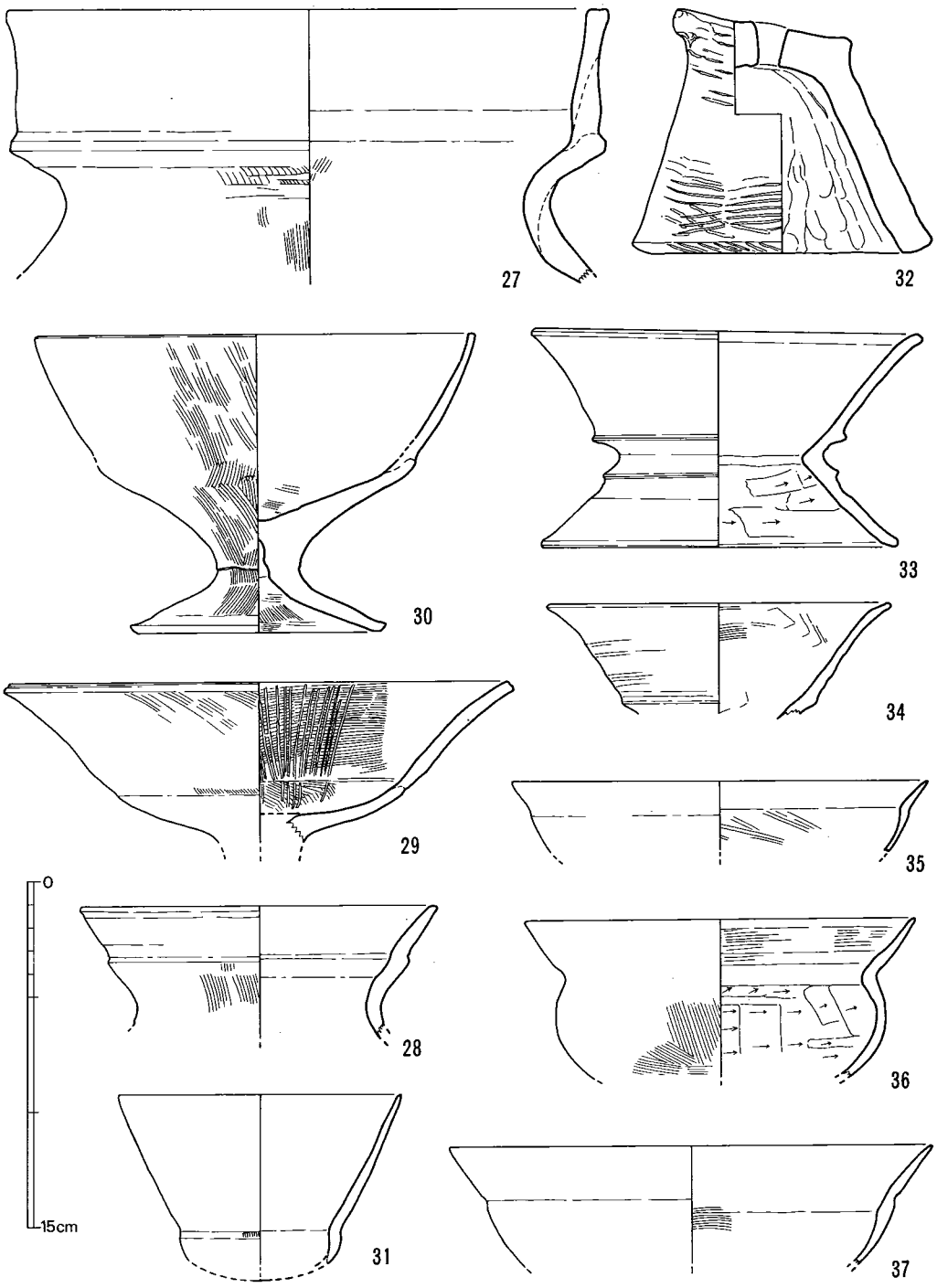
第 16 図　大溝上層出土土器実測図③ (1/3)



第 17 図 大溝最上層出土土器実測図① (1/3)



第 18 図　大溝最上層出土土器実測図② (1/3)



第 19 図　大溝最上層出土土器実測図③（1/3）

ヘラケズリ以外の器面はヨコナデとナデ調整である。

椀(35～37)　多少の差があるが，口縁が屈曲して外反するもので，台がつく可能性もある。

瓦質土器（図版20－1，第44図1・3）

壺(1)　軟質灰色土器で，瓦質土器といえる。頸部以上と胴部は直接に接合できないが，同一個体である。外反する口縁内側には粘土帯を貼り付け、胴部上半には間隔を狭く沈線をめぐらす。胴部には沈線を施す前に細かい平行線タタキ目があり，上半はタテ方向であるが，沈線からはずれた下半は斜方向である。

胎土には細砂(石英・長石)を含み，外面は灰黒色，表面の剝げた内部は灰色をしている。

出土した地点は，S632，E4の3層であるが，この地区は北半が大溝にかかり，南半が不明確な遺構がある。時期的には，古式土師器に伴うものと思われる。

褐色土器(3)　大溝最上層から出土した破片で，軟質褐色の格子目タタキ文がある。胎土は外面褐色，内面淡褐色で，細砂(石英・長石・赤褐色粒)を含む。

(2)　甕棺墓と石棺墓

寺口II-17では，大溝以南で石棺墓5基・甕棺墓2基・土壙墓2基と祭祀遺構の墓地に関する遺構が検出されている。このうち，石棺墓は同一方向を向くことなどから，ほぼ同一時期のものと思われるが，甕棺墓は2号が弥生前期で1号は後期後半のものである。さらに土壙墓の1基は奈良時代のものが5号石棺墓と重複している。

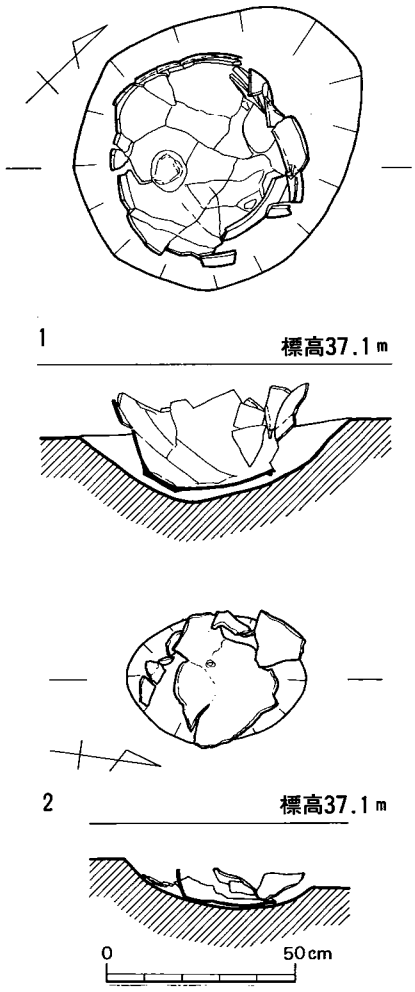
① 甕棺墓

1号は石棺墓群中に，2号は大溝の南に位置する。

(柳田)

1号甕棺墓（図版5-1，第20図1）

調査区のほぼ中央で検出した甕棺墓で，大半が削平を受けている。墓壙プランは不整楕円形で0.82×0.70m，深さ約0.16mを測り，主軸はN42°Eで，埋葬傾斜角度約58.5°である。上甕は鉢で，下甕は壺であり，覆



第 20 図
1・2号甕棺墓 実測図 (1/20)

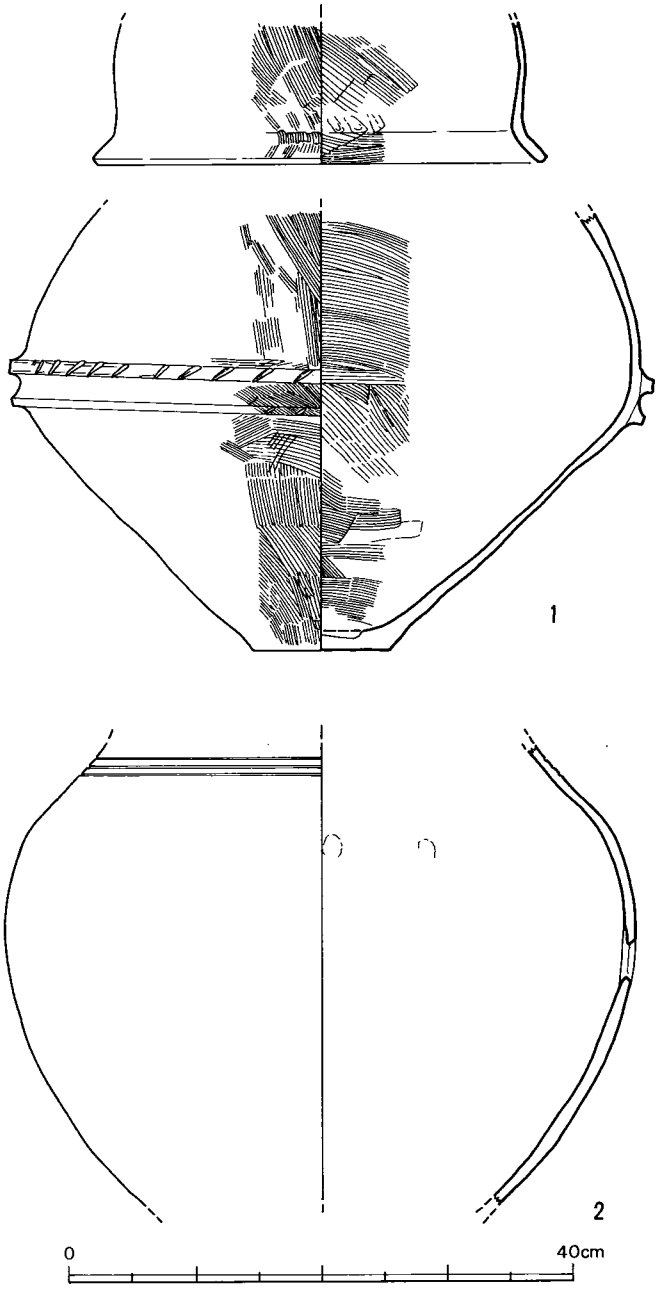
寺　口

口式の可能性が強い。墓壙内には粘土塊等は検出されていない。

甕　棺(図版17-1，第21図１）上甕は，鉢形土器で，復原口径36.0cmを測り，口縁は「く」の字状に外反する。器表内外面はハケ目調整をみる。胎土に石英質，金雲母質等の細砂粒を含み，灰褐色～褐色を呈す。

下甕は，壺形土器で口頸部を欠損する。胴部に２条のヘラによるキザミ目をもつ凸帯をみる。上部凸帯はキザミ目が全周するが，下部凸帯は部分的に施されている。体部内面には横・斜方向ハケ目をみ，外面は縦方向ハケ目で，凸帯接合部は斜方向ハケ目を施した後で凸帯を接合してナデている。胎土に砂粒を含み，灰褐色ないし暗灰褐色を呈す。

(川村)

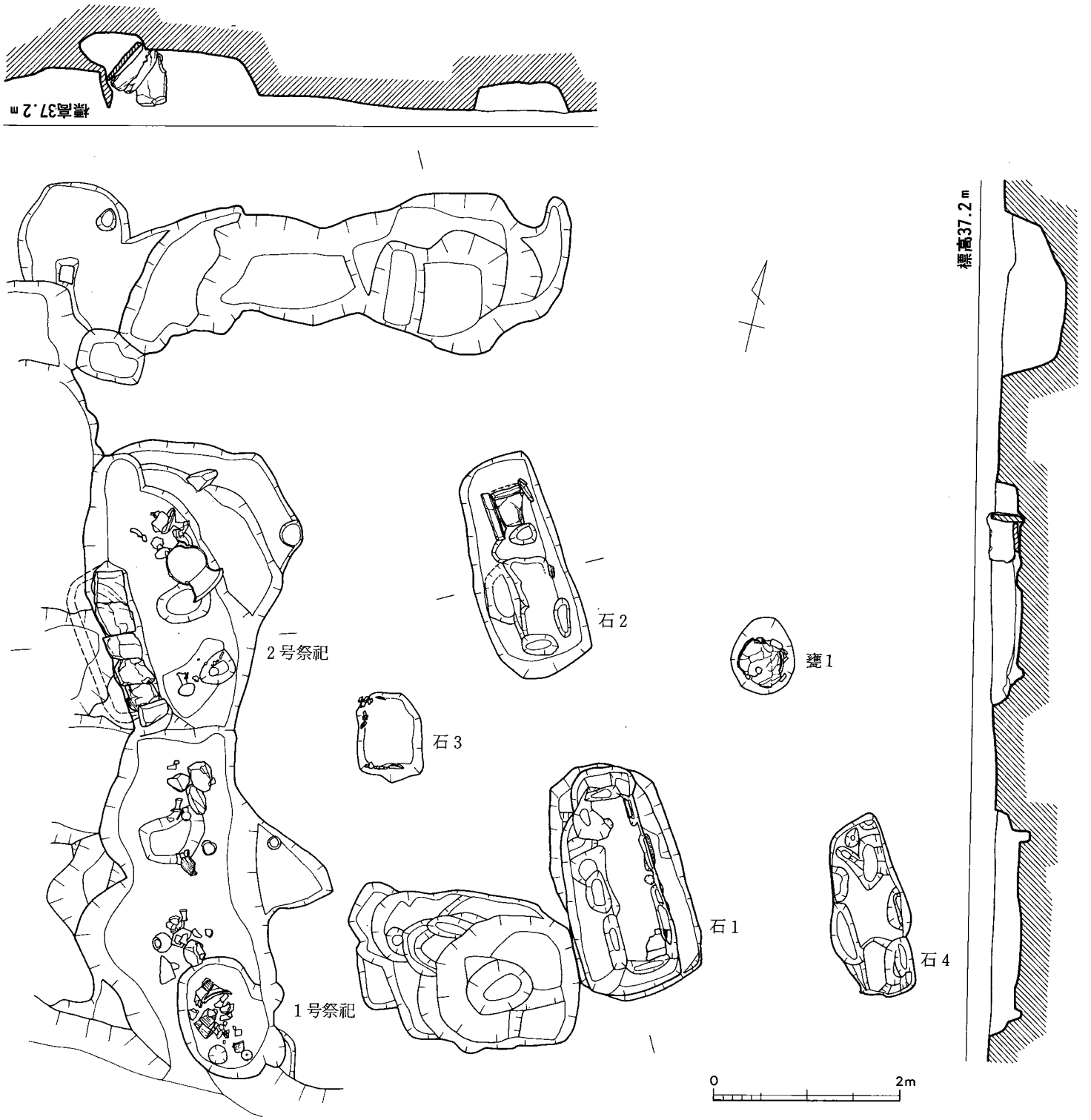


第 21 図　1・2号甕棺実測図（1/6）

２号甕棺墓（第20図２）

大溝のすぐ南側に位置し，石棺群から孤立しており，時期も違っている。甕棺は大半が削平されて壺の肩部から胴部の一部が残っているだけで，壺の出土状態と胴部に穿孔があるところから甕棺とした。正確な傾斜角や方向は不明だが北向きである。合口式であるかも不明。

甕　棺(第21図２）　土器は胴の最大径が約50cmの中型の壺で，小児用である。

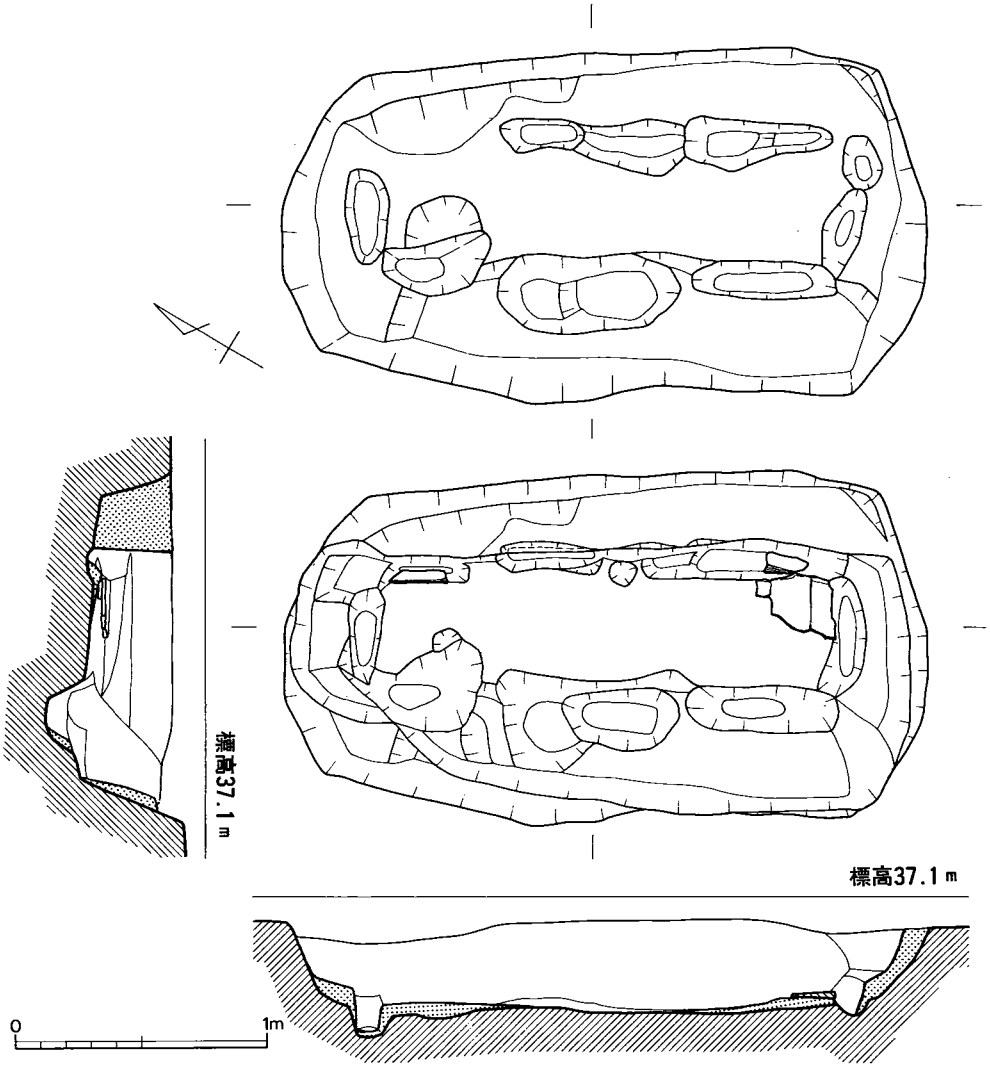


第 22 図　寺口 II-17 石棺墓配置図 (1/60)

肩部に３条のヘラ描き沈線をめぐらすが，頸部との段を有さずになだらかに肩部に移る曲線を描く。器外面のミガキは不明で，ナデ仕上げらしい。胎土は褐色で細砂を多く含む。弥生前期中ごろのものであろう。

② 石棺墓

石棺墓は，調査区内の限定すると東西10m，南北６m以内にあり，小児甕棺である１号はそのほぼ中央に位置するが，南側の調査区以外が不明である。地元民の話によると戦後この地域の地下げを行い，石棺を破壊したが赤く塗ったものがあったという。出土品については，記憶



第 23 図　１号石棺墓実測図（1/30）

寺　口

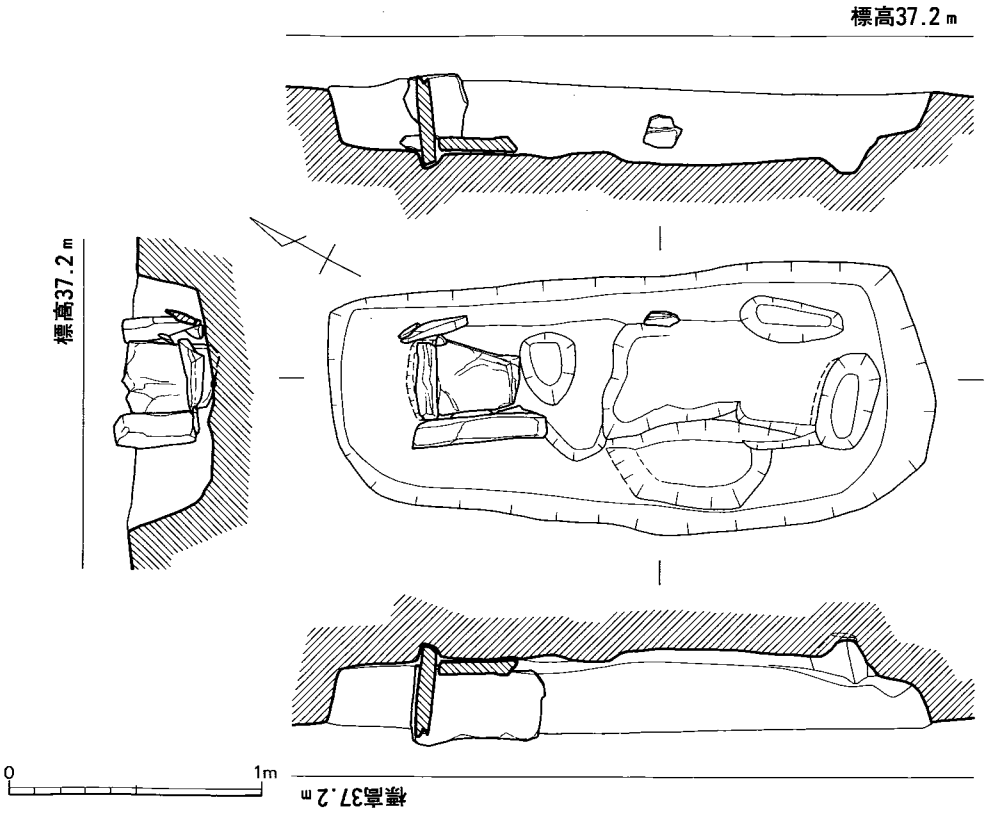
がないらしい。

1号石棺墓（図版5－2，第23図）

石棺は，完全に破壊されて石材を抜かれているが，床石の一部が残っていた。床石の石材は緑簾片岩であるが，側壁にも同様な石材を使用したらしく，その破片が残っていた。石材の抜き跡から石棺を復原すると，内法の長さ183cm，南側幅50cm，北側幅40cm，深さ30cm以上の大きさの箱式石棺で，両小口に各1枚，両側に4～5枚の板石を使用し，蓋石との間に青色粘土で目張りをしていたらしい。棺幅の広い南側が頭部で，南30°東の方向を向いている。現状での墓壙の大きさは，長さ256cm，南側幅137cm，北側幅114cmの大きさで，1段掘りとなっているが，かなり削平されているので，さらに広い2段掘りの可能性もある。

副葬品は，棺内すべてが攪乱されているために，本来はどの位置に置かれていたか不明だが，棺内から赤色顔料とともに鉄剣片・刀子片が出土した。

鉄　剣（図版17-2，第25図1）2片が出土したが接合できず，一方は剣身で他方は身と茎の一部の破片である。両片で現存全長20.5cm，関幅3cm，身厚0.4cm，茎幅2cmの大きさである。



第24図　2号石棺墓実測図（1/30）

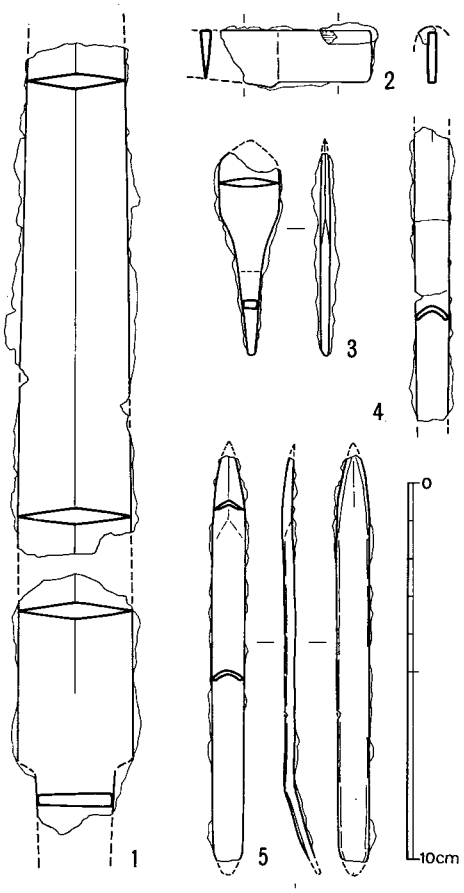
関部分は銹で詳細は不明であるが，刃と直角ではないようだ。

刀　子（図版17-2，第25図2）これも茎と身の一部の破片で，現存全長4cm，身最大幅1.5cm，茎長2.4cm，茎幅1.3cmの大きさで，茎が太く短かいもの。茎には、一部柄の木質が残っている。

2号石棺墓（図版5-3，第24図）

2号石棺は，1号石棺の北側に位置し，主軸方向を同一にして直列的に並ぶ。墓壙間の距離は50cmである。この石棺も破壊されているが，北側小口付近の石材が原形のまま残っている。墓壙は，全長240cm，南側幅104cm，北側幅84cmの大きさで，1段掘りとして残っている。

石棺は，内法156cm，南側幅45cm，北側幅35cmの大きさの箱式石棺墓で，小口石材を両側石の内側に挾んでいる。床には全面に敷石があったらしく，足部と思われる北端に緑簾片岩1枚が残っている。北側小口付近の石材は，小口と東側壁が緑簾片岩，西側壁に花崗岩が使用されている。石棺側壁は，各々4～5枚の石材を組み合わせたと思われるが，側壁はほとんど床面より深く掘っておらず，花崗岩の西側壁の下には板状小石さえ敷いてある。壁面の内側には赤色顔料が塗布してある。



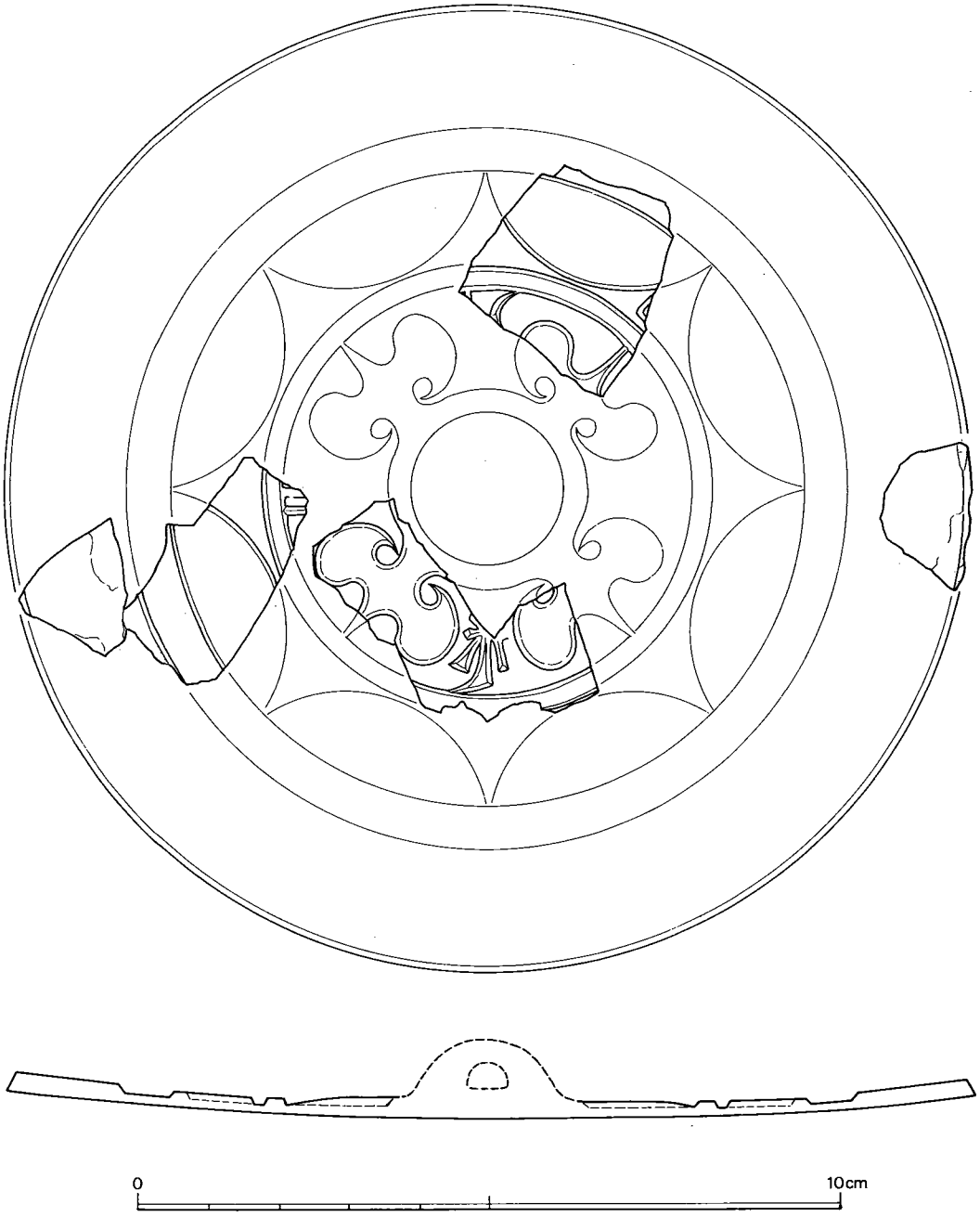
第25図　石棺墓出土鉄器実測図（1/2）

棺内の攪乱土中から少量の赤色顔料とともに後漢鏡片・碧玉管玉・鉄鏃が発見されたが，出土するのは棺内の南半に限られており，その南半は床面も深く荒されていることから，副葬品は南側の頭部付近にあったものと考える。石棺の主軸は，南28°東の方向を向く。

後漢鏡（図版16-1，第26図）　攪乱土内から9片が出土したが，4片に接合された。鏡は，蝙蝠座の間にある銘の一部が3字分あるところから第26図のように復原した。復原によると，直径13.8cmの大きさとなり，鈕座銘は「長□子孫」となる。鏡の各部分の寸法は，縁上端幅15.5mm，縁厚2.45mm，弧文上端幅12.2mm，弧文部厚1.9mm，円圏上端幅2.1mm，円圏部厚1.9mm，蝙蝠座部厚2.15mm，蝙蝠文間地厚1.45mm，円圏外径64mmとなり，全体に薄手の鏡である。

連弧文間にも銘文があるらしいが，現在のところ不明。

鏡縁端や鏡片縁は保存の悪いところもあるが，文様面と同様に磨滅した部分はほとんどなく，



第 26 図　2号石棺墓出土　連弧文「長宜子孫」銘鏡復原実測図（実大）

蝙蝠文・円圏・連弧文・縁の上面と縁側面・鏡面の鋳造後の研磨は丁寧で，各角はシャープに仕上がっている。1片の縁片以外は所属位置が確実であるところから，鏡片として副葬された

ものでなく，完形鏡として副葬されたことは，磨滅痕がないことからも明らかであろう。文様間に赤色顔料が付着していることからも，副葬品としてよい。

碧玉管玉(図版16-3，第49図1)　攪乱土内から1個だけ発見された。管玉は，長さ7.0㎜，径2.9㎜，最大孔径1.75㎜の小型の暗い緑色をした碧玉管玉。両側からの穿孔で，端部をわずかに欠損している。

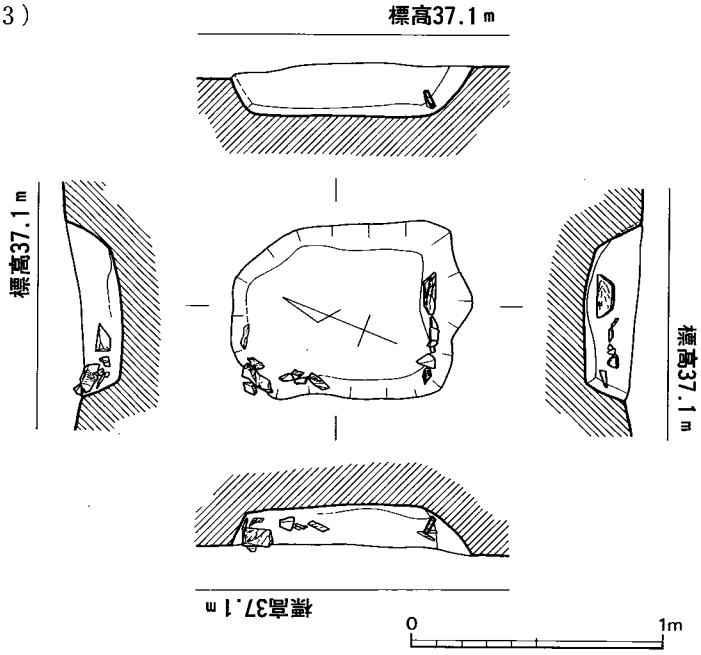
鉄　鏃(図版17-2，第25図3)

鉄鏃は有茎式で，先端を欠損している。現存全長53㎜，最大幅16㎜の大きさで，関部の細部は錆のため不明。

3号石棺墓

(図版6-1，第27図)

この石棺墓は，小型で完全に石棺を抜かれているために，石棺墓とするには困難なところもあるが，石材の緑簾片岩片が立ったものがあるところから石棺墓とした。墓壙の大きさは，長さ90cm，幅70cm，現状深さ20cmの規模。主軸方向は，南22°東を向いている。

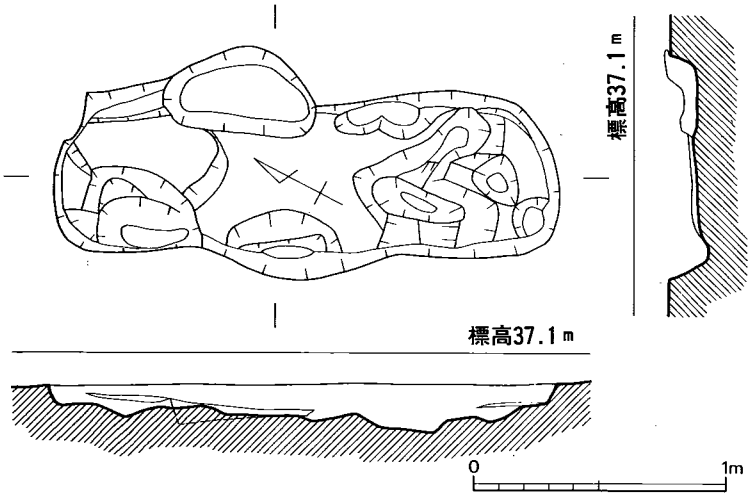


第27図　3号石棺墓実測図 (1/30)

4号石棺墓

(図版6-2，第28図)

この石棺墓も完全に石材を抜かれ，攪乱されていた。墓壙の大きさは，攪乱された範囲以外に検出されなかったので，遺構内は完全に攪乱されて，原形はほと



第28図　4号石棺墓実測図 (1/30)

んど残っていないことになる。攪乱壙の大きさは，長さ202cm，幅65cm，深さ20cmであるから，この付近はかなり高い位置に地山があったらしい。石棺の主軸は，南27°東を向く成人用箱式石棺墓であったらしい。南側の攪乱土内から，少量の赤色顔料と鉄鉇片が出土した。

鉄　鉇（図版17-2，第25図4）　鉇は両端を欠損したもので，現存全長78mm，幅9mmの大きさ。破片の一方に刃部らしいところが残っている。　（柳田）

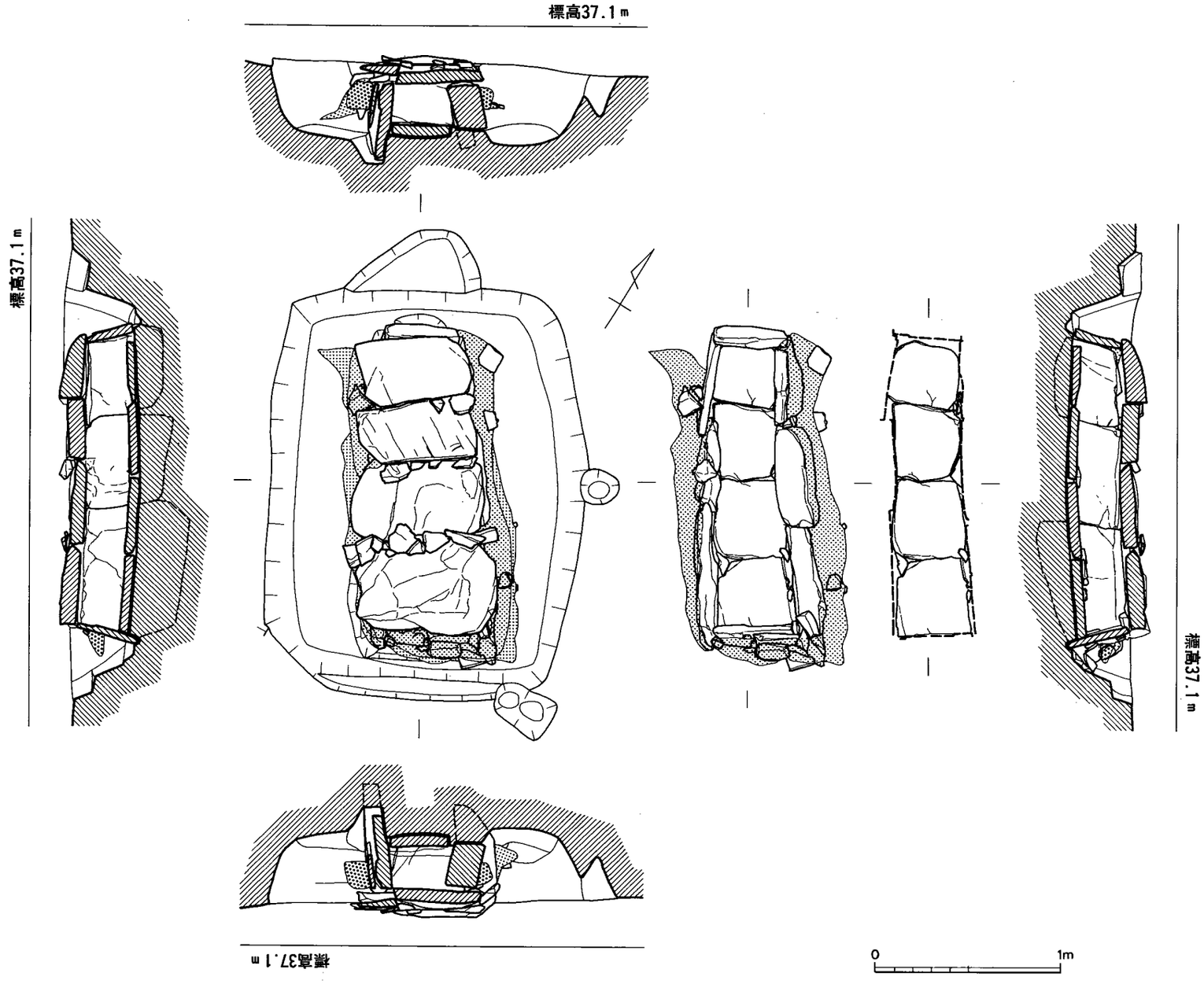
5号石棺墓（図版9-1・2，第29図）

調査区の東部に位置する箱式石棺墓である。墓壙は，長さ約2.3m，幅約1.7mを測り，概ね隅丸長方形を呈する。一部分を8世紀半ばの土壙により切られているが，破壊までには至っていない。石棺は，4枚の蓋石と両壁に各3枚，両小口に各1枚によって組み合わされている。また，床面には4枚の石材が敷かれている。組み合わせは小口石を両壁で挾む形をとっているが，北小口は東壁の長さが足らず逆を呈している。側壁及び小口は，石材に合わせて墓壙を掘り下げ，上面を揃えている。棺身は，やや内傾しているが，床面において長さ1.6m，幅33～43cm，高さ約23cmを測り，主軸方位はN28°Wを示す。頭位は，南小口がやや幅広くなっているとこから南側とみられる。副葬品は棺外においてガラス小玉が1個出土している（表1-69）。（櫻井）

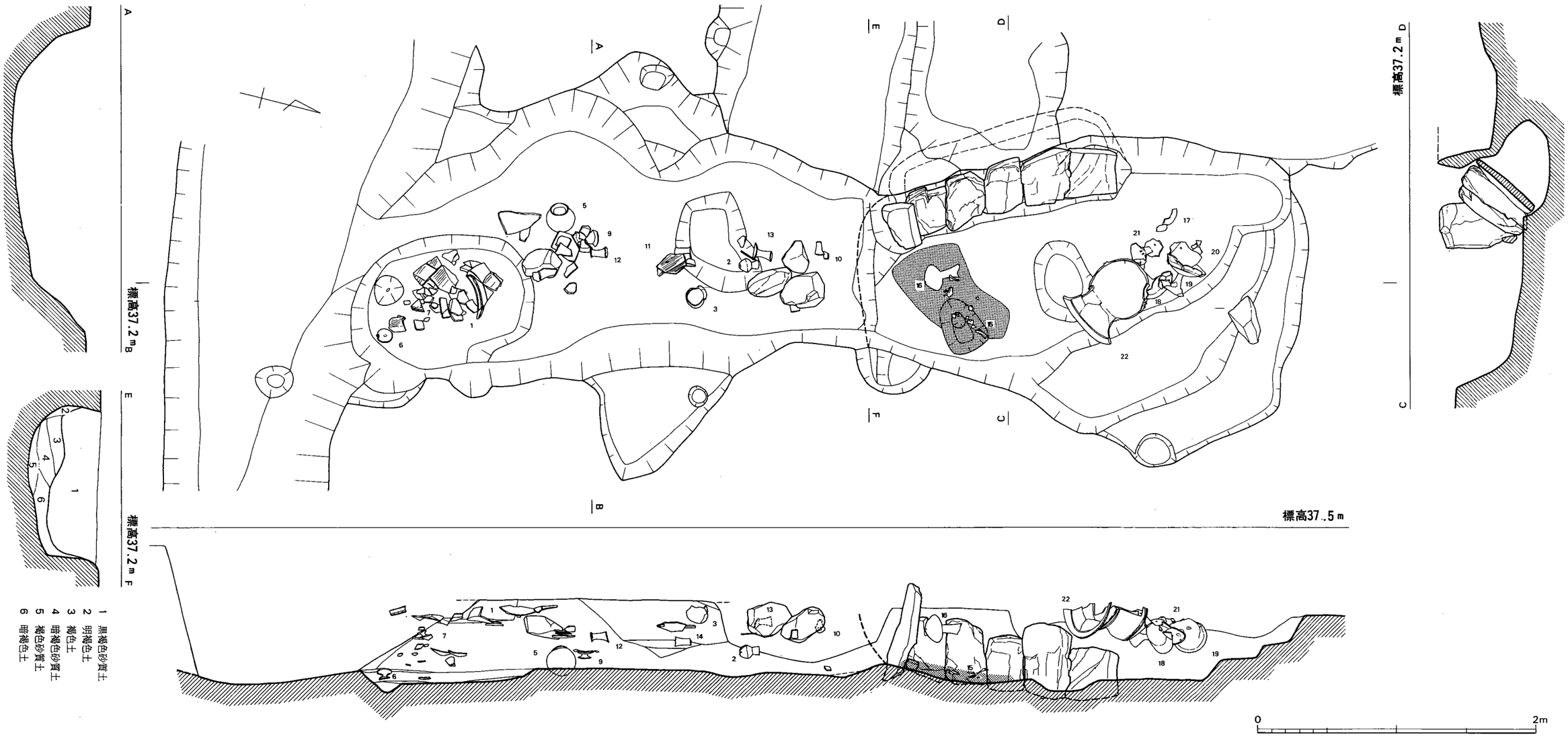
③ 祭祀遺構（図版6～8，第30図）

遺構は調査区の南側で，石棺群の西側に位置する。祭祀遺構は，南北に長く溝状を呈し，とくに副葬品を持った1号・2号石棺墓に平行するところから，両者は無関係ではない。さらに2号石棺墓北側の東西方向の溝状遺構と合わせると，1号・2号石棺墓を囲むL字形の墓域区画周溝と見られる。ただ問題になるのは，西側溝と北側溝が連続したものではなく，方形区画にあたる角部分が切れることである。とくに墓域の方形区画や方形周溝墓は，コーナー部分で溝が切れる例が多く見られるから，角で周溝が切れることはよいのであるが，北側溝には西側溝のように祭祀土器群や赤色顔料が見られないことである。さらに，北側溝の埋土は地山の黄褐色砂質土に近い土が詰まっており，掘削後に時間を経ずして埋め戻しているらしいことである。ただし，北側と西側の溝が関連するものであることは，たとえ北側溝西端から西側溝西側が攪乱されているといえども，北側溝は西側溝に続くべく曲線を示している。

西側溝状遺構は，主軸を平均約南20°東方向に向けているので，石棺群とは10°前後ずれることになる。遺構は，南側を奈良期の溝状遺構に破壊されているので，本来の長さは不明であるが，溝の南端が細くなっているところから，現状よりさほど長くならないものと考える。遺構は現存長6.8m，最大幅2.4m，最小幅1.1mの大きさで，中央部の幅が最も狭くなっている。深さは，北半と南半もそれぞれ平坦であるが，各部に土壙の凹地があるのと同時に，平面プランで最も幅の狭い位置の床面が浅くなり，溝状遺構を北半と南半に分けている。遺構のプランを検出する際にこの点に注意を払ったのであるが，平面的には両者の新旧関係はつかめなかった。



第 29 図　寺 口 II-17　5 号 石 棺 墓 実 測 図　(1/30)



第 30 図　寺口 II-17 祭祀遺構実測図 (1/30)

ところが，この位置に設定した横断面土層図を見ると，上半と下半を区別する明瞭な線があり，この線こそ一方の床面につながるものであるところから，これを横断面の位置から復原すると北半の床面からつながるもので，第30図の破線のようになる。すなわち，横断面図に現われた線は，南半の祭祀遺構が半分以上埋没した後に北半の祭祀遺構が掘られたことになる。

この北半と南半の遺構は，各々１号・２号石棺墓に対応するところから，発掘時には南半を１号石棺墓祭祀，北半を２号石棺墓祭祀として処理した。

１号石棺墓祭祀遺構（図版７－１，第30図）

溝状土壙内には，多くの土器と鉄器や塊石があるが，規則性やまとまりは認められない。ただ，塊石は埋土上層にしか見られず，鉈もその下面と同レベルから出土している。

土器の出土状態は，大甕は南半上層に多くが散乱し，無傷の完形品は中層と下層にあり，完形に近いものもこれと同様である。

床面には浅い土壙状凹地があるが，これに直接関連する遺物は見られない。

土　器（図版18・19，第31～33図１～14）

大　甕（１）　口径55.8cm，胴最大径79cmの大型甕で，丸くふくらみのある胴部に台形凸帯の２本１組を３対めぐらすのを特徴とする。口縁部は，肥厚させた先端の平坦面に間隔のある板目キザミを施す。同様なキザミ目は，口縁下の凸帯にも見られる。器面調整は内外面ともに粗いハケ目を残すが，凸帯部分のみヨコナデされてハケ目が消える。胎土はくすんだ褐色を呈し，やや粗い砂と細砂を含んでいる。

長頸壺（２）　底部に焼成後の穿孔があるほかは，無傷の完形品である。大きさは，器高11.4cm，口径7.2cmで，凸レンズ状の底部を有する。器面調整は，頸部内面がハケヨコナデ，胴部内面ナデ，頸部外面がタテハケ後ヨコナデし，最後にタテの暗文，胴部上半がヨコヘラミガキ，下半部と底部が粗いハケ目となっている。胎土は赤褐色で細砂を含む。

無頸壺（３）　この壺は扁球形胴部から直接口縁が外反するもので，口径13cm，高さ11cmの大きさ。底部近くに焼成後の穿孔がある。器面の調整法は、口縁内側がヨコナデ，外面はヨコハケの後にタテのヘラ描き暗文，胴部外面がタタキ目をケズリ後さらにヘラミガキ，胴部内面が口縁下をヨコナデ，下半をハケの後にナデている。胎土は，淡褐色で細砂を含む。

壺（４）　これは頸部と下半が接合できないが，図のように復原できる。口径約10cm，高さ約14.5cmの大きさで，丸底を呈する。口縁部があまり屈曲しないで，頸部との区別も明瞭でなく，同様に頸部と胴部の区別もつきにくいものと思われる。器面が全体に荒れていて，調整法は不明であるが，胎土は淡褐色から明褐色で，砂粒を含む。

短頸壺（５）　これも２と同様に，胴部穿孔以外には無傷の壺で，床面から出土している。大きさは，口径13.8cm，高さ19.1cmの丸底壺。球形の胴にはタタキ後に，ヘラケズリ状のタテナデを行うがタタキ目は完全に消えていない。胎土は，淡黄褐色と淡褐色で細砂（石英・金雲母・角

寺　口

閃石）を含む。

台付椀（6～9）　6～8の全形は不明であるが，台部は9に近いところから同類とした。

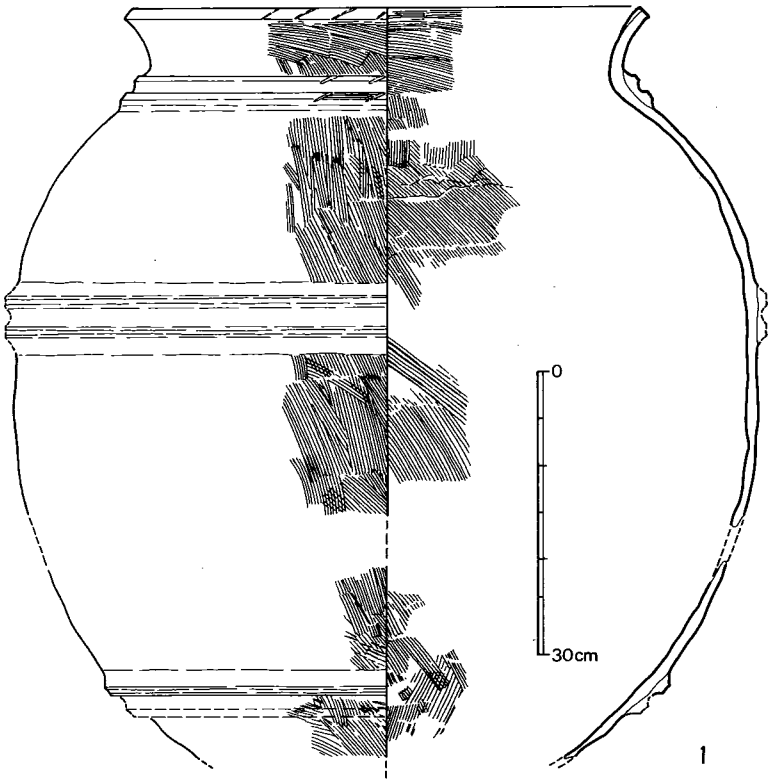
9は口径17.8cm，高さ9.7cmの大きさで，体部に焼成後の穿孔が見られる。これを台付椀としたが，高杯の短脚の一種とすることもできる。台部以外は内外面ともにヘラミガキされるが，外面はタテ，内面はヨコにミガいている。台部内面以外に赤色顔料を塗布した痕跡がある。

高　杯（10～14）　長脚高杯は，2種5個体が出土した。1種は10の脚部で，丹塗磨研高杯。他の1種は11～14で，脚部は柱状部の太さがほぼ同一で，ゆるやかに裾部に移る。裾部はわずかに内湾して広がり，先端の両角が同一に多少丸味をつける。

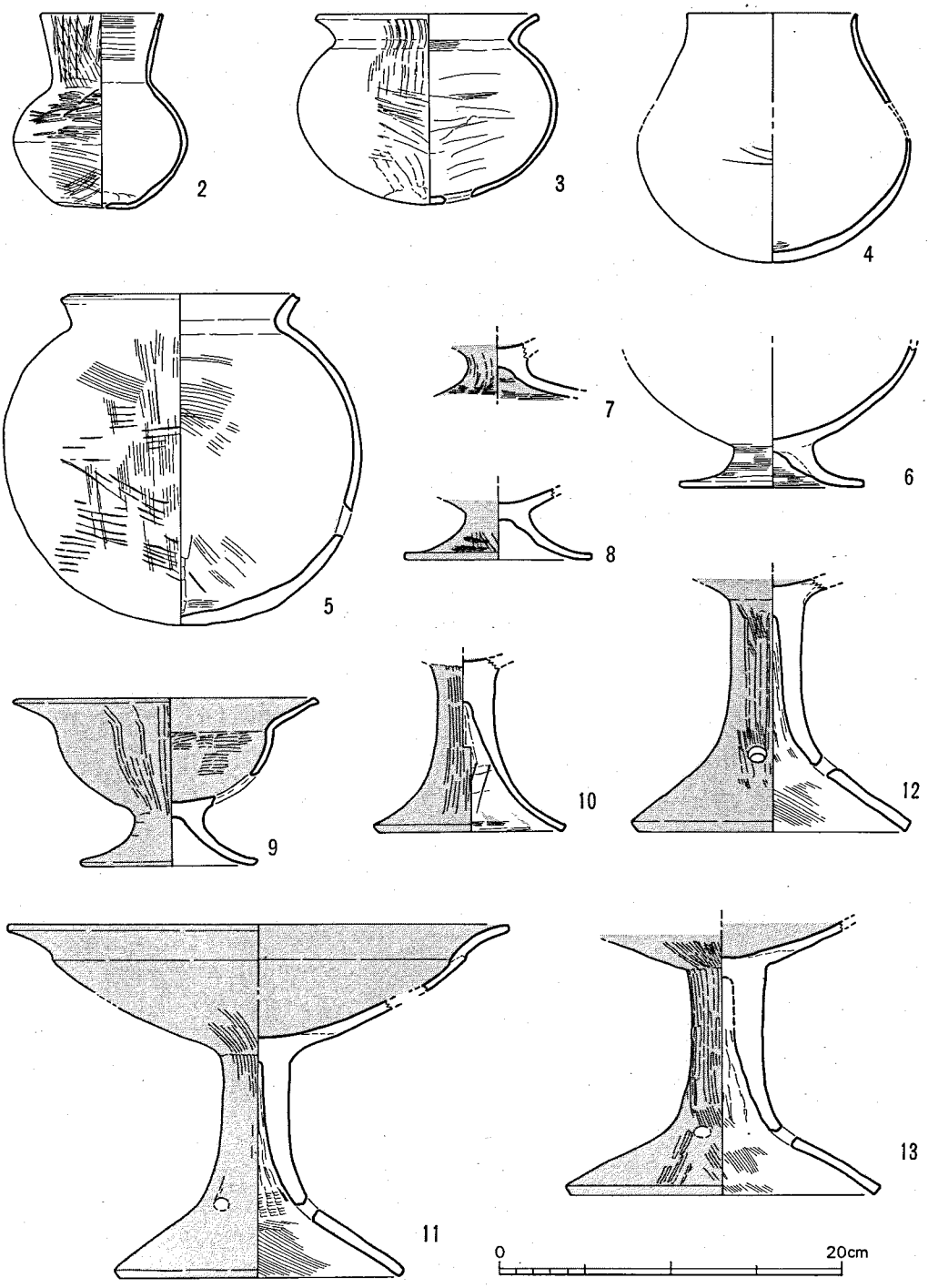
11は口径29.2cm，高さ約20.5cmの大きさで，器面の脚部内側以外はミガキが行われているようだが，不明なところもある。胎土は赤褐色から褐色を呈し，細砂（石英・金雲母）とやや粗い砂も含む。11～14ともに脚部の穿孔は3個で，柱状部内面はしぼりのままである。

鉄　器（図版17－2，第25図5）

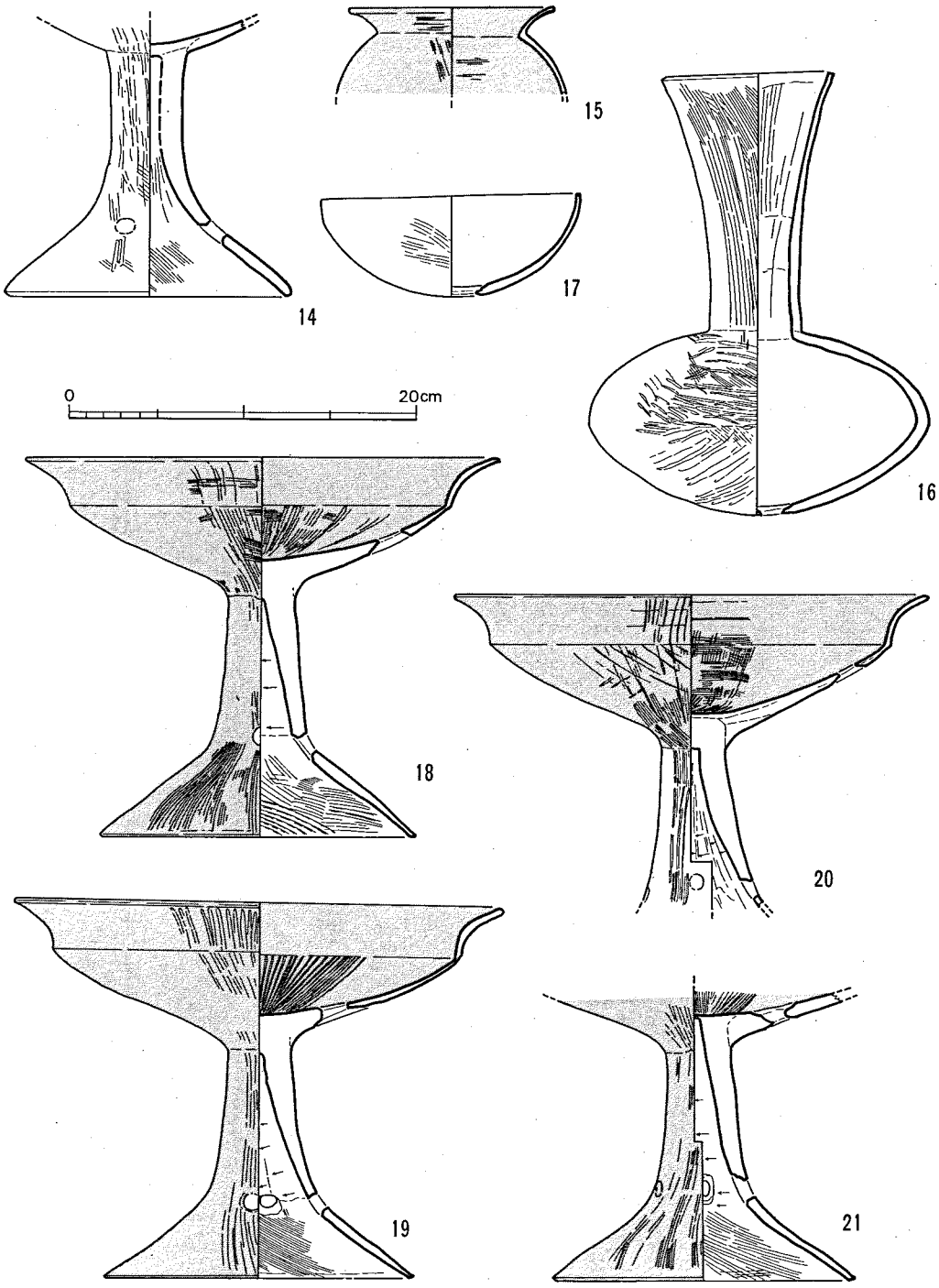
鉄　鉈（5）　両先端の一部を古く欠損しているが，原形をうかがえる。現存全長10.7cm，幅0.9



第 31 図　1号石棺墓祭祀遺構出土土器実測図①（1/8）



第 32 図　1 号石棺墓祭祀遺構出土土器実測図②（1/4）



第 33 図　1・2 石棺墓祭祀遺構出土土器実測図 (1/4)

cmの大きさで，全体に丸く反る。刃部には鎬を有し，割合直線的に尖がる。尻端は丸くなるようで，柄の屈曲は二次的なものか。

2号石棺墓祭祀遺構（図版7・8－2・3，第30図）

この祭祀溝状遺構にも多くの土器が見られるが，1号と違い塊石も1個であるし，土器にもまとまりがあって散乱しない。土器は，遺構南側中層に細頸壺1個が孤立し，その下層の床面近くに赤色顔料とともに無頸壺が散乱する。北側では，上層に大形壺が横たわり，その北に高杯4個と椀が集積されている。

2号遺構が1号と違っている大きな特徴は，西壁に横穴式石蓋土壙が存在することである。この横穴式石蓋土壙は，蓋石に5枚の結晶片岩を使用し，さらに1枚を南端に蓋石方向と直角に立てている。土壙内は，長さ164cm，幅70cmの大きさの半横穴状を呈す。これは埋葬遺構と思われるが，副葬品や赤色顔料は見られない。

2号祭祀遺構は，単にこの横穴式石蓋土壙墓の祭祀とも取れるが，それでは1号祭祀の説明ができなくなる。この場合は，横穴式石蓋土壙墓も含めて，鏡や玉類などを副葬した2号石棺墓に関連するものと考える方が妥当であろう。

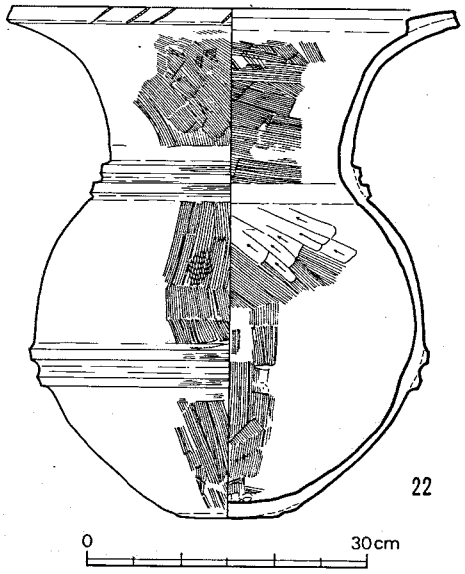
また，石蓋の南端付近上層で小形鉄斧が出土したが，紛失した。

土　器（図版19，第33・34図15～22）

無頸壺(15)　床面に赤色顔料が散布する中から出土したもので，胴下半分を欠損している。器壁が薄手のもので，口径12cmの大きさ。口縁内面はヨコミガキであるが，他の内外面は細かいハケの上をナデ調整している。胎土に細砂を含み，赤褐色から褐色を呈す。内外面に赤色顔料を塗布する。

細頸壺(16)　口縁端を欠損するが，その破片の一部は埋土下層から出土した。口径10cm，高さ25.2cm，胴径19.6cm，頸部長14.5cmの大きさで，胴は扁球形の丸底を呈す。頸部外面は細かいタテハケの後にミガキ状のナデ，胴部は細かいヨコハケの後ヨコミガキ調整を行っている。胎土に細砂をわずかに含むが良質の精製粘土で，淡黄褐色を呈す。底部に焼成後の穿孔あり。

椀(17)　径15.1cm，高さ5.8cmの大きさで，丸底。調整法不明ながら，ハケ目が残る。胎土に細砂(石英・金雲母)を含む，赤褐色。底部に焼成後の穿孔がある。



第 34 図　2号石棺墓祭祀遺構
出土土器実測図②（1/8）

寺　口

高　杯(18～21)　この4点の高杯はまったく同形式のもので，杯部立上りの反りと長さ，脚部柱状部の直線的広がり，穿孔部での屈曲，直線的裾の広がりと先端の尖がりは共通する特徴となっている。杯部の内外面には，細かいハケの後に中心から放射状の暗文風のヘラミガキを行い，脚部はタテミガキで仕上げている。脚部内面柱状部はヨコケズリ，穿孔以下はハケ目調整されている。脚部穿孔は，4点ともに4カ所にあり，焼成後の穿孔は杯部にあり，内側から穿孔している。4点ともに赤色顔料塗布。

18は，口径27.2cm，高さ21.8cm，脚裾径18.1cmの大きさ。胎土に細砂(石英・金雲母)を含み，褐色を呈す。

19は，口径28.3cm，高さ21.7cm，脚裾径17.9cmの大きさ。胎土に細砂（石英・金雲母）を含み，明褐色を呈す。

大　壺(22)　埋没時は完形であったと思われるもの。大きさは，口径47.9cm，高さ53.9cm，胴最大径41.4cmで，大きく広く口頸部と球形胴部を特徴とする。口縁上部の粘土帯貼付と台形凸帯の2本1組も特徴の1つとなる。器面調整法は，内外面にハケ目が著しいが，さほど粗いハケ目ではなく丁寧である。口縁端の板目キザミは間隔が粗く，底部は平底であるが，わずかに凸レンズ状となりつつある。胎土に細砂(石英)を含み，明褐色を呈す。　(柳田)

(3)　住居跡と包含層の遺物

寺口II-17地区の住居跡は，調査区の東半分に集中しているが，これはこの地区が東側に傾斜し，西側は多く削平され，東側ほど保存状態が良いためで，西側にあった住居跡は消滅したとみてよい。住居跡は7軒分あるが，古墳時代のものに限られる。

①　住居跡

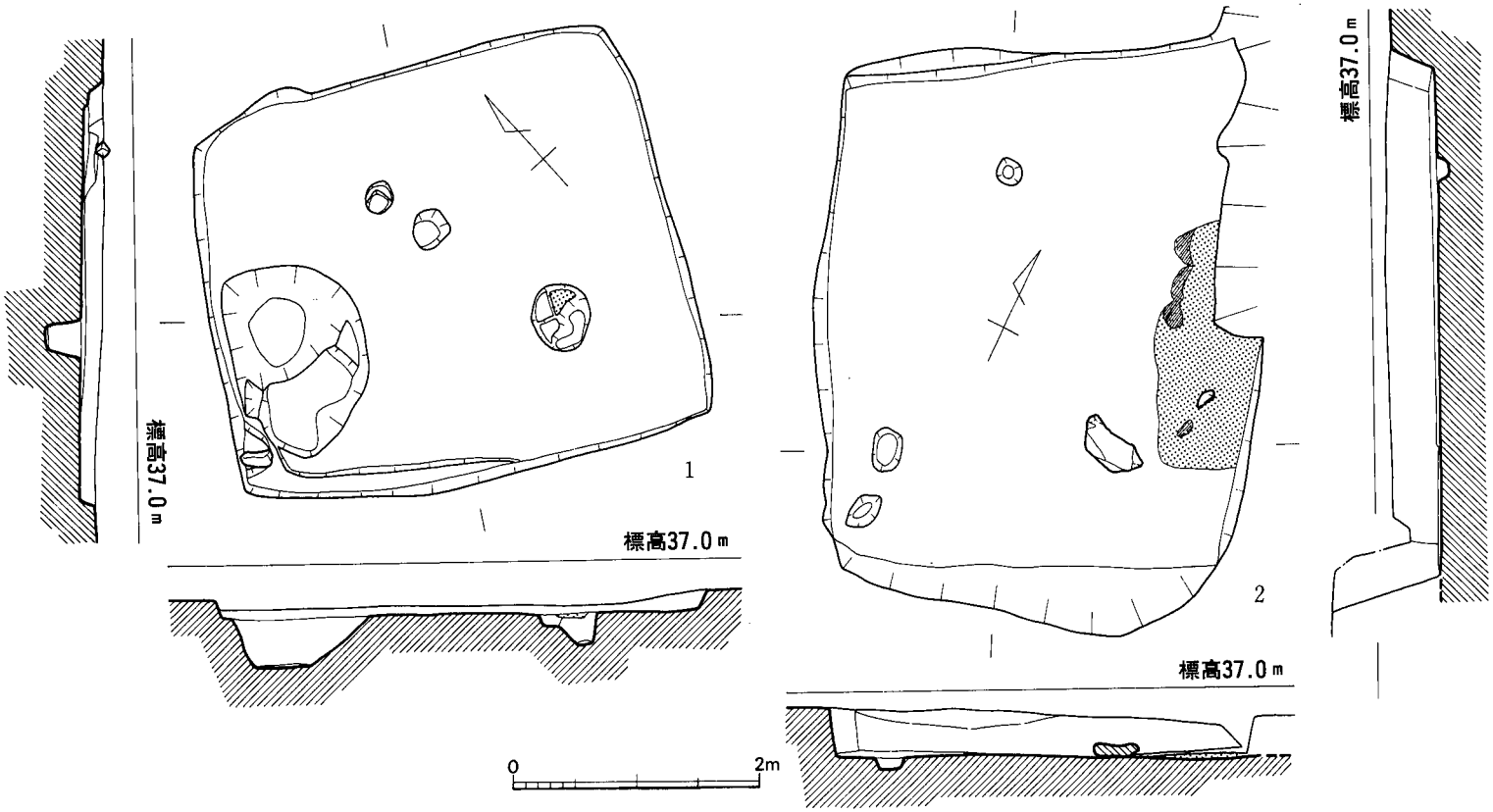
1号住居跡（図版10－2，第35図）

1号は住居跡群の中央にあり，この地区唯一の全形のわかる竪穴式住居跡。住居跡は，3.9m×3.4mの大きさの長方形で，柱穴らしきものが中央付近に1個ある。住居内には，東辺に貯蔵穴状のものがあるが，住居跡より古い遺構である可能性があり，遺物がないので不明。南東側のピット内には焼土が見られるが，炉とは考えられない。

住居跡の埋土内には，多量の土器と鉄鏃が東側から流入したかたちで発見されたが，一時期に埋没したものである。　(柳田)

土　器（図版21，第36・37図1～11）

甕(1～9)は，長胴のものと丸胴のものがある。丸胴といってもナデ肩で，やや長胴ぎみの傾向がみられる。外面には肩部分に横ハケ目を整然と施している。8・9は，肩と胴の境目にそ



第 35 図　1・2号住居跡実測図　(1/60)

れぞれヘラ描き沈線文，櫛描き波状文がみられる。胴中位から底部にかけては縦方向のハケ目が施されている。内面は頸部の少し下のところからヘラケズリをしている。上～中位は横方向，下位は縦方向である。また4には胴中位に焼成後の穿孔がみられる。胎土には石英・金雲母などの細砂，赤褐色粒子が含まれており，色調は淡黄褐色～明褐色を呈す。口径は14.0～19.0cmを測る。10は口縁が2段になった鉢形土器で，復原口径16.0cmを測る。色調は赤褐色を呈す。胎土は精良で石英・金雲母などの細砂を含む。胴部外面にヘラケズリがみられる。他はナデで仕上げている。11は手捏土器である。胎土は精良で，細砂を含む。色調は淡褐色を呈す。復原口径は5.0cmを測る。　（荒武）

鉄　鏃（図版17-3，第46図1）　鉄鏃は，茎の一部を欠損した現存全長5.5cm，最大幅1.5cmの小型のもので，身と茎の区別がつきにくいもの。

ガラス小玉（図版16-3，表1-1～9）　ガラス小玉は，住居内の床面と埋土内から土器群とともに9個出土した。住居外西側の玉類と関連するものであろう。小玉は，大きさが，5.7mm×5.35mm～2.9mm×2.3mmまでのものがあり，色はコバルトブルーが2個含まれている。

2号住居跡（図版11-1，第35図）

この住居跡は南東にあったためか，上部をあまり削平されておらずに壁面が高く残っていた。しかし，東側は削られ，南側は道路下になるため調査できなかった。西側壁面の高さが40cm残った方形竪穴住居跡であるが，規模は不明。住居床面には，確実に柱穴といえるものがなく，仕事台ともいえる大きな砥石が置かれている。

住居跡は火災にあったらしく，炭化材や焼土が床面に多いが，遺物は少ない。　（柳田）

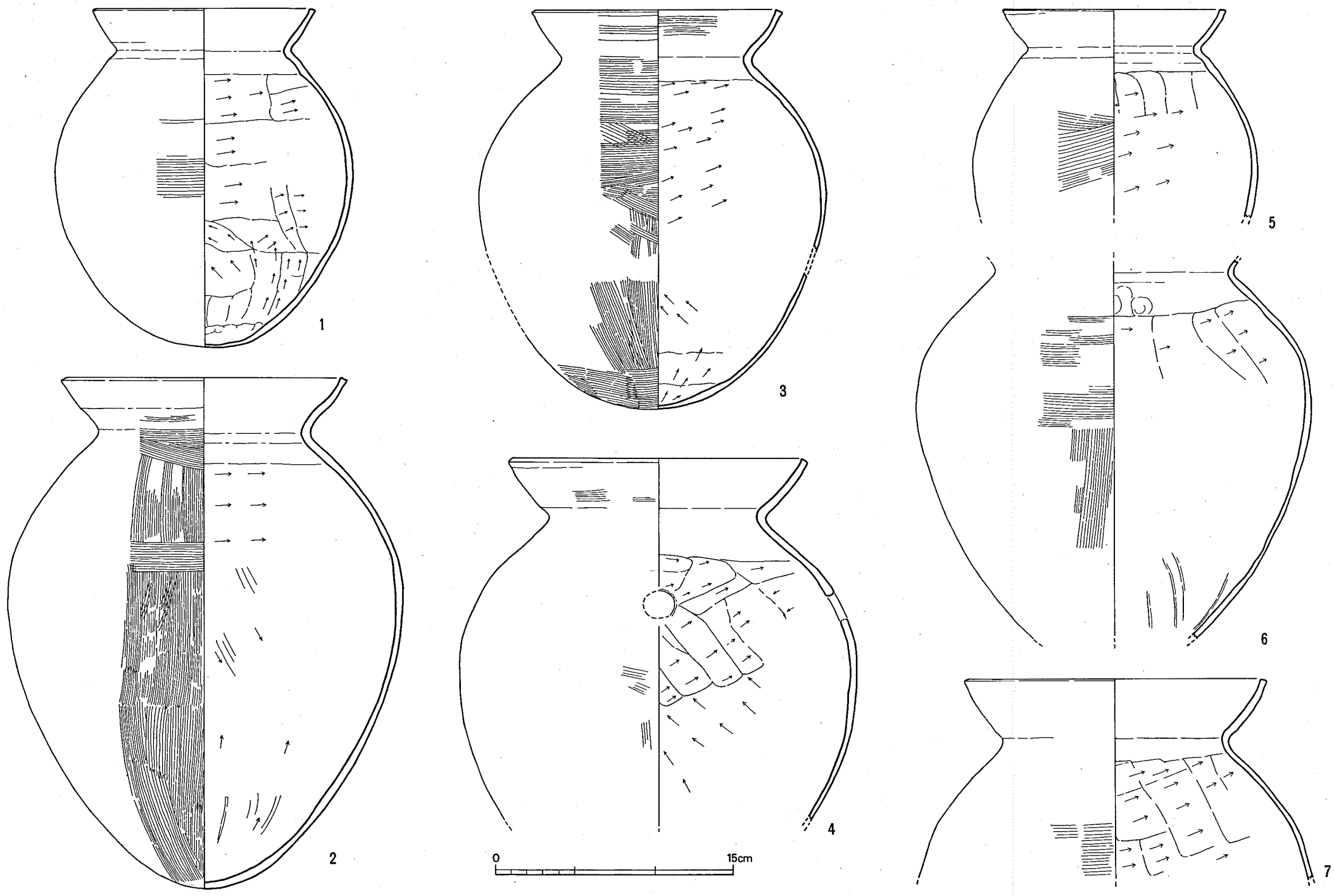
土　器（図版21，第36・37図12～16）

15・16ともに布留式土器の特徴を持つ甕の口縁部である。両方とも器面が荒れているため，はっきりしないが，外面に横ハケ目，内面は頸部の少し下から横方向のヘラケズリを施す。胎土には石英・金雲母などの細砂・赤褐色粒子を含み，色調は淡黄褐色・明赤褐色を呈す。復原口径は18.0cm・20.0cmである。12は内外面にハケ目を施す平底の小鉢。復原口径・底径はそれぞれ7.6cm・4.0cmを測る。胎土に細砂（石英・金雲母），赤褐色粒子を含んでいる。13も鉢形土器で，外面の口縁近くはナデ，体部中位以下はケズリの後ナデを施している。内面はヘラナデ。胎土に細砂を含み，色調は，外面が淡褐色～灰褐色，内面が黒灰色を呈す。復原口径は14.0cmである。7は2分の1以下の破片である。台裾の復原径は13.0cmを測る。胎土は精良，色調は明赤褐色を呈す。上部には鉢形土器が付くものと思われる。

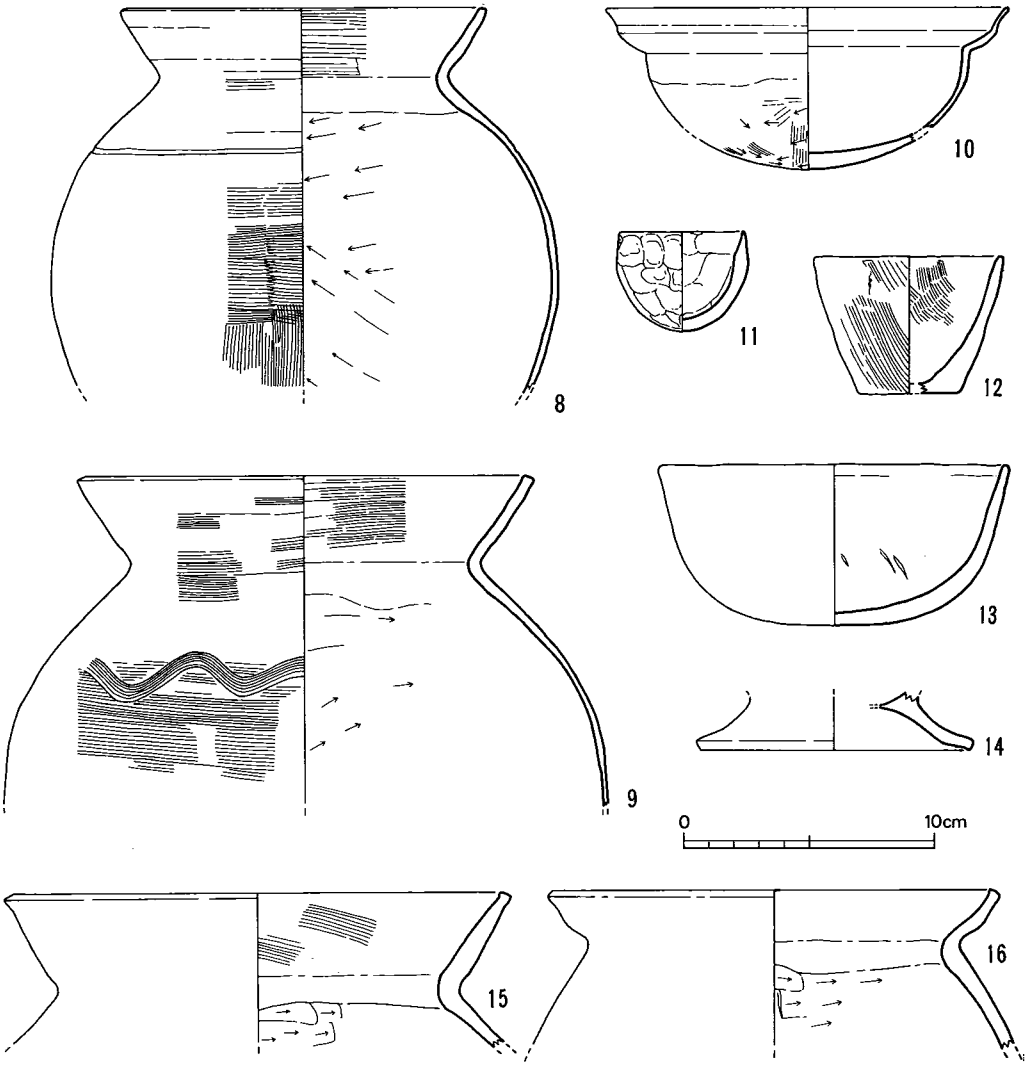
1号住居跡，2号住居跡の土器は，前者がやや古い傾向にあるが，ほぼ同時期とみてよく，布留式の古い時期（IIa）におかれるだろう。　（荒武）

3号住居跡（図版11-2，第38図）

調査区の東端にあり，半分以上が失われている方形竪穴式住居跡。住居内には，柱穴は見あ



第 36 図　寺口 II-17　1 号住居跡出土土器実測図①　(1/3)



第 37 図　1・2号住居跡出土土器実測図（1/3）

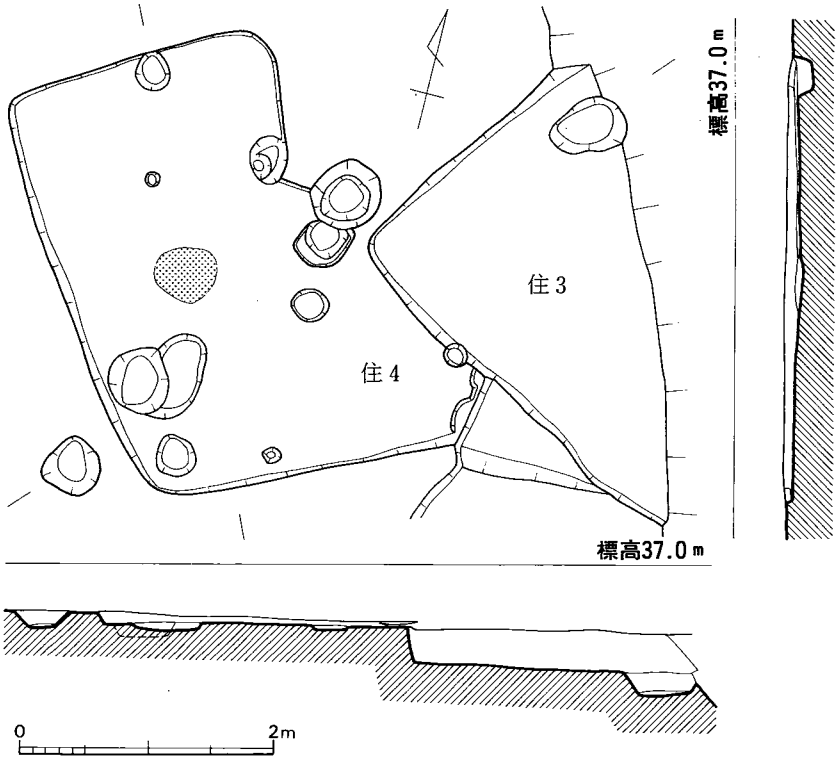
たらないが，北側壁寄りに貯蔵穴状の土壙がある。4号住居との新旧関係は不明。

住居内埋土には，かなり床面から浮いて土器が出土した。

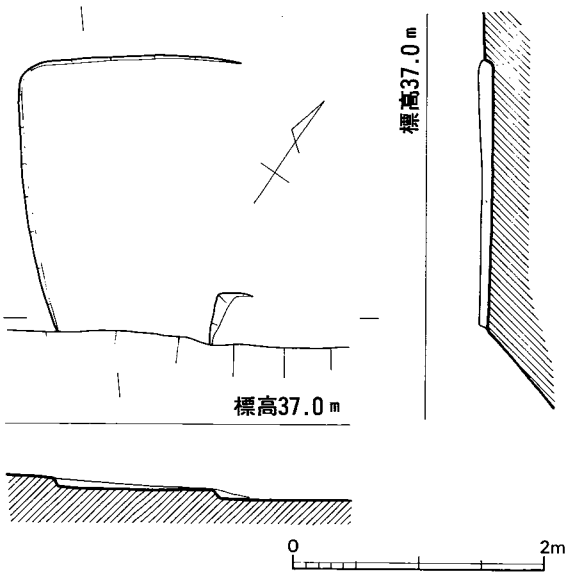
土　器（図版22，第40図17～21）

甕(17～19)　この3点は，大きさの大小はあるが同形態のもので，球形胴部をもつ。口縁部は直線的に立つが，先端のわずかな内湾は布留式土器の名残である。器面調整は，方向の一定しない粗いハケ目となり，19は内面ヘラケズリの後でハケ目調整を行っている。

坩(20)　口径10.7cmのもので，器壁は厚味があり，粗いハケ目調整も見られる。



第 38 図 3・4号住居跡実測図 (1/60)

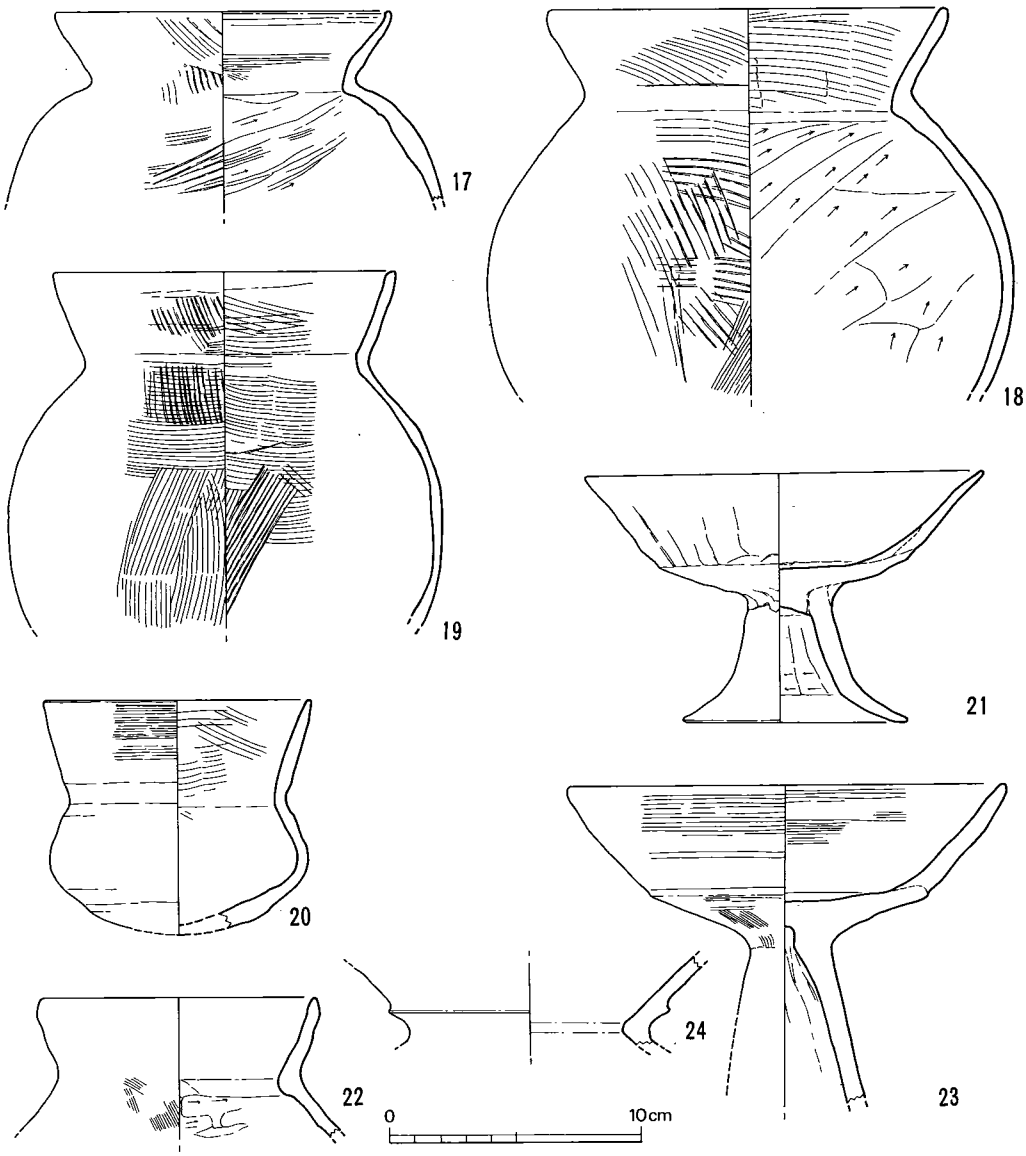


第 39 図 5号住居跡実測図 (1/60)

高 杯(21) 口径16cm,器高9.9cmの大きさで，脚部が低い。杯部と脚部の接合はソケット状に挿入している。胎土は明褐色で細砂(石英・金雲母)を含む。

4号住居跡 (図版11－3， 第38図)

3号住居跡の西側に重複して検出されたものであるが，住居跡床面の約半分がかろうじて検出されたもので新旧関係は不明。住居の大きさは，南北の一辺が3.5mで，東西方向は不明。住居床面には，小ピットが数個あるが柱穴となりうるものは不明。西側中央付近の床面に焼土があるが，床面は掘られていない。



第 40 図　3・4号住居跡出土土器実測図（1/3）

住居の床面には，少量の土器片があるが，住居跡検出中に住居上面で高杯(23)が出土。

土　器（図版22，第40図22・23）

甕(22)　口径11.3cmの小型で，口縁は内湾して立ち，先端は丸味がある。

高　杯(23)　口径17.6cmのもので，杯部に厚味があり，脚部は中ぶくらみの高いもの。

5号住居跡（図版12－1，第39図）

大溝の北東側に重複しているが，かろうじて床面の一部が残っているだけで，大溝との新旧

寺　口

関係は不明。出土品もないので，時期も不明であるが，住居跡とするのも問題がある。

6号住居跡（図版12−2，第41図）

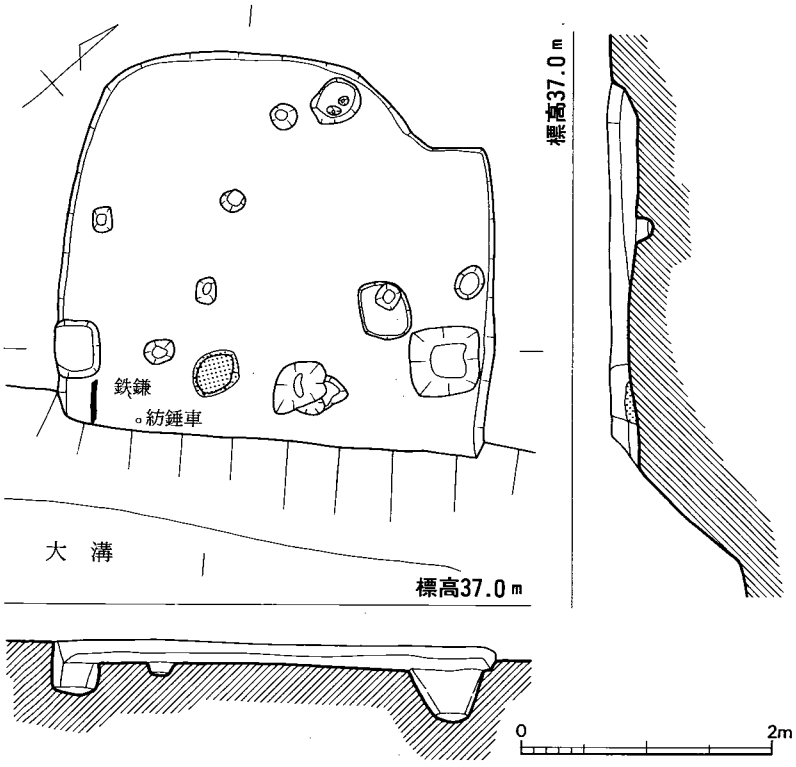
住居跡は大溝と重複しているが，新旧関係が不明瞭なために大溝を掘ってしまった。6号住居跡自体が，東西両側の二辺は明瞭に検出できたが，南北両側は不明瞭な部分が多い。住居跡は東西幅3.5m，南北幅3.1m以上の大きさで，壁面の最も残りのよいところで，深さ16cmしか残っていなかった。住居内の柱穴も不明だが，東壁に近い方形穴は住居跡より新しく，南西壁にある方形穴は住居跡より古い可能性がある。

住居内からは，床面より多少浮いた同レベルで，少量の土器片と鉄鎌・鉄刀子片・瓦質紡錘車・陶質土器片が出土した。また，住居跡検出時と住居内小ピットからも陶質土器片が出土している。

土　器（図版20−2・22，第43図25〜28）

甕(25・26)　25は床面から，26は上層から出土したもので，25は球形胴の肩部に円形刻文をもち，26は内湾した口縁部とその先端が突出するのが特徴。25の胎土は淡黄褐色で，やや大きな石英粒と細砂を多く含み，26は淡褐色で細砂(石英・金雲母)を含む。

高　杯(27)　住居跡検出時に出土したもので，住居跡に直接関係するものではないが，住居跡



第 41 図　6号住居跡実測図（1/60）

埋土上層のもの。直線的な脚部で，淡褐色の胎土に細砂を含む。

鉢(28)　口径17.6cmの大きさの粗製品で，外面に粗いハケ目調整が残っている。

陶質土器(第44図2・6～9)　これら5点の資料の中で,確実に6号住居に伴うものとして取り上げたのは,この中に含まれる2片だけである。この2点は，1片は床面近くで瓦質紡錘車の横にあり,他の1片は住居跡内北側の小ピット内で出土した。しかし,他の破片は6号住居跡検出時に出土したものである。したがって,第44図4・5の破片も2と同一個体の破片と思われる。

2は壺と思われる胴部下半の破片で，縄蓆文タタキの後にヘラ描き沈線をめぐられている。縄蓆文は，胴中央は縦方向であるが，最下沈線から下の底部はタタキ目が交差している。縄蓆文も多少つぶれているから，タタキの後に多少ナデるのであろう。内面にはタタキ目は残らず，完全にナデられている。

胎土には割合大きな石英粒を含み，内外面ともに灰色を呈するが，外面に灰褐色の部分がある。質は7～9に比較すると軟質である。6も同一個体である。

7は硬質灰青色土器であるが，器形は鉢であろうか。口径約12cmに復原できるが小片で，口唇部のみヨコナデ，それ以下はナデ調整されている。胎土に細砂を含む。

8は硬質灰青色土器であるが，胎土内部は茶褐色を呈し，細砂を少量含む。口径10.5cmの小壺で，口唇部と体部内面はヨコナデであるが，内面の口縁下にヨコのヘラケズリ状のところがある。体部外面はナデられている。

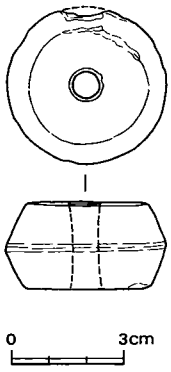
9は硬質灰黒色土器で，肩部と内部底面に灰がかぶっている。胎土にはほとんど砂粒を含まず，内部内側の半分のみ赤茶色をしている。胴最大径約9cmの甕で，体部内外面はヨコナデ，外底面は静止ヘラケズリである。

紡錘車(図版20-3，第42図)　径4.2cm，厚さ2.3cm，孔径0.75cm～0.9cm，重さ44.8g＋αの瓦質紡錘車。外面は灰褐色，内部は明るい茶色の軟質で，胎土に細砂を少量含む。朝鮮半島に見られる算盤玉形紡錘車である。

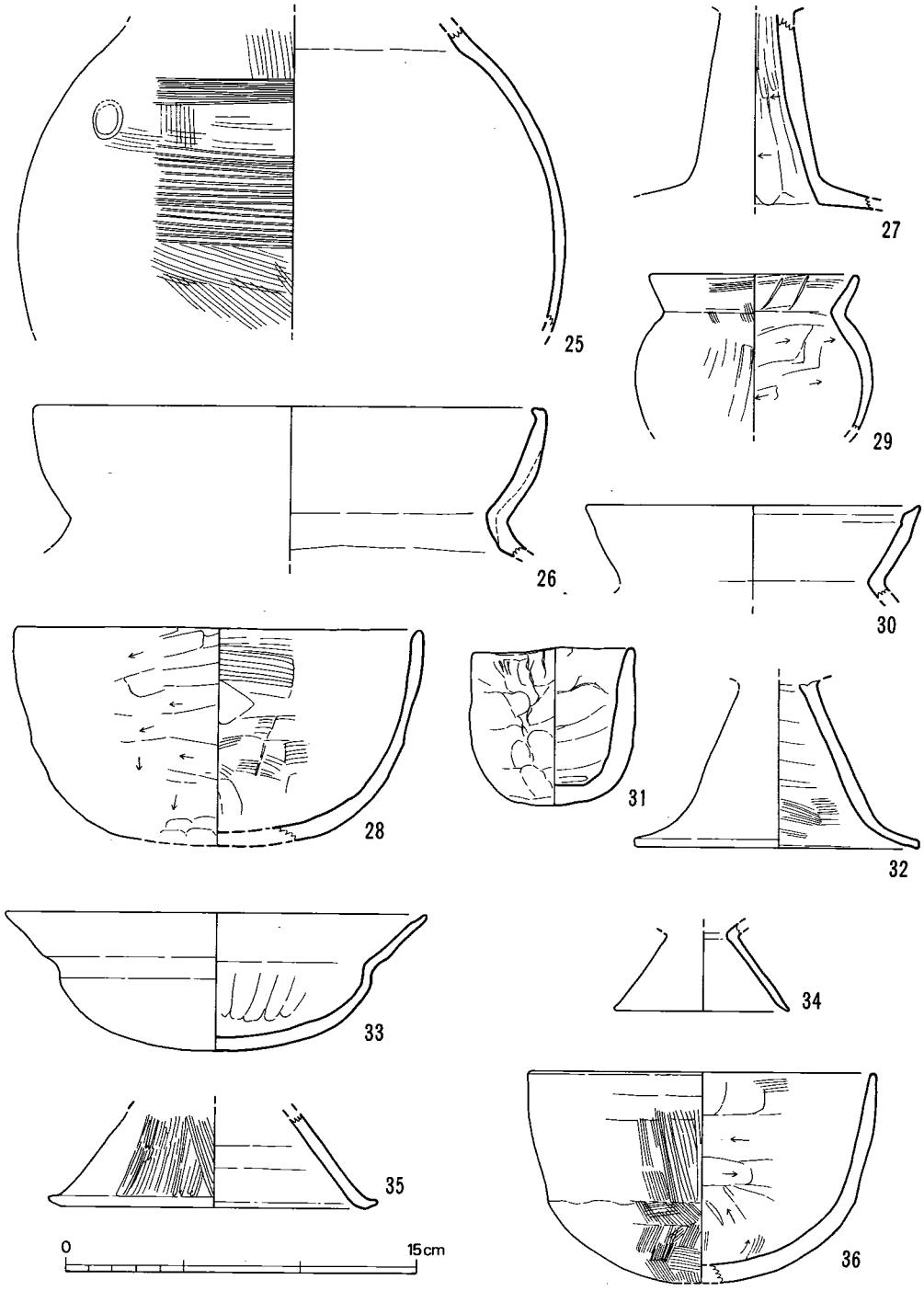
鉄　器(図版17-3，第46図2・3)

鉄　鎌(2)　床面から出土した完形品で，長さ27.5cmの大形鎌。鎌は，先端が屈曲し，刃部中央付近が幅が狭くなっているところから，かなり使用したものと思われる。刃部最大幅2.9cm，厚さ0.5cmある。身の片面に布付着痕がある。

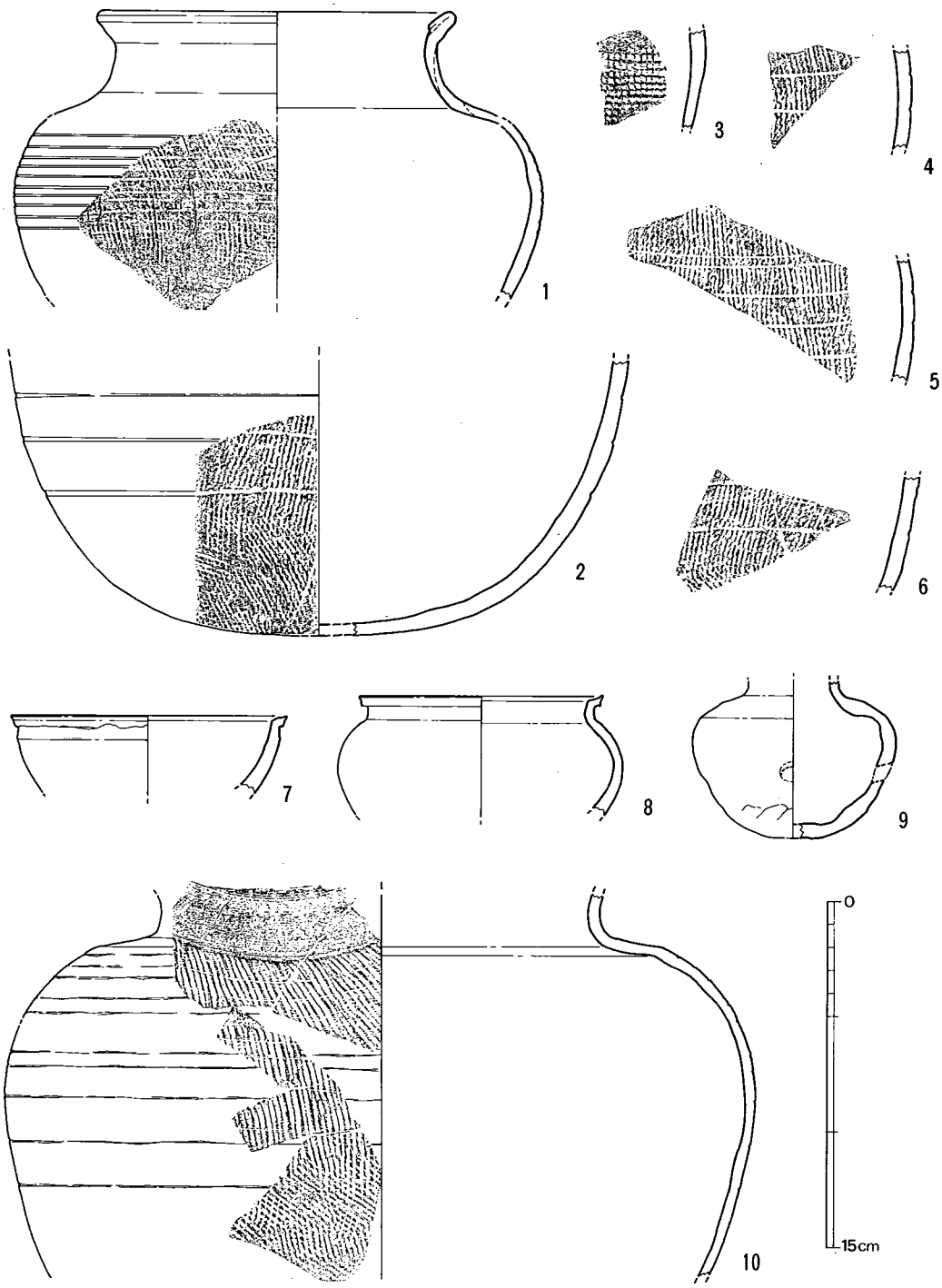
刀　子(3)　現存全長7.8cm，身幅1.4cmのもので，身の大半と茎の一部を欠損している。



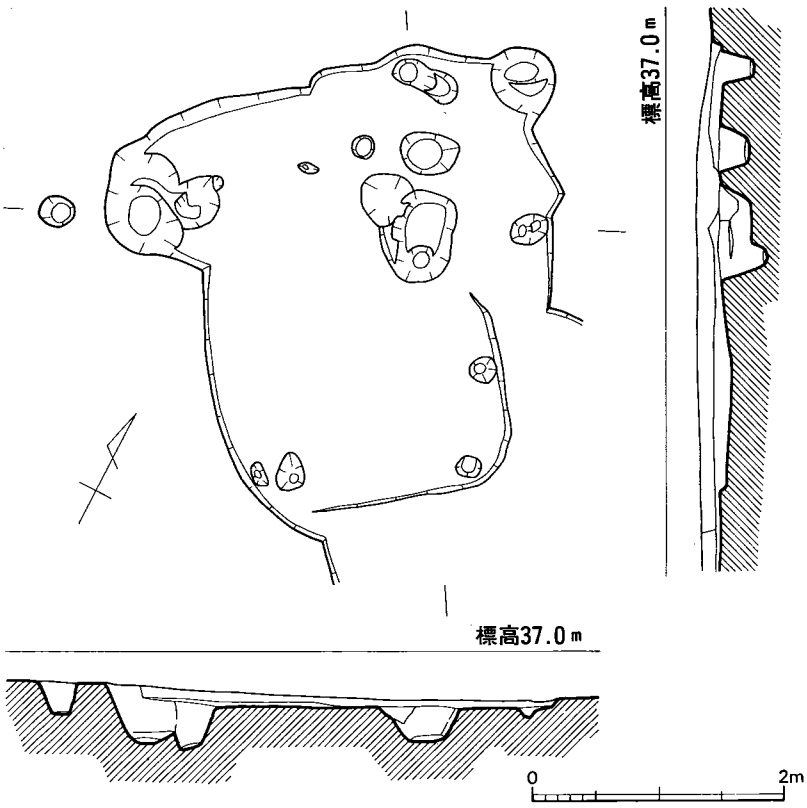
第42図
6号住居跡
出土瓦質紡錘車
実測図(1/2)



第 43 図 6～8 号住居跡・包含層出土土器実測図 (1/3)



第 44 図　II-17 出土瓦質土器・陶質土器実測図 (1/3)



第 45 図　7号住居跡実測図（1/60）

7号住居跡（図版12－3，第45図）

6号住居跡の北西側にありこれより古いものであるが，確実に住居跡としてのプランは検出できなかった。これは，住居跡ではなく土壙状遺構数個の重複である可能性が強い。

土　器（第43図29）

小　甕(29)　口径約9cmの破片で，遺構検出時に出土しているので，直接住居跡に関係あるとはかぎらないが，27の高杯や3層出土の陶質土器片と関連するものであろう。

鉄　器（図版17－3，第46図4）

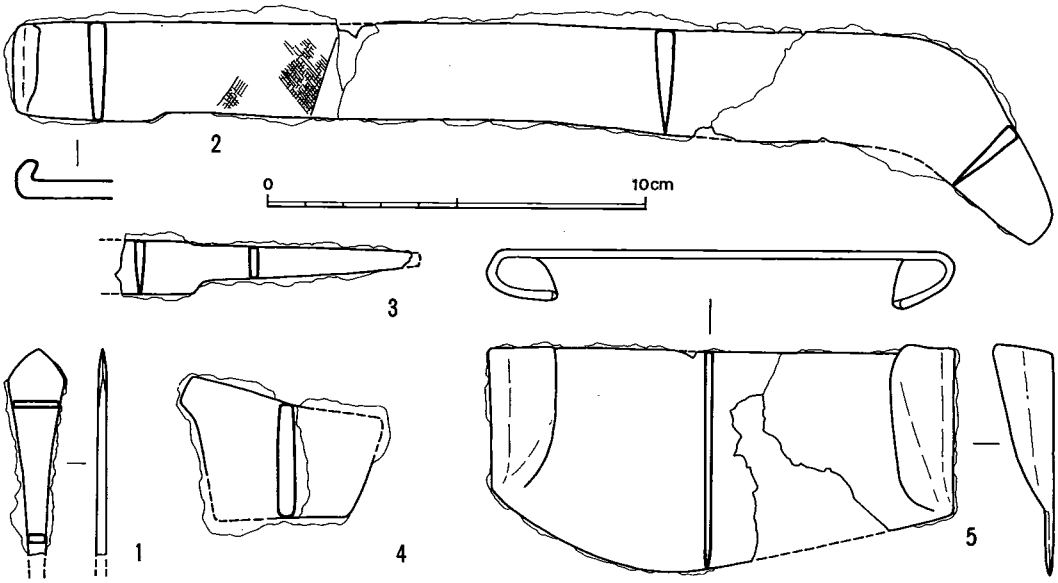
これは板状の鉄片で，製品であるかどうか不明。厚さ5mm前後のもの。

8号住居跡（図版10－1，第11図）

これも住居跡とするには疑問のあるもので，3号住居跡と重複し，これよりは古い。

土　器（第43図30～32）

甕(30)　遺構床面から出土したもので，口径14.5cmの大きさ。口縁端部が内側に突出するところは典型的な布留式土器である。



第 46 図　住居跡他出土鉄器実測図 (1/2)

手捏土器(31)　口径7.2cm，高さ 7 cmの大きさで，指圧痕が著しい。

高　杯(32)　遺構埋土上層から出土した脚部で，ラッパ状に裾が広く，裾径12.3cm。

② 包含層の遺物（図版22，第43・46図）

土　器（第43図33～36・47図37）

ここで紹介するのは，性格の不明な遺構と表土直下の第 3 層や攪乱穴内の遺物である。

鉢(33)　S 622，W 0 の 3 層出土で，遺構は検出できなかったもの。口径13.2cm，高さ5.9cmの大きさの土師器。

器　台(34・35) 34は中世の 1 号土壙上層，35は 2 号土壙付近 3 層で出土した鼓形器台。

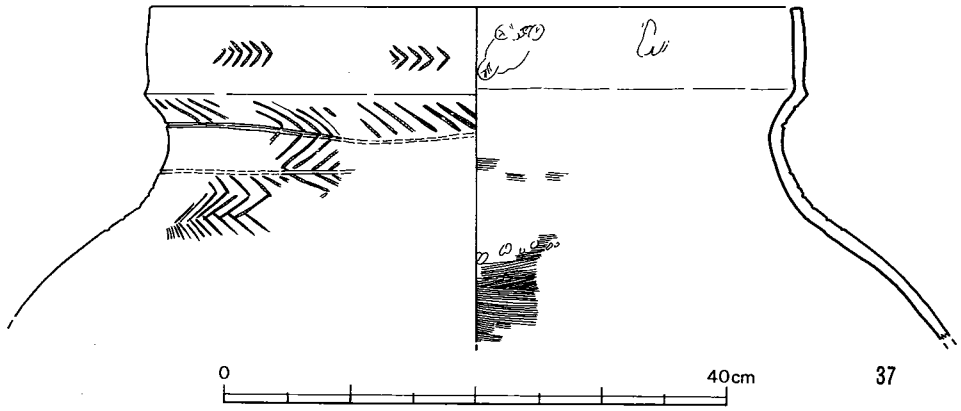
椀(36)　調査区内の表土直下に含まれていたもので，口径15cm，高さ 9 cmのもの。弥生終末から古式土師器に伴うもの。

大形甕(37)　6 号住居跡の西側 3 層から出土したもので，遺構は検出されなかった。口径52cmの大きさで，直立した二重口縁と口縁から頸部の板目押しの羽状文が特徴。

陶質土器（図版20-2，第44図 4 ・ 5）

甕(4・5)　この 2 片は同一個体と思われるが，4 はS 624，W 2 の 3 層，5 はS 624，E 2 の 3 層から出土している。この 2 点は縄蓆文や沈線の具合から 6 号住居跡出土のものと同一個体と思われる。

壺(10)　石棺墓祭祀土壙西側の攪乱穴から出土したもので，共伴関係や時期は不明。



第 47 図　包含層出土土器 ② (1/6)

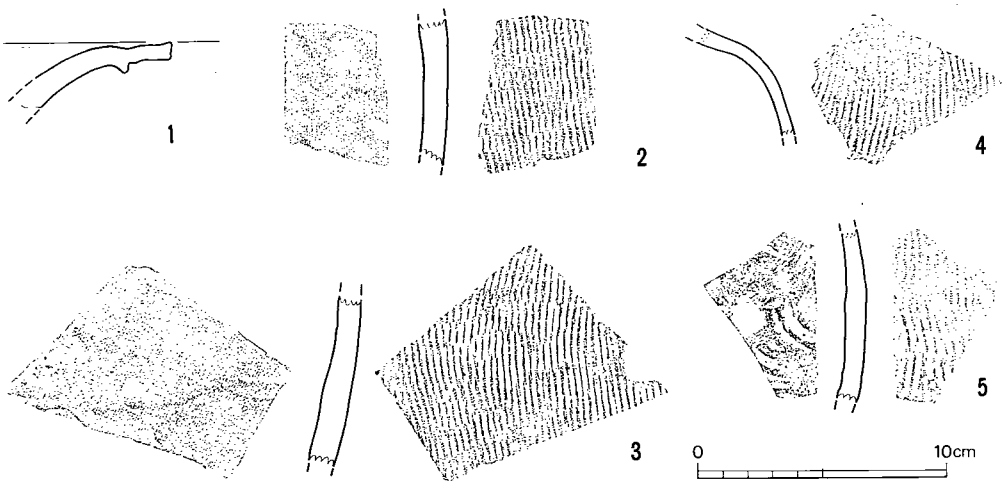
硬質灰色土器で，胴部には平行線タタキ目を残し，胴中位以上に細い沈線をめぐらす。胴下半のタタキ目は交差する。頸部の内外面はヨコナデであるが，胴部内面はナデ調整され，タタキは残らない。胎土には，細砂をわずかに含み，内部まで同一色。

須恵器（図版20-4，第48図）

大　甕（1～3）　1は口縁で，先端近くの外面に三角凸帯をめぐらす。硬質灰色で，胎土に細砂（石英・長安）を含む。

2・3は，同一個体と思われるが，胎土にほとんど砂粒を含まないので1とは別個体。外面に平行タタキ目を残すが，内面の同心円タタキ目は，ケズリ状のナデ調整でわずかにその痕跡を残している。外面は灰黒色であるが，内部と内面は灰色の硬質。1～3は石棺祭祀土壙西側の攪乱穴内出土であるが，古式須恵器である。

甕（4・5）　この2点は小形甕の破片と思われるが別個体。4はS628，E12の3層から出土し



第 48 図　II-17 出土須恵器実測図 (1/3)

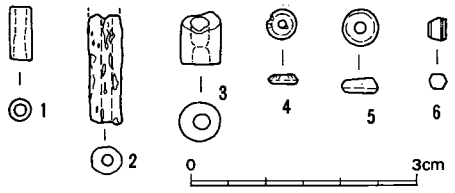
た肩部の破片。5はS628，E4から出土した胴部の破片で，5は内側に同心円のタタキが残っている。

鉄　器（図版17-3，第46図5）

鉄鋤先（5）　上記陶質土器と同じ攪乱穴から出土したもので，ほぼ完形に接合できた。長さ5.8cm，幅12.4cmの大きさで，刃先に丸味のあるのが特徴。時期的には，弥生終末から5世紀前半のものである。これは完形品であったと思われるし，攪乱されている近くの遺構といえば，1号～4号石棺墓しかないので，石棺墓の副葬品の可能性もあり，同時期には今回の報告にある堺I-6の甕棺墓の棺外にも供献されている。

玉　類（図版16-3，第49図2～6，表1）

これらの玉類は，1号住居跡外西側地区に集中して出土したもので，遺構の検出できない第3層から，下部の不整形土壙状遺構内に出土したもので，布留古式土器（IIa式）の細片を伴っていた。



第49図　II-17 出土玉類実測図（実大）

管　玉（2・3）　2はガラス管玉で，うす青緑色を呈すが，風化して多数の小孔が生じている。現存長14.5mm，径4.1mm，孔径1.6mmの大きさ。

3は，にぶ緑色の碧玉管玉で一方を古く欠損している。現存長6.55mm，径5.25mm，孔最大径2.45mmの大きさで，両側穿孔している。

ガラス小玉（表1）　この地区から57個のガラス小玉を発見できたが，このうち半透明スカイブルーが34個，コバルトブルーが23個ある。大きさは，最大で6.6mm×4.4mm，最小で2.3mm×1.95mmの幅がある。

臼　玉（4・5）　2個の滑石臼玉が含まれていたが，扁平な算盤玉形のものである。

水　晶（6）　極小の黒水晶で，実際はうす茶色がかっている。別に穿孔もされていないが，玉類が出土する中に含まれているところから，仲田I-16の水晶原石（『三雲遺跡』II）のように無関係ではなかろう。大きさは，長さ2.95mm，径2.5mm～1.95mm。　（柳田）

石　器（図版16-2，第50・51図）

打製石鏃（1～3）　1は大溝中層から出土した安山岩製の長二等辺三角形を呈す平基式。端部を僅かに欠失するが，長さ5.5cm，幅1.55cm，厚さ6mmの大きさで重量3.7gを測る。基部側は扁平になる。2は大溝上層から出土した黒曜石製の二等辺三角形を呈し長脚の凹基式。片脚と端部を欠くが現存値で3.6cm，重量1.7gを測る。全面に調整剥離の及ぶCla類。3は祭祀遺構内から出土した黒曜石製の駒形を呈す凹基式。長さ1.9cm，幅1.45cm，厚さ3.3mm，重量0.8gの完形だが，不定形の剥片を素材とし腸抉の小さなC'2a類。

削　器（4～6）　4は発掘区中央部東寄り第3層出土の黒曜石縦長剥片を素材にする削器。

表1　寺口II-17出土ガラス小玉計測表

(単位mm)

No.	出土遺構	径	厚	孔径	分類	色	備考
1	1号住居内床面	3.2	1.8	0.95		スカイブルー	
2	1号住居内床面	2.9	2.3	0.85		スカイブルー	
3	1号住居上層	3.1	2.3	1.25		スカイブルー	
4	1号住居内床面	4.95	2.75	1.7		スカイブルー	
5	1号住居上層	4.0	2.8	1.5		スカイブルー	
6	1号住居上層	−	4.25	−		スカイブルー	破　片
7	1号住居上層	5.7	5.35	1.8		スカイブルー	破　片
8	1号住居上層	3.9	2.9	0.9		コバルトブルー	
9	1号住居上層	4.6	2.7	1.4		コバルトブルー	
10	S638　E10　3　層	3.3	2.6	1.15		スカイブルー	
11	S638　E10　3　層	4.85	3.5	0.95		スカイブルー	気泡，小口摩滅
12	S638　E10　3　層	4.5	4.2	1.0		スカイブルー	
13	S638　E10　3　層	3.1	2.4	0.65		スカイブルー	
14	S638　E10　3　層	4.2	3.85	1.0		コバルトブルー	
15	S638　E10　3　層	4.1	3.7	0.9		コバルトブルー	
16	S638　E10　北西ピット	3.3	2.15	1.15		スカイブルー	
17	S638　E10　北西ピット	5.8	4.5	1.3		コバルトブルー	長い気泡
18	S638　E10　3　層	3.7	1.4	1.2		コバルトブルー	気泡
19	S638　E10　3　層	5.25	2.45	1.85		コバルトブルー	気泡
20	S638　E10　3　層	3.5	3.6	0.95		スカイブルー	
21	S638　E8　Pit	2.75	1.3	0.85		スカイブルー	
22	S638　E8　Pit	3.05	2.4	0.65		スカイブルー	
23	S638　E8　Pit	3.7	2.4	1.45		スカイブルー	
24	S638　E8　Pit	4.85	3.65	2.0		スカイブルー	
25	S638　E8　Pit	3.8	3.2	1.4		スカイブルー	
26	S638　E8　Pit	4.5	3.4	2.15		スカイブルー	
27	S638　E8　Pit	3.25	1.65	0.75		コバルトブルー	
28	S638　E8　Pit	3.5	1.95	1.0		コバルトブルー	欠
29	S638　E8　Pit	2.45	2.0	0.65		コバルトブルー	
30	S638　E8　Pit	3.8	2.8	1.25		コバルトブルー	
31	S638　E8　Pit	3.8	3.1	1.5		コバルトブルー	気泡
32	S638　E8　Pit	4.0	1.25	1.15		滑石臼玉(ソロバン玉形)	
33	S638　E8　Pit	4.85	3.0	1.8		滑石臼玉(ソロバン玉形)	
34	S638　E8　3　層	3.3	2.35	1.2		スカイブルー	
35	S638　E8　3　層	3.25	2.3	0.95		スカイブルー	
36	S638　E8　3　層	3.1	1.85	1.3		スカイブルー	
37	S638　E8　3　層	2.85	1.8	1.1		スカイブルー	
38	S638　E8　3　層	3.15	2.1	1.2		スカイブルー	
39	S638　E8　3　層	3.0	1.7	1.1		スカイブルー	
40	S638　E8　3　層	5.15	2.4	1.6		スカイブルー	気泡
41	S638　E8　3　層	4.15	3.2	1.05		スカイブルー	
42	S638　E8　3　層	4.7	3.6	1.4		スカイブルー	
43	S638　E8　3　層	4.5	4.0	1.15		スカイブルー	
44	S638　E8　3　層	5.1	2.75	1.8		スカイブルー	
45	S638　E8　3　層	6.0	4.5	1.35		スカイブルー	
46	S638　E8　3　層	6.6	4.4	2.3		スカイブルー	
47	S638　E8　3　層	2.4	1.8	0.8		コバルトブルー	

（単位mm）

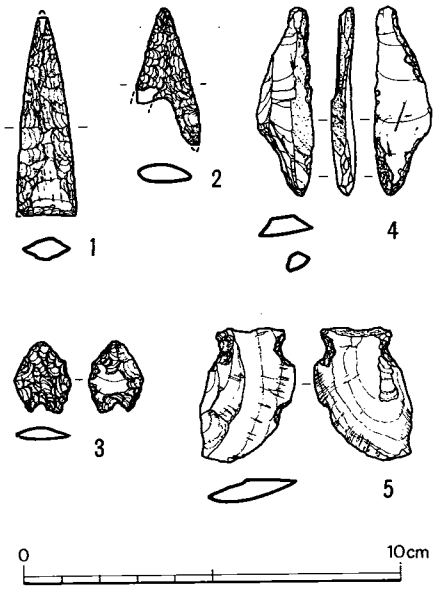
No.	出土遺構	径	厚	孔径	分類	色	備考
48	S638　E 8　3　層	2.35	1.5	0.65		コバルトブルー	
49	S638　E 8　3　層	2.3	1.95	0.75		コバルトブルー	
50	S638　E 8　3　層	2.9	1.25	1.3		コバルトブルー	
51	S638　E 8　3　層	3.3	2.35	1.95		コバルトブルー	
52	S638　E 8　3　層	3.95	2.0	1.5		コバルトブルー	
53	S638　E 8　3　層	4.55	2.85	1.0		コバルトブルー	
54	S638　E 8　3　層	5.5	3.7	1.75		スカイブルー	欠損
55	S638　E10　3層下	3.75	2.5	1.7		スカイブルー	
56	S636　E 8　3層下	3.4	2.3	0.95		スカイブルー	
57	S636　E 8　3層下	4.0	2.3	1.1		スカイブルー	
58	S636　E 8　3層下	3.6	3.6	1.0		スカイブルー	
59	S636　E 8　3層下	4.7	3.8	1.9		スカイブルー	
60	S636　E 8　3層下	4.0	3.15	0.9		コバルトブルー	
61	S640　E10　3　層	4.35	4.3	1.7		スカイブルー	
62	S640　E 8　3　層	3.7	2.4	1.4		スカイブルー	
63	S640　E 8　3　層	3.9	2.75	0.8		スカイブルー	
64	S640　E 8　3　層	5.1	2.8	1.85		コバルトブルー	
65	S622　E10　3　層	3.95	3.35	1.4		スカイブルー	
66	S630　E14　3　層	3.6	2.3	1.5		スカイブルー	
67	S635　3　層	4.95	3.1	0.8		コバルトブルー	
68	S650　W 4　土壙内	4.6	3.7	1.0		コバルトブルー	
69	5号石棺掘方内	4.15	5.95	0.8		スカイブルー	

打瘤部と先端部の両方に刃部を設けており，下端はドリルに使用されたためか欠けがある。5は発掘区南西隅の第3層から出土した安山岩製で，剝片の打瘤部の厚みを減じて，両端に抉りを設け，先端部を刃部にしたもの。6は大溝上層出土の安山岩製の石匙で，つまみ部のみの破片になっているが大形になろう。現存長7.7cm，幅6.5cm，厚さ2.1cmを測る。

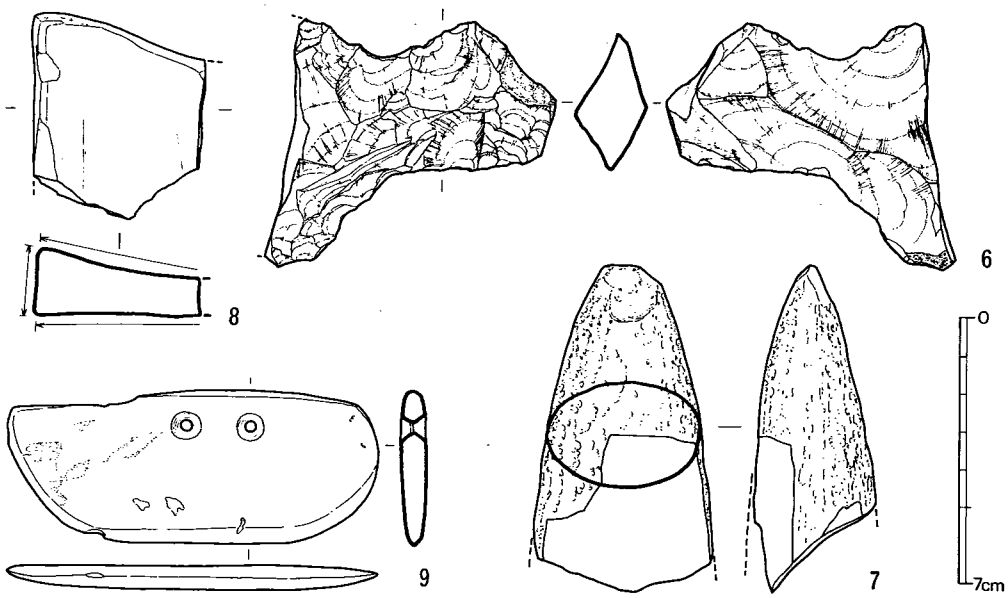
磨製石斧（7）　閃緑岩質の安山岩製の磨製石斧頭部破片で，大溝上層から出土した。敲打調製痕が残り，風化によるアバタも生じている。重量の現存値は136gを測る。

砥　石（8）　発掘区北端部のP24から出土した砂岩製の中砥程度の砥石。折損面以外の各面ともに砥面として使用されている。

石庖丁（9）　紫褐色を呈す輝緑凝灰岩製の石庖丁で，大溝上層から出土した。長さ9.7cm，最大幅



第50図　II-17出土石器実測図①（1/2）



第 51 図 II-17 出土石器実測図② (1/2)

4.1cm・厚さ6.7mm・重量の現存値41.1gの大きさをもち，背側に生じた欠損面もすっている。背は丸味をもち刃部は直線的になっているが，刃は両脇に比して鈍くなっていることから使用による目減りを生じているものと思われる。

これらの石器類では，2～7が縄文時代に属するであろう。1の打製石鏃は弥生時代初頭～前期のものであろうか。発掘区内での縄文土器片の出土は顕著でないが，周辺に該期の遺構・遺物の存在も予想されよう。9の石庖丁は背に丸味をもつことから石庖丁としては新しい時期のものであろう。 (小池)

(4) 歴史時代の遺構と遺物

① 溝状遺構

これは調査区南端で検出したもので，1号石棺墓祭祀遺構の南端を破壊している。この溝状遺構は，その一部を検出したにすぎず，規模は不明ながら長さ11mを調査した。溝の幅は3m前後と思われるが，深さは東側ほど深くなっている。現状での深さは西端が33cm，東端が57cmとなり，底面は平坦である。

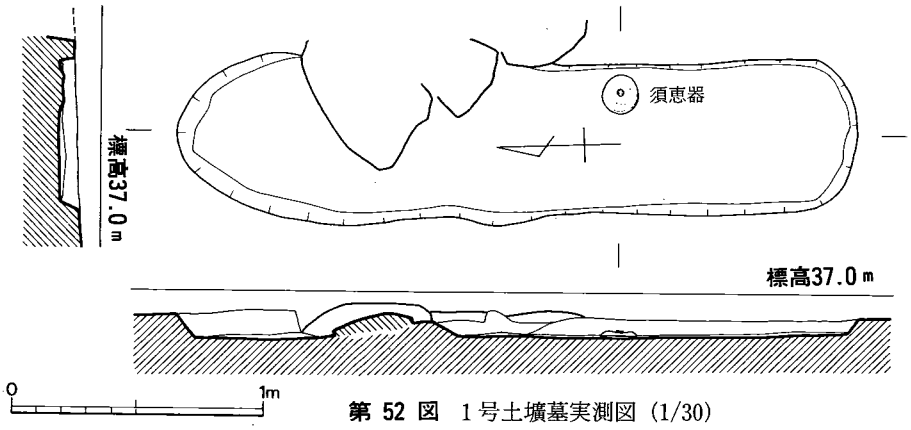
溝内には，若干の土器が出土したが，その大半は1号祭祀遺構から流入した大甕片で，この溝に伴うのは底面から出土した須恵器蓋1点のみである。 (柳田)

須恵器（第56図１）

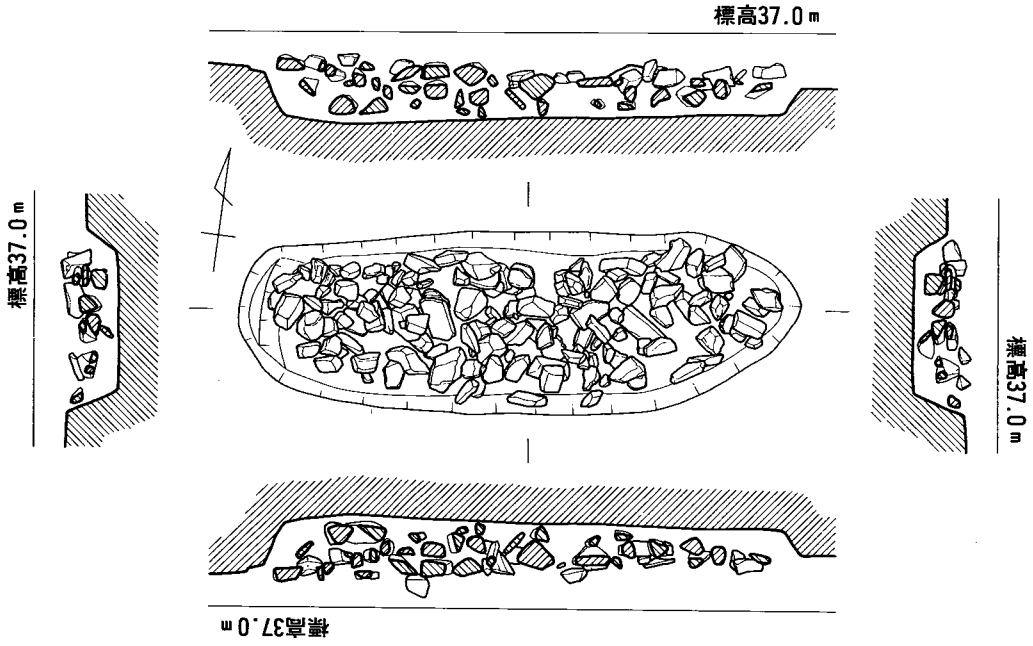
蓋（１）　口径15.8cmを測り，天井部をヘラケズリ調整をする。撮部を欠失するが，その剝痕跡を残す。また，天井部から体部にかけて「×」のヘラ記号がある。胎土中には砂礫を少量含む。焼成は堅緻で，黒灰色を呈する。７世紀末期頃と考えられる。　（森田）

② 土壙墓（図版９－３・13－１，第52・53図）

土壙墓は，調査区南東側に２基あり，１号は５号石棺墓と重複している。



第 52 図　１号土壙墓実測図（1/30）



第 53 図　２号土壙墓実測図（1/30）

寺　口

1号土壙墓（図版13－1，第52図）

5号石棺墓と重複して，掘削時に蓋石が露出したと思われるが，蓋石を開けるなどしていない。土壙墓の大きさは，長さ270cm，幅60cmであるが，深さは10cmほどしか残っていない。

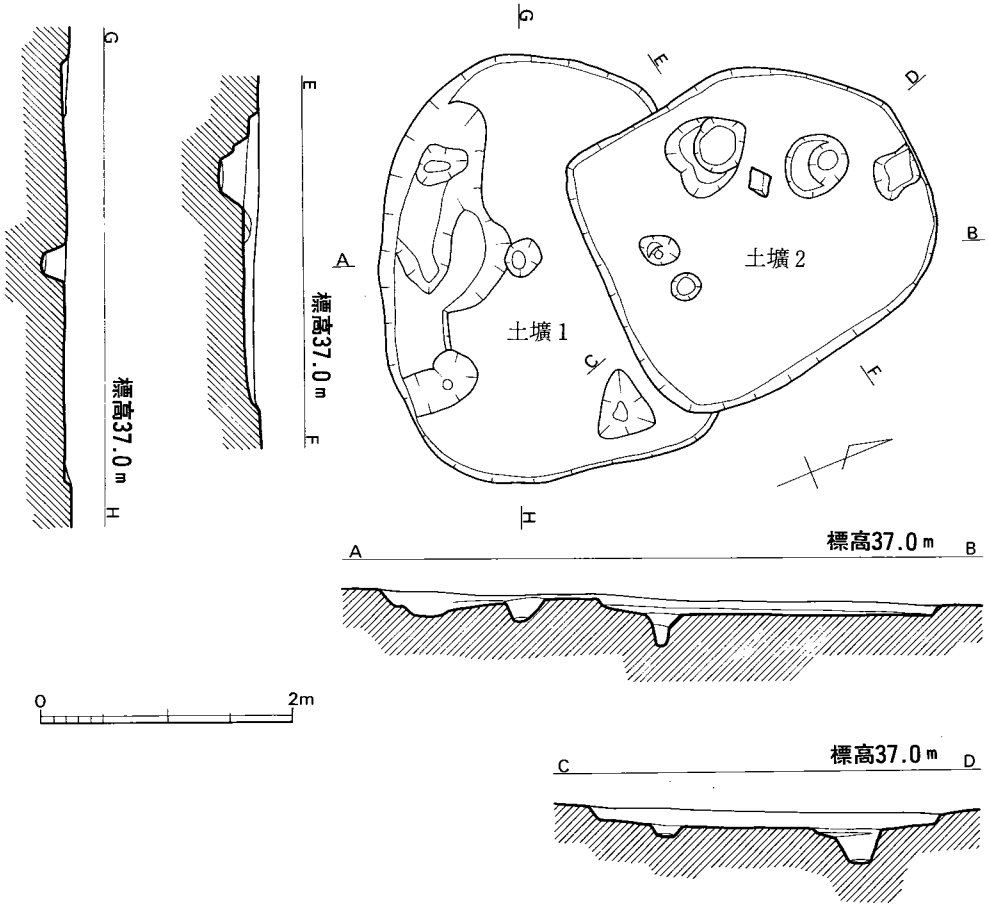
副葬品は，東側中央付近床面に須恵器の蓋の完形品が1個あった。（柳田）

須恵器（第56図2）

蓋（2）　完形品で口径15cm，器高2.1cmを測る。内天井部はナデ仕上げではなく，天井部はヘラ切り離しのままである。胎土中に砂粒を比較的多く含む。暗灰色を呈し，焼成は堅緻である。身受け部の退化や全体の形状から8世紀後半代と考えられる。（森田）

2号土壙墓（図版9－3，第53図）

1号の北西側にあり，土壙内全体に礫を詰めている。土壙の大きさは，長224cm，最大幅72cmで，小口部分は丸味がある。現状では深さ27cmしかないが，埋葬遺構であるか疑問があり，出土品がないために時期も不明。



第54図　1・2号土壙実測図（1/60）

③ 土　壙（図版13-2・14，第54・55図）

歴史時代の土壙は，調査区の北端に集中し，そのうち4基から明確な出土遺物があった。土壙は，そのプランも隅丸方形に近いものから楕円形に近いものがあり一定しない。

遺物の出土状態も埋土中に含まれるもの，床面にあるが破片であるものなど一定せず，遺構の性格も確定できない。しかし，1号には炭化物があり，焼却した可能性がある。

各遺構の新旧関係は，1号より2号が新しく，3号より4号が新しいものである。

各遺構の規模は次表のとおり。　（柳田）

番号	平面形	大きさ cm	深さcm
1	隅丸方形	330×230	5
2	隅丸方形	270×240	6
3	長 方 形	(210+α)×195	12
4	楕 円 形	(130+α)×160	19

2号土壙出土土器

土師器（第56図15）

小　皿(15)　口径9.0cm，器高1.6cm，底径6.2cmである。糸切り後の板状圧痕とそれに伴う内底のナデは明瞭である。

瓦　器（第56図16）

椀(16)　口径16.8cmほどに復原できる瓦器の破片で，約3分の1残存している。摩滅のため内外面のミガキは不明瞭であるが，内側は比較的丁寧であるに対して外面はほとんどなされていないようである。瓦器椀としては退化した手法がみられる。胎土中の砂粒は少なく，焼成は良好である。

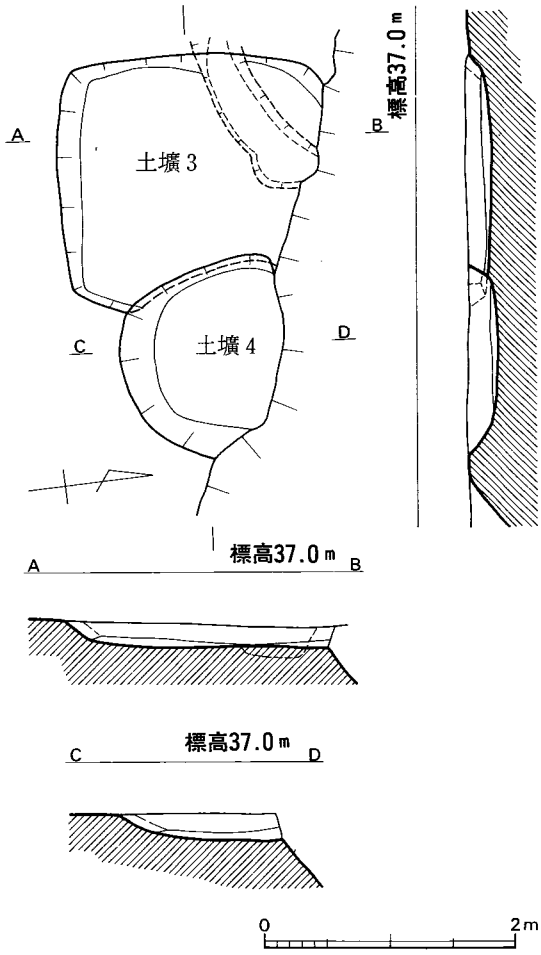
4号土壙出土土器

土師器（第56図3～14）

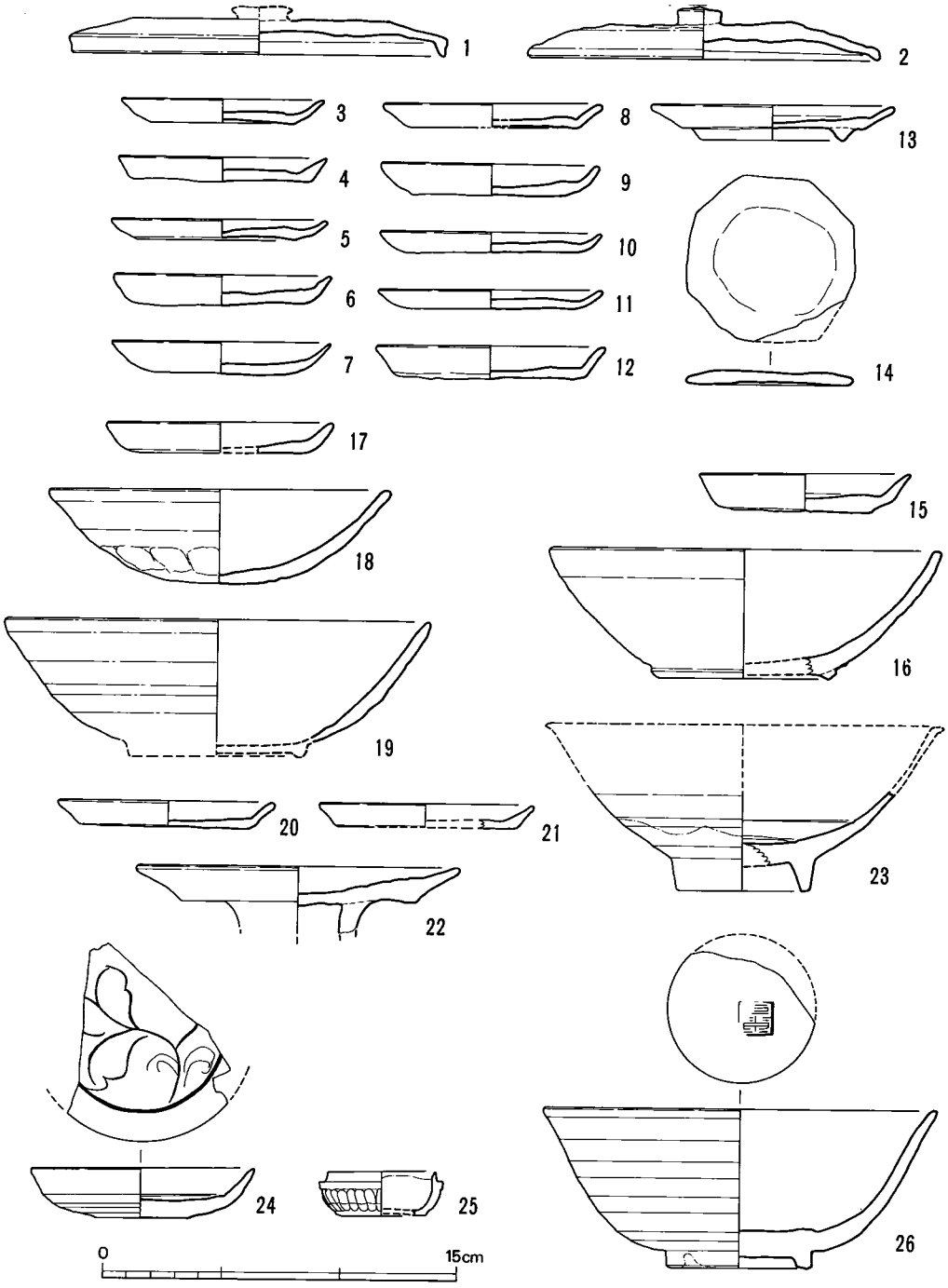
小　皿(3～12)　口径8.6cm～9.8cm，器高0.8cm～1.3cm，底径6.0cm～7.4cmである。摩滅が著しい7・8・10を除いて他は全て糸切り離しである。

高台付小皿(13)　口径10.5cm，器高1.5cm，高台径6.2cmである。切り離しは磨滅のため明らかでない。

八稜板(14)　小皿の底部を使用して製作したものである。二辺を欠落するが，他



第 55 図　3・4号土壙実測図（1/60）



第 56 図 II-17出土歴史時代の土器・陶磁器実測図 (1/3)

の辺は丁寧に滑っていることから，八稜鏡を意識して造ったと考えられる。磨滅が著しいため切り離し手法や調整は明らかでないが，板状圧痕だけは明瞭に残存している。胎土中の砂粒は少なくよく精選されているが，少量の絹雲母を含む。淡茶色を呈し，焼成は比較的良好である。

図示した土器や図示していない杯などの形状から東土壙が埋没した時期は，12世紀中頃と考えられる。

表2　寺口II-17　4号土壙出土小皿法量表

(単位cm)

挿図番号	口径	器高	底径	切り離し		内底ナデ	板状圧痕
				ヘラ	糸		
小　皿							
3	8.6	1.0	6.0		○	○	
4	8.8	1.0	7.3		○	○	
5	9.1	0.9	6.6		○	○	○
6	9.1	1.3	7.4		○	○	○
7	9.2	1.3	6.1				
8	9.3	1.0	7.4		○	○	○
9	9.3	1.3	6.5		○	○	○
10	9.4	0.9	7.4			○	○
11	9.6	0.8	6.9		○	○	○
12	9.8	1.3	7.4		○	○	○
高台付小皿							
13	10.5	1.5	6.2			○	○

ピット出土土器・陶磁器

土師器（第56図17・18）

小　皿(17)　口径9.5cm，器高1.3cm，底径6.6cmである。糸切り。ピット5出土。

丸底の杯(18)　口径14.4cm，器高4.0cmである。体部中位以下は内外面ともに指頭圧痕の凹みが観察されるが，とくに外面は著しい。内面はミガキがなされ，器面が密になっている。また，調整時の「コテ」痕が放射状の沈線として残る。胎土中の砂粒は少ない。焼成は良好で，乳茶色を呈する。

瓦　器（第56図19）

椀（19）　小片からの復原であるので，法量は確かとはいい難く，また器面も磨滅している。胎土は精良で，ほとんど砂粒を含まず，灰黒色に焼成されている。

白　磁（第56図24）

皿(24)　口径9.5cm，器高2.1cm，底径3.9cmである。体部外面中位以下および外底部は回転ヘラケズリ調整している。内底には線刻により花文（茎・花は太線，葉は細線）が描かれている。胎土は白色緻密で，若干青味をおびた灰白色の釉が底部を除いて全面にかけられる。数は少ないが，12世紀後半代の遺構からたびたび出土する。

青　磁（第56図26）

椀(26)　口径16.8cm，器高6.7cm，高台径6.3cmである。体部外面は回転ヘラケズリ調整を行う。内底にはパスパ文字風のスタンプがある。

胎土は暗灰色を呈する。口縁部付近に若干貫入を伴う淡黄緑色の釉は高台畳付付近まで及ぶ。

内底のスタンプがパスパ文字だとすると，この椀は元代に属する。24の皿とともに中央不整形ピットから出土した。

寺　口

3層出土土器・陶磁器

土師器(第56図20・21)

小　皿(20・21)　口径9.0・9.1cm,器高1.1・1.0cm,底径7.2・7.9cmである。両者とも糸切りである。

脚付皿(22)　口径13.7cmを測る皿部を有する。高い脚が予想されるが，類例を知らない。

白　磁(第56図25・23)

合　子(25)　口径4.6cm，器高1.9cmに復原できる。体部外面に型造りによる蓮弁文が描かれる。胎土は灰白色を呈し，釉は淡青白色である。

椀(23)　細く高い高台を有する椀で，体部の大部分を欠失する。重ねて乾燥したためであろうか，内底に施釉前の円形のキズが入っている。胎土は灰色を呈し，釉は淡黄灰白色である。

(森田)

4．小　結

寺口II-17地区の調査では，第1に弥生中期の大溝を検出したこと。第2に弥生終末頃の祭祀土器群を伴う,後漢鏡副葬の石棺墓があったこと。第3に古墳時代住居跡と包含層で,土師器に伴って瓦質土器や陶質土器が発見されたことなど，重要な問題を提供してくれた。

第1の点では，弥生中期後半以前に掘られた大溝が，八龍I-3南端を経て貫流することは，三雲遺跡全体の土地利用から集落構成を考える上では,今後の調査に期待するところが大きい。

第2の点は，弥生時代終末の土器とその年代に関して別に述べることがあって，石棺墓祭祀土器群を一括とし，石棺墓副葬の後漢末の「長宜子孫」銘連弧文鏡からその年代を考察した(註1)。しかし，この時点では未整理の部分があり，1号・2号祭祀の土器型式細分ができていなかった。この報告では，土器の説明で述べたように，とくに高杯において1号・2号の差がある。それは，杯部立ち上がりの傾斜の違い，脚部の形態と柱状部内面ケズリの有無が大きな差となっている。1号・2号の新旧関係はもちろん、1号には平底の長頸壺・丹塗磨研の高杯を含むことなど，わずかではあるが古い要素が含まれている。この種高杯の細分ができたことは，今後の瀬戸内や畿内地方との土器併行関係を研究するのに，光明をみいだした思いがする。2号石棺墓祭祀土器群を弥生終末にあてるかどうかは別にしても，細分できた土器セットを石棺墓の副葬品である後漢鏡から3世紀初頭にできることは，先の研究と変わることがない。

2号石棺墓副葬の後漢鏡は，鏡片副葬ではなく，磨滅もみとめられないことから，日本国内では最も早く埋葬された資料とすることができるが，日本国内出土品では香川県石清尾山猫塚古墳出土鏡が最も近い鏡式をしている。猫塚鏡は各部分の磨滅が著しく，伝世されたのは明らかであるが,鏡の直径が140.55mmあるところから，2号石棺のものよりわずかに大きいことになる。2号石棺鏡のように径138mm前後であるということは後漢尺の6寸(1寸=2.304cm)鏡とい

うこともできる。猫塚古墳鏡の連弧文間には「寿如金石」銘がある。

また，土器については，1号石棺墓祭祀土器群に含まれている壺(4)のように，原形を朝鮮半島に求められるようなものがあることから，半島とも年代の併行関係がたどれる可能性をもっている。寺口例のように器形のみで類似土器をあげれば，筑後市狐塚1号住居貼床下の方形土壙の後期後半の土器が共伴する例がある（註2)。

第3の点は，大溝上層の土師器（IIa式）に伴う瓦質土器や，6号住居跡に伴う陶質土器と瓦質（軟質）紡錘車・鉄鎌の時期と他遺跡との併行関係である。近年北部九州では，古墳に伴う陶質土器の資料が増加し，その研究も盛んである(註3)。ところが，これらの研究は日本の製品である土師器との併行関係が，かならずしも成功しているとはかぎらない。この点、寺口II-17や堺I-4地区のように多量の土師器が共伴する資料にこれまで恵まれていなかった時点の研究であった。

寺口地区では，土師器の資料は少ないといえるが，布留古式に伴う舶載土器は軟質の瓦質土器であり，縄蓆文土器を確実に伴う。この点、5世紀前半とすることのできる，甘木市池の上墳墓群（註4）や福岡市有田遺跡（註5）では，縄蓆文土器は伴わない。5世紀初頭であれば，寺口II-17の6号住居跡や堺I-4の6号住居跡のように縄蓆文土器を伴うものであろう。

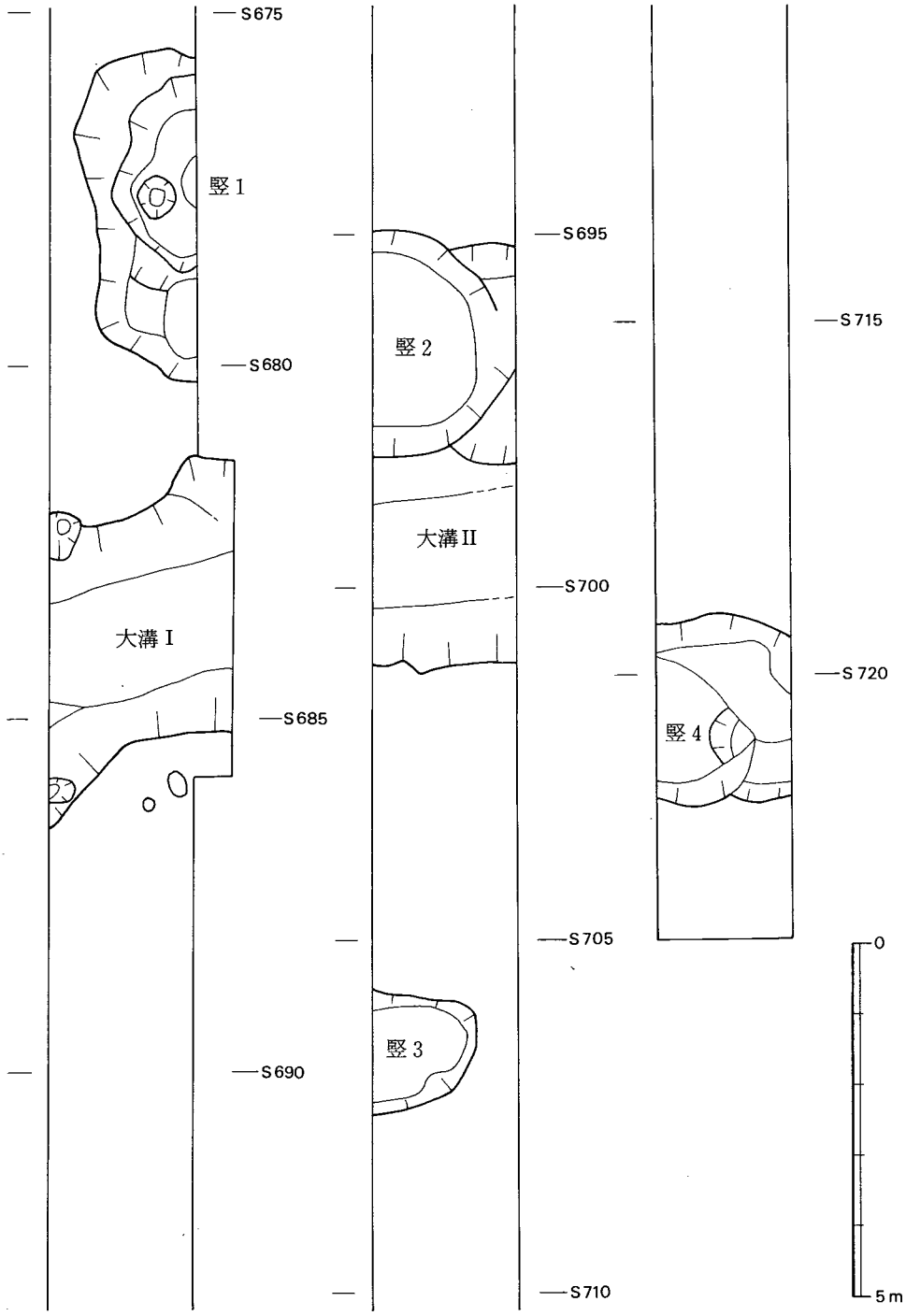
第2節　八龍地区の調査

1．はじめに

八龍地区は，三雲地区の南端の東寄りに位置し、細々石神社参道正面にもあたり，八龍I-10は「八龍の森」ともいう。

八龍地区の調査は，I-3・11を南北に貫通する幅2mの水路工事，I-7の牛舎建設，I-18の地下げ，II-10の道路付替えに伴う削平工事のために実施した。調査は，I-7を昭和50年度に，他を昭和53年度の圃場整備工事と併行して実施したが，II-10地区の甕棺群の調査は昭和54年度にも継続し，I-18は道路付替え後の昭和55年3月にもこま切れに調査した。

I-3・11地区の調査は，柳田康雄が担当し，平川敬治・清水聖子が参加した。I-7は，柳田が担当し，小田雅文・川村博・小林美孝が参加した。I-18は，柳田と池辺元明が担当し，諫山佳明・新開誉之・樗木弘明・岡部正巳・内田恵三・片岡宏二・氏松昌平が参加した。II-10は，柳田・児玉真一・新原正典・馬田弘稔・小池史哲・池辺元明が担当し，岡部正巳・片岡宏二が参加した。



第 57 図 八龍I-3・11 遺構配置図 (1/100)

2.　I-3・11の調査

この地区の調査は，幅２mの水路工事に伴う調査であったために，調査した遺構も必ずしも性格を明らかにすることができなかった。しかも工事途中での調査であったために，急務で応急的な調査となった。

遺構は，I-３の南半とI-11の北半・南端にあった。

(1)　大　溝

大溝は，I-３の南端とI-11の北半で各１本を検出した。調査が幅２mであったために，溝の長さも２mしか調査しなかったことになり，必ずしも大溝と断定することはできないが，寺口II-17の大溝と関連して考えると，大溝とする以外に考えられない。

① 大溝I

I-３南端のものを大溝Iとした。水路工事の表土掘削時点から，表土直下の大量の土器群が出土し，調査のきっかけともなった。したがって，大溝と確認する前は土器溜として処理した。

大溝は，位置的には中心がS683にあり，長さ2.5mを調査した。大溝の規模は，最小幅で3.3m，横断面形は逆台形を呈する。

大溝埋土には，上層には土器溜状に完形品を含む土器層があるが，中層以下には土器は細片しか含まれない。下層にある細片から，大溝は寺口II-17と同じく弥生中期後半以前に掘削され，上層の土師器IIa式の時期に大溝の上層は一気に埋没したと思われる。

土　器（図版24～29，第58～76図）

二重口縁壺（１～４）　１は混入と思われる袋状口縁片で，板目キザミをもつ。

２は，口径17cm，高さ31cm，胴最大径25.5cmの大きさで，肩部にヘラ描き波状文をめぐらす。胎土に細砂を含み，灰褐色を呈す。４も波状文こそないが，同形態のもの。

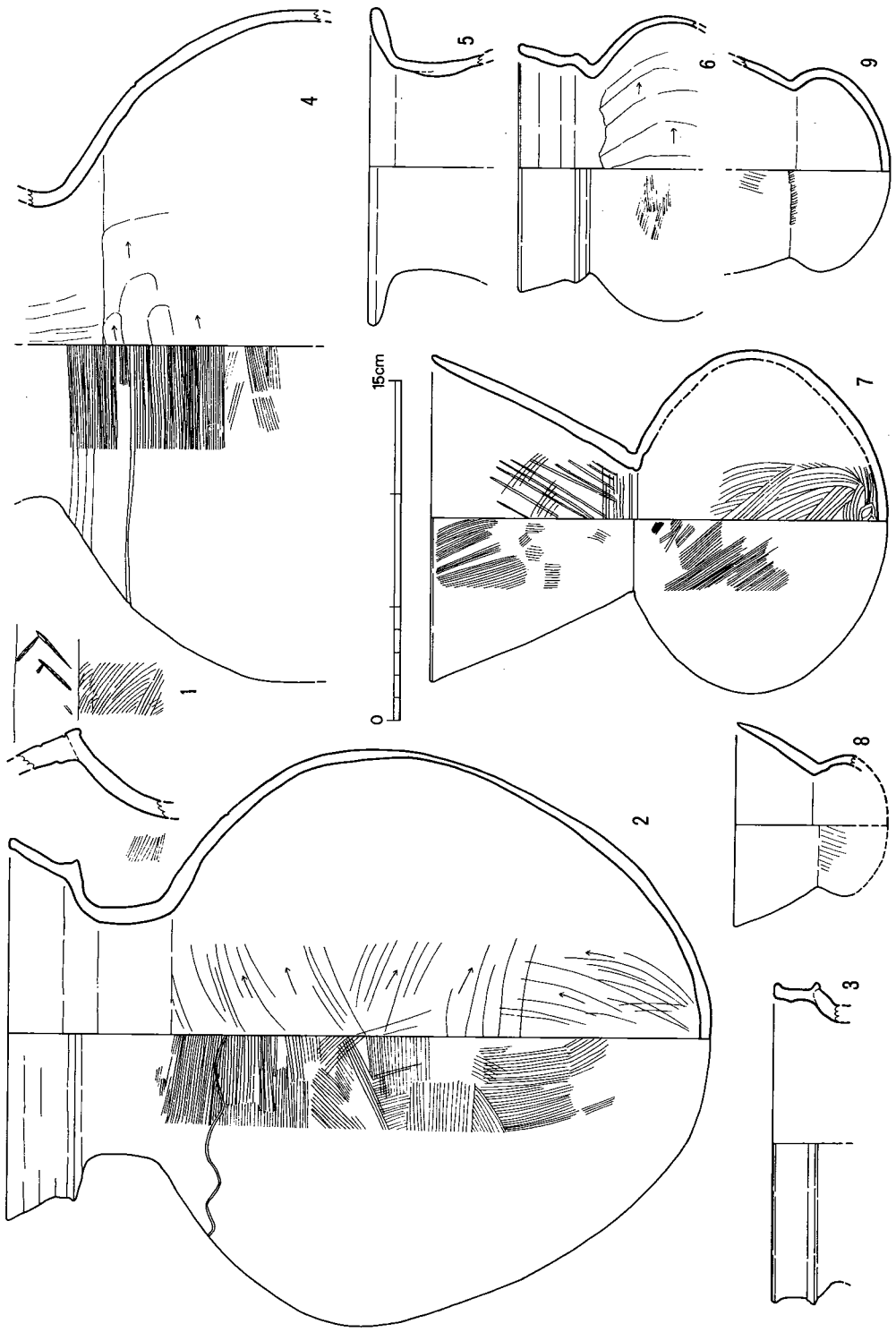
３は，口径14cmの大きさで，胎土に細砂・粗砂を含み，赤褐色を呈す。

壺（５）　口径14cmの大きさで，裾開きの頸部に球形胴部がつくと思われる。器形としては東瀬戸内に見られるもの。胎土に細砂(石英･金雲母)を含み，褐色を呈す。調整は内外面ともにナデとヨコナデ。

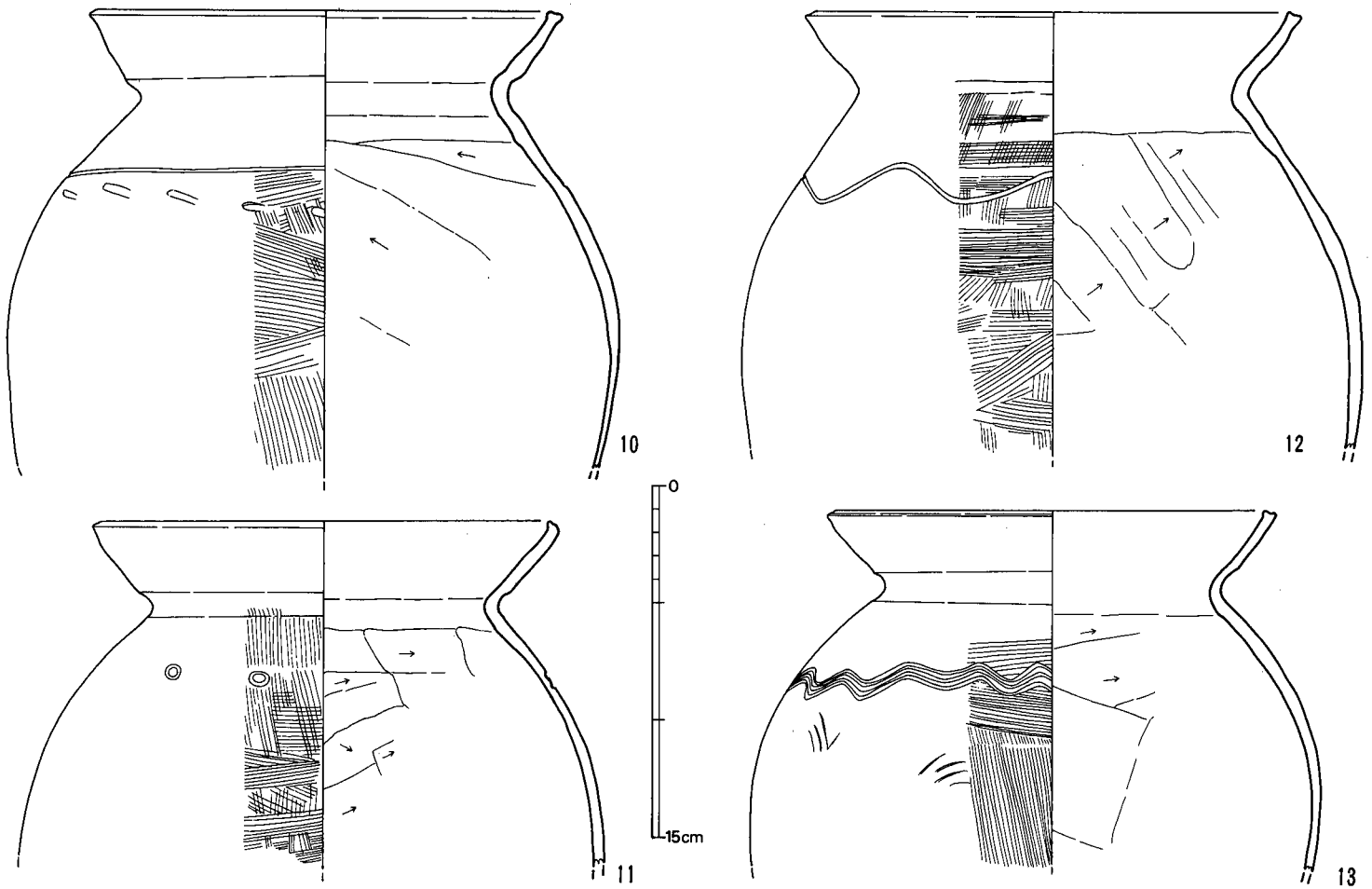
二重口縁小壺（６）　口径10.5cmの大きさで，胎土は細砂（赤褐色粒・金雲母）を含む褐色。

長頸壺（７）　口径14.4cm，高さ20.3cm，胴径15.1cmの大きさ。調整は細いハケ目の後ナデ，口縁内面はハケ目の後暗文。胎土は細砂（金雲母・赤褐色粒）を含み，淡褐色を呈す。

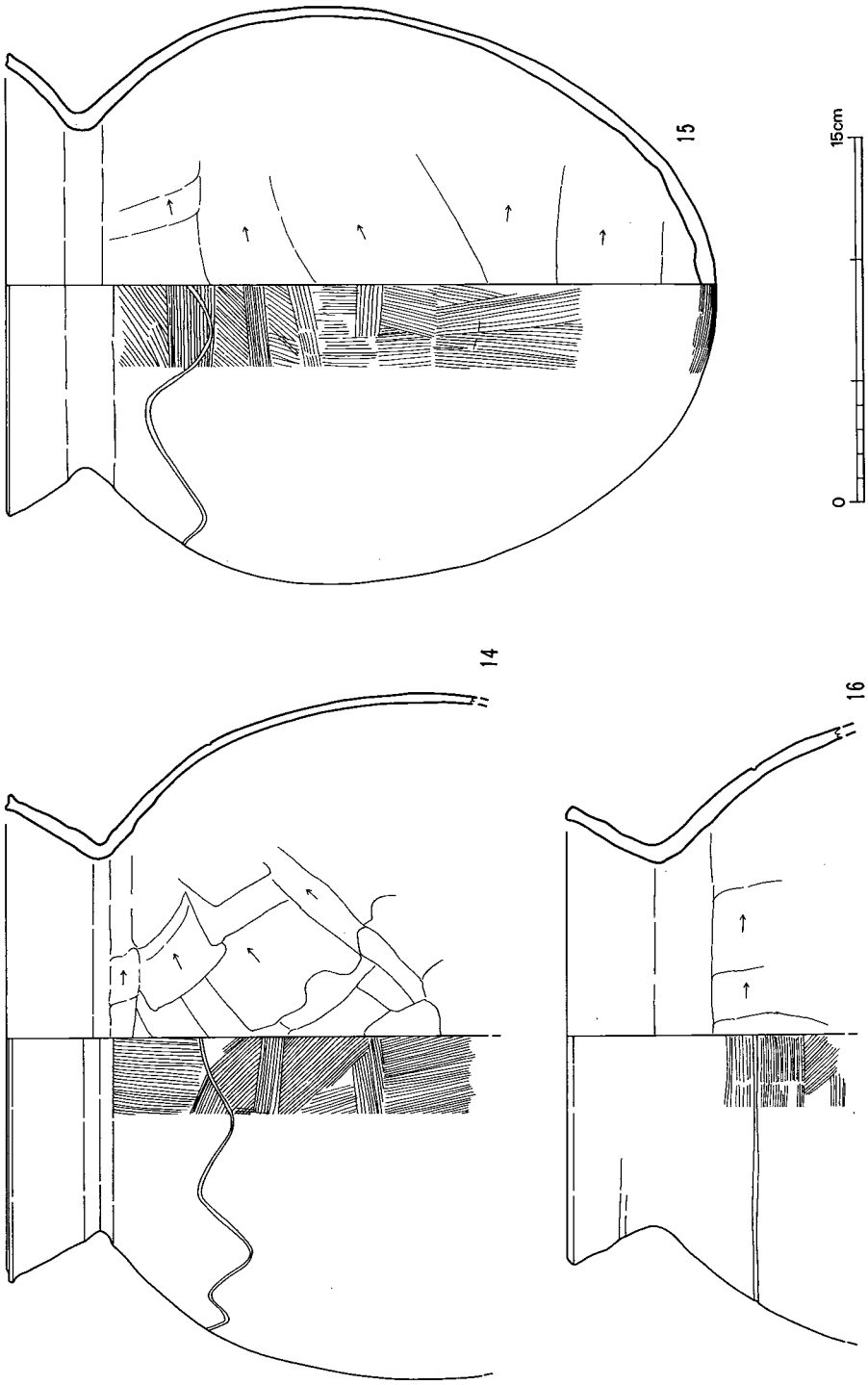
小形丸底坩（８・９）　８は口径9cmの大きさ。２点ともに胴部はハケの後ナデるが，９はケズリ



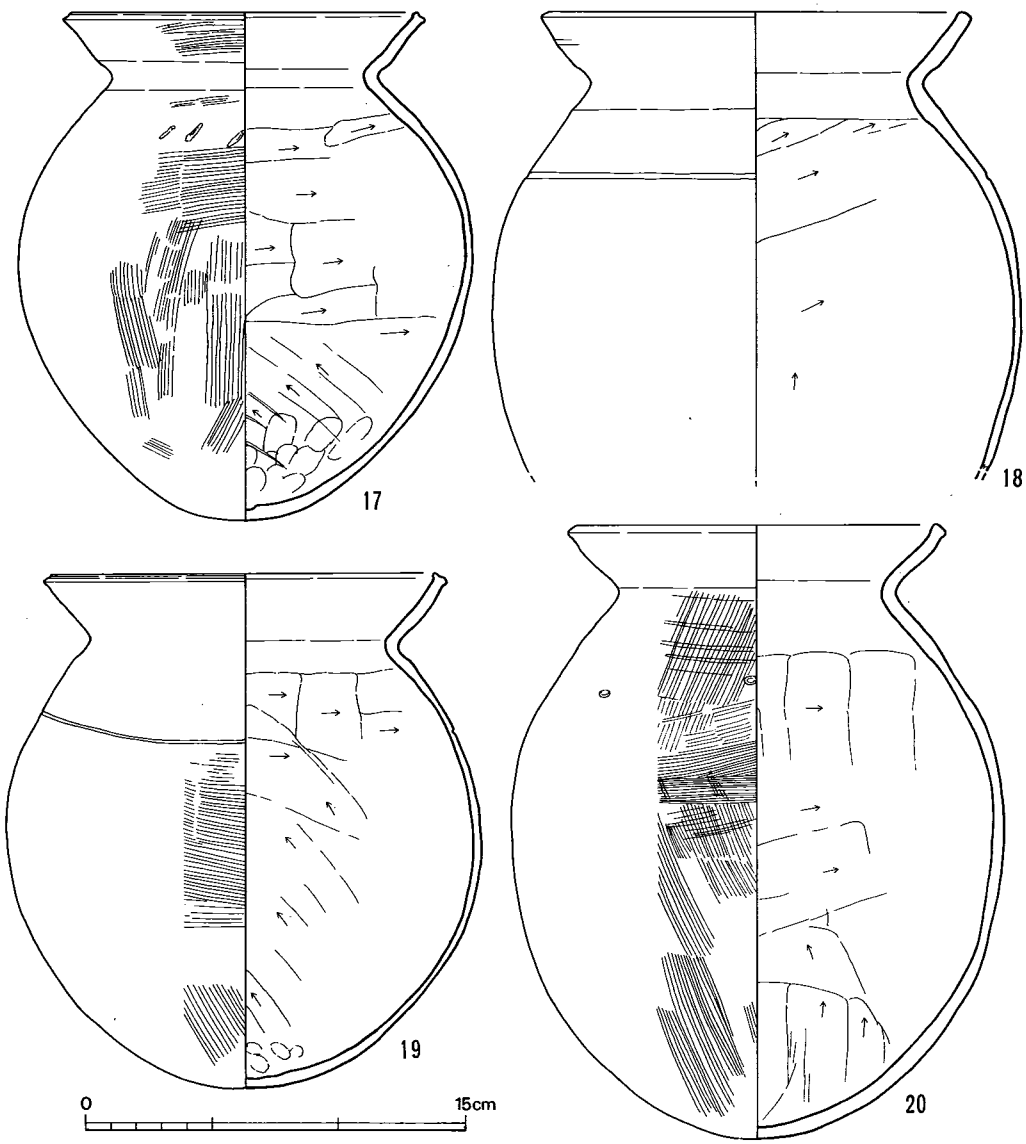
第58図 大溝上層出土土器実測図① (1/3)



第 59 図　大溝上層出土土器実測図② (1/3)



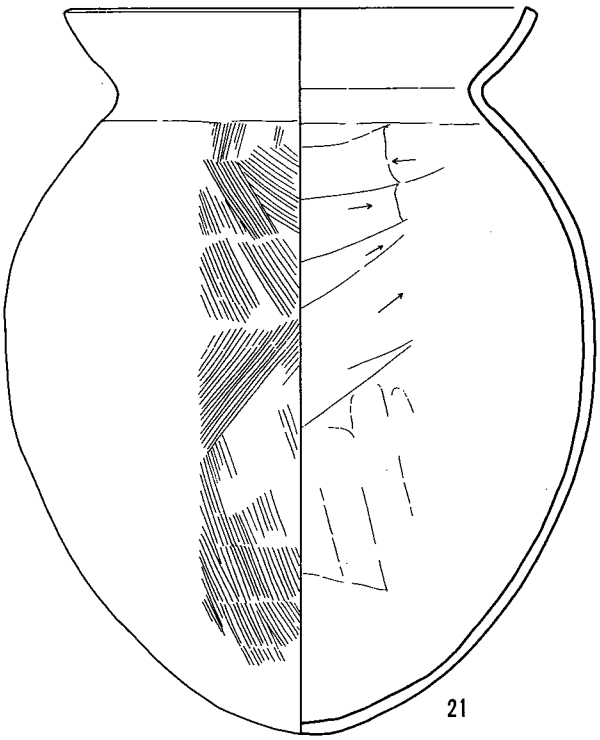
第60図　大溝上層出土土器実測図③ (1/3)

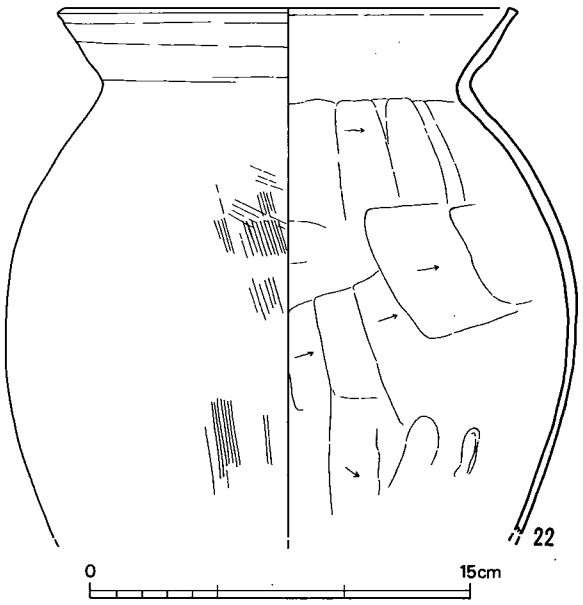


第 61 図 大溝上層出土土器実測図④ (1/3)

状を呈す。胎土は精良で明褐色と赤褐色(8)。

甕Ia類 (10〜34) 口縁が多少内湾し，胴部はなで肩の割合長胴で内面ヘラケズリのものをⅠ類とした。Ⅰ類には，肩部に櫛描き波状文(13)・ヘラ描き波状文(12・14・15)・ヘラ描き沈線(10・16・18・19)・竹管文(11)・刺突文(10・17・20)を施すものもあるが，ヨコハケ目だけのものが半数以上を占める。肩部にヘラ描き文などを施すものとハケ目だけのものとの違いは，口縁先端内側の摘み上げに明瞭な差がある。すなわち，ヘラ描き文があるものは確実に摘み上げており，古い要素といえる。





第 62 図　大溝上層出土土器実測図⑤ (1/3)

甕Ib類 (44・48)　Ia類と同様に胴部内面をヘラケズリするが，胴部が小さく，外面はタテハケが主体となり肉厚のものを甕Ib類とした。44の胎土は，粗砂(石英)と金雲母を含む褐色。

甕II類(40)　胴内部のヘラケズリはI類と同じであるが，ケズリは口縁角から行う。II類の特徴は，口縁の外反と先端の尖がりにある。胎は，粗砂(石英)と金雲母・赤褐色粒を含む。

甕III類(35)　二重口縁の短胴で，内面ヘラケズリのもの。外面のハケ目は細かく，I類と違って底部を有する。胎土は，細砂(石英・金雲母・赤褐色粒) を含み，淡褐色を呈す。

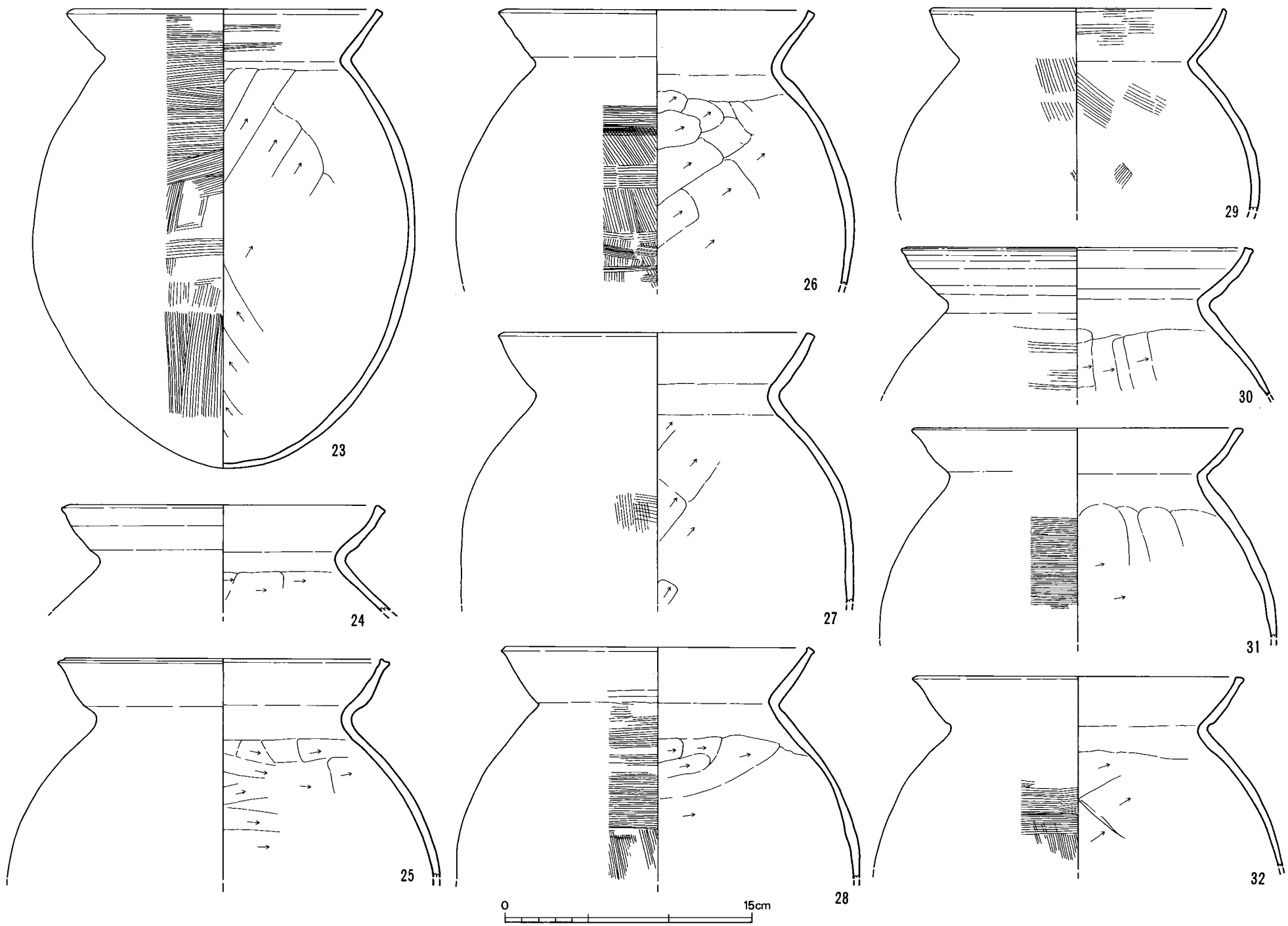
甕IV類(36)　口縁下に三角凸帯を有する中型甕で，胴部内面はヘラケズリをしない。

口径23.8cmの大きさで，口縁が外反して先端に平坦面をつくる。ハケ目は粗い。

甕V類(37・42)　直口甕で，口縁径が狭いので壺形に近く，37は多少外傾，42は多少内傾する。内外面ともに粗いハケ目調整するが，42は外面にタタキが残っている。胎土はIII類と同じ。

甕VI類 (38・39・43・45・46・51～53・57・58)

内外面ともに粗いハケ目調整を



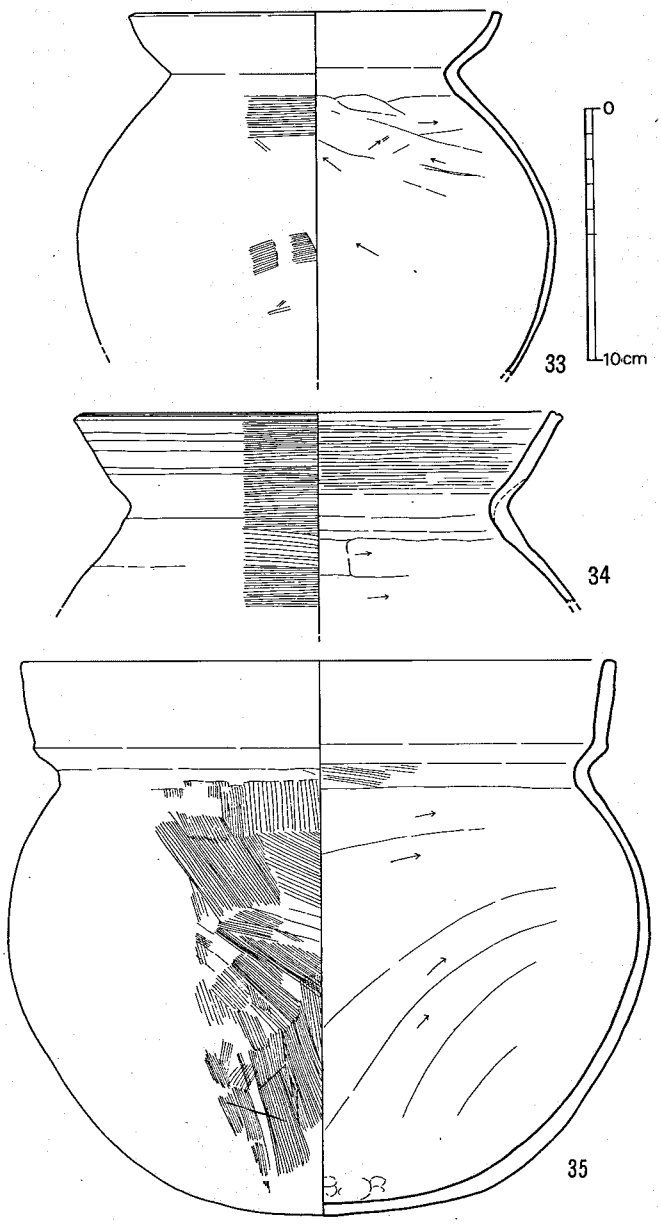
第 63 図 八 龍 I-3・11 大 溝 上 層 出 土 土 器 実 測 図 ⑥ (1/3)

するが，胴部外面はタタキが残り，下半部は最後にケズリ状のタテナデを行い丸底とする。弥生終末の甕と違うところは，タタキのより粗いものが多く，口縁はより立ち，屈曲部も鈍い。さらに口縁部にIb類に似るもの(46•51•57)や58のように短胴で口縁が直立に近いものや小型のもの(41)もある。

胎土は，細砂(石英•金雲母など)を含むが，赤褐色粒を含まないもの(51•52)や角閃石を含むもの(53•58)があり，色調は赤褐色・褐色・淡褐色がある。

甕VII類(47•49•50•54～56)　胴部が球形をし，内面が細かいハケ目かナデ調整をする。胴部外面下半にヘラケズリを残しているもの(47•49•56)もあるが，ハケ目やナデで消しているものもある。口縁も多少違うものがあり，直立に近いもの(47)，外面にふくらみのあるもの(49)もある。

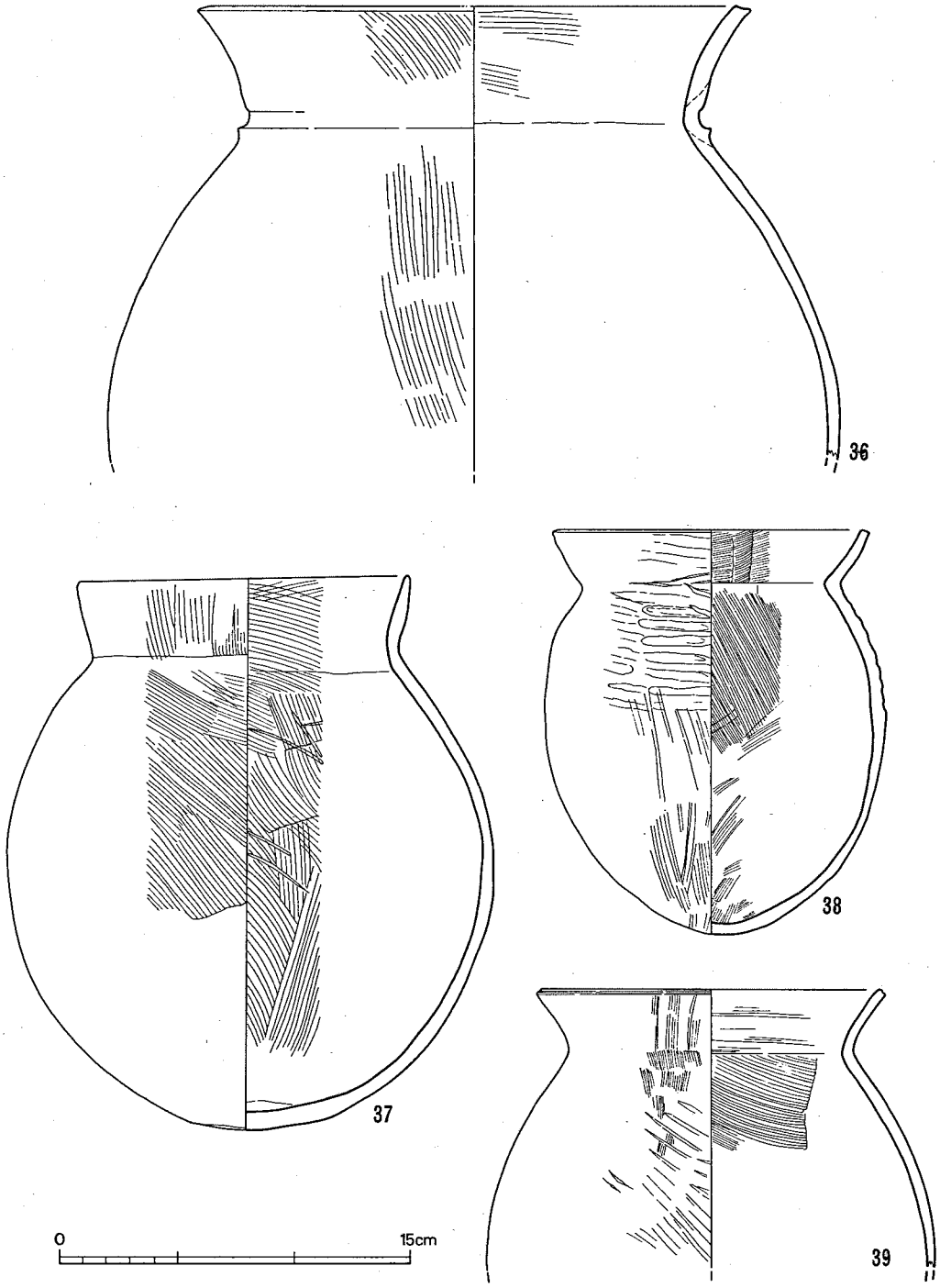
甕VIII類(59•60)　小型で，口縁先端が尖がるが，調整法は59がVI類と同じで，60が胴下半がケズリのまま残る。VI類よりさらに粗製土器。



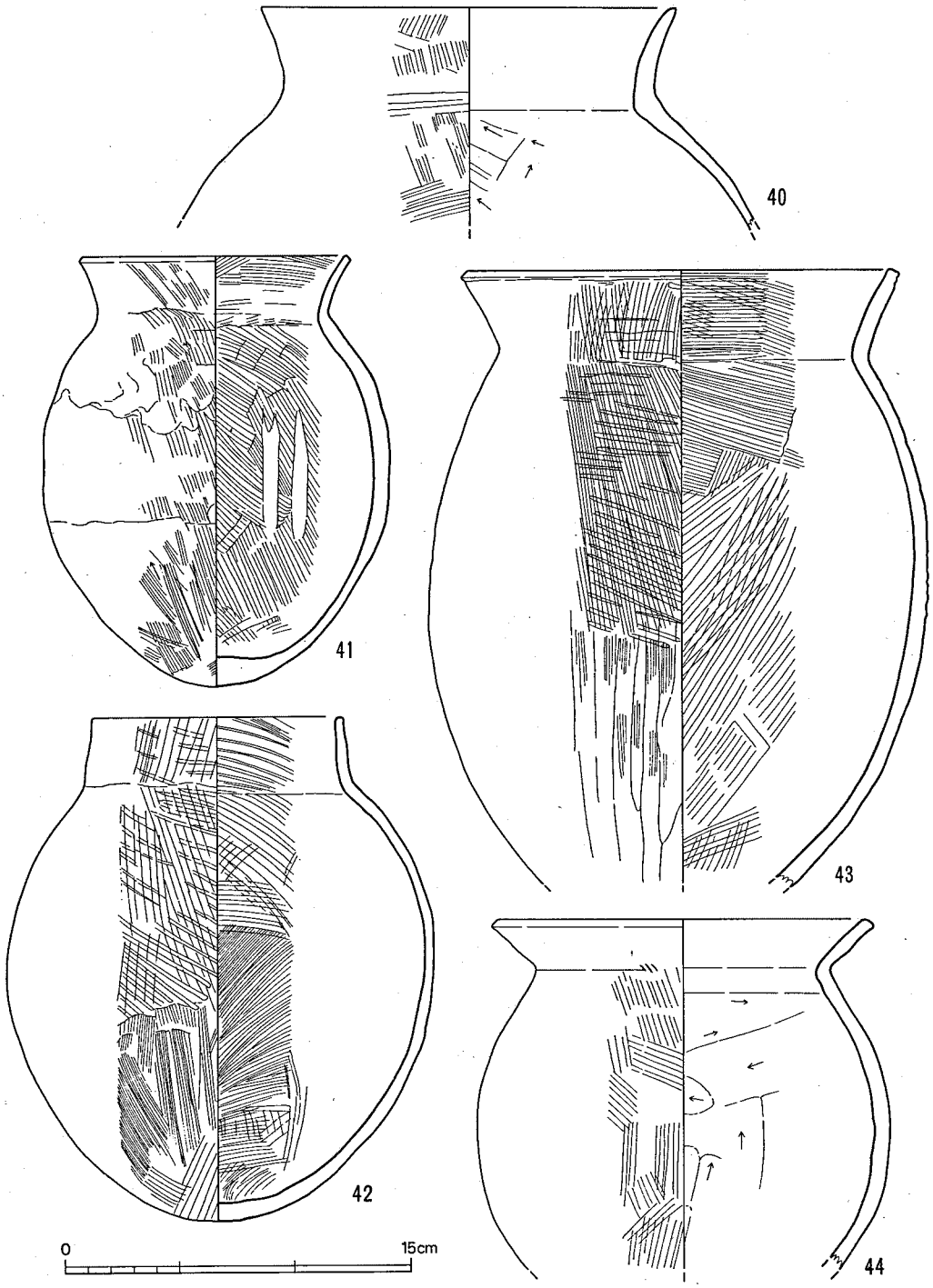
第 64 図　大溝上層出土土器実測図⑦ (1/3)

鉢Ia類(61～64)　口縁径が胴部径を上まわるところから鉢とした。口縁は内湾し，胴部は扁球形となる。胴内面はヘラケズリするが，ナデ消しているものも(64)ある。

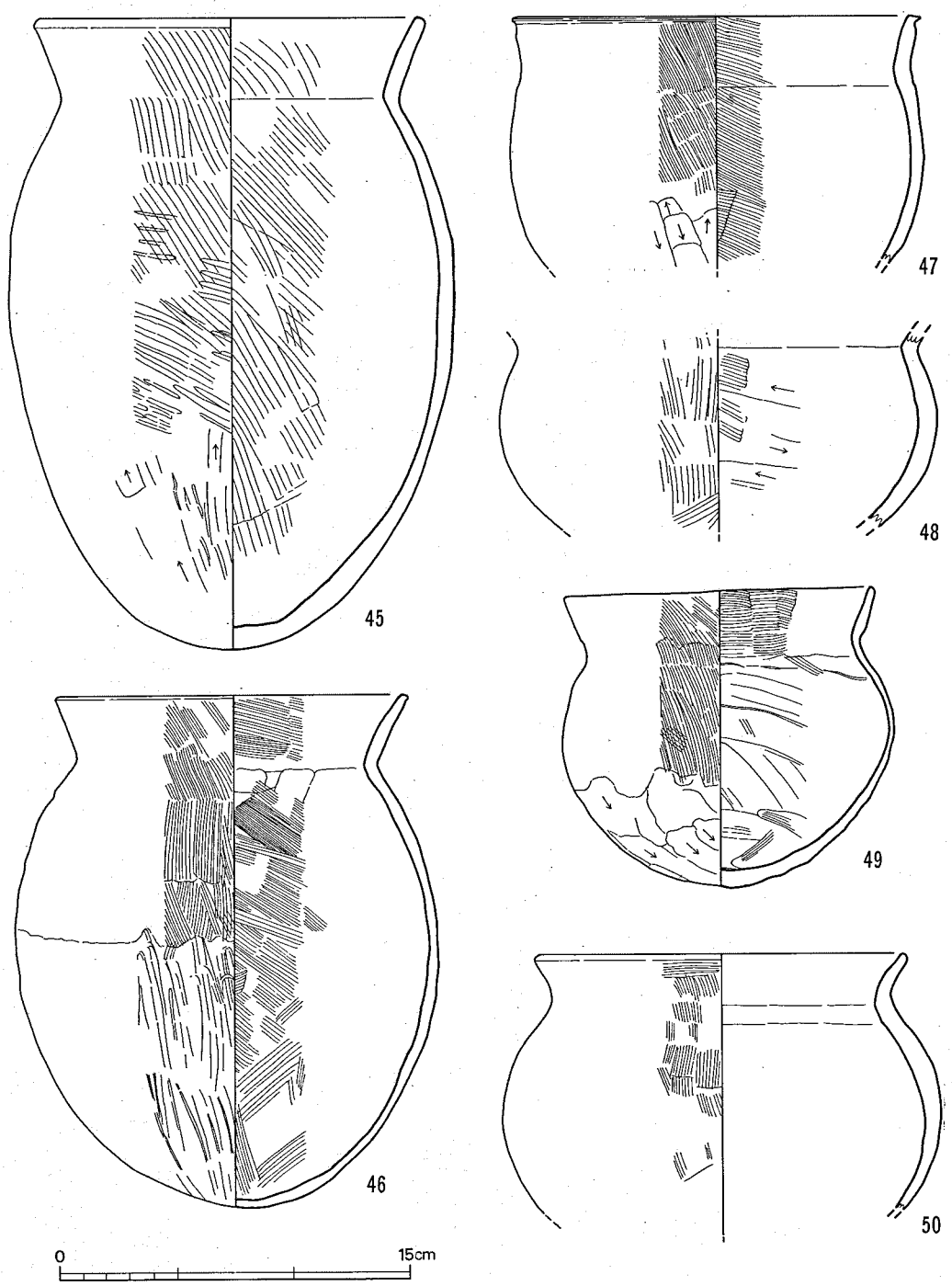
鉢Ib類(65•66)　口縁は外反して，胴部はさらに退化し，高杯の杯部状を呈するため内面はハケ目調整となる。66は外面下半にヘラケズリが残っている。



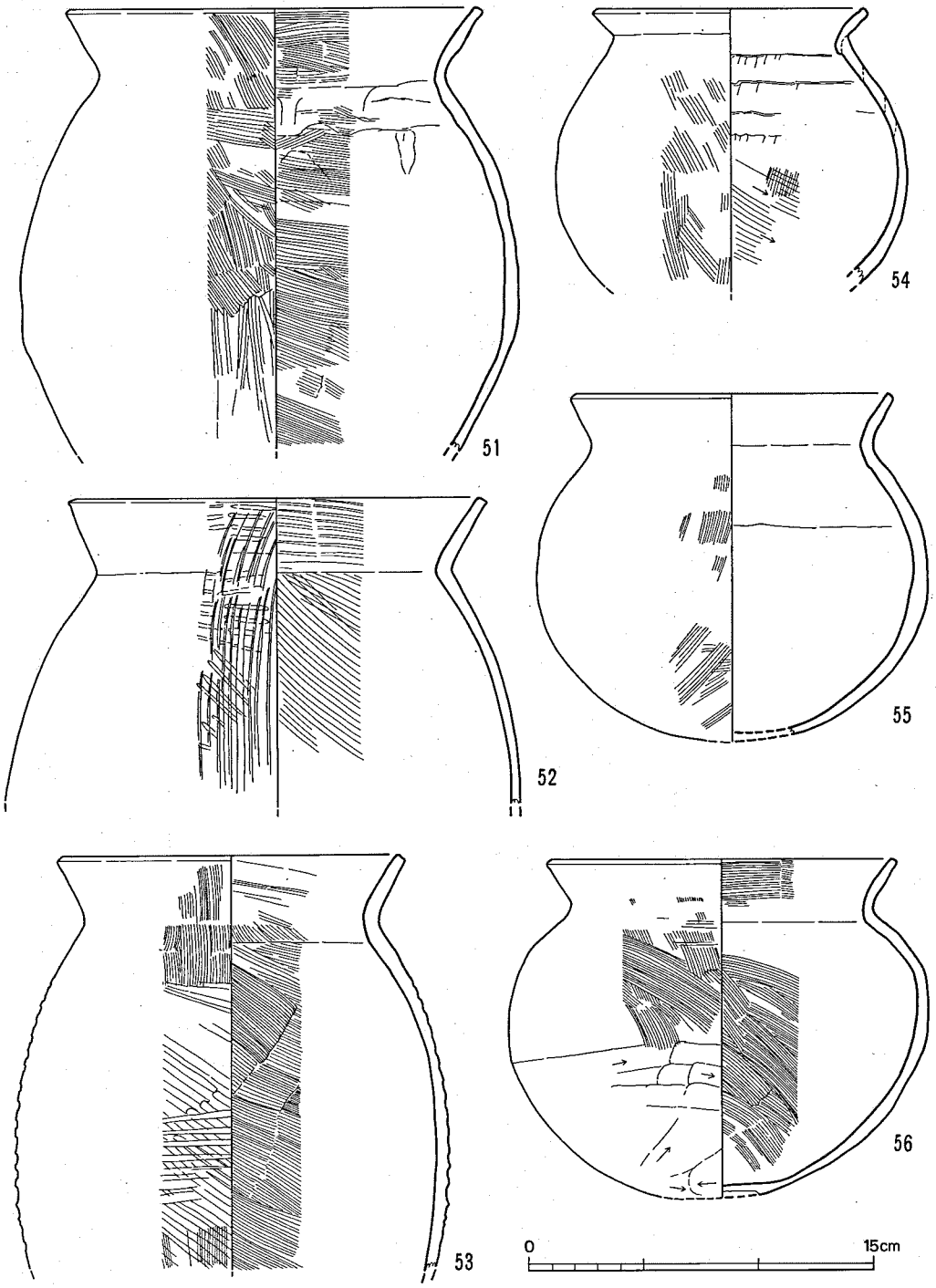
第 65 図　大溝上層出土土器実測図⑧ (1/3)



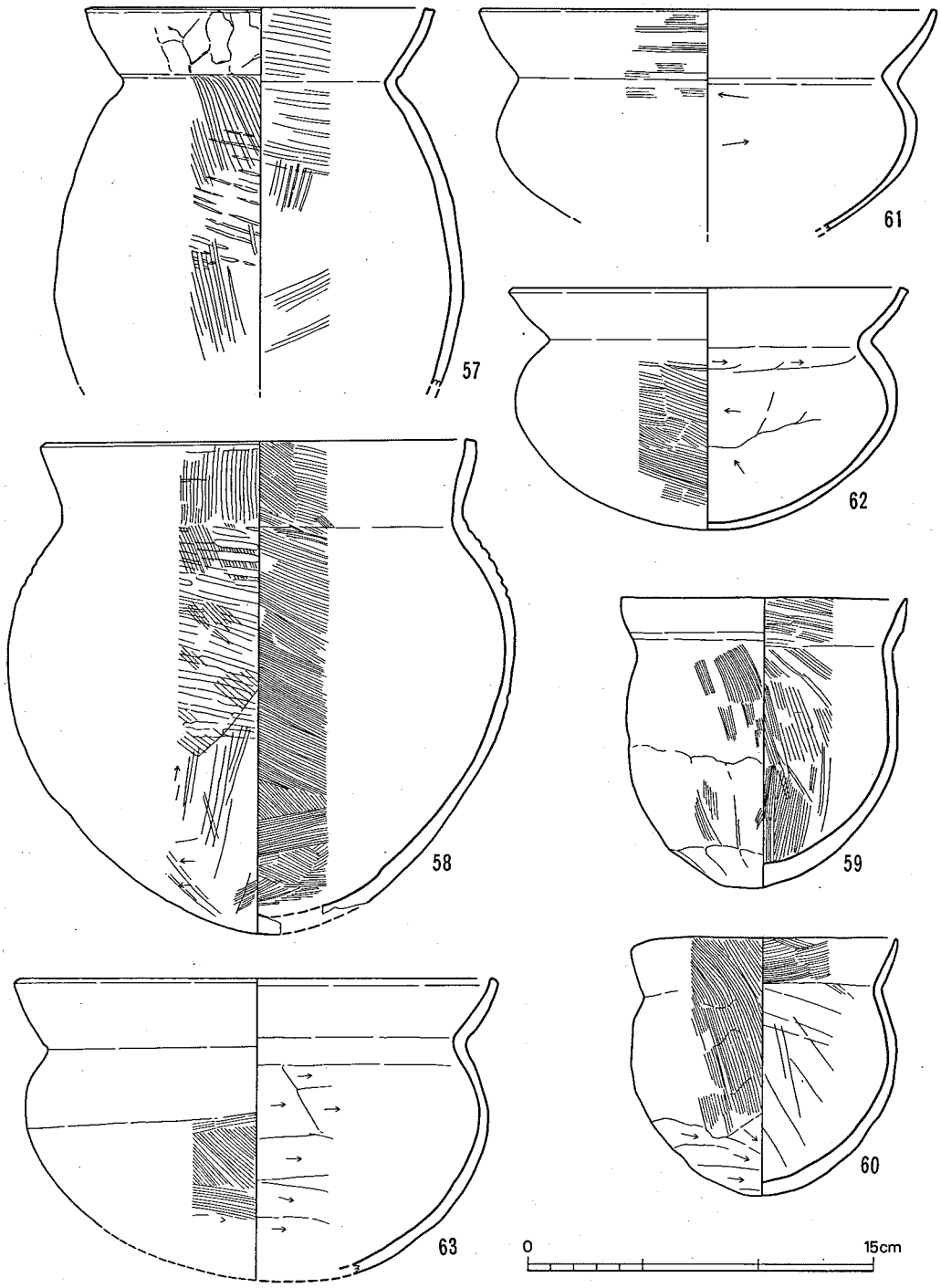
第 66 図　大溝上層出土土器実測図⑨ (1/3)



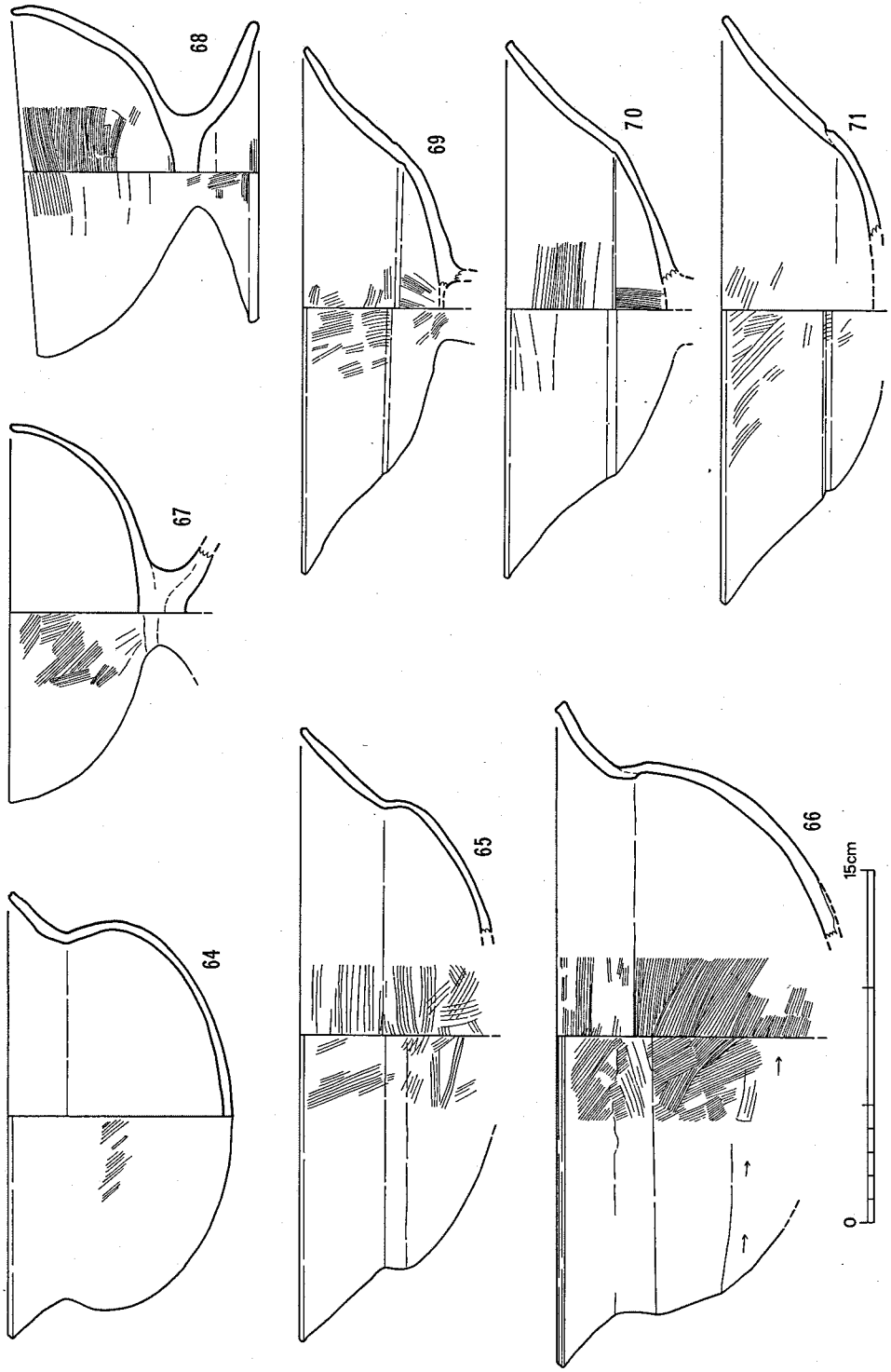
第 67 図 大溝上層出土土器実測図⑩ (1/3)



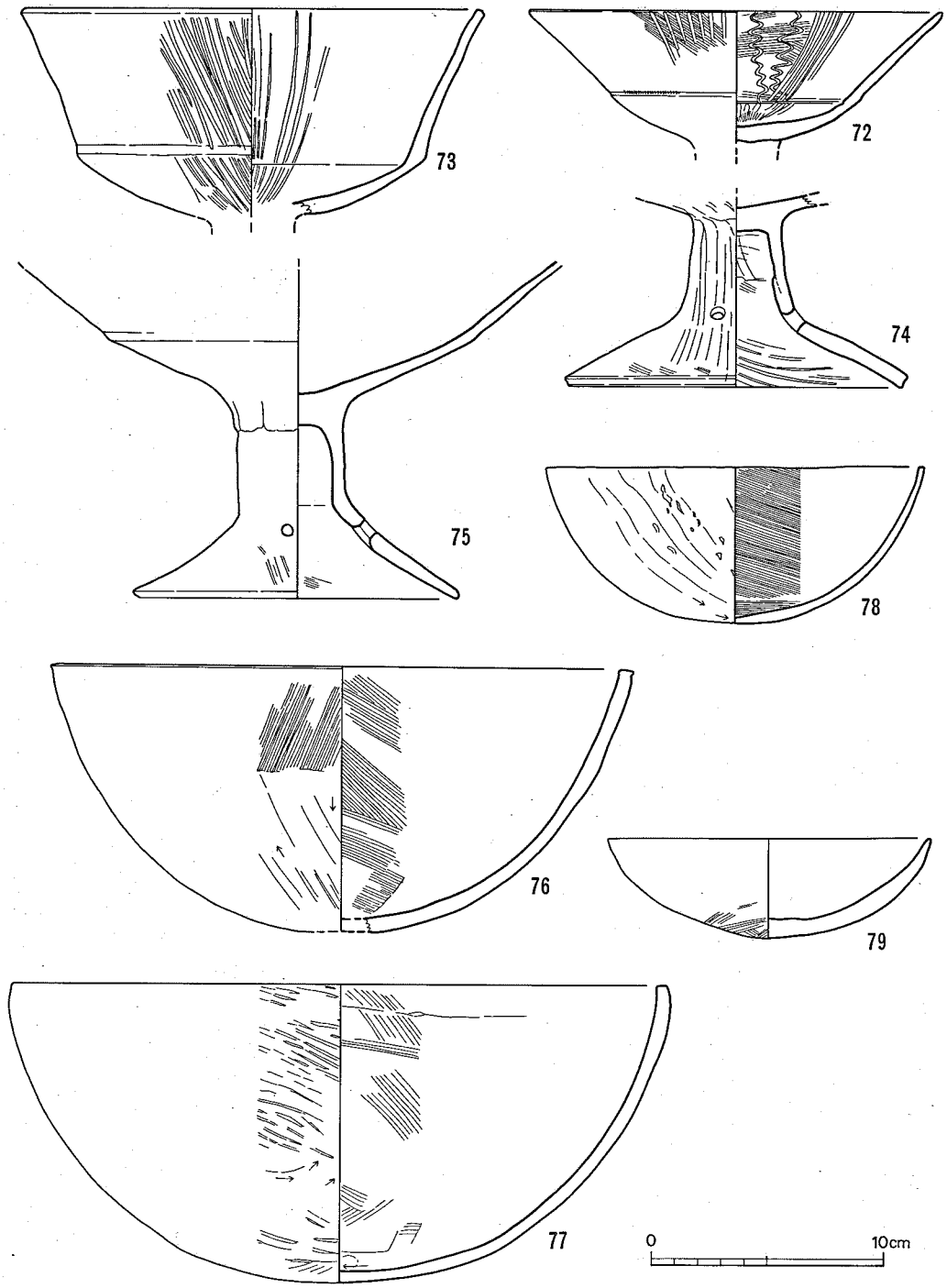
第 68 図　大溝上層出土土器実測図⑪ (1/3)



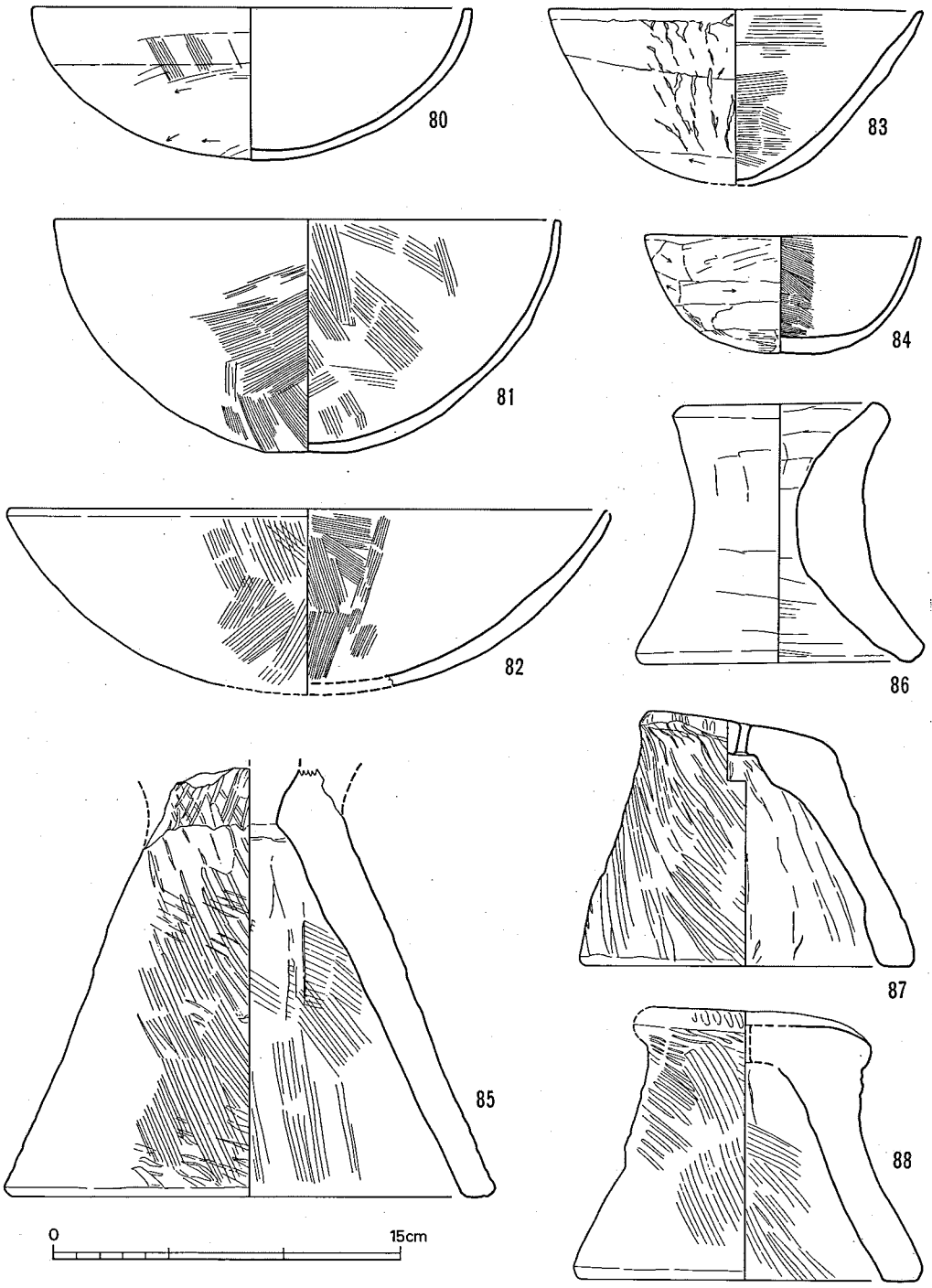
第 69 図　大溝上層出土土器実測図⑫ (1/3)



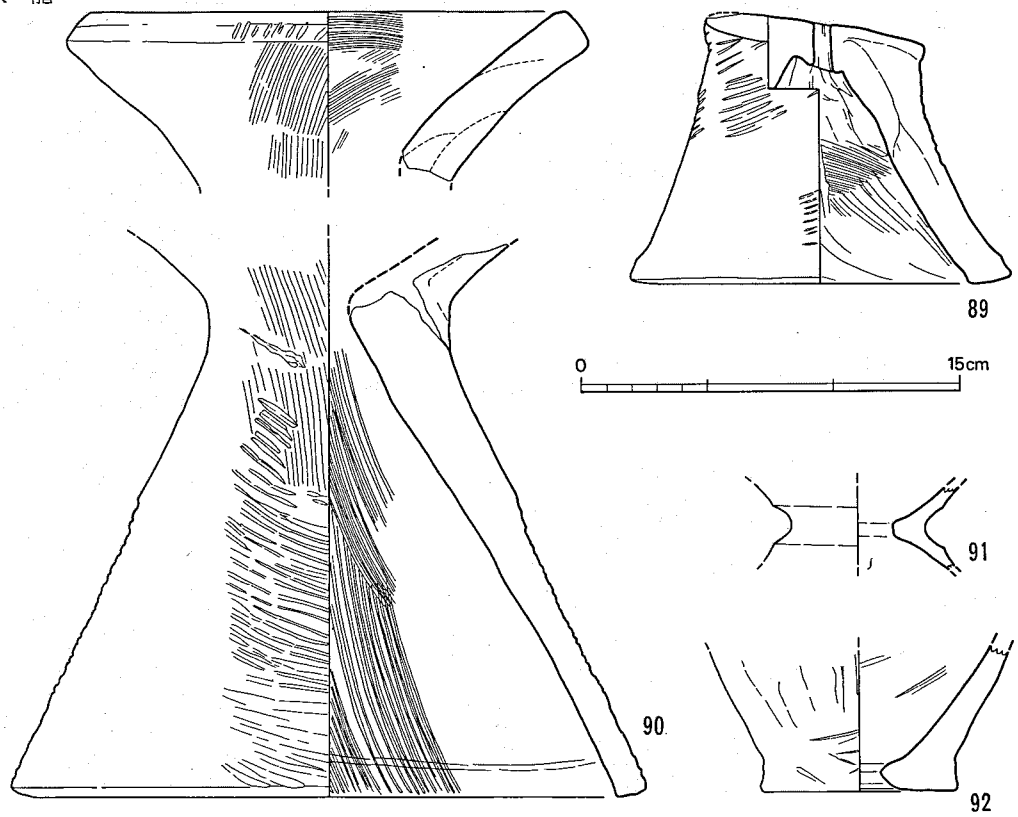
第70図　大溝上層出土土器実測図⑬ (1/3)



第 71 図 大溝上層出土土器実測図⑭ (1/3)



第 72 図　大溝上層出土土器実測図⑮ (1/3)



第 73 図　大溝上層出土土器実測図⑯ (1/3)

鉢II a類(76・77・80～82)　体部に丸味があるが本来の鉢で，口縁先端に水平面をもつ。内面はハケ目で，外面の調整も基本的に甕VI類と同じである。

鉢II b類(78・79・83・84)　鉢II a類の小型といえるが，小型になると口縁が尖がったり(79・83)，外面がヘラケズリのままであったりして，粗製となる。

台付鉢(67・68)　鉢II b類に台が付くものであるが，調整はさほど悪くならない。

高杯 I 類(69～71)　杯部のみであるが，外反部と受部の長さが等しく，受部に丸味があるところから西新式の系統を引くが小型になる。口径22.4cm～25cmの大きさ。

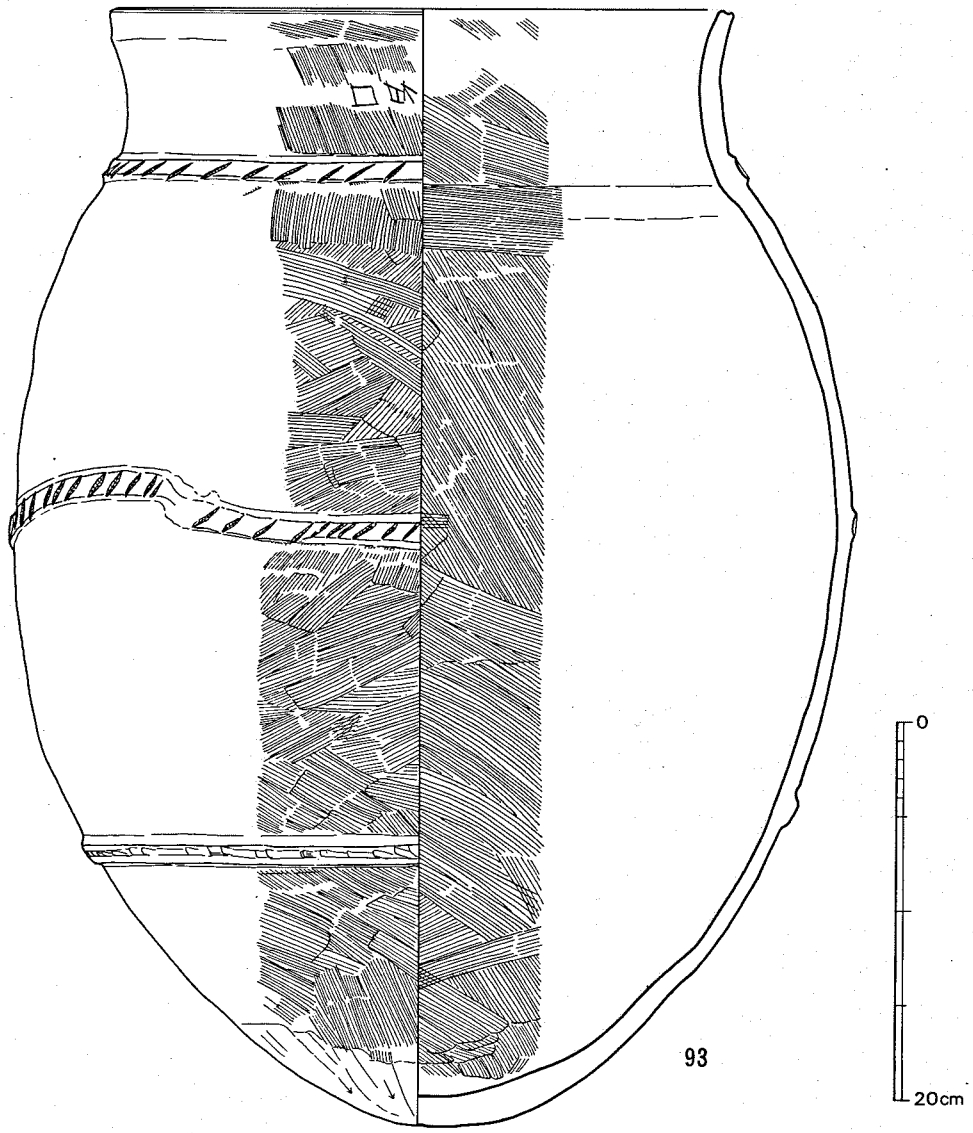
高杯II類(72)　小型で，杯部上半は直線的。内外面に暗文を施す。胎土は I 類と同じ。

高杯III類(73)　外反部が立つために，深い杯部を形成する。ハケの後に暗文風タテミガキ。

高杯IV類(74・75)　高杯 I ～III類に属する可能性もあるが，短脚で割合太い柱状部であるところから別にした。75の杯部は直線的であるところから I ～III に属さない。胎土は同じ。

支脚 I 類(86)　口径9.4cm，高さ11.2cmと小さいところから支脚としたが，上面は平坦であるから器台の役目もする。肉厚でヘラナデ調整をしている。

支脚II類(87～89)　上面が傾斜し，一方に突起をもつところは I 類と基本的に違い，複数使用



第 74 図　　大溝上層出土土器実測図⑰ (1/4)

を目的とする。上面に孔が貫通し，外面の粗い螺旋状のタタキ目を残すのが特徴。弥生終末のものと比較すると低くなっている。

器台Ⅰ類(91)　鼓形器台で小型。上下の段が凸帯状を呈さない。

器台Ⅱ類(85・90)　支脚Ⅱ類と同様に弥生後期からの系統を引くが，上半のくびれが著しくなり，直線的である。2点ともくびれの接合面にはキザミを入れて剝離を防いでいる。

甑(92)　弥生中期の甕で，焼成後に穿孔している。混入品である。

第 75 図　　大溝上層出土土器実測図⑱ (1/4)

中形甕Ⅰ類(93)　口径32.9cm，高さ58.6cm，胴最大径44cmの大きさで，口縁は湾曲するが直立する。胴には３本の退化した扁平凸帯をめぐらし，板目キザミを施すが，最下凸帯のキザミはヨコに引いている。内外面ともにハケ目調整するが，底部はハケ目の後にヘラケズリして丸底とする。胎土は，細砂(石英・金雲母・赤褐色)粒を含む褐色を呈す。

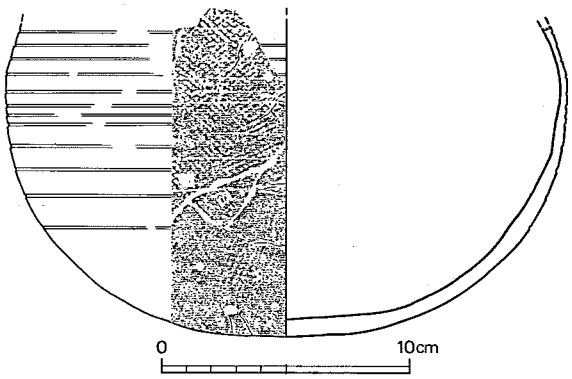
また，口縁部外面には線刻記号が２個あるが，細く小さな直線の組み合わせであるところから絵画ではなく，文字的記号と思われる。ちなみに，左側の記号は漢字の口と同じ筆順で書かれている。

中形甕Ⅱ類(94)　球形胴に外反する口縁が立つ。外面にはタタキを残し，胴下部はハケの後にケズリ状のナデを行って，ミガキ状を呈す部分もある。口縁端と口縁下の三角凸帯にはキザミがあるが，胴部の扁平凸帯にはタタキが残る。胎土は，細砂(石英・金雲母・角閃石)を多く含み，赤褐色を呈す。胴の中部に対称的に黒斑がある。

瓦質土器（第76図）

胴径22.5cmの扁球形を呈するが，胴上半以上を欠損。胴全体に細かい格子タタキを施し，間隔の狭い沈線をめぐらす。格子タタキは，沈線のある部分は方向の一定した斜格子となるが，最下沈線以下は方向が一定しない。内面はナデられ，タタキを残さない。

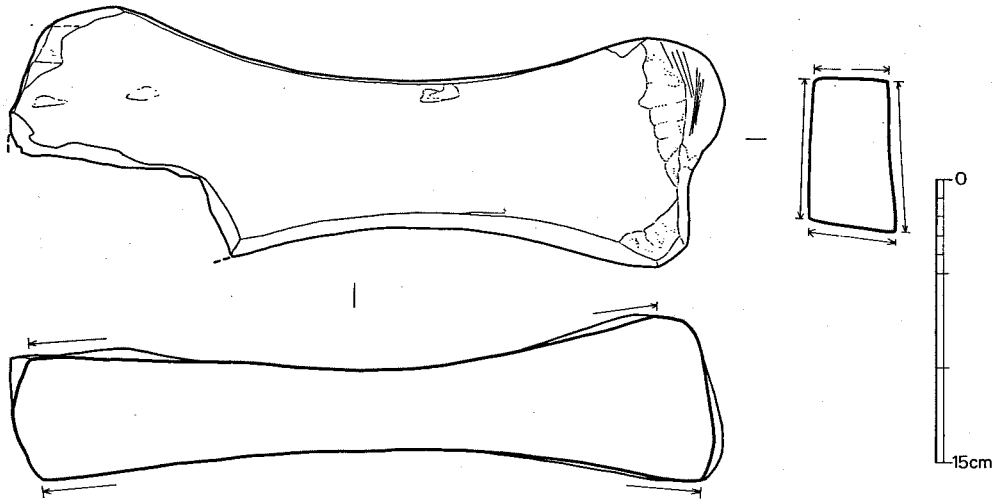
胎土は，軟質の外面灰黒色，内面灰色を呈し，砂粒(石英・長石・雲母・黒色粒)を含む。　（柳田）



第 76 図　大溝上層出土瓦質土器実測図 (1/3)

砥　石（図版31-2，第77図）

大溝の上層から出土した大型の砥石。硬めの細粒砂岩で手に触れた感触はさほどざらつかない。一部を欠き長さ37.7cm・最大幅12.2cm・最大厚8.6cm・重量の現在値4,030ｇを測るが，4面ともに使用による凹みが顕著で中程は幅6.8cm・厚さ4.3cmまで細まる。端部に切り込んだような擦り痕がある。　（小池）



第 77 図　大溝上層出土石器実測図 (1/4)

② 大溝II

I-11の北半にあたるS700の位置にあり，北側に12世紀頃の円形竪穴が重複している。大溝は長さ2ｍしか調査しなかったが，幅3.2m，深さ1.1mの規模で，横断面形は逆台形をしている。

八　龍

大溝埋土中には，ほとんど遺物が含まれていなかったが，下層から弥生後期らしき破片が出土しているので，寺口 II-17の2号住居跡下の大溝に連続するものと考える。

(2)　歴史時代の遺構と遺物

I-3・11の水路工事では，大溝 I・II 以外には，円形や不整形の竪穴が検出された。これは歴史時代に属するもので，北側から1～4号竪穴とした。

1号竪穴（図版30-1，第57図）

不整形竪穴で，調査区内では全形態や規模も不明。現況の大きさは，南北幅4.7m，東西1.7m，深さ1.3mの規模で，底面は割合平坦であるが，南側が1段浅くなる（深さ45cm）。

埋土内には土器類のほかに，焼土・灰・炭化物が多く，焼却したものを一時に埋めたものと思われる。S675～680の位置にある。（柳田）

土師器（図版31-3，第78図）

小　皿（1～31）　1～15はヘラ切りで，口径8.8cm～10.1cm，器高1.1cm～1.8cm，底径6.5cm～8.1cmである。16～31は糸切りで，口径8.2cm～9.9cm，器高0.9cm～1.4cm，底径5.7cm～7.4cmである。8・16・19・23・27・29・31を除いて，外底部に板状圧痕がある。21の外底には，墨書があるが，文字や絵とは理解し難い。

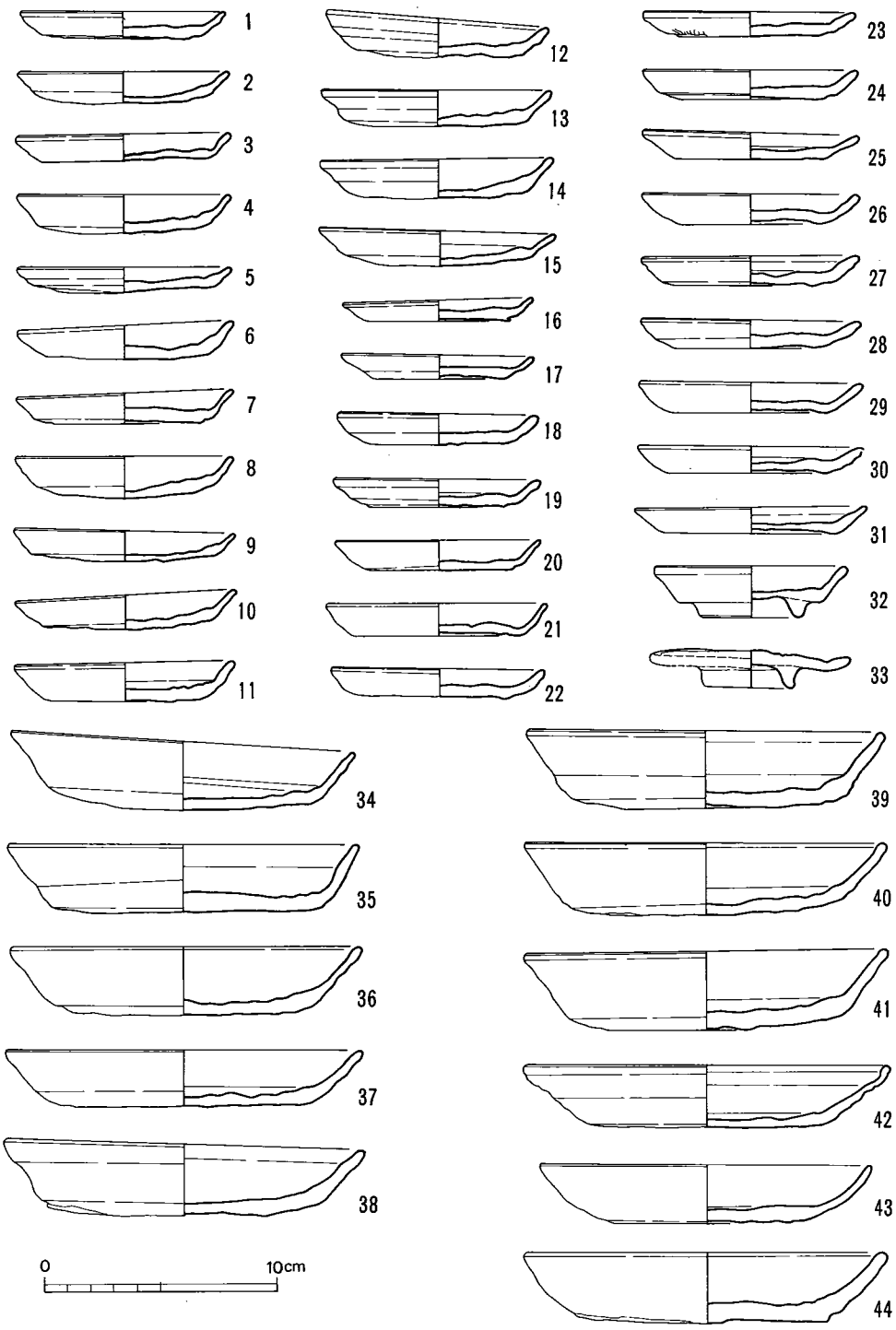
高台付小皿（32・33）　口径8.4・8.7cm，器高2.3・1.6cm，高台径4.5・4.0cmである。33は焼き歪みが著しい。

杯（34～44）　34～42はヘラ切りで，口径14.8cm～15.8cm，器高2.4cm～3.4cm，底径10.0cm～11.9cmである。43・44は糸切りで，口径14.3・15.8cm，

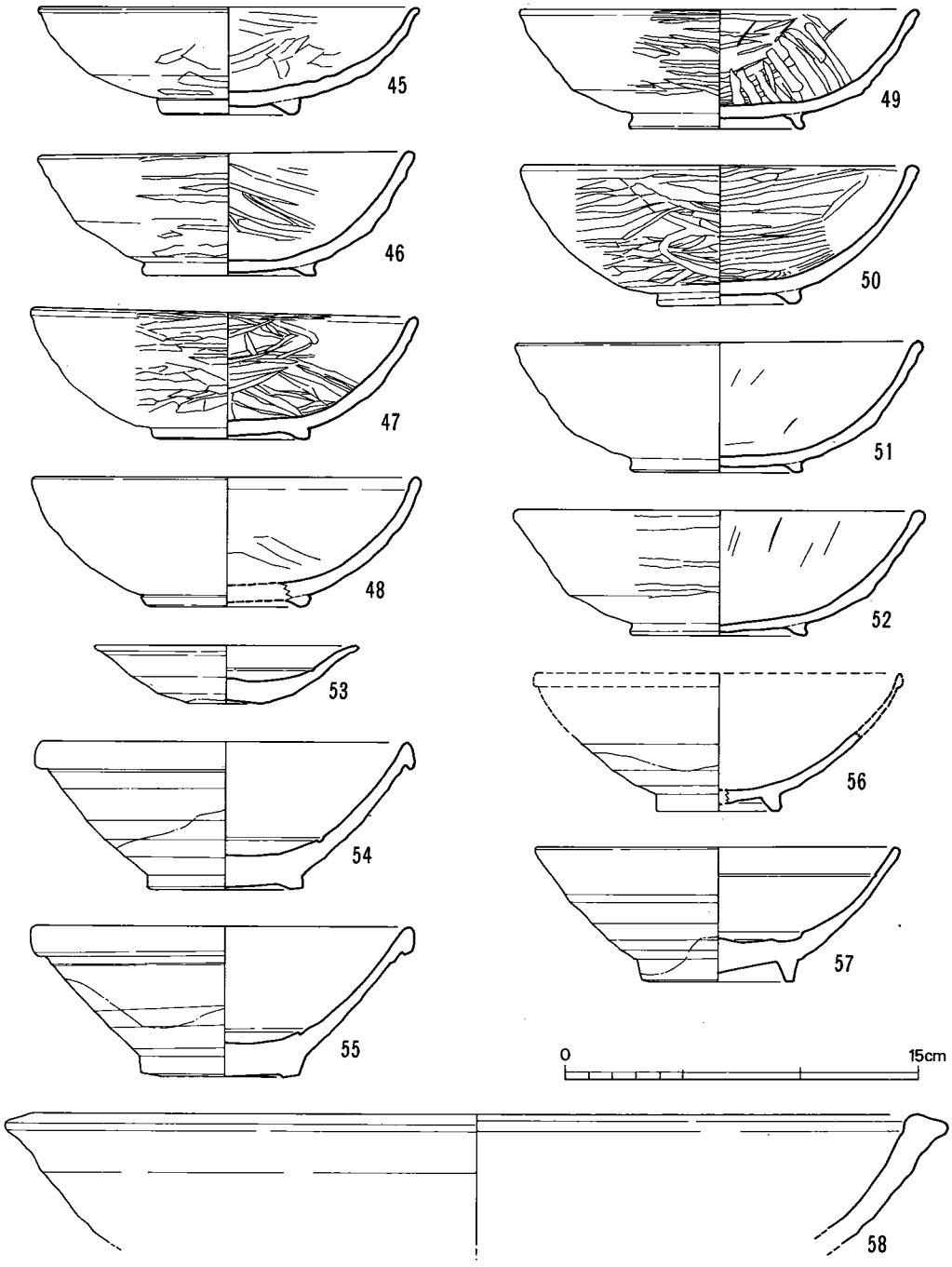
表3　1号竪穴出土小皿・杯法量表

（単位cm）

挿図番号	口径	器高	底径	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底ナデ	板状圧痕
小　皿							
1	8.8	1.2	6.5	○		○	○
2	9.1	1.4	7.7	○		○	○
3	9.2	1.2	7.1	○		○	○
4	9.2	1.7	7.4	○		○	○
5	9.3	1.1	7.8	○		○	○
6	9.3	1.5	7.0	○		○	○
7	9.4	1.3	6.6	○		○	○
8	9.4	1.8	7.2	○		○	
9	9.5	1.3	7.9	○		○	○
10	9.5	1.5	7.4	○		○	○
11	9.5	1.6	7.0	○		○	○
12	9.5	1.7	7.3	○		○	○
13	9.9	1.6	7.9	○		○	○
14	10.0	1.7	7.6	○		○	○
15	10.1	1.5	8.1	○		○	○
16	8.2	0.9	6.2		○	○	
17	8.2	1.1	5.7		○	○	○
18	8.6	1.4	5.8		○	○	○
19	8.8	1.2	5.8		○	○	
20	8.8	1.3	6.4		○	○	○
21	9.0	1.4	7.1		○	○	○
22	9.1	1.2	6.6		○	○	○
23	9.2	1.1	6.2		○	○	
24	9.2	1.3	6.0		○	○	○
25	9.3	1.2	6.3		○	○	○
26	9.3	1.3	6.0		○	○	○
27	9.4	1.3	6.4		○	○	
28	9.5	1.2	6.0		○	○	○
29	9.6	1.3	6.6		○	○	
30	9.7	1.2	6.8		○	○	○
31	9.9	1.1	7.4		○	○	
高台付小皿							
32	8.4	2.3	4.5			○	
33	8.7	1.6	4.0				
杯							
34	14.8	3.0	10.1	○		○	○
35	15.0	2.9	11.7	○		○	○
36	15.1	3.0	10.3	○		○	○
37	15.5	2.4	10.8	○		○	○
38	15.5	3.1	11.7	○		○	○
39	15.5	3.3	11.8	○		○	○
40	15.7	3.1	11.8	○		○	○
41	15.8	3.4	11.9	○		○	○
42	15.8	2.7	10.0	○		○	○
43	14.3	2.5	7.6		○	○	
44	15.8	3.0	10.9		○	○	○



第 78 図　1号竪穴出土土師器実測図（1/3）



第 79 図　1号竪穴出土瓦器・陶磁器実測図（1/3）

器高2.5•3.0cm，底径7.6•10.9cmである。43を除くすべてに板状圧痕がある。

杯•小皿を比すと，小皿はヘラ切りと糸切りが相半するに対して，杯はヘラ切りが圧倒的に多い特徴があり，糸切り手法はまず小皿に広く採用されたためと思われる。

瓦　器（第79図）

椀(45～52)　口径16.1cm～17.6cm，器高4.6cm～5.9cm，高台径6.2cm～7.5cmである。すべて押し出し技法による成形で体部中位には指頭圧痕がヘラミガキの下に観察できる。また板状圧痕が46•47•49•52にみられ，特に46は体部中位の屈曲部まで及び，押し出し技法の証左となる。ほとんどの内面に「コテ」痕跡がある。内外面のヘラミガキは丁寧で体部外面下位まで行っている。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。

鉢(58)　体部内外面をヘラミガキし，黒灰色に燻している。胎土中に少量砂礫を含む。

表4　1号竪穴出土瓦器椀法量表

(単位cm)

挿図番号	口径	器高	高台径
45	16.2	4.6	5.9
46	16.1	5.2	7.4
47	16.5	5.4	6.7
48	16.6	5.5	6.9
49	17.0	5.1	7.5
50	17.0	5.9	6.2
51	17.4	5.5	7.4
52	17.6	5.3	7.5

白　磁

皿(53)　口径11.2cm，器高2.5cm，底径3.2cmである。体部外面と外底部は回転ヘラケズリ調整している。胎土は灰白色，釉は淡緑色を呈し体部最下位付近までかかる。

椀(54～57)　すべて体部外面を回転ヘラケズリ調整を行う。57は内底の釉を環状にカキ取っている。53～56は11世紀末から12世紀前半代，57は12世紀中頃から後半代にかけて多く出土する。

以上，土師器・瓦器・陶磁器からみると，この不整形土壙は，12世紀中頃に埋没したと考えられる。

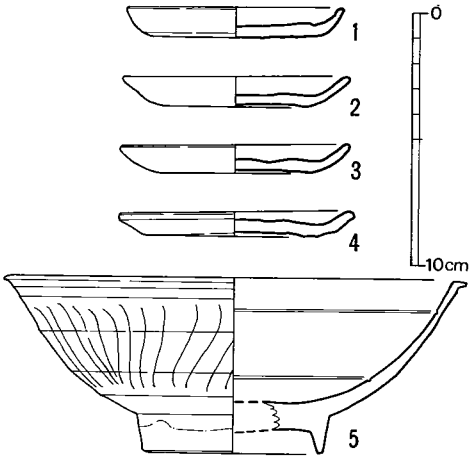
Ⅰ-3第3層出土土器・陶磁器

土師器（第80図）

小　皿（1～4）　1はヘラ切り，2～4は糸切りである。1は口径8.6cm，器高1.2cm，底径6.6cmである。2～4は口径9.0cm～9.4cm，器高1.0cm～1.3cm，底径5.7cm～6.8cmである。1・4の外底には板状圧痕がある。

白　磁（第80図）

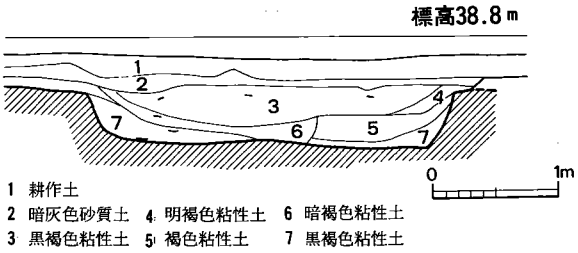
椀（5）　口径18.4cm，器高6.9cm，高台径7.2cmである。体部内面に2条の沈線をめぐらし，外面には縦沈線を入れている。胎土は灰白色，釉は淡黄灰白色を呈する。　（森田）



第80図　Ⅰ-3 第3層出土土師器・陶磁器実測図(1/3)

2号竪穴（図版30-2，第57・81図）

Ⅰ-11の北半にあたるS695～698の位置にある円形竪穴で，東側にこれより古い遺構があるが，東側遺構も弥生後期大溝Ⅱよりも新しい。竪穴は径2.95m，深さ54cmで，底面は平坦である。土器は各層に見られたが，一時に埋没したものと思われる。（柳田）



第 81 図　2号竪穴断面土層図（1/60）

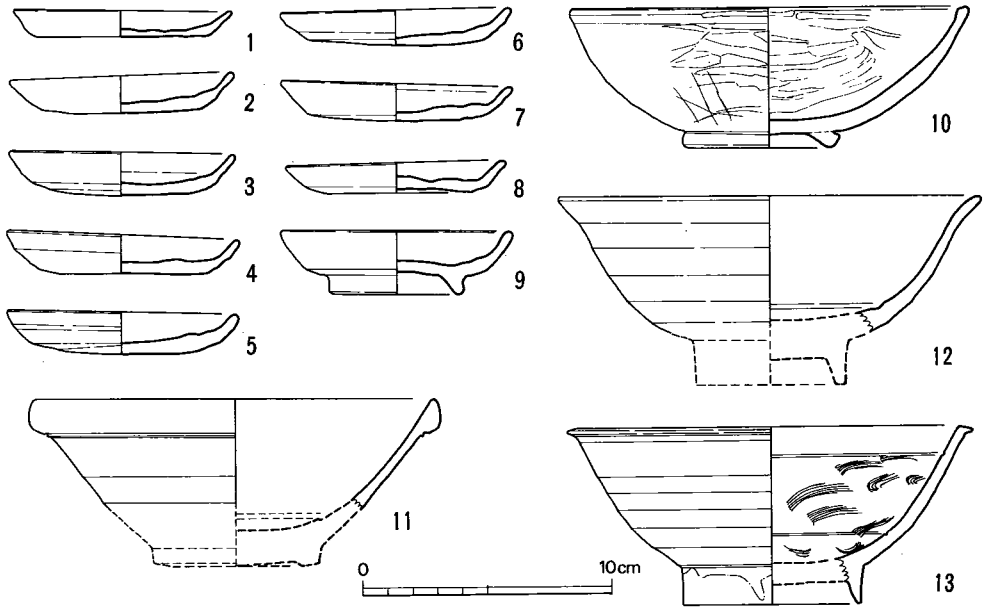
土師器（第82図）

小　皿（1～8）　1～7はヘラ切り離しで，口径8.7cm～9.3cm，器高1.1cm～1.7cm，底径6.4cm～7.2cmである。8は糸切り離しで，口径8.8cm，器高1.2cm，底径5.7cmである。すべて内底にナデ，外底に板状圧痕がある。

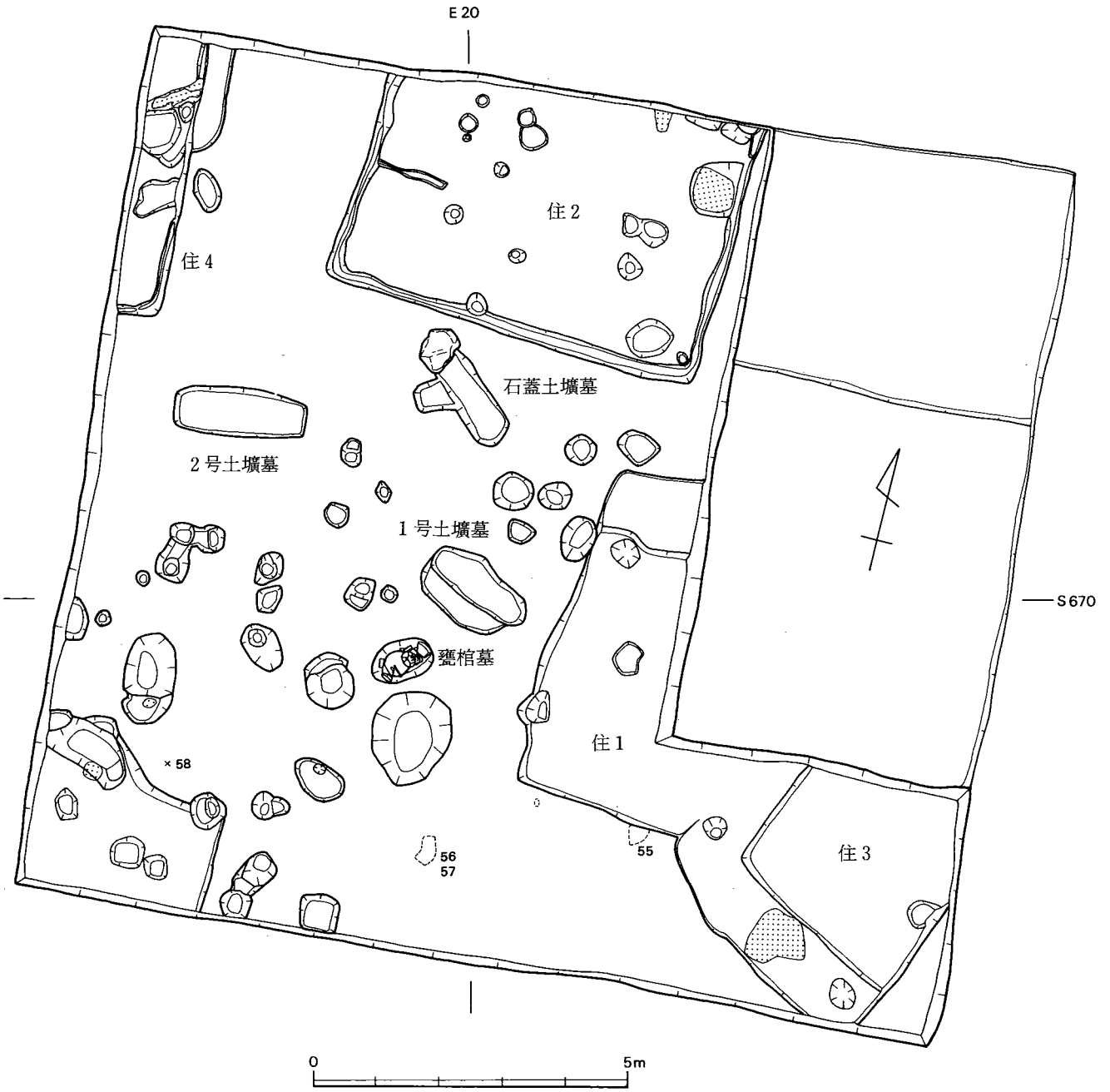
高台付小皿（9）　口径9.3cm，器高2.6cm，高台径5.4cmである。外底部は磨滅のため切り離し手法は明らかでないが，皿部の法量や形態からヘラ切りと考えられる。

瓦　器（第82図）

椀(10)　口径16.1cm，器高5.7cm，高台径6.3cmである。丸底の杯と同様の製作手法を有し，体部外面中位に指頭圧痕が乱雑に残っている。体部内面および外面上位には丁寧なヘラミガキを行うが，外面中位以下は雑である。体部外面にヘラによる線刻がみられる。胎土は精良で砂粒



第 82 図　2号竪穴・Ⅰ-11第3層 出土土師器・陶磁器実測図（1/3）



第 83 図　八 龍 I -7 遺 構 配 置 図 (1/100)

は少ない。焼成は良好で灰色ないしは黒色を呈する。

この円形竪穴から出土した小皿のほとんどはヘラ切りであること，また瓦器椀などから12世紀中頃と思われる。

Ⅰ-11第3層出土陶磁器（第82図）

出土した陶磁器はすべて白磁である。

椀(11～13)　すべて体部外面を回転ヘラケズリしている。13は内面に櫛状工具で文様を入れる。11～13は11世紀終わり頃から12世紀中頃までに最も多く出土する代表的器形である。

（森田）

表5　2号竪穴出土小皿・瓦器椀法量表

（単位cm）

挿図番号	口径	器高	底径	切り離し		内底ナデ	板状圧痕
				ヘラ	糸		
小　皿							
1	8.7	1.1	6.8	○		○	○
2	8.9	1.5	6.4	○		○	○
3	9.0	1.8	6.4	○		○	○
4	9.2	1.6	6.7	○		○	○
5	9.2	1.7	7.2	○		○	○
6	9.3	1.4	7.1	○		○	○
7	9.3	1.5	7.0	○		○	○
8	8.8	1.2	5.7		○	○	○
高台付小皿							
9	9.3	2.6	5.4			○	
瓦器椀							
10	16.1	5.7	6.3				

3.　Ⅰ-7

八龍Ⅰ-7地区は，牛舎建設のための緊急的な調査で，遺構確認を目的とするものであった。調査区では，表土下に50cm前後の砂礫を含む整地層があり掘削に時間を要した。

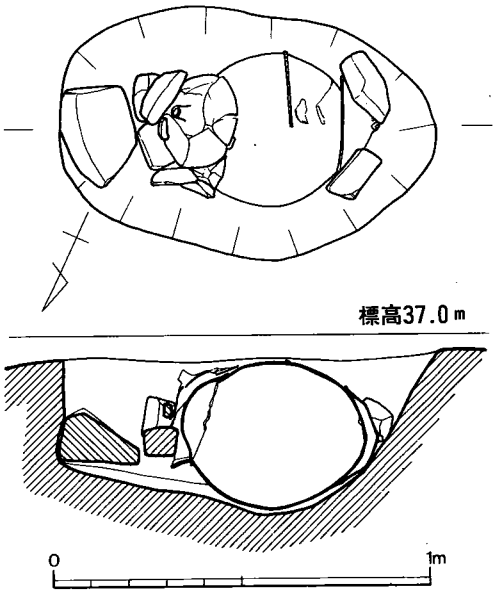
調査では，小児甕棺1基・土壙墓3基・住居跡4軒と不整形遺構を検出したが，土壙墓は歴史時代のものも含まれていた。　（柳田）

(1)　墓　地（図版32-2）

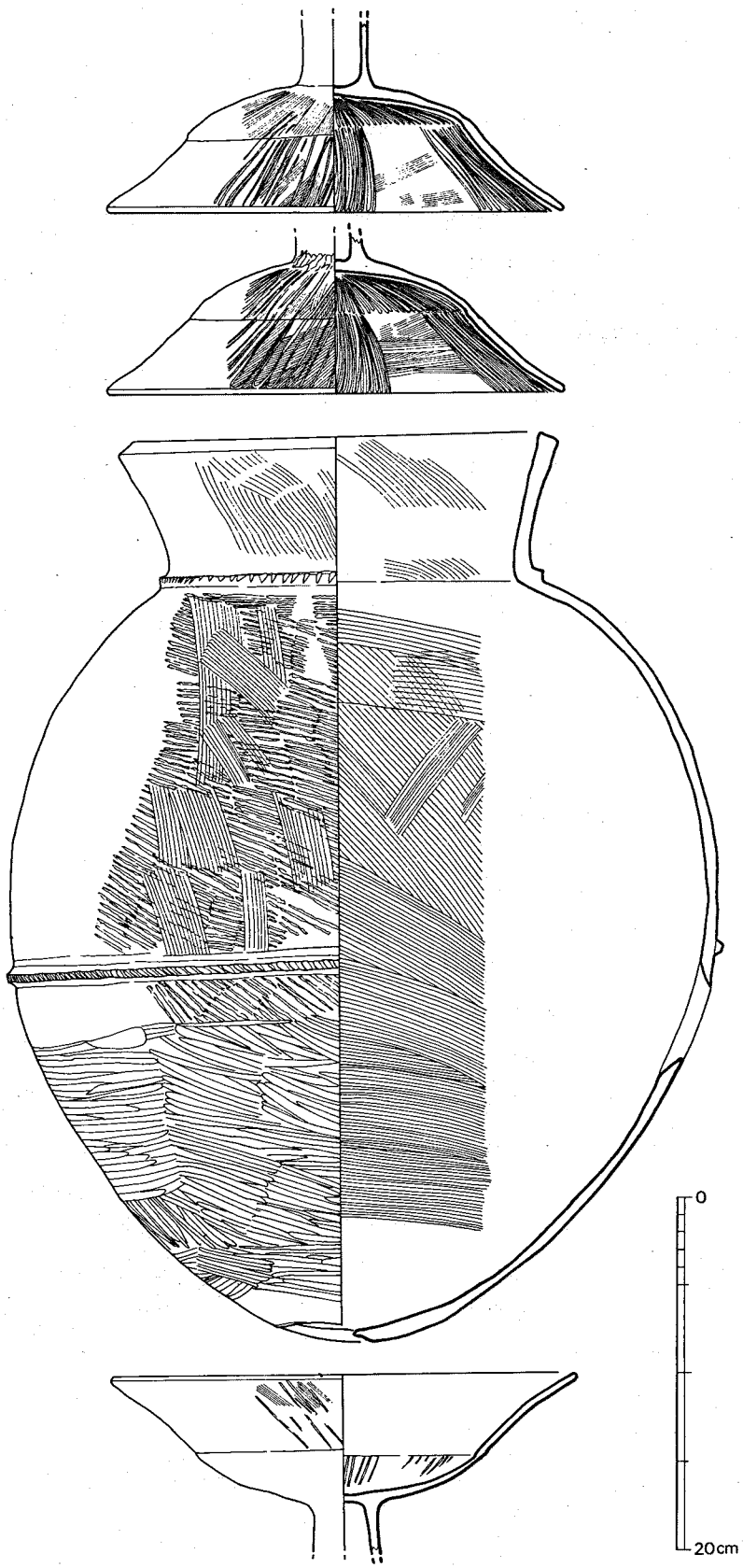
甕棺墓（図版33-1，第84図）

調査区のほぼ中央，1号土壙墓の南で検出した小児用甕棺墓である。墓壙は第3層の黒色礫層に掘り込まれ，長軸1m，短軸65cmほどの楕円形状を呈する。

墓壙の形状は，北東側が垂直に立ち上がり，底面付近に1個の河原石を敷いている。南西側はゆるやかに立ち上がる。甕棺は単棺で，口縁部に2個，底部に1個の高杯の杯部で塞いでいる。口縁部は本来完形ではなく，欠損している



第84図　甕棺墓実測図（1/20）



第 85 図　甕棺実測図 (1/4)

ために，その部分を高杯で塞ぎ，蓋のかわりとしたものと思われる。さらに，この2個の高杯は，10～15cm前後の河原石5個で固定されている。底部付近には穿孔があり，この孔を同様に高杯で塞ぎ，対になる20cm前後の河原石2個で固定している。高杯3個はともに同形式のもので，すべて脚部上位で折られている。　（立石）

主軸方位はN66°Eを示す。

甕　棺(図版37，第85図) 上蓋は，口径25.5cm，杯部深さ6.5cmの高杯である。杯部の外反部と受部の長さはほぼ同じ長さで，内外面ともに細かいハケ目の後にタテのヘラ描き暗文を施す。杯内面外反部の暗文は，3カ所の空間を設けている。胎土は，金雲母・赤褐色粒などをかなり含み，黄茶褐色を呈す。

中蓋は，口径25.6cm，杯部深さ6.9cmの高杯で，上蓋と同様に脚部を打ち欠いている。調整法も上蓋と同様であるが，胎土は金雲母・赤褐色粒を含む精製粘土。

底蓋は，口径26.1cm，杯部深さ6.7cmの高杯で，脚部打欠き。調整法・胎土も上蓋・中蓋と同様であるが，かなり表面が荒れている。

下甕は，口径24.8cm，高さ51cm，胴最大径39.6cmの大きさの甕であるが，頸部径は小さく，口縁も直立に近いもの。口縁下に三角凸帯，胴部に台形凸帯各1本をめぐらし，密なキザミ目を施す。内面はハケ目調整であるが，胴部外面は上半がタタキの後ハケ目，下半がタタキの後ケズって丸底とし，ヘラヨコミガキで仕上げている。胴部と底部に焼成後の穿孔がある。

胎土は，粗砂・細砂(石英・金雲母)を含むくすんだ茶褐色を呈す。

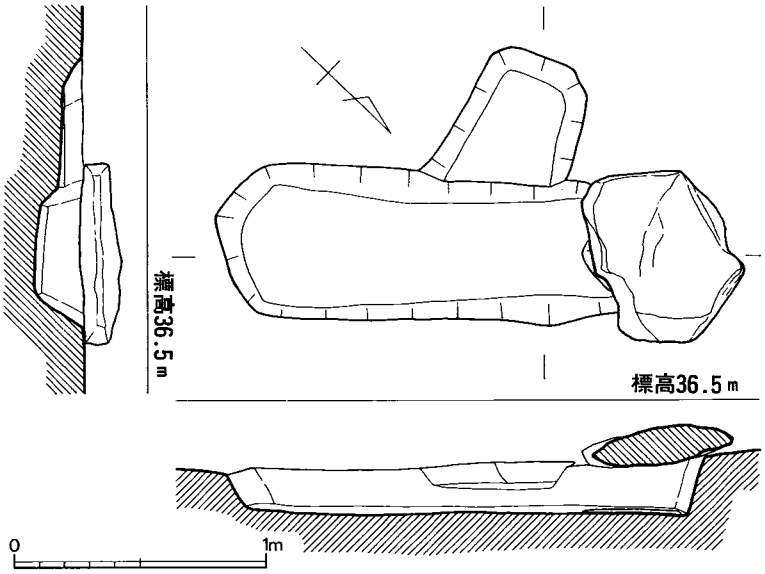
甕棺は，西新式に含まれるもので，とくに高杯はサキゾノI-1の1号住居跡出土例と同型式であることから，庄内式と併行する土師器Ia式である。

（柳田）

石蓋土壙墓

(図版34-1，第86図)

頭位部に1枚の石蓋をもつ状態で検出した土壙墓で，全長約1.95m，幅約0.6m，深さ0.17mを測り，主軸はN44°Wである。床面は平坦で，頭位部に朱を検出し



第 86 図　石蓋土壙墓実測図 (1/30)

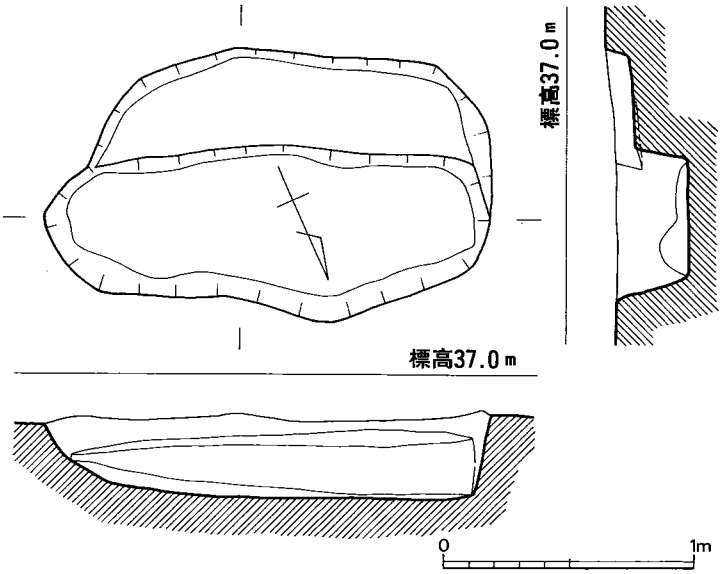
た。石蓋は，約0.6×0.8mの大きさで，約0.16mの厚さである。

石蓋土壙墓の東側に重複した土壙を検出しているが，この土壙も土壙墓の可能性がないこともない。

1号土壙墓

（図版33-2，第87図）

隅丸長方形プランの土壙墓で，全長約1.77m，幅約0.7m，深さ約0.3mを測る。北西部を頭位とし，主軸はN66°Wである。床面はほぼ平坦である。出土遺物はなく，時期不明。

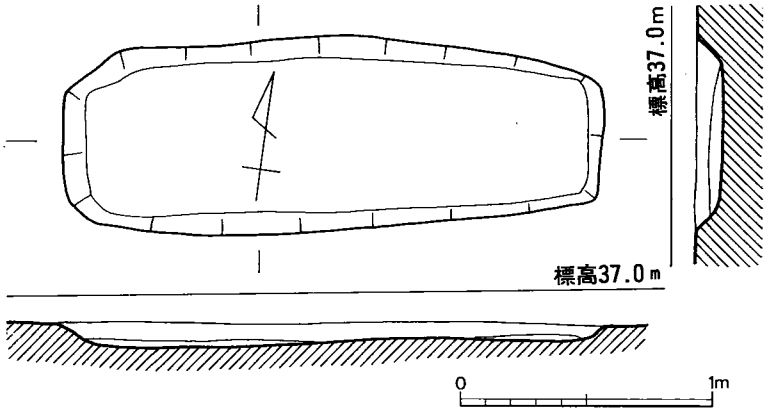


第 87 図　1号土壙墓実測図（1/30）

土壙墓南側に土壙を重複しているが性格は不明である。　（川村）

2号土壙墓（図版34-2，第88図）

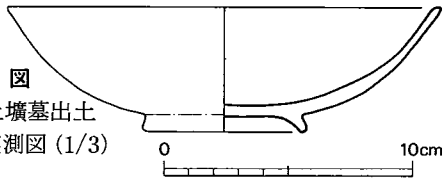
調査区の西側にあり，上部は削平され床面がわずかに残っていた程度である。土壙墓は，長さ212cm，西側幅75cm，東側幅55cmの大きさで，幅から西枕と思われる。床面から瓦器が出土したが，土壙は深さ8cmであった。　（柳田）



第 88 図　2号土壙墓実測図（1/30）

土　器（第89図）

壙底から口径17.4cm，器高5.0cm，高台径6.6cmを測る瓦器椀が出土した。器面磨滅のためヘラミガキ等の調整は明らかではない。胎土は精良である。焼成は良好で灰色を呈する。　（森田）



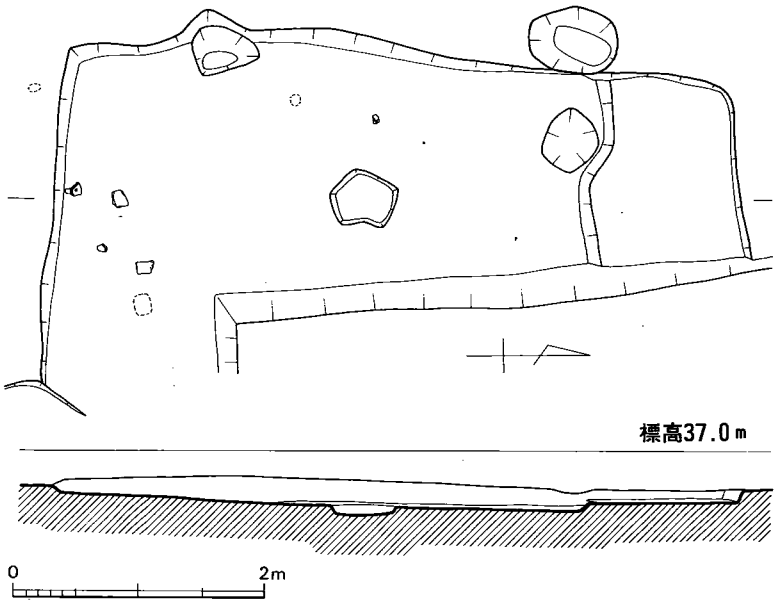
第 89 図
2号土壙墓出土瓦器実測図（1/3）

(2)　住居跡

住居跡は，墓地群の部分には検出されなかったが，むしろ住居跡によって他の墓地が破壊されたものと思われる。調査区の南西側に不整形遺構があるが，この北側付近では復原可能な土器も出土しているところから，住居跡がこの部分にあり，床面のみ残ったものと思われる。

1号住居跡（図版35-1，第90図）

調査区の東側にあり，東側の半分以上を調査していないが，東側は削平され床面の3分の1は失われているものと思われる。住居は南北長さ5.6mの大きさで，北側に幅1.25mのベッドを持つ。住居の壁面は西側で21cmしか残っていないが，ベッドは6cmの高さであった。



第 90 図　1号住居跡実測図（1/60）

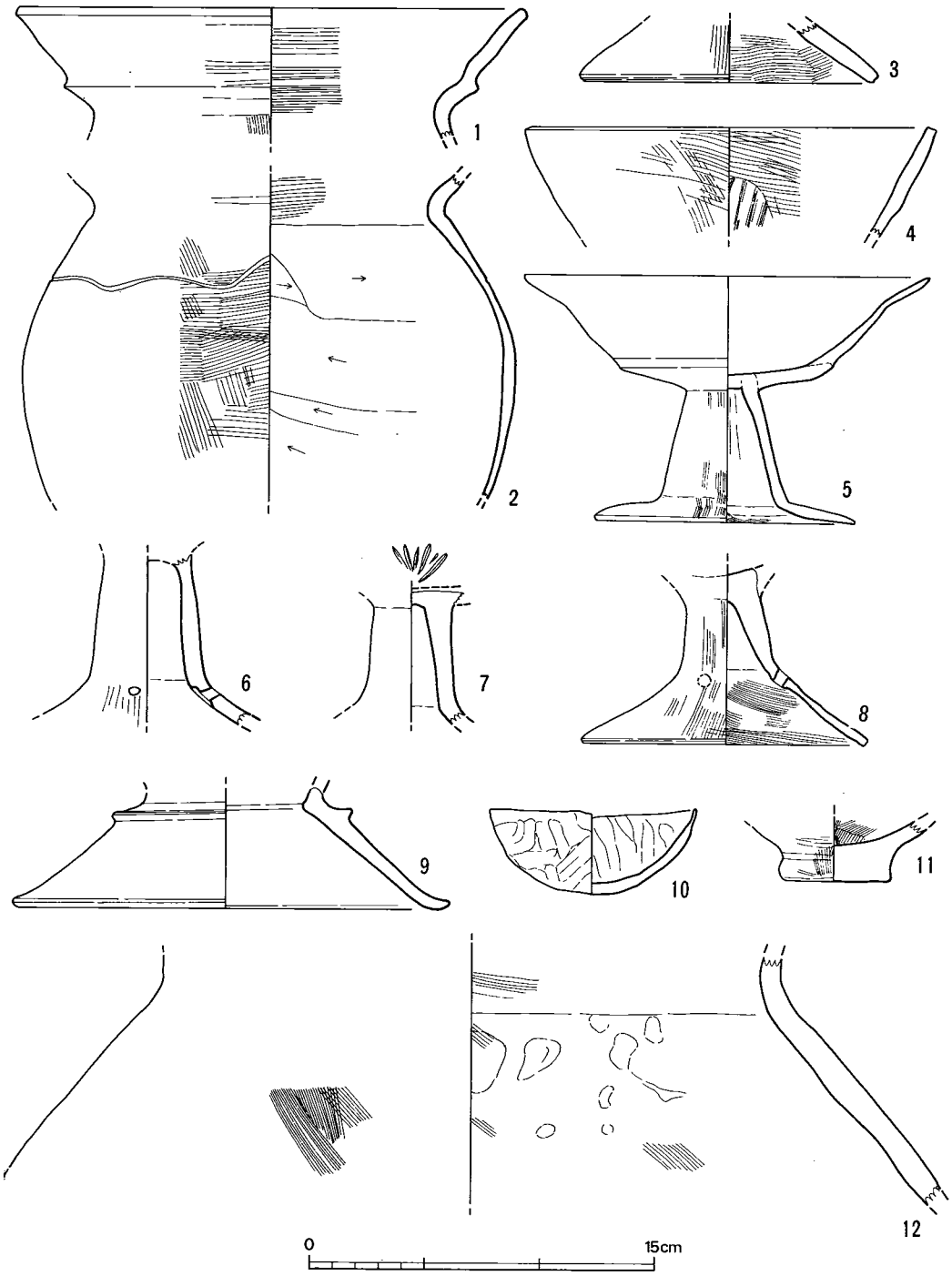
住居床面には柱穴らしきものはないが，中央付近に浅いものがある。

遺物は，埋土中に若干の土器と鉄器が出土したが，鉄鑿は遺構検出時のもので整地層直下の出土である。

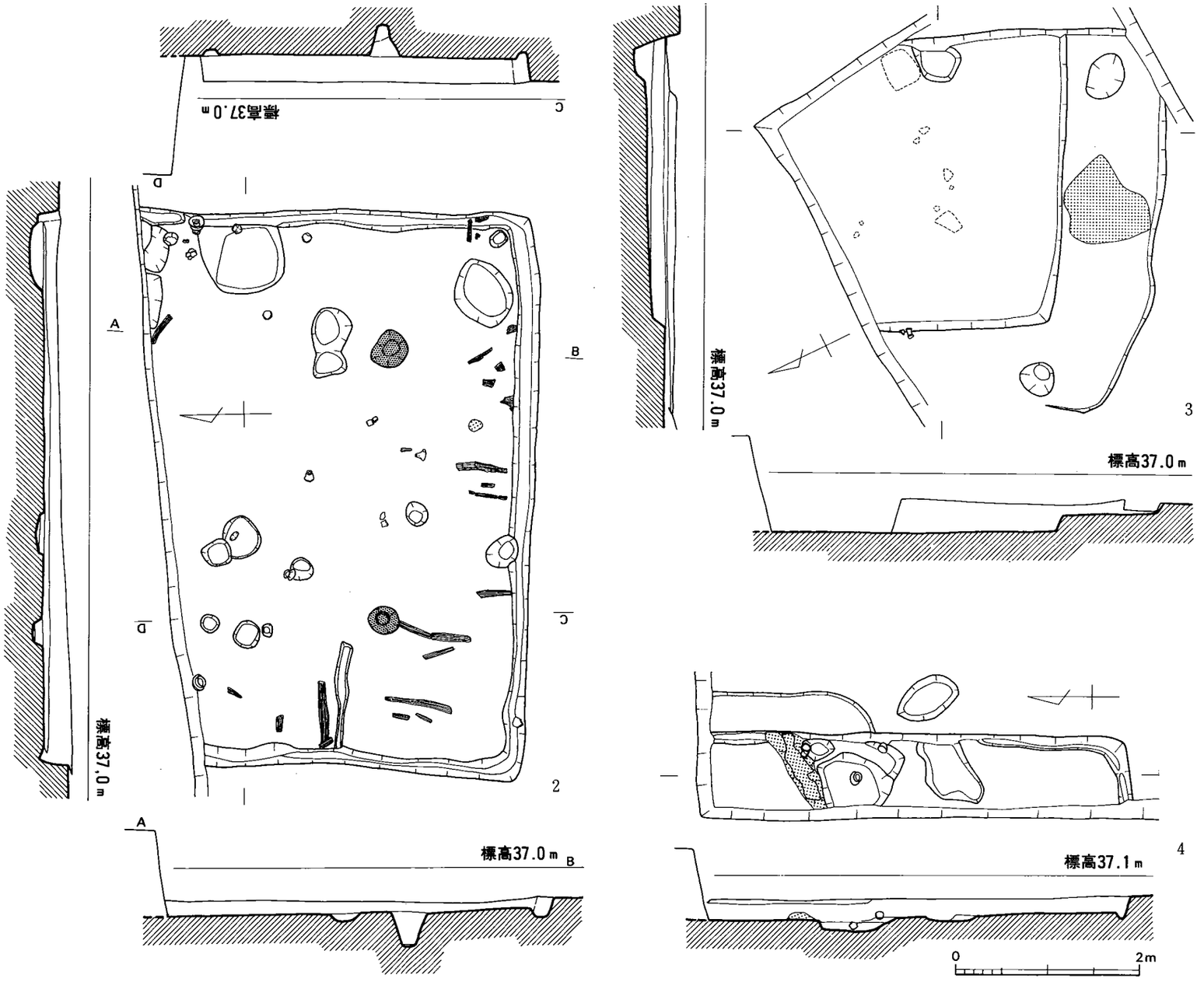
土　器（図版38，第91図1～12）1は，二重口縁甕で，口径22.3cmの大きさ。2の甕は肩部にヘラ描き波状文をめぐらし，内面ヘラケズリ。3は台部片。4は鉢と思われるが不明。

5は，口径17.7cm，高さ10.7cmの高杯で，杯部の屈曲した外反と，脚裾部の屈曲が特徴。脚部内はしぼりの後にナデ，他の内外面はナデ仕上げであるが，杯部外面はミガキに近い。胎土は，細砂を含むが精良で赤褐色を呈す。6～8は高杯の脚部であるが，5とは違っている。8で代表させると，短脚裾開きであるが，5のように屈曲せず，屈曲部に3孔を有する。外面はタテミガキであるが，内面はヨコナデとハケ目調整。胎土に赤褐色粒を含み，明褐色を呈す。

9は鼓形器台で，裾径20cmの大きさであるが，磨滅がひどく調整不明。10は口径9cmの手捏土器。11は底部であるが近畿地方のものであろう。12は，大甕であるが，頸部の状況から二重



第 91 図 1号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 92 図　八龍 I-18　2・3・4 号住居跡実測図　(1/60)

口縁になるものと思われる。

1号住居跡の時期は，土師器IIa式に属する。　（柳田）

鉄　器（図版39-2，第100図1・2）1は埋土の上層から出土した袋部をもつ鑿で，長さ12.3cmのうち約7cmを袋部が占める。先端部は幅7～9mm，厚さ3～6mmの短形断面を呈し，平鑿の刃部は幅6mmで尖る。袋部は厚さ3mm前後で，下端の直径2～2.2cmに開くが，中ほどの断面形では僅かに角をもつ。全体に銹化のため膨みを生じている。

2は鉄鏃の基部破片であろう。現存長2.7cmで端部は尖がる。埋土から出土した。　（小池）

2号住居跡（図版35-2・3，第92図）

調査区の北側にあり，半分よりやや多く調査することができた。住居跡は，東西長さ6mで，南北の長さは貯蔵穴を中心にして復原すると約6.3mとなる。住居の壁は床面から保存のよいところで30cmの高さ残っているが，壁下には深さ約10cm内，幅15cm前後の周溝があり東側の貯蔵穴状土壙に続く。土壙は，90cm×80cm，深さ14cmのもので，底面は舟底状を呈す。

柱穴は2本検出できたが，その位置関係から4本柱となるものと思われる。東西の柱間は2.9m。柱穴は，径30cm～40cm，深さ35cm～40cmで，柱の径は約15cmの太さであった。柱の回りには礫を詰めていた。

住居は火を受けたらしく，炭化材と焼土が床面に見られ，遺物も多いが，貯蔵穴付近の土器は火を受けてはいるが完形品であった。

土　器（図版38，第93～94図13～43）　13～15は小形丸底坩で，13は口径6.4cm，高さ6.9cm，15は口径9.2cm，高さ10.4cmの大きさ。

16も11と同様に近畿地方のものか。

17は，口縁が直立に近い甕で，内面ケズリがなく肉厚。胎土は細砂を含むくすんだ褐色。

18～23は高杯であるが，20は裾部が平坦となり，21は杯部の変化がなく，裾部ものびない。23はその形態から器台の可能性もある。18の杯部は，19や22の脚部となるものであろう。

24・25は台付鉢で，小形のもの。台部の接合部に指ナデ痕が残るなど粗製土器。

26～29は小鉢で，やはり粗製土器である。

以上の土器は床面の土器であるが，以下の土器は床面より浮いて出土したものである。

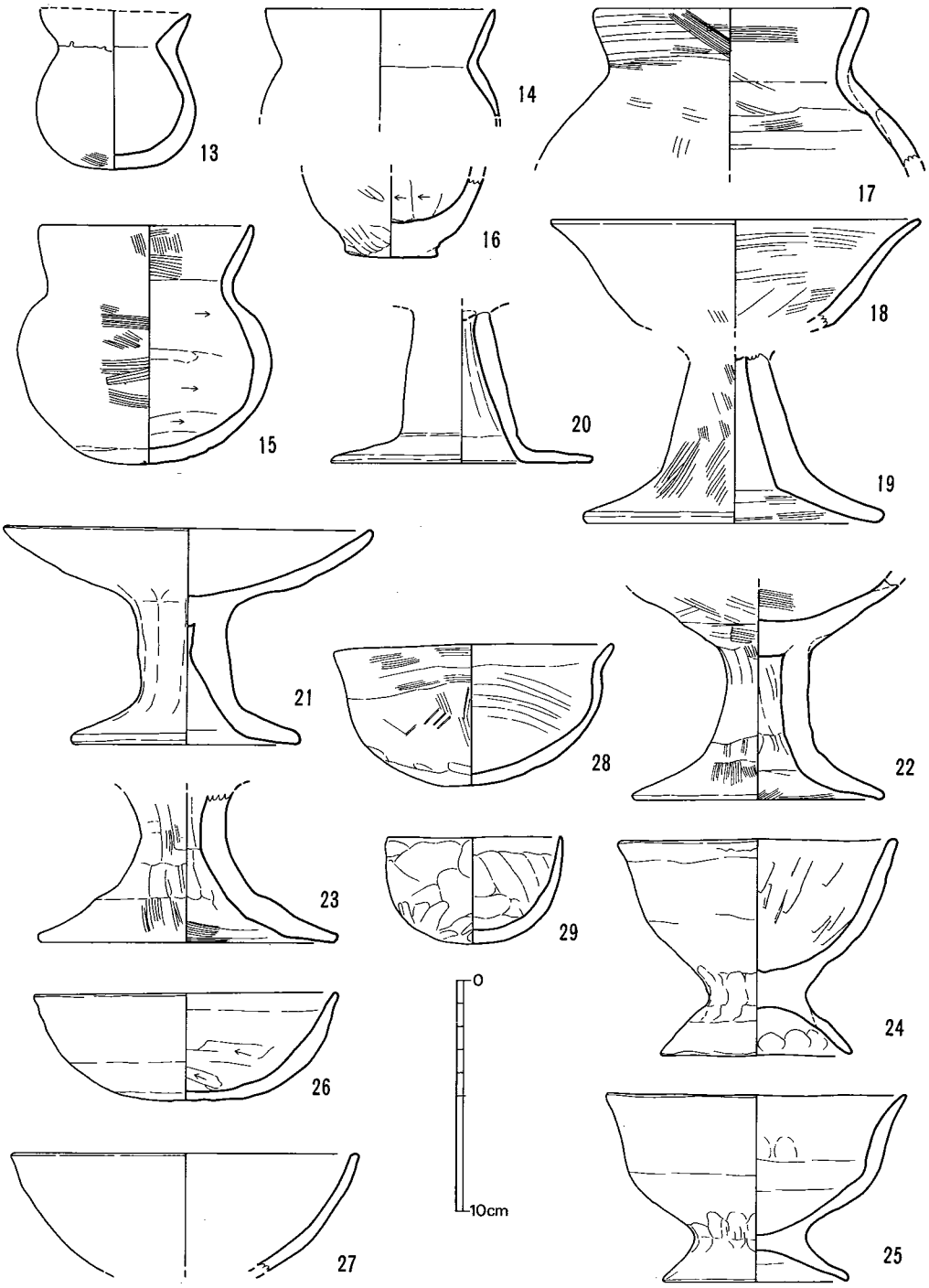
30・31は甕で，口縁は厚味があって，わずかに内湾して立ち上がる。胴部内面はヘラケズリ。胎土は細砂を含み，褐色を呈す。

32は鉢で粗製品。

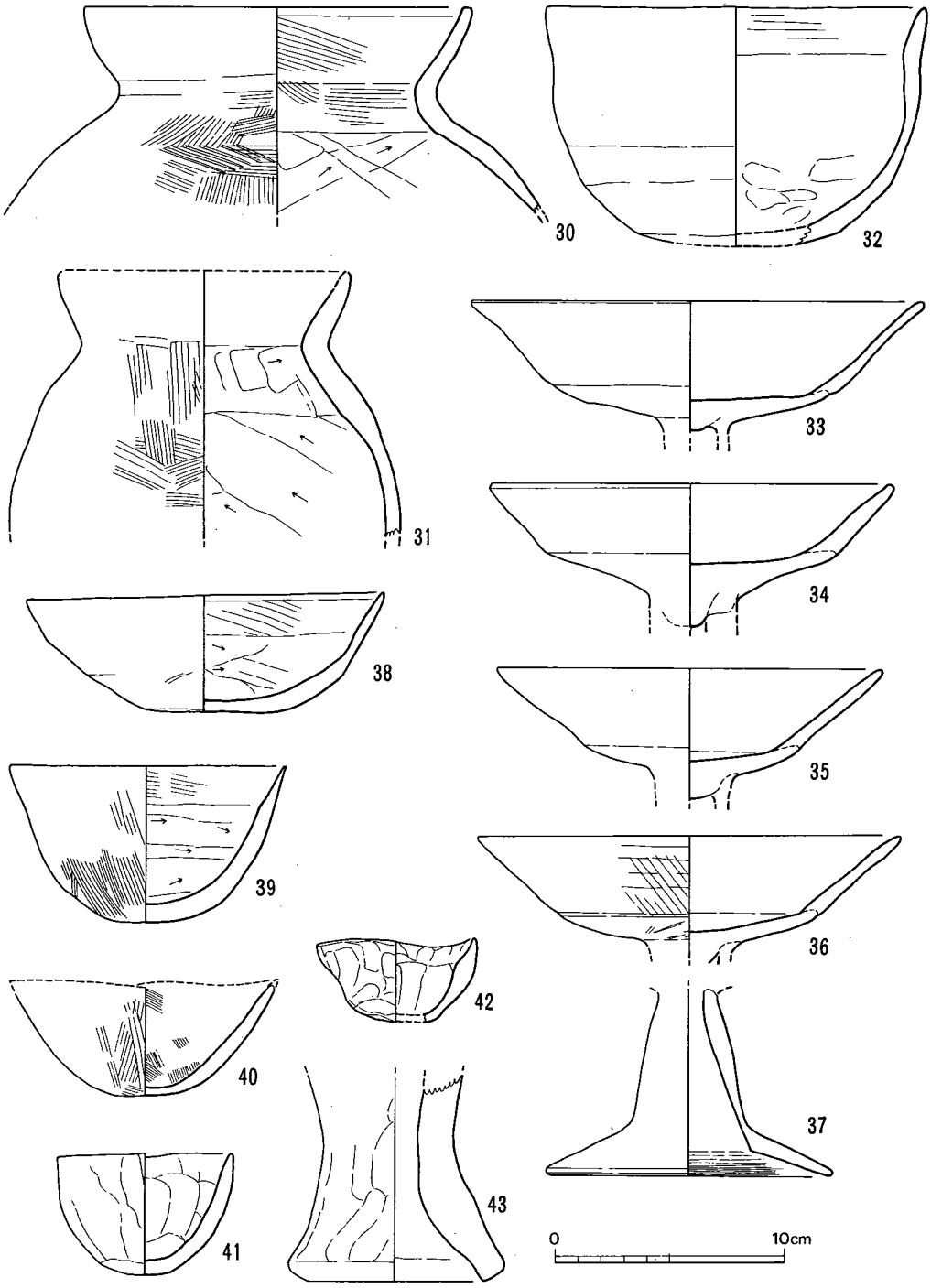
33～37は高杯で，33は肉薄で大きいが他は18・19と同型式で肉厚となり少し小さくなる。脚柱状部内面は，19・22と同様にケズリがある。

38～42は小鉢で，口縁端が尖がり，内面ヘラケズリのものもある(39)。41・42は手捏ね。

43は肉厚の器台で，弥生後期のものが混入したのであろう。



第 93 図　2号住居跡出土土器実測図①（1/3）



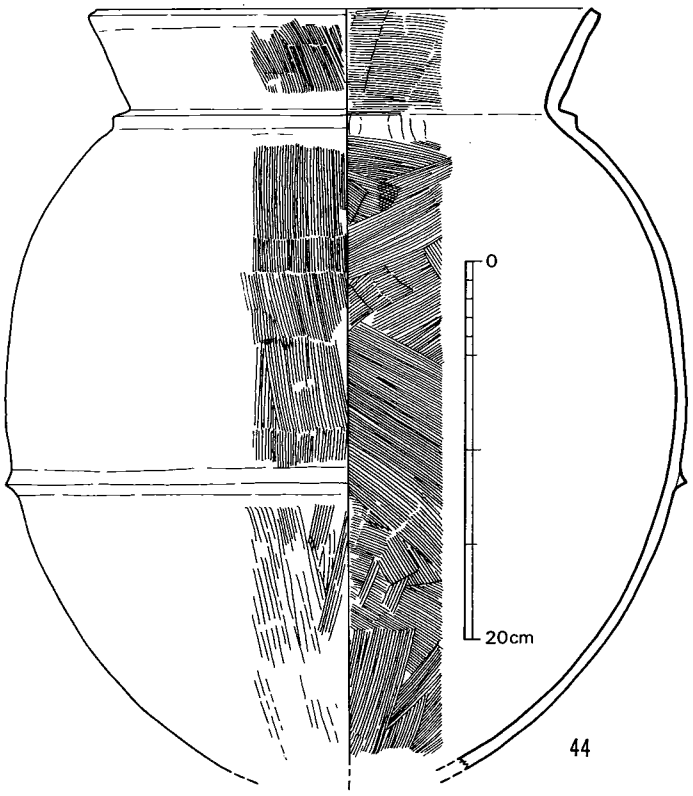
第 94 図　2号住居跡出土土器実測図②（1/3）

2号住居跡の土器は，この時期一連の住居跡と同様に火災にあっているので，一括土器として編年の好資料となるが，床面とその上の土器には型式差はなく，むしろ上層土器はまったく同型式といってよい。この土器は，型式的には土師器IIb式に次ぐもので，年代は4世紀末から5世紀初頭頃ではなかろうか。

3号住居跡（図版36－1，第92図）

調査区の東端にあり，半分強を調査することができた。住居は，1号住居跡と重複することになるが，1号住居跡の床面が3号にかかるころには，その床面が失われており，新旧関係を遺構の重複で確認することができなかった。

住居は，南側の一辺の長さが4.15mの大きさで，南側と西側にL字形のベッドを付設する。住居の壁面は，東側で床面から33cm，ベッドの高さは床面から20cmとなる。ベッドのない東壁に接して50cm×37cm，深さ12cmの土壙がある。この土壙が東壁の中心にあるとすると，住居の南北の長さは約5mとなり，北側にはベッドがないことになる。床面には柱穴がないが，ベッド上に凹みがある。南側ベッド上の焼土は意味不明。



第 95 図　3号住居跡出土土器実測図（1/4）

住居内床面には，1個体分の甕が散乱して密着していた。しかし，遺構検出時には上層で土師器が出土している。

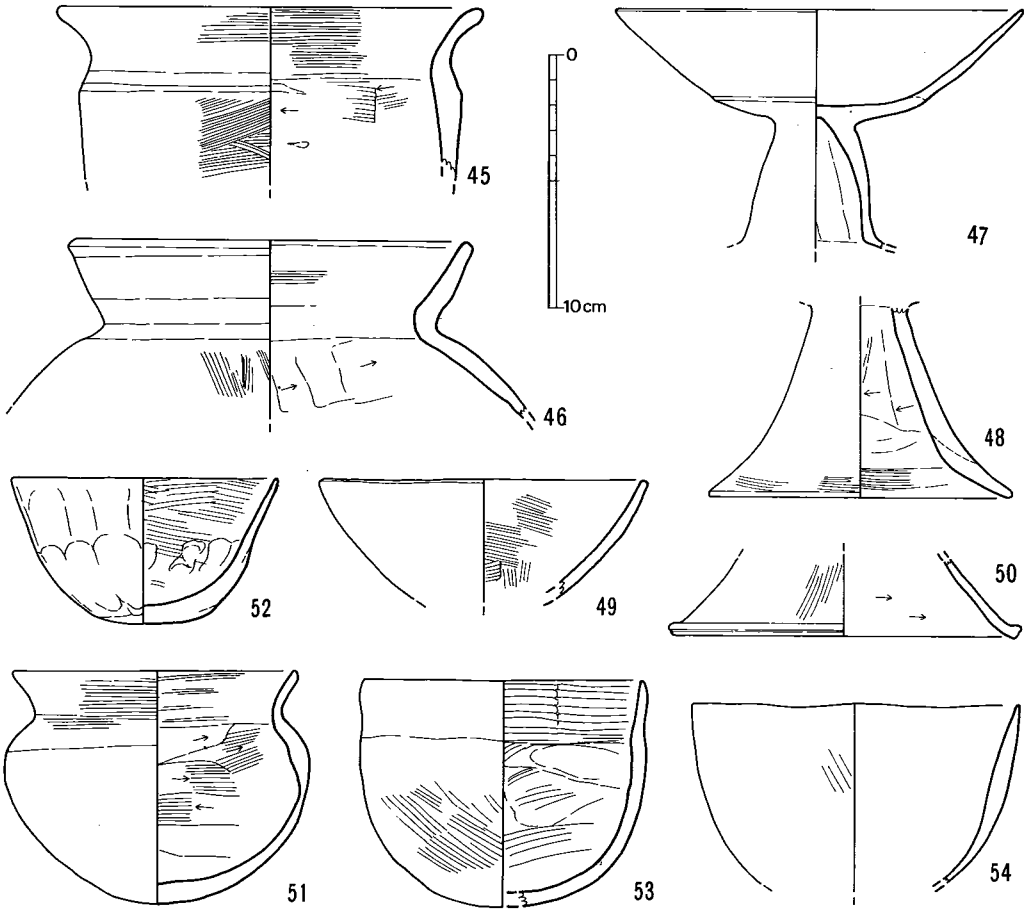
土　器（図版38，第95・96図44～50）　44は床面に密着していたもので，口径27cm，胴最大径35.7cmの大きさの甕。口縁部は割合立って下半に肥厚が見られ，口縁下と胴部に各1本の三角凸帯をめぐらす。内外面ともにハケ目調整しているが，胴外面下半はケズリ状のハケナデを行っている。胎土に石英・金雲母などの細砂を含み，明赤褐色。

45～50は，住居跡埋土上層から出土したもので，直

接住居跡に関係ないと思われるもので，型式的には２号住居と同時期のもの。

３号住居跡の時期は，床面と上層土器とは型式的に離れると思われるので，床面の甕１点で考えなければならない。甕は，胴部を見れば完全に弥生的であるが，口縁下半の肥厚が気になり，土師器 IIa 式まで下がらないにしても，土師器に併行する可能性が強いので，弥生終末から古墳初期としておく。（柳田）

鉄　器（図版39-２，第100図３）埋土の中層から出土した平造りの無茎長三角形鉄鏃。先端部と逆刺部を欠くが，発掘時に中間を欠失して脚部と身とが接合しないものの，長さ1.9cm以上の脚部を有し，身も現存長２cmで３cm前後を有していたであろう。腸抉りは大きく，身との境で幅１cmを有すが，この部分での身の幅は2.9cm。身の幅が２cmになる身の中ほどには径1.5mmの双孔が穿たれており，身の下端から1.5cmの距離をもつ。弥生終末頃であろう。（小池）



第 96 図　３・４号住居跡出土土器実測図（1/3）

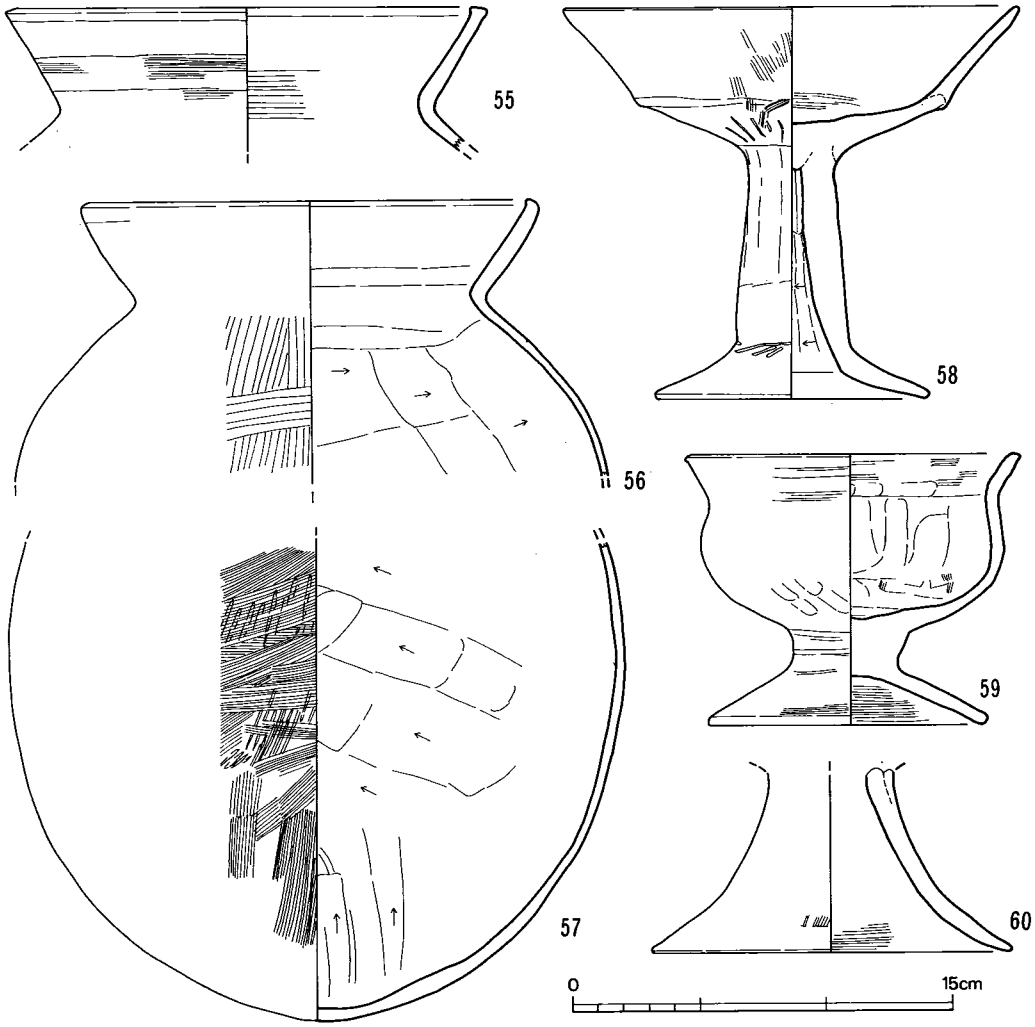
4号住居跡（図版36－2・3，第92図）

調査区の北西側にわずかに検出できたもので，規模は不明。2号と同じく周溝と貯蔵穴状土壙を同一方向に持つ。やはり2号と同じく火を受けて焼失しており，炭化材と焼土が多く，その下に完形土器がある。住居跡の復原の南北長さは約6mとなり，2号と同規模であろう。

土　器（図版38，第96図51～54）　51は口径11.3cm，高さ9.2cmの小壺で，胴内面はヘラケズリ，外面はヘラミガキ調整を行っている。胎土は細砂を含むが精良で，淡褐色を呈す。

52～54は小鉢で，粗製品に近く調整も荒い。

4号住居跡の時期は，2号住居跡と同時期で，IIb式に続くものである。



第97図　南西地区出土土器実測図（1/3）

南西地区出土の土器（第97図55～60）

55は，１号住居跡外南側から出土した甕口縁で，同住居跡と同時期のIIa式。

56•57は，１号住居跡から離れた南西側で出土した甕で，IIb式のもの。

58は，調査区南西の不整形遺構北側で出土した高杯でやはりIIb式になる。

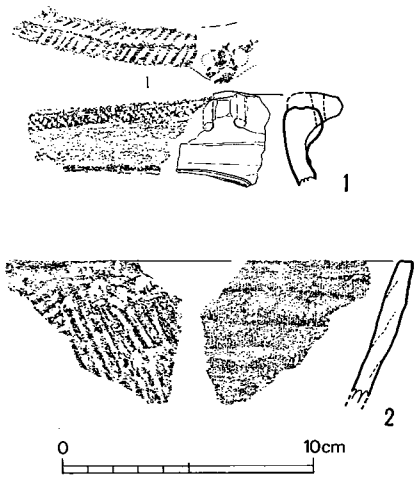
59は，ラベルが紛失し所属不明となったものであるが，２・４号住居跡のどちらかに属するものである。60は整地層出土の脚部。（柳田）

その他の遺物

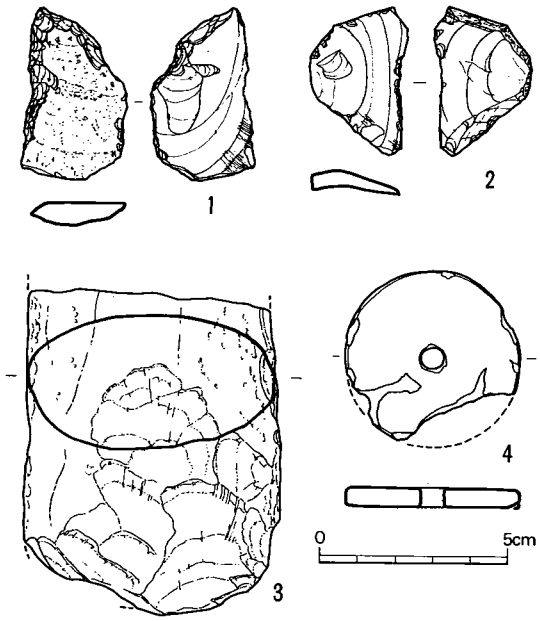
縄文土器（図版39－１，第98図１）　１号住居跡と３号住居跡の重なる部分のやや上部から出土したもので，磨消縄文をもつ鉢形土器口縁部破片。発掘時に一部を欠損したが，口縁部に小さな突起をもち上方から穿った双孔がある。口縁部外面に縄文R｛｝が施文され，上面には細い棒状工具による押圧を連続させた疑似縄文風の文様がみられる。頸部はナデられ，破片の下端に沈線がめぐるが，突起部の下では下方に弧を描いている。胎土に石英・長石・角閃石・金雲母などを含み，暗褐色に焼成されている。後期中葉の鐘崎式に近い。

２はⅠ-18の第３層から出土した粗製土器で，外面を斜め上あがりのアナダラ条痕。内面ナデ調整され，口唇部は面取りされる。胎土に金雲母・長石・石英を含み，気泡がめだつ。

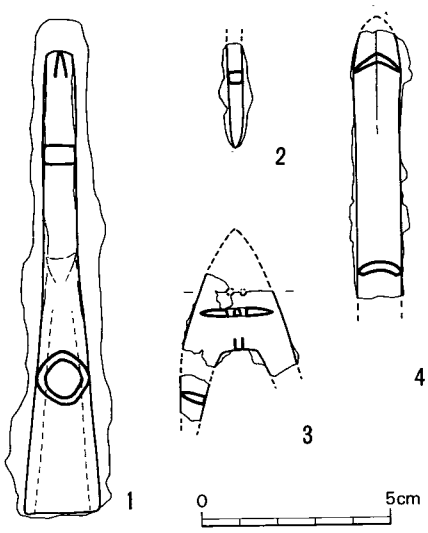
石　器（図版39-1，第99図）　１・２は発掘区中央部の第２層下部・第３層上部から出土した黒曜石製削器。１は原材の皮の部分を片面にもつ剝片の剝離面側から調整剝離を加えて刃部としており，剝片の打瘤部の厚



第 98 図
Ⅰ-7・18出土縄文土器拓影（1/3）



第 99 図　Ⅰ-7　出土石器実測図（1/2）



第 100 図　I-7 出土鉄器実測図（1/2）

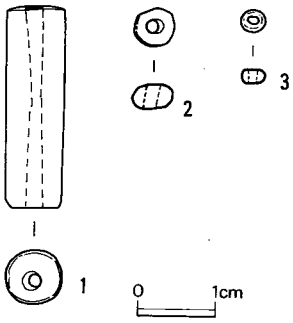
みも減じている。2は翼状剝片の先端側を刃部にしている。重量は9.3g・5.15g。

3は発掘区中央部でも南西寄りのピットから出土した玄武岩製の石斧刃部破片。太型磨製石斧の刃こぼれしたものを再利用したもの，重量の現存値323gを測る。

4は発掘区南寄りの第2層上部から出土した角閃雲母片岩製紡錘車。一部を欠くが，外径4.7cm，孔径5.8mm，厚さ5.3mm，重量の現存値20.4gを測る。

これらの石器のうち1・2は縄文時代後・晩期のもので，I-7出土の縄文土器に後期中葉のものがあるのでこの時期を考えたい。

鉄　器（図版39-2，第100図4）　断面が浅いU字形を呈す柄をもつ鉈で，先端の一部と基部側を欠き，現存長7.1cm，先端部の片面に鎬をもち両側縁は鋭い刃部となるが刃部の長さは約2cm程度であろう。柄部の幅1.2cmに対し刃部の最大幅1.3cmと僅かに広がる。周辺から布留式期でも古段階の土器がまとまって出土しているのでこの時期を考えうるが，鉈は弥生後期にみられるタイプのもので必ずしも伴うとは断言できない。



第 101 図　I-7出土玉類実測図（実大）

玉　類（図版39-3，第101図，表6）碧玉に似た硬い質の凝灰岩（グリーンタフ）製管玉やガラス小玉が出土しているが，いずれも遺構検出面よりも上位から出土しており，時期については弥生後期～古墳時代前期の幅をもたせざるをえない。ただし，1の管玉は2号住居跡の直上から出土であり，5世紀初頭頃を考えられないこともない。2のガラス小玉は2号住居跡の西外側の上部から出土している。　（小池）

表6　八龍I-7　出土玉類計測表

（単位mm）

	出土地点		外径	孔径	長さ	種類	色調
1	北側中央部	2層下部	7.4～7.6	2.3～2.6	26.7	グリーンタフ管玉	うすにぶ緑
2	北西隅	2層下部	5.3	2.05	3.15	ガラス小玉	うす緑
3	中央部	2層上部	3.0～3.2	0.65～1.2	1.9	ガラス小玉	スカイブルー

第 102 図　八 龍 I-18 遺 構 配 置 図 (1/100)

4．Ⅰ-18の遺構と遺物

八龍Ⅰ-18は，新設道跡とその北側の地下げ部分を321m²調査し，複雑に重複した住居跡11軒・竪穴2，石棺墓1・土壙墓2・土壙2・掘立柱遺構1，ピット群を検出した。

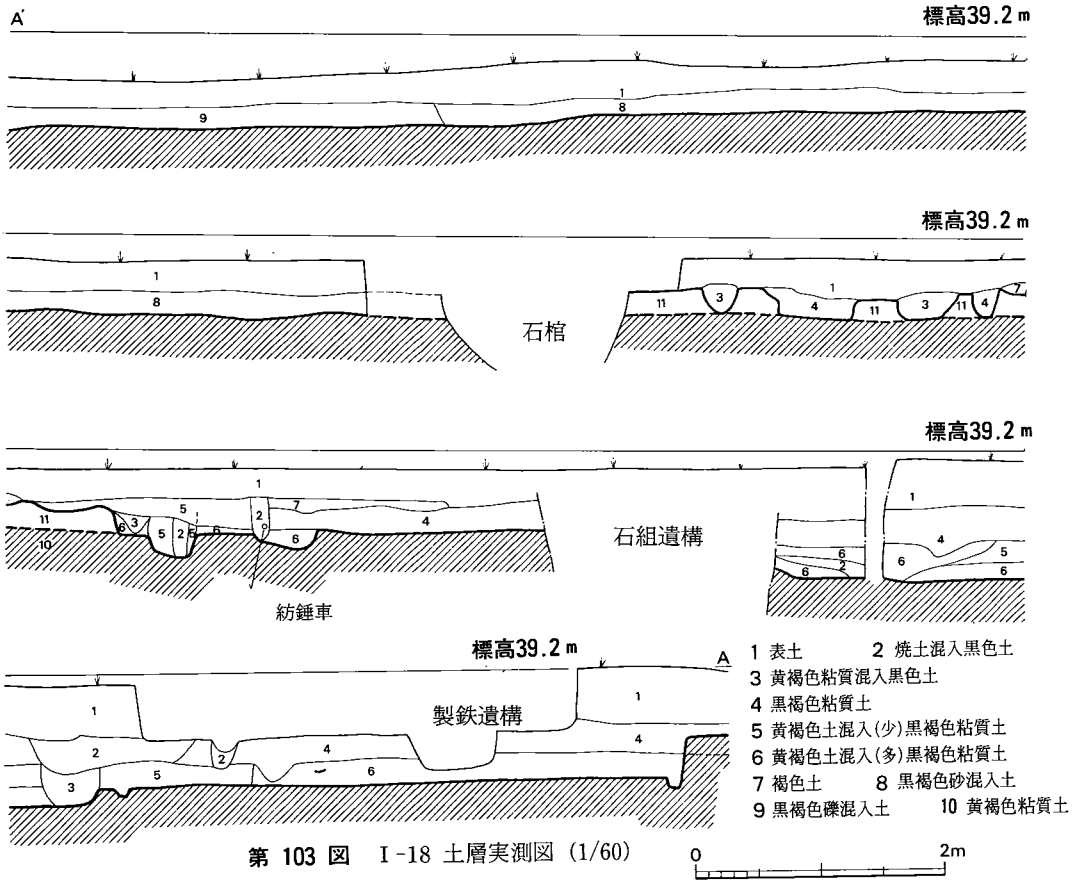
(1) 住居跡

八龍Ⅰ-18の11軒の住居跡は，弥生中期初頭から古墳時代初めに至るもので，1・2・4号からは多数の土器が出土した。

各住居跡で切合関係の判明したものは下記のとおりである。

4号→3号→1号←6号←7号
↑
9号←10号　　（古→新の関係を表わす）

なお，住居内外出土の鉄器・石器・玉類は後にまとめて説明する。



第 103 図　Ⅰ-18 土層実測図（1/60）

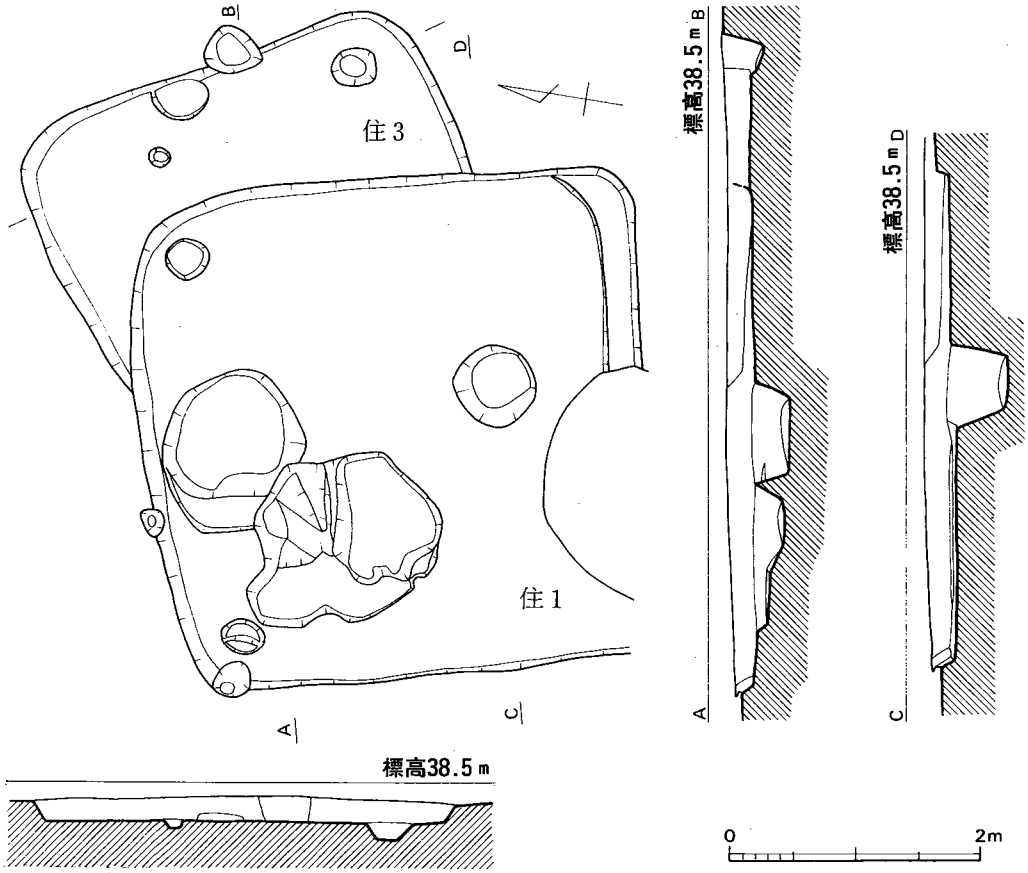
八　龍

1号住居跡（図版41-1，第104図）

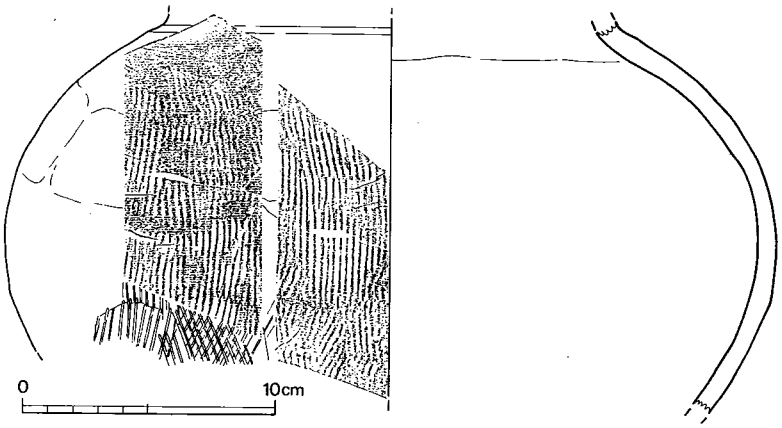
南西側の6号，北東側の3号を破壊して造られている。また南西側の一部を近代の石組遺構（井戸）によって破壊されている。住居跡は，南北・東西ともに4mを測る方形の竪穴住居跡で，最終検出面から床面までの深さは20cm強でしかない。床面東側には壁に沿って幅40～60cmの溝がある。床面には不整の割合大きなピットが3個と中央南側に径60cmほどのピットが存在するが，主柱穴は不明である。この円形のピット（図版41-2）の底から数cmの所に焼土が若干堆積し，その直上から甑・高杯・甕が一括して出土した。（池辺）

土　器（図版48・49，第105・106～108図1～17）

須恵器甕（第105図）　住居跡の埋土下層出土の甕の胴部破片。胴部径30.5cmの大きさで，外面には平行線タタキが残るが，頸部下はヨコナデ，内面はナデで完全に消されている。外面のタタキは，径約4cmの多角形の単位で平坦面をなして，その内側がタタキ目が明瞭に残り，その輪郭線である隣との境界線がタタキ目が消えている。これはタタキ板が器面に接する単位を表わ



第104図　1・3号住居跡実測図（1/60）



第 105 図　1号住居跡出土須恵器実測図（1/3）

しているが，内面もそのように観察すると，外面と同じ大きさの円形状の凹凸の単位が，わずかながら見られる。

胎土には，砂粒をまったく含まないが，表面のみ黒色の細粒が見られる。色調は，外面が灰黒色で肩部が灰かぶり，内面は灰青色，胎土内部の内側が赤紫色，外側が灰青色をしている。

土師器(第106～108図１～17)　１は，Ｐ１から出土した小壺で，口径11.2cmの大きさ。口縁は外反し，胴部内面はヘラケズリ。胎土に細砂と赤褐色粒を含み，くすんだ赤褐色を呈す。

２は，Ｐ２とした円形土壙から出土したが，Ｐ４とした不整形土壙より古いので，１号住居跡より古い可能性がある。土器には焼成前の孔があるところから甑であるが，１号から出土した他の須恵器形の甑と違っている。内面はナデ調整されている。住居外の破片とも接合できた。

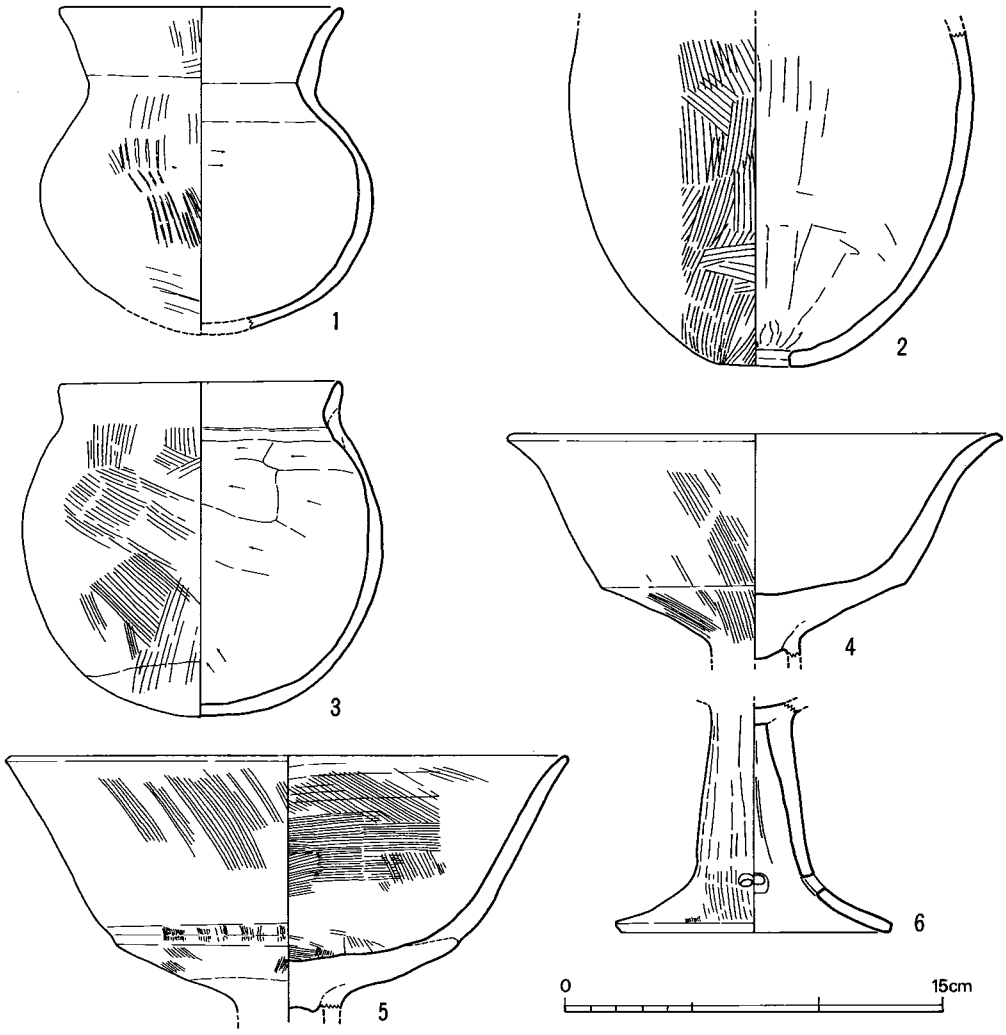
３・４・７・15・16はＰ１から一括出土したもの。３は口径11.2cm，高さ13.3cmの大きさ。底部付近は２次的加熱で赤褐色となり，それ以上はスス付着。４は口径19.6cm，杯部深さ6.3cmの大きさで，上半は外反し肉厚。胎土に細砂や赤褐色粒を含み，明赤褐色を呈す。

５は住居内床面から出土した口径22.2cm，杯部深さ8.1cmの大形の高杯。４ほどに外反せず，ハケ目も残している。６は住居外南側出土。

７～９は甑で，７はＰ１，８・９は埋土上層から出土している。この３点は，把手の大小の差こそあるが，口縁端を水平にし，胴はふくれず直線的に底部に達し，底部を平坦にするところが共通する。底部の孔は，７が約８個，８が５個となっている。７は外面に細かいハケ目，内面は口縁付近はヨコハケ，下部はヘラケズリを行っている。把手は小さく，胴部との接合は挿入式と思われる。胎土は細砂・粗砂・赤褐色粒を含み，明赤褐色を呈す。口径21cm，高さ22.4cm，底径10cmの大きさ。

８は，口径21cm，高さ約24.4cm，底径11cmの大きさで，外面にタテの粗いハケ目，内面は上半が粗いハケ，下半は板ナデ調整を行っている。胎土は，細砂(石英・金雲母)を含む。

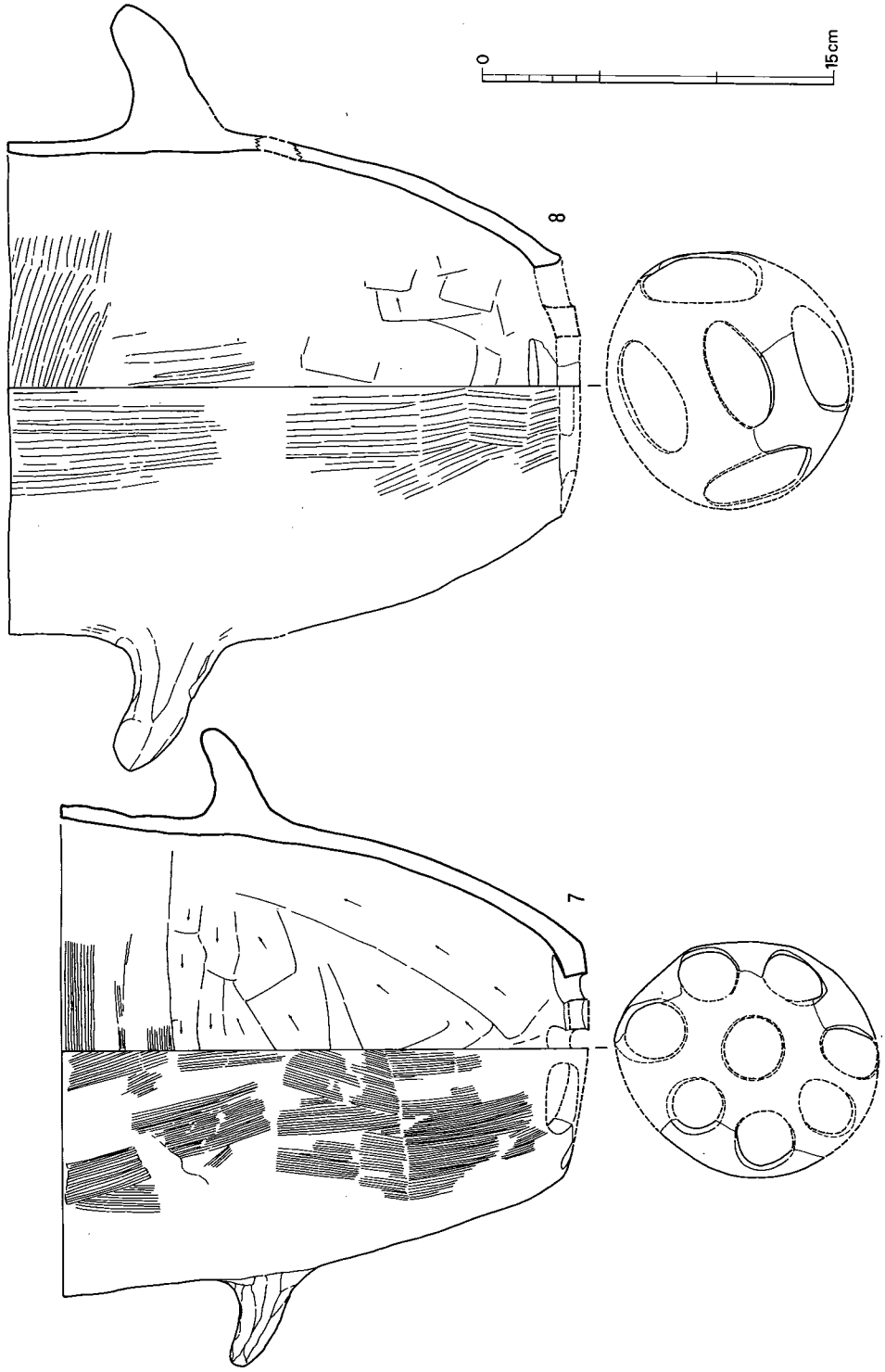
10～17は小鉢で，口縁が内湾するもの(10)，外反するもの(11～14)もある。外面下半はヘラケズリしないもの(12)，ヘラケズリのままのもの(14・16)，ヘラケズリ後のハケやナデ調整を



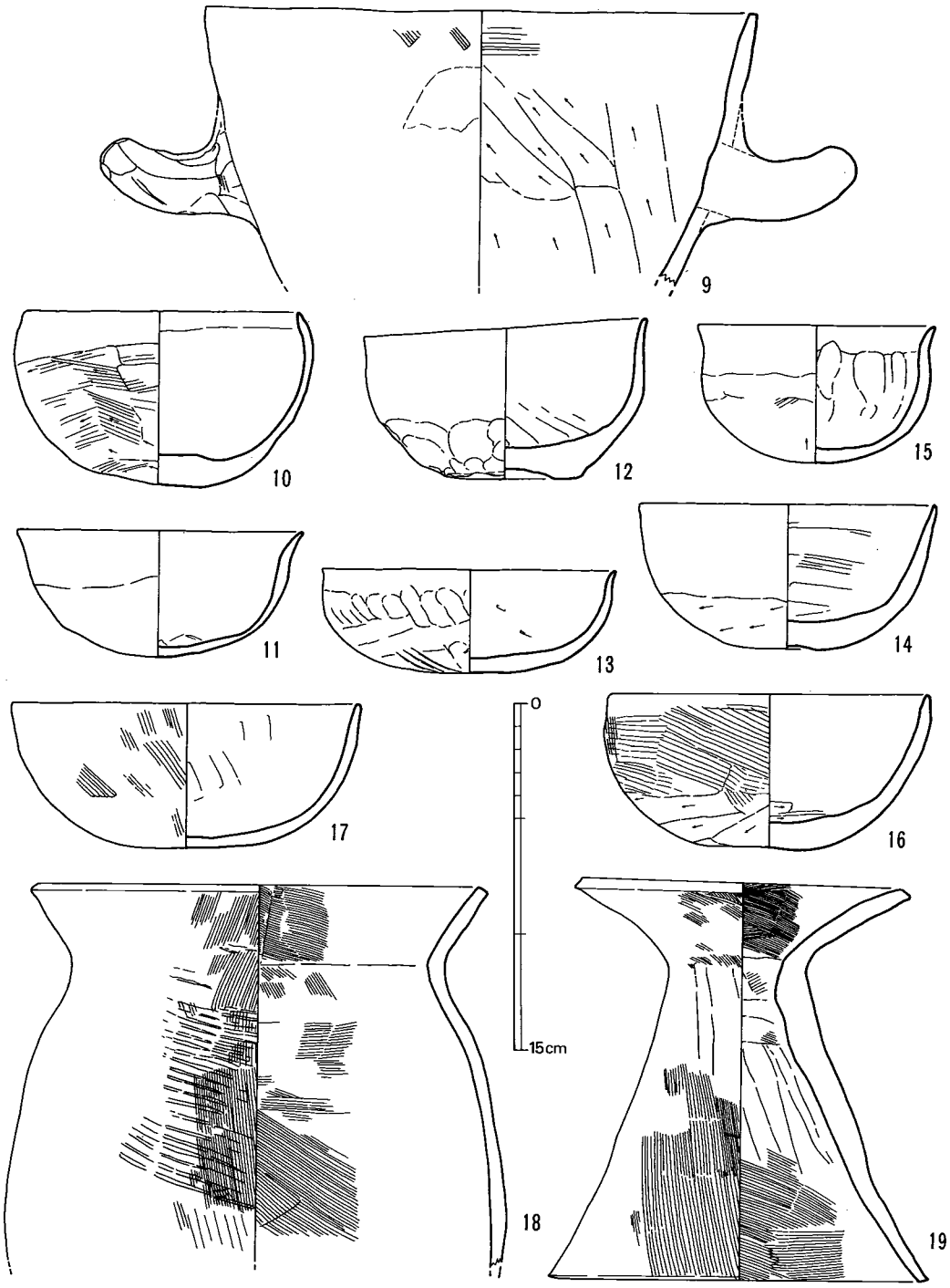
第 106 図　1号住居跡出土土器実測図①　(1/3)

行うもの(10・11・13・15)がある。15・16はP1出土，10・12～14は埋土下層，11は埋土上層，17は地点不明。

1号住居跡出土の土器は，須恵器が含まれている点がこれまでの三雲遺跡ではなく，重要な資料となった。土師器の形態が示す型式的特徴からすれば，寺口II-17の6号住居跡・堺I-2・4の住居跡群に続くものと見られるが，これらの直後に続くものではなく，若干の空白がある。1号住居跡の須恵器甕は口縁がなく，型式を断定できないが，古式須恵器であることはタタキと内面ナデ消しが証明しているが，この裏付けとして甑が使用できる。この甑の形態は，型式的に限定できるように思え，須恵器の模倣であろう。たとえば，大阪府陶邑TK87号の甑は，



第107図　1号住居跡出土土器実測図②（1/3）



第 108 図 1・2 号住居跡出土土器実測図 (1/3)

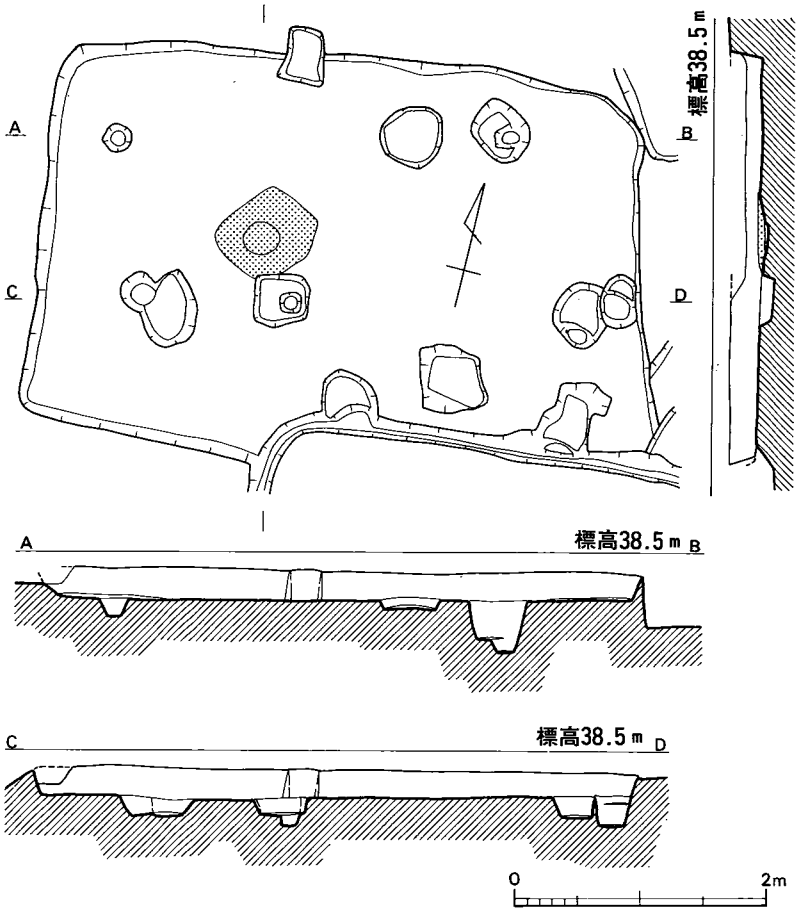
1号住居跡出土の8と形態的には同じといってよい。陶邑のⅠ型式第1段階を何世紀にするかは別にして，三雲遺跡では1号住居跡の土器を5世紀の前半に含まれるものとしておきたい。

（柳田）

2号住居跡（図版42-1・2，第109図）

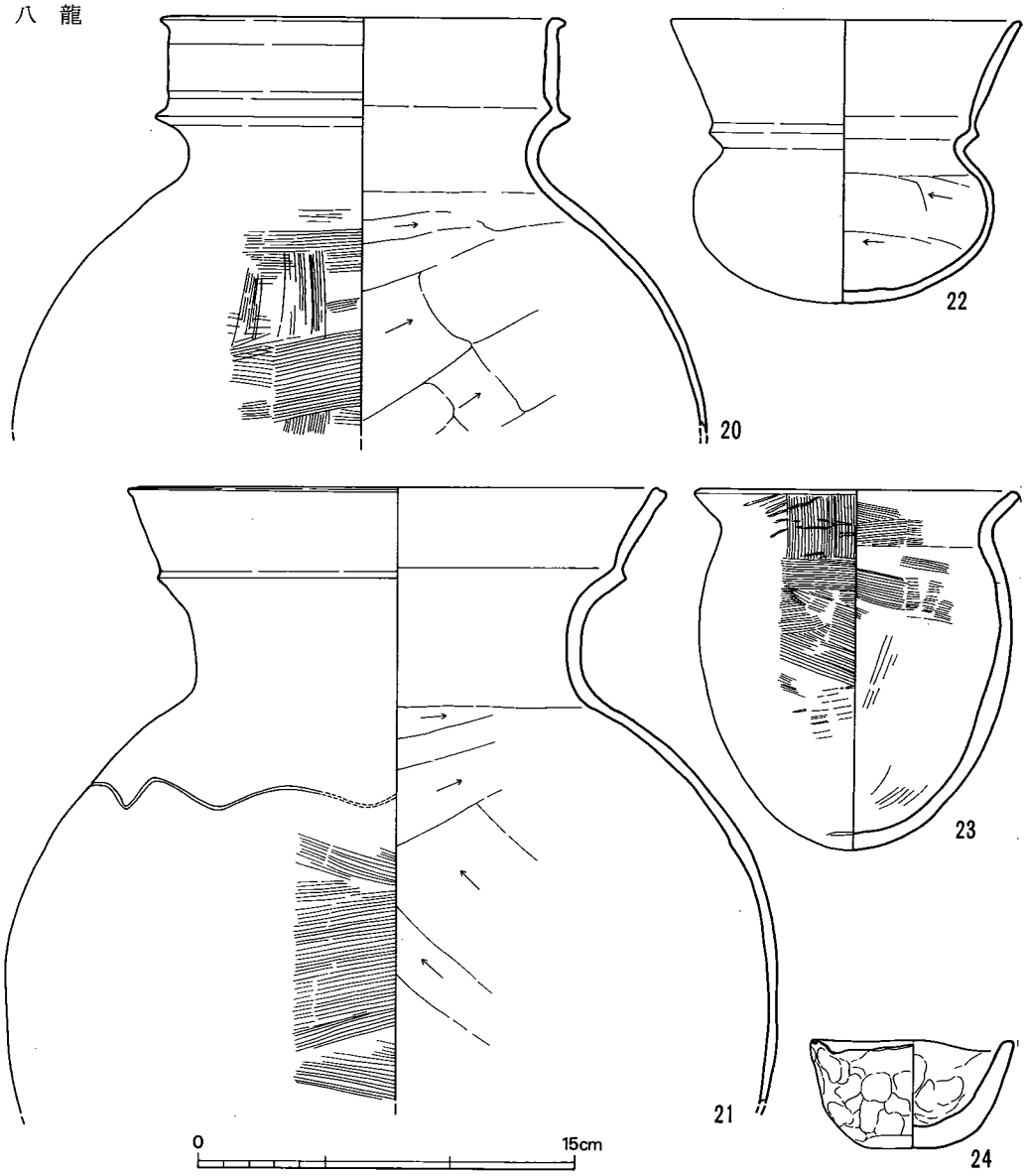
北東隅を5号とわずかに接し，7号と切り合い，土器の時期差も明確でなく，新旧関係を明らかにできなかったが，土器の出土状態から判断して，2号が新しいと考えられる。

住居跡は，東西の長辺4.5m，南北の短辺3.3mを測る長方形の竪穴住居跡である。最終検出面から床面までの深さは20数cmしかない。床面中央のやや西よりに，炭・焼土が検出された。深い炉ではなく，中央部が約5cmくぼむ程度のものである。床面には，10個のピットが検出されたがこの内方形のものはこの住居に伴うものではない。北西隅のピットが約40cmと一番深い。他は15cm前後の浅いもので主柱穴は明らかではない。土器は，下層・床面から，甕・高杯・椀・鉢・鼓形器台等の土器が多数出土した。



第 109 図　2号住居跡実測図（1/60）

土　器（図版50，第108図）　18・19はともに，2号住居跡下層と4号住居跡上層出土の破片が整理作業の段階で接合した。ここでは下層出土の2号に伴うものと判断してとりあつかう。18は甕で胴下半部を欠損している。外面は頸部から胴部にかけて荒いタタキのあとタテ方向のハ



第 110 図　2号住居跡出土土器実測図①　(1/3)

ケ目，内面はハケ目調整。口径19.8cm。19は器台で，受部径14.6cm，台裾部径16.5cm，器高17.2cmを測る。器の上位にくびれた頸部をもち，以下が直線的に開いて台裾部に至るタイプである。

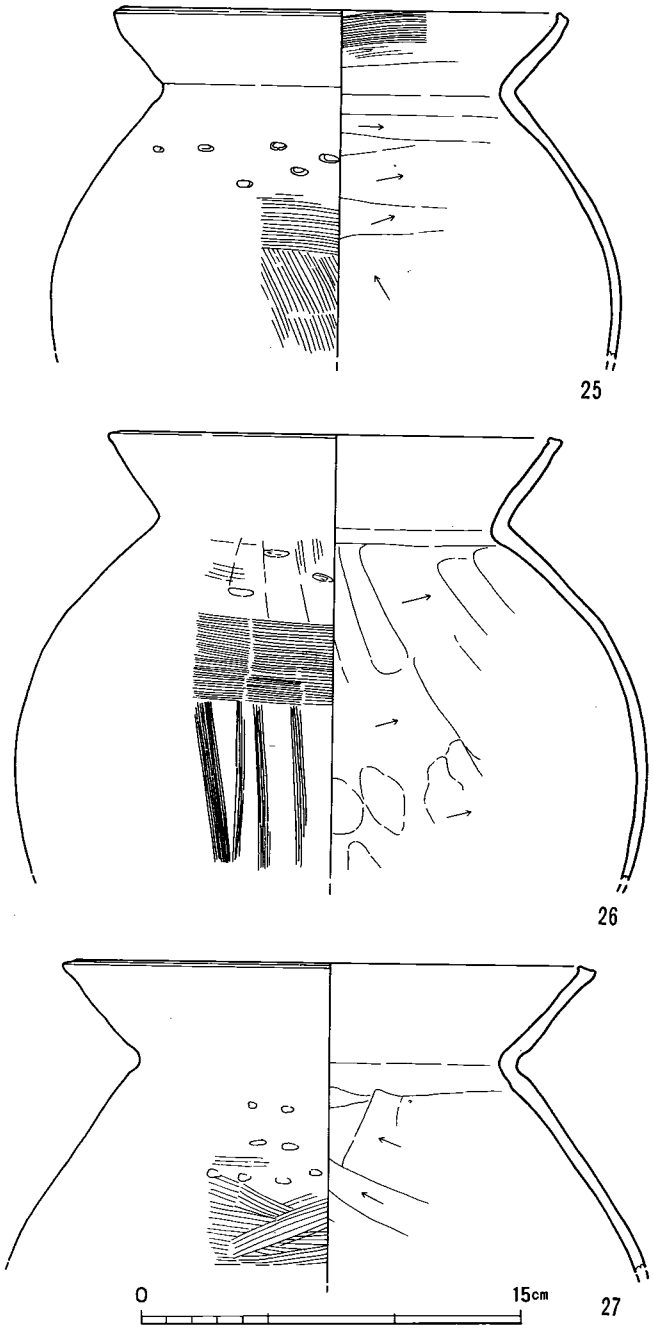
20・21は二重口縁の甕で，20は，口縁が直に立ち端部は外面につまみ出されている。口縁から肩部にかけての外面はヨコハケナデ，内面はヨコナデ，胴部は，ヨコ・タテのハケ調整，内面はヘラケズリされ器壁は薄い。口径16.0cm。21は口縁が外反するタイプで，肩部に波状文がごく薄くつけられ不明瞭な部分もある。口径21.4cm。

22は小形丸底坩で，口径14cm，器高11.3cmの大きさである。二重口縁で外反し大きく開き端部は丸くおさめられる。外面・口縁部内面は横方向のミガキ，胴部内面はヘラケズリされ器壁は薄く仕上げられ，明褐色に焼成されている。23は口径13cm，器高14.4cmの大きさの小形の甕で，外面はタタキの後，胴中位までハケ目，以下をナデ調整している。24は手捏土器で，器高4.3cm，底部はケズリのあとナデられている。

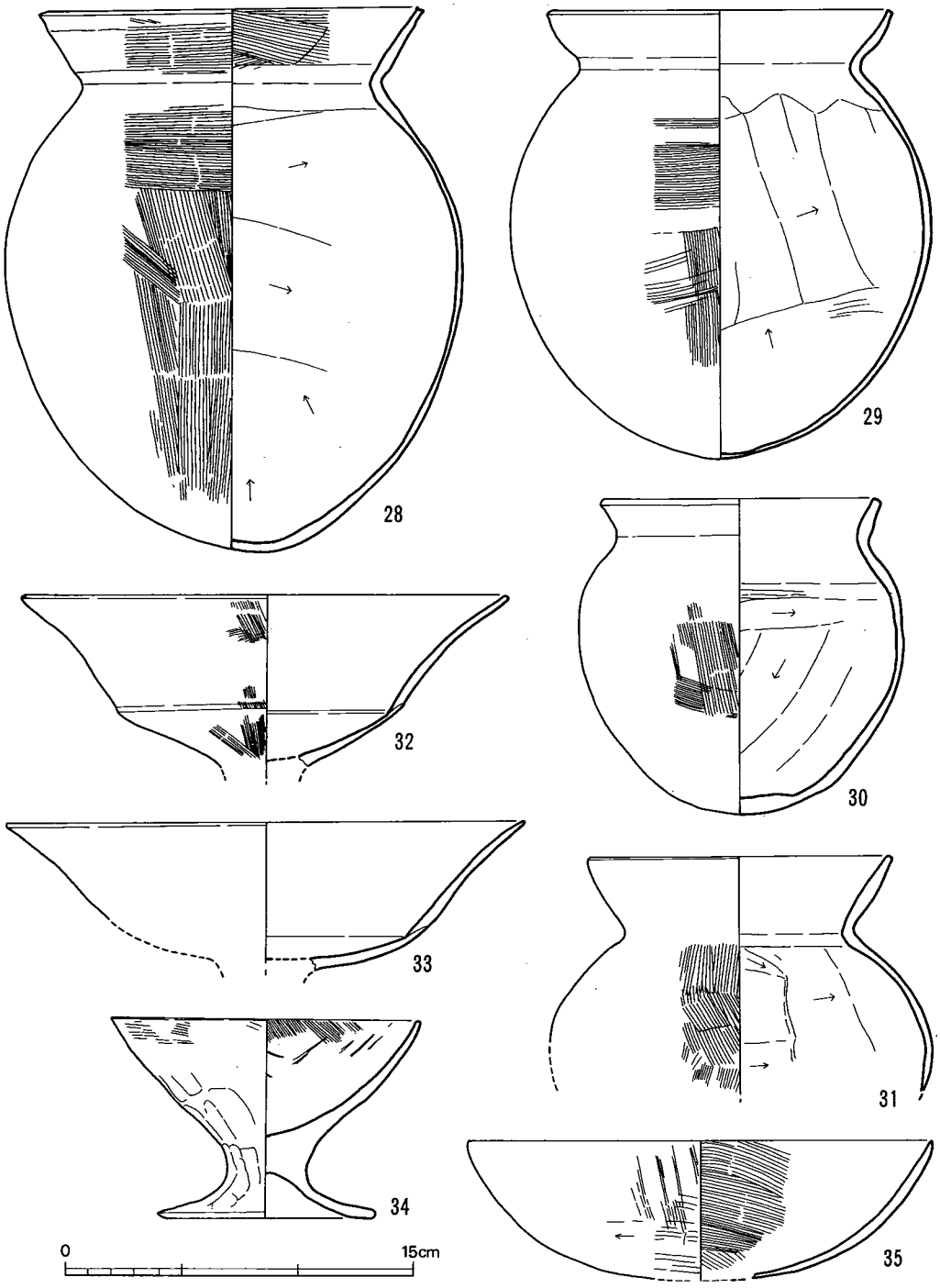
25～29は甕で，25～27は胴部下位を欠損する。口径が14.5～20.5cmのもので，器高は，28が23.4cm，29は19.5cmの大きさがある。口縁部は内湾し，先端の内側が突出する特徴を備えている。胴部内面はヘラケズリされている。外面に，肩部が水平にハケ目を施し，他は縦のハケ目を施す。

25～27はその上から列点文を等間隔に施している。30は口径12.2cm，器高13.7cmの大きさで，器壁は全体に荒れて不明瞭である。胴部にススが付着している。31は下半部を欠損する壺で口径13.2cmを測る。口縁部はヨコナデ，胴部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされている。

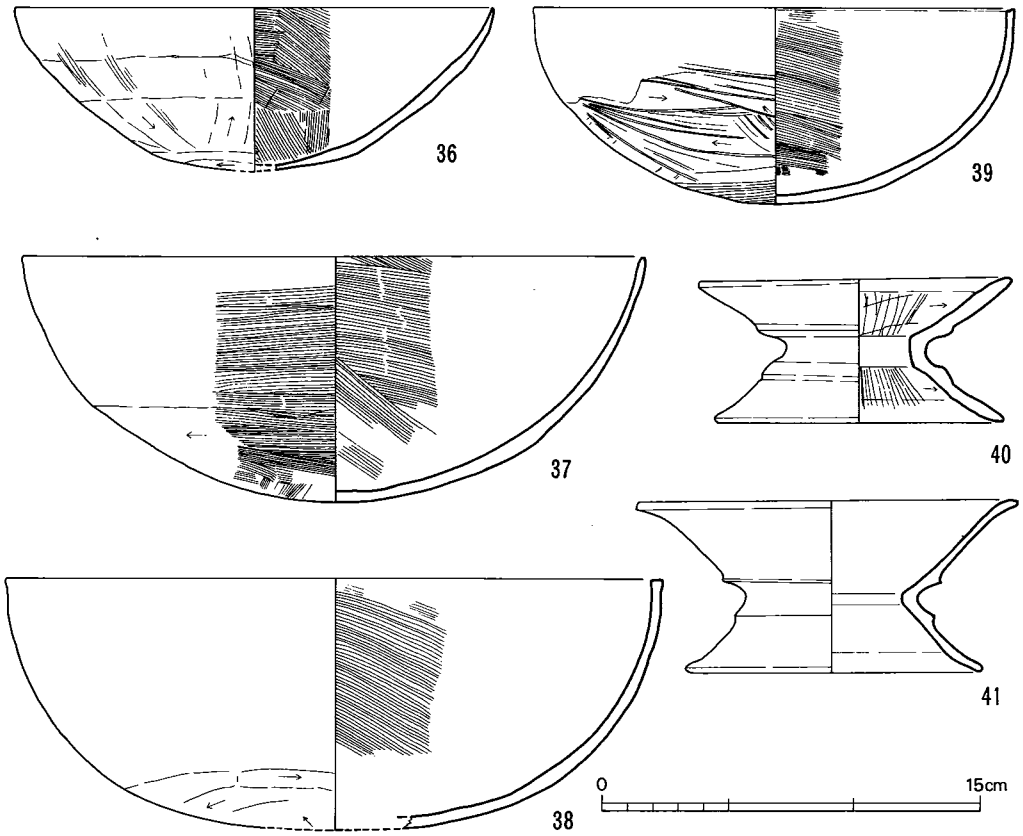
32・33は高杯の杯部片で，32は口径21.1cm，33は22.4cmを測る。ともに器壁が荒れて



第 111 図　2号住居跡出土土器実測図②（1/3）



第 112 図 2号住居跡出土土器実測図 ③ (1/3)



第 113 図 2号住居跡出土土器実測図 ④ (1/3)

不明瞭である。32は外面に細いハケ目を施している。34は脚付鉢で，口径13.4cm，脚裾径9.5cm，器高8.65cmの大きさ，外面はナデ調整され，口縁部内外面はハケ目がはいる。

35～39は椀で，35は口径20cm，内面は細いハケ目，外面口縁は粗い縦のハケ目，下位はケズリ的なハケ目を施す。36は口径19cm，内面は細いハケ目，外面下位はケズリ。37は口径24.7cm，器高9.75cm，外面下位はケズリのある細かいハケ目調整を行う。38は口径26cm。外面にかなり大きな黒斑がある。底部はケズリ。

40・41は鼓形器台である。40は受部径12.5cm，脚部径11.6cm，器高5.7cmの大きさで，受部より脚部がやや小さく，くびれ部は三角凸帯が作り出される形状になっている。外面はハケヨコナデ調整され，受部内面はケズリのあと部分的にミガキ，くびれ部はヨコナデ，脚部は暗文状のミガキ，裾部はヨコナデ調整されている。胎土には粗砂・細砂(石英・金雲母・角閃石)を含み，やや黄味を帯びる明褐色に焼成される。41は受部径15.2cm，脚部11.9cm，器高6.8cmの大きさで，受部内面，脚部外面はナデ調整されている。他は荒れがひどく調整不明瞭。赤っぽい明褐色に焼成されている。

2号住居跡出土の土器は，全体的にいわゆる布留式土器よりやや古いの特徴を示し，三雲土師器編年のIIa期に割当てられる。

3号住居跡（図版41-3，第104図）

住居跡の約3分の2を1号住居跡に破壊されており，詳細は不明である。東側の一辺は3.3m，壁高は約20cmを測る。柱穴は東南隅のものをのぞきすべて上部からの切り込んだものである。土器は床面から，甕・鉢・高杯が出土した。

土　器（図版51，第114図）　42は，口径11.3cm，器高14.65cmの大きさの甕で短い口縁部と，平坦な底部をもつ。口縁部外面はタテナデ，肩部はハケ目，胴部は縦のハケ目調整。胴部内面はヘラケズリされている。

43は，口径20.8cm，器高13.5cmの大きさの鉢で，外面は斜めのハケ目，底部はナデ，内面はヘラケズリされている。

44～46は高杯で，44は口縁部を2分の1欠損する。口縁部は，杯底部との境で鋭い段をもち外反しながら丸くおさめられる口唇部へつづく。脚裾端部はややはね上がる。口径16.2cm，裾径12cm，器高12.5cmを測る。杯部外面は粗いハケ目，脚部下位内面はヘラケズリされている。45は杯部片，46は脚部片である。ともに磨滅のため調整不明瞭。

4号住居跡（図版42-3，第115図）

南西側を3号によって破壊され，北東側のコーナーが未調査であるが全体のプランは確認することができた。住居跡は，長辺約4.5m，短辺約3.7mを測る長方形の竪穴住居跡である。住居内には，地山整形のベッド状遺構が両側にある。東側はL字形で，壁との間に浅い溝が掘られている。また北西側のコーナーにも溝状の掘り込みがある。炉は，中央よりやや西よりに焼土がつまった状態で確認された。4～5cmの浅いものである。主柱穴は，深くしっかりしたものがなく不明である。住居内には，高杯・甕等の土器のほか，南側のくぼみから砥石，東側ベッド状遺構上から滑石製臼玉が出土している。

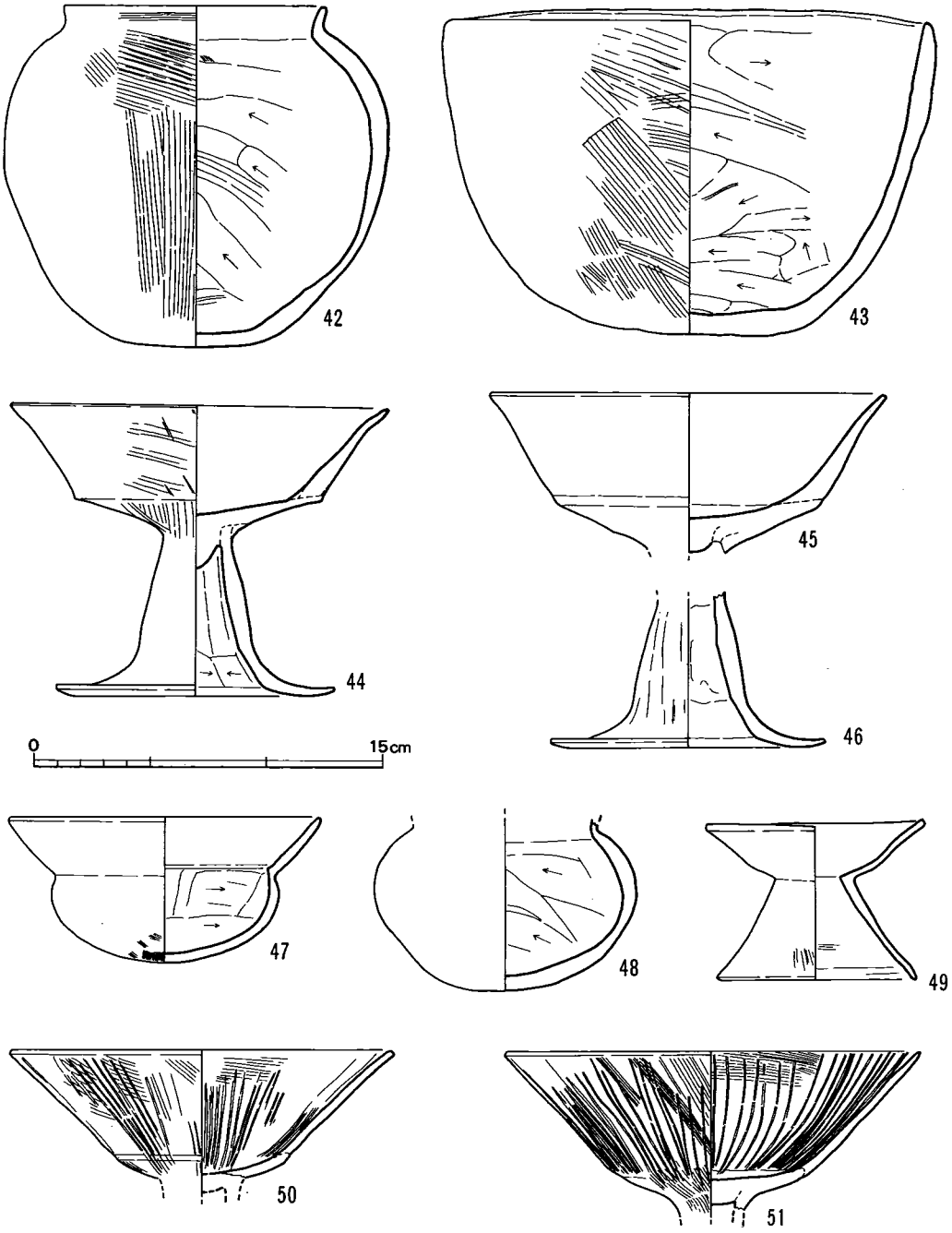
土　器（図版51・52-1，第114図）47・48は小形丸底坩である。47は短い胴部と大きく開く口縁部をもち，口径13.4cm，器高6.25cmを測る。胴部内面はヘラケズリ，底部はハケ目，他はヨコナデされている。口縁部・底部にススが付着している。48は口縁部を欠損する。胴は丸味をもち，底部はやや平坦である。

49は鼓形器台で，口径9.5cm，裾径8.6cm，器高6.7cmを測る。くびれは上位にあり，受部が浅く脚は八字に開く。胎土は精良で，明褐色に焼成されている。全体にナデ調整される。

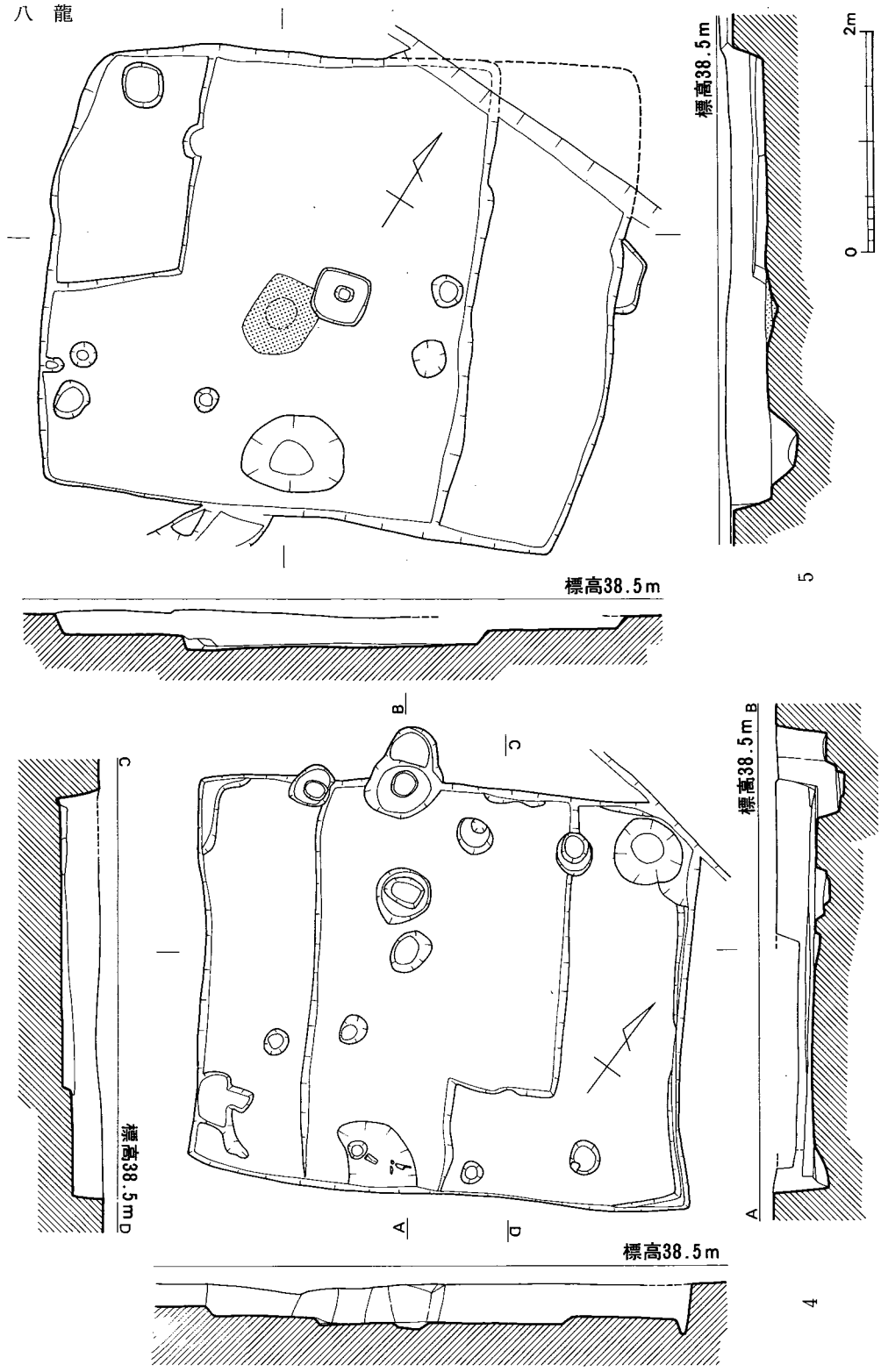
50・51はともに高杯杯部片である。50はハケの後暗文を施す。口径16.4cm，51の外面はハケ目の後ヨコナデされ暗文が施される。黒斑も認められる。口径17.9cm。

53は上層，52・54・56は東側ベッド上，55は西側ベッド上から出土した甕である。52～55は口径15.4～18.7cm，器高24.05～29.5cmの大きさで，56は大形で口径23cm，器高38.6cmを測る。長

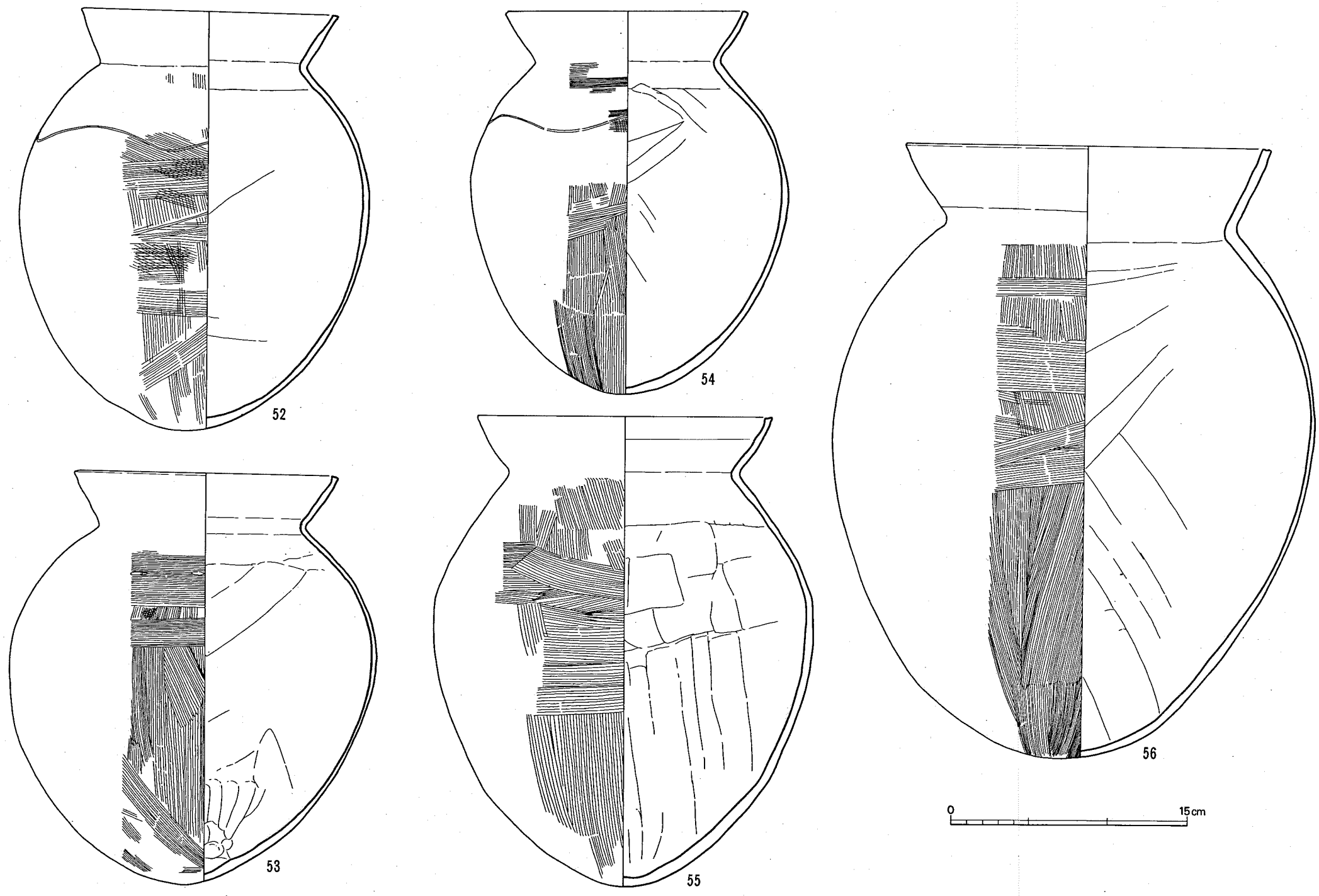
目の胴の内面へラケズリを行う。口縁部は内湾し，上端は水平に近く，布留式の特徴をもつ。外面は，最大胴部付近までは，縦・横のハケを交互に使用し，それ以下は縦方向ハケ目調整を



第 114 図　3・4号住居跡出土土器実測図（1/3）



第115図　4・5号住居跡実測図（1/60）



第 116 図　八 龍 I-18　4 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図　(1/3)

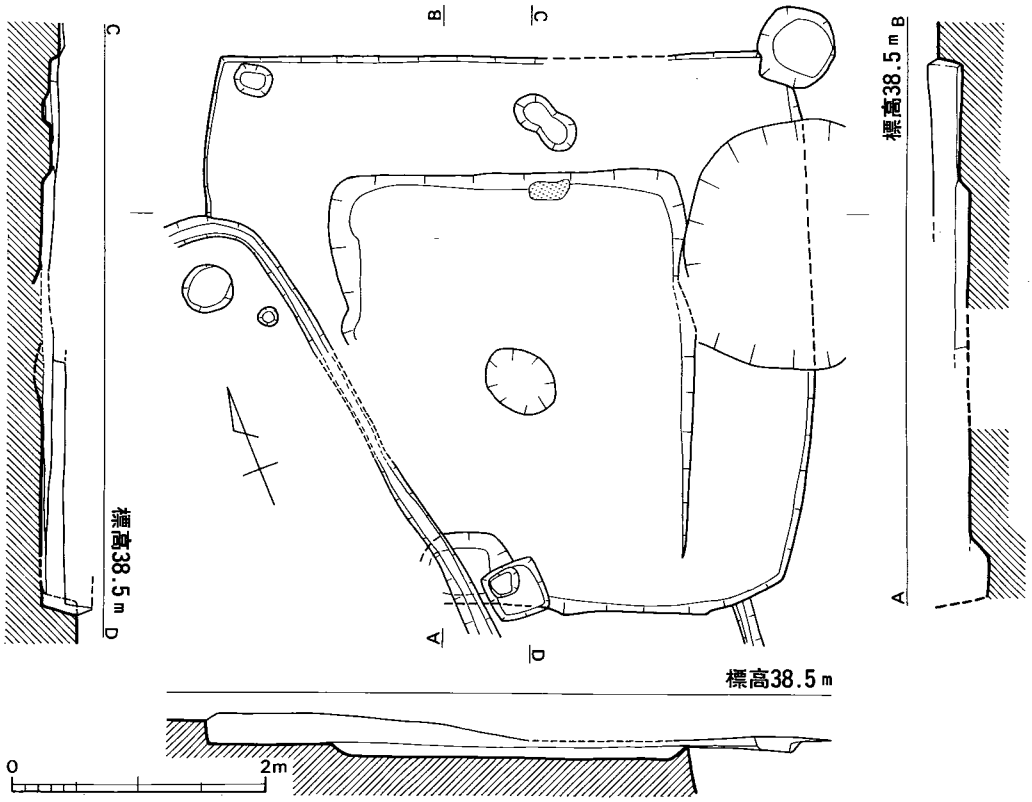
行う。52・54は肩部に波状沈線文が施されている。52は，中位から下部にススが多く付着している。53は口縁部除き全体にススが付着。54は底部が黒く変色しススが付着。55は胴部中位にススが付着。56は肩部に黒斑，胴部下位は黒く汚れている。

5号住居跡（図版43-1，第115図）

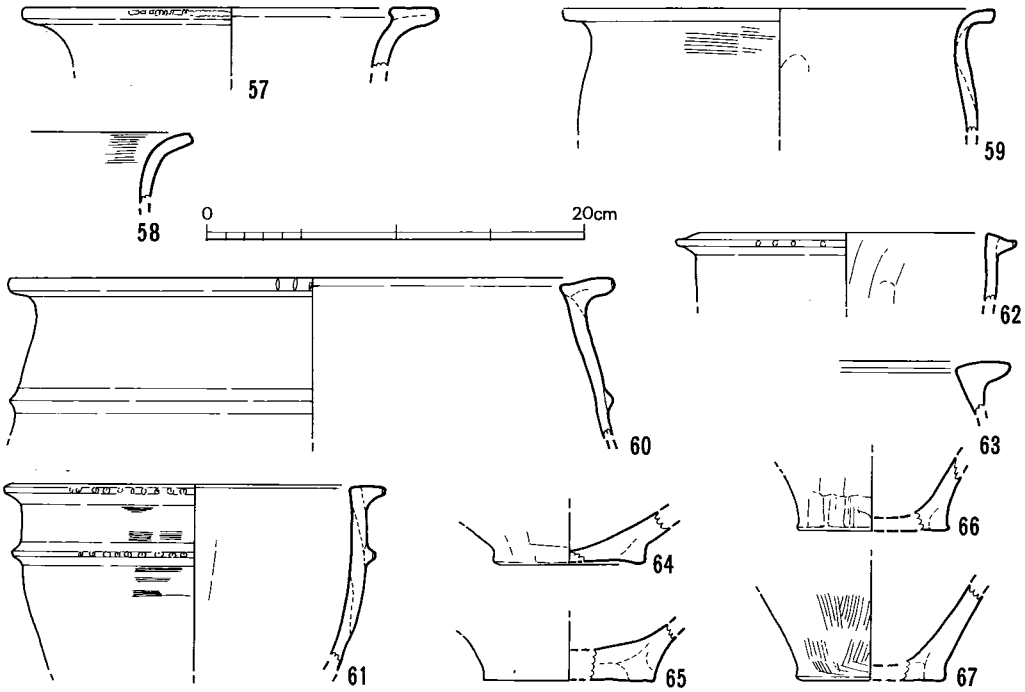
北東隅は未掘のため確認することができなかったが，全体のプランはほぼつかむことができる。住居跡は，長辺約5.2m，短辺約4mの隅丸長方形をなすが，北壁と南壁は平行ではなく，北壁がかなり外側へ開く。このため東壁は南西よりも長くなるいびつなプランである。住居内には両側に地山整形のベッド状遺構がある。炉は中央よりやや南西寄りにあり，炭・焼土塊がつまった状態で検出された。中央がくぼみ，床面からは約10cmほどある。炉の南側に楕円形の土壙をもつ。主柱穴は明確でない。土器は終末期のものと思われる小片が出土したのみで，他に床面から鉄鏃片と，東側のベッド状遺構上面から，石製紡錘車2点が床面に直に立った状態で検出された。出土状態からみて糸巻棒にさしたまま放置されたものと推定される。

6号住居跡（図版43-2，第117図）

1号・9号に切り込まれる住居で，さらに近代石組遺構によって東壁が破壊され，西南隅は未



第 117 図　6号住居跡実測図（1/60）



第 118 図　6・8号住居跡出土土器実測図（1/4）

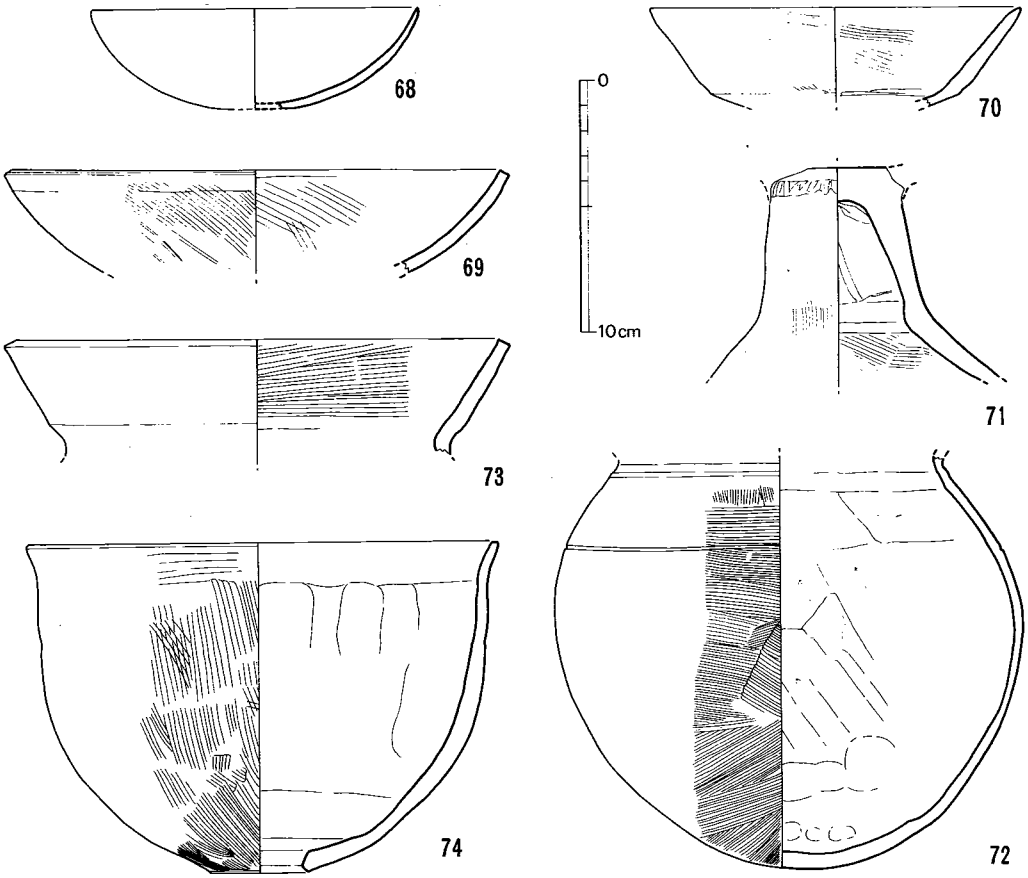
調査である。住居跡は東西に長く，長辺4.7m，短辺4.4mを測る隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。壁は北壁で15cm前後を残すのみである。住居内に，コの字のベッド遺構をもつ。そのほぼ中央部で，焼土塊のつまった径約50cmの炉を検出した。深いものではなく中央が4cmほどくぼむ。主柱穴は不明である。床面南側に方形の土壙があり，埋土から椀が，床面から高杯の脚部片・甕片が出土した。

土　器(第118図)　60・61は床面，62・63は上層から出土したいわゆる〝亀ノ甲タイプ〟の口縁部片である。横ナデ調整されている。64・65は壺の底部片，66・67は甕の底部片である。60～67は中期前半には中期前半に属する土器と考える。

68・69は椀形土器である。68は4分の1ほどの破片で復原口径は約13cmを測る。内面及び口縁部はナデ，外面中位以下はケズリ。69は口縁部の細片で，復原口径約20cmを測る。内外面ともにハケ目，口縁端部はナデ。石英・金雲母を含む胎土で，外面褐色・内面明赤褐色を呈する。71は床面出土の高杯脚部片である。外面はハケ目，内面指ナデ，裾部外面はヘラナデ，内面はハケ目調整されている。70は杯部片で，復原口径約15cmを測る。

7号住居跡（図版43-3，第121図）

2号を掘り下げた段階で検出された住居跡で6号に切り込まれている。約4分の3が未掘であるが北壁と東壁を確認することができたので規模は復原することができる。長辺約5m，短



第 119 図　6・7号住居跡出土土器実測図（1/3）

辺約4.5mと南北に長い隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。壁に沿って幅約10cm，深6～7cmの周溝がある。主柱穴，その他は不明である。土器は床面から，壺片が出土した。

土　器(第119図)　72は甕の胴部片。内面はヘラケズリ，底部はナデ調整。外面はハケ目が施され，肩部に沈線が1条ある。73は甕の口縁で復原口径20cmを測る。内外面ともにハケヨコナデ。

8号住居跡（図版44-1，第121図）

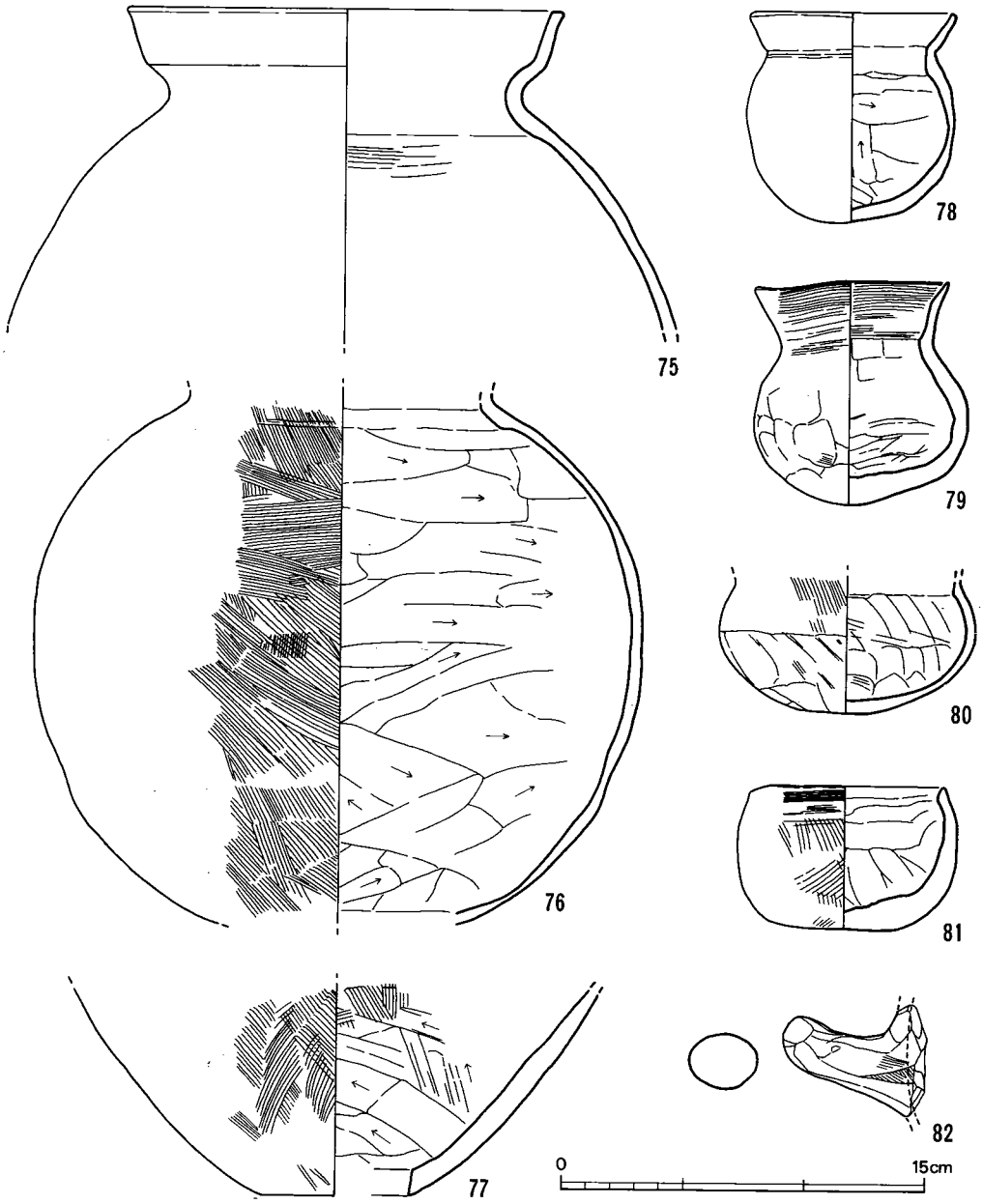
東南隅と東壁・南壁の一部を残すのみで詳細は不明である。東側にはベッド状遺構がある。床面には，柱穴が4個あるがどれも浅い。

土　器(第118図)　57・58は埋土中，59は床面から出土した。57は壺の口縁で，ナデ調整。58は壺。59は甕の口縁部片。弥生中期初頭のものであろう。

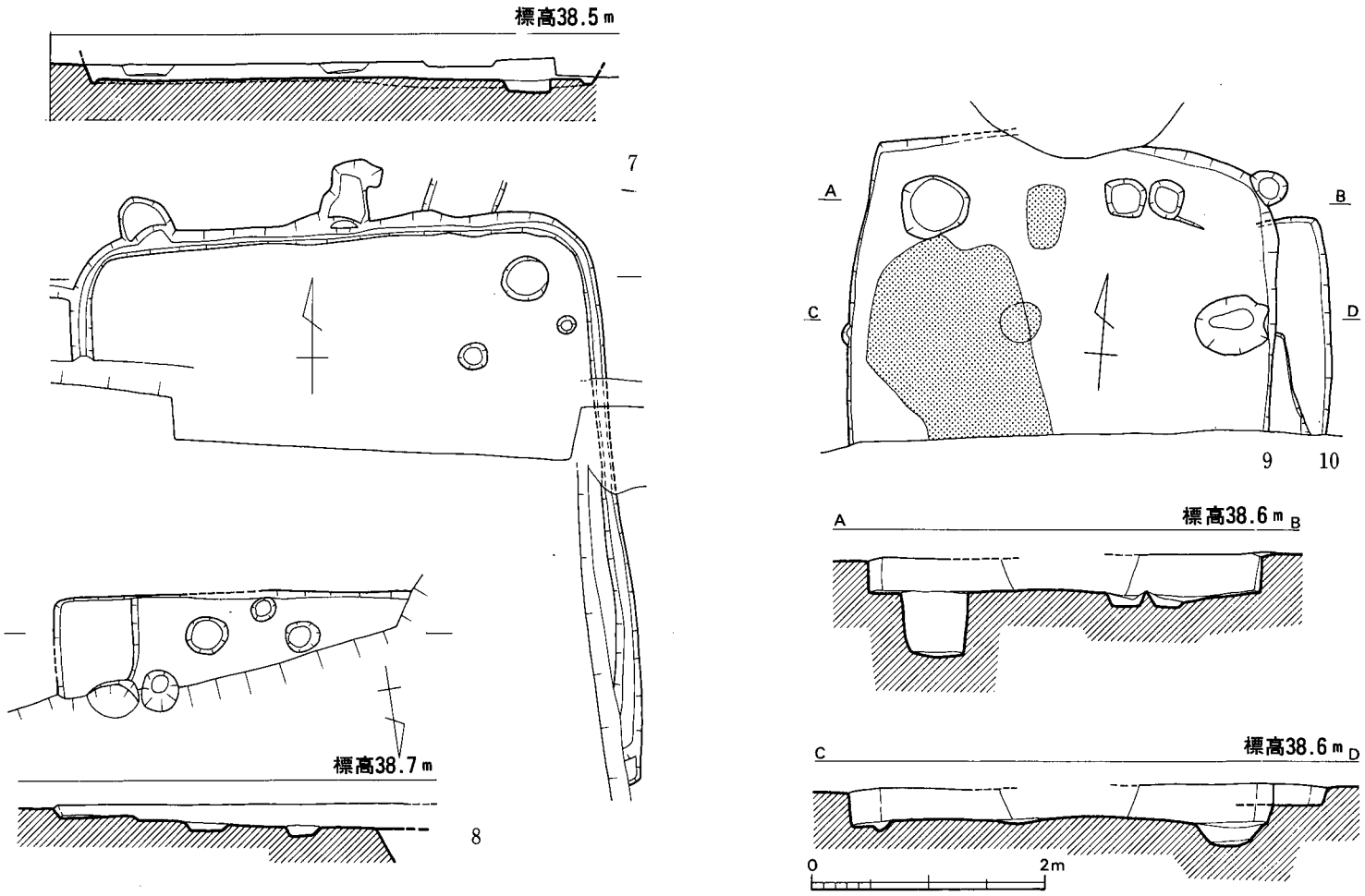
9号住居跡（図版44-2，第121図）

10号・12号より新しく，北壁側は井戸によって破壊され，南側は未掘のため規模は明らかでな

い。北辺は約3.6mを測り。西辺2.5m，東辺2.2mを残すのみである。炉は，中央よりやや西側に１カ所，中央から北壁よりに１カ所確認された。いずれも浅くくぼむ程度のものである。炉から西壁の間で，幅約1.4m，長さ1.7mの範囲に焼土が薄く堆積しているのが確認できた。北西隅に径50～60cm，深約55cmの大きなピットがあるが，他は浅く，主柱穴は不明である。遺物は床面から壺・甑・小形丸底壺・砥石が出土した。



第 120 図　９号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 121 図　7 ～ 10 号住居跡実測図 (1/60)

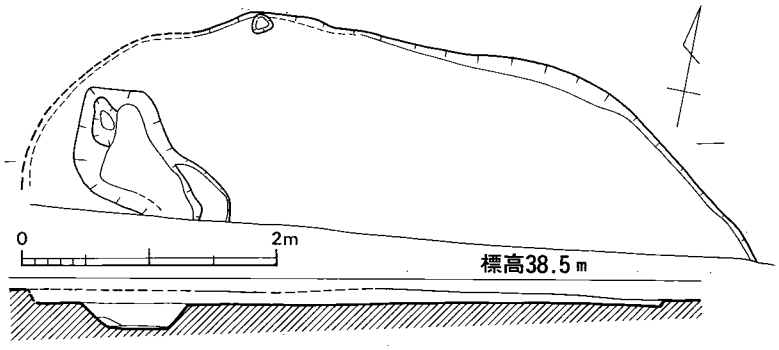
土　器（第120図）　75は二重口縁の甕で胴部下半は欠損のため不明。口縁のつくりはあまい。器壁は荒れて不明瞭だが，外面ナデ，内面口縁部ヨコナデ，頸部以下はケズリ。胎土は精良でごく細かい砂粒を含み明赤褐色を呈する。復原口径は18.0cmを測る。76は壺胴部の破片で，口縁部と底部を欠損する。口縁は二重口縁であろうか。外面はハケ目調整，内面はケズリ。外面の胴部下半にはススが付着している。77は甑の底部片で孔の数は不明である。78～80は小形丸底坩である。78は手捏ね的な短い口縁をなす。外面はヘラナデ調整，内面はヘラケズリ。口径約8.6cm，器高8.75cmを測る。褐色を呈するが，胴部下半は黒く変色しススが付着している。79は変形した口縁と器壁が厚い胴部をもつ。外面は口縁・頸部がハケヨコナデ，他はヘラナデ，胴部内面はヘラケズリされている。口径9.1cm，器高9.2mを測る。80は口縁部と胴部の２分の１を欠損している。外面は頸部が胴部中位までがハゲの後ナデ，下半はケズリ，内面はケズリ。胎土には細砂を含み，赤褐色に焼成されている。底部には黒斑が認められる。81は小形の椀で口径8.05cm，器高６cmを測る完形品である。外面口縁部はハケのヨコナデ，胴部はハケ目，底面はナデ調整。内面はヘラケズリされている。82は把手である。焼成はふつうで，赤褐色を呈する。

10号住居跡（図版44-３，第121図）

９号によって切り込まれ，南側の大半は未掘であるが，北東隅を確認したため住居跡とした。プラン・規模・主柱穴ともに詳細は不明である。下層から石剣片が出土している。

11号住居跡（図版45-１，第122図）

発掘区中央の南側から検出された円形住居跡で，１号土壙墓，中世のピット群から切り込まれており攪乱が著しい。約３分の２ほどが未掘のため詳細は不明である。床面で不整形のピットを検出したが主柱穴等は確認できない。埋土から弥生式土器の細片が出土している。

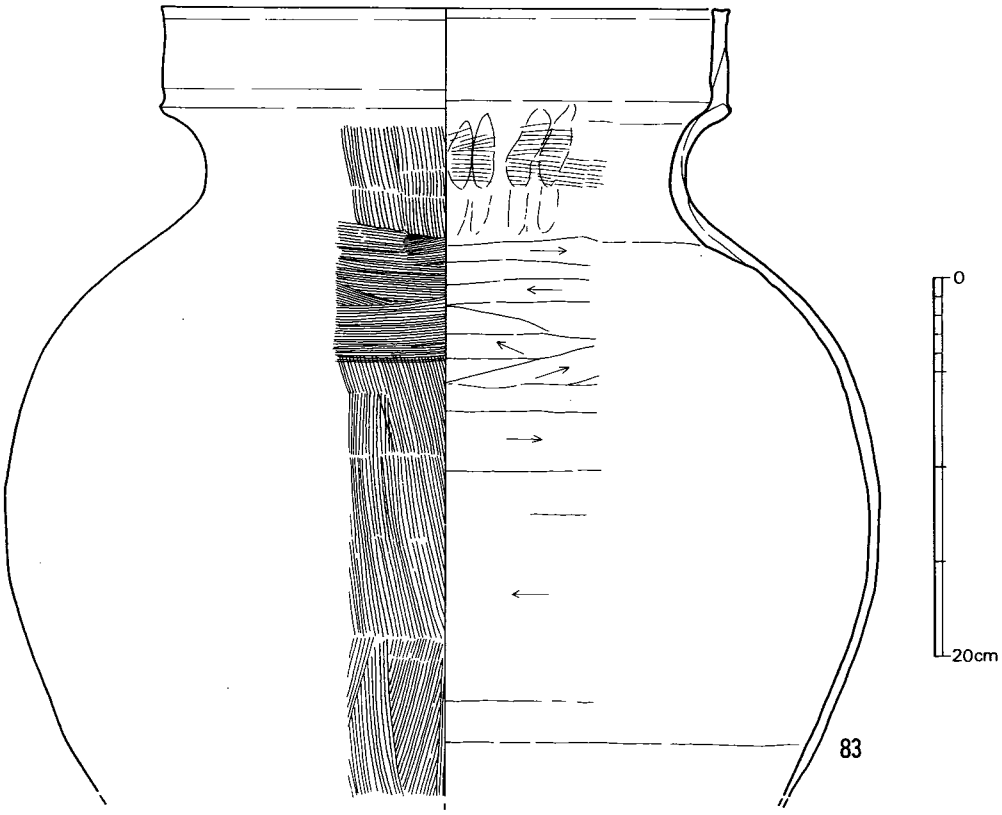


第 122 図　11号住居跡実測図（1/60）

住居外の土器（図版52-２，第123図）

74は，椀で１号住南側の上層から出土した。約２分の１の破片で，復原口径18.7cmを測る。口縁部はわずかに外反する。口縁部は内外面ともにハケヨコナデ，外面はハケ目，内面はヨコナデされている。

83は５号住居跡上の表土から出土した。二重口縁の甕で，胴部下位と底部を欠損する。口縁

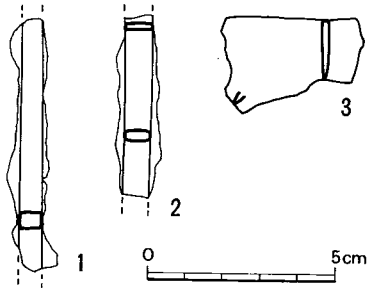


第 123 図　住居跡外出土土器実測図(1/4)

部の立上がりは直で，先端は中央がややくぼむ。頸部との接合部は外側へやや突出する。体部は肩を張り，下半は細くなると思われる。口縁部外面はヨコナデ，肩部は横のハケ目，他は縦方向のハケ目が施される。内面はヘラケズリが行われる。口径15.1cm，残存器高20.9cmを測る。

鉄　器（図版52－4，第124図）

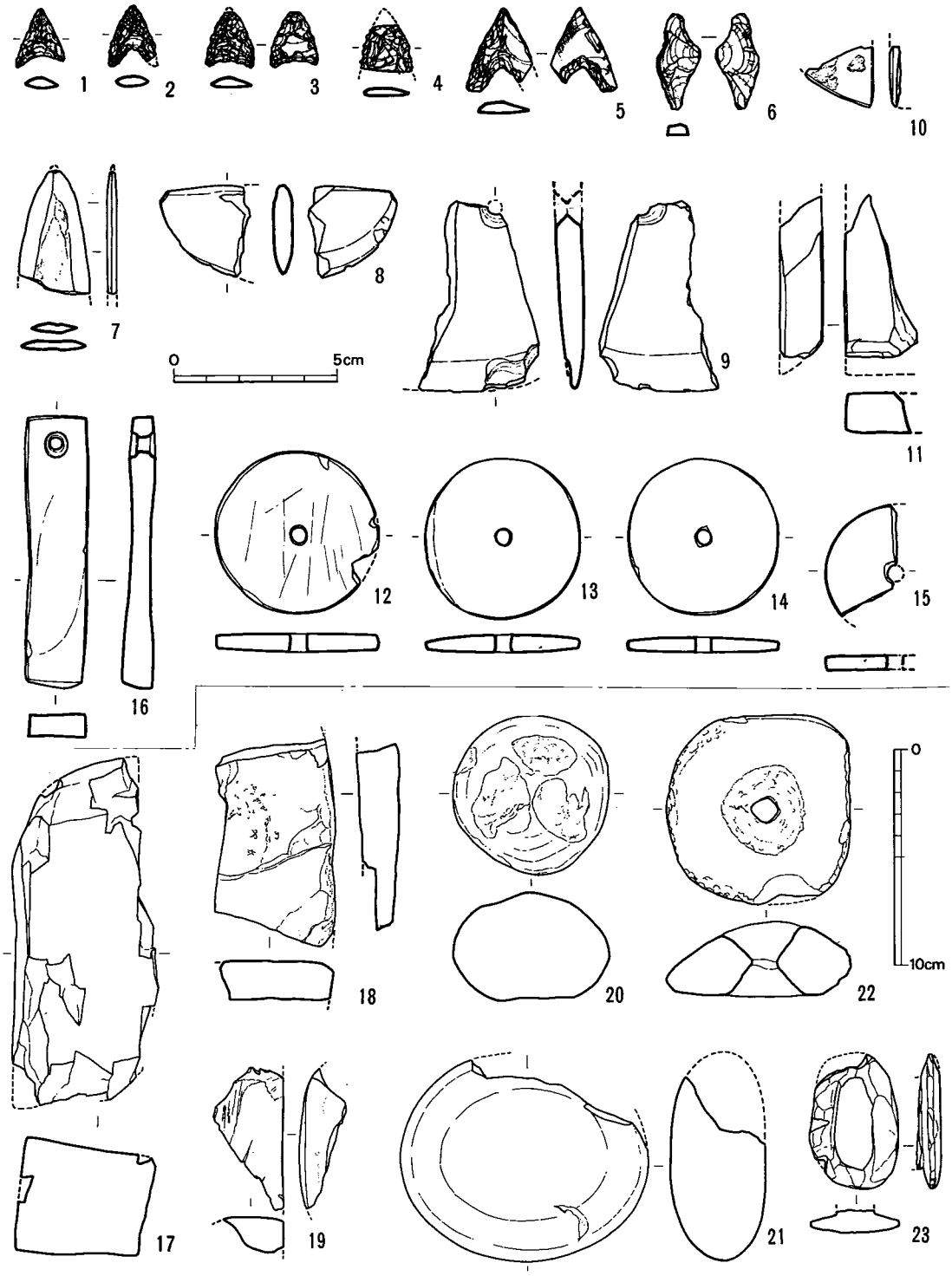
1は5号住居跡の西側床面から検出した鉄鏃片である。現存長6.7cm，幅6㎜，最大厚4.5㎜を測る。2は10号住居跡の上層から検出した鉈と思われる破片である。残存長4.8cm，幅7㎜，厚さ2～3㎜を測る。3は調査東側の第3層から検出した鉄器片である。長さ3.8cm，最大幅2.6cm，最小幅2.6cm，厚さ2㎜を測る。図に示したような刃部をもつが，形態・用途とも不明の鉄器である。



第 124 図
Ⅰ-18 出土鉄器実測図 (1/2)

石　器（図版53－1，第125図）

打製石鏃・削器・石庖丁・石製紡錘車・砥石・敲石・すり石・環状石斧等が検出された。



第 125 図　I -18 出土石器実測図（上1/2，下1/3）

打製石鏃（1～5）　1は7号住居跡上層から，2は5号住居跡埋土・3は1号竪穴埋土，4はS746・W20のピット内，5はS750・W22の3層出土の資料である。1は安山岩，2～5は黒曜石を素材とする。1～4は全面に調製剝離が及ぶが，5は主要剝離面を残す。1・3は基部がやや内湾するタイプで，2・5は逆刺が深いタイプである。3は先端・基部を欠く。重量はそれぞれ，0.55g・0.6g・0.7g・0.8g・1.3gを測る。

削　器（6）　6は9号住居跡上層から検出した削器である。黒曜石剝片を使用し，三角形の長辺部・短辺部の一部を刃部としている。重量は1.37gを測る。

石　剣（7）　10号住居跡の下層から検出した資料で，先端と下部を欠く。一般的にみられる石剣とは形態を異にする。現存長3.8cm，最大幅2.2cm，厚さ3～3.3mm，重さ3.15gを測る。石材は風化が進んだ頁岩である。番上II－5の出土のものと類似する。

石庖丁（8・9）　8は2号住居跡上層から検出した硬質砂岩製の片である。小形で現重量4.7g。9はS744・W0の3層から出土した砂岩質堆積岩製の大形石庖丁の片で現重量21.1gを測る。

磨製石斧（10・11）　10は発掘区北西隅のピット内から出土した片刃石斧の片で，灰白色の頁岩製。11は，S750・W22から検出した柱状片刃石斧の胴部破片で刃部がわずかに残る。淡灰白色を呈する頁岩製で，重さ19g。

石製紡錘車（12～15）　12・15は第3層，13・14は5号住居跡東ベッド上からの出土である。12は，径5cm，厚さ5.7mm，孔径4.5mm，重さ24.5g。暗緑灰色の雲母片岩製。両面ともに刃物状の物による痕と思われる細い線が多数認められる。13は正円でなくかなりいびつである。最大径4.9cm，厚さ5.6mm，孔径4.6mm，重さ21.1g。14は径4.6cm，厚さ4.7mm，孔径4.6mm，重さ19.9gを測る。13・14は白雲母片岩製。15は3分の1の片で，厚さ4.4mm，現重量6.1gを測る。角閃片岩製。

砥　石（16～19）　16は9号住居跡北西隅から出土した淡青灰色の粘板岩製。柱状を呈し長さ8.3cm，幅1.9cm，厚さ約1cmの仕上砥である。図上部に両側穿孔の孔がある。全面使用されており，中央部は凹んでいる。重量24g。17は，4号住居跡南側の中央土壙からの出土である。青灰色の粘板岩製で，節理による剝落が進んでいる。重量757g。18は，1号住居跡埋土中から出土した砂岩製のもので重量は120gを測る。19は，5号住居跡上層からの出土。青灰色の粘板岩製で，重量32.9g。

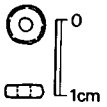
すり石（20・21）　20はS746・W8，21はS752・W18の3層からの出土である。20は断面不整楕円形をなし，掌の中に納まる大きさである。中央を除く全面の磨耗が著しい。角閃玢岩で，重量405g。21は，断面楕円形をなし，側縁部を使用している。玄武岩の円礫を転用している，重量637gを測る。

環状石斧（22）　S754・W163層から検出したものである。白雲母片岩製で円形より隅丸方形に近い形をなし，中央に敲打による貫通孔が施される。孔径は1.1cm前後で，周縁部は刃部を形成する。重量365gである。

八　龍

石製品

滑石製摘付円盤(23)　S748・W22のピットから検出した。体部と摘部からなり，スタンプに似た形状になると思われるが，摘部は4㎜ほど残して欠損している。体部も一部欠損している。長径6.2cm，短径4.1cmの楕円形を呈し，約1cmの厚みがある。現重量は37g。



第 126 図
臼玉実測図
(実大)

滑石製臼玉（第126図）4号住居跡東側ベッド上から出土した滑石製臼玉である。外側中央の稜は明確でない。丁寧な作りで，やや紫がかった暗灰色を呈する。径4.8㎜，厚さ1.7㎜，孔径1.8㎜を測る。

(2) 竪　穴

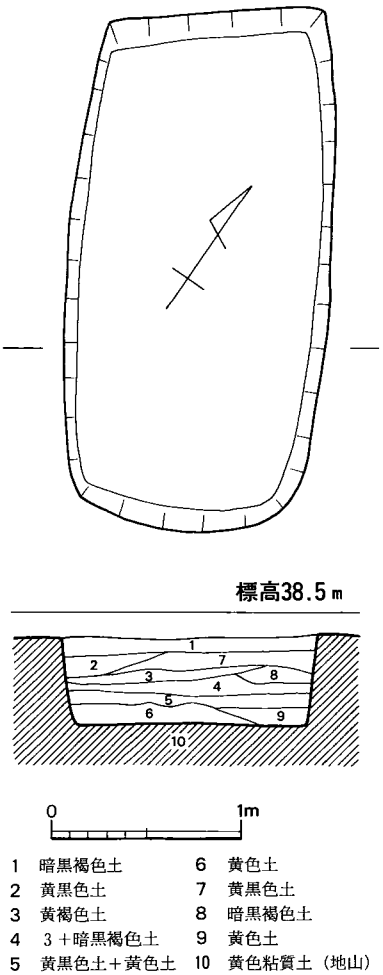
1号竪穴（図版45－2）

4号住居跡の南側2mから検出した隅丸長方形の竪穴である。長辺1.75m，短辺1.15m，深さは中央部で約35cmを測る。出土遺物はない。

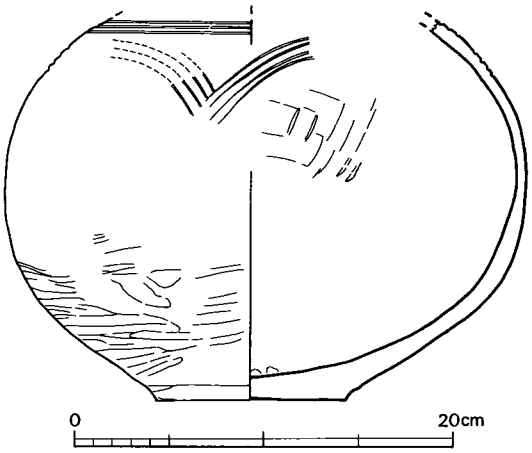
2号竪穴（図版45－3，第127図）

4号住居跡の南東側2mから検出した長方形の竪穴である。長辺2.75m，短辺1.4m，深さ約50cmを測る。層位は第127図に示すとおりである。埋土中から弥生前期の壺形土器片が出土した。

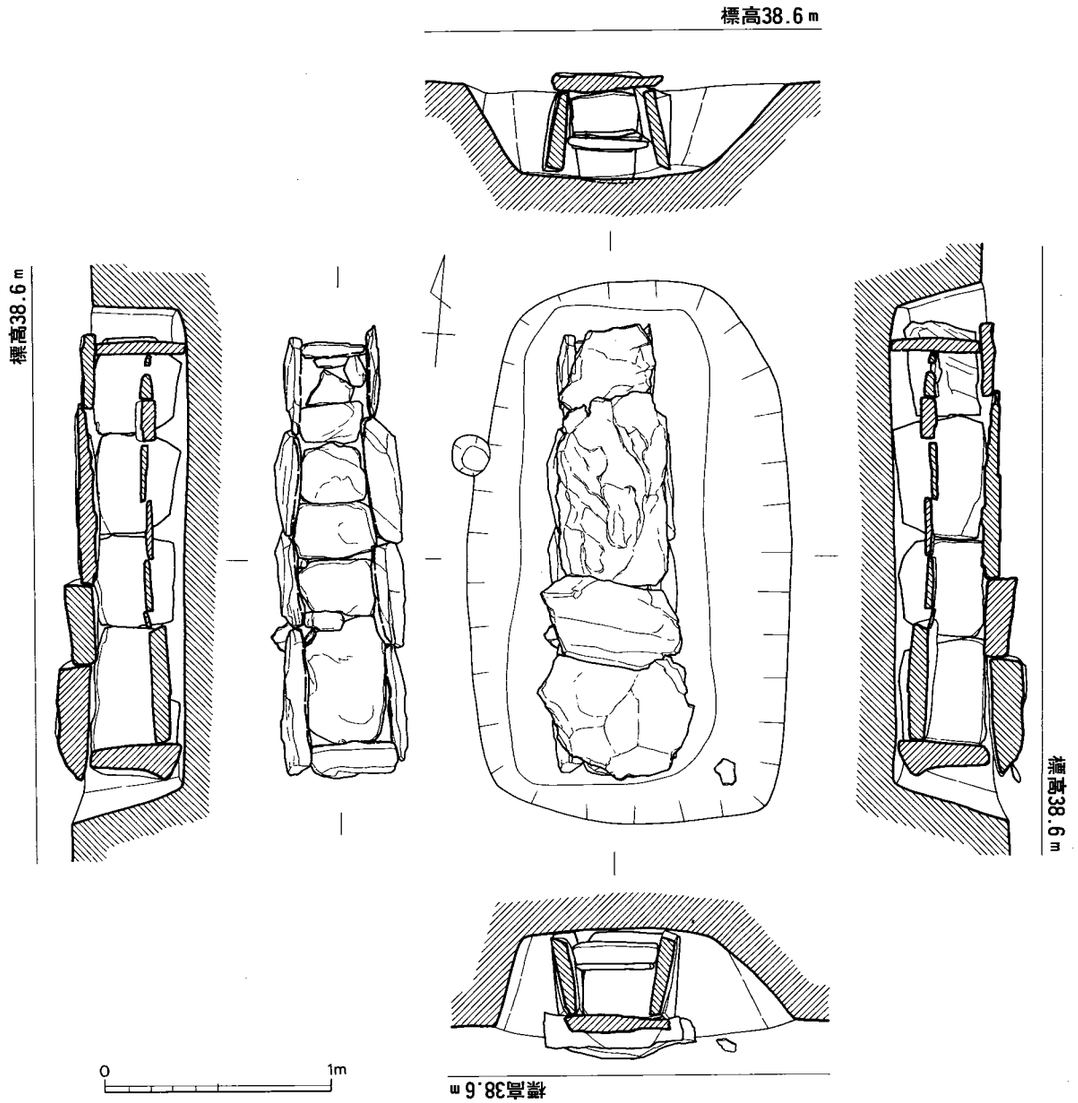
他に年代を決定する資料もなく，1・2号ともに前期



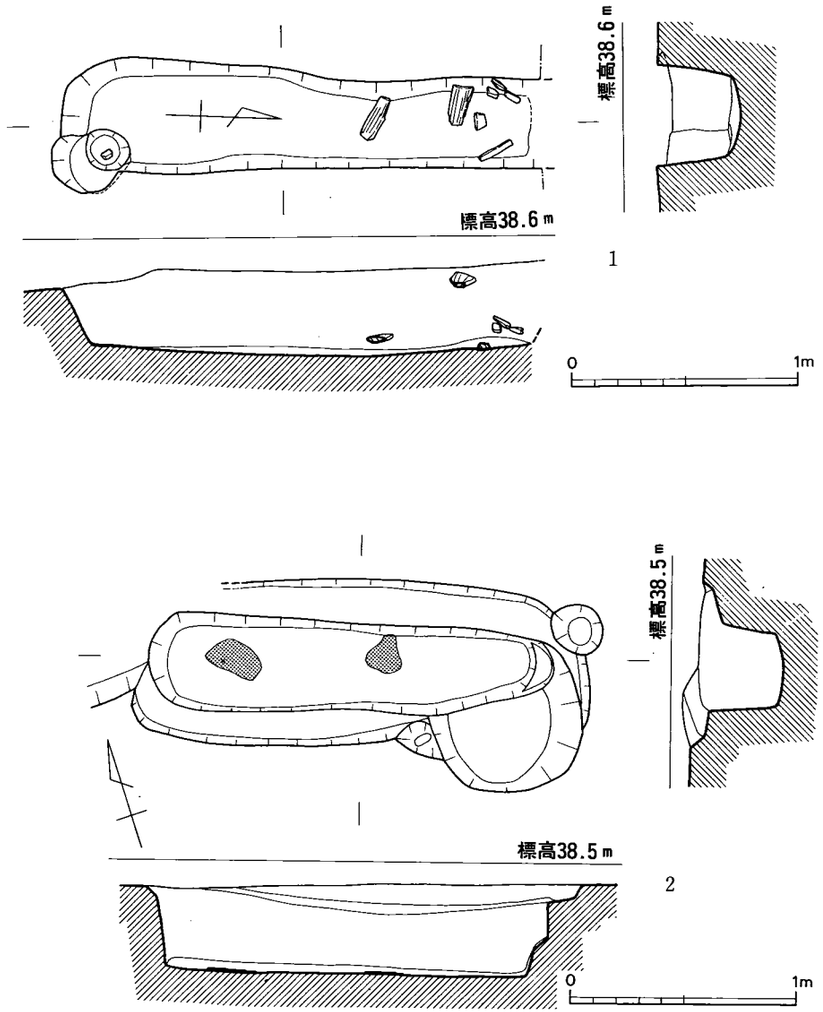
第 127 図　2号竪穴実測図（1/40）



第 128 図　2号竪穴出土土器実測図（1/4）



第 129 図　八 龍 I-18　石 棺 墓 実 測 図　(1/30)



第 130 図　八 龍　I-18　1・2 号 土 壙 墓 実 側 図　(1/30)

に属するものと考えられる。

土　器（第128図）口縁部と胴部の約３分の１を欠損する小形の壺である外面は，ヘラヨコ磨研によって整形されている。この後，頸部に３条のヘラ描き沈線文と連孤文が施されている。底部・内面はナデ調整されている。胴最大径13.8cm，底径5.1cmを測る前期初頭の土器である。

(3) 墓　地

石棺墓（図版46－１・２，第129図）

住居跡群の東側で検出した成人用の箱式石棺墓である。１段掘りの長さ2.39m，幅1.43m，深さ43cmを測る隅丸長方形の墓壙内に構築されている。棺の主軸はＮ６°Ｅを示す。

石棺は，両小口に各１枚，両側壁に各５板，蓋石に４枚の石材が使用されている。棺内には床石があり，大きな板石が６枚と，その間を小ぶりの石で埋めている。石材は結晶片岩を主に用いているが，東側側壁の１枚と南側小口石に花崗岩が使用されている。小口石は直に立てて据えられるが，側壁はやや内傾している。床石と墓壙底の間は７～15cmほどあり，黒色土の混入した黄色土で埋められている。石棺の内法は，長さ1.72m，幅は，南側小口部で37cm，北側小口部で31cm，床石から蓋石までの深さは，南側で23cm，北側で27cmを測る。幅が広く，一番大きな床石が敷かれた南側が頭位と考えられる。赤色顔料の塗布は，床面より上位全面に施されており周壁組み立て後に行われたことが明らかである。塗布の状態は蓋石裏面が最も良好である。出土遺物はなく，時期は決定できないが，住居跡群と同年代のものと推定される。

１号土壙墓（図版46－３，第130図）

11号住居跡と切り合い，住居跡より新しい。長方形のプランを呈し，主軸はＮ３°Ｅを示す。南側の小口上部は発掘調査区外のため確認できなかった。内法は，長さ1.95m，北側小口幅39cm，南側小口幅28cm，深さは中心部で37cmを測る。床面は，中央部が最も深くなっており，壁はやや斜めに立ち上がる。南側の埋土中から７個の石を検出したが，使用目的は不明である。床面には側板等の掘り込みもない。遺物も発見できなかった。（池辺）

２号土壙墓（図版46－４，第130図）

形状は二段掘を呈す。主軸方位をＮ72°Ｗにとり，床面の×印から歯が検出されたことで，西側が頭位になることが確認された。西側で大小３つのピットと切り合うが，いずれも土壙墓よりも新しいものである。東側も浅い溝に切られている。そのため一段めの壁がなくなっているが全長を推定すると２ｍを少し超える程度である。最大幅は中央やや東寄りで0.73ｍを測る。二段めの掘り方は長さ1.78ｍ，東側の小口で幅0.43ｍを測る。西側小口は細く丸く掘られ，わずかな段を有す。深さは中央付近で確認面から0.39ｍを測る。床面には中央と東寄りの２カ所に朱の広がりが確認された。（片岡）

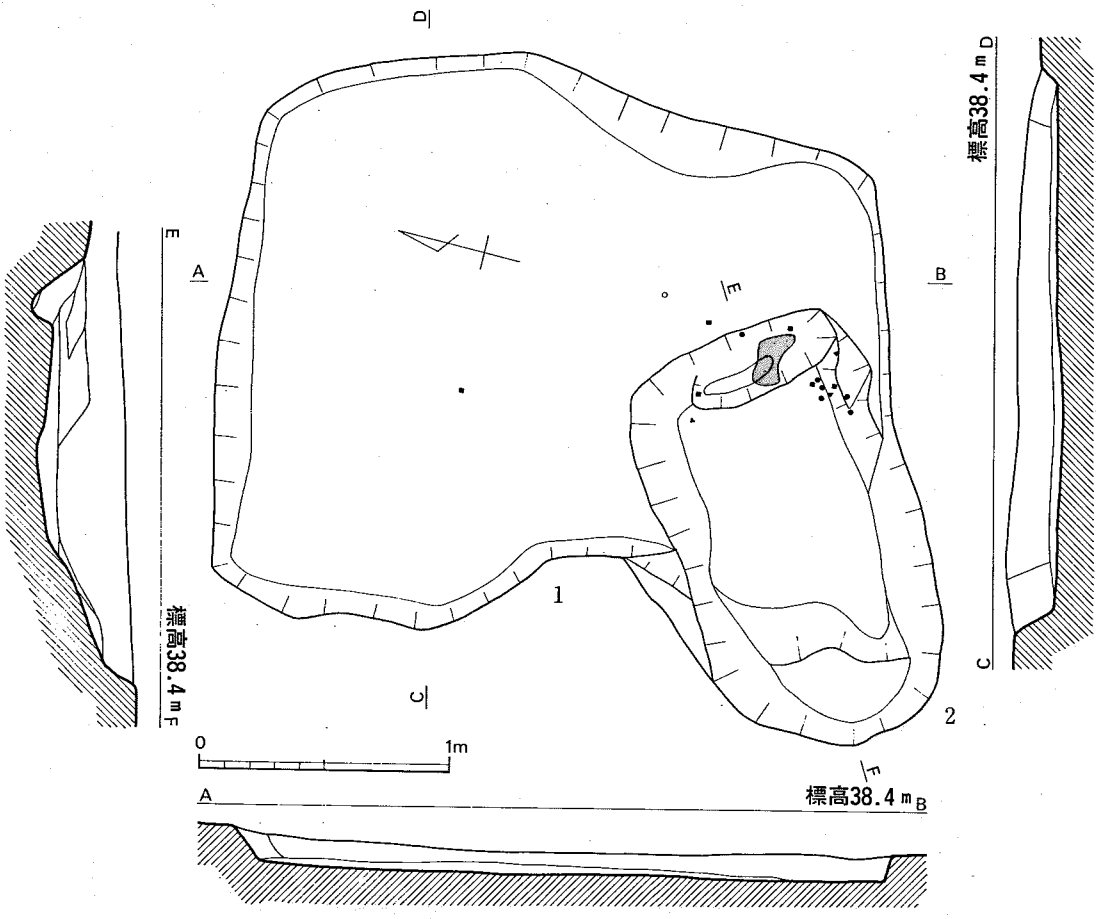
八　龍

1・2号土壙（図版47-1・2，第131図）

住居跡群の東側隅のS750・W25の位置で，薄く朱が確認されたので掘り下げて精査したところ不整長方形の1号土壙と隅丸長方形の2号土壙が検出された。残念ながら切り合い関係は明らかにできなかった。

1号土壙は，長さ2.56m，最大幅2.28m，最小幅1.6m，深さ約17cmを測る。2号土壙は，北側の小口部に掘り込みが確認され床の状態から判断して箱式石棺墓の抜き跡と推定される。壙の規模は，長さ1.72m，幅は中央部で97cm，深さは中央で35cmを測る。

131図に点で示した，長さ約1.5m，幅約50cmの箱囲内で，ガラス小玉8・管玉7・水晶玉4を検出した。出土状態は，連なった状態は認められず，ばらばらの状態である。しかし2号土壙の掘り込み上部に多く分布している。1号土壙では埋葬施設の痕跡はまったく認められず，2号土壙の石棺(？)が破壊される際に放棄されたものと考えた方がいいかもしれない。土壙の年



第 131 図　1・2号土壙実測図（1/30）

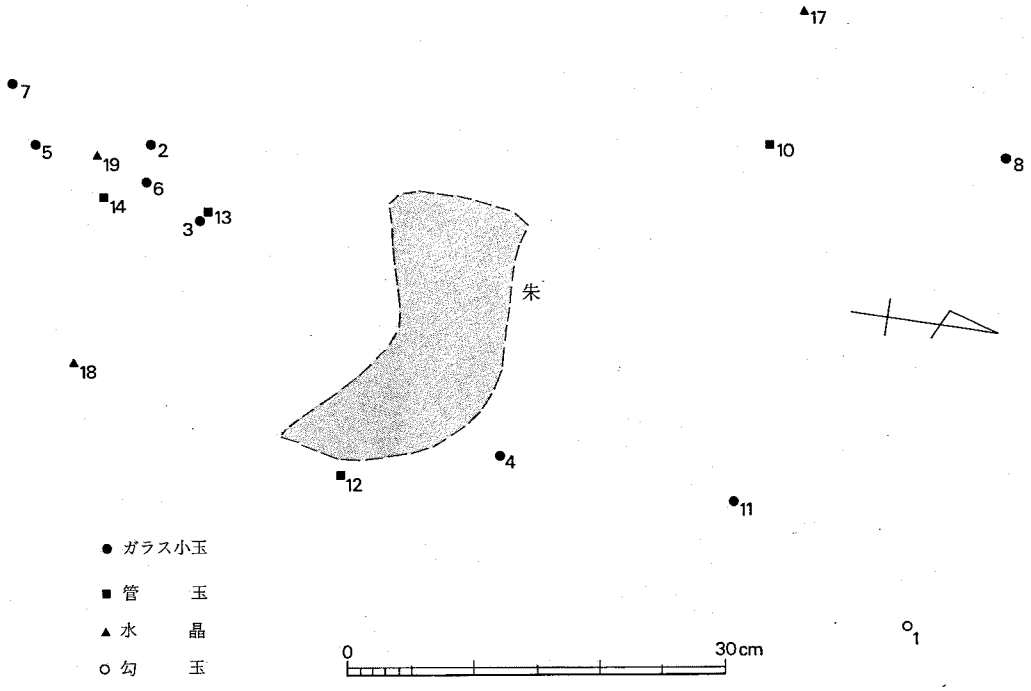
代については時期を決定する出土遺物がないために明らかではないが，玉類の形から判断して住居跡出土の土器に対応する時期のものと考える。

玉　類（図版53－2，第133図，表7～9）

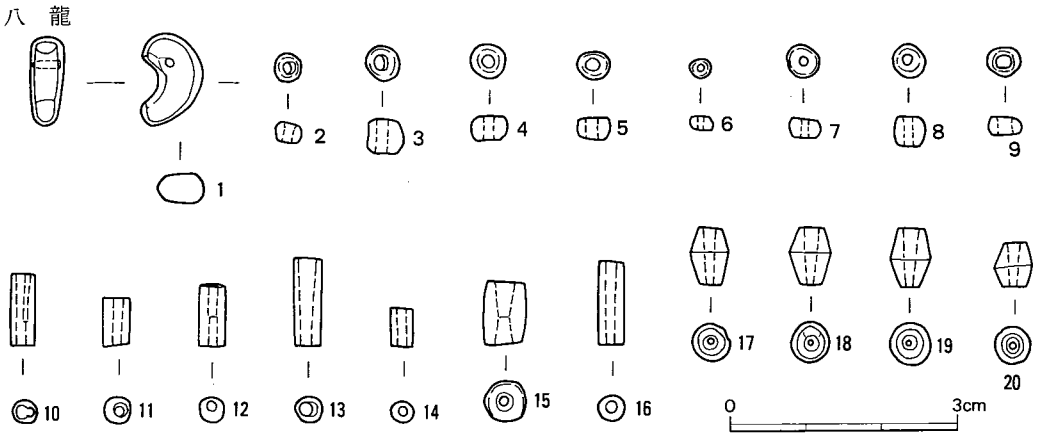
勾　玉（1）　濃緑色をした硬玉類の小さな勾玉である。C字形を呈し，背部は丸味をもち，尾部にかけてすぼまる。長さは1.19cm，厚さは頭部で4.3mm，尾部で3.8mm，孔は片側からの穿孔で孔径は1.3～1.7mmを測る。

ガラス小玉（2～9）　8個出土した。色調は4・8がグリーンブルー，7がコバルトブルー，他はスカイブルーである。形態は，径4mm前後で，厚さも径と同じ程度であるが，長く見えるもの（4・8）。径4mm前後のもので径より厚さが小さく，外形が丸味のあるもの（2・4・5・7・9）。径が3mm程度で，厚さ2mm以下で薄いもの（6）の3つに分類できる。スカイブルーの小玉では，気泡が孔と平行方向に連なるのが観察できた。このことから吹きガラス技法，あるいは引延法によって製作されたものと考えられる。全体の計測値は，表7のとおりである。

管　玉（10～16）　碧玉製の管玉で計7個出土した。計測値は表8のとおりである。11・14は他に比べて長さが5.1～6.5mmと短く，15は太身で，長さ8.55mmに対して径が5.75mmと大きい特徴がみられる。両側穿孔のものは2個（12・15）ある。10は同じ側から2度穿孔が行われている。12は



第 132 図　玉類出土位置図（1/6）



第 133 図 土壙出土玉類実測図（実大）

表7 八龍Ⅰ-18 ガラス小玉計測表

（単位mm）

No	径	厚	孔径	分類	色	No	径	厚	孔径	分類	色
2	3.7	2.8	1.75	C	スカイブルー	6	3.0	1.9	1.15	D	スカイブルー
3	4.35	4.3	1.9	A	スカイブルー	7	4.15	2.7	1.3	C	コバルトブルー
4	4.65	2.85	1.55	C	グリーンブルー	8	4.25	3.85	1.35	A	グリーンブルー
5	4.25	3.0	1.9	C	スカイブルー	9	4.25	2.5	2.0	C	スカイブルー

側面の片側が大きく抉れ孔の部分まで達している。る。ともに，穿孔・研磨の失敗作である。

水晶玉(17～20)　水晶玉は計4個出土した。水晶玉の分類については，汐井掛遺跡の報告でⅠ～Ⅲ類に分けた(註6)。当例はこのうちⅡ類の截頭円錐形を2つあわせた形の玉でいわゆる算盤玉である。無色透明で良質の結晶を使用し，表面は丹念に磨かれ，胴部の中央に稜線が入る。孔は片側からの穿孔である。17・18・20は上部平担面の一部が欠けており穿孔時のものであろうか。下部平担面は19・20は磨かれているのに比べ17・18はザラザラした手触りで，調整の段階で作業を終え磨かれていない。計測値は表8に示すとおりである。

表8 八龍Ⅰ-18 管玉計測表（単位mm）

No	長	幅	孔径 最大	孔径 最小	穿孔	色
10	9.55	3.4	2.1	1.25	両	緑
11	6.5	3.4	1.8	1.0	片	緑
12	8.3	3.3	1.3	1.0	両	緑
13	11.85	3.6	2.45	1.45	片	淡緑
14	5.1	3.0	1.25	1.2	片	淡緑
15	8.55	5.75	2.5	1.3	両	淡緑
16	11.1	3.5	1.4	1.15	片	緑

表9 八龍Ⅰ-18 水晶玉計測表（単位mm）

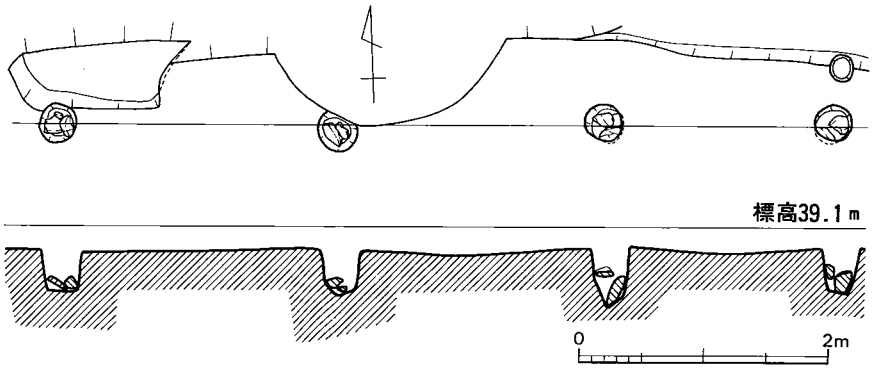
No	長	最大幅	上幅	下幅	孔径 最大	孔径 最小
17	7.7	5.0	3.7	3.0	1.65	0.9
18	7.8	5.25	3.45	3.0	1.9	0.75
19	7.85	5.4	3.4	2.85	2.3	0.85
20	6.0	5.0	3.0	3.1	2.05	0.95

福岡県では，水晶玉・ガラス玉作工房跡は確認されていないが，仲田Ⅰ-16の弥生後期後半から終末にかけての住居跡群で，水晶の原石が3個出土し，また結晶が露頭している叶岳（標高341m）にも比較的近く，三雲遺跡あるいは周辺地域に工房が存在する可能性は大きい。

(4) 歴史時代の遺構と遺物

掘立柱列（第134図）

S750・W5～12の間で，N88°W方向に並ぶ4本の掘立柱穴を検出した。古墳時代遺構などの埋土より明確な黒褐色土が詰まっている。この種の柱穴は20数本あるが，他の並びは判明でき

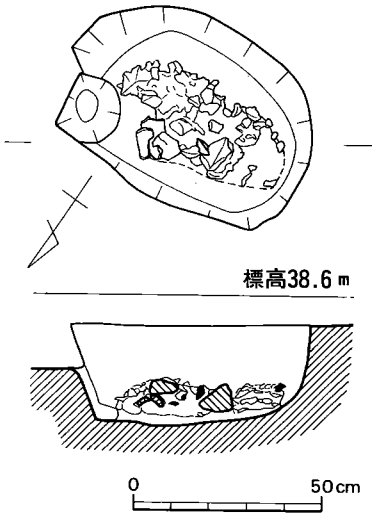


第 134 図　掘立柱遺構実測図（1/60）

なかった。柱穴は，径が30cm前後で，深さは30cmから50cmを測る。柱穴内には，各2個の礫が根石として利用されており，この石の上部のレベルは4本ともに大差ない。柱は確認できなかったが，柱穴の中心間は，P103-P110間が182cm，P110-P111間が218cm，P111-P116間が220cmを測る。P111から瓦片が出土しただけで，他に伴出する遺物はないが，埋土の状況からみて，歴史時代のものであることは間違いなかろう。瓦は怡土城のものと考えられる。

製鉄遺構（図版47-3，第135図）

S747・W2から，鉄滓の多量につまった，70×50cmの隅丸長方形の土壙を検出した。深さ約27cmで，北東の隅に円形の落ち込みがある。内には焼土と鉄滓があり，フイゴも出土した。また約2m東側から溶壁が一部確認されたがその詳細は不明である。　（池辺）



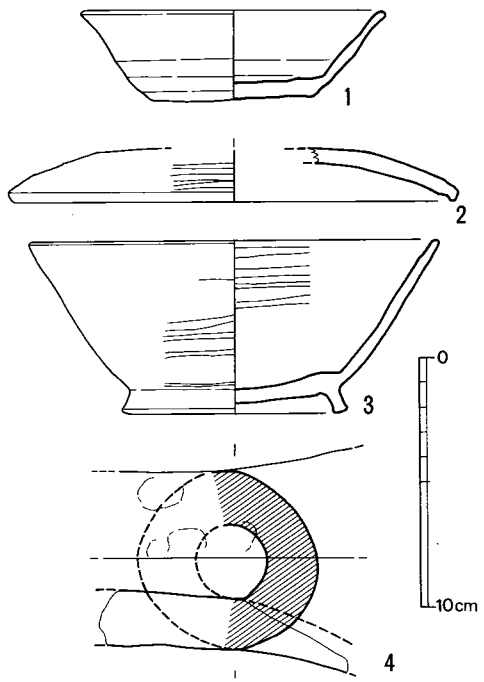
第 135 図
製鉄遺構実測図（1/20）

ピット・層出土土器・鞴羽口（第136図）

土師器

杯（1）　口径12.2cm，器高3.6cm，底径6.5cmである。内底にナデ，外底に板状圧痕がある。また，内底に「×」のヘラ記号がある。ピット19出土。9世紀中頃。

蓋（2）　約3分の1ほど残存し，復原すると口径17.8



第 136 図　土師器・鞴羽口実測図（1/3）

cmになる。外天井部は回転ヘラ削り調整を行う。内外ともにやや粗であるがヘラミガキをしている。

椀（3）　口径16.4cm，器高6.9cm，高台径8.0cmである。体部中位以下と外底部は回転ヘラケズリ調整がなされている。摩滅のため不明瞭であるが，内・外ともにヘラミガキが観察できる。

2とともに発掘区中央北部から出土したことや形態・手法上の特徴からセットになると考えられる。8世紀後半。

鞴羽口（4）　基部と先端部を欠失する。外面は強い火熱を受けて灰青色を呈する。胎土中に砂礫を多く含む。ピット出土。　（森田）

5.　II－10

道路の付け替えによって削平される幅約5m・長さ23m分を調査したが，東半部の10m間に甕棺墓が集中している。また，道路付け替え後に約3mの距離をおいた北側を発掘して1基を検出した。南側は石碑用地のために発掘しえなかったが，合計28基の甕棺墓を調査した。(小池)

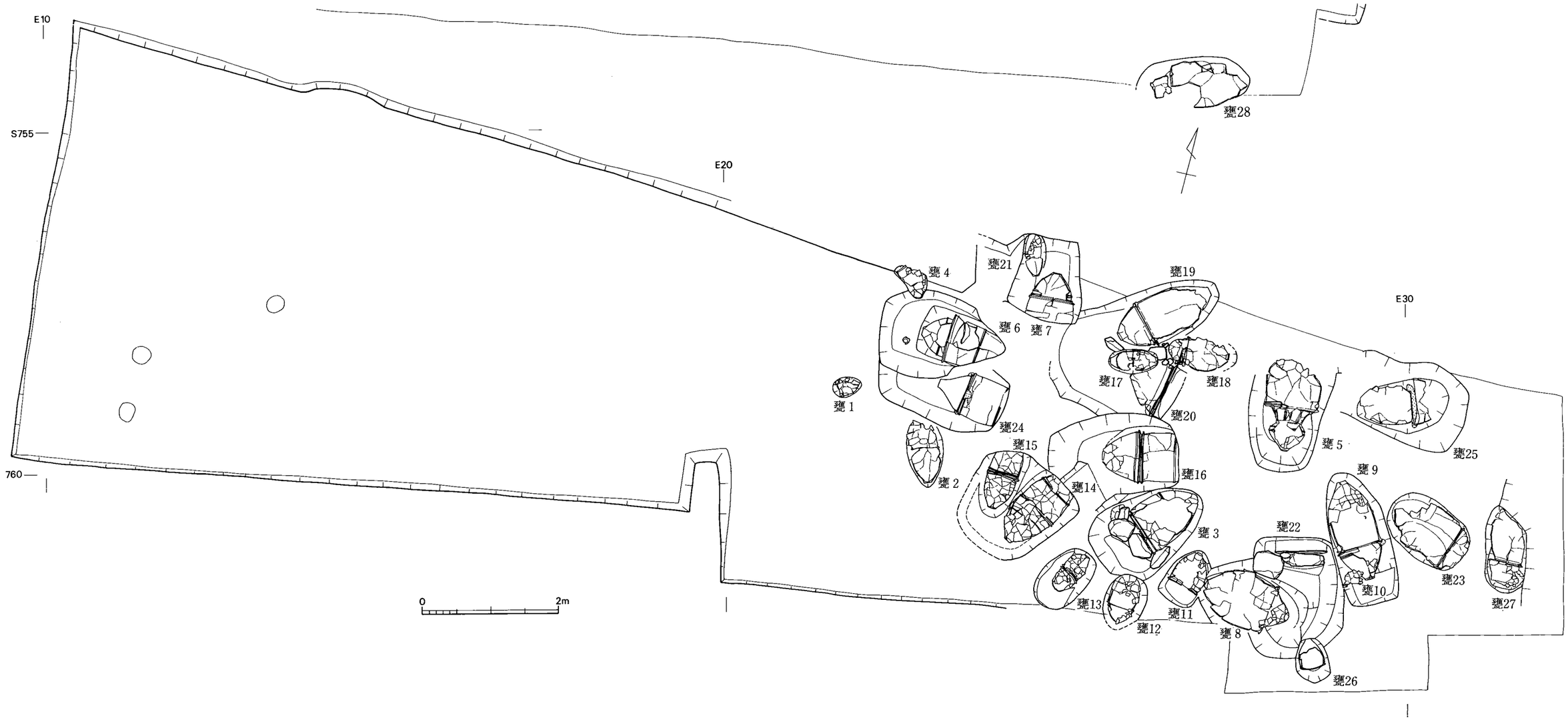
(1)　甕棺墓（図版54～67，第137図）

1号甕棺墓（図版56－1，第138図）

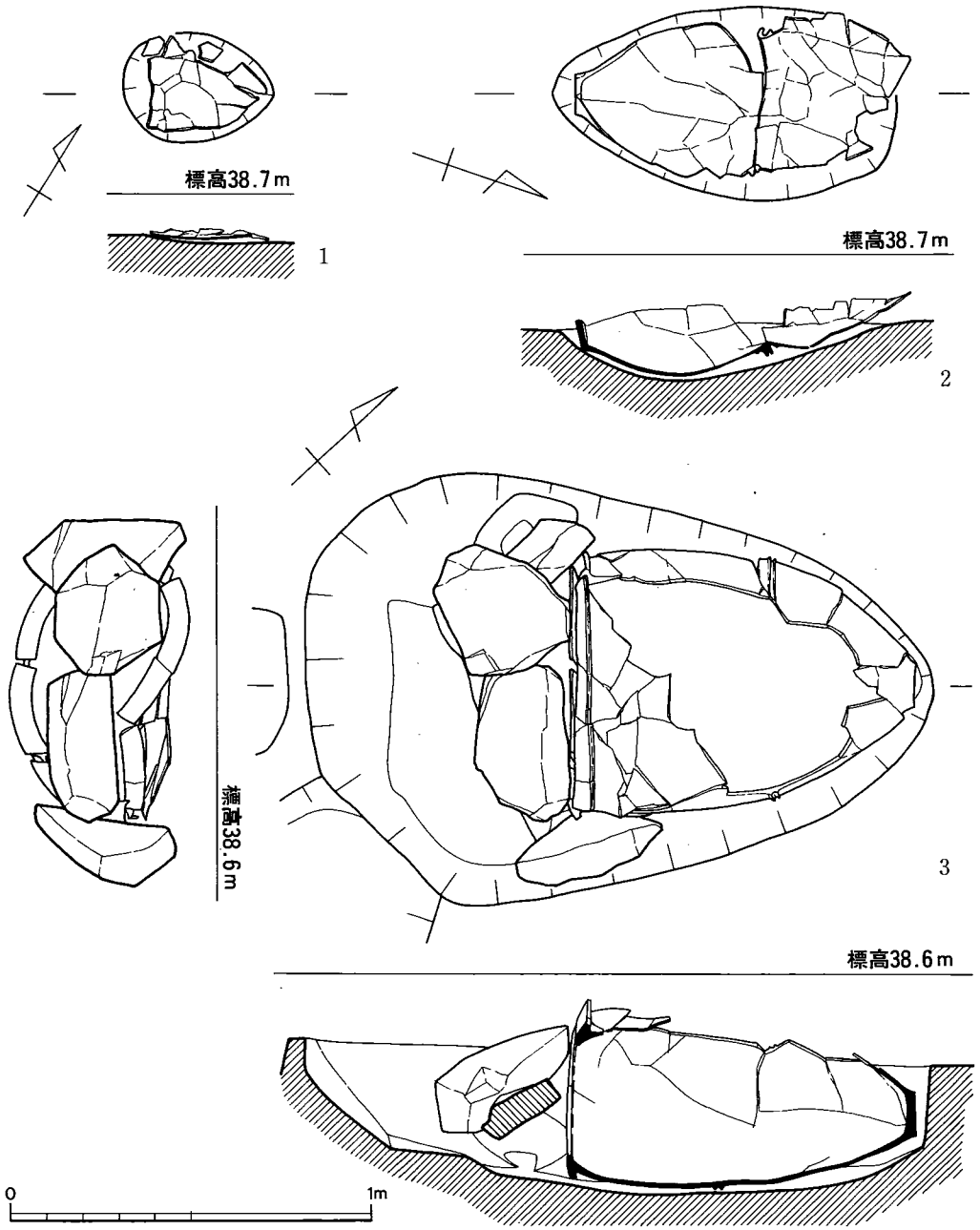
調査区の西端で，6号・24号甕棺に近接して出土した。1号と6号との墓壙距離は，現状で24cmを測る。他の小型・中型棺の配置状態から，墓域西端を意識し，6号・24号の埋置を2号・4号とともに深く考慮して埋葬したものと考えられる。

遺存状態は悪いが，前述の理由から，2号・4号同様に中型棺接口形式であった可能性が強く，出土したものは下甕と考えられる。

甕　棺（第139図）　口縁部を欠失するが，現存高36.0cm・胴部最大径37.4cmを測るので，2号

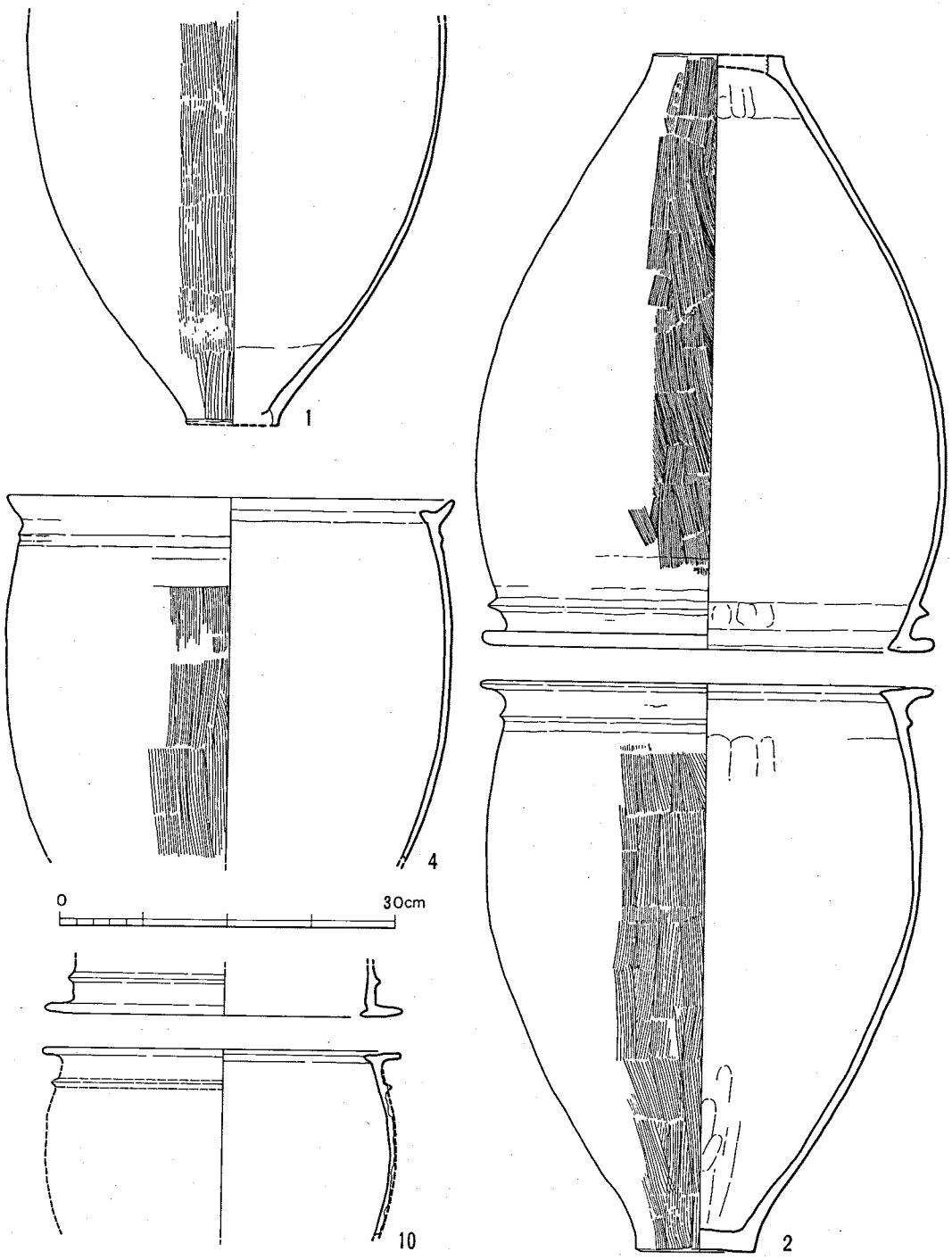


第 137 図　八 龍 II-10 遺 構 配 置 図 (1/60)



第 138 図　1～3号甕棺墓実測図（1/20）

下甕に類似する器高約50cm前後の中型棺か。しかし，口縁部の形状は4号に類似することも考えられる。（馬田）



第 139 図　1・2・4・10号甕棺実測図（1/6）

50

2号甕棺墓（図版56－2，第138図）

24号成人甕棺墓の南側に隣接する小児用甕棺墓である。上部は削平を受け，上甕は底部・胴部の大部分を欠く。下甕は約2分の1程度の残存状態である。ほぼ同形同大中型の甕を接口式に合わせ，主軸をN19.5°Wにとり，上甕は北側にある。墓壙は，残存長95cm，最大幅54cmの大きさで卵形を呈する。下甕に穿孔はされていない。

甕　棺（図版68，第139図）　上甕は約2分の1を復原できた。口径40cm，高さ52.6cm，胴最大径41.7cm，底径11.8cmの大きさである。口縁は逆L字形で，口縁下に三角凸帯がある。器壁は，口縁から凸帯下約3cmまでヨコナデ，外面はタテにハケ目，内面は底部付近がタテナデ，他はナデ調整している。胆土に細砂を多く含み，黄褐色の良好な焼成となっている。口縁下から胴部の中位付近までススの付着が認められる。

下甕は約2分の1を欠損する。復原口径40cm，高さ50.4cm，胴最大径38.5cm，底径10.7cmの大きさである。口縁は逆L字形であるが，上甕より多少内側に突出する。三角凸帯は上部の器壁が厚いため頂部がやや下向きである。底部は，わずかに上げ底で上甕よりも厚味がある。調整もススの付着も上甕と同様である。底部外面は黒色を呈す。粗砂・細砂を多く含み，茶褐色の良好な焼成である。この甕棺は，甕の特徴から中期後半のものである。　（池辺）

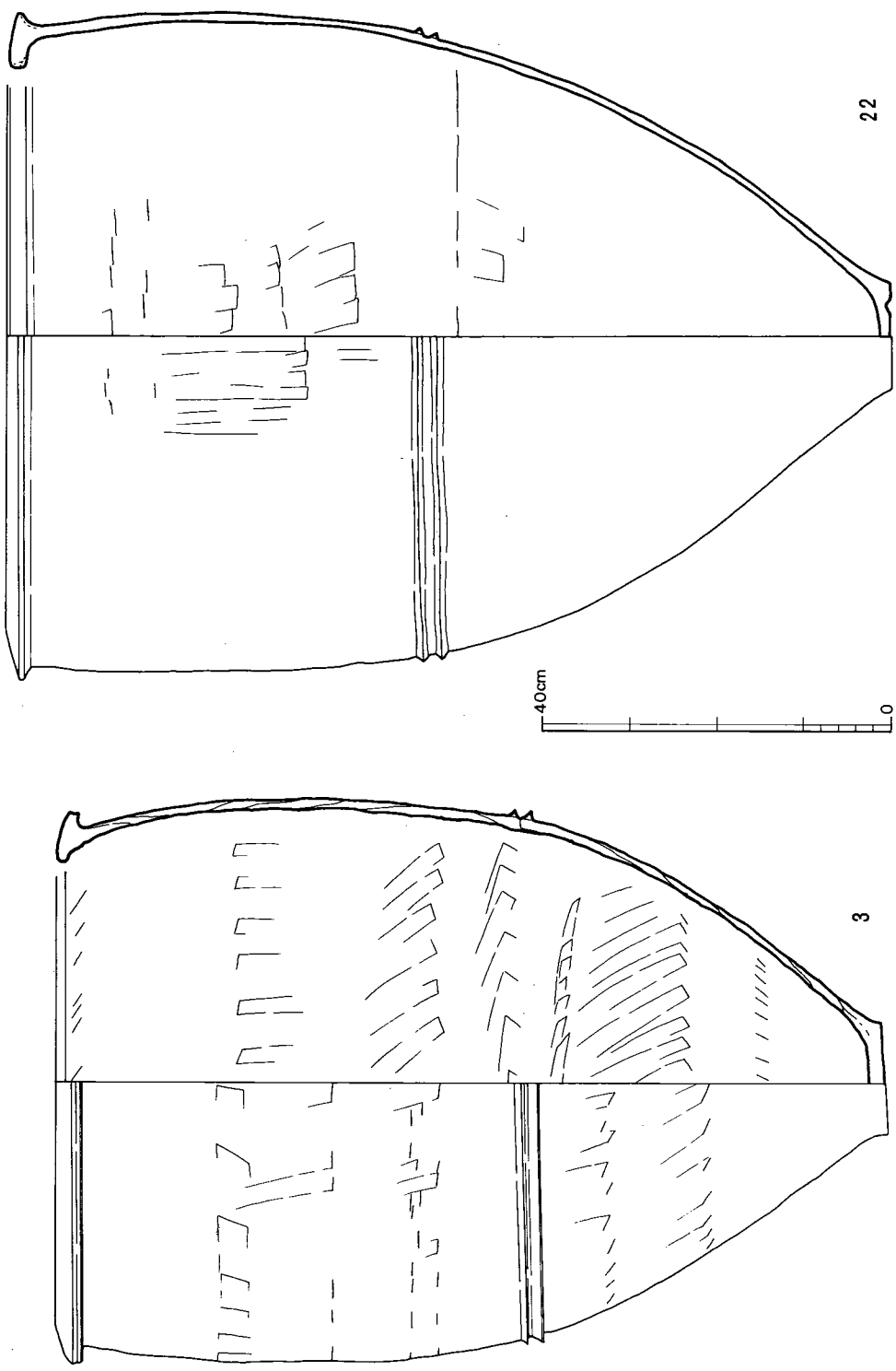
3号甕棺墓（図版57，第138図）

調査区の南半部で，現状では12号甕棺墓壙に切られ，16号甕棺墓墓壙を切るように出土した。しかし，第138図の断面図に示すように，12号は著しい剝平をうけ，横穴部天井も同様であることから，少なくとも下甕を更に20cm以上天井部が覆っていたと考えられるから，直接の切り合いとは言えない。しかし，26号下甕を深い3号墓壙が破壊していないので，12号が新出であることに変化はない。また，墓域内でそれぞれグループをなすと考えられる大型棺は，24号→6号甕棺墓，14号→15号甕棺墓，17号→19号甕棺墓へといずれも新しくなっており，埋置位置でも南→北方へとグループ内では新しくなっている。このことから，3号より16号が新出で，16号の墓壙造作中の3号墓壙北壁の一部崩壊によるものと考える方が妥当である。以上のことは，出土した棺体の特徴からも矛盾はない。

棺体の埋置状態は，大型単棺に木蓋を使用したものである。木蓋の形状は，棺体の変形・破損で埋土が原状を保たず，検出できなかったが，左右に口縁に接して立てられた石の状態と，壙底に木口用の掘り込みが認められないことから，甕口径にほぼ等しい大きさのものと考えられる。また，前面で押えるように検出された2個の石下面は，東・西例ともに墓壙底から10cmほど上位にあるが，前述左右両側例の石下面は墓壙底に接している。

以上のような石の出土状態から，棺体・墓壙埋設は以下のごとく考えられる。

木蓋に使用する板材は一枚板ではなく，数枚の板材を使用する。板材は棺体口縁に接して立て並べる。この際，墓壙底に板材を埋める掘り込みを造作しないために，15cm程度墓壙を埋め



第 140 図 3・22号甕棺実測図(1/8)

て踏み固め，次に東側例を横長に使用し複数の板材を前面から押える。単に1枚の木蓋を押えるなら，縦長に使用する方がより堅固な閉塞となるからである。同様に西側石でも押えるが，複数の板を縦長に使用したために，左右に木蓋が事後を含めてズレ，埋土が棺体内に流入するのを防ぐ用も加味して，左右側石を立てる。もちろん，木蓋腐朽後の埋土の流入は，この際，止揚されており，事後とは，死肉腐朽までの思慮である。

甕　棺(図版68，第140図)　器内外ともにハケ目をヘラナデ，ヨコナデで丁寧に消している。器内では，下位から7カ所の部位に整然としたヘラ端部痕を認める。下位からA～Gと数える。Aのヘラナデ後に丁寧にナデたため，その端痕のみ観察される。Bは斜め方向のヘラナデのまま。Dは横方向に近いヘラナデ痕で，断面図に示す凝口縁を造作後に，上半部を形成したが，断面が肥厚したために施したもの。なお，口縁部まで造作後では，横方向ヘラナデ作業を整然と行うことは困難で，Fの部位近くまで体部を造作後に施したもの。Cは横方向であることから，凝口縁までを造作後に施したもの。Eは斜め方向でややカーブを呈することから口縁まで造作後に，深く手を入れて施したもの。Fも同様の時期に施すが，上位なため縦に底部方向に施す。口縁との屈折部に認める端痕は，逆に底部方向から施したヘラ止め痕であるが，ナデ痕は，以後の丁寧な横方向ナデ・ヨコナデで消す。A・B・D・Eはいずれも底部方向から口縁部に向けての方向。

器外も同様のヘラナデを整然と施し，肩部は丁寧にヨコナデで消す。

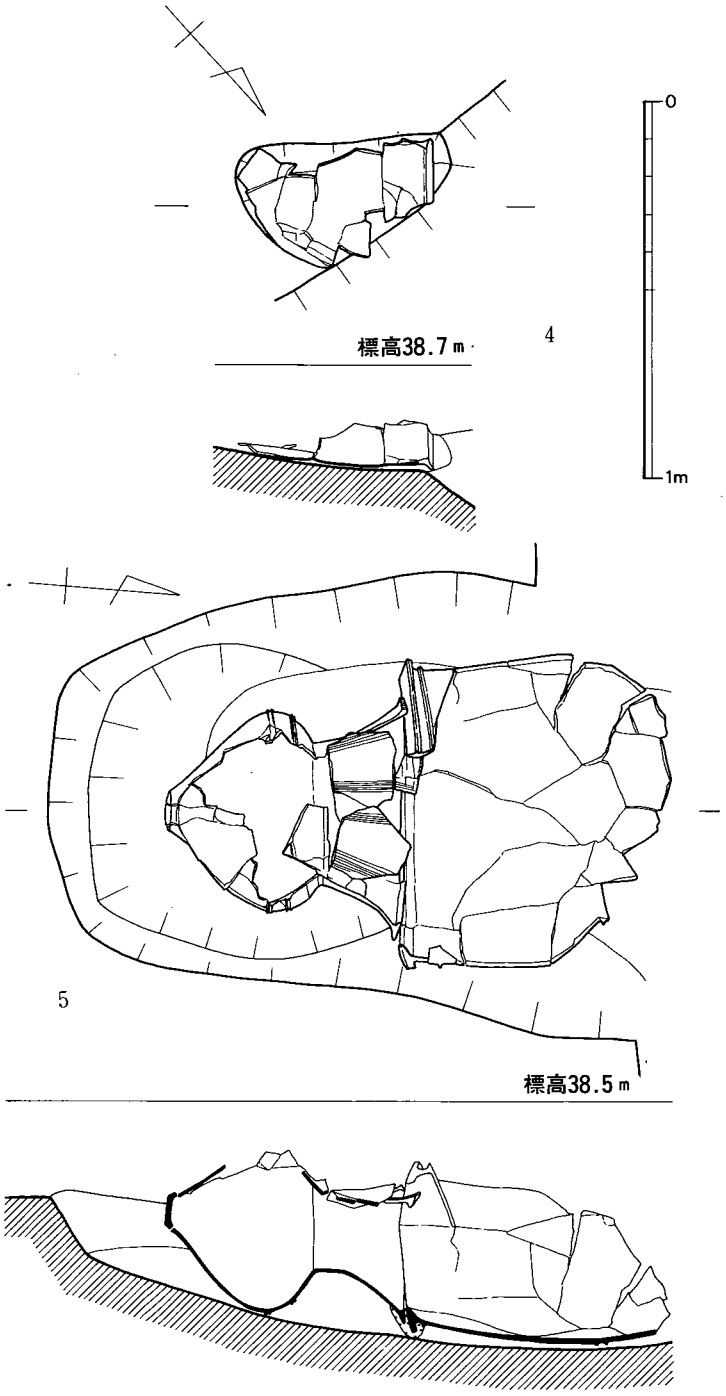
胎土の接合は，口縁部・底部での観察ができなかったが，接合部を特に入念にタタくため，丁寧なヘラナデ後も，器内壁は凹み，薄手となり，粘土帯の重複が著しく，延びる。なお，大略，器内での1カ所の幅広の凹みに対応する器外の凹みは，2カ所が観察され，断面観察が困難な完形例でも，内外の対応して一周する凹みの観察で，粘土帯幅・接合部位を知ることができる。断面図示で，凸部に接合部を示す例が多いが。

時期は，近接して造作された2条の断面三角形のシャープな凸帯や，厚手で上面幅の小さい口縁部および胴最上位に凸帯を造作しないなどの特徴から，中期中頃に近い中期前半と考える。

4号甕棺墓（図版56－3，第141図）

調査区の北西端で，6号甕棺墓墓壙を切って出土した。2号・6号甕棺墓墓壙も同様に切り合っており，前者が新しく，上甕が北方向に埋置されている。1号甕棺墓の項で触れたことも考慮すれば，遺存状態は悪いが，中型棺接口形式で，出土したものは上甕と考えられる。このことは7号と21号甕棺墓にみる頭位方向の関係からも言えるであろう。

甕　棺（第139図）胴下位～底部を欠失する。口径と胴部最大径は共に40.0cmを測り，同径で，張りのない胴部から屈折する口縁部内端は突出せず，上面内側はほぼ平坦で，外側のみ内湾する。器外は，胴部最上位で口縁部との屈折位から若干下位に低い断面三角状凸帯を付す。以上の特徴のなかで，口縁部上面外側が内湾することを除けば，2号甕棺下甕の特徴と一致し，中期中頃



第 141 図　4・5号甕棺墓実測図(1/20)

に若干後出する時期と考えられ，中期後半に無理に下げる必要はない。

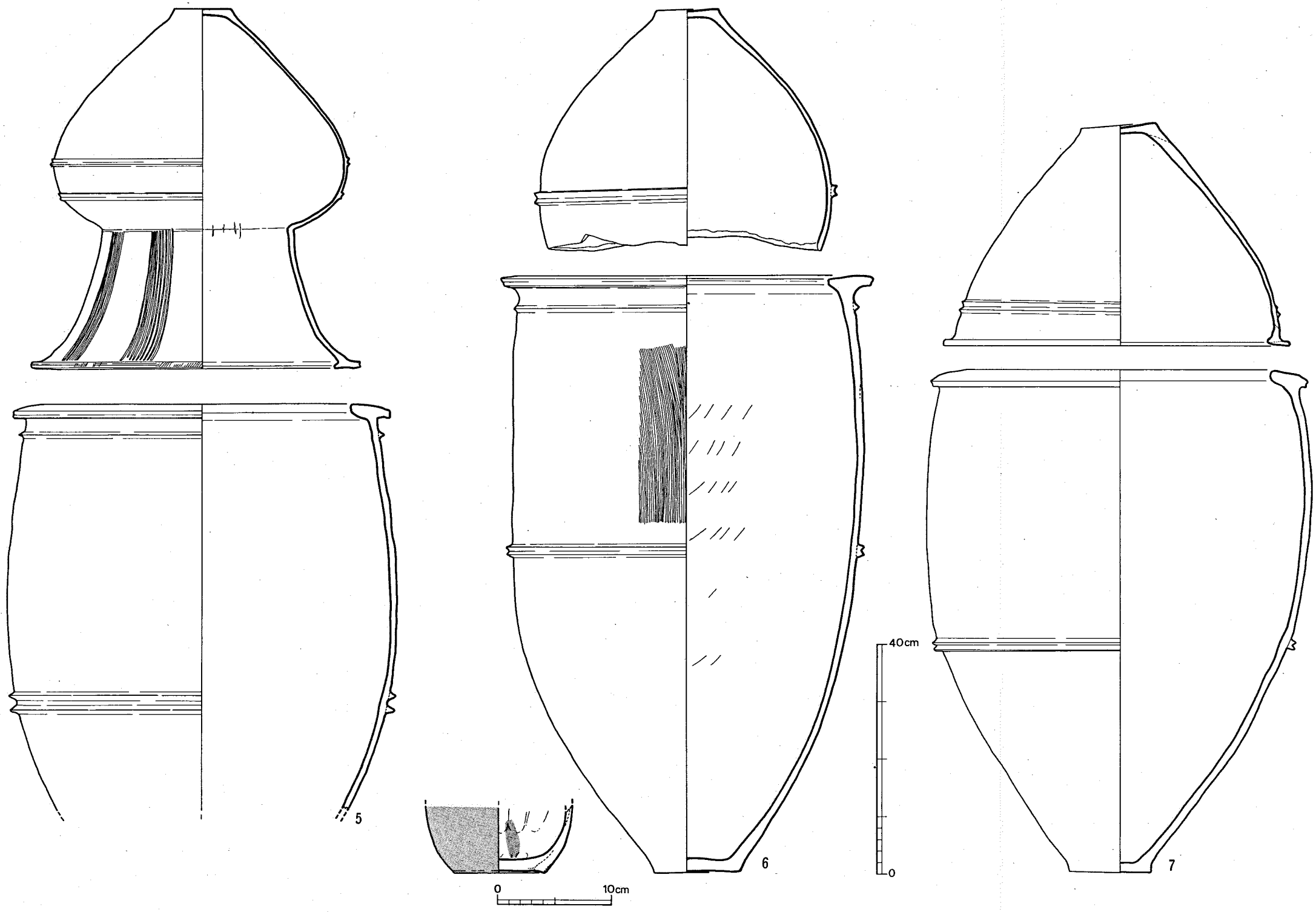
(馬田)

5号甕棺墓

(図版58-1，第141図)

18号甕棺墓の東側，25号甕棺墓の西側に隣接する成人用甕棺墓である。大形の壺と甕を接口式に合せ，床部を粘土で目貼りされている。主軸はN 4.5°Wを示す。壺は胴部をわずかに欠き，下甕は胴部下位から底部を，道路の側溝で削られている。墓壙は，隅丸長方形を呈し，下甕側がやや広く，しだいに深く掘り込まれている。

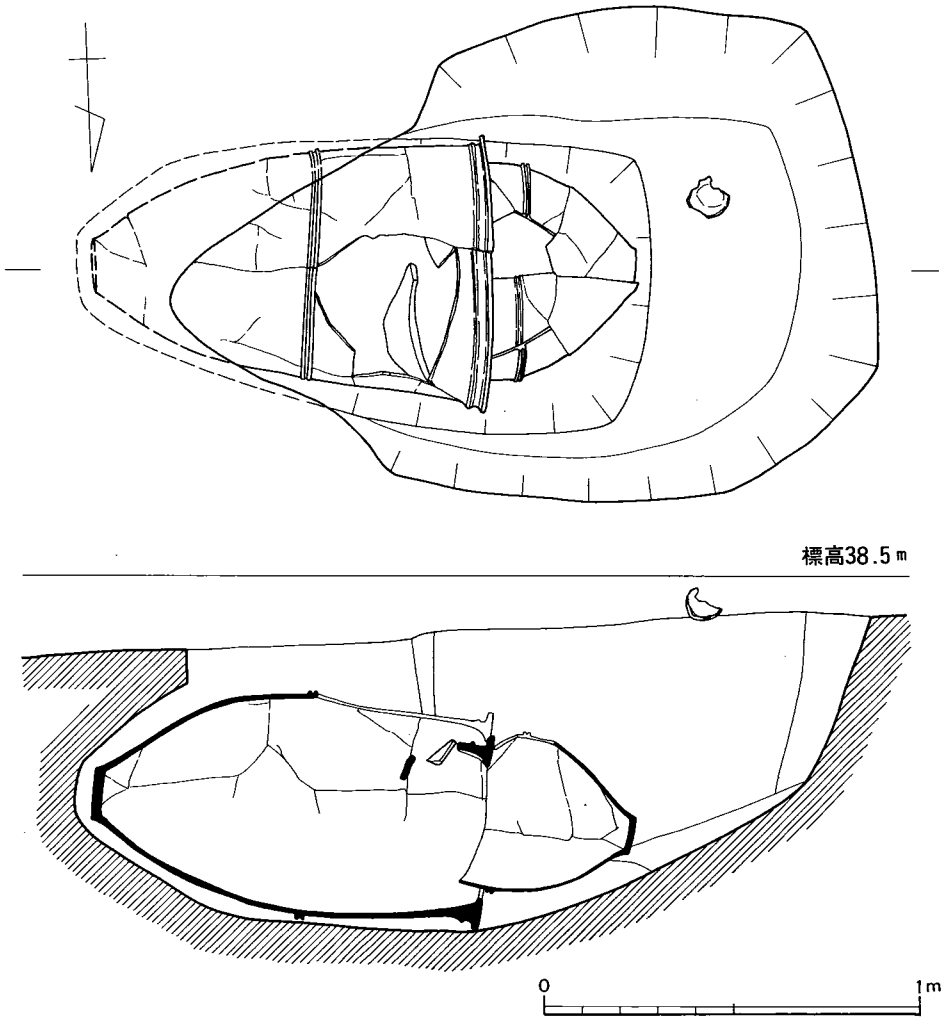
甕　棺(図版68，第142図)　上甕は，口径58cm，胴部最大径51.7cm，底径9.8cm，器高62.8cmの大きさの壺である。小さなわずかに内傾する鋤先状口縁，長く大きく外反する頸部，口径より小さな玉ねぎ形を呈する胴部とをもつ。口縁部内外面から頸部外面はハケヨコナデ調整されている。頸部内面はナデ，胴部との境は



第 142 図　八 龍 II-10　5 ～ 7 号 甕 棺 実 測 図 (1/8, 丹塗土器は1/4)

指押さえ痕が残る。口縁端部にはヘラがきのキザミ，頸部には4～5cmの幅で暗文が施されている。肩部から最大胴部にかけてはヘラミガキを行っており，口唇状の凸帯が2条施される。胴部内面と胴部外面の下半はナデ調整される。胎土には粗砂・細砂を含み，色調は，内外面ともに明褐色～淡褐色を呈する。黒塗りは，器壁が荒れて明瞭には残らないが，外面と内面頸部には黒色の所がマダラ状に認められる。

下甕は，約2分の1を欠損する大型の甕で，復原口径66.1cm，胴部最大径68.2cm，現高70.6cmを測る。口縁部はやや外傾するT字形口縁を呈し，胴部下位に三角凸帯を2条施す。内外面ともに器壁が荒れて不明瞭である。口縁部・凸帯はヨコナデ，外面はていねいなナデ調整が行



第143図　6号甕棺墓実測図(1/20)

われている。内面はナデ。胎土には粗砂・細砂を含み，焼成は良好である。黒塗りは外面全体に施されたものらしく黒色のマダラが薄く認められる。口縁部と凸帯の一部に良好な部分がある。この甕棺は口縁部等の特徴から中期中頃の新しい時期のものと考える。　（池辺）

6号甕棺墓（図版58－2，第143図）

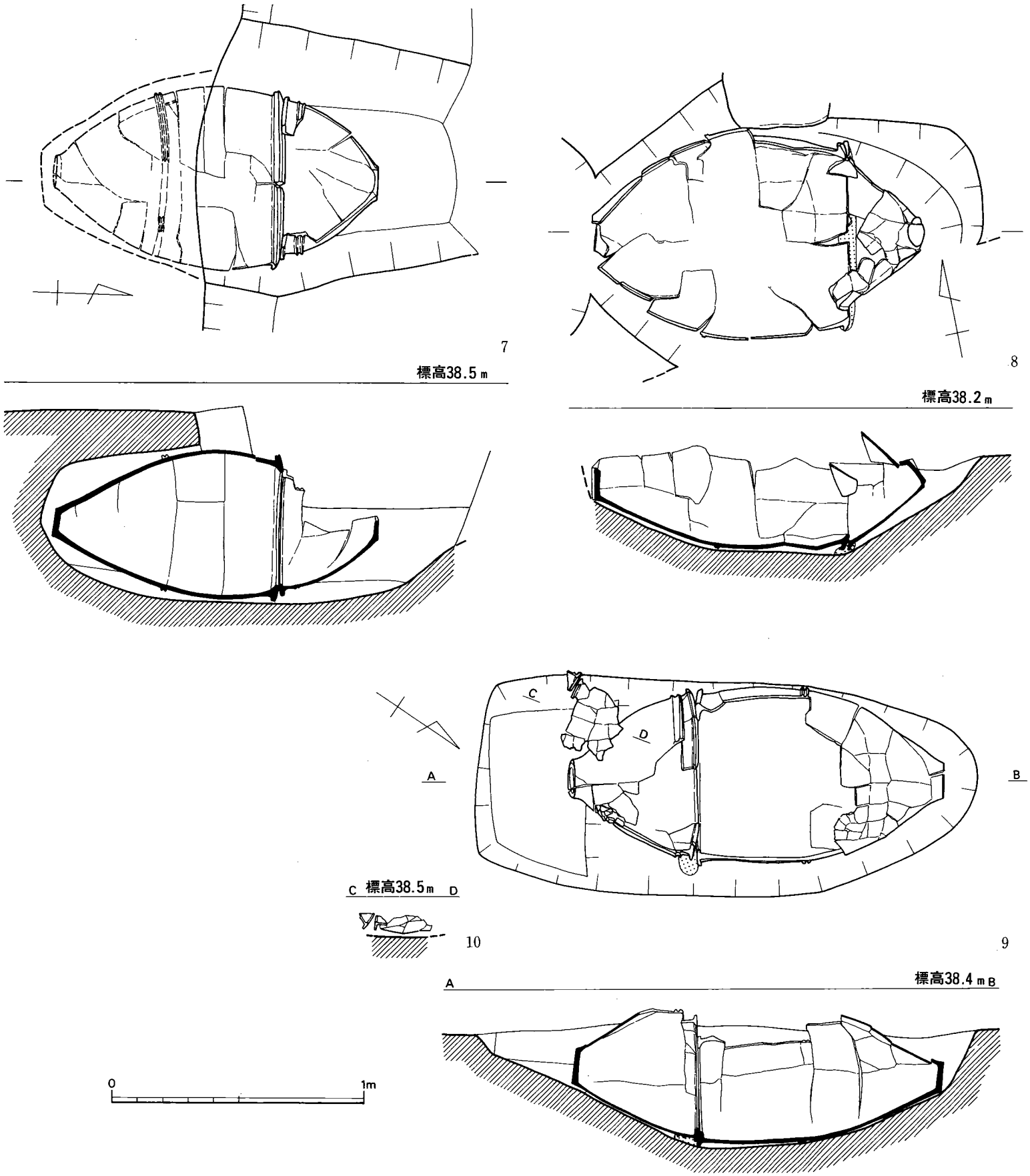
甕棺墓群の西端部に営まれた甕棺墓で，墓壙の上縁部に4号甕棺墓があり，24号甕棺墓の墓壙を切っている。一辺1.3mの不整方形プランになる墓壙の東側に横壙を穿って甕棺を挿入している。墓壙は約80cmの深さを有すが西側に浅く西壁の高さは約50cmになる。墓壙内からは，この甕棺に直接伴わないが黒曜石小片・残核と白雲母片岩製十字形石器が出土した。主軸方向はN87°20′Wをとり，傾斜角度は挿入された下甕底部がやや上がりぎみになる－2°30′を示す。甕棺は上甕の口頸部を打ち欠き，下甕の口縁内に挿入させて蓋とする呑口式だが，接合部分には目貼り粘土の痕跡がなく，上甕の底部がが下がりぎみになり，上甕の胴部凸帯が下甕口縁部にっかかった状態になっている。甕棺内からは何らの遺物も出土しなかった。

甕　棺（図版68，第142図）　上甕は口頸部を打ち欠き現存高42cm，底径11cm，胴部最大径51cmを有す。ごく僅かに内くぼみになる平底の底部から丸く胴が脹らむが，胴部最大径の位置に複合山形断面の凸帯が巡る。器外面は，縦方向ナデの過捺痕が残り，貼付凸帯の部分は補強でヨコナデされている。内面は全体にナデ調整されているが一部に板状工具の圧痕が残っており，板状工具によるナデとも考えられる。胎土・焼成ともに良好で淡褐色を呈し，外面に黒色塗布の痕跡がみられる。

下甕は，器高105cm，口縁外径65.5cm，口縁内径49.5cm，胴部最大径61.5cmで，頸部から胴下半までほとんど脹らまずに底径15cmのやや凹む平底につづく，長胴の甕である。口縁部は，ほぼ水平なT字形を呈し，口縁直下の頸部に断面三角形の山形凸帯が1条と胴部ほぼ中位に複合山形凸帯が，巡らされる。器外面は下半が縦方向のナデで，上半は縦方向のハケ目が残る。内面は全体にナデ調整されるが，板状工具の圧痕が帯状に残る。胎土に砂粒を多めに含むが，淡めの橙褐色に焼成され，大きな黒斑をもつ。

なお復原した上甕と下甕を呑口で合わせると内部に出来る空間の長さは141cmを有すことになる。上甕は口縁部がないために細かな時期決定をしがたいが下甕は中期後葉に近いといえるであろう。

土　器（第142図）　墓壙プラン検出時に墓壙内埋土の上面から出土した，丹塗磨研土器の底部破片である。底径8㎜の大きさを有し，浅い上げ底を呈すが胴部に向かって内湾しながら緩やかに脹らむ器形になる。胴外面はヨコ方向にミガかれ，内面・底外面はナデ調整で一部に指頭圧痕が残る。外面に赤色顔料が塗布されており，内面にも若干滴っている。胎土に長石・金雲母を含み，堅緻に焼成されるが，黒斑もみられる。樽形を呈す壺形土器の底部で，甕棺の中期中葉でも新しい段階との矛盾はないであろう。　（小池）



第 144 図　八 龍 II-10　7 ～ 10 号 甕 棺 墓 実 測 図 (1/20)

7号甕棺墓（図版58－3，第144図）

上甕の上半分を抉るように甕棺の主軸とほぼ直交して溝が走り，そのため上甕の一部は崩落している。溝底に表われた墓壙掘方から主軸直角方向で長さ1m強の長方形プランが想像されるが，主軸方向の長さは，北側が道路敷の下になって発掘できなかったために不明である。主軸方位はN1°Wでほとんど北をさし，傾斜角は2°上甕の方が低くなる。

甕　棺（図版69，第142図）　上甕には口径60.4cm，器高38.2cm，口縁内径51.0cmの鉢を使用している。口縁は内側に張り出しの少ないT字状口縁をしており，既に内に低く，外に高い傾斜を持っている。口縁下には見かけ2条の凸帯があるが，貼り付けを観察すると1本の粘土紐からできていることがわかる。胎土はよく精選され，均質な小砂粒を含ませている。焼成は良好で全体に黄灰白から灰白色を呈す。凸帯から底部にかけて一部黒斑がついている。

下甕は，口径65.9cm，器高87.5cm，口縁内径52.4cmを測る，大型甕である。口縁付近は内傾しており，口縁下21cm付近のところが径は最大になり67.2cmを測る。胴中位よりやや下に口唇状の凸帯が1本巡る。器が全体的に厚めで，1.2～1.4cmを測る。胎土はよく精選され，若干の小砂粒を混入する。焼成は良好で，全体的に赤褐色を呈す。胴上位に2カ所，口縁に1カ所，それに底部に黒斑を残す。内面に意味不明の線がある。確認できるもので10～13本あり，長いものは15cmほどある。いずれも左上から右下に伸びて，連続したようにつけられている。（片岡）

8号甕棺墓（図版59－1，第144図）

南側の墓壙の一部は調査区外のため未掘である。西側に隣接する11号甕棺墓より古い。上部は削平を受け，下甕は2分の1弱，上甕は口縁の一部を欠く。大形の下甕に，鉢形土器で蓋をし，接口式に合わせ粘土目貼りされた成人用甕棺墓である。主軸は，N78.5°Wを示し，下甕は西側にある。墓壙は卵形を呈し，下甕の最大胴部付近が最も深く掘られ，甕はほぼ水平に据えられている。下甕に穿孔はない。

甕　棺（図版69，第145図）　上甕は，口縁部と胴部の一部を欠損する歪な蓋で，復原口径58.7cm，器高は平均で31.8cmを測る。口縁は短くつまみ出された逆L字状口縁を呈し，下部に指押さえ痕が残り，その後ナデ，上面はヨコハケナデ調整されている。外面はヨコナデ，内面はナデ調整されている。内面はわずかにヘラ痕が残る。底部はナデ調整され若干上げ底状を呈する。色調は，外面淡褐色，内面は淡褐色～褐色を呈し，口縁の上面に薄く黒塗りされた痕跡が認められる。

下甕は，約2分の1を欠損する甕で，復原口径69.6cm，胴部最大径74cm，底径13.2cm，高さ99.5cmを測る。やや外傾する厚手の口縁をもち，胴部はわずかに内湾しながら立ち上がる。胴部下部に口唇状凸帯が1条ある。底部は，焼成前に一部つぶれている。口縁部はハケヨコナデ，凸帯はヨコナデ，他はナデ調整されている。胎土には粗砂・細砂を含み，焼成は普通である。色調は外面が淡褐色，内面は大部分が黒褐色を呈する。甕棺の時期は22号より新しく，7号・24

号と同様相が認められ，中期前半の古い時期と考える。　（池辺）

9号甕棺墓（図版59ｌ-２，第144図）

甕棺墓群の東部，Ｓ762，Ｅ30にある甕棺墓で，上部に10号甕棺墓が営まれており，当該甕棺墓墓壙は22号甕棺墓墓壙の一部を切っている。上部を削平されているが，墓壙は南東側に余裕があり，北西側は甕に沿うので，北西側は本来横壙であったと思われる。南東側で幅70～80cm以上を有す方形ないしは長方形プランの墓壙であろう。墓壙底面は，据えられる甕棺の形にほぼ合っており，ほとんど余裕をもたない。甕棺は，主軸方向Ｎ34°Ｗ，傾斜角度２°に据えられる。接口式の接合部には青灰色粘土で目貼りされており東側に粘土が良く残っている。甕棺内外から遺物の出土はみられなかった。

甕　棺（図版69，第145図）　上甕は口縁外径64cm，口縁内径53cm，器高47cm，底径14cmの鉢形土器。口縁外側が下がり 口縁端部内面が若干発達しているＴ字口縁を有し，口縁部下に２条の山形凸帯が巡る。幾分丸味を帯びた体部外面に縦方向のハケ目が施されるが，一部にタタキ整形痕と思われる小さな凹みが残る。内面は板状工具によるナデ調整と思われる。底部付近に板端の圧痕が多く残る。２～３㎜大の砂粒を含むが精良な胎土で堅緻に焼成されて淡褐色を呈す。外面全体と口縁部上面及び口縁端内面に黒色の塗布がみられる。

下甕は，器高99cm,口縁部外径66cm，内径52.5cm，底径13cmの甕形土器で，胴はさほど脹らまない。口縁部は内面に張り出しをもち外面がやや下がるＴ字形を呈すが，口縁部下には凸帯がなく胴中位に複合山形凸帯が巡る。胴部下半は細めに窄まり，やや厚めの底部に至るが，外底面はやや凹む。外面は下から上へのナデ調整，内面は下から斜め上がりのヘラナデ及びナデ調整されるが，凸帯の位置に上半と下半の接合痕が残る。砂粒を含むが良好な胎土で淡褐色に焼成され，体部に大きな黒斑をもつ。口縁部上面に黒色の塗布がみられる。

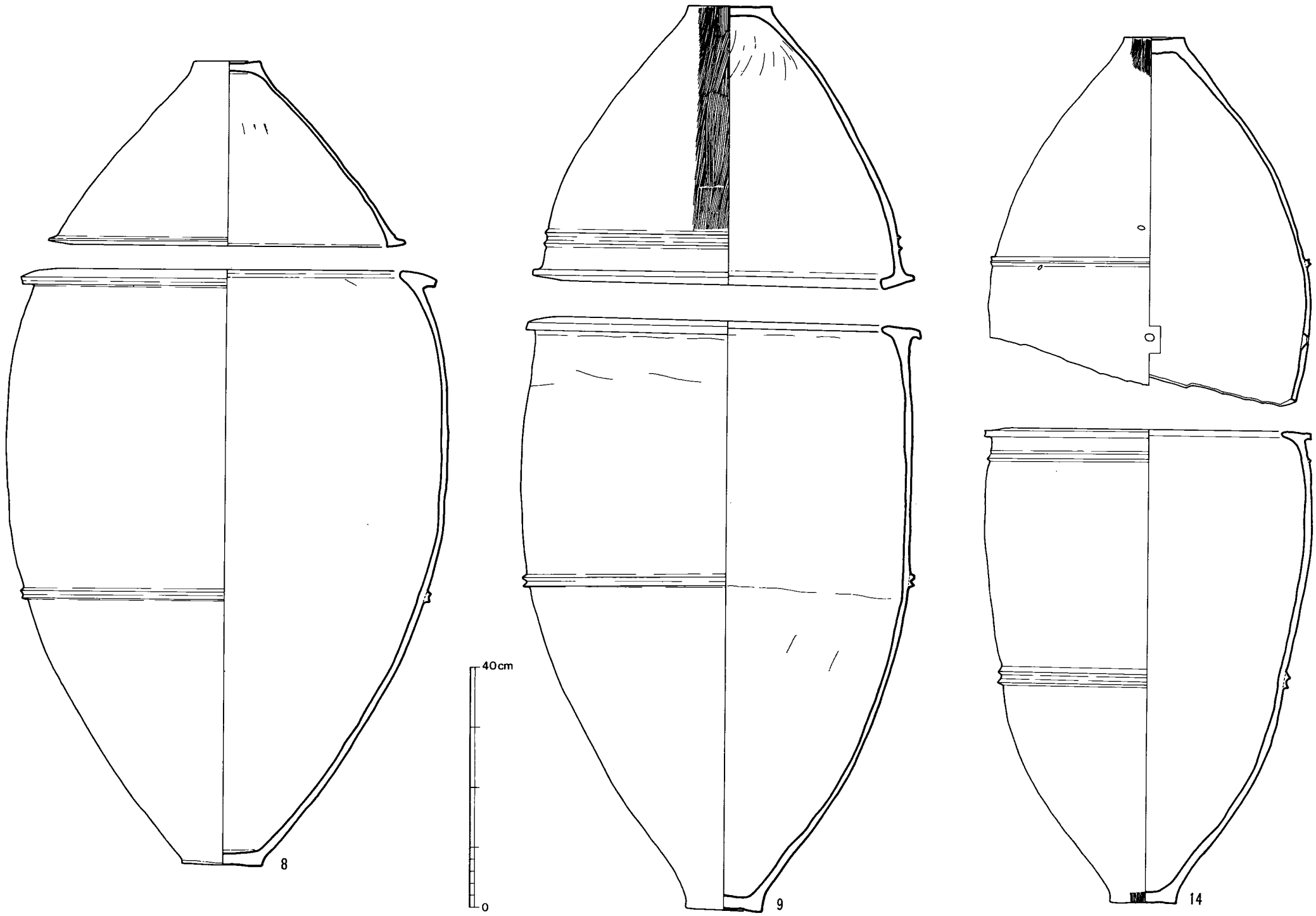
上甕と下甕を接合させた際の棺内面法量では長さ140.5cmを有す。中期中葉の甕としては，下甕の口縁直下に凸帯が巡らないこと，上甕の山形凸帯が２条並列状である点に古式の様相がみられる。　（小池）

10号甕棺墓（図版59-2，第144図）

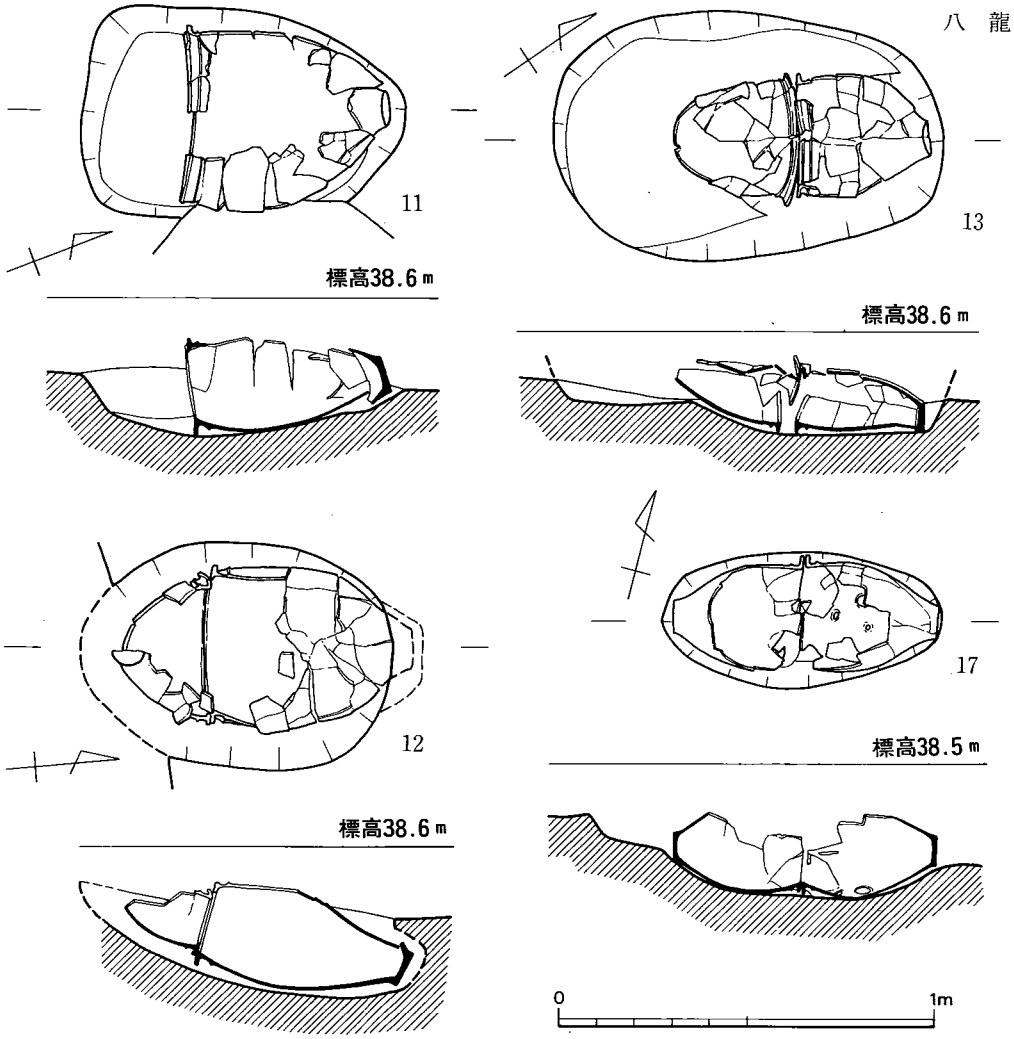
９号甕棺上甕の上位で検出した小児用甕棺墓である。削平を受け，墓壙・棺の遺存状態は悪い。また，どちらが上甕か下甕か判断しづらいが，周囲の諸例から南側の甕が上甕だと推測する。

甕　棺（第146図）　上甕は，極く小片で，推定口縁部内径は30cm程である。石英粒を含み，焼成はふつう程度で内面は黒褐色，外面は明茶褐色を呈する。

下甕は，復原された口縁部内径26cm，現存高16cmをはかり，上甕よりひとまわり小型である。外面は剝離が著しいが，内面はナデ，口縁部はヨコナデ調整されている。二次加熱のためやや脆く，淡茶灰色～明茶灰色を呈す。日常用器を使用したものと考えられる。　（児玉）



第 145 図　八 龍 II-10　8・9・14 号 甕 棺 実 測 図　(1/8)



第 146 図 11～13･17号甕棺墓実測図（1/20）

11号甕棺墓（図版59-3，第146図）

調査区の南端で，8号甕棺墓の横穴の一部を破壊して出土した。12号・13号甕棺墓とほぼ同じ方向と配置で埋置され，墓壙底最下標高は12号が38.30m，13号が38.20mで11号は38.25mを測り，差位が認められない。8号の横穴を破壊していることも考慮すれば，12号・13号と共に3号・16号甕棺墓を意識して埋置された，同一グループに属するものと考えられ，墓域の南端に埋葬されたものである。

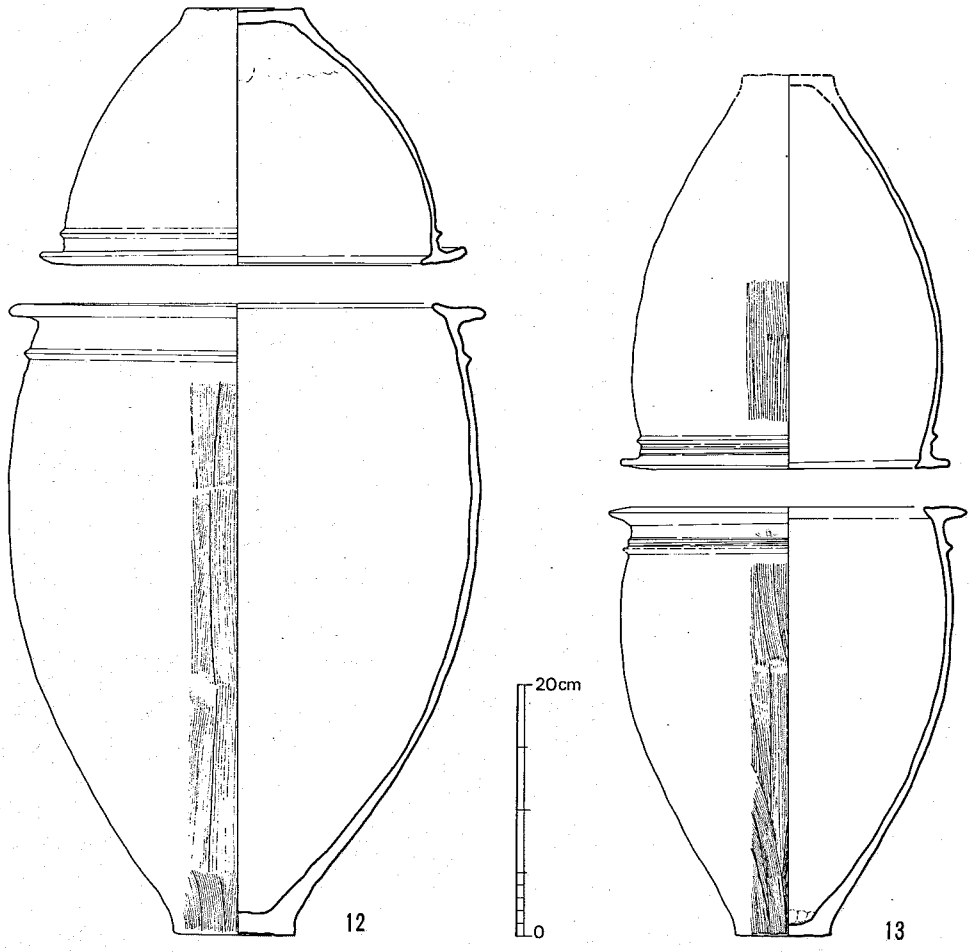
甕　棺　復原を行っていないが，第146図の断面図に示すように，12号下甕の特徴を呈し，時期は中期中頃である。（馬田）

12号甕棺墓（図版60-1，第146図）

調査区トレンチの南壁に一部がかかって検出された甕棺で，西隣にはほぼ主軸を平行にして

13号甕棺墓があり，北は3号甕棺と接している。甕棺の墓壙は，主軸長83cm，幅60cmの楕円形状をなし，北側に向かって斜壙が掘られ，下甕が挿入されている。甕棺は主軸N6.5°Eのほぼ南北方向をとる。埋葬傾斜角度は21°を測り傾斜はきつい。墓壙内に埋置された甕棺は，下甕には甕を，上甕には鉢を使用し，合わせ口は接口式である。小児用甕棺である。

甕　棺（図版70，第147図）　上甕は，器高20.5cm，口径34cmを測る鉢形土器で，体部に比して大きめの口縁部が付く。口縁部は外唇の強く張ったT字状口縁で，上面は中ほどから強く屈折し，外側へ低く傾斜している。外唇は角張る。口縁部直下には尖がった三角凸帯を一本巡らす。胴部はあまり張らずに大きめの底部へと続き，底部は上げ底である。頸部内面から肩部外面にかけては丁寧な横ナデで仕上げてあるが，底部近くはヘラケズリがなされている。内面は横方向のナデで，内底面には指圧痕が強く残されている。胎土・焼成ともに良好で，赤褐色の色調をなす。



第 147 図　12・13号甕棺実測図（1/6）

下甕は，器高50cm，口径38cm，胴最大径37.4cmを測る甕形土器である。口縁部は逆「L」字状よりもむしろ「T」字状に近く，外唇は肉厚である。口縁部上面は外側へやや低くなるが，両端はやや反り返って中央部は凹む。頸部のやや下位に1本の三角凸帯が巡る。胴は張らずに中位よりやや上で最大径をつくり，底部へとゆるやかに移行する。底部はやや上げ底である。頸部内面から外面凸帯下付近までは横ナデ，それ以下の体部外面は細かいハケ目仕上げである。内面は頸部付近は左上がりの横ナデ，その他はおおむね横ナデである。胎土・焼成ともに良好で，外面は暗黒褐色を呈し，一部分にススの付着がみられる。中期中頃のものと思われる。（新原）

13号甕棺墓（図版60-2，第146図）

3号甕棺墓の南に検出した小児用甕棺墓である。楕円形の墓壙内に埋置され，上甕底部は削平を受けており遺存しない。

甕　棺（図版70，第147図）　上甕は口縁部内径21cm強，現存高30cmをはかる。口縁下の三角凸帯の上ににぶい凸帯状のものを巡らす。口縁部内外面はヨコナデ，内面はナデ，外面は縦位のハケ目調整を行う。胎土は石英粒を含み器面に目立つ。焼成良好で明茶褐色を呈する。

下甕は口縁部内径30cm，器高34cmをはかる。調整法は上甕と同様である。底部外面はヘラケズリを行ったままでナデ等の調整はされず，黒褐色を呈す。器面は風化しているが，遺存状態の良いところでは明茶褐色を呈する。（児玉）

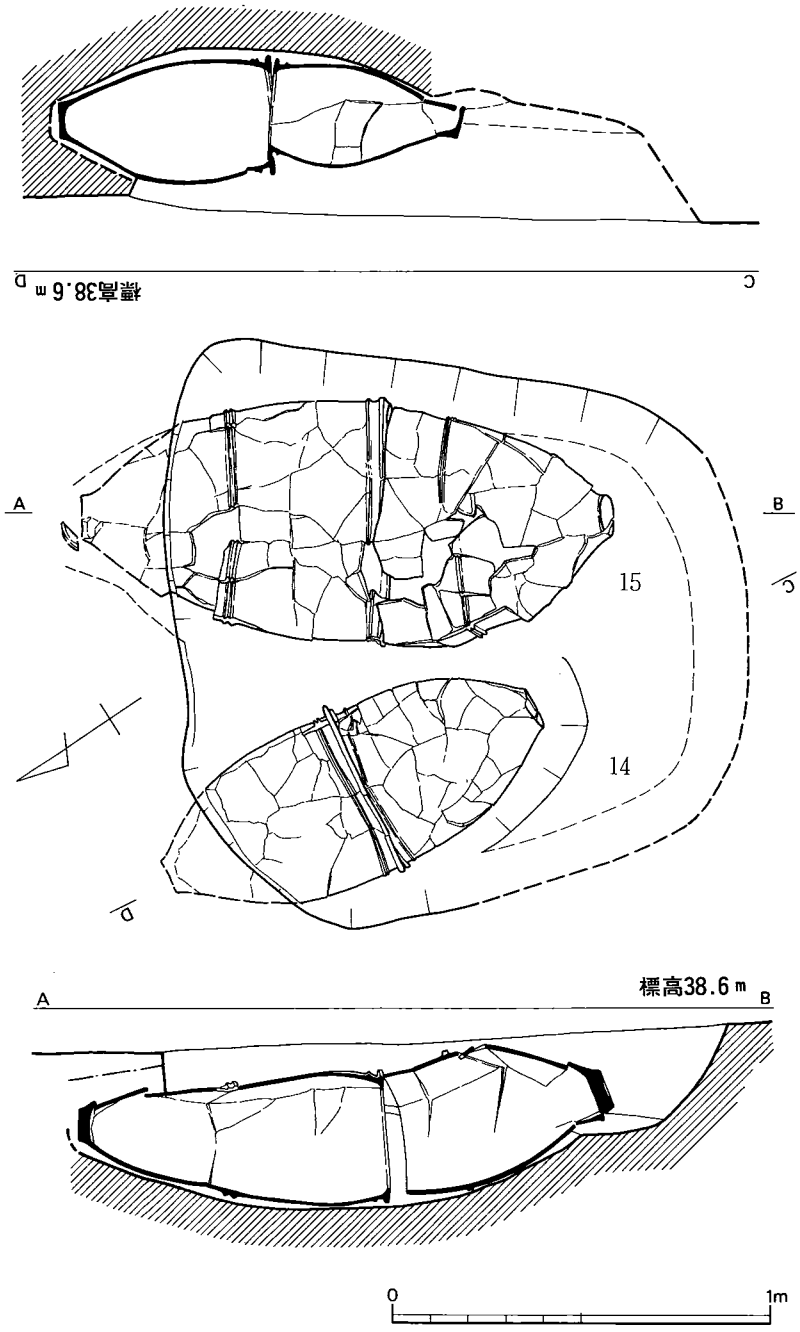
14号甕棺墓（図版60-3，第148図）

甕棺群の中心からすれば南西方向に位置し，外縁部にあたる所に埋葬されている。14号甕棺は15号甕棺と同一の墓壙内に埋置されているが，確実なものとは言えず，主軸方向も異なっている。墓壙は主軸長1.48m，最大幅1.55mの不整な矩形をなし，14号甕棺は壙の中の東側に，15号甕棺は西側に埋置されている。壙底面はさらに1段掘り凹められて，北壁に掘られた斜壙へと続いている。甕棺の主軸方向はN33.5°Eをとり，埋葬傾斜角度は4.5°のほぼ水平で，北壁の斜壙へ下甕を挿入している。上甕の口縁部は打ち欠かれているが，合わせ口は接口式で，成人用甕棺である。

甕　棺（図版70，第145図）　上甕は，甕形土器であるが，胴部から上位を斜めに打ち欠いていて，口縁部を欠損する。現存高は61.5cm，胴最大径は53.7cmを測る。やや膨らむ胴部を有し，そのやや下位に断面M字状の凸帯を下方に張り出させて巡らしている。胴下半はゆるやかにすぼまり上げ底の底部へと続く。外面は，凸帯付近は丁寧な横ナデ，その他はナデ仕上げで，底部付近では細かいハケ目がナデにより消されている。内面もナデ仕上げであるが，整形時につけられた幅3cm前後の板小口の跡が多数残されている。内底面は指圧痕がみられる。なお，埋葬時下になった部分の胴部近くには3カ所の穿孔がみられる。いずれも焼成後のもので，すべて径1cm前後の小孔であるが，外から内への穿孔である。また穿孔のある側の外面は黒塗りの痕跡がみられる。

八　龍

下甕は，器高79cm，口径54.6cm，胴最大径54.8cmを測る大形の甕形土器である。口縁部は内唇が強く突出したＴ字状をなし，外唇は角張る。上面は中央部がわずかに凹み，外側へやや傾斜する。頸部には三角凸帯を巡らすが，そのやや上では器壁がつまみ上げられてわずかに隆起し，甘い稜線が入り，小凸帯状にみえる。肩部はやや張る。胴部は膨れずに底部へと続くが，中位の凸帯付近で一度へこむ。胴下半は底部へと急速にすぼまり，底部は平底である。胴部の凸帯は２本１組の連続した三角凸帯で，やや下向きである。頸部内面から肩部外面にかけてと，胴部凸帯付近は横方向の丁寧なナデ，それ以外の外面は縦方向のナデ仕上げであるが，底部付近ではハケ目が残されている。内面は横方向のナデ仕上げである。色調は赤褐色を呈し，



第 148 図　14・15号甕棺墓実測図（1/20）

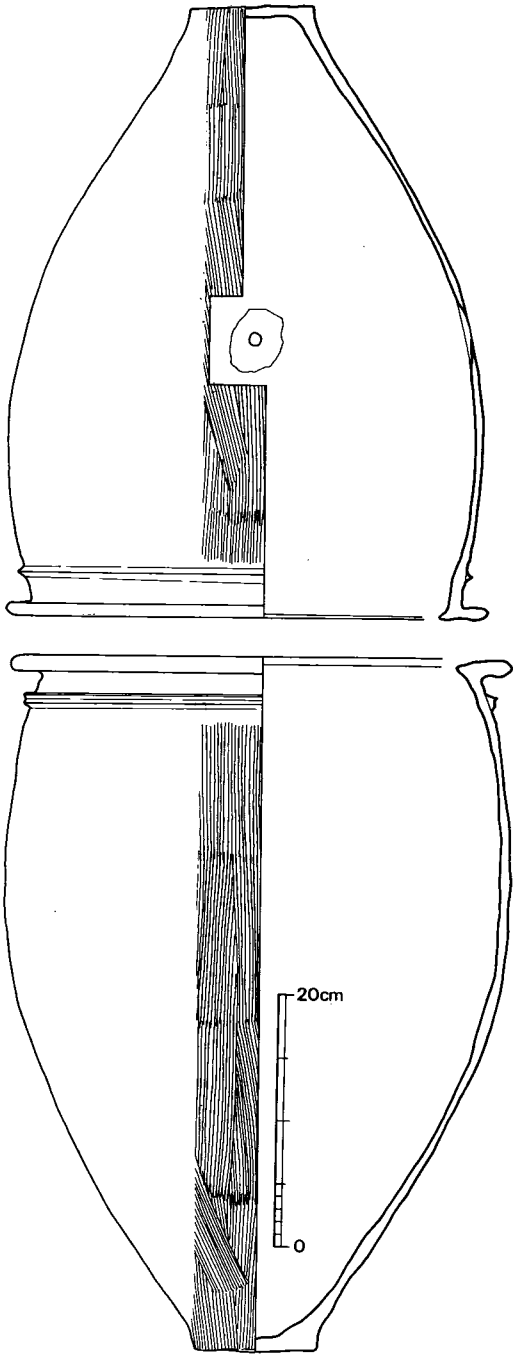
胎土・焼成ともに良好。中期後半頃の時期のものであろう。

15号甕棺墓（図版60-3，第148図）

15号甕棺は14号甕棺と墓壙を共有しているように見えるが，前述したように確実とはいえない。不整な矩形の墓壙北西隅壁に斜壙が掘られ，下甕が挿入されている。主軸方向はN 7°Eをとり，埋葬傾斜角度は3°と水平である。小児用甕棺で合わせ口は接口式である。なお甕棺掘方内より石庖丁片が出土している。

甕　棺（図版71，第149図）　上甕は，甕形土器で器高49.3cm，口径38.3cm，胴最大径38cmを測る。口縁部は内唇の尖がった逆L字状を呈し，上面は水平となるが，中央部はゆるく凹む。頸部にはやや下向きの三角凸帯を巡らし，肩は張らずに3分の1の器高にて胴最大径をつくる。胴部下半は底部近くにて急にすぼまる。底部は平底である。口縁部外面から凸帯下付近にかけては丁寧な横ナデ，それ以下は粗いハケ目仕上げ，内面はすべて不定方向のナデ仕上げである。胴部最大径よりやや下に外からの穿孔が1個あけられている。胎土・焼成ともに良好で暗褐色を呈する。

下甕も甕形土器で器高55.2cm，口径39.8cm，胴最大径40.3cmを測り，上甕より一回り大きい作りである。口縁部は逆L字状をなすが，内唇の張りは上甕より弱く，外唇は肉厚である。上面はやや丸味を帯び，内側へ傾く。口縁部直下頸部には断面M字状の凸帯を1本巡らす。肩は張らず，長胴の体部をつくり，底面が



第 149 図　15号甕棺実測図（1/6）

わずかに脹らむ平底の底部へと続く。口縁部外面から凸帯下付近までは横ナデ，それ以下は底部まで粗いハケ目仕上げである。内面は不定方向のナデ仕上げであ中期後半頃のものであろう。

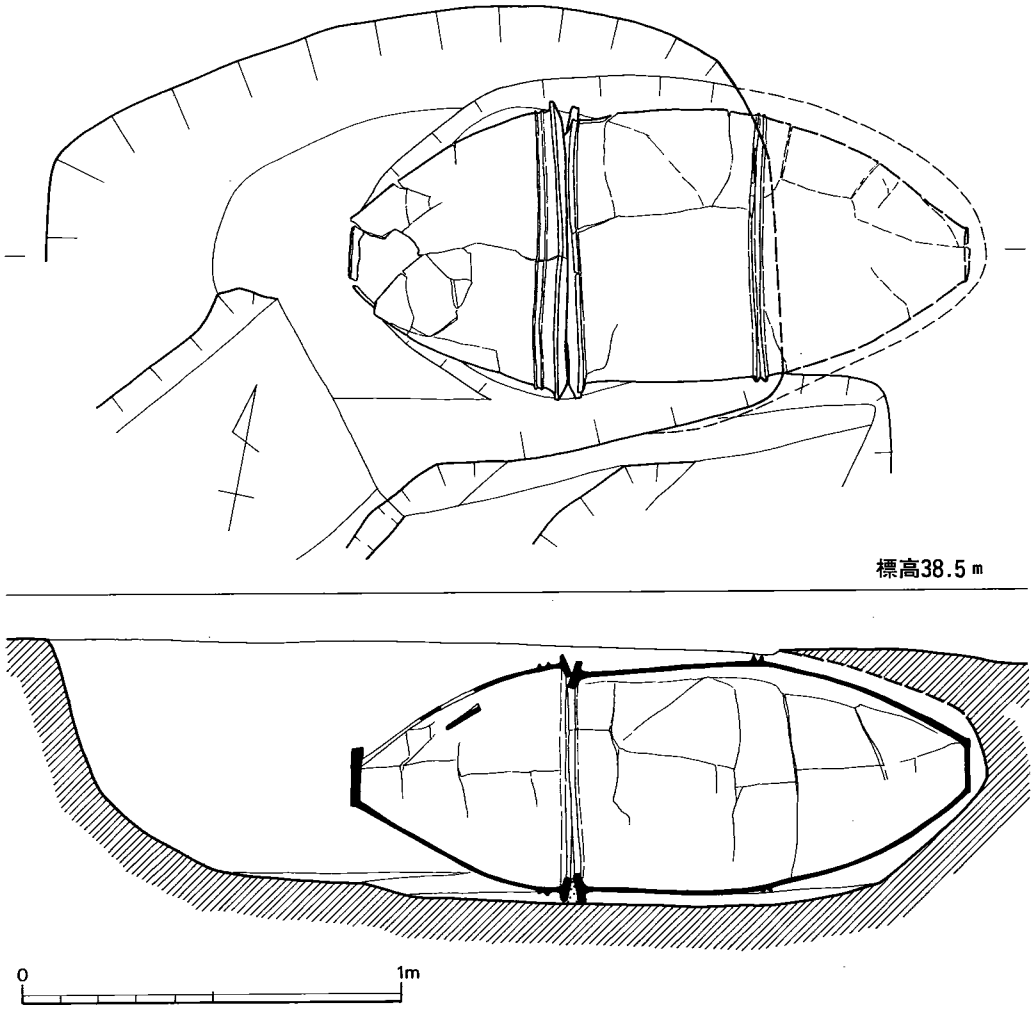
（新原）

16号甕棺墓（図版61-1・2，第150図）

3号甕棺墓の北側で，墓壙西壁の一部を14号甕棺墓に切られて出土した。3号の項で既述したように，3号よりも新出である。棺体の埋置傾斜は－0.5°を測り，頭位棺主軸はN79°Eである。

接口部の粘土は一周するが，壙床近くでは器外面には及ばないので，接口後に粘土付加作業が難しい壙床近くでは，事前に甕口縁平坦面に付加し，鉢を押し当てたことが考えられる。

甕　棺（図版72，第152図）　上甕には鉢を用いるが，凸帯の位置・口縁形・体部のカーブな



第 150 図　16号甕棺墓実測図（1/20）

どの特徴は，下甕の下半部の器制に一致する。このことは，棺体長としては小さい通有の浅い傘蓋形を用いず，上甕にも下甕と同大の大型甕を使用して大型棺体となすことと同様の意識が強く鉢の製作・使用に働いたものと考えられる。また，鉢の使用によって，墓壙を掘る労力の省化が付加される。

器内外のヘラナデなどの技法は，3号甕棺の項で既述したので省略するが，甕に比して浅いため，3号のDの部位に相当するヘラナデも縦方向に整然と施している。口縁内端部から器外にかけては，黒色塗彩がなされている。

なお，胎土に1.5～2.0㎜大の砂粒を多く含むが，器表に露出せず，またヘラナデによる砂粒の移動がない。このことは，胎土が砂粒の移動がないほどで，ヘラ端痕は若干残るほどに乾燥した段階で，器表をヨコナデ時の水ビキ様に水分を付加し，ヘラナデを施したことが考えられる。ヘラナデ前のハケ目は完全に消されるが，下甕の器壁厚は胴中位で6～7㎜の薄さであることから，タタキによっても一定度の薄さには造作される副効用が認められるが，遺存するヘラナデ前のケズリ工程が考えられる。3号の項でふれた器内の幅広の凹みはタタキ当て具(タタキ具ではない）痕であることは既述のとおりであるが，この凹みが遺存することから，ケズリ作業は，底部方向から上位にほぼ縦方向に素早い移動でなされたものと考えられる。この際の，ヘラケズリによる砂粒の移動で生じた器内表面の荒れを，遺存するヘラナデ，ヨコナデで消したものであろう。しかし，強いヘラケズリでは砂粒の剝離痕や移動痕を，前述の水ビキ様でなされた乾燥度の異なる胎土で埋める結果，焼生時に器表の剝離が生じる。実際に，露出した砂粒の周囲の胎土が斑点状に多数剝離した状態の甕も例が多い。

以上の様な調整を丁寧に施した例が，この期に多く，3号・17号・25号・27号でも同様である。

下甕には大型甕を用い，ヘラナデ痕を認めることは3号同様であるが，器内下半部はヘラナデ痕・端痕を丁寧にナデ消し，器外下半部のヘラナデ端痕の傾斜が3号に比べて水平に近い。なお，凝口縁は凸帯よりやや上位で観察され，器内の3部位に遺存する最下位の上部のみ，胎土接合の傾斜が以下の右上がりから右下がりに逆転する。この逆転は，25号でも同様の部位に認められるが，3号では上位の肩部に認められる。このことは，甕の強度を考慮した成形上の体部のカーブ形によるものか(註7)。なお，3号・16号・27号では胎土接合の重複部が著しく，薄手に仕上げるが，25号下甕では全体に器壁が厚手で，重複幅は小さく，接合面傾斜の逆転は観察されない。

器内最上位ヘラナデ端痕の部位から器外にかけては，黒色塗彩を施し，胎土に0.5㎜大の砂粒を多く含み，焼成は普通で，器内淡褐色・器外褐色を呈す。なお，胴上半器外に対峙して2カ所・口縁部上面に4カ所の黒斑を認める。

時期は，中期中頃で中葉よりも古いと考える。

17号甕棺墓(図版61-3，第146図)

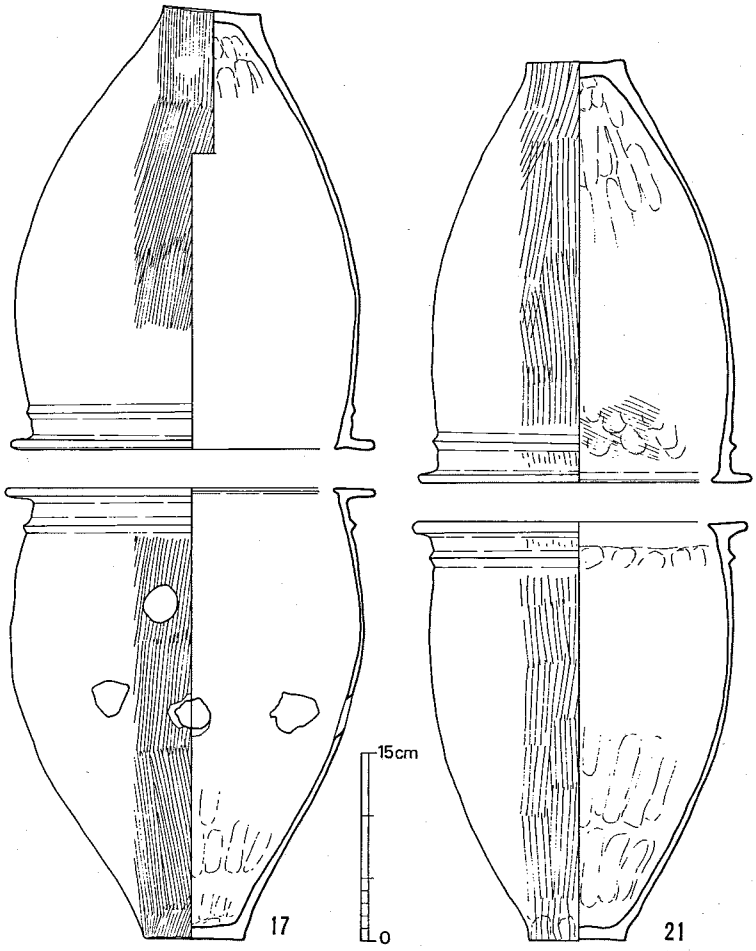
調査区のほぼ中央部で，19号・20号甕棺墓墓壙を切って出土した小型棺である。横穴は遺存しないが，墓壙床面が西側が一段高く，東側の甕を下甕として挿入したものと考えられる。18号甕棺墓墓壙は，西側が不明とあるが，西側の小型鉢の現状端と17号東側甕底部との距離は22cmを測り，墓壙底標高は17号が38.15m・18号が37.84mと，後者が深いが，前者の下甕底部は完存している。このことから，17号が新出のものであることが明らかで，使用された棺体の特徴においても矛盾はない。

甕　棺(図版71，第151図)　上甕は，器内は丁寧なナデ，器外は縦方向ハケ目仕上げで，口縁内端は若干突出し，上面がやや凹む平坦口縁を呈する。胎土に細砂粒・金雲母片・赤褐色粒を含み，焼成は良く黄橙色～茶褐色を呈する。

下甕も同様の特徴を呈し，第146図の出土状態に示すように，4カ所に孔が認められた。棺内埋土中からの破片の出土はなく，孔壁の風化は古く観察されるので，やや孔径が大きいきらいがあるが，穿孔と考えた。

時期は，中期中頃でやや新出のものと考える。

(馬田)

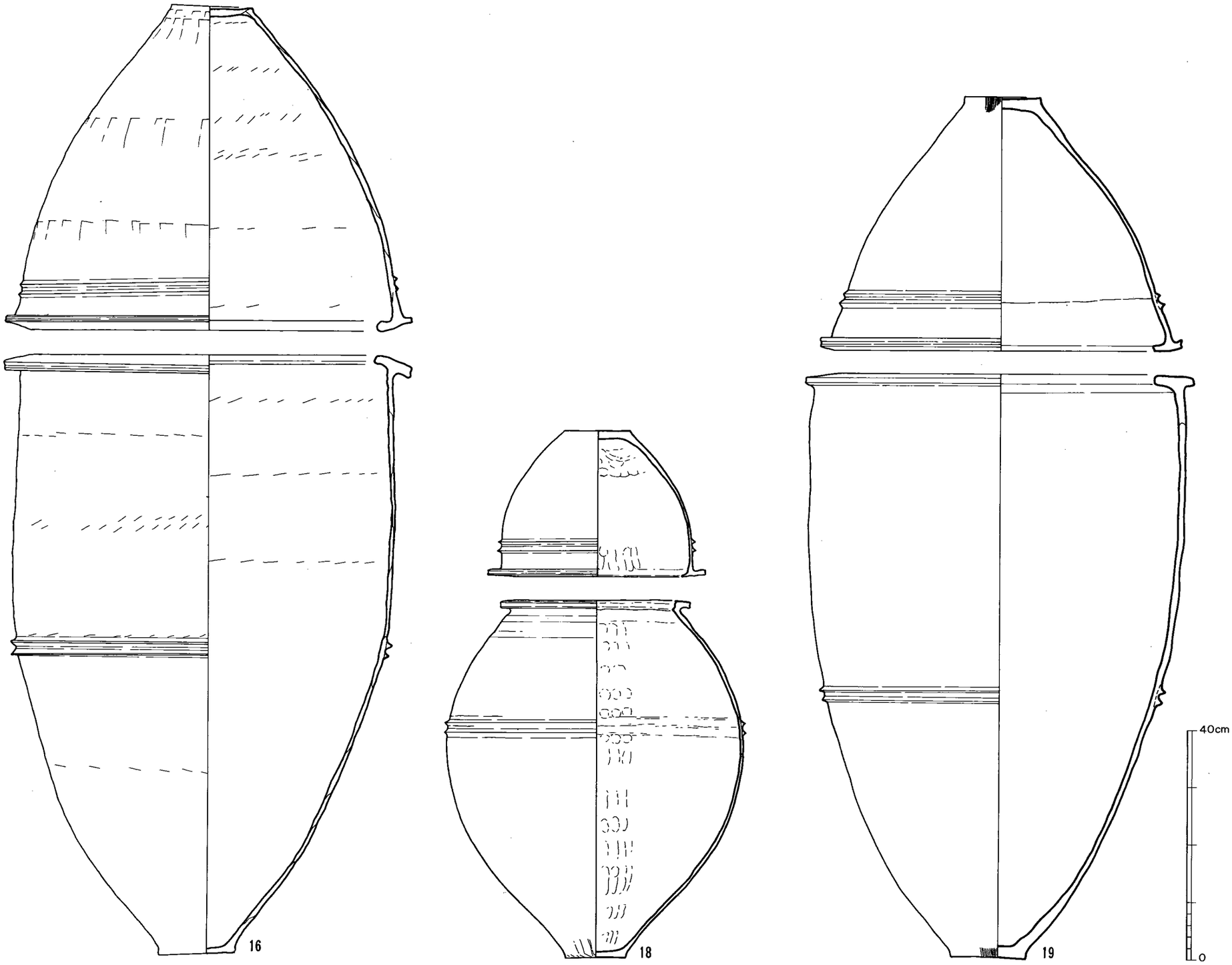


第 151 図　17・21号甕棺実測図 (1/6)

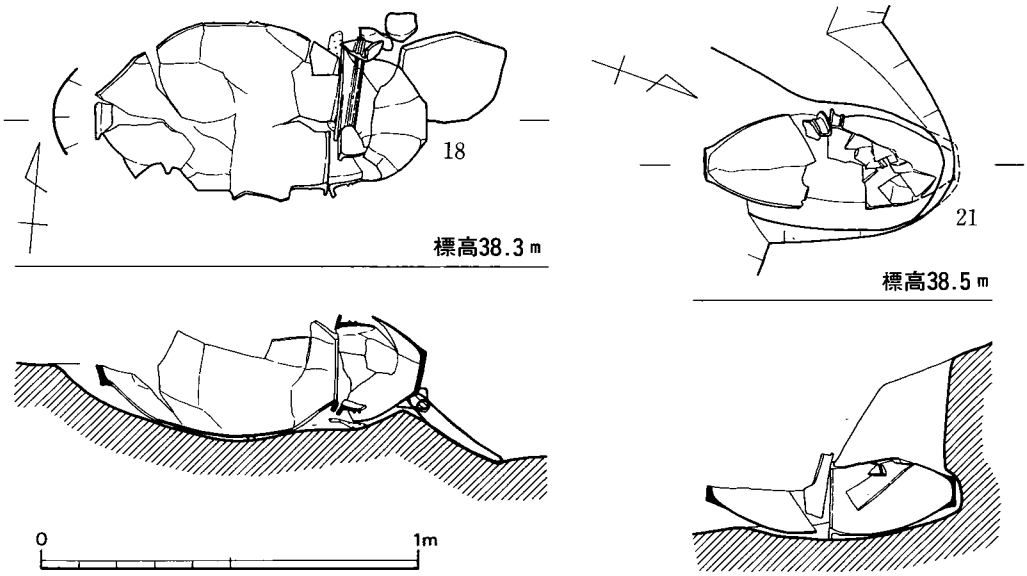
18号甕棺墓

(図版62-1，第153図)

19号甕棺墓と20号甕棺墓の間に位置し，17号甕棺と並んで検出された。19・20号より新しい。上部は削平を受け，墓



第 152 図　八 龍 II-10　16・18・19 号 甕 棺 実 測 図　(1/8)



第 153 図　18・21号甕棺墓実測図（1/20）

壙も明確でない。小型の鉢と中型甕を接口式に合わせた小児用の甕棺墓で，主軸をS 84.5°Wにとり，上甕は西側にある。多少甕がずれているが，合口甕の全長は87.5cmとなる。墓壙は，下甕の最大胴部付近がもっとも深く，甕は，ほぼ水平に据えられる。穿孔はされていない。

甕　棺（図版71，第152図）上甕は，口縁を少し欠損する鉢で，口径38.4cm，高さ25.5cm，底径11.6cmの大きさである。口縁は，内側が突出し，T字状を呈する。口縁下には2条の三角凸帯がある。底部はわずかに上底である。外面は，口縁から凸帯までヨコナデ，胴部は丁寧なナデ，底部もナデ，内面は口縁がヨコナデ，他は指押さえの後斜めにナデ調整している。黄褐色～明褐色を呈し焼成は良好である。

下甕は，約3分の1を欠損し，口縁の内側を打ち欠いている。口径33.6cm，高さは現存で52cm，胴最大径53.3cm，底径10.5cmの大きさである。口縁は逆L字形と思われる。全体に丸味をもち，最大胴部に2条の三角凸帯を貼付している。器壁は，口縁部内面がヨコナデ，外面はハケヨコナデの後ナデ，胴部外面は丁寧なナデ，内面は指押さえの後ナデ調整されている。凹んだ部分に指痕が認められる。凸帯の裏面は少し盛り上がっている。胎土には，粗砂・細砂を多く含み，焼成は良好。色調は，外面が褐色～黒褐色，内面は明るい褐色を呈する。甕棺の時期は中期中頃のものと考える。（池辺）

19号甕棺墓（図版62-2，第154図）

20号甕棺墓と同一の墓壙から横壙を掘ってほぼ水平位に埋置された成人葬用甕棺墓である。

両甕棺の合わせ口の間には大小の自然石10余個を置いて，上甕の安定をはかっている。棺自体はほぼ完存し，上・下甕の合わせ口にはしっかりと粘土を巻いている。

甕　棺（図版72，第152図）　上甕は，口縁部内径53.5cm，器高44.5cmを測る鉢形土器である。底部付近に縦位ハケ目が部分的に残るが，体部はナデ調整の折にナデ消されている。口縁部から，2条の三角凸帯の間はヨコナデ調整を行う。底部をのぞく外面全体と，口縁部下10cm位までの内面は黒塗りされていたようで，所々にハケで塗布した痕跡が残る。なお，内面は横位に塗布している。胎土に白色微砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶灰褐色を呈する。体位中位に黒斑がある。

下甕は，口縁部内径54cm，器高102cmをはかる。T字形口縁は内側に張り出しぎみであり，胴部中位よりやや下に2条の三角凸帯を巡らす。外面は黒塗りされていたようだが，内面は不明である。胴部中位に黒斑があり，胎土・焼成・色調は上甕と同様である。

20号甕棺墓（図版63-1，第154図）

19号甕棺墓と共有する墓壙に横壙を掘って水平位に埋置された成人葬用甕棺墓である。両甕棺の間には大小の自然石10余個を置いて上甕の安定をはかっている。上甕底部横にも同様の目的で4個の自然石を配している。棺身の上半部は削平され，棺身の3分の1ほど欠している。合わせ口部分と胴部の一部に粘土を使用し，棺の安定をはかっている。

甕　棺（図版72，第155図）　上甕は，口縁部内径62cm，器高51cmに復原される鉢形土器である。底部付近に縦位ハケ目が部分的に残り，体部内外面はナデ調整される。底部をのぞく外面全体と，口縁部下10cm位までの内面は黒塗りされていたようである。白色砂粒を多く含み，焼成良好である。明橙茶色を呈し，大きな黒斑がある。

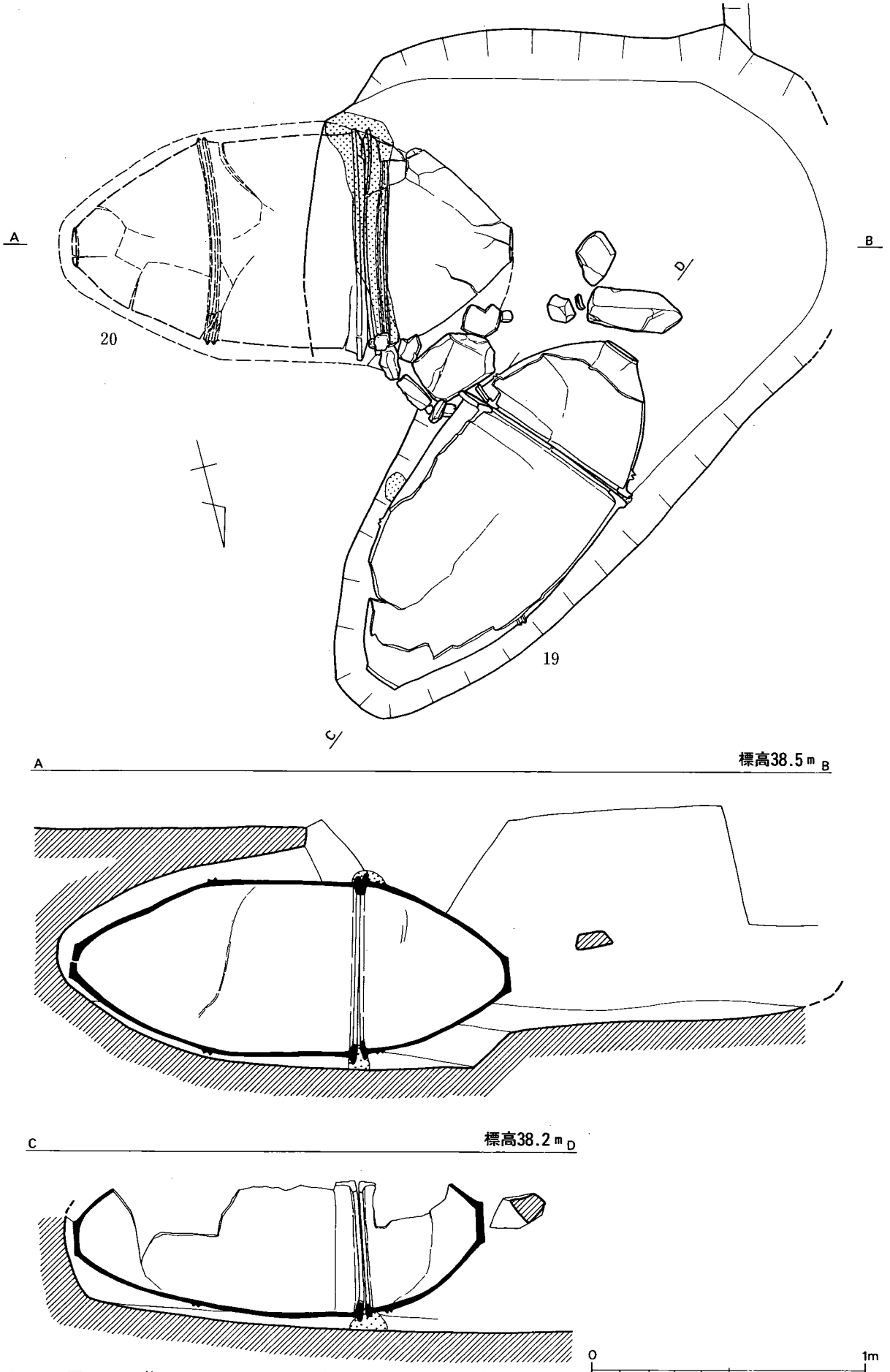
下甕は，口縁部内径64cm，器高101cmをはかる。口縁部は外傾するT字形で，内側に張り出しぎみである。2条の三角凸帯下に調整時の工具痕が残る。内面の口縁部付近と底部をのぞく外面は黒塗りされていたようだが，大部分は剝落している。胎土は白色砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶灰褐色を呈する。（児玉）

21号甕棺墓（図版62-3，第153図）

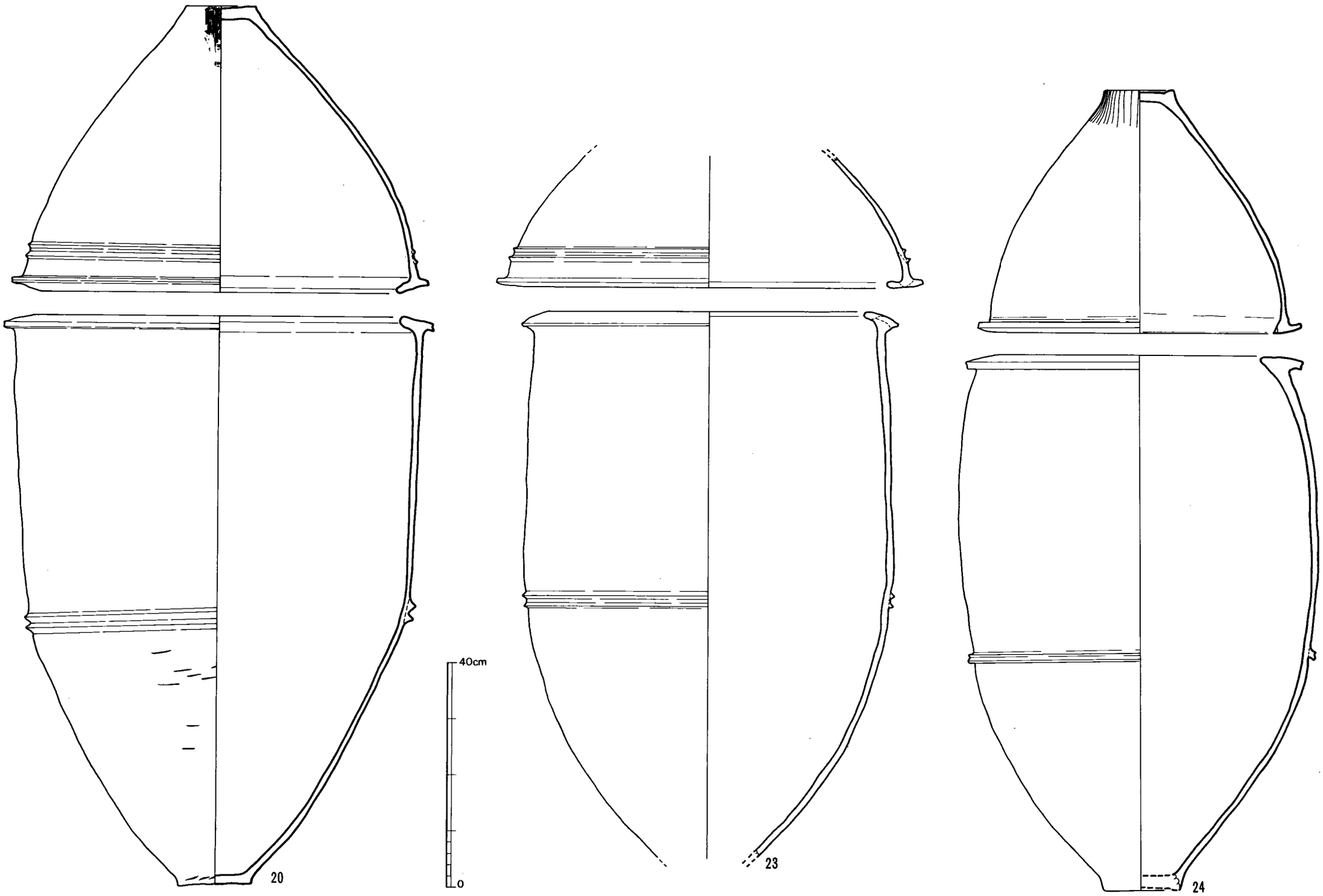
調査区の北端で，7号甕棺墓墓壙を切って出土した。7号を明らかに意識しての埋置と考えられ，北接する道路下には，1号・4号甕棺墓で前述したように，1～2基の中型棺の埋葬が予期される。道路を界して北側に28号甕棺墓が出土しているので，墓域北端ではなく北西端に位置すると考えられる。

棺体埋置の傾斜は2°を測り，北側の甕を横穴内に挿入するので，7号の方向とも一致する南側の甕が上甕と考えられる。

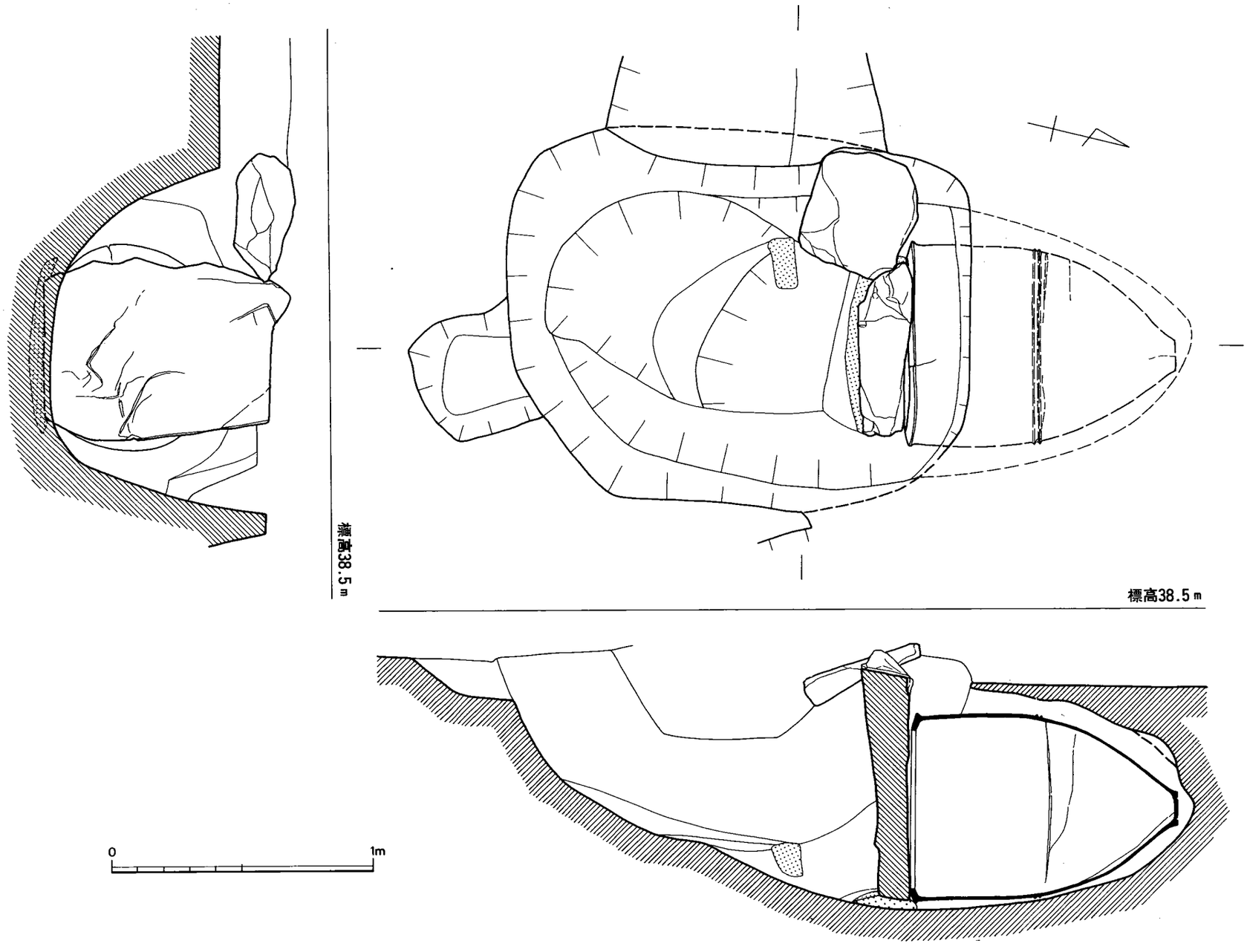
甕　棺（図版71，第151図）　上・下甕ともに同様の特徴を有す。張りのない胴部最上位に断面三角状凸帯を付し，平坦な口縁部はシャープに屈折する。胎土に赤褐色粒・細砂を含み，焼



第 154 図　八 龍 II-10　19・20 号 甕 棺 墓 実 測 図　(1/20)



第 155 図　八 龍 II-10　20・23・24 号 甕 棺 実 測 図 (1/8)



第 156 図　八 龍 II-10　22 号 甕 棺 墓 実 測 図 (1/20)

成は良く，橙褐色を呈す。中期中葉の時期と考える。　（馬田）

22号甕棺墓（図版63-2・64，第156図）

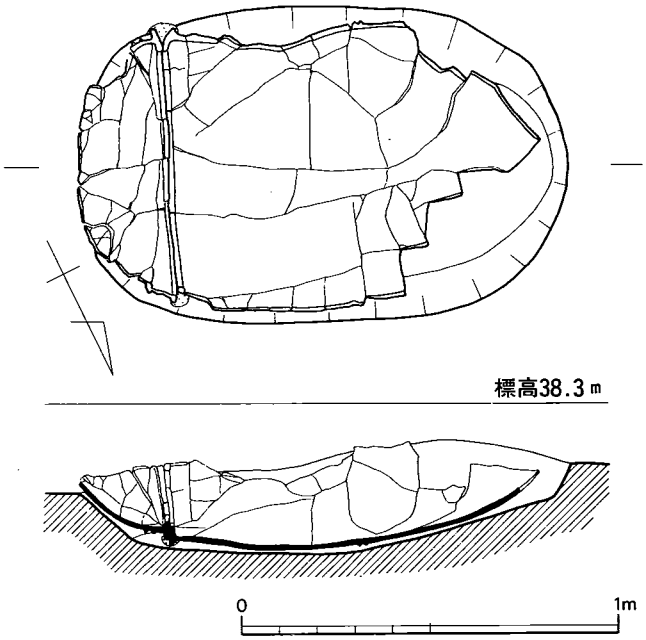
甕棺墓群の東半部南寄りに営まれる甕棺墓で，8～10・26号甕棺墓と重複していずれの甕棺墓からも墓壙を切られる。礫を多めに含む地山を掘り込む墓壙は，上面で南北1.8m，東西1.4mの不整方形プランを呈し，約0.7mの深さにテラスを有すが，更に深くなる横壙を北側に穿って，甕棺を挿入させている。墓壙底面は上面から約1mの深さを有すことになるが，墓壙の壁面をみると上部に砂礫が多く，黄褐色の粘質砂，下部は砂礫が少なく粘性の強い淡い黄灰色の粘質砂となっており，墓壙内埋土からは条痕を有す縄文土器小片が2・3片と黒曜石の小片10余点，安山岩小片1点が出土した他には遺物の出土はみられなかった。

甕棺は，主軸方向N11°W，傾斜角度0°50′で，口縁部を南側に向けて据えられ，長さ86cm，幅60～70cm，厚さ12～20cmの花崗岩の扁平な板石を立てて蓋石としている。蓋石と甕口縁部との間に目貼り粘土がみられなかったが，蓋石の下に黄色粘土の塊が枕状に敷かれており，蓋石の安定を図るための施設と考えられる。また墓壙底面で，蓋石の手前西側に黄色粘土の塊がみられた。粘土本体及び周辺の精査を行ったが特に変化はなく，これについては何故に置かれたものか，判断を下しえなかった。あるいは蓋石と甕の空間に目貼りする目的で特ち込まれたものの必要としなかったのかも知れない。なお蓋石の西側肩部に花崗岩のやや小ぶりな板石が乗っている。蓋石自体が甕の蓋として十分で余裕があるにもかかわらずその上方に位置していることからみて，直接蓋の一部として用いられたものとは考え難く，後出する8号甕棺墓墓壙内にひっかかっていることを考え合わせれば標石的な性格を有していたのであろうか。棺内からは何らの遺物も出土しなかった。

甕　棺（図版73，第140図）器高102cm，口縁部外径76cm，内径63cm，底径12cmを測る大形の甕で，体部の中位に2条のシャープな山形凸帯が巡る。胴最大径は75.5cmを測るが，上半のほぼ中ほどにあり，そのまま緩やかに底部に至る。口縁部は「逆L」字形を呈し内側に肥厚するが，ヨコナデ調整されている。胴部外面は下半が下から上への丁寧なナデ調整，上半は板状原体による下から上へのナデで過擦痕がハケ目に近い状態で残っている。内面は下半が下から上への丁寧なナデ調整，上半は板状原体によるナデで木口圧痕が随所にみられる。なお凸帯部分はヨコナデされており，ヨコナデは凸帯の上側より下側に幅広くみられる。凸帯のやや下に上半と下半の接合部があることに起因するものと思われる。胴上半の胎土には1㎜程度の砂粒を含み，下半の胎土には砂粒が多めに含むが，良好な焼成で淡褐色ないしは明黄褐色を呈す。黒斑は3カ所にみれるが，それほど大きくはない。この土器は口縁部の特徴からみて汲田式でも新しいものと考えられる。　（小池）

23号甕棺墓（図版65-2，第157図）

上面が削られて上甕も下甕もおよそ3分の1程度しか残っていない。主軸はS64°Eである。



第 157 図　23号甕棺墓実測図（1/20）

傾斜角度は上甕も下甕も底部がないのでわからないが，ほぼ水平に埋置されている。上甕と下甕の口縁の接する部分は粘土で被覆されている。

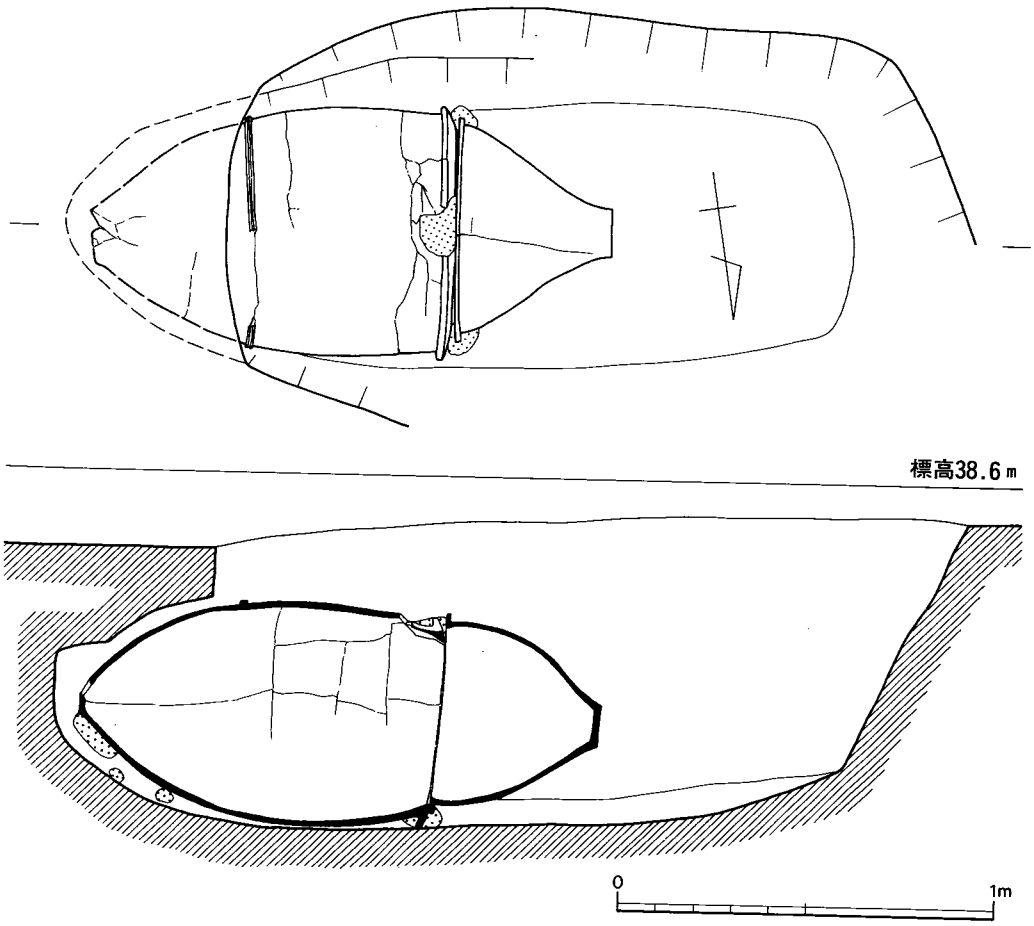
甕　棺(第155図)　上甕は，口縁部で全周の4分の1強しか残っていない。図は反転復原している。口径76.2cm，口縁内径63.6cm，残存する部分で器高46.4cmを測る。口縁は整ったT字状口縁を呈し，内側張り出し部の先端は若干くぼみぎみになる。口縁下に2条の三角凸帯を付す。胎土はよく精選され若干の小砂粒を含む。焼成は良好で器面に粗れが目立つが，これは遺存状態の悪さによるものであろう。色調は赤褐色を呈す。

下甕は，口縁部で3分の1強，凸帯付近で2分の1弱しか残っておらず，図は反転復原している。口径は67.4cm，口縁内径は55.2cm，残存する部分で器高は96.6cmを測る。底部径はほぼ11cm前後であろうから，器高は100cmをわずかに超える程度であろう。胴中位わずか下に2条の三角凸帯があり，断面の観察から下の方を先に作り，しかる後に上を作っている。凸帯より上は若干内傾しながら直に立ち上がり，口縁は外に低いT字状をなす。外側の端部は平坦に仕上げられている。胎土はよく精選されており，若干の小砂粒を含む。焼成は良好で凸帯の下に径10cm程の黒斑を1カ所残す。色調は赤みがかった黄褐色で内面はより赤みが強くなる。　（片岡）

24号甕棺墓（図版66，第158図）

甕棺墓地群の西端部にあり，2号・6号甕棺墓によって墓壙の一部を切られるが，2号甕棺墓は墓壙の上縁部に営まれており，6号甕棺墓はほぼ同レベルでかなり接近して甕が据えられている。墓壙は東西方向に長い方整方形プランを呈し，長さ約2m，幅はおそらく1.1m程度で，約0.8mの深さを有すが，東側に横壙に穿って，合わせ口の甕棺が据えられている。墓壙内には西側にかなりの余裕を有すものの何らの遺物も含まれていない。

甕棺は，主軸方向N83°10′W，傾斜角度－2°30′に据えられ，横壙と挿入された下甕の底部がやや上がりぎみになる。下甕と上甕は接口式に合わせられ，接合部分には目貼り粘土が施されている。また下甕底部は横壙との間に空間を生じるが底部の下に粘土塊があり，下甕を安定さ



第 158 図　24号甕棺墓実測図（1/20）

せる目的で，挿入の前に置いたものと思われる。甕棺内からも何らの遺物の出土はみられなかった。

甕　棺（図版73，第160図）　上甕は，器高43cm，口縁部外径58cm，内径48cm，底径12cmを有し，口縁部内面がやや発達して外側の下がるL字形口縁で，頸部を強くヨコナデして口縁部直下に低平な凸帯状の隆起帯を生じている。縦方向のナデ調整が施される胴部は丸味をもって窄まり，指先によるナデ痕の顕著な底部は底面が僅かに凹む。内面はナデ及びヨコナデ調整されており，内底面の一部と口縁部の一部に指圧痕が残る。砂粒を含むものの精良な胎土で，淡褐色に焼成されて堅緻。一部に大きな黒斑がある。

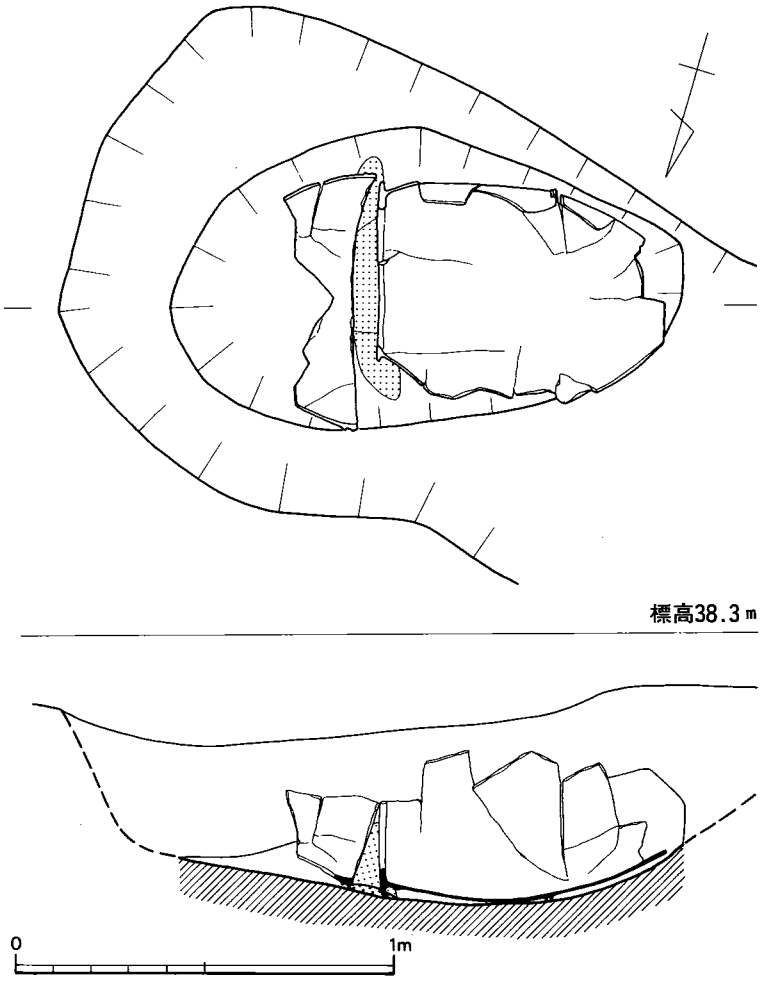
下甕は，器高95.5cm，口縁部外径63cm，内径47cm，胴最大径67.5cm，底部の損傷が著しく不明だが14cm程度の底径を有す。口縁部は内側に張り出し，外側もやや発達して下がるL字形を呈し，胴部に向かって脹らむが，口縁下に凸帯は巡らない。胴最大径は，全体の3分の2の高

さにあり，外径約60cmに窄まった中位よりやや下に見かけ2条の断面「コ」の字形に近い1条の凸帯が巡る。胴部外面は縦方向の下から上へのナデで板状原体によるためか若干過擦痕が残るが，窄まる口頸部はヨコナデされている。内面は全体に下から上へのナデ調整されている。胎土と焼成ともに良好で淡褐色ないしは黄褐色を呈すが，胴上半部の4カ所に比較的小さな黒斑がみられる。

復原した上甕と下甕を合わせた場合の内法は133cmを測る。中期前半だが，下甕の凸帯にのみやや後出的な要素がある。（小池）

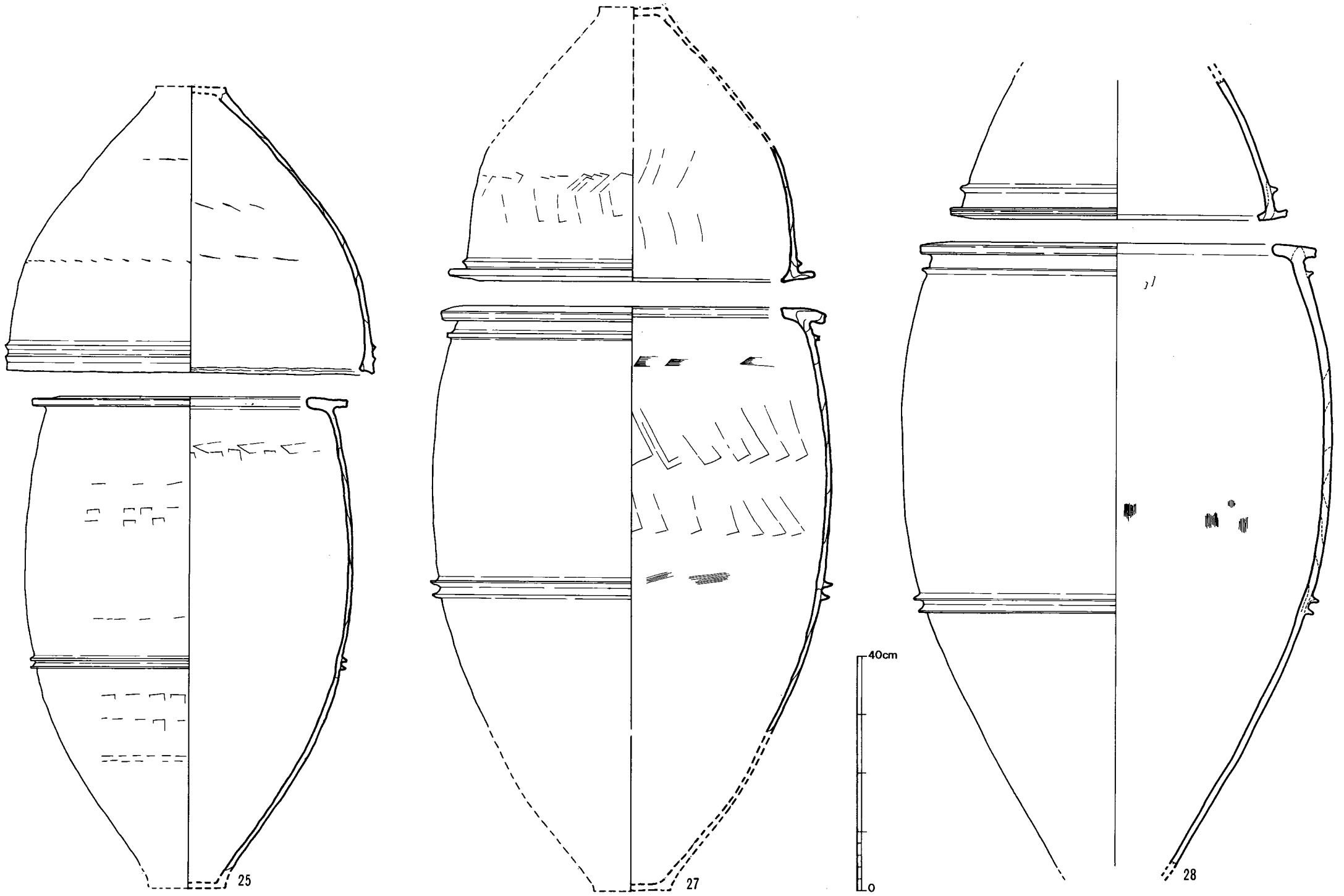
25号甕棺墓（図版65-3，第159図）

調査区の東北端で，他の墓壙との切り合いがなく出土した。削平が著しく，横穴部天井は遺存しない。出土時での棺体組み合わせの状態は，断面図に示すように接口状を呈していたが，復原接合の結果，第159図のように上甕の口縁部を打ち欠いた覆口式であることが確認された。粘土は，床面から20cmほど上位までに遺存していた。



第159図　25号甕棺墓実測図（1/20）

甕　棺（図版73，第160図）　上甕は口縁部を打ち欠いているが，体部に口縁部を造作した接合面を丁寧に剝離させたように看取され，器内外に打ち欠き痕を残さない。このため，接合法がよく観察できる。体部最上位を壁高17mmと厚手に造作し，上面に親指の指腹で内側から押さえ，波状と



第 160 図 八 龍 II-10　25・27・28 号 甕 棺 実 測 図 (1/8)

する。この際に人さし指を器外に添えて，厚さが減じるのを防ぐ。このため，上面は内傾する。この上に，口縁基部の太めの粘土紐を手の腹で押し当てつつ，親指を上面に，残りの4指を外側に添え，手の腹と4指で紐を握り押さえする。これによって逆L字状の凝口縁が造作される。その両側端に新たな粘土紐を接合し，断面図に遺存する補強，整形用の粘土紐を一周させる。当初から，T字状口縁を，前途の内傾する体部最上位に接合すれば，口縁は内傾し，16号甕棺上甕のごとき外傾する器制には造作不可能である。

なお，上甕は深鉢であるが，体部の器制は下甕の甕下半部と一致し，深鉢体部最上位の厚手の部位は，下甕胴凸帯部下の凝口縁部位に相当する。後者の凝口縁は内湾しつつ開く下半部の最上位に位置し，以後造作される上半部の器重に変形することなく耐えねばならない。このため，上甕の深鉢体部最上位のごとく，接合面は内傾させることなく，平坦化が必要となり，この平坦な凝口縁上に，上位の粘土帯を置くようにして接合する。凝口縁の断面厚は10㎜を測り，上甕の17㎜に対して薄手である。タタキによって先端が薄手となったものでないことは，粘土帯の重複がこの部位で認められないことから明らかで，その上位の粘土帯接合時の当初から12㎜前後の薄手に仕上げられていたものである。このことは，口縁部までの器重に変形することなく耐えうる強度に至るまで，すなわちタタキを施せない状態にまで乾燥を待ったことが考えられる。この乾燥度の異なる粘土帯の接合は，焼成時および埋置後の，胴上半部と下半部の遊離の原因となる。これを防ぐために，凝口縁に水びき様の作業が施されるが，遊離を防ぎ得なかった好例に，甘木市上川原遺跡74号甕棺下甕(中期後半)がある(註8)。上川原では，上半部の造作を考慮し，凝口縁は底部・口縁部と平行に(水平状態に)丁寧に仕上げられている。

以上のことを考慮すれば，3号甕棺下甕の項で既述したDの部位の横方向のヘラナデ痕は，その直下に認められる凝口縁部に及んだ乾燥度の異なる上位の粘土帯の胎土を除去するために施した，横方向ケズリ痕を調整するための横方向ヘラナデ群の残影とも考えられよう。

胎土に0.5㎜大の砂粒を多く含み，焼成は良く，茶褐色を呈す。

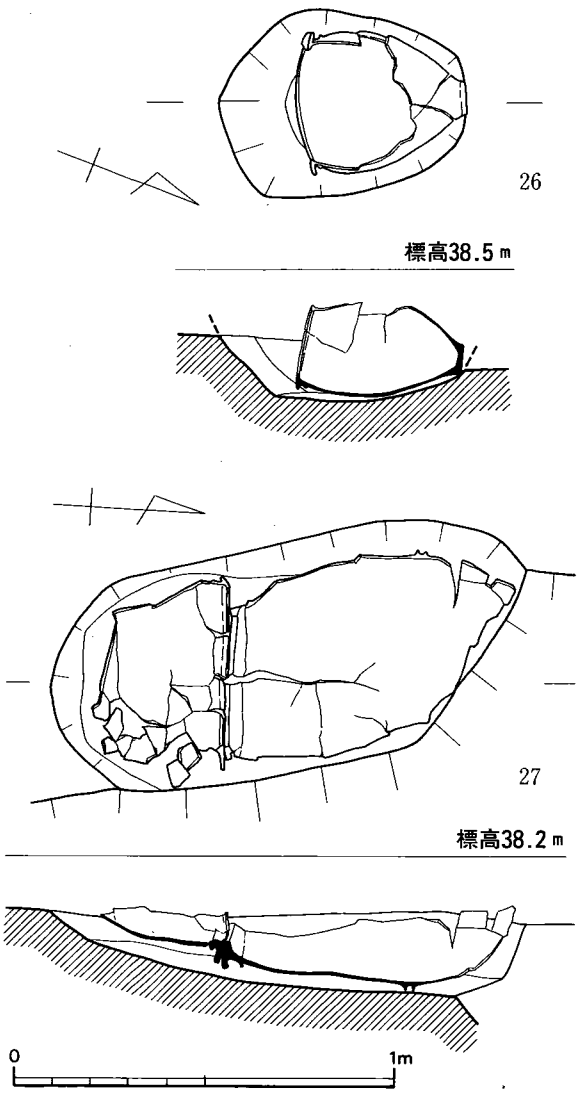
下甕の器内は，肩部にいま一つの凝口縁が認められ，この部位のみ横方向のヘラナデ痕を残す。その下方が縦方向のヘラナデであるのに，横方向となる理由は上甕で既述したとおりである。口縁下に凸帯を付さず，胴部中位の凸帯は細く丁寧なつくりである。

時期は，古い様相を若干残す中期中頃と考える。　(馬田)

26号甕棺墓(図版67-1，第161図)

小児用甕棺で単棺である。おそらく甕の口は木か何かで蓋をしたものであろうが確認されていない。主軸方位はS21°Eである。傾斜角度は8°で口の方が高い。上面で確認された墓壙ラインは横穴部のもので，長軸64cm，短軸49cmの楕円形を呈す。

甕　棺(図版73，第162図)　日常用器の甕を転用したもので，口径34.8cm，器高41.4cmを測る。底部が1.5cmと厚く，形もいくぶん古い要素を残しているが，口縁部の内外に発達した形状，



第 161 図 26･27号甕棺墓実測図 (1/20)

雑に施されたハケ目など中期後半の特徴を持つ。器壁は薄いところで3㎜，厚いところで5㎜ある。胴部に施されているハケ目はもともと雑なうえに二次焼成にあって，単位はつかめないが1㎝に4本の目がある。口縁下凸帯の内側と底部内面に指痕がついている。胎土はよく精選されており，小砂粒を混入する。色調は黄褐色で，内面は少し赤みがかる。焼成は二次焼成を受け全体的にもろくなっている。　(片岡)

27号甕棺墓（図版67-2，第161図）

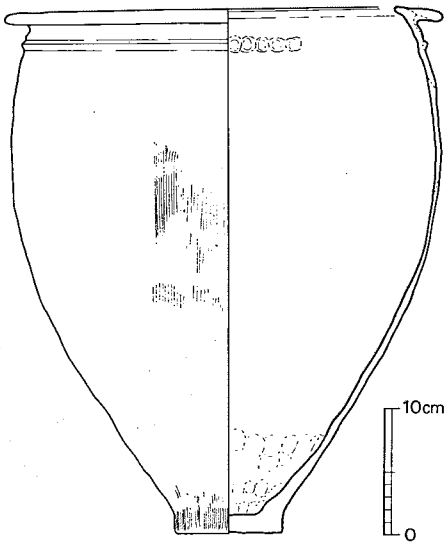
調査区の東端で，他の甕棺墓と切り合うことなく出土したが，東側部は攪乱をうけており，剝平も著しく，遺存状態は良くない。北側の甕が南側の鉢よりもレベルが低く，棺体傾斜は約5.5°を測る。この傾斜角度よりも大きい大形棺体は，例外の3号甕棺の8°以外にはなく，いずれも27号よりも古いものである。墓域内では最も新出の中期後半の時期の特徴を，この傾斜にも認めることができるが，この期の通例の傾斜角度よりも若干小さいことから，中期後半でもそう新しいものではないことが考えられる。このことは棺体の特徴とも一致するものである。

甕　棺（第162図）　上甕は，口縁下にやや丸味のある断面三角状凸帯を付す。器内には斜～縦方向のヘラナデ痕を残すが，その端痕は明瞭でない。体部中位に凝口縁が観察され，体部最上位では，粘土帯接合面の傾斜が逆転する。胎土に0.5～1.0㎜大の砂粒を多く含み，焼成は普通で，器内外ともに淡黄褐色を呈する。

下甕の器内は，中位と最上位で数ヵ所の横方向ハケ目を残し，他は縦方向に近い斜方向ヘラ

ナデ痕とその端痕を認める。胴中位の凝口縁は，2条の凸帯の中間に位置して確認される。器外のヘラナデ痕は，丁寧な布様の縦方向ナデによって消されている。このため，器外に通例認められる凹凸は少ない。肩部の凸帯はシャープであるが，胴中位の2条の凸帯は近接する若干跳ね上げ様の丸味を有する断面三角形状を呈する。時期は既述のとおり，中期後半でも古いものと考える。

（馬田）



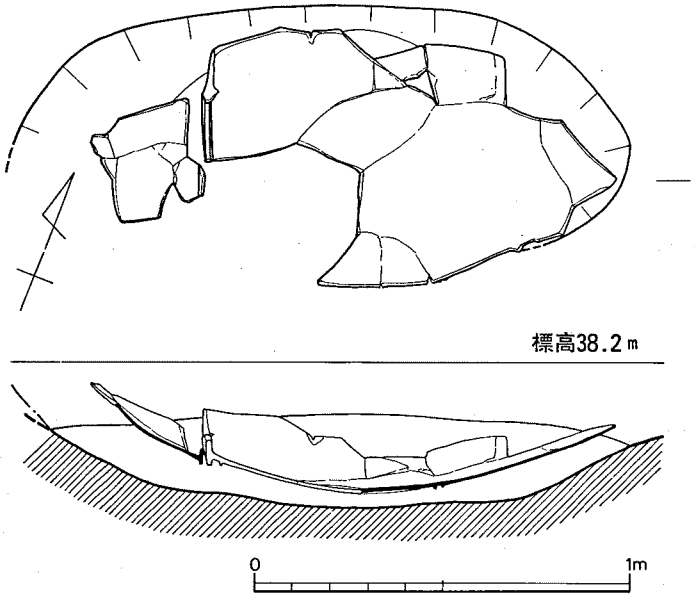
第 162 図　26号甕棺実測図（1/6）

28号甕棺墓（図版67-3，第163図）

かなり削られており，レベルから見れば削平された面より下にある部分もかなりの破片が持ち去られている。主軸方位はS69°Wである。傾斜角度は不明であるが，残った状態から想像すれば10°前後の方が高い位置になろう。

甕　棺（第163図）　上甕の図は反転復原している。口径57.6cm，口縁内径47.6cm，残存する部分で器高24.4cmを測る鉢を使用している。口縁部は外に低いT字状の口縁をなし，外側の端部も指を入れて横ナデしているので少しくぼんでいる。つくりは丁寧で焼成も良好である。胎土はよく精選され，0.5mm大の均質な砂粒を含んでいる。色調は黄褐色を呈す。

下甕の図も，反転復原している。口径67.2cm，口縁内径は52.1cm，残存する部分で器高106.5cmを測る。発達したT字状の口縁をなし，内側の端部は丸く仕上げられるが，外側の端部は指を入れてヨコナデしている。口



第 163 図　28号甕棺墓実測図（1/20）

表10　八龍II-10甕棺墓一覧表

※塗彩は黒色を呈す（単位cm）

甕棺番号	時期	頭位方向 / 傾斜	標高 / 棺体長	組み合わせ方	上甕〔打欠部位〕 / 下甕〔打欠部位〕	大きさ	口径	最小内径〔打欠径〕	胴部最大径	底径	穿孔高（現状）	器高〔打欠高〕（現存高）	備考
1号	Ⅳ古	S59°W	38.57m	?	欠失	?							
		?	?		甕	中	欠失	欠失	37.4	約8.5	(無)	約50.0	
2号	Ⅳ古	S19.5°W	38.35m	接口	甕	中	40.0	32.0	41.7	11.8	(無)	52.6	〔上・下甕〕共に器外胴上半煤付着。
		14.0°	100.3		甕	中	約40.0	30.8	38.4	10.7	(無)	50.4	
3号	Ⅲa	N43°E	37.99m	木蓋単棺	木蓋								〔木蓋部〕失蓋。控え石4個使用。
		8°	95.1		甕	大	63.4	51.6	64.8	13.0	無	95.1	
4号	Ⅳ古	N47°E	38.43m	?	甕	中	40.0	33.8	40.0	欠失	(無)	(32.0)	
		?	?		欠失	?							
5号	Ⅲc	N4.5°W	37.86m	接口	壺	大	58.0	30.0	51.7	9.8	無	62.8	〔塗彩部〕上甕は器内口頸部～器外。下甕は器内口縁端～器外。
		−4.5°	約160.0		甕	大	66.0	52.0	68.4	欠失	(無)	約97.0	〔接口部〕粘土使用。
6号	Ⅳ古	S87.0°E	37.66m	呑口	甕（胴上位）	大	打欠	〔46.2〕	50.9	10.9	無	〔42.1〕	墓壙上位から丹塗土器底部出土。
		−2.0°	144.5		甕	大	65.2	49.2	61.3	15.2	無	104.5	
7号	Ⅲa	S2°E	37.62m	接口	鉢	大	60.4	52.4		13.1	無	38.3	
		−0.5°	125.8		甕	大	66.1	52.7	67.4	14.1	無	87.5	
8号	Ⅲa	N78.0°W	38.02m	接口	鉢	大	60.0	53.6		11.4	無	30.5	〔塗彩部〕上甕は口縁上面～器外。下甕は確認できず。
		2°	130.0		甕	大	69.6	62.4	74.0	13.2	無	99.5	〔粘土使用部〕接口部。
9号	Ⅲb	N34.0°W	37.77m	接口	鉢	大	63.7	52.7		13.9	無	46.4	〔塗彩部〕上甕は口縁内端～器外。下甕は器内口縁部～器外。
		2°	144.4		甕	大	65.9	52.9	65.1	12.8	無	98.0	〔粘土使用部〕接口部。
10号	Ⅲc	S14.0°E	38.24m	接口	甕	小	約32.0	約24.2	約26.8	欠失	(無)	?	
		+?°	?		甕	小	32.0	25.2	31.2	欠失	(無)	(16.3)	
11号	Ⅲc	S21.5°W	38.23m	木蓋単棺？	木蓋？	欠失?							
		3.5°	53.0?		甕	中	約45.0	約36.0	約46.0	約10.0	無	約53.0	
12号	Ⅲc	S5.0°W	38.20m	接口	鉢	小	34.0	26.0		9.4	無	20.5	
		21.0°	76.0		甕	中	37.9	29.3	37.4	9.7	無	50.1	
13号	Ⅲc	S35.0°W	38.32m	接口	甕	小	26.3	20.7	24.7	欠失	無	約32.1	
		約8.5°	約66.0		甕	小	28.5	21.7	26.5	7.5	無	33.9	
14号	Ⅲc	N33.0°E	37.96m	接口	甕（胴上半部）	大	打欠	〔47.0〕	53.6	10.2	2孔有？	〔60.7〕	〔塗彩部〕上甕は器外。下甕は器内口縁下～器外。
		4.5°	139.8		甕	大	54.6	44.7	54.7	11.2	無	79.1	

甕棺番号	時期	頭位方向	標高	組み合わせ方	上甕〔打欠部位〕	大きさ	口径	最小内径〔打欠径〕	胴部最大径	底径	穿孔高（現状）	器高〔打欠高〕（現存高）	備考
		傾斜	棺体長		下甕〔打欠部位〕								
15号	Ⅳ古	S5.0°E	38.01m	接口	甕	中	38.3	30.3	37.7	10.0	胴中部1個	48.5	
		2.5°	103.7		甕	中	39.8	30.8	40.3	9.9	無	55.2	
16号	Ⅲb	N79.0°E	37.67m	接口	鉢	大	70.8	58.2		14.3	無	56.5	〔塗彩部〕上甕は器内口唇部～器外・下甕は器内肩～器外。
		−0.5°	160.7		甕	大	71.4	58.0	56.7	13.4	無	104.2	〔粘土使用部〕接口部。
17号	Ⅲc	S76.0°W	38.14m	接口	甕	小	29.1	22.5	27.5	7.7	無	34.9	〔粘土使用部〕接口部。
		0.5°	70.5		甕	小	29.4	21.6	28.1	8.1	胴部4個 高1cm	35.6	
18号	Ⅲc	N84.5°E	37.84m	接口	鉢	小	38.4	29.6		11.5	無	25.5	〔粘土使用部〕接口部。
		4.5°	387.5m		甕（口縁内端部）	大	33.6	〔27.0〕	53.6	10.6	無	62.0	
19号	Ⅲa	N50.5°E	37.55m	接口	鉢	大	63.2	〔53.0〕		13.3	無	43.3	〔塗彩部〕上甕は器内口縁下9cm～器外。下甕は器内口唇部～器外。
		2.5°	145.0		甕	大	68.0	53.2	65.9	13.1	無	101.7	〔粘土使用部〕接口部。
20号	Ⅲb	S75.0°E	37.42m	接口	鉢	大	74.0	62.5		12.4	無	51.0	〔塗彩部〕上甕は器内口縁下17cm～器外。下甕は器内口縁部～器外。
		−1.5°	152.0		甕	大	76.0	64.2	72.6	13.2	無	101.0	〔粘土使用部〕接口部。
21号	Ⅲc	S13.5°E	37.87m	接口	甕	小	26.3	19.7	23.9	7.8	無	33.3	
		2.0°	66.4m		甕	小	26.6	20.2	24.1	7.6	無	33.1	
22号	Ⅱ新	N13.5°W	37.35m	石蓋単棺	石	大	縦×横 94×69					厚12.0	〔粘土使用部〕接口部。
		0.5°	113.2		甕	大	76.2	63.4	75.3	12.4	無	101.2	
23号	Ⅲa	N64.0°W	37.90m	接口	鉢	大	76.4	63.6		欠失	（無）	約40.0	〔粘土使用部〕接口部。
		約3.5°	約141.0		甕	大	67.2	55.2	66.3	欠失	（無）	約101.0	
24号	Ⅲa	S81.0°E	37.66m	接口	鉢	大	57.7	47.9		12.3	無	44.0	〔塗彩部〕上甕は口縁上面～器外。下甕は確認できず。
		−3.0°	139.0		甕	大	60.0	45.0	64.0	14.0	無	95.0	〔粘土使用部〕接口部と下甕下面。
25号	Ⅲc	S73.5°W	37.59m	呑口	鉢（口縁部）	大	打欠	〔57.4〕		欠失	（無）	〔約49.4〕	〔粘土使用部〕接口部。
		−？	約132.9		甕	大	54.0	39.8	56.0	欠失	（無）	約83.5	
26号	Ⅲa	S21.0°E	38.15m	木蓋単棺	欠蓋？								
		12°	41.40		甕	小	34.7	27.1	34.0	8.5	（無）	41.4	
27号	Ⅳ古	N3.0°W	37.83m	接口	鉢	大	62.0	50.0		欠失	（無）	（22.8）	
		12.0°	約139.0		甕	大	66.0	50.4	68.4	欠失	（無）	約93.0	
28号	Ⅲc	N69.0E	37.82m	接口	鉢	大	57.6	47.6		欠失	（無）	約40.0	
		約3.5°	約151.2		甕	大	67.2	52.0	73.0	欠失	（無）	約111.2	

縁から42cmほど下がったところで粘土帯の接合法が逆転している。内面の一部にナデ消し忘れたハケ目がある。単位幅は不明であるが，およそ1cmに8本の目である。また口縁下内面にヘラ状のもので製作時についたと考えられる痕跡もある。胴中位の凸帯からその上10cmくらいまでの間は全周にわたって，皮もしくは布で横ナデした痕跡が見られる。胎土はよく精選され，あまり砂粒を含んでいない。

焼成は極めて良好，色調は赤褐色を呈す。残存は口縁部で全周の約6分の1，胴部凸帯付近で全周の約3分の1。（片岡）

ところで，以上の28基の甕棺墓の配置の状態は第164図に示すとおりであるが，その特徴は下記のとおりである。

① 墓壙間に切り合い関係が認められる例は多いが，直接に甕棺が切り合う例はない。

② 全体の頭位方向はバラバラであるが，墓壙間に切り合い関係が認められる大形の鉢・甕を使用した大型棺体（22号例の石＋大形甕の組み合わせの石も含むので，棺体という語を使用する）相互の頭位方向は一致する（18号と19号と20号の例など）。

③ 中型棺体はいずれも特定の大型棺体の墓壙に一部重複するか，頭位方向を逆にして近接して埋置している。

④ 調査区の西側部での甕棺の出土がないことから，墓地の西側への広がりは1号までであったと考えられる。

⑤ 同様に中央部で群在し，東側部で減少し，中型棺体の出土がないことから，墓地の東側への広がりはほぼ27号までであったと考えられる。

⑥ 調査区の北側は農道のため未調査ではあるが，更に北側で28号が出土していることから，墓地の広がりはこの28号を含めて考える必要がある。

このことに加えて，土壙墓・石棺墓・木棺墓の出土はなく，この墓地は甕棺墓のみでまとまりのある墓地の広がりと，墓地内での配置が行われていることが明らかである。

また，墓壙の切り合い関係を西側から順に古⟶新で示すと下記のとおりである。なお，新・古関係を墓壙（横穴部も含む）の旧状の復原を考慮して判断したものは古⟶新で，棺体の明確な時期差などで判断したものは古⇢新で示す。

24号 → 6号 → 4号　　7号 → 21号　　19号・20号 → 17号・18号　　22号 → 8号・9号 → 10号・26号
24号 → 2号
3号 ⇢ 16号 → 14号 → 15号　　23号 ⟶ 27号
3号 → 12号

つぎに，棺体に使用された上・下甕の時期的特徴は下記のとおりである。なお，出土した甕棺はいずれも中期であるが，仮にⅠ期（初頭），Ⅱ期（前半），Ⅲ期（中頃），Ⅳ期（後半）あるいは加

えてV期(末)の順で中期を区分するとき，この墓群ではI期・II古期・IV新期・V期に属するものは出土していない。また，大型棺体の墓壙の切り合い(第164図模式図でB-1～4のグループの例など)から，II新期に埋置の時期差があることが認められ，このことは出土したII新期に属する各甕棺の特徴に新・古の差があることでも明らかである。以下の説明と表10記載の時期は，埋葬時期の新・旧の傾向を，a（新）→b→c（古）として付加したものを使用する。

ところで，棺体の時期決定は上甕も下甕同様に考慮すべきであることは当然であるが，長文となることを避けて，下甕のみを代表して説明する。

II新期の埋葬　22号のみである。胴部の凸帯は胴部中位より若干下位に位置し，断面形は低い三角状を呈し，そのヨコナデは充分でない。胴部のカーブは凸帯を境として緩慢な内湾形を呈す。口縁部は上面が下傾し，内端が外端よりも著しく器内に突出する。また，断面は厚手で，外端の胴部からの屈折も緩慢である。これらの特徴はII古期に相当すると考える汲田式でも初期の特徴に比べて，口縁部は内側に発達し，器高は大きくなるなど大型専用棺体を意識した大形甕への志向が認められる。加えて，2条の凸帯は汲田式の1条凸帯を，更にいま一つ付しただけで，凸帯間も離れている。

IIIa期の埋葬　22号に示されたII期からつぎのIII期への過渡的特徴が認められ，その強弱の差から23号・3号・19号に代表される者がある。

23号は口縁部が22号と同様で，2条の凸帯間は未だに遊離したままで低いが，凸帯を境として胴上位は直立するなどのc期への近接も認められる。

3号は胴部のカーブと厚手の口縁にII新期の特徴を残すが，凸帯は強いヨコナデによって高くなり，口縁外端の胴部との屈折はL字形となるなどの新しい傾向が認められる。

19号は凸帯が低く，口縁内端の器内への突出などはII新期の特徴を認めるが，凸帯を境として胴部は直立し，口縁断面は薄手となるなどの新しい傾向を呈す。

IIIb期の埋葬　9号に代表される。凸帯はヨコナデによって2条が一部重複し，胴部中位に位置する。口縁は薄手となり，II新期の口縁部内端の器内への著しい突出がなくなり，内端と外端の胴部からの張り出し度に差位がなくなる。

IIIc期の埋葬　5号・25号・28号に代表される。胴最上位に凸帯を付し，胴中部の凸帯は別々に丁寧にヨコナデするため，より高くなく，薄手の口縁幅も大きくなる。ここに大型専用棺体の器形が完成する。

IV古期の埋葬　6号に代表される。II新期以来IIIc期までを通して，器外のハケ目をヘラナデによって丁寧に消していたのが，ハケ目仕上げのままとなる。また，口縁外端部が内端部に比べて著しく器外へ張り出す。

つぎに，上述のそれぞれの埋葬小期を加味したII新～IV古期の棺体特徴を基礎に，第164図に示した模式墓壙配置図と第164図に示した棺体埋置傾斜および第164図に示した墓壙床最下標高

について説明する。

模式配置（第164図）八龍II-10を墓地と決定したものはII新期の22号で，埋置位置は盛土(棺体埋置によって，当時の地表標高よりも高く墓壙上に盛られた排土)によって，つぎのIIIa期にも墓標的に遺存したことは明らかである。22号の周辺部には空き地が存在するのに，8号・26号→9号・10号が順次この盛土(墓壙)を切って埋置されている。これをAグループとすると，28号以下の棺体は22号盛土周辺を埋置の場所として強く意識したものであろう。

同様にIIIa期に19号・24号が，前述8号・26号がAグループを以後形成することを前提に，19号はBグループを，24号はCグループをそれぞれに形成する共通の認識下に埋置されたものであろう。27号も同様であるが，後述する27号の頭位方向から，やや後出するものと考えられる。このとき，それぞれが各グループの墓域を以後重複することなく維持することも共通の認識下にあったものであろう。

なお，3号と7号もほぼ同時期の埋葬であるが，既に存在するA～Dグループの埋置位置を意識して，19号の盛土の南・北側にその一部を切って，B-2・3グループを形成する共通の認識下にあって埋置されたものであろう。また，後者のB-3グループの盛土を切る認識下にIIIc期の14号が埋置され，B-4グループを形成したものであろう。

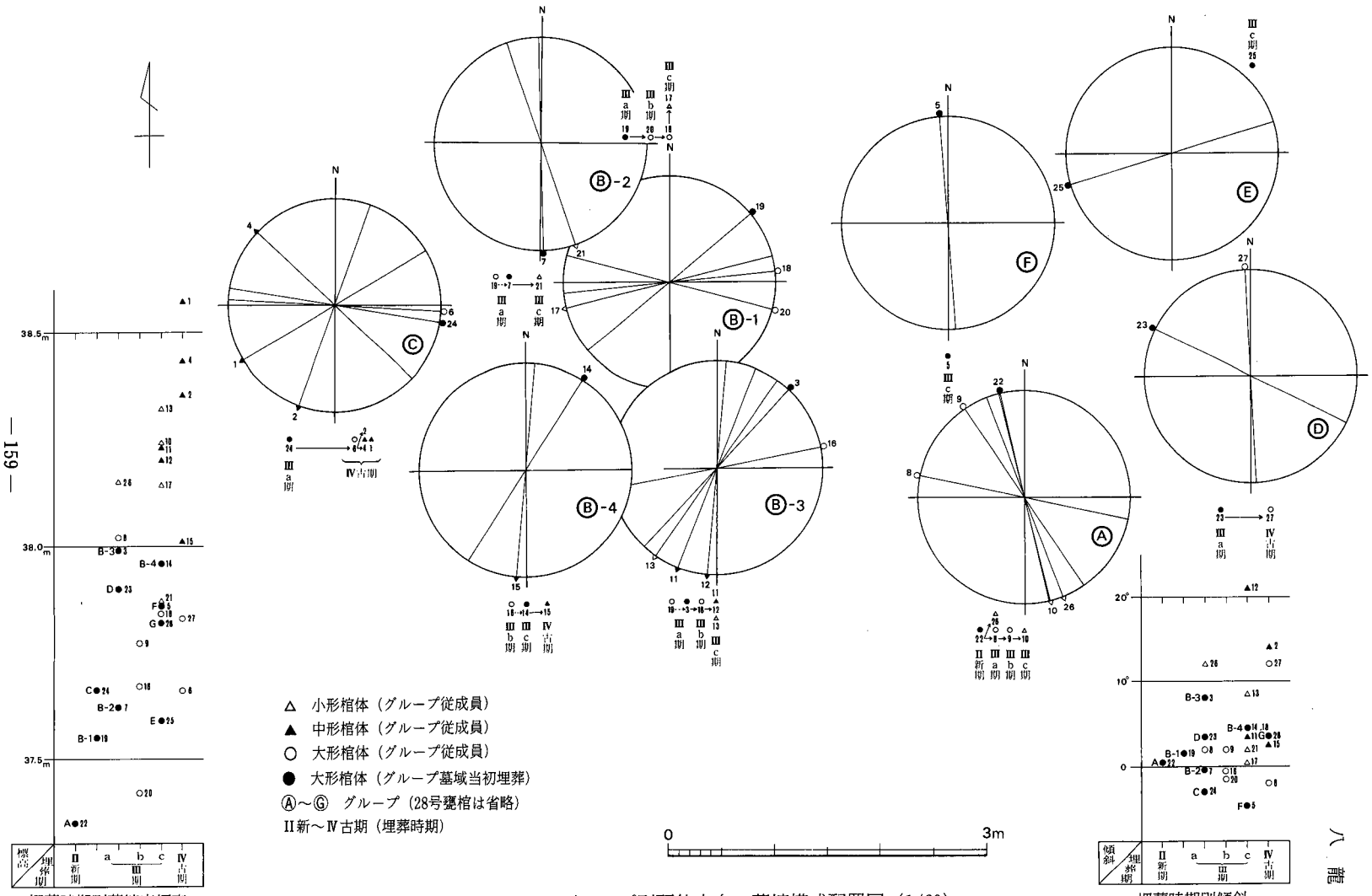
同様に25号はE，28号はGと言え，未調査区に埋置された甕棺墓が存在することが考えられる。このとき，25号はIIIc期，28号はIIIc～IV古期と後出することから，墓地の広がりの中で25号は北端，28号は東端をグループの埋置位置とする共通した認識下にあったものであろう。

なお，頭位方向は大型棺体がいずれも25号の埋置位置の方向をとり，後出の27号・28号のみが例外である。このことは，II新期に22号が埋置されて以来，III期およびIV古期に至るまで各大型棺体の埋置の位置と頭位方向が覚えられていたものと考えられる。墓群はIV古期で終わるが，墓地の広がりの北端は28号でIIIc～IV古期に，東端はIV古期の27号で決定されたものであろう。27号・28号のみが頭位方向を異にすることの意味をこのように解したい。

上述の大型棺体に対し，それぞれのグループ内で出土する中型棺体の頭位方向は，各大型棺体のそれと逆方向で，小型棺体も同様である。このあり方のなかにも，墓群全体の共通の継続した認識＝紐帯を強く認めることができる。このことは，つぎの標高差においても言えるようである。

墓壙底標高（第164図）II新期で墓地を決定した22号が標高37.35mと最も深く，IIIa期では22号の埋置の深さに対しても共通の認識下にやや浅く埋置され，IIIc期ではより浅く埋置されていると言えよう。このとき，墓地の共通の中心部を5号周辺と考え，周辺部のグループほど同時期でも浅く埋置される傾向も指摘されるようである。

埋置傾斜（第164図）他の遺跡においてもII期～III期にかけては横穴内の下甕が上甕よりも上位にあるか，あるいはほぼ同じ水平であるかの棺体傾斜をなすことは一般に知られており，



埋葬時期別墓壙底標高

第 164 図 グループ別頭位方向・墓壙模式配置図（1/60）

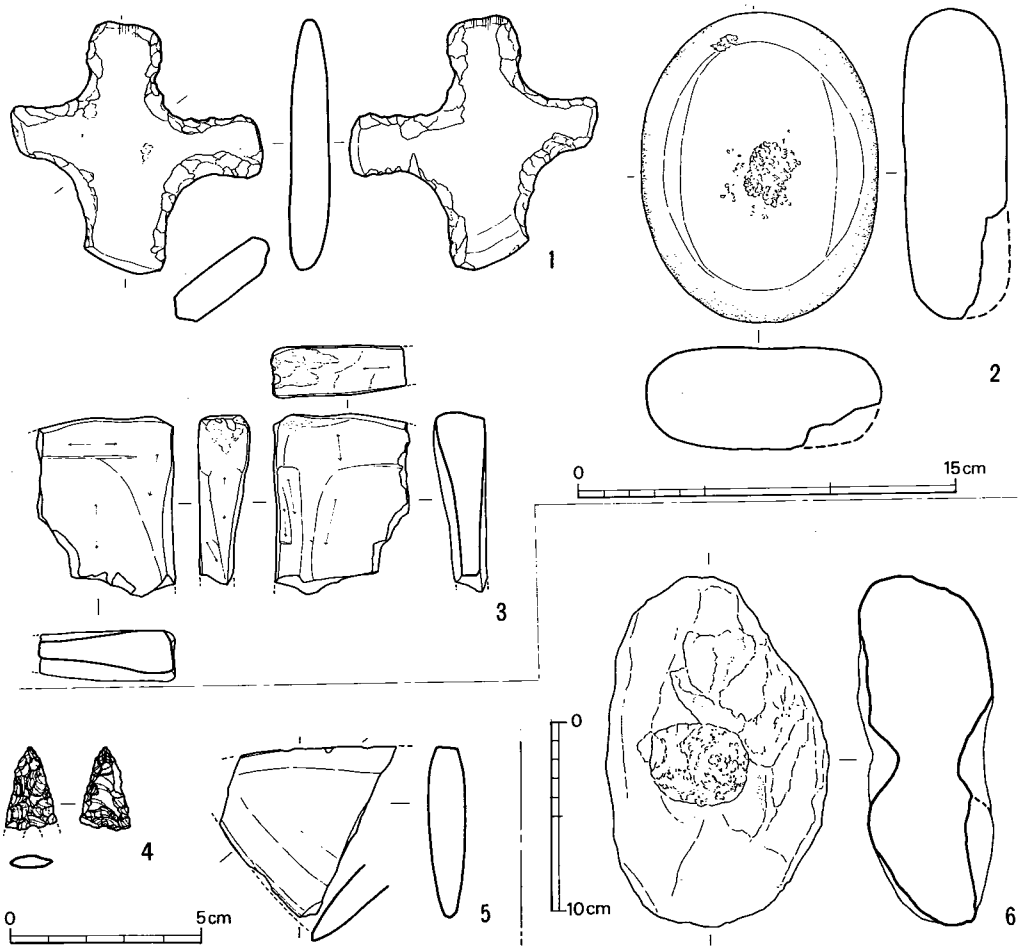
埋葬時期別傾斜

この墓群が継続した共通認識下に形成されたことの特徴とは断言できないかも知れない。

最後に，以上のようなII新期～IV古期の墓群全体の共通の継続した認識＝紐帯の存在と，A～Gの各グループの配置の状態，またそのなかにあってBグループが1～4の配置・埋置の状態でIIIa期から墓群の終わるIV古期まで形成されることなど，中期中頃を前後する時期の共同体のあり方をこの墓群は如実に示していると言えよう。　(馬田)

(2)　その他の遺物

甕棺墓墓壙内や，遺構検出面より上層から出土した遺物としては，縄文時代に属する土器・石器の他・弥生時代・古墳時代と思われる資料もある。甕棺墓墓壙内出土例についても，混入



第 165 図　II-10 出土石器実測図(1～3は1/3, 4・5は1/2, 6は1/4)

とみるべきで甕棺よりも先行するものとしか限定しえない。

縄文土器は，11号と22号甕棺墓の墓壙内から小片が数片出土したのみで図示しうる資料はない。いずれも条痕を施したもので後期～晩期前半であろう。

石　器(第165図)　1は，6号甕棺墓墓壙内出土の白雲母片岩製十字形石器。十字の突起部のうち1つは短く細めで，その両脇の抉入部は敲打のあと磨耗している。また図示する上面の突起部は他の部分よりも薄めで，先端の磨耗が顕著である。最大厚1.6cmを有し，十字の長さは10.1～10.2cm，抉入部の内幅は4.7～5.5cm，十字よりむしろX字に近い形状になっている。

2は，17号甕棺墓の西側上縁から出土した玄武岩製のすり石で一部を欠損するが，長径12.4cm，短径9.5cm，厚さ4.1cmを有し，両面中央は敲打痕で凹む。周縁は敲打痕が若干残るがよくすれている。重量の現存値は800g。

3は，16号甕棺墓墓壙内出土の暗黄灰色を呈す細粒砂岩の砥石片で，破損面以外はよく使用されている。仕上げ砥石の類である。

4は，E15の第3層から出土した黒曜石打欠石鏃で，基部を欠く主要剝離面の一部が残る。

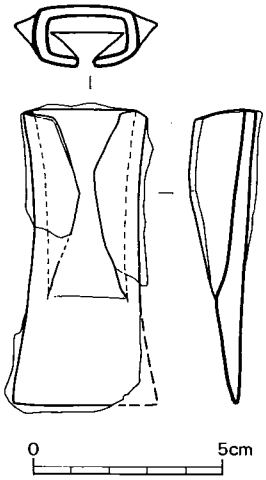
5は，15号甕棺墓墓壙内出土の石庖丁片。細粒の硬砂岩製で両面共に丁寧に研磨されている。背と刃部の角度からみて三角形に近いタイプの例であろう。重量の現存値は23.9g。

6は，26号甕棺墓付近の上層から出土した凹石。凝灰質雲母片岩の円礫の中央が両面とも敲打によって大きく凹む。周縁はさほどすり減っておらず，重量1,935gと重い。

鉄　器(第166図)　E25の第2層から鉄斧が出土している。鍛造の袋状鉄斧で，全長7.3cm・袋部の幅2.9～3.3cm，厚み1.6cmを有す。雇柄を受ける袋部は，2.5～4mmの厚みで角のあるC字形に曲げられる。刃部側は厚さ5mm前後で，片刃に尖るが，刃部幅は3.8cm程度であろう。

石器・鉄器類の時期は，十字形石器・すり石・打製石鏃は土器の例からみても縄文時代後期末～晩期前半ぐらいが妥当であろう。石庖丁は弥生時代前期，袋状鉄斧は弥生終末期以降と考えたい。

(小池)



第166図　II-10出土鉄器実測図(1/2)

6．小　結

八龍地区の調査では，弥生前期後半から5世紀前半までと11世紀末から12世紀中頃の遺構を検出することができた。弥生前期の遺構は，三雲遺跡南半で少なくなるが，I-18地区で検出した板付II式に属する長方形貯蔵穴は，数こそ少ないが，その存在を確認できた。また，これに続く中期初頭(城ノ越式)の住居跡もあった。

八　龍

住居跡は，寺口・八龍地区に弥生の住居跡が検出されたことがなく，八龍Ⅰ-3・11から寺口Ⅱ-17に続く大溝があるだけに，弥生の集落構成が問題となるが，寺口・八龍で弥生時代の遺構といえば，大溝のほかには墓地だけである。この傾向は堺地区にも続くことから，この3地区は現調査段階では，弥生期の墓地域であったことになる。

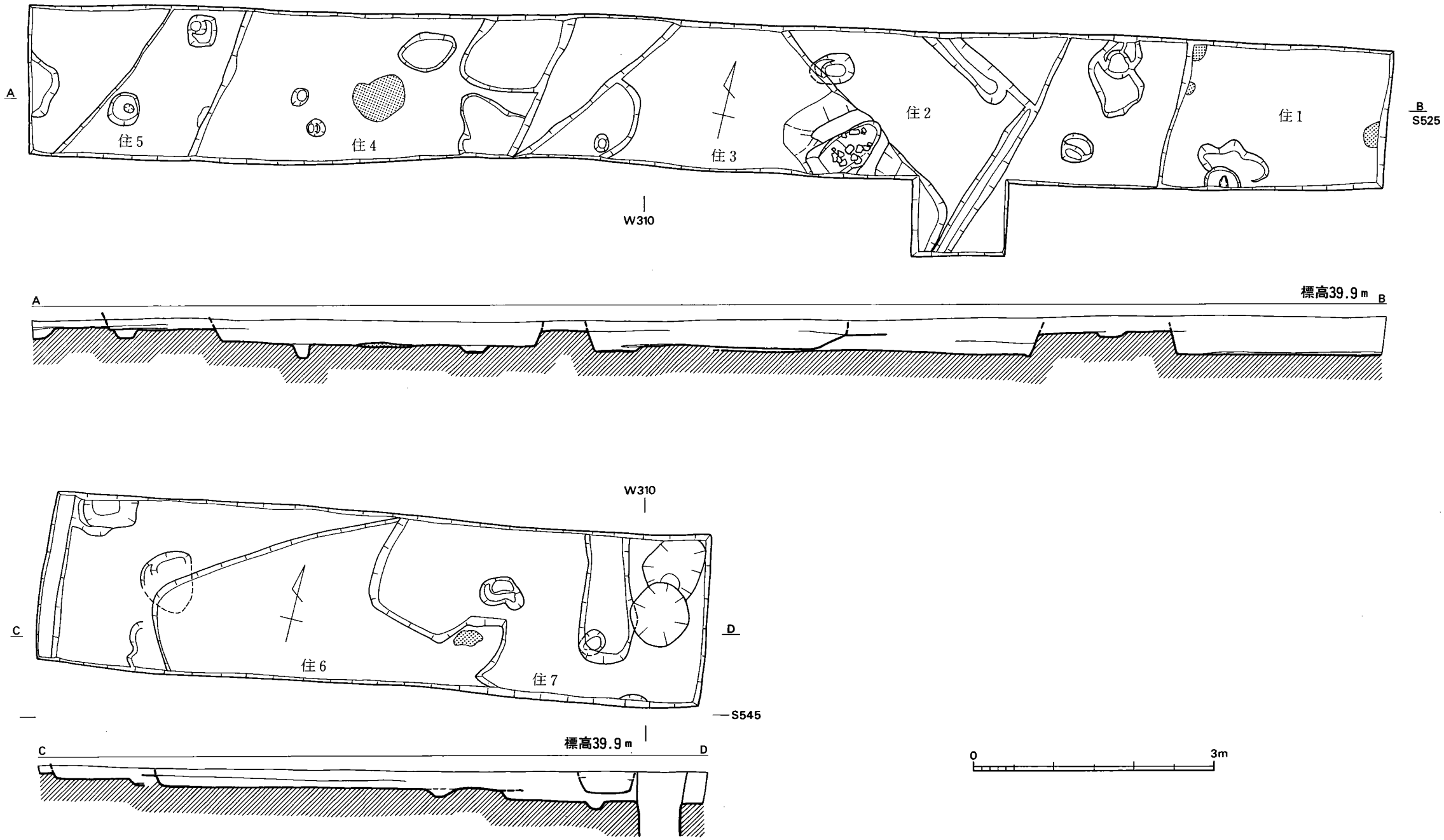
八龍Ⅱ-10の甕棺群は，22号石蓋単棺を最古式として，中期前半を主体とし，中期中頃から一部中期後半まで営まれている。これは隣接するⅠ-18地区に中期初頭の住居跡があることから，その後墓地に変わったことになる。Ⅱ-10の甕棺群は調査したものが28基であったが，南側に一部延びると，北側の道路で破壊されたものや未調分を含めても40基前後の基地構成であったろう。この墓地群も，中期後半になるとその古相の6号，その新相の4号小児用の2基のみとなり，埋葬の主体は他の地区に移動したことになる。この墓地が単位集団のものであれば，その移動あるいは消滅は何を意味するのであろうか。ちなみに，堺Ⅱ-30～32の墓地群は，弥生前期と中期後半新相の時期である。

八龍Ⅰ-7地区の墓地群は，古墳期の住居で破壊されたものがあろうから，その規模は不明であるが，甕棺墓が土師器Ⅰa期に属することから，北側に隣接する寺口Ⅱ-17の石棺墓群に時期的には連続するものである。

八龍地区に再び集落が営まれるのは，Ⅱa期になってからである。Ⅰ-3の弥生中期大溝上層に多量の土師器が投入されていることは，寺口地区に続いてⅡa期の集落が営まれていたことを証明している。Ⅱa期の住居跡としては，Ⅰ-7の1号，Ⅰ-18の2号・4号・7号住居跡のみであったが，これは調査地区が遺跡の縁辺地域であったことに起因するものであろう。

Ⅱa期に伴うものとして，瓦質土器が寺口Ⅱ-17地区同様に確認された。弥生後期に伴う瓦質土器と比較すると形態的差に加えて内面のタタキが完全に消されていることから，硬質の陶質土器との型式的・時間的差を埋めるものとなりうるかは今後の共伴資料増加とその比較研究から解明されるものである。番上Ⅱ-6の2号土器溜はⅡa期新相の一括資料とすることができるが，この土器群の中に細片ながら硬質土器片が含まれていた。八龍Ⅰ-3大溝上層土器群と番上Ⅱ-6の2号土器溜土器群と比較すると，八龍は古相の土器群が圧倒的多数を占めるが，大溝という遺構の性格がもつ運命であろうが，寺口大溝と同様にⅡb期にかかるような小形丸底坩も含まれていた。いずれにしろ，軟質の瓦質土器から硬質の陶質土器が加わるのはⅡa期にあるように思える。

土師器Ⅱb式に続く型式として，Ⅲ式を設定しなければならないが，本報告書では時間的余裕がないところから，Ⅲ式に含まれるものとして，八龍Ⅰ-7の2号・4号住居跡と，その中でも新しいものとして八龍Ⅰ-18の1号住居跡をあげておく。　（柳田）



第 167 図　中川屋敷 I-12 遺構配置図 (1/60)

第3節　中川屋敷地区の調査

1．はじめに

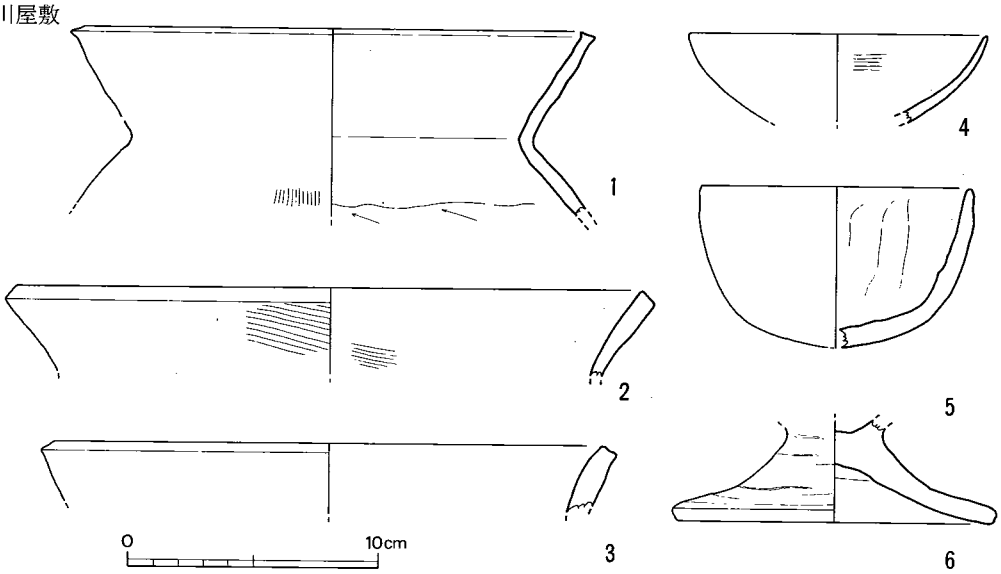
中川屋敷地区は，南北約140m，東西約150mに画されているが，近年まですべて民家の無い田畑で，三雲集落に囲まれた形になっており，圃場整備対象から外れている。最近では，Ⅰ-7が宅地に，Ⅱ-4・5が酪農牧場・牛舎となったが，他の部分はイチゴ栽培などのビニールハウスの立ち並ぶ風景が目立っている。

この地区では，前回報告のⅠ-7・8～12の発掘調査を実施してきたが，昭和55年度もⅡ-5西半の牛舎付属施設建築に先立って発掘調査を実施した。Ⅱ-5では既に30cm程度の盛土があり，東北部に7×3m，南西部に5×2mのトレンチを設定して掘り下げたが，旧表土下に厚いヘドロ状の池沼堆積土に似た堆積土があり，東北トレンチで約1m，南西トレンチでは1.5m以上になる。トレンチが深くなって排土の置場に限界があるのと，トレンチの周りが水分を含んで軟弱な状態であったので，これ以上の調査を断念したが，東北トレンチの中央部のみ僅かに深く掘り下げて遺構検出を行った結果では，砂利面がすぐに現われて砂利面を掘り込む形の幅1mで南北方向を向く溝状の遺構が検出でき，暗褐色粘質砂の埋土に弥生中期の土器片が数点含まれていた。遺構検出面の標高は39.23mを測る。

また昭和57年初春にはⅠ-12が整地されており，個人住宅が建築される予定だと知ったが，三雲集落の立地するような居住条件の良好な場所は時代の如何を問わないと思われ，隣接する中川屋敷Ⅰ-9試掘調査(『三雲遺跡』Ⅲに報告)の結果からみても，遺構・遺物の存在は予想される。このため土地所有者の承諾をえて，昭和57年4月5日から発掘調査を実施した。

なお，調査実施中に，下西Ⅱ-11にも個人住宅建設計画のあることを知り，下西Ⅱ-10の調査から遺構の存在が予想されたので，土地所有者の承諾をえて発掘調査を実施した。ここでは，盛土が厚く，排土処理の制約があったので幅2m，東西6m，南北8mのL字形トレンチのみを調査した。旧地表下はすぐ礫層となり，礫層の上面(標高37.52m)に弥生中期の土器片が散乱するのみで遺構の存在はみられなかった。

中川屋敷Ⅰ-12では，厚さ約1m余りの盛土が，真砂土ながらまだ充分に締まっておらず，砂丘を掘るのと同様な状態であるのと，排土置場の制約があり，幅2mのトレンチを東西方向に2カ所掘り下げるのみに留まった。北側のトレンチでは，カマドを付設した住居跡をはじめ5軒分の住居跡を，南側のトレンチでも古式土師器を含む住居跡と，その下に弥生後期の住居跡を検出した。



第 168 図 1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

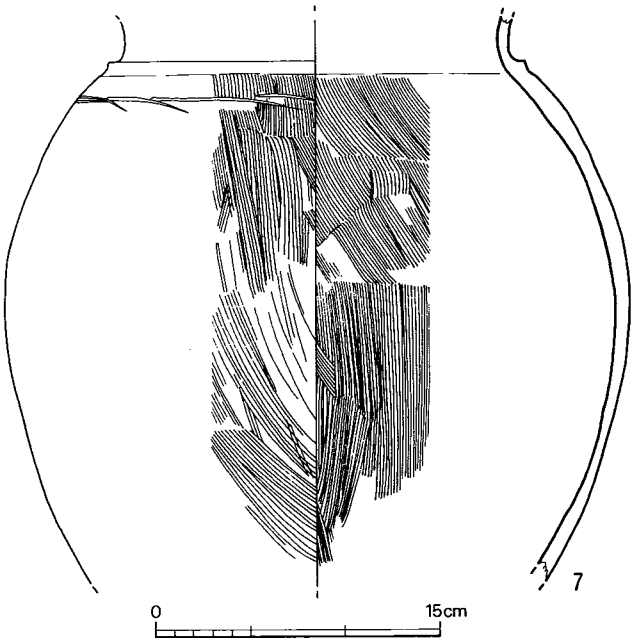
2. Ⅰ-12の住居跡 (図版74-1・2，第167図)

1号住居跡(第167図)

北トレンチの東端に，西壁と床面が検出された。壁は高さ約30cmを有し，堅緻な床面に至るが，西壁下の床面と，トレンチの東端に焼土があり，東端の焼土は炉跡であろう。西壁下の焼土は2カ所まとまっていたが，壁沿いに点々と焼土がみられるので，焼土のまとまりがカマドの残骸である可能性は少ない。床面を掘り込むピットは，1つ検出されたが調査区外に及んでおり，深さ約10cmで中に花崗岩質の礫が入る。

住居跡内からは，弥生中期の土器片が多く含まれていたが，下部から古式土師器が出土した。

土　器(第168図) 1の甕は，口縁部が直線的に長めに伸びるものの波打ち，口唇端部の内側が摘み上げられて僅かに尖る。肩部も口縁部同様にヨコナデされるが，



第 169 図 2号住居跡出土土器実測図① (1/2)

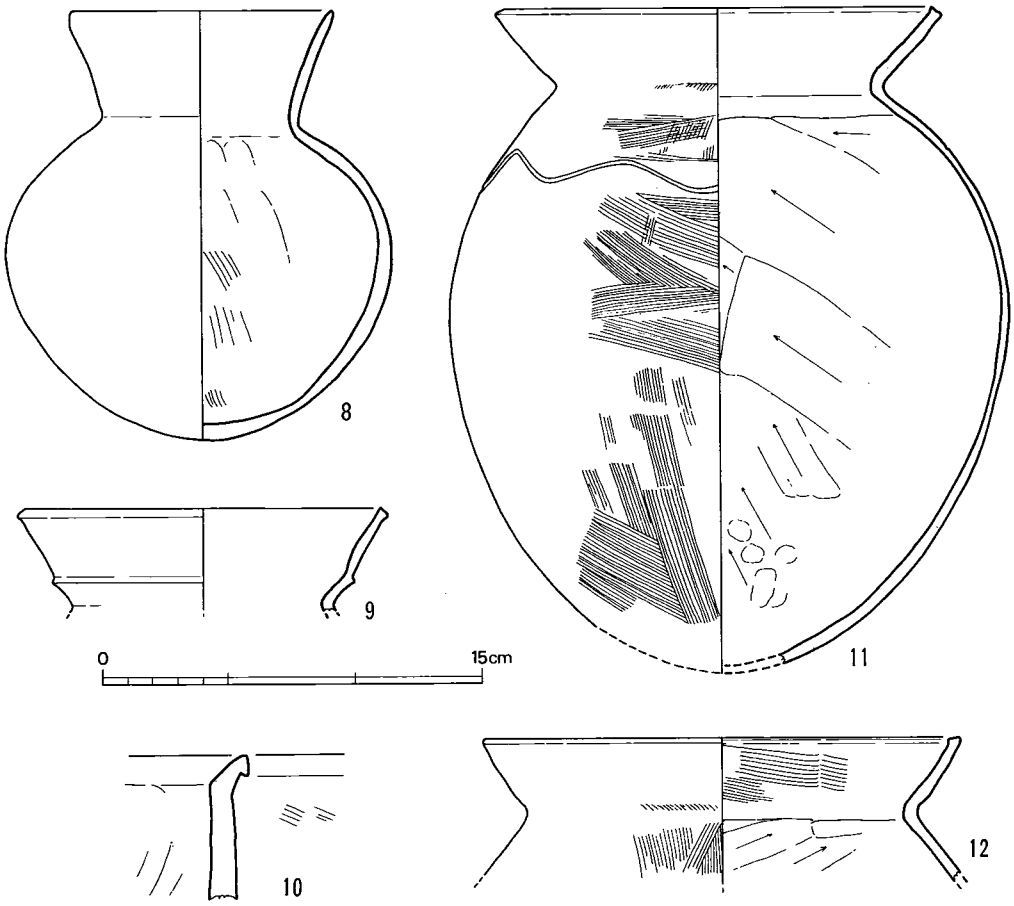
破片の下端部では外面に縦方向のハケ目が残り，内面はヘラケズリされている。2・3は，甕の口縁部破縁部破片で，口唇部は凹みぎみの面取りがある。

4は，器高の浅めな椀で器壁も薄いが，5は手捏ねで器壁が厚く，深い体部をもつ。

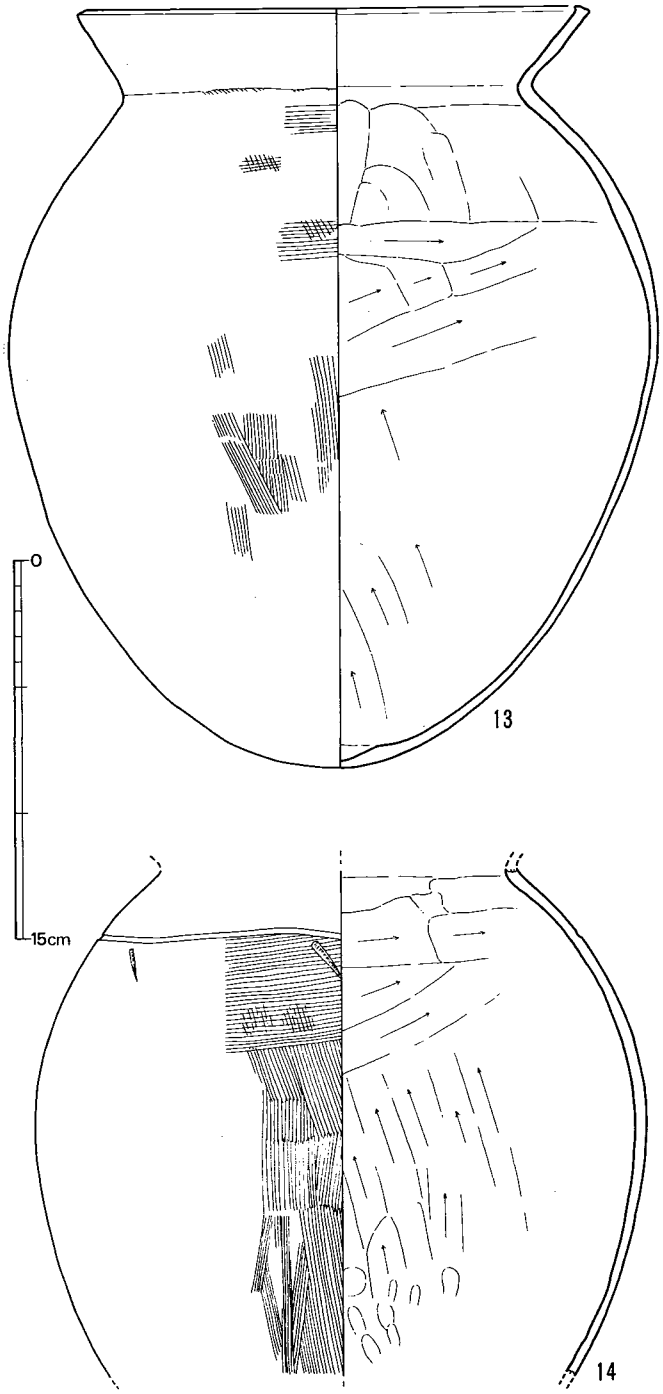
6は，低い脚台で，甕ないしは椀が乗るものと思われる。内外面はヨコナデ・ナデ調整され，裾端部外面にやや中凹みの面をもつ。

2号住居跡（図版74-3，第167図）

W305～307に位置し，3号住居跡によって南西側を切られるが，高さ25cmの東壁を残し，東西幅は4.3mを超すことはない。北側に床面より15cm高いベッド状遺構を設けており，ベッド状遺構の内側に周溝を掘っているが北溝と東溝とは断続している。床面は黄褐色の砂質粘土でやや堅緻。床面を掘り込んだ柱穴は，東壁から2.2m，ベッド状遺構から約1mの位置に1つ検出できたが，3号住北壁の下に相当し，深さ15cmを有す。炉跡は，後述する3号住居跡のカマドの真下に検出できたが，浅い皿状を呈して，焼土と木炭が埋まり，木炭はその南側にもうすい



第170図　2号住居跡出土土器実測図②（1/3）



第 171 図　2号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

堆積で広がる。

住居跡内からは，図版74-3のように3号住居跡と重複する側に集中して土器が出土した。

土　器（図版76，第169～171図）　7は大形壺で，口縁部と底部を欠失する。頸部に三角凸帯がめぐり，頸部の内外面はヨコナデ，胴部は内外面ともにハケ目が施され，外面の胴下半にはナデが加わる。また凸帯の下にはハケ原体による沈線状の文様がある。外面にススが付着しており甕としての機能を果たした可能性がある。

8は，完形の中形壺で，口径10.4cm，器高17.0cm，胴最大径は体部のやや上位にあり15.3cmを測る。口縁部は直線的に開き，底部は尖りぎみの丸底を呈す。体部内面に粗いハケ目がみられる。

9は，山陰系の二重口縁の破片で，3号住居跡カマド下にもぐる2号住居跡床面から出土した。

11・12・14の甕は，体部内面のヘラケズリが頸部のすぐ下まで及ぶ，器壁の薄いもの。口縁部は直線的に伸びて口唇端部の内面が摘み上げられる11の例と，やや内湾ぎみの傾向をもち，口唇端部内面の摘み上げが下がる12の例がある。体部は長めの倒

卵形を呈すが，縦方向のハケ目のあとに横方向のハケ目が加わる肩部に波状沈線がめぐる11，直線化した波状文とハケ目原体の木口圧痕を列点状にする14のような例がある。

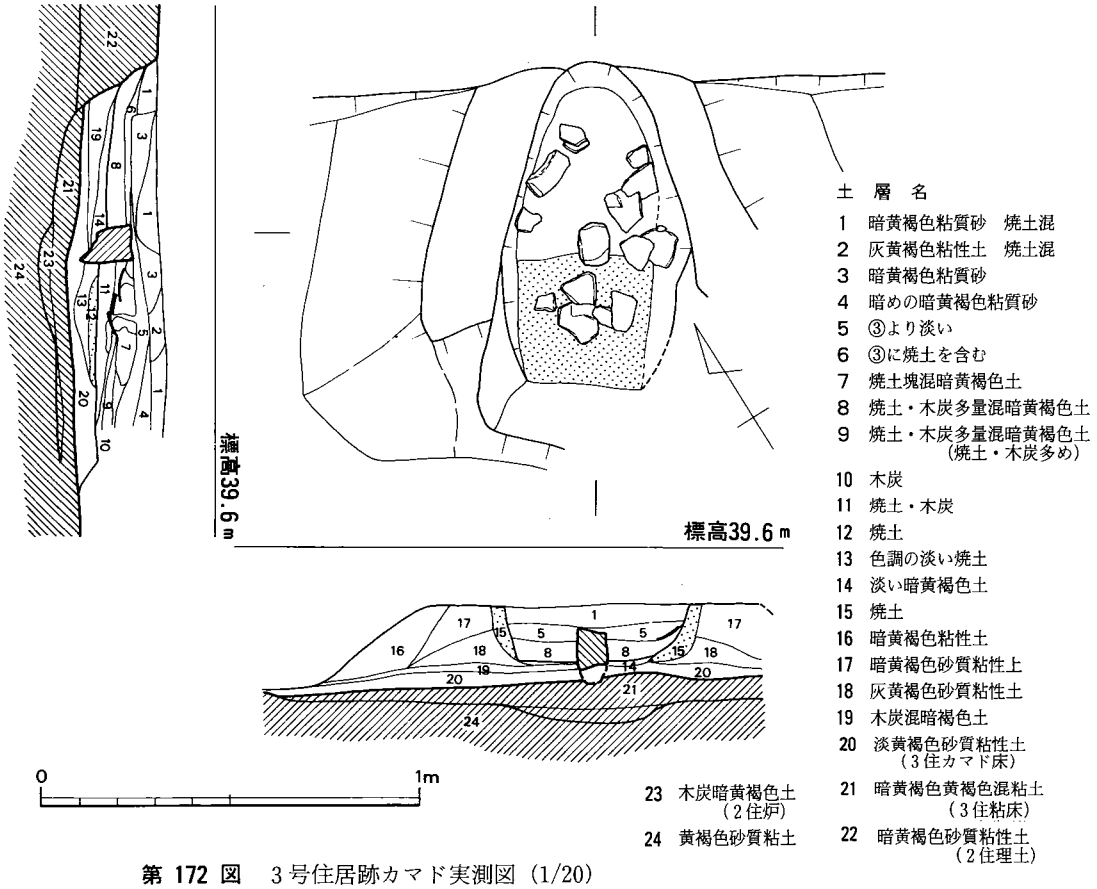
13は，11の甕に似るが，肩部内面と，胴下半にナデが加わり，内底面には指頭圧痕がある。

10は小破片で，器形は不明だが，短く外反する口縁をもち端部は外方に拡張ぎみな面をなす。

3号住居跡（図版74-3・75-1，第167・172図）

西壁と北壁が検出され，北壁の延長を求めて発掘区を拡張したところ，東壁の一部も検出できた。この結果，東西4.3m，南北3.6m以上を有す矩形プランの住居跡で，約20cmの壁高を有す，北壁の中ほど僅かに東に寄ってカマドが施設されているが，カマドの右袖部前面は調査区外に及ぶ。床面は黄色粘土で貼床されており，やや堅緻な状態であったが，西壁に沿った浅く広いピットは貼床の変色した部分であろう。この浅いピット内ある小さなピットは貼床の面では検出しえず，また他の部分でも床面を掘り込むピットは検出しえなかった。

カマドは，貼床の上に淡めの暗黄褐色砂質粘土に若干木炭を含む淡めの暗黄褐色土を挟んで両袖が構築されており，袖を構成する堆積土は明るめの暗黄褐色土，及び暗黄褐色土と，淡めの



第172図 3号住居跡カマド実測図（1/20）

暗茶褐色土がそれぞれ内側に高く積まれている。カマドの上面は住居跡周壁よりも僅かにはみ出て，長さ74cm，幅87cm以上を有し，裾部は前面に30～35cm，左右にそれぞれ30cm程度広がる。燃焼部は幅30～50cm，長さ約35cmで，燃焼部床面と両内壁は赤く焼けて堅緻な焼土塊と化している。この燃焼部から先は内壁・床面ともに焼けた痕跡がはっきりせず，燃焼部との境目に7～8cm四方の広さで約15cmの高さを有す花崗岩質の礫が裾えられている。この石は支脚の役割を果たしていたと思われるが，火を受けた痕跡は顕著でない。仮にこの石から先を煙道部とすれば，煙道部の長さは約50cmで先細りになるが，床面も傾斜をもつ。燃焼部・煙道部ともに床面の上には焼土混じりの暗茶褐色土が堆積するが，燃焼部では焼土・木炭の割合が大きい。なおこの面の上，支脚石の上面より約3cmほど下に，1個体分と思われる土器片が散乱しており，更にこの上に焼土ブロックが被る。この焼土ブロックは燃焼部天井の崩落したものであろう。

住居跡内では，カマドの前面左側に1個体分の土器が転倒した状態で出土し，北壁西端部の床面から鉄器1点と，同じく北壁に沿ったカマド裾部から杯1点が出土した。また鉄器の南側にも土器片が床面から若干浮いて手捏ね椀が出土したが脆くて図示しえない。この他住居跡中央部で床面からかなり浮いて土器片が出土したが，弥生土器の混入と思われる。

土　器（図版76，第173図）　15はカマド前面から出土した甕で，口縁端部を欠失するが，復原口径16cm，器高24.8cmを測る。球形体部に短く外反する口縁部が付き，体部外面ハケ目調整，内面は頸部までヘラケズリされるが器壁は厚い。

16は復原口径12cm，器高3.5cmの杯で内外面ともにヘラナデされている。

17・18はいずれも小破片だが，器台の受部であろう。口縁部の外湾する特徴は両者ともにみられるが，下半部が直線的な17と内湾する18との相違がある。18の下半外面に縦方向のヘラミガキ痕がみられる。17は西部の埋土から，18は東壁に接して出土し，2号住埋土との区別をしえなかった。

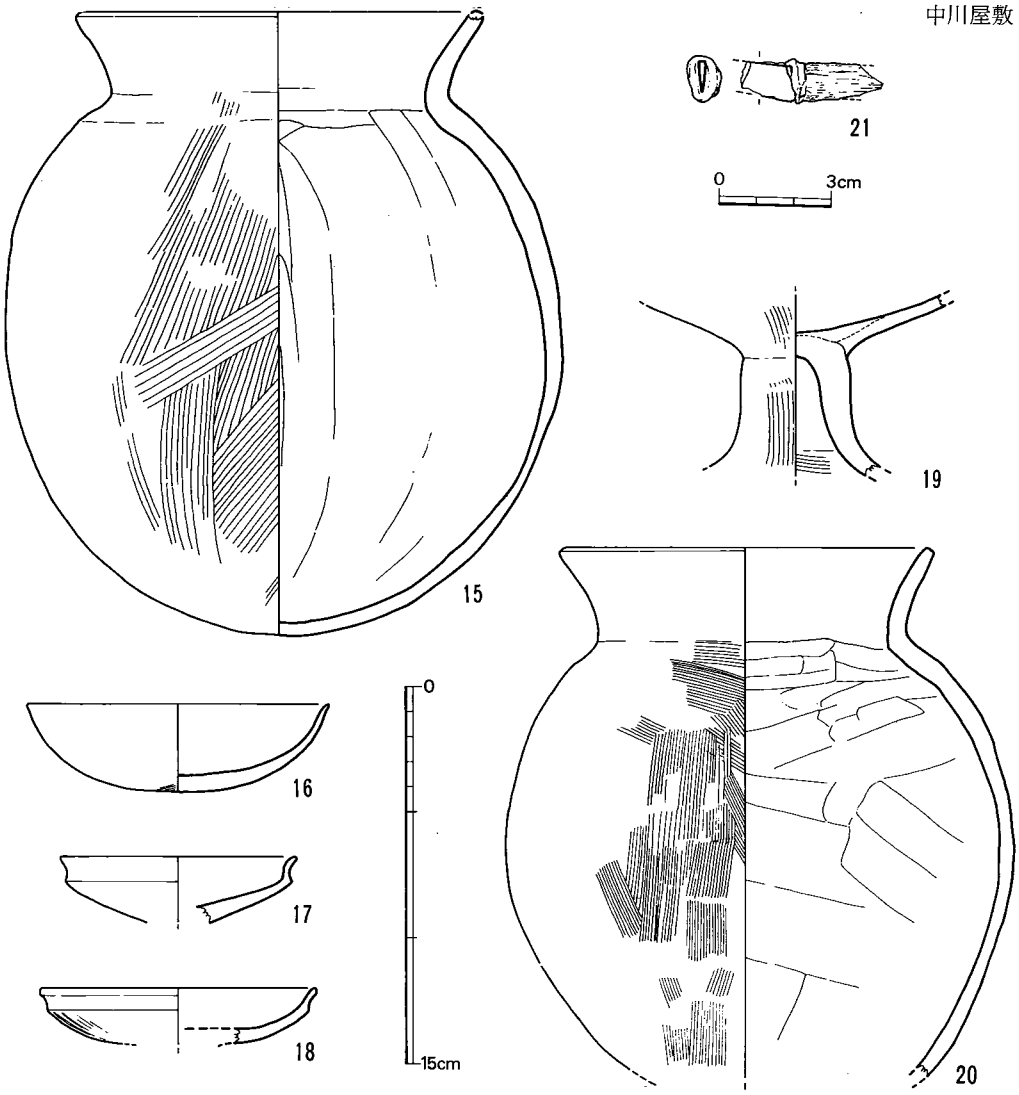
19の高杯は，カマド埋土の上部から出土した脚筒部と杯下半部のみの半欠資料で，短い脚筒部は外面ハケ目，内面ヘラケズリと裾部はハケ調整されており，杯底面に押入されるが，接合面の脚筒部上面にはキザミ目が施されて接合を容易にする工夫がみられる。

20は，カマド内出土の甕で底部を欠失するが口径15cm，現存高21cmを測る。球形体部の外面に縦方向のハケ目，内面をヘラケズリするが，器壁はさほど薄くなく，肩部外面に横方向のハケ目が加わる。条線の残るヨコナデ調整の口縁部は短く外反する。

鉄　器（図版76，第173図21）　刀子の破片で身の先端側を欠失する。鹿角製の柄が付き，茎部の長さは不明だが，刃部の現存長1.5cm，幅0.8cm，背の厚さ0.2cmを測る。

4号住居跡（図版75-2，第167図）

3号住居跡の西側と5号住居跡との間に位置し，5号住居跡を切るが，3号住居跡に切られる。東壁と西壁が約20cmの高さで残り，東西の幅は3.8m。黄色砂質粘土の床面はさほど堅緻でな

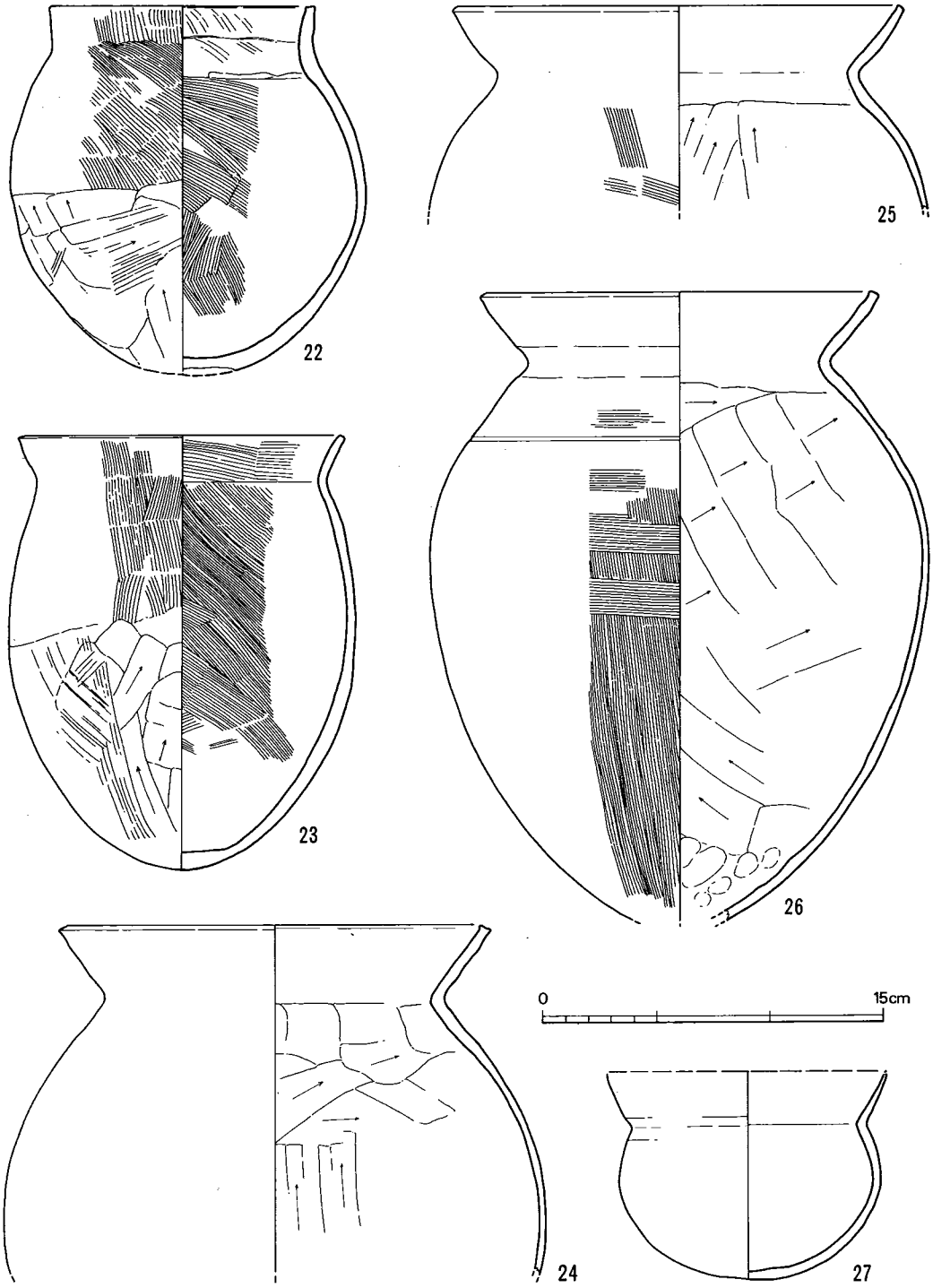


第 173 図　3号住居跡出土土器・鉄器実測図（土器は1/3，鉄器は1/2）

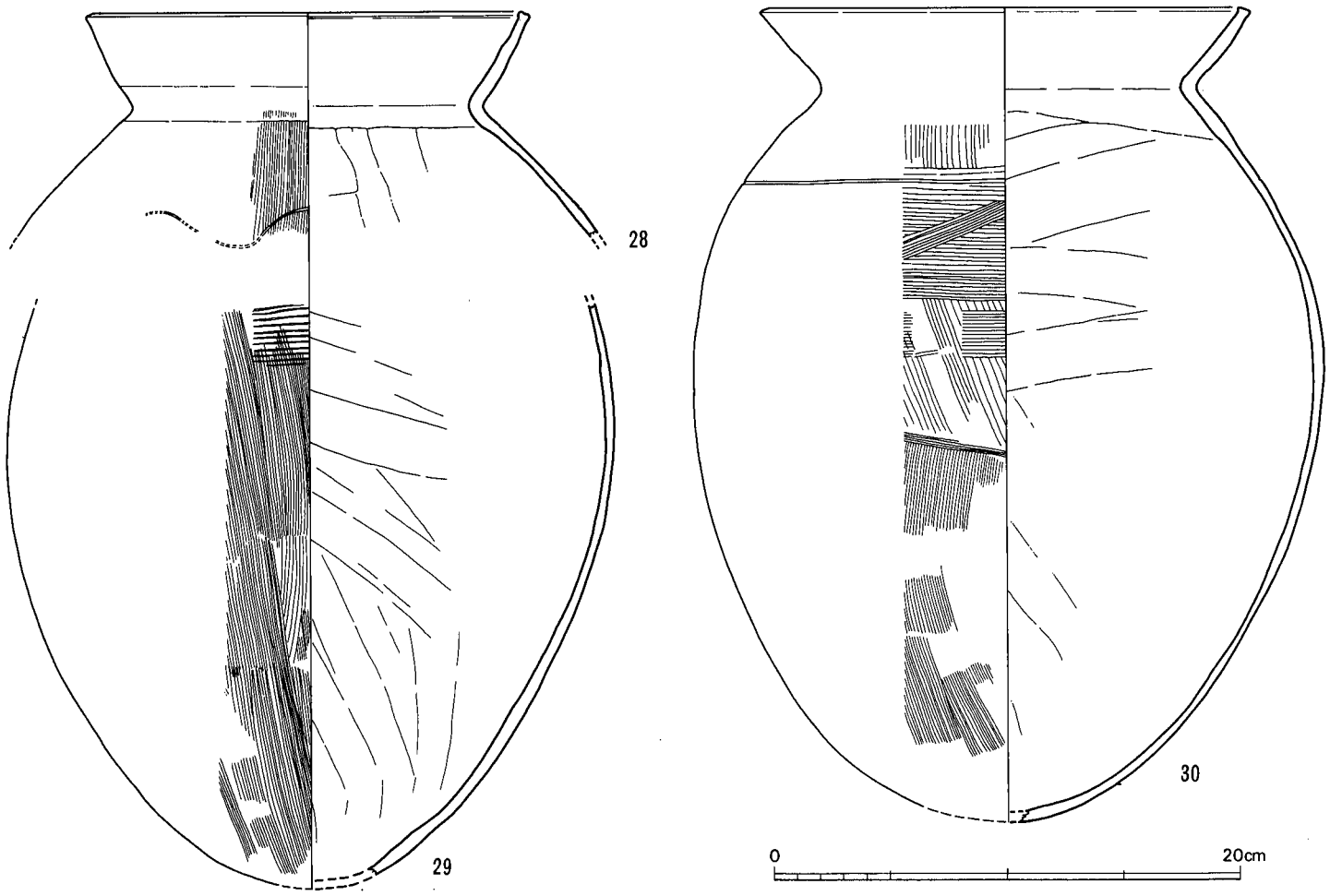
く，中央部に炉跡をもち，炉跡とその東側に木炭が広がる。炉跡は浅いU字形断面に凹み中央で12cmの深さを有す。床面を掘り込むピットは，東側の3例ともに深さ10cm以内と浅く広いもので，西側寄りの2つは18～20cmの深さを有し，主柱穴を構成するピットの可能性がある。

住居跡内からは，床面に接して2・3点の土器が出土し，他はすべて床面より浮いて出土したが，完形になる資料が多い。また同レベルに砥石1点も出土した。

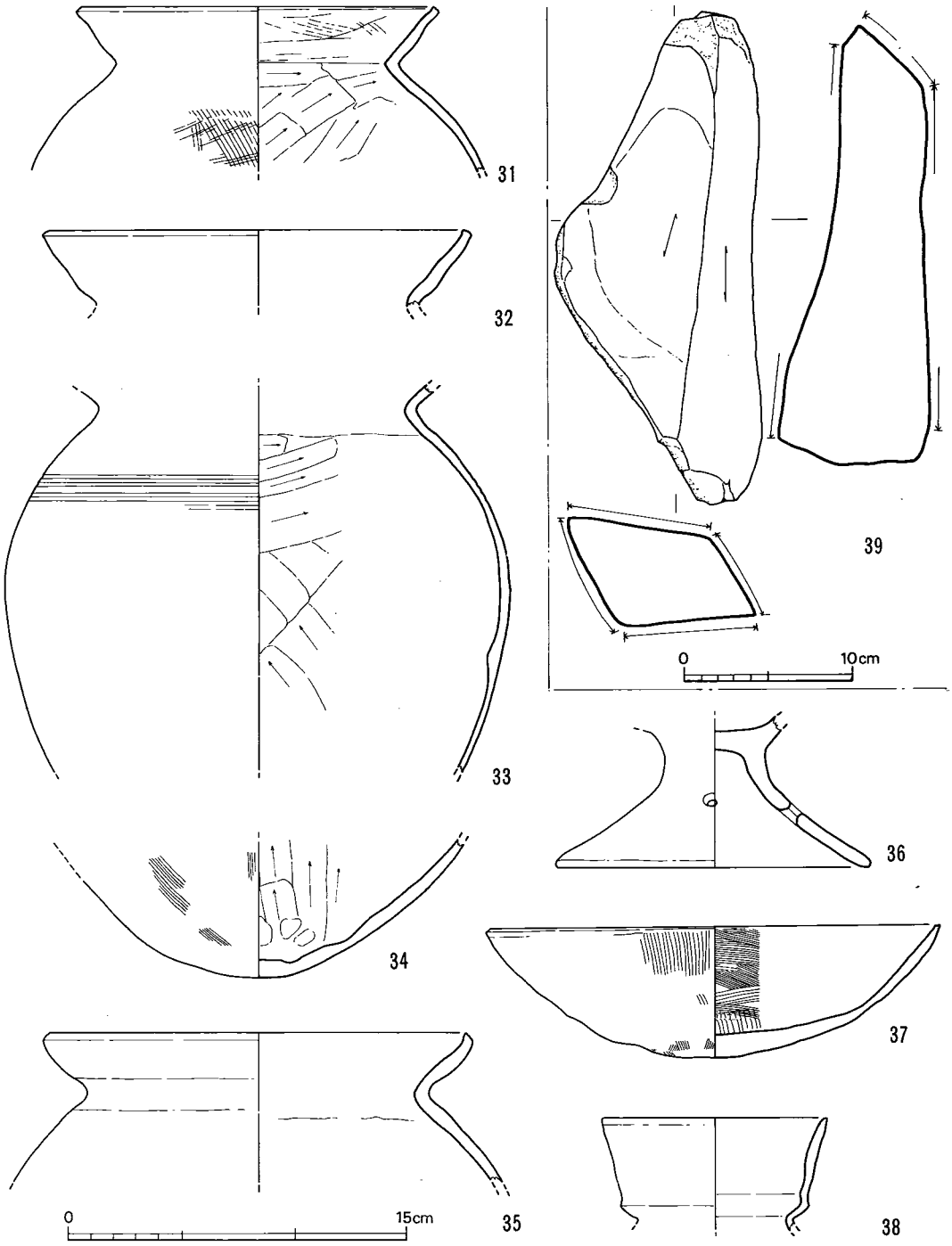
土　器（図版77，第174～176図）　22は剝落で底外面の一部を欠失するが，中形の完形壺で，口径11.7cm，器高16.4cm程度を有し，球形体部に短い直口縁がつく。内外面ともにハケ目調整されるが，底部内面ナデ，外面の胴下半をヘラケズリされる。



第 174 図　4 号住居跡出土土器実測図①（1/3）



第 175 図　4 号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第 176 図　4号住居跡出土土器・石器実測図（土器は1/3，石器は1/4）

27はミガキ調整された器壁の薄い丸底壺で，口縁端部を欠失するが，胴最大径11.6cm，体部高6.8cmの扁球形体部に内湾ぎみに外反する短い口縁がつく。

23の甕も22と同様の調整が施されており，口径14.4cm，器高19.2cmも測る長胴の完形品。鈍めの屈折をする「く」の字口縁をもつ。

24～26・28～35は，器壁の薄い体部をもつ甕で，いずれも，外面の胴部を縦方向のハケ目，肩部を横方向のハケ目調整，内面を頸部のやや下までヘラケズリする。体部の残る例からみて長めの倒卵形を呈す例が多く，外反して直線的に伸びる口縁部はヨコナデされ，端部は面取りされて，内面が僅かに凹む。肩部に1条の直沈線をめぐる例(26・30)，波状沈線のめぐる例(28)，ハケ目の1単位が直線で深めにめぐり直線の櫛描き文になる例(33)などの文様例がある。

なお，内面のヘラケズリが頸部まで達して，内面に鋭い稜をもつ31は，頸部直下まで及ぶ28同様に口唇端部の内面が摘み上げられて低く尖がる。また35は埋土の上層から出土しており，口縁部が内湾ぎみに伸びる。

36は脚台部破片で，ごく短い脚筒部と緩やかに広がる裾部をもち，裾部上位に4孔が穿たれる。図化のため器面調整不詳。

37は低平な椀で，口径20.1cm，器高5.9cmを測る。内外面ともにハケ目調整，外面の下半はヘラケズリされる。床面から4cm浮いた位置から出土した。

38は埋土上層出土の口縁部破片で，二重口縁をなすが口径が10cmと小さく，小形壺であろう。

石　器(図版77，第176図39)　床面より約10cm浮いて出土した細粒砂岩製砥石で，全長29.4cmを有す。平坦な4面を砥面としているが，図示した面が顕著に使用されており，裏面は2ヵ所の溝状に凹む部分がある。

5号住居跡(図版74-2，第167図)

北トレンチの西端部に西壁が5cm前後の高さで検出され，焼土を伴う黄色砂質粘土の床面をもつが，約1m幅を残して東側は4号住居跡によって切られる。床面を掘り込むピットは，西壁検出時に既にプランが検出されていたのでこの住居跡より新しいものと思われる。

住居跡内からは，若干の土器片が出土したが最も新しいと思われる破片に外面にハケ目，内面にヘラケズリのみられる例があり，古式土師器に含まれよう。

6号住居跡(図版78，第167図)

南トレンチの中央部西寄りに、西のコーナーがあり，西北壁と南西壁が3.3m・1mの長さで検出されたが，トレンチ東端までの間に対応する周壁が検出されず，長さ7m以上のプランを有していた可能性がある。トレンチの東部には南北1.6m以上，幅50～70cmの土壙と，直径80cmの垂直壁面をもつ深いピットがあり，住居跡よりも後出する。この新しい遺構の壁面などには貼床等の堆積がみられず，むしろ下部の7号住居跡の床面が顕著に観察出来て，遺物の出土も少なかった。東部を不用意に深く掘りすぎて，7号住居跡周壁を後になって検出する結果となっ

たが，西部では，壁の高さ約10cmを有し，床面はさほど堅緻ではない。中央部に焼土があり炉跡と思われる。床面を掘り込む柱穴は検出しえなかったが，７号住居跡内の西側にあるピット出土土器と６号住居跡出土の土器が接合することからこのピットは伴うとみられる。

住居跡内からは炉跡から西側に土器の出土がみられ，東側は皆無に近い状態であった。なお，甕２個体分は，住居跡プラン検出時以前に見つかっており，土器の下面が床面より15cmも浮いていた。

土　器(図版79，第177図)　40は，炉跡の付近の２カ所と７号住居跡内西側のピット内から出土した土器とが接合して１個体となった甕で，「く」の字形口縁を有し，尖がりぎみの丸底をもつ長胴のもの。口径20.4cm，器高32.3cm，胴最大径24.2cmを測る。外面はタタキ整形のあとハケ目調整するが胴上半にタタキ痕が残り，下半にヘラナデが加わる。内面はハケ目調整で下半はナデられる。口唇端部は内外面・上面ともに凹みぎみにまとまる。

41は炉跡の南側から出土し，42は北西壁沿い出土の個体で，東部の土壙内出土の破片が接合している。２点とも倒卵形体部を有し，外面は縦方向のハケ目のあと肩部に横方向ハケ目を施し，内面は頸部のやや下までヘラケズリして器壁を薄くしている。ヨコナデされる口縁部は直線的に外反し，端部の内側が描み上げられて低く尖がる。肩部に波状文がめぐらされるが，41は櫛描き文，42は１条の途切れぎみの沈線で描かれる。

43・44は，上部から出土した甕で，長胴の倒卵形体部にレンズ状の丸底に近い底がつく。器面調整は41・42と同様だが，口縁部は内湾ぎみに外反しており，端部も面取りされたような形状になっている。肩部の沈線は僅かに波打つものの直線化している。

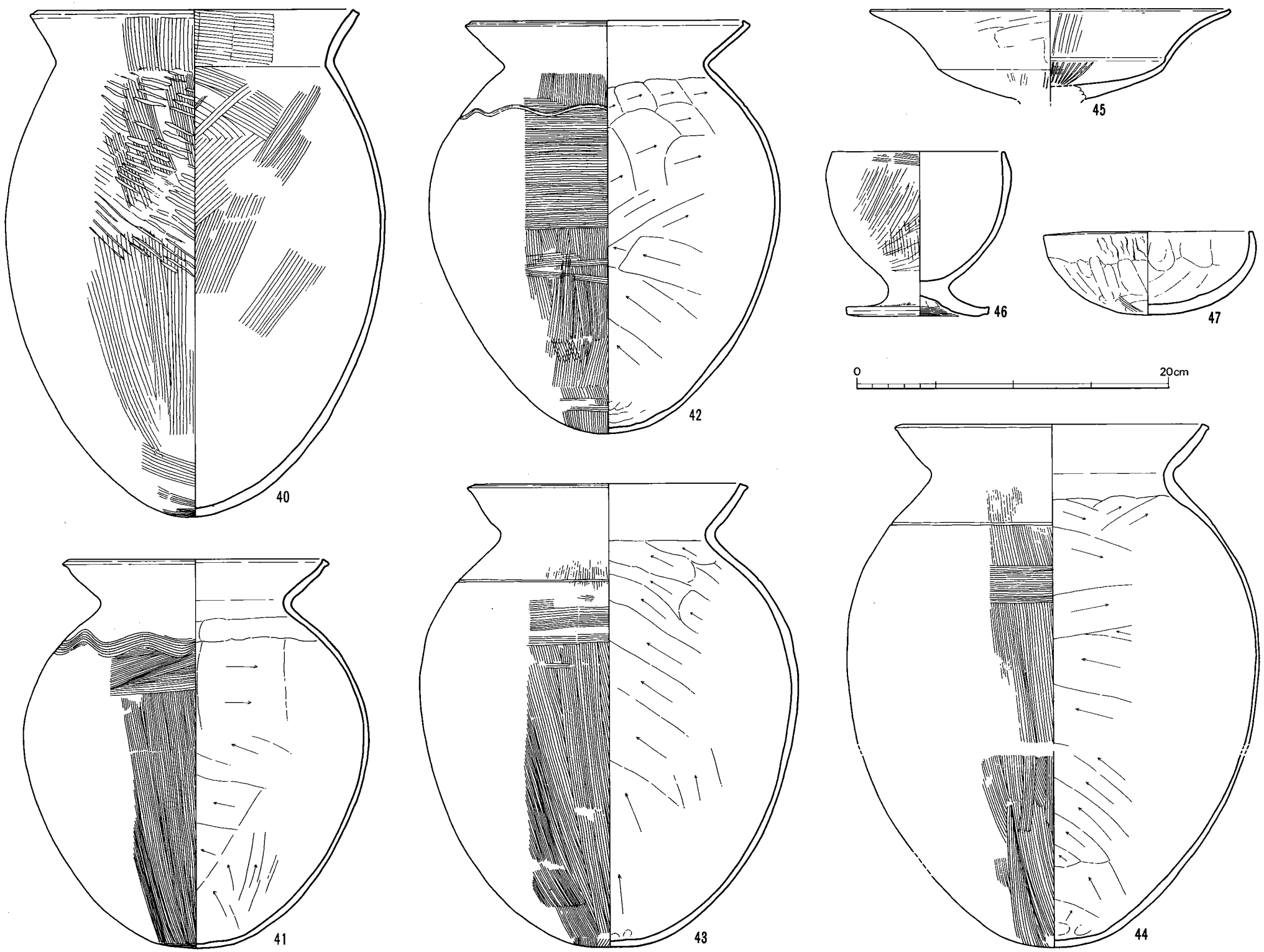
45の高杯は，42・47と接して出土したが，杯下半部が内湾ぎみに伸び，上半部が外湾して広がる器形で端部は内側にやや凹む。外面はヘラミガキと思われるが荒れており，内面には放射状の暗文となっている。

46は，７号住居跡南壁にひっかかって出土した台付椀で，深い体部に低く外反する脚台がつく。脚裾端部は凹みぎみに面取りされる。体部は内面ナデ，外面ハケ目のあとミガキが加わり裾部外面ヨコナデ，内面ハケ目調整されている。

47は，口径13.3cm，器高5.3cmの椀で，指押さえとヘラナデで仕上げられる。

７号住居跡(図版78-1，第167図)

６号住居跡の床面よりも低い床面と，西壁・南壁が検出できたので，７号住居跡として区別したが，全体に焼土と木炭が広がっており，火災を受けた住居跡かと思われたが，土器の出土は極めて少なく，単に火災を受けたとはしがたい。また，南壁の一部にテラス状の部分をもち，そのまま６号住居跡の炉跡につづくことも不可思議である。西壁約１m，南壁約２mが検出され，矩形プランを呈すと思われるが，東西６m以上を有すことになる。壁は緩傾斜で約15cmの高さをもつ。床面を掘り込むピットは，東側に３つありいずれも10cm前後の深さをもつ。西側



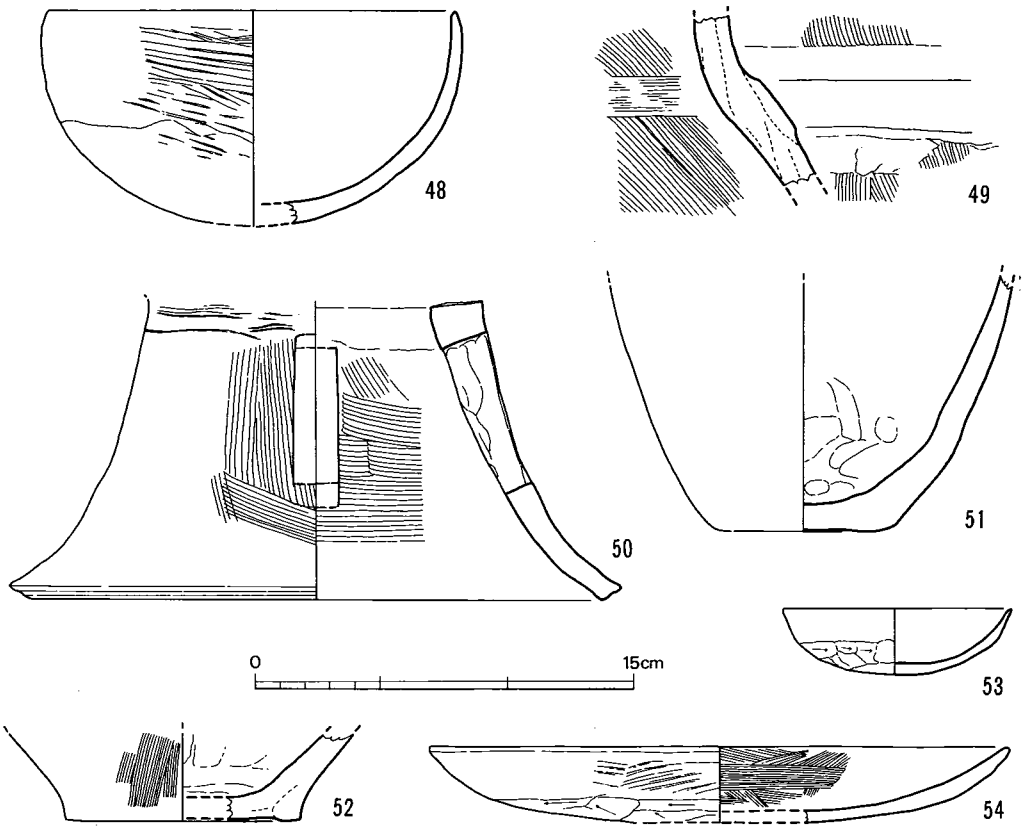
第 177 図　中川屋敷 I-12　6 号住居跡出土土器実測図 (1/3)

の一つは16cmの深さを有すが前述の如く6号住に伴う可能性がある。住居跡内からの遺物出土は皆無に近い。なお上部に重複しこの住居跡床面よりも深いピットから大形土器の破片と，椀の破片などが出土した。

土　器(第178図50・51)　50は，唯一東端部の床面よりやや浮いた位置出土の破片で，透かし窓をもつ脚台の裾部約4分の1の破片。復原裾部径24cmで，上端部の径は13.2cmを測る。透かし窓は上下6.2cmを有し幅は1.8cm程度であろう。裾部に向かって緩やかに開くが端部は内外面ともに凹みぎみにまとまり踏ん張る形をももつ。上端部は内面ナデ，外面ヨコナデされ，上面の体部との接合面にはキザミが入れられ接合を容易にする工夫がとられる。脚台の規模からして，体部はかなり大形のものであろう。

51は埋土の上部から出土しているが，平底の底部破片で，内面はナデ調整・外面はヘラナデ調整される。

南トレンチ出土その他の土器(第178図)　48・49は東端部の新しい深いピットから出土しており，6・7号住居跡より後出する可能性もある。48は口径と器高の比が約2：1の椀で，内面はヘラナデ調整，外面はタタキ整形のあと板状工具によるナデを加え，下半はナデ消している。



第 178 図　7号住居跡他出土土器実測図 (1/3)

49は，大形壺の頸部付近の破片であろうか，内外面ともにハケ目が施され低平な梯形凸帯が貼り付けられ，凸帯部分はヨコナデされる。

52は6号住居跡内から出土したが混入であろう。平底の底部破片で外面をハケ目，内面をナデ調整している。

53・54は，西端部から出土した。西端部は当初，6号住居跡より古い住居跡が存在すると考えられたが，西壁に相当する部分はそれほど明確でなく，トレンチ西端のピットの南側部分に若干木炭と焼土の散乱する部分があり遺構としてまとまらなかったが，この部分の上面から出土した。

53は完形品で，口径9.1cm，器高2.6cmの低平な椀でむしろ皿といった表現が妥当である。底部外面はヘラケズリされ，他はナデ調整，54は小破片からの復原で，口径についてはやや不確実なところがあるもののかなり低平な皿状になろう。外面の一部にタタキ痕に似た痕跡がみられ底部はヘラケズリされる。内面は全体にハケ目調整されている。

3．小　結

Ⅰ-12に検出された住居跡は，いずれも須恵器を伴わない土師器のみの段階である。

住居跡の重複関係からは，少なくとも3時期を想定できるが，5号住居跡と，7号住居跡に遺物出土の少ないこと，6号住居跡と7号住居跡の間に明確な貼床等の施設がみられずに，堆積土が同様で単に7号住居跡側が火を受けて床が低いという区別のみである点に疑問が残る。

各住居跡出土土器では，甕形土器の形状からみて，6号住居跡の例が他のものより先行するもので，庄内式土器の新しい段階を考えたい。また1・2・4号住居跡の例では，4号住居跡出土土器より2号住居跡出土土器の方にやや古式の様相がみられる。3軒の住居跡が約1.5m間隔に位置し，ほぼ同様な方向を向いた壁を有すことから時期的に近接するものと思えるが，敢えて近接しすぎていることを問題にするならば，2号住居跡出土土器にみられる古式の様相をとり上げるべきであろう。いずれにしても4号住居跡出土土器は布留式土器併行期でも古段階に相当しよう。

3号住居跡は，鹿角装刀子をもち，カマドを施設する住居跡だが，カマド内に裾えられていたとみられる土器が問題となろう。『三雲遺跡』報告Ⅰの加賀石Ⅰ-8の2号住居跡出土土器に近く，加賀石Ⅰ-23の1号住居跡，下西Ⅱ-10の住居跡状遺構上層出土土器(『三雲遺跡』Ⅲ)よりも，後出する可能性が高い。下西Ⅱ-10の例では，底部に4孔を穿った甑を伴っているが，多孔を有す甑の出現は熱効率のよいカマドの出現に対比できよう。本例では甑を未検出ではあるが，多孔の甑を伴うとみたい。下西Ⅱ-10例よりも若干後出する5世紀前半頃を考えておきたい。

(小池)

第4節　堺地区の調査

1. はじめに

堺地区は，細石神社の南側に隣接し，その参道の南側全地域があたる。地元では，この地区をかつて区画整理をしたことを意味する「セイリ」と呼んでいる。この区画整理は，明治43年に行われたものであるが，この際多くの石棺墓などが破壊されたようで，「剣」などが発見されたとも聞く。今回の調査によっても，墓地群が主体を占めるのが明らかとなった。

堺地区の調査は，昭和49年度にⅠ-7・13，昭和50年度にⅠ-2，昭和51年度にⅠ-3・4，昭和53年にⅠ-6～8，Ⅱ-27，Ⅱ-30～32地区を実施した。

Ⅰ-7・13の調査は，調査初年度の試掘であったが，こちらの希望する地点は試掘できずに，2地点の2トレンチのみの試掘となった。Ⅰ-7の北端は整地層が厚く，地表より1.5mで遺構面に達したが，拡張できずに遺構の性格も不明。Ⅰ-13は，古墳期の甕棺1基を検出した。

Ⅰ-2～4地区の調査は，個人の住宅建設に伴う緊急的な調査で，住居の敷地面積のみの試掘的なものであった。この地区でも石棺墓4基が発見されたが，遺構の主体は住居跡であった。堺地区での集落はこの地区だけである。

Ⅰ-6～8地区の調査は，昭和53年度圃場整備に伴う道路新設によるもので，道路幅のみのトレンチ調査であった。この地区は，石棺墓の発見が伝えられていただけに，初年度に試掘希望したところである。調査の結果は，石棺墓2基と甕棺墓1基であった。

Ⅱ-27地区の調査は，圃場整備の表土剝ぎによって1基のみ露出した甕棺墓を調査した。

Ⅱ-30～32地区も，当初調査予定には含まれず，圃場整備によっても削平しない地区であったが，実際は圃場整備によって数基の甕棺墓が破壊された。工事が完了近くに気づき，再盛土されていたために，周辺地区の未盛土部分を変則的な調査区設定となった。

Ⅰ-2～4地区の調査は，柳田康雄・宮崎貴夫が担当し，立石雅文(旧姓小田)・丸山康晴・川村博が参加した。

Ⅰ-6～13の調査は，柳田・副島邦弘・池辺元明が担当し，三津井知廣・小林美孝・諫山佳明・新開誉之が参加した。

Ⅱ-27・30～32は，柳田・副島・池辺・小池史哲が担当し，諫山・岡部正巳・樗木弘明・新開が参加した。

2. Ⅰ-2・3

堺Ⅰ-2～4地区の調査は，発掘届の物件別の調査であったことから，各地区別の仮遺構番号を付して調査記録したが，これらの3地区は隣接している上に遺構の性格も同じであるから，調査年次順ではなくⅠ-3，Ⅰ-2，Ⅰ-4の順に遺構番号を付けて整理した。したがって『井原・三雲遺跡 発掘調査概報』(昭和50年度)や現地説明会資料に使用した遺構番号とは違っている。(柳田)

(1) 石棺墓

1号石棺墓(図版81，第181図)

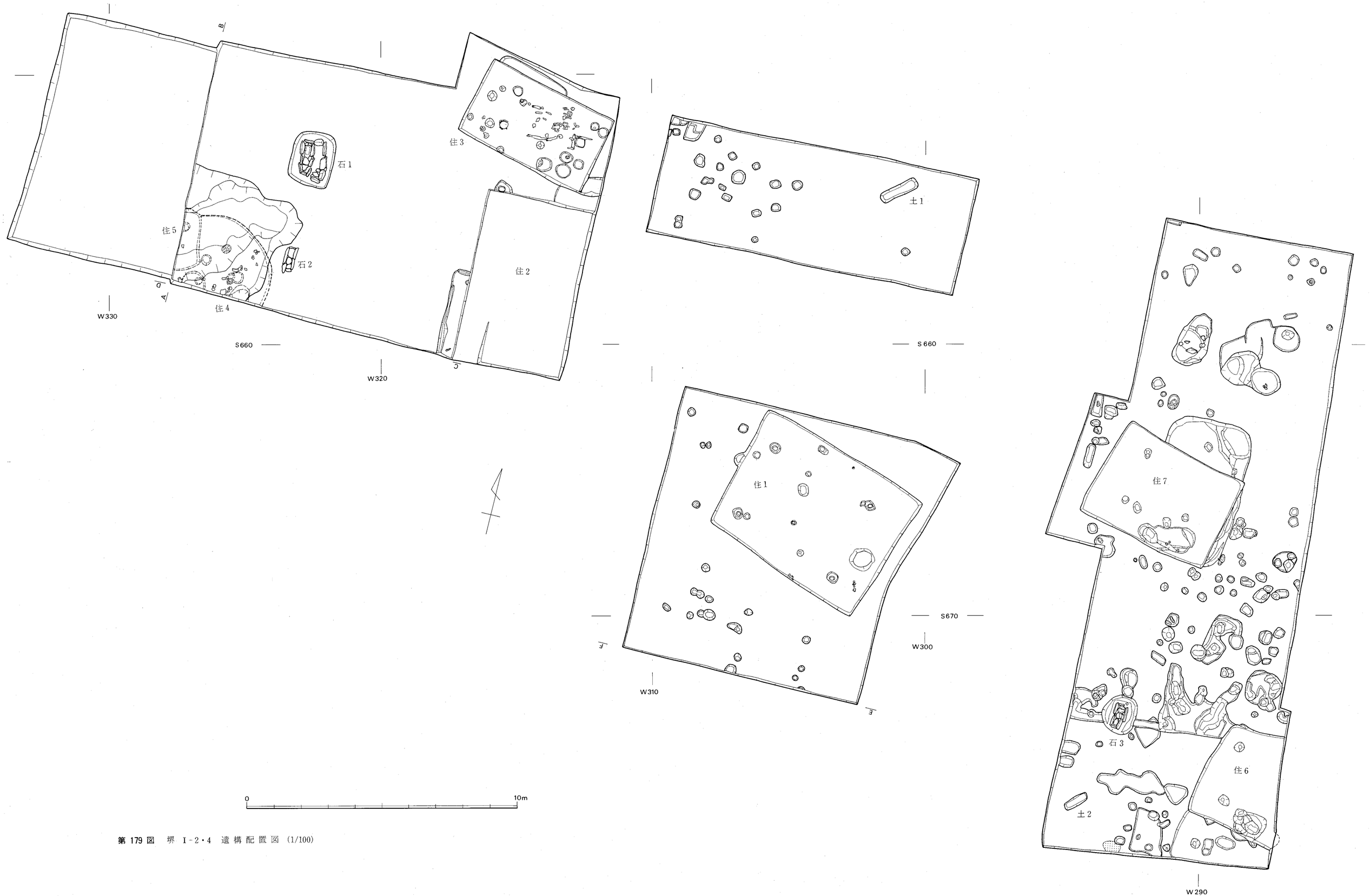
1号石棺は，1つの墓壙内に2基の石棺か南北方向の側石3枚のうち2枚を共有して組み合わさった特異な形態で，平列石棺とでも呼ぶべきものである。墓壙は，長さ203cm，幅160cmの隅丸長方形プランを呈する。棺材は，蓋石に2枚の花崗岩をもちいているほかは，すべて付近の手ごろな石を集め利用した感が強い。石のならびは不揃いで，粗雑な組み合わせである。

西側棺は，主軸方位N 5°Wに埋置されている。棺の内法は，長さ110cm，幅20cm，深さ15cmを測る。棺底には床石を6枚配し，丹が散布する。丹は北側小口付近が濃く分布し，また小口の石も北側が大きいところから，頭位方向は北向きと思われる。

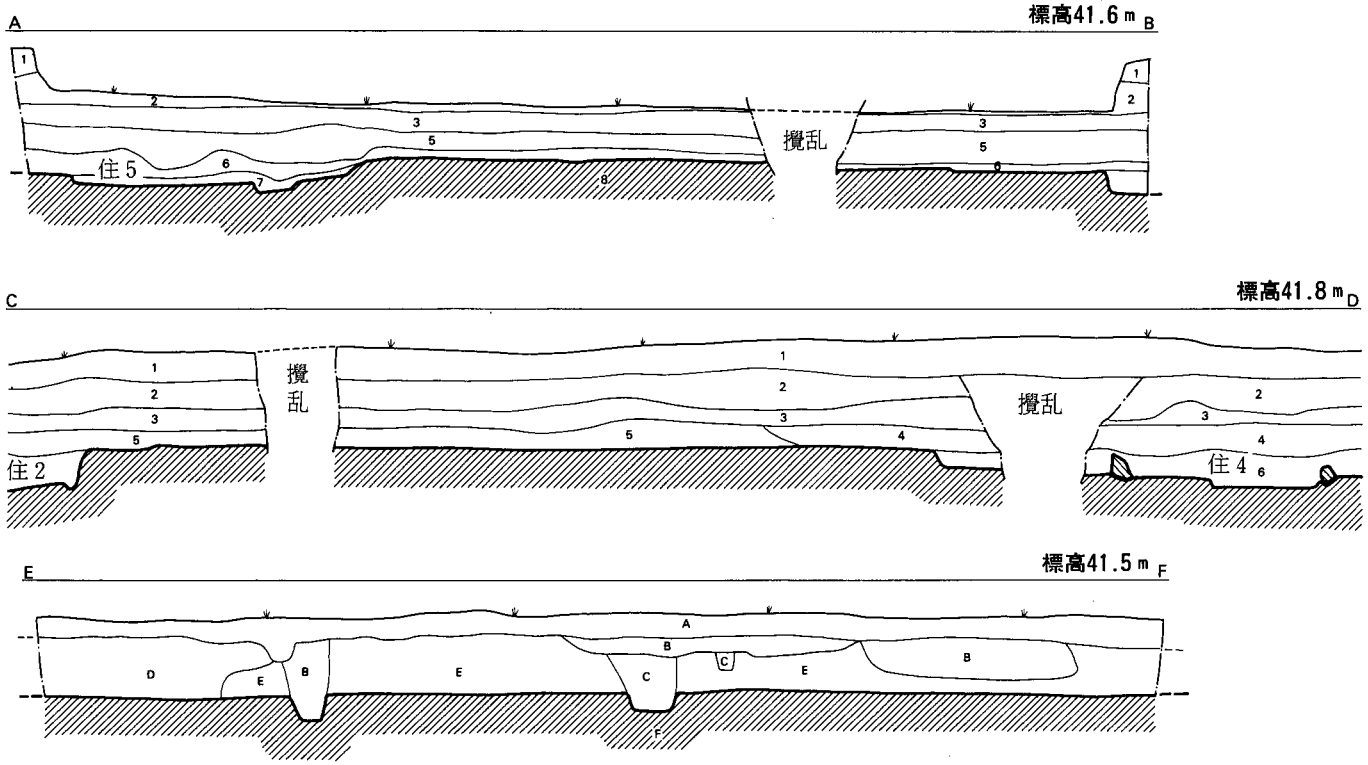
東側棺は，主軸方位N 8°Wに埋置されている。棺の内法は，長さ120cm，幅は北側小口が32cm，南側小口が23cm，深さ20cmを測る。棺底には部分的に黄褐色粘土が認められ，南側小口付近には2枚の床石が敷かれ，その上に丹が若干散布していた。この状況は，棺身の幅は南側がせばまるが，むしろ頭位方向は南を指すものと思われ，西側棺とは頭位方向が逆であることが判る。

蓋石は西側棺が4枚，東側棺が5枚使用され，東側の蓋が西側のそれに一部載る状態であった。また石棺の組み合わせ，墓壙内の土壙の状況から判断するならば，東側棺の構築が後になされたことが考えられる。しかし，同一墓壙で側石を共有する事実は，両者の構築は時間的にさほどの隔たりをもたず行われたことが推察されてこよう。棺内及び墓壙から数片の土器の出土をみただけであるが，墓壙の北東隅から約1m離れた所に高杯・椀が倒置したような状態で出土した。付近には遺構らしきものはなく，これを石棺と関連づけることができるならば，1号石棺は弥生時代終末の時期が与えられよう。(宮崎)

土　器(図版82-1，第182図)　1・3は石棺の北東側に共伴し，2は西側から出土した。1は口径11cm，高さ9.6cmの大きさで，口縁は外反し，胴下半はケズリのままである。器壁の薄さは外面ケズリによるもので，内面はナデ調整が行われている。2は口径11cm，高さ6.5cmの大きさの小鉢で，口縁はあまり外湾しない。内面はハケの後ナデ，外面はタテミガキ状のナデ調整が行われている。



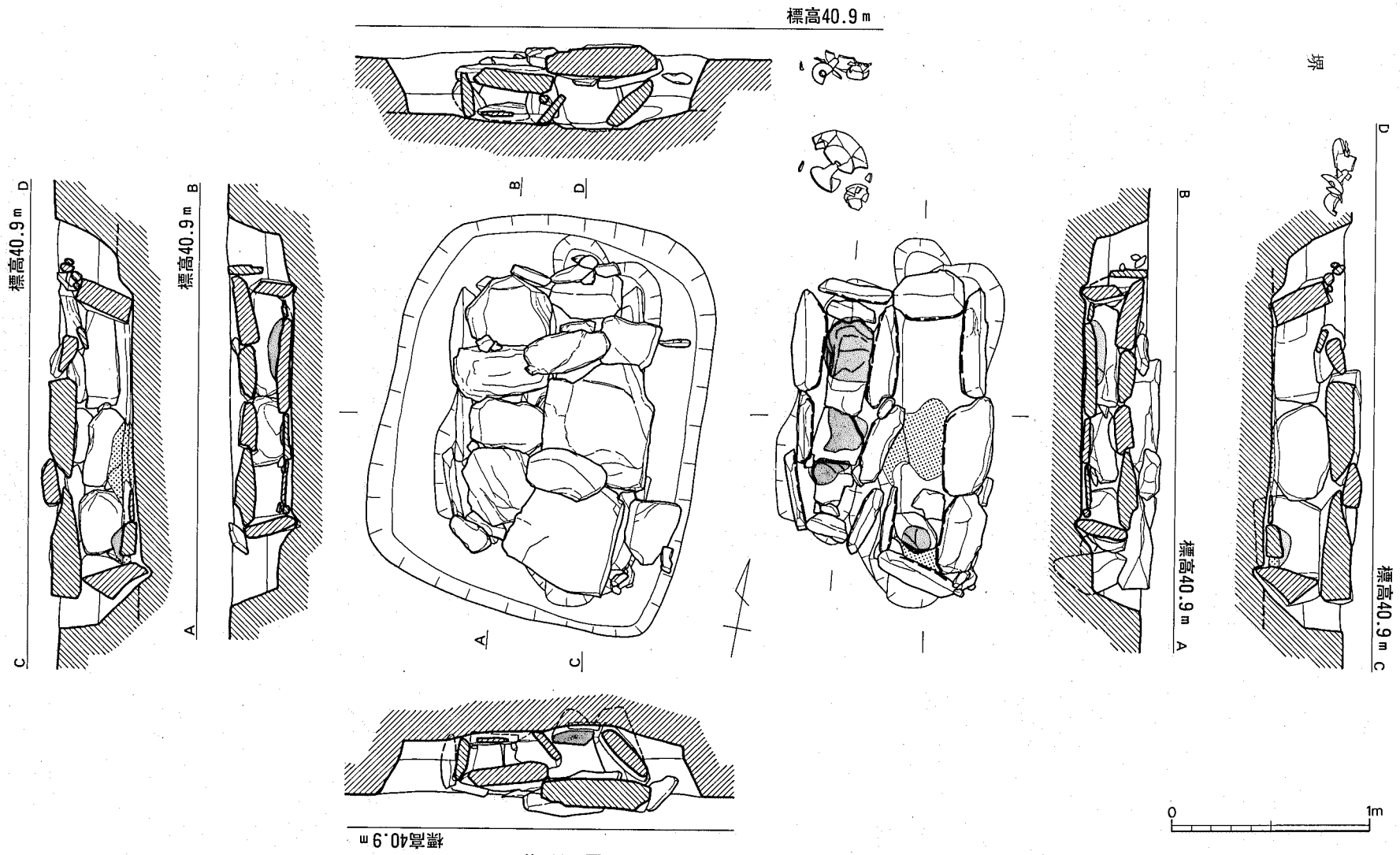
第 179 図　堺 Ⅰ-2・4 遺構配置図 (1/100)



1 灰色砂質土
2 灰茶褐色砂質土
3 灰褐色砂質土
4 暗褐色粘性砂質土
5 暗褐色粘性砂質土（黄褐色粘性砂質ブロック混り）
6 褐色粘性砂質土
7 黄褐色粘性砂質土（褐色粘性砂質土混り）
8 黄褐色粘性砂質土

A 耕作土
B 茶黒褐色砂質土
C 茶褐色砂質土
D 暗黄茶褐色砂質土
E 明黄茶褐色砂質土
F 黄褐色砂質土

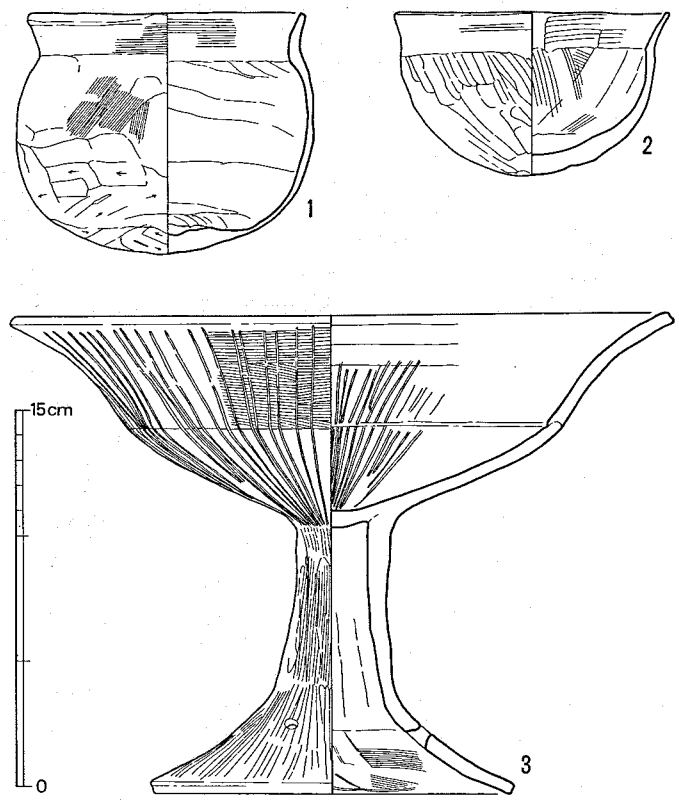
第 180 図　Ⅰ-2・4 土 層 実 測 図 (1/60)



第 181 図　1 号 石 棺 墓 実 測 図　(1/30)

3は，口径26.3cm，高さ19cm，裾径14.4cm，杯部深さ7.7cmの大きさの高杯。杯部の外反は下の受部の長さより多少短く，先端は角のある平坦部を有する。杯部内外面は，極細ヨコハケ目の後にタテのヘラ描き暗文を施し，脚部外面は暗文風タテミガキ。脚内側は，柱状部がタテナデ，裾部が極細ハケヨコナデ調整である。胎土は，細砂を含むが精良で赤褐色をしている。

1号石棺墓棺外供献土器は，高杯の特徴が示すように，土師器Ia式に属するが，杯部が深くなるところは新しい要素ともいえる。



第 182 図　1号石棺墓供献土器実測図（1/3）

2号石棺墓

(図版82-2・3，第183図)

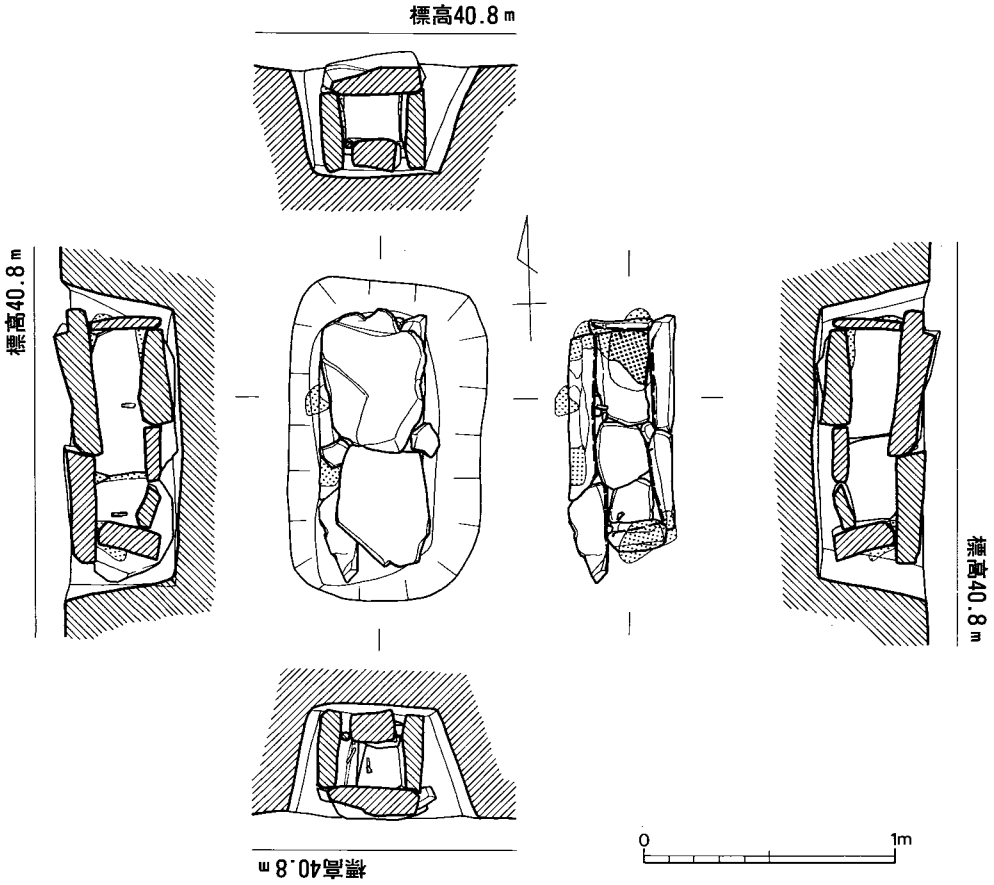
1号石棺墓の南2mの位置で検出され，古墳時代の溝状遺構によって墓壙の一部をわずかに切られていた小児用箱式石棺墓である。

石棺は，長さ1.27m，幅77cm，深さ45cmを測る隅丸長方形プランを呈する墓壙に構築され，石材はすべて花崗岩の板石を利用し，つくりは割と端整である。棺身は両側壁に各2枚を並べ，小口に各1枚，棺床は3枚である。石の間隙は丁寧に黄褐色粘土による目貼りが施されている。蓋石は2枚で，両蓋石の間にこぶし大の石を対に補足している。

棺の内法は，長さ79cm，幅20cm，深さ20cmを測る。主軸方位はN2°Wを示し，北側小口付近に丹の散布が認められるところから，頭位は北方向と思われる。

棺内から鉇が，西側壁中央付近と南側小口付近に3つに分離して出土している。　(立石)

鉄　鉇（図版88，第190図7）　柄部がU字形断面を呈す鉇で，基部を欠くが現存長14.2cm，幅は先端側に広くなり9～10mm。鏑をもつ先端部には，両側縁に鋭利な刃が付く。　(小池)



第 183 図　2号石棺墓実測図（1/30）

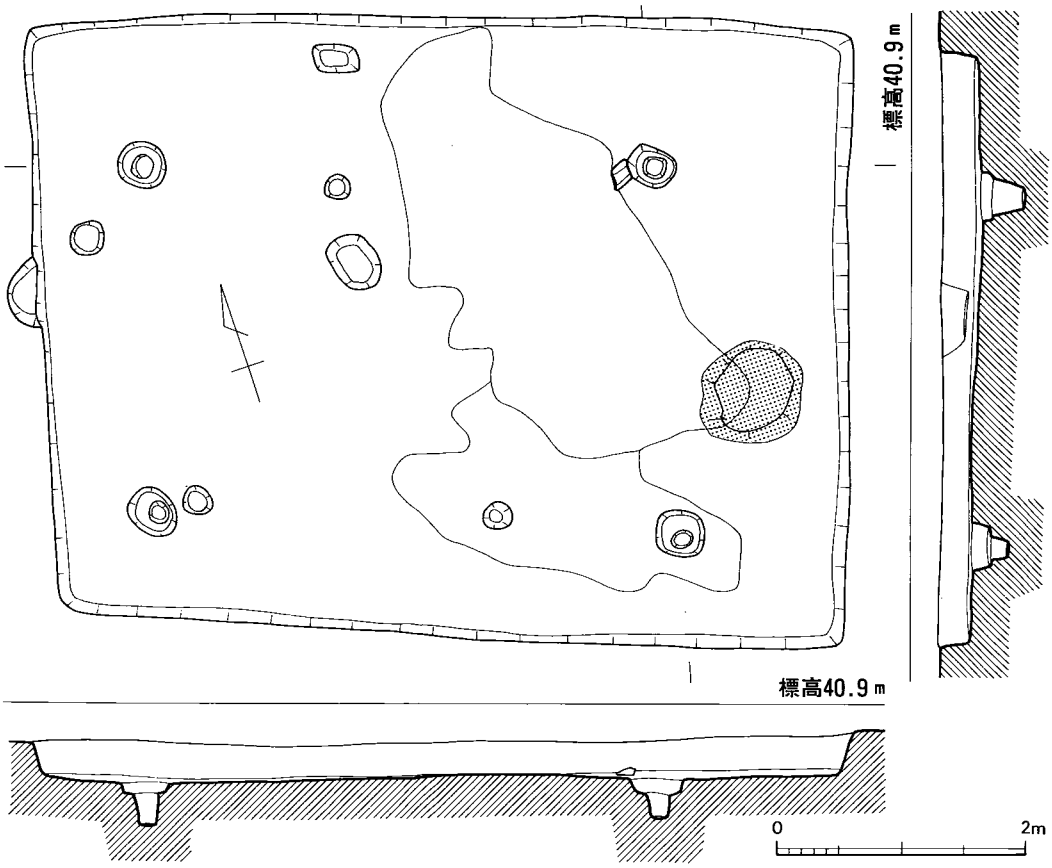
(2)　住居跡

1号住居跡（図版83-1，第184図）

住居跡は南北5m，東西6.5mの長方形竪穴住居跡で，壁は西壁で21cm，残りのよい北壁で30cmの高さがあった。東壁は灰黒色礫層，北壁は東側で礫層西側で黄褐色細砂質土，西壁と南壁は黄褐色粘質土を切り込んでおり，床面は地山が礫層の東側部分のみに粘土を固く敷きつめた貼床がみられた。東壁より30cmほど離れて径80cmの焼土塊が検出されたが，焼土は床面より若干浮いており，床面を掘りくぼめた炉ではない。柱穴の検出は上部が床面と同質の埋土のため困難であったが，床を若干下げ四隅に28cm～38cm深さの柱穴を検出した。

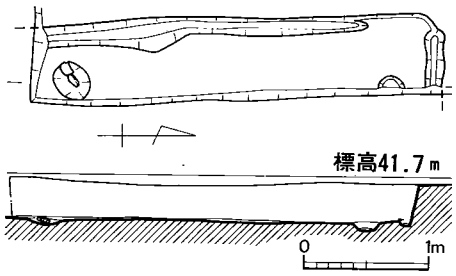
住居跡内の埋土は自然推積だけでなく，人為的に埋め戻された状態がみられ，土器の混入もみられた。土器は北・東・南壁ぎわ及び中央部床面で出土した。また投弾形土製品もみられた。(丸山)

土　器（図版84，第187図1～6）　1～3は小形丸底坩で，床面から出土した。3点とも胴部内面はヘラケズリであるが，頸部が狭い1のみ頸下に指ナデがある。



第 184 図　1号住居跡実測図（1/60）

4～6は，住居跡の東北側から埋没の際に流入したもので，4と5など明らかな型式差がある。5は上層出土でIIa式で　4は中層出土でIII式に含まれるので，4がこの住居跡床面の1～3の土器と共伴するものである。4は口縁が内湾し，先端に平坦面があるなどIIb式の名残がある。胎土は，細砂(石英・長石・金雲母)を含み，赤褐色を呈す。



第 185 図　2号住居跡実測図（1/60）

投弾形土製品　(図版93-2, 第187図1)　1号住居跡から出土したが，弥生時代のものであるところから混入品である。大きさは，長さ5.4cm, 径2.6cmのもの。褐色と黒褐色をしている。　(柳田)

2号住居跡(第185図)

調査区の南東隅に位置し，その一部を検出したにとどまる。平面プランは隅丸方形を呈するも

堺

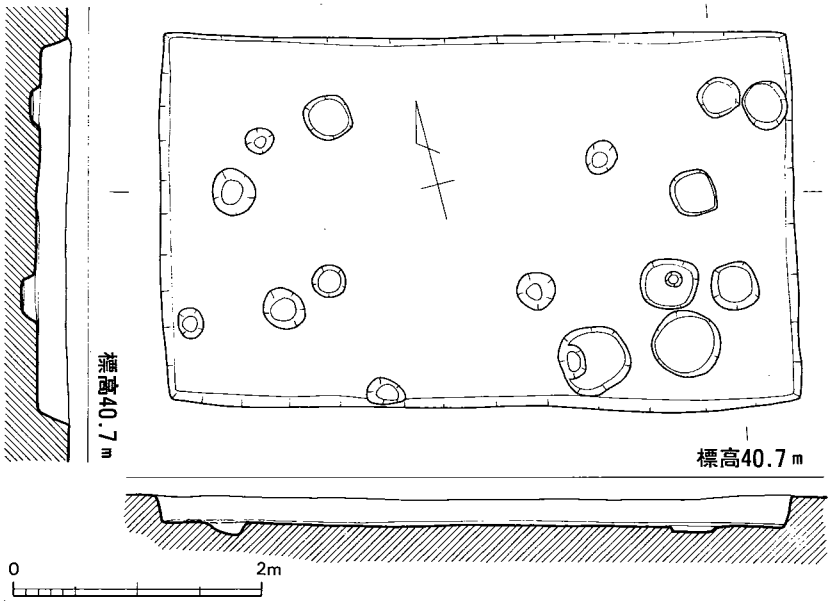
のと思われる。残存壁高は30cm前後で割としっかりしており，深さ5cmほどの浅い壁溝がめぐる。床面直上から上層にかけて炭化材，焼土がみられたことから，火災にあった住居と推測できる。覆土上層から坩が出土している。（立石）

土　器（図版84，第187図7）　住居跡の埋土上層から出土したもので，胴径14.5cmの大きさの壺。口縁はヨコナデ，胴外面下半はケズリの後ハケ目調整，内面は下半がケズリ，上半は指ナデ調整している。胎土は細砂を含み，褐色を呈する。土師器III式に含まれる。（柳田）

3号住居跡（図版83-2，第186図）

調査区の北東隅で西側一辺を検出したために，北・東側に拡張して全掘した竪穴住居跡である。北側では鉄鏃1本を出土した土壙を切っている。平面プランはほぼ東西に長い長方形を呈し，3×5mを測る。住居内全面に炭化材，焼土が覆っていたことから火災にあった住居と推測できる。特に東側では顕著であった。住居内からは，この焼土層を挟んで土器が出土した。焼土の上で出土した土器群は，焼け落ちた後に西側から廃棄されたものと思われる。焼土下から出土した土器には，甕・高杯・坩・把手付甕・瓦質鉢などがあるが，いずれも床面に密着して出土している。把手付甕は倒立して出土している。その他に鉄器3個も出土した。

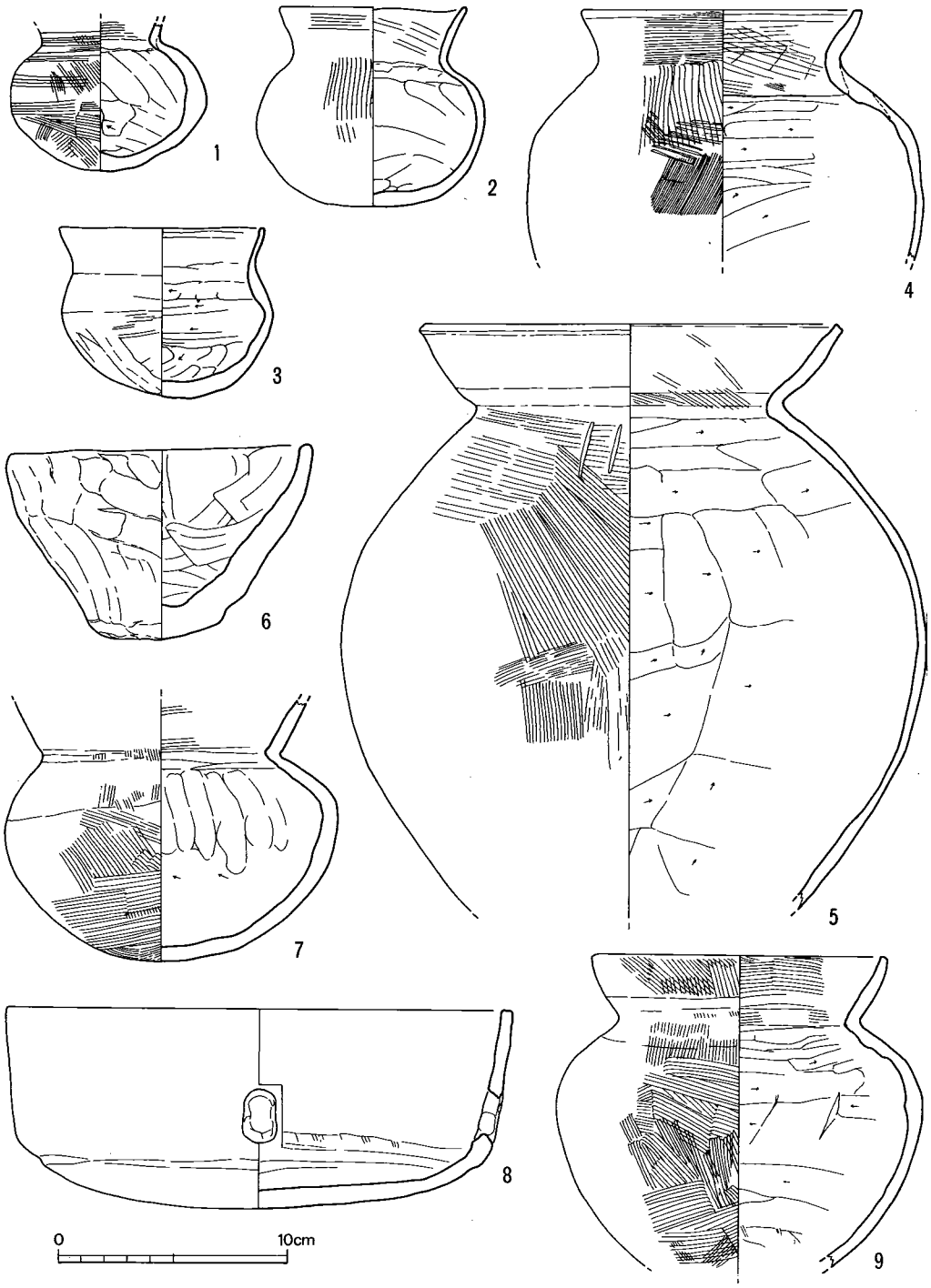
住居跡は残存壁高が15cm前後で，内部に16個のピットが確認できたが，主柱穴は不明である。カマドは存在せず，北東側に多量の焼土がみられたことから屋内炉跡と考えられよう。（立石）



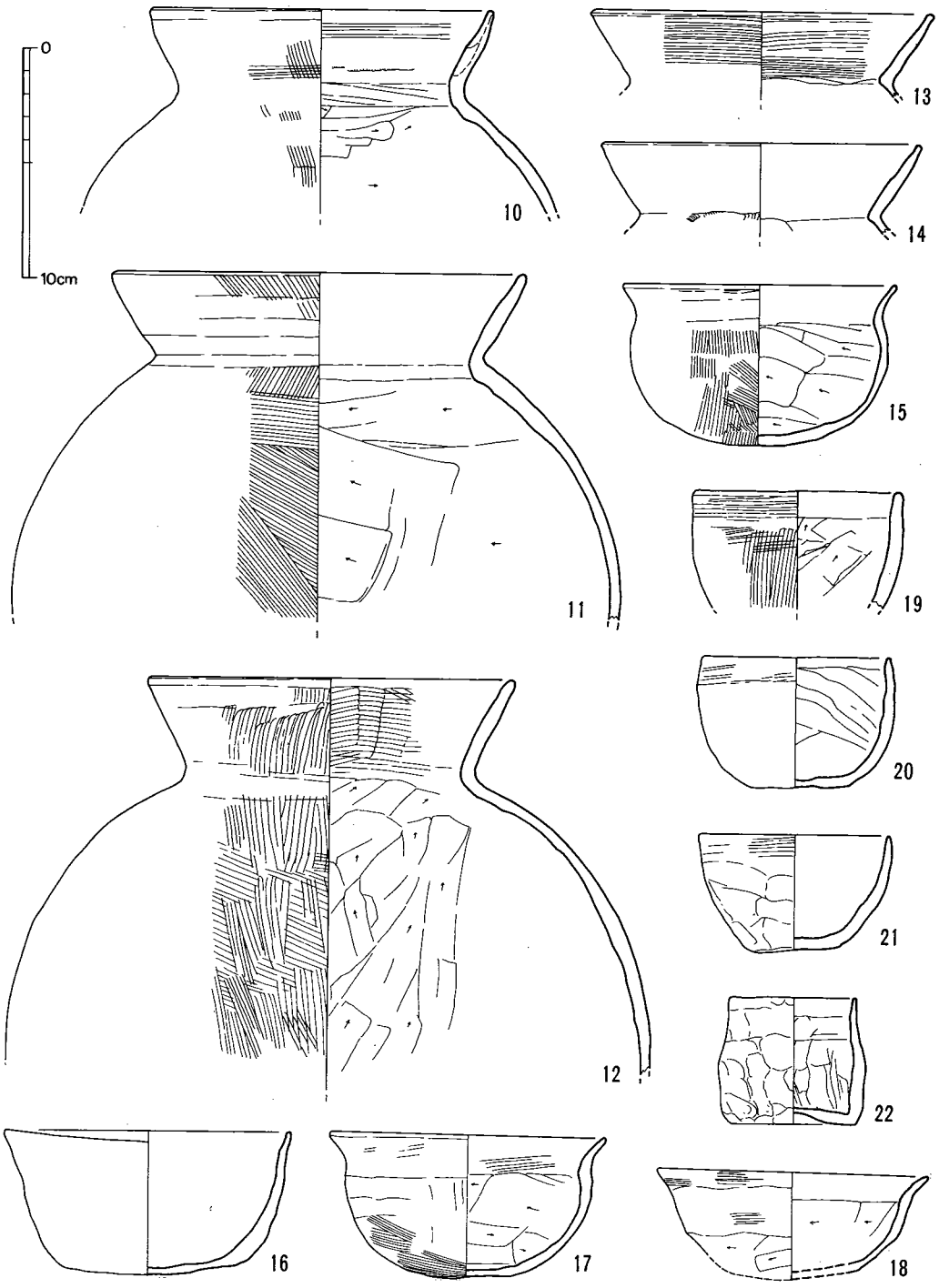
第186図　3号住居跡実測図（1/60）

土　器（図版84・85，第187～189図8～28）

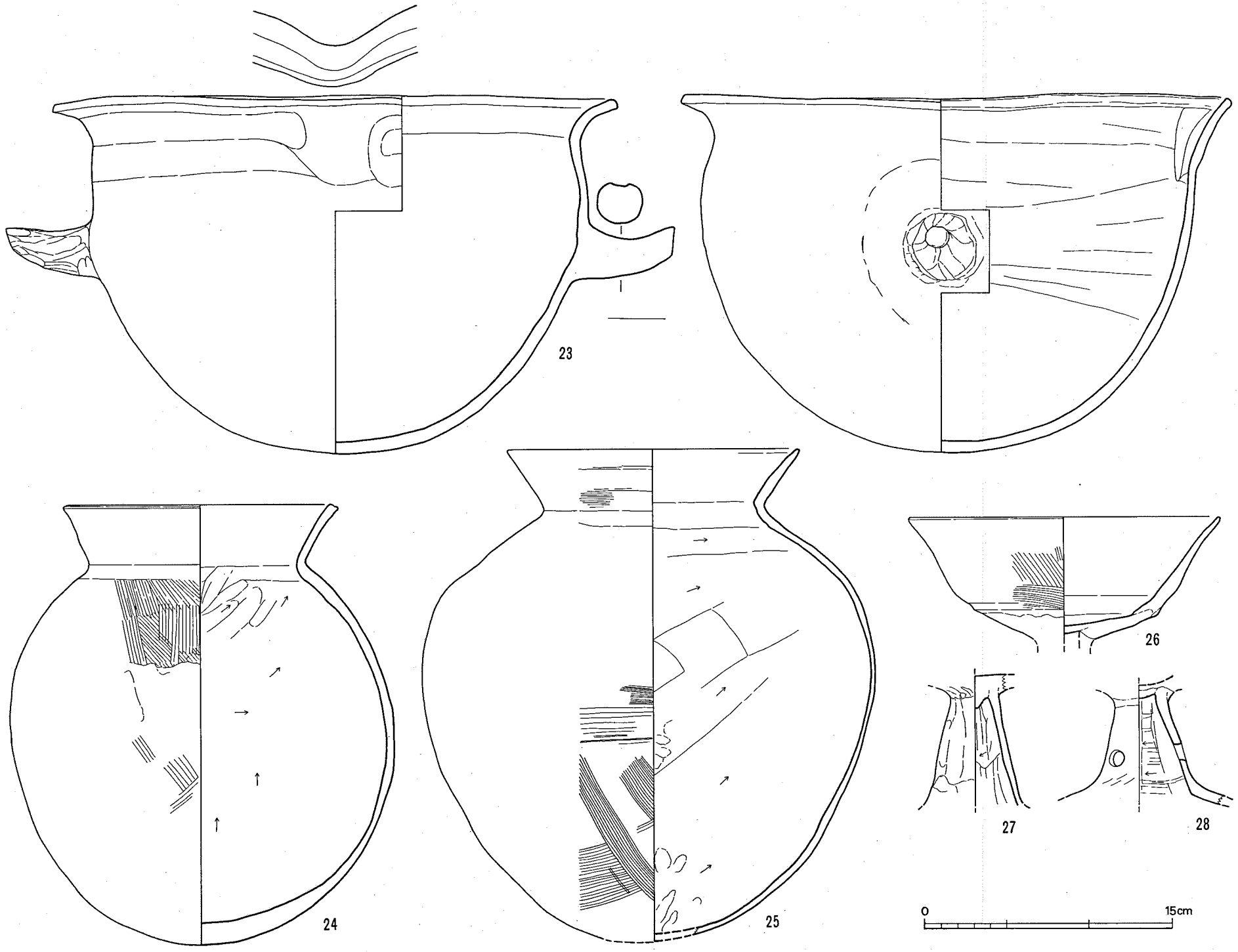
瓦質土器（8）　住居跡床面から出土した軟質灰黒色土器で，鉢形であるが側面に焼成前の穿孔がある。土器は3分の1ほどを欠損するので，孔が対になる可能性もある。口径22.0cm，高さ



第 187 図　1～3号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 188 図　3 号住居跡出土土器実測図 ① (1/3)



第 189 図　堺 I-2　3 号住居跡出土土器実測図②（1/3）

8.7cmの大きさで，体部は直立し，底部は凸レンズ状のふくらみを呈する鉢形土器。体部内外面はヨコナデ，底部内外面はナデ調整する。胎土は，粗砂・細砂を含む灰褐色を呈するが，器表面のみ灰黒色をしている。

土師器（9～28）　9は埋土上層から出土した小壺で，口径13cmの大きさ。口縁がわずかに内湾し，胴部の肩が張るのが特徴。

10～14は甕で，10・12・13は床面で出土し，他は埋土中の出土。13・14は口縁先端の形態と内面は口縁直下からのケズリなどから，II a 式に属するもので混入であろう。

10～12は，口縁先端に丸味があり，わずかであるが内湾する。肩部外面にヨコハケが残るものもある(11)。胎土には，細砂・粗砂が多く褐色を呈する。

15～21は小鉢で，口縁部が外反するものと，内湾するものがある。胴下半はケズリの後ハケ目調整やヘラナデ(16)調整するが，ケズリのままのものもある(18)。

22は，体部が直立し，底部は上げ底となる。内外面に指ナデ痕が著しい。

23は，床面に伏せてあった完形品で，内側には土が詰まっていなかった。口径34.3cm，高さ21.6cmの大きさの把手付甕であるが，全体の形態は鉢ともいえる。口縁部は湾曲して外反するが，上半部にわずかに内湾するくぼみがある。口縁には，両把手の対角線直角方向に片口があることから，甑と組み合わせて使用する甕ではない。把手先端は角をつけて切れ，上面は指押さえによってくぼましている。器面調整は，内面はヨコナデ，外面はナデられている。胎土には細砂を含むが精良で，淡赤褐色を呈する。

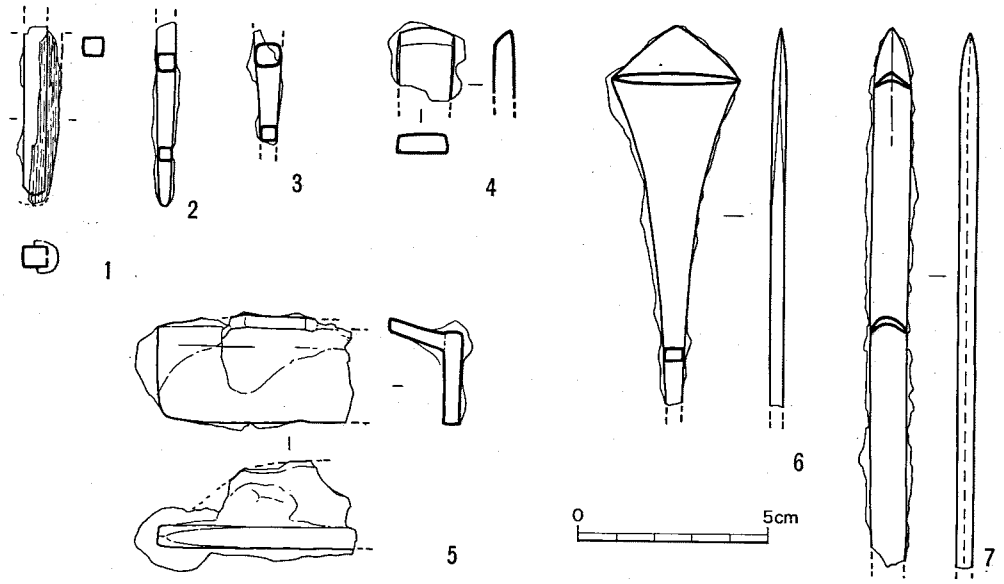
24・25は甕で，10～12とは口縁の形態を多少異にする。24は球形胴に，外反する口縁端は角を有し，25は肩の張る胴に口縁先端が尖がっている。2点ともに胴部内面はケズられているが，25は薄い器壁となっている。外面のハケ目調整は，25の肩部に極細のヨコハケが残っている。2点とも胎土は細砂を含むが精良で，くすんだ褐色をしている。

26～28は床面から出土した高杯で，26は口径18.8cm，杯部深さ6.5cmの大きさ。脚部は3孔を有するものがあり，2点とも内面はヘラケズリ。胎土は，細砂・赤褐色粒を含む淡黄褐色。

3号住居跡出土の土器は，その出土状態から一括資料とすることができ，土師器III式の古相にあてることができる。なお，図示できなかったが，多孔式の甑片も含まれていた。　（柳田）

鉄　器（図版88，第190図3～6）　3は埋土の上部から出土した破片で，上下両端共欠失しているが，残る部分の下端は4㎜角，上端は幅7㎜，厚さ6.5㎜の隅丸方形の断面形を呈しており刺突具の茎部であろう。4は鑿の先端部であろう。幅1.4～1.5cm，厚さ5～5.5㎜の大きさで，床面に接して出土した。5はL字形断面をもつ破片だが，本来の形や用途については不明。

6は，3号住居跡に重複して先行する土壙の床面から出土した鉄鏃で身と茎の境がつかない圭頭平根式。下端部を欠き，現存長10.1cm，最大幅3.4cm，厚さ3.3㎜の大きさで，先端部のみ刃がつく。布留式期でも古い段階であろう。　（小池）



第 190 図　Ⅰ-2・3 出土鉄器実測図 (1/2)

4号住居跡 (図版83-3，第191図)

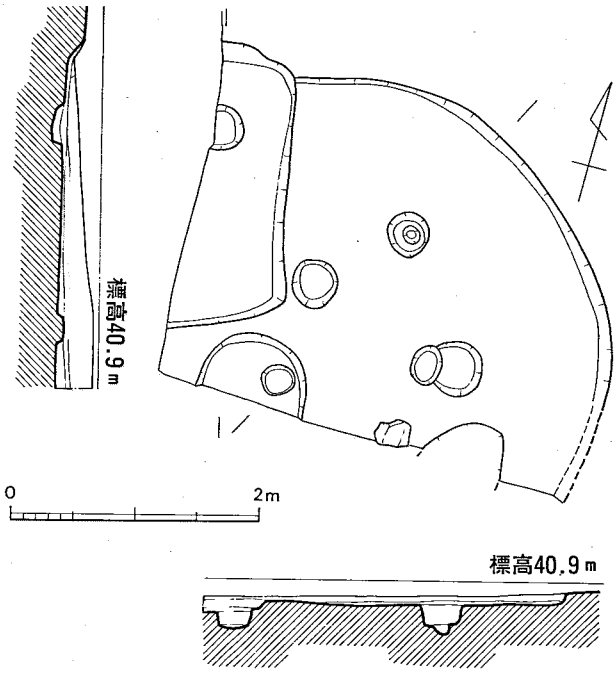
調査区の南西隅に位置し，古墳時代の溝状遺構の下に検出された。調査区隅に位置するために全掘しなかったが，中央部にピットを有し，柱穴が5～6本ほどの円形住居跡と思われる。残存壁高は，東側の残りが良く15cm程を測る。床面はほぼ平坦である。

出土遺物には，弥生中期の甕・丹塗壺などのほかに鉄器2個がある。　(立石)

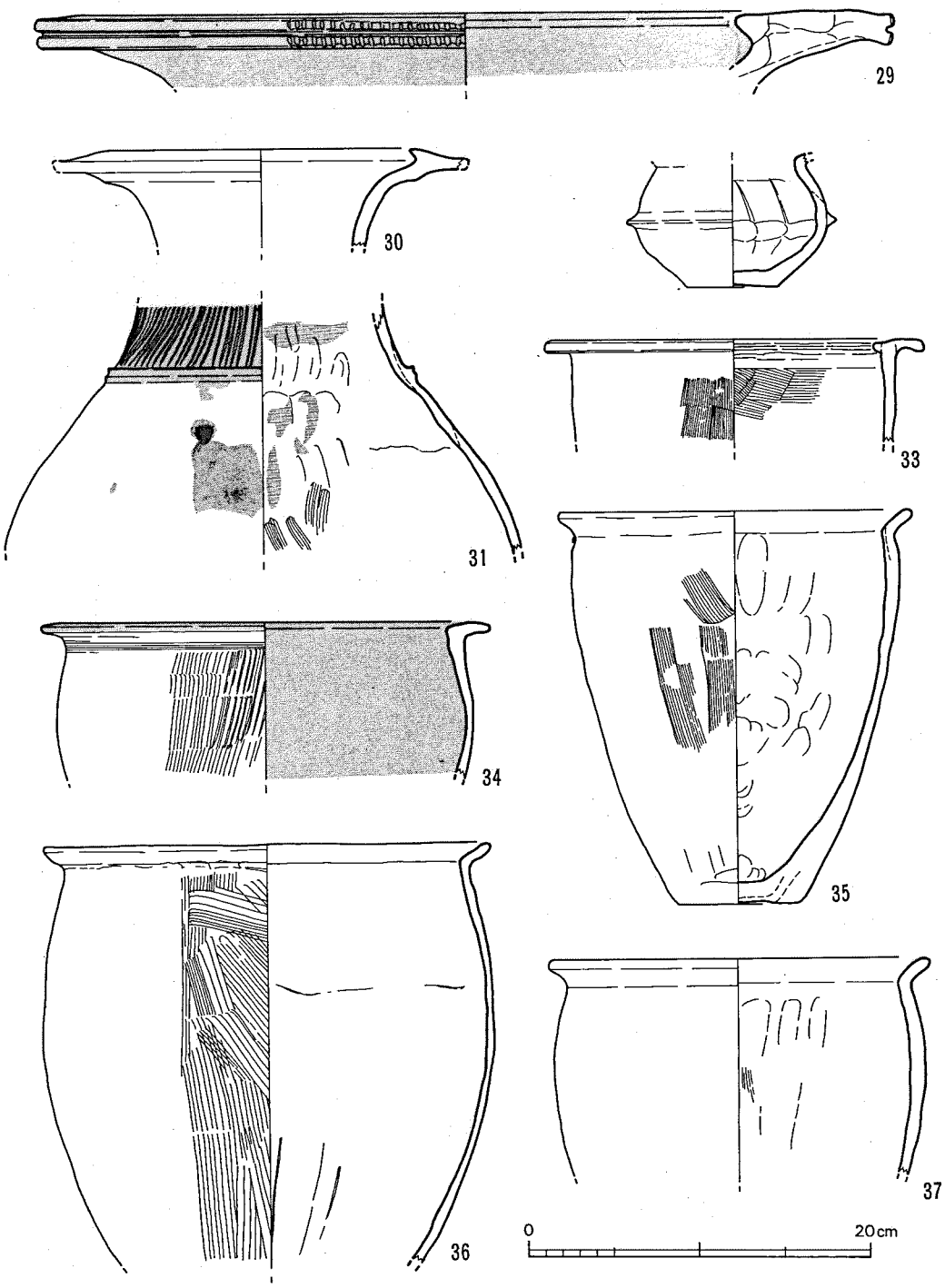
土　器 (図版86，第192・193図29～44)　29は丹塗磨研大形壺の口縁部。30は鋤先口縁壺であるが，丹塗りを施さない。31は，頸部を丹塗りとし，その上からヘラ描き暗文を施す壺，鋤先口縁と思われる。

32は小壺で，胴部に三角凸帯をめぐらす。

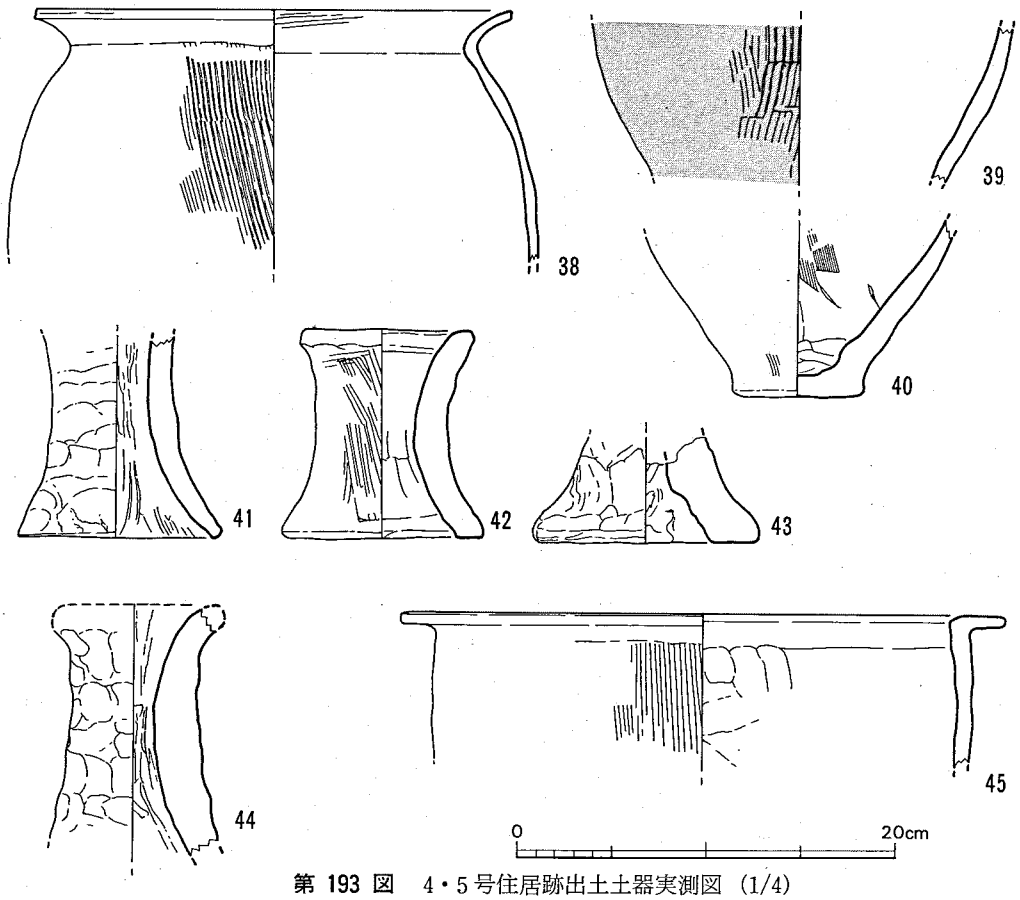
33・34は甕で，33は口縁内側が突



第 191 図　4・5号住居跡実測図 (1/60)



第 192 図　4号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 193 図　4・5号住居跡出土土器実測図（1/4）

出し古い。34は内面のみ丹塗磨研で，外面はハケ目調整。

35～39は後期の甕で，口縁が短く屈曲するものと38は長く外反する。39は外面の粗いハケ目の上から丹を塗る。40の甕底部は中期のもの。

41～44は支脚で，指圧痕が残らずハケ目調整するもの(42)もある。

4号住居跡の土器は，29～34・40が中期後半，35～39が後期前半に属することから，2時期に大別できる。（柳田）

鉄　器（図版88，第198図1・2）　1は5～6㎜の幅と厚さをもつ角棒状を呈す鉄器で，上半部を欠失するが，縦半分をC字形に覆って銹着する木質の端部が鉄器の下端を被ることからして，4.5cmの現存長で下端はさほど尖らないことがわかる。木質が反対側にも覆っていたか否かや，用途については不明だが，利器の柄部であろうか。2は鉄鏃の基部破片で，現存長4.8cm・最大幅5㎜の角棒状を呈すが，下端は細くなり尖る。（小池）

5号住居跡（第191図）

調査区の南西隅に位置し，古墳時代の溝状遺構の下に検出された。1号住居跡と重複し，切

り合い関係から後出のものである。東側の一辺を確認したにとどまるが，平面プランは隅丸長方形を呈するものと思われ，一辺は約1mを測る小形の住居跡であろう。

弥生中期の甕破片が出土している。（立石）

土　器（第193図45）　口径32cmの甕で，内側角も丸味がつき，中期末のもの。（柳田）

溝状遺構

調査区の西南隅，4・5号住居跡の上部で検出された。検出面は石棺墓と同様に，第4層褐色粘質土上面である。2号石棺墓が墓壙一部を僅かに切っている。形状は不整形で溝状遺構とするには問題もあるが，底面は東から西にむかって次第に深さを増し，浅い凹み状を呈する。

底面から若干浮いた状態で，土器が散乱して出土している。（立石）

土　器（図版87，第195・196図46～64）　46・47は小形丸底坩で，46は口縁が直行するが，47は多少内湾して先端が水平となる。

48は二重口縁小壺で，口径9.9cmの大きさ。胴内部は下半がケズリで器壁が薄く，上半は指ナデ痕が残る。49は口径10.2cmの粗製小壺。

50・51・55は甕で，多少内湾した口縁部で先端が丸い。胴外面のハケ目は粗く，内面はケズりが著しい。胎土は細砂（石英・金雲母・赤褐色粒）を含み，淡赤褐色と黄褐色をしている。

52・53・58～60は高杯で，同型式。52は口径17cm，58は口径22cmの大きさで，大きさに差がある。胎土は，52・53が細砂・赤褐色粒を含むが，他は粗砂を含み赤褐色粒を含まない。

54は平底の小鉢で，口径14.1cm，高さ4.7cmの大きさ。内湾する口縁部の先端は水平面をつくるが，わずかにくぼむ。内面はナデ調整され，外面下半と底部外側はヨコケズリの後でナデられている。底部中央は，径4.6cmの範囲が方形にくぼむ。この方形のくぼみがロクロの軸圧痕であるとすれば，ロクロで整形されたことになり，その形態からも可能性が強い。胎土は赤味をおびた褐色で，外面全体に黒色物が塗布されている。これは舶載の赤焼き軟質土器ではなかろうか。

56は弥生後期前半の甕で，下部遺構の混入品であろう。胴内部はケズリ状の板ナデ痕がある。

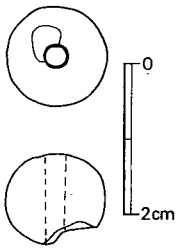
57は小甕で，口径12cmの大きさ。口縁端は55などの甕と同様に丸い。

61・62は平底の小鉢で，61はヘラナデ痕が著しく，62はナデ調整されている。

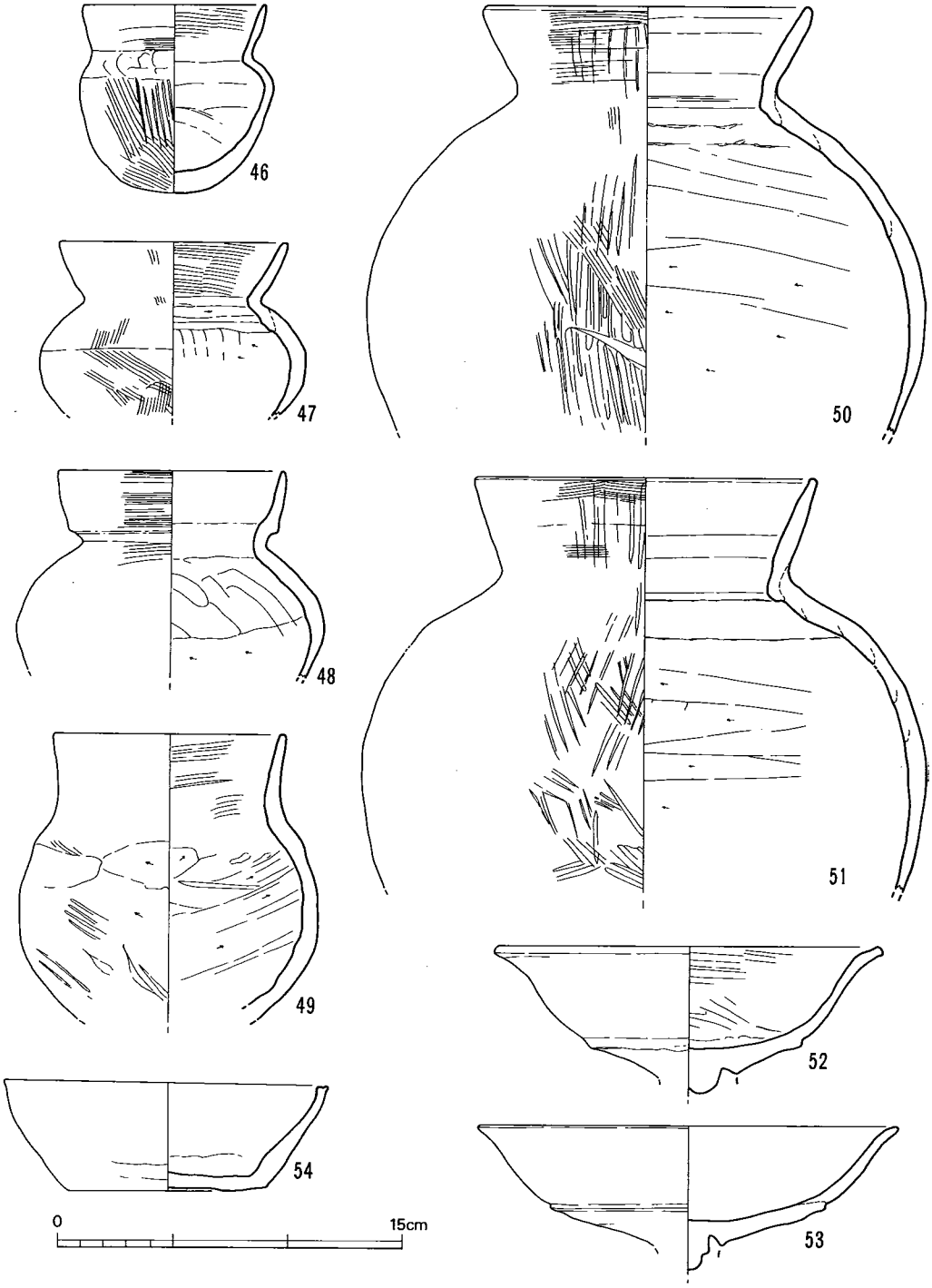
63・64は台付小鉢で，63は指ナデ痕が著しい。

溝状遺構出土の土器は，弥生後期土器以外は同一型式に限定できるもので，堺Ⅰ地区の住居跡では1～3号・6号・7号と同型式のものである。（柳田）

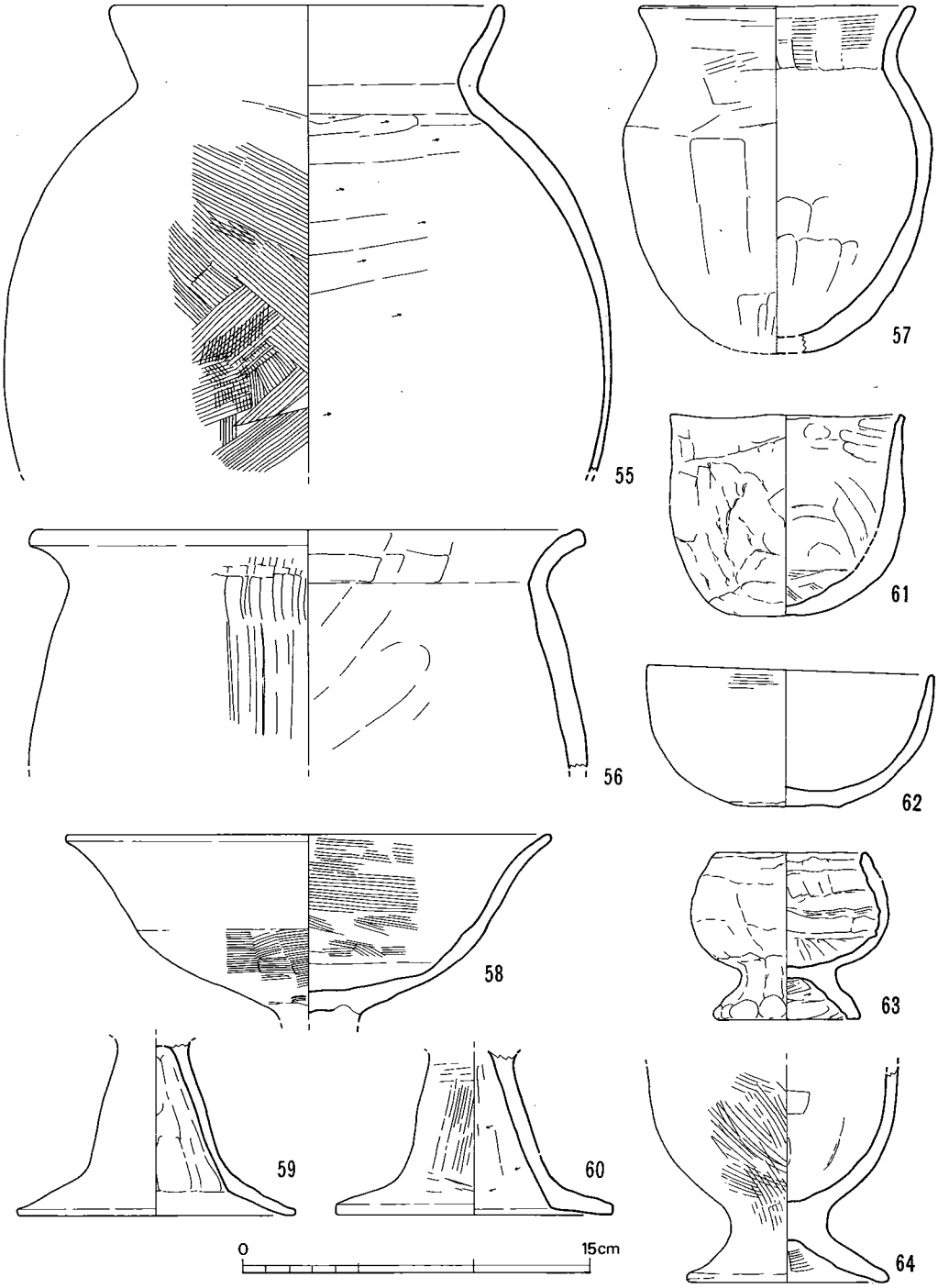
玉　類（図版88，第194図）　第3層出土のガラス製丸玉で，外径13.3㎜・孔径2.6～2.8㎜・厚さ12.1㎜を測る。色調は明るいマリンブルーを呈す。（小池）



第194図
Ⅰ-2 出土玉類
実測図（実大）



第 195 図　溝状遺構出土土器実測図①（1/3）



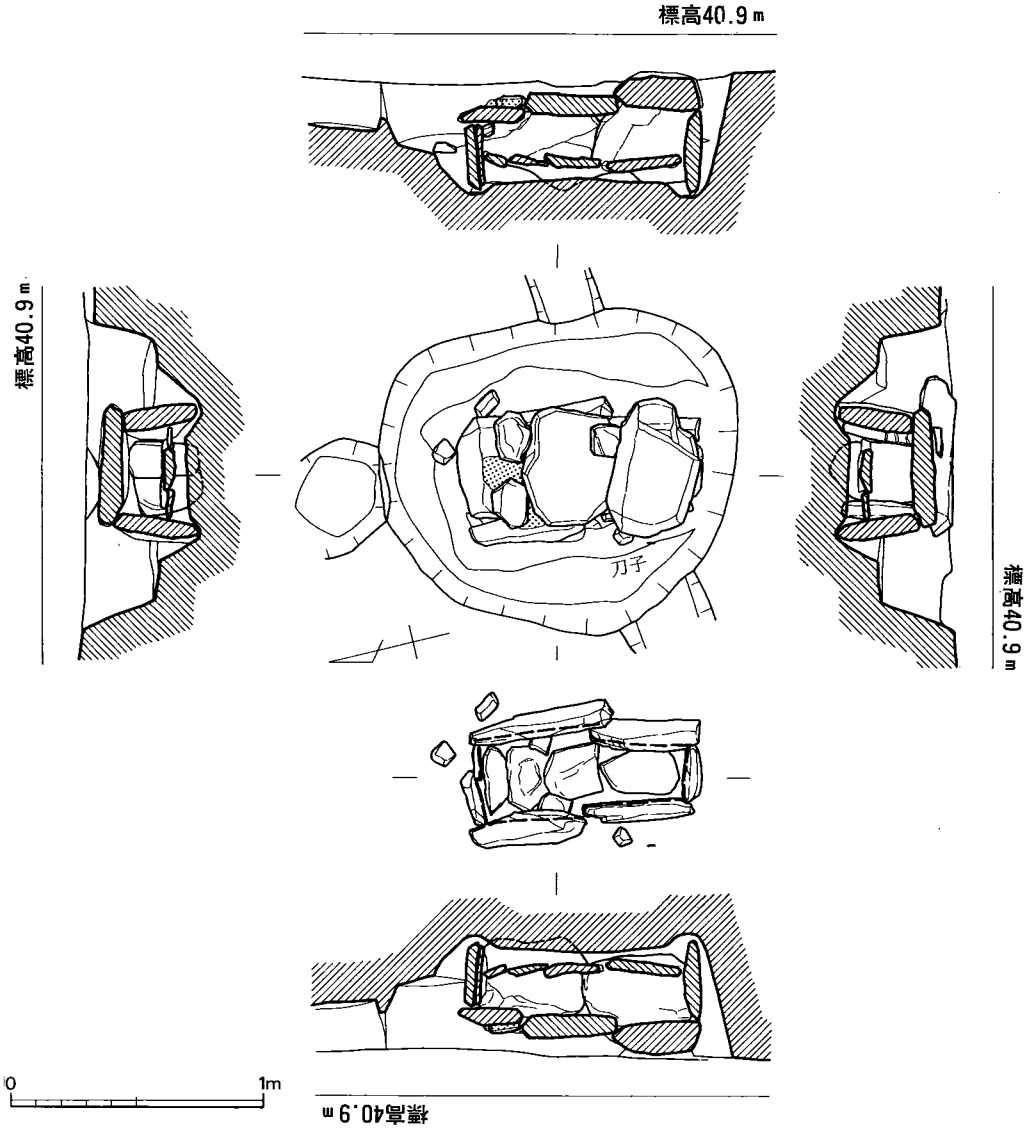
第 196 図　溝状遺構出土土器実測図② (1/3)

3. I-4

(1) 石棺墓

3号石棺墓(図版89-3，第197図)

調査区の南半部の西側で出土し，墓壙北壁部を小ピットで，南側を東西方向に走る小溝で一



第 197 図　3号石棺墓実測図 (1/30)

部切られているが，主体部にまでは至っていない。

石棺内法プランは，北小口幅34cm，南小口幅21cm，棺長79cmを測る。頭位方向はN13°Eを測り，墓壙の掘り方・棺石材の使用・粘土の使用で頭位と足位で異なっている。

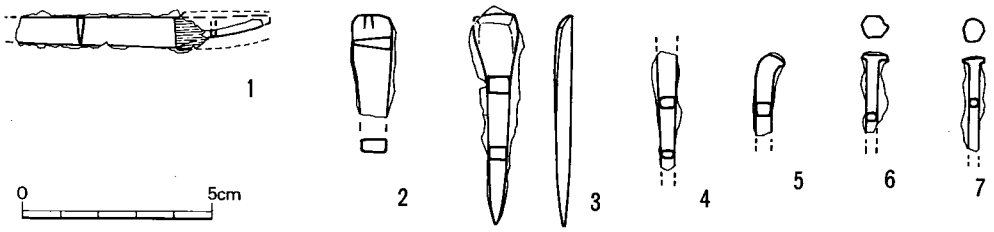
墓壙は2段に掘られるが，南壁のみ段をなさず，小口石掘り方床面まで直に掘る。使用する蓋石は北側が小さいが，両側石は北側が大きく，小口石は北側を幅広にするために2枚を使用する。敷石は北側2枚を横長に，南側2枚を縦長に使用する。このことから，墓壙を掘る際に2段掘りにする際に足位のみこれを省き，敷石は頭位から2枚のみを横長に敷き，石材の不足を足位のみ縦長に敷く。なお，通例の蓋石は頭位が大きく，これを受ける側石・小口石上面のレベルは水平であるが，この例では，足位に向けてそのレベルが高く，敷石から蓋石下面までの高さは北小口部で15cm，南小口部で16cmと1cmだけ高い。現状では1cmの差であるが，掘り方床面から蓋石下面までの高さは，北小口部で23cm，南小口部で29cmと5cmの差がある。小口石の高さでも，同様に南小口石が5cm高い(長い)。また，著しい差は側石下面のレベル差で，南側の西側石が上面のレベルを高くするために壙底より浮かせていることである。この差位は，旧状が変形したためではなく，死者の身長より短い長さの棺体を設けることで省力化し，膝を立たせた状態で埋葬するため，膝頭のレベルを保たせる意図で足位に向けてレベルを高めたものと考えられる。

使用石材は花崗岩で，棺内上位と棺外東側に朱が認められ，棺外の南側蓋石西側に近接して蓋石下面レベルで，刀子が出土した。 (馬田)

鉄　器(第198図)

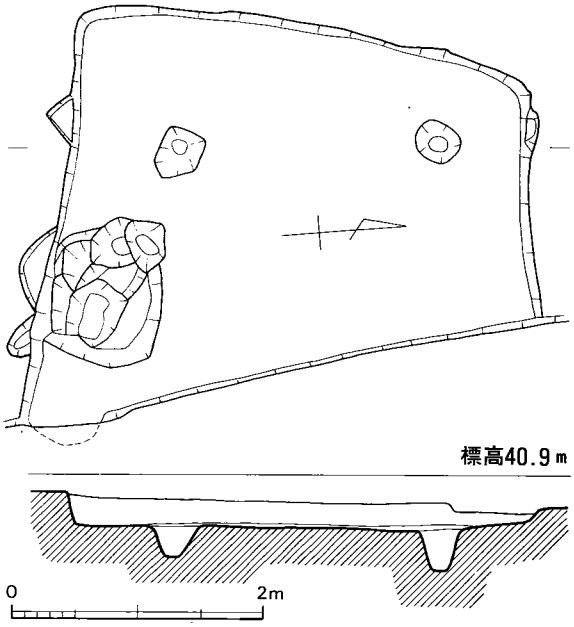
刀　子(1)　3号石棺墓の南西側棺外から出土した刀子で，両端部を欠失するが現存長6.5cmを有し，この内の2.3cmを木質の残る柄部が占める。背の厚さは2mmで，刃部との幅は最大値で8mmを測る。

不明鉄器(2)　3号石棺墓の東北方向約2mの第4層上部から出土した端部破片である。折損部で厚さ3.8mmを有すが先端に向かって薄めになり2mmの厚さになる。一方の側縁は更に薄く刃部に似るが刃部としては鈍い。 (小池)



第 198 図　I-4 出土鉄器実測図 (1/2)

(2) 住居跡



第 199 図　6号住居跡実測図 (1/60)

6号住居跡(図版90-1・2，第199図)

調査区の東南隅に位置し，東側が農道のため全掘できなかったが，南北方向に一辺3.8mを検出した。壁はほぼ垂直で壁高は約20cmである。床面は平坦で南壁に接して土壙を有する。柱穴は2個のみ検出した。

焼失住居と思われ多くの炭化材が出土した。また，高杯をはじめ土器も多量出土したが，床面だけでなく，炭化材の上からも，炭化材の下から検出された貯蔵穴と思われる土壙の中からも出土している。貯蔵穴の中から出土した陶質土器片は床面出土のものと同一個体である。住居跡の埋土は人為的な埋め戻しの状態であり，土器も床面出土を含め投棄された可能性が高い。土製模造鏡は炭化材の上から出土した。また，土製勾玉も出土している。

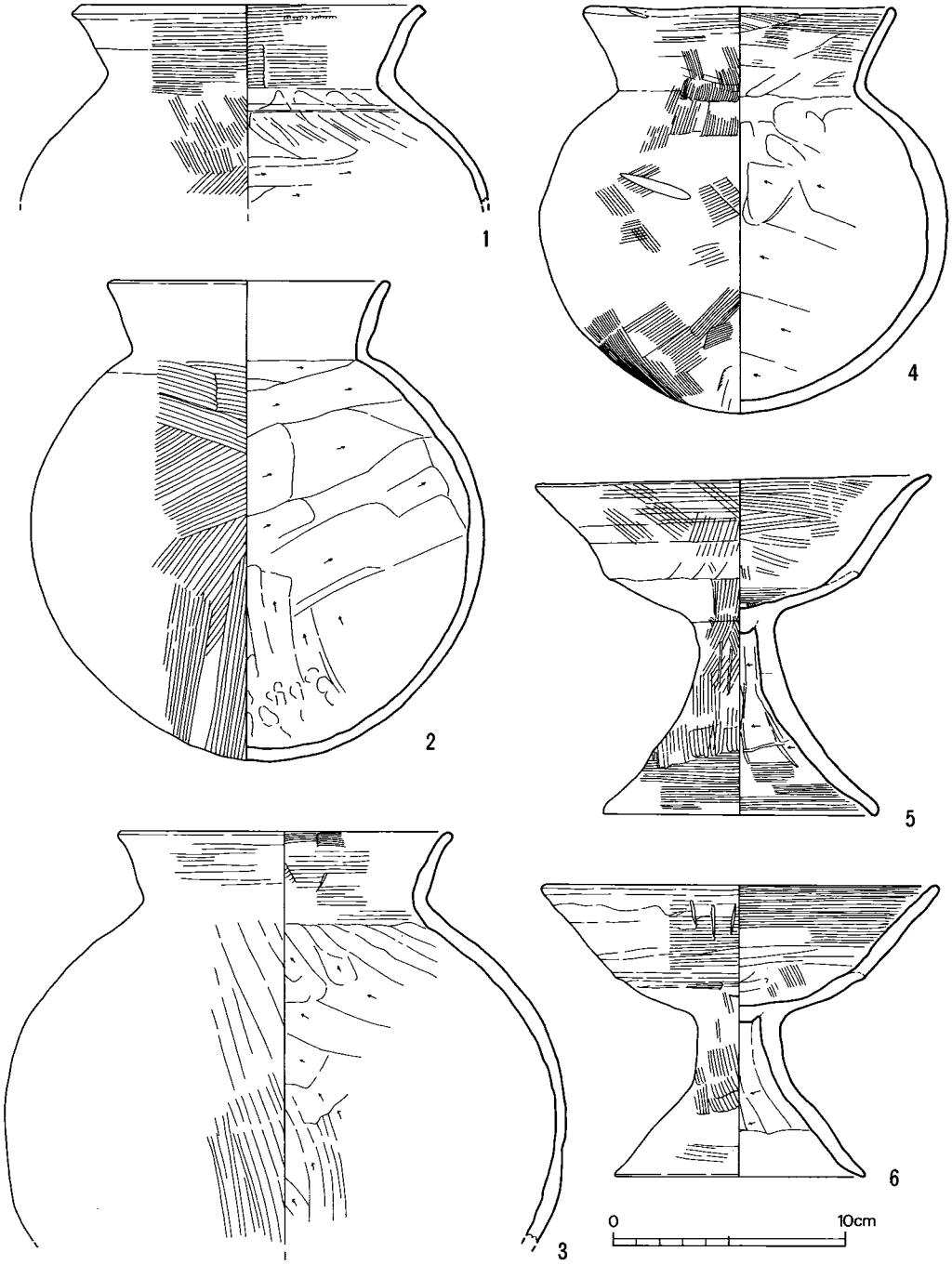
土　器(図版92・93-1，第205～207図1～16)　1～4・7・8は甕で，球形胴に多少外反する口縁がつくものと，多少楕円形胴に直立に近い口縁がつくもの(7・8)がある。器面調整は，胴内面ヘラケズリで，外面は大きいものほど粗いハケ目調整となる。2は口径12cm，高さ20.4cm，4は口径13.4cm，高さ17.4cm，7は口径15.6cm，高さ28.8cm，8は口径14cm，高さ27.8cmの大きさ。胎土は，細砂(石英・金雲母)を含み，赤褐色から褐色をしている。

5・6・11～15は高杯で，脚部の形態から2種に分類できる。I類は脚部が屈曲せずに広がるもので5・6・13がこれにあたる。II類は脚裾部の屈曲が強いもので，14・15がこれにあたる。この2種は，杯部にも違いがあり，I類は杯部も屈曲がゆるく，口縁端が細くならず丸味がある。II類は脚部と同様に屈曲が明瞭で，口縁端が外反して細い。器面調整もI類はハケ目が粗く，脚部までハケ目がおよぶ。この分類でいくと，11・12はII類に属する。

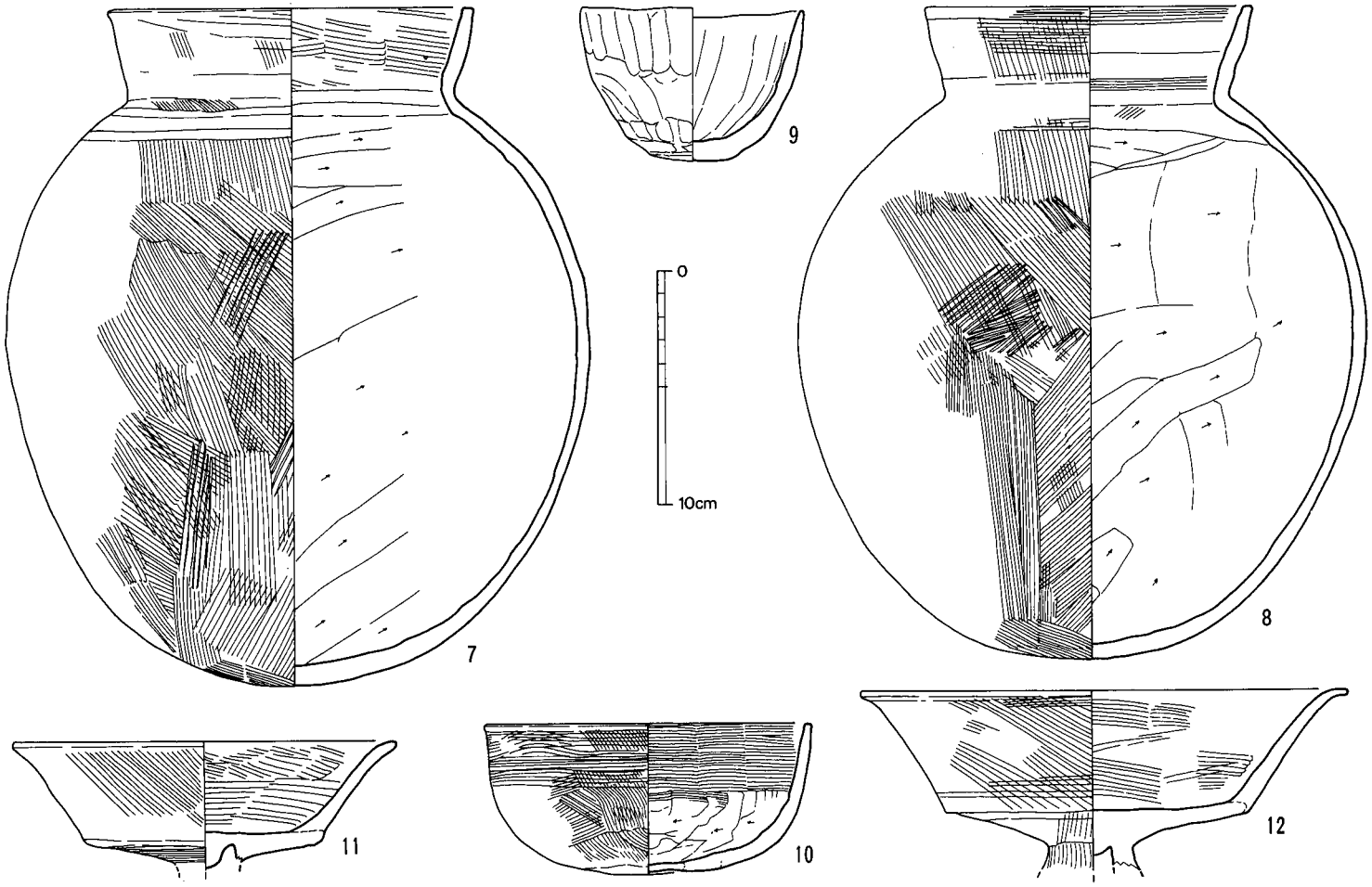
9・10は小鉢で，9は粗製，10は精製品。10の内面下半にケズリが残っている。

陶質土器(図版93-1，第205図16・202図)

16は硬質灰青色陶質土器の把手脚付短頸壺であるが，胴部の半分の破片で，把手と脚部を欠損している。口径9.3cm，胴最大径15.2cmの大きさで，大きな把手が付くものと思われる。大きな把手に加え，肩の張りと下半部の細さが特徴で，肩部の鋭く尖る2本の摘み出した三角凸帯



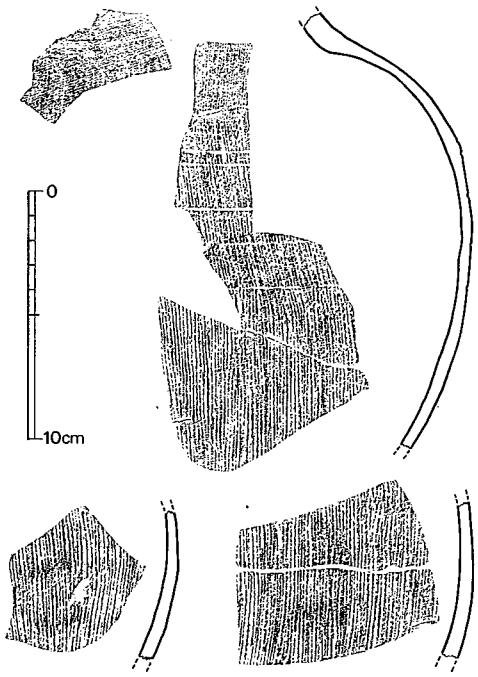
第 200 図　6 号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第 201 図　6 号住居跡出土土器実測図②（1/3）

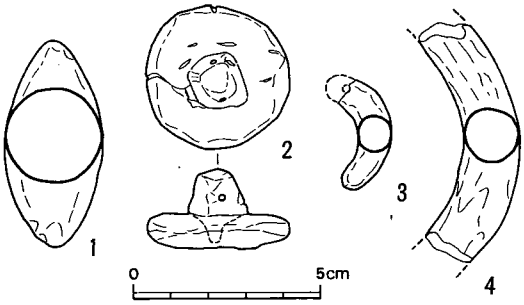
間には，刃物で刻んだ斜格子文帯がある。全体に回転ヨコナデ調整されているが，外面肩部と内面底部に灰かぶりによる緑褐色の自然釉があるため調整痕は消えている。器面は，灰黒色・灰青色・灰色が混存し，胎土内は淡赤紫色をして砂粒を若干含む。また，器表面には黒色粒が出ている。

第202図は，16のように硬質ではないが，灰青色の陶質甕である。胴部には縄蓆文タタキの後に，肩部から胴上半に5本のヘラ描き沈線をめぐらす。沈線の間隔は均一ではなく，上位2本間が狭い。縄蓆文は，寺口例に比較すると細く密であるが，内面のナデ消しは同じ。器表面は，外面が灰黒色，内面が灰青色を呈し，胎土内も灰青色で黒色粒を含む。胴の最大径は約24cmの大きさの甕である。



第 202 図　6号住居跡出土
陶質土器実測図（1/3）

土製模造鏡（図版93-2，第203図2）　土製模造鏡は，住居跡南側の貯蔵穴と思われる上から出土したが，その出土位置は床面に倒れた径7cmほどの太さの炭化丸太材の上に乗っていた。この丸太材の上には，6・8の土器も乗っていることから，住居跡出土土器群と同時に投入されたのは確実である。しかし，これら一括土器が埋没中途で投入されたものではないことは，住居内南側の貯蔵穴底部で，土製勾玉や16の陶質土器片が出土しているので，これらの遺物が投入された時は貯蔵穴は埋没していなかったことになり，一括遺物の投入は住居破棄後ただちに行われたことがわかる。



第 203 図　I－3・4
出土土製品実測図（1/2）

土製模造鏡は，径3.8cm，高さ2.1cm，鈕径1.4cm，鈕高1.2cmの大きさで，鈕には孔が貫通する。鈕の平面形は角張っており，鏡体に埋込式になっている。鏡裏面には指紋や爪痕も残っている。鏡面にも指紋が多く，この面は黒褐色を呈するが，他面は淡褐色をしている。

土製勾玉（図版93-3，第203図3）　住居南側貯蔵穴底面から出土したが，頭部を古く欠損し

ている。現存長2.9cm，胴中部径1.0～0.9cmの大きさで，孔の一部が残っている。勾玉は手捏ねで粘土紐を作り，そのまま湾曲させたらしく，背に無数のヒビが生じている。淡褐色を呈す。

6号住居跡の出土遺物は，火災後の投入物とすることができるが，自然的な流入ではなく，一時的な祭祀的色彩の強い一括遺物とすることができる。

土器には陶質土器が2種含まれ，これに伴う一括土器の土師器も器種が揃っていることで，この種陶質土器の日本の年代が推定可能な重要資料となる。この一括土器の示す特徴は，土師器IIb式の後に続くIII式に含まれることは明らかであるが，IIIa式としてIIb式に続くものとするには若干の問題がある。いずれにしろ，IIb式からさほど離れない5世紀初頭頃とすることができる。

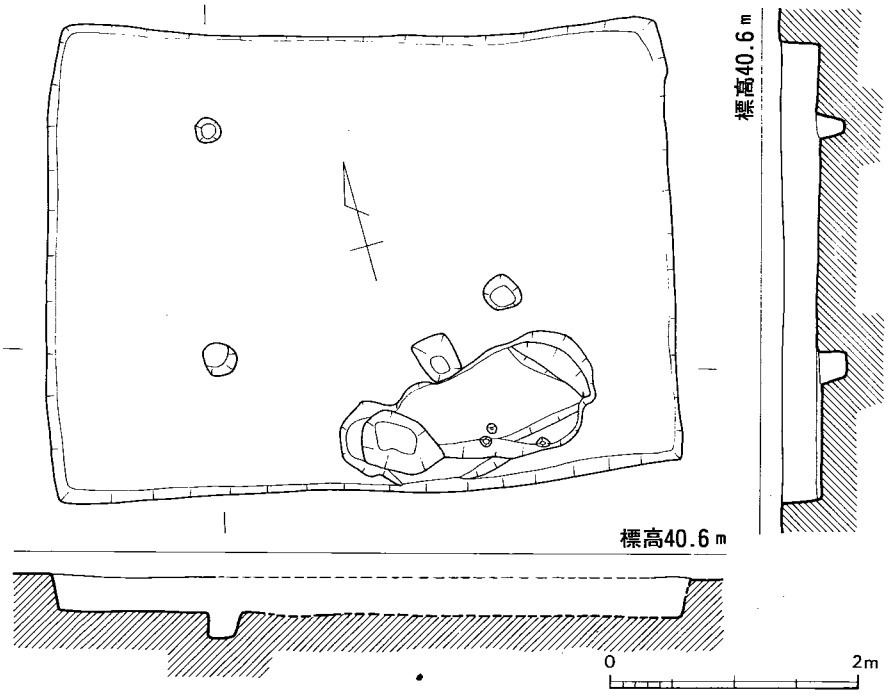
（柳田）

7号住居跡（図版90-3，第204図）

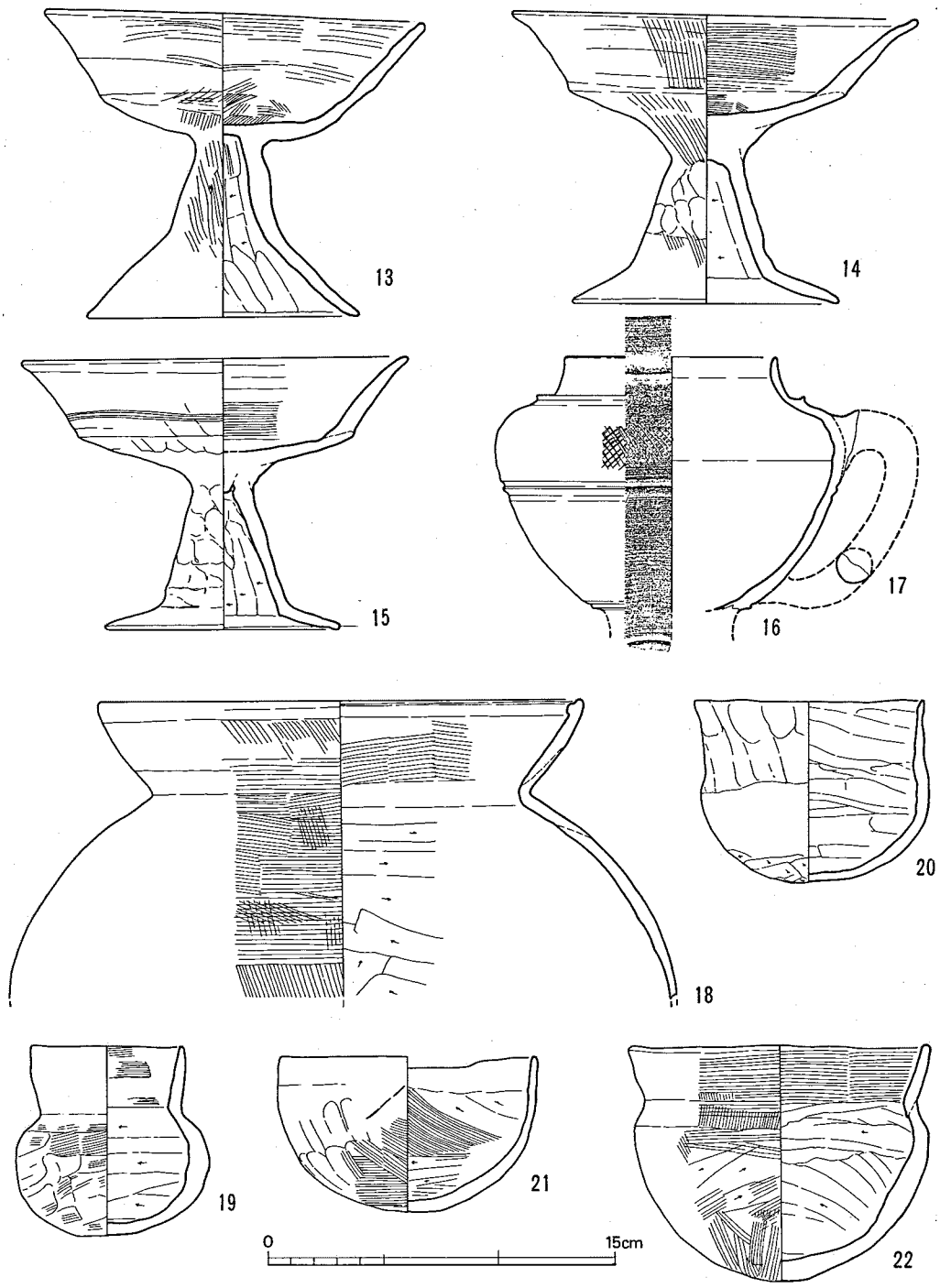
調査区の中央に位置する。平安時代遺構の検出時において，西側が別の遺構と切り合っていることから調査区を拡張し，その下から検出した東西5m，南北3.7mの長方形竪穴住居跡である。壁は切り合いのない所で30cmの高さである。床面は平坦であるが，南壁にそって土壙を保有し，柱穴はやや中央によって4個を検出した。

土器は南側の床面及び土壙内から出土し，中央やや南寄りの床面からは陶質土器が出土している。

（丸山）



第204図　7号住居跡実測図（1/60）



第 205 図　6・7号住居跡出土土器実測図（1/3）

堺

土　器（図版93-1，第205図16～22）

陶質土器(17)　把手の破片で床面から出土した。6号住居跡出土の把手脚付短頸壺のような把手片と思われ，径1.4cmの断面円形をし，片面に緑褐色の自然釉が見られる。胎土に石英・長石の細粒を含み，内部は淡赤紫色を呈するが，器面に細黒色粒も見られる。胎土や色調から，16と同一個体の可能性もある。

土師器(18～22)　18・22は住居跡南側の土壙内，20は床面，19・21は埋土中から出土した。18は典型的な布留式に含まれ，球形胴をしていると思われ，外面肩部もヨコハケ調整している。

19は小形丸底坩で，口径6.6cm，高さ8.2cmの大きさ。胴部外面下半はケズリ後にハケ目調整している。口縁が立ち，先細りするのが特徴。

20・21は小鉢であるが，20は小形丸底坩の退化型式ともいえる。20は器面に指ナデ，ケズリが残り粗製品。22も小鉢ともいえるが，多少内湾して立つ口縁部を有する。口縁部にIII式の特徴を備えている。

これらの土器は一括資料とはいえないが，18の甕にII b式に連続するものがあるところから，この住居跡がII b式直後であると同時に，陶質土器片を持つことを考えると，6号住居跡とも同時性があることを意味している。

把　手（第203図4）　これは丹塗りであることと胎土から弥生中・後期土器の混入と思われるが，調整はタテケズリ状のナデの後に丹塗りを行った優品である。胎土に細砂を含む赤褐色。

（柳田）

(3)　その他の遺構と遺物

方形竪穴（図版91-3，第206図）

調査区ほぼ中央に検出した隅丸長方形の遺構5.20×3.10mの大きさで，底面は平坦である。北東側に幅0.25～0.50mのブリッジ状な遺構をもつ。南側床面が段状になっている。

出土遺物には，土師器(小皿・高台付小皿・丸底杯)・白磁が石塊と混在した状況で出土した。時期は，11世紀末～12世紀初頭のものである。

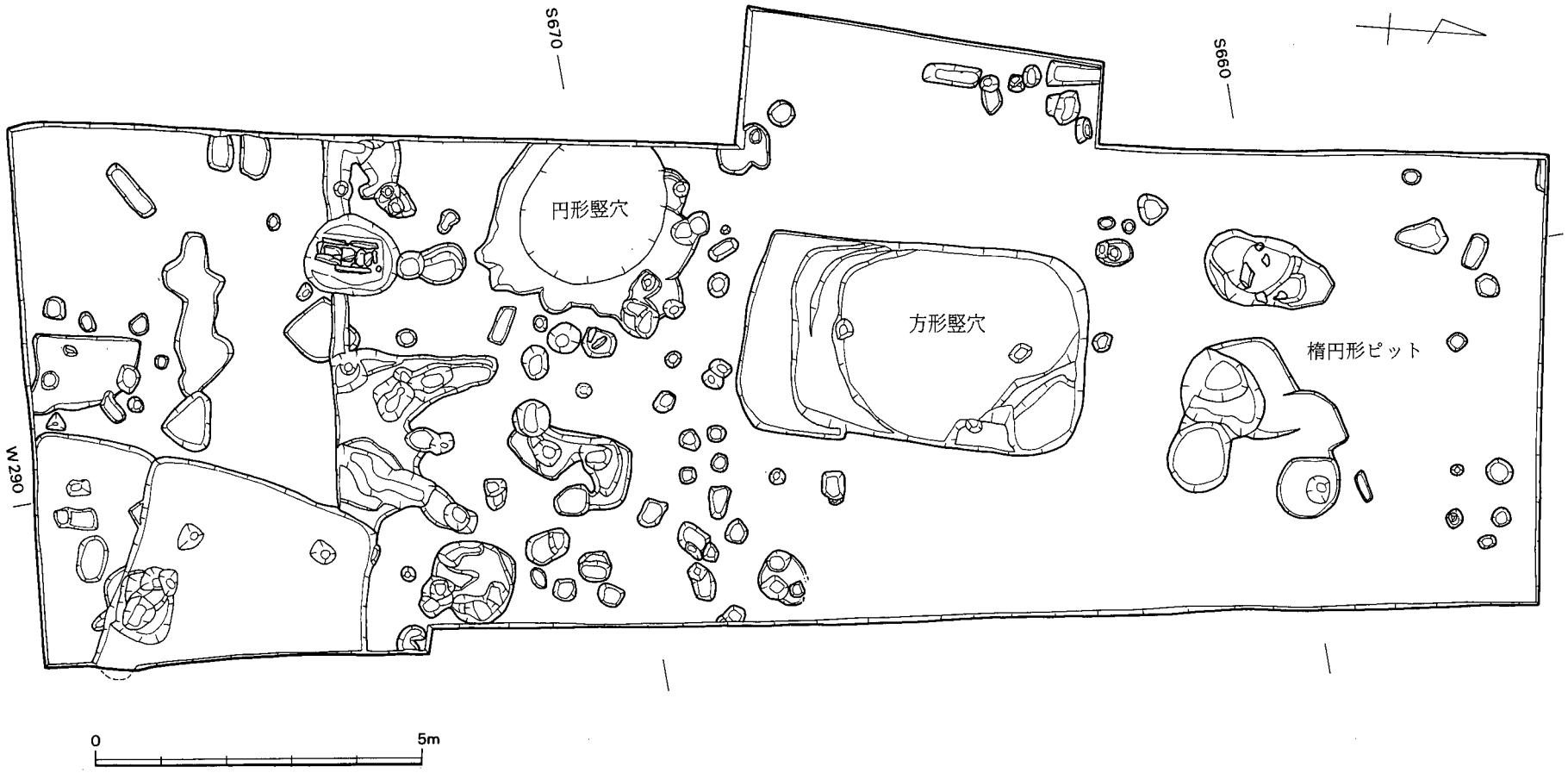
土　器（第207図1～28・第208図4）

小　皿　口径8.6～10.1cmを測る。8はヘラ切り後板目をみるが，他は糸切り後板目をみる。第207図1～19の小皿は実測可能な土器のみを呈示したが，他の実測不可能な土器等と合計して外底部のヘラケズリ・糸切りの量は，ヘラケズリが約75％で，糸切りが約25％である。

高台付小皿　口径9.3cm・器高2.2cm・高台径5.1cmを測る。

丸底杯　口係15.2～16.2cmを測る。27は体部内面にヘラによるミガキの痕跡がある。

白　磁　高台径7.4cmを測る底部の厚い椀である。粗い貫入をみ，釉は淡緑灰色である。



第 206 図　I-4 歴史時代の遺構配置図 (1/100)

円形竪穴（図版91-2，第206図）

調査区ほぼ中央で検出した不整円形プランをもつ遺構で，2.5×2.1m，深さ約0.3mを測る。床面のほぼ中央に0.75×0.7mの土壙をもち，他はほぼ平担である。

出土遺物は床面上またはやや浮いた状況で，土師器（小皿）・白磁である。

土　器（第207図29～32・第208図5）

小　皿　口径8.3～9.4cmを測る。外底部は糸切りである。

白　磁　口径10.4cm・底径3.1cm・器高2.5cmを測る。体部内面に段を有し，外底部はヘラケズリを施す。釉は淡黄緑色で，細かい貫入をみる。

その他の出土土器

白　磁　1はやや低目の高台をもつ椀で，高台径5.4cmを測る。粗い貫入をみ，釉は淡緑白色である。2は口縁端部を平坦にもつ白磁で，体部内面に櫛描き文を施し，体部内面上位に沈線を巡らす。釉は緑白色で，口径13.4cmを測る。3は玉縁口縁をもつ椀で，釉は淡緑灰色。口径17cmを測る。2・3は土師器小皿とともに楕円形ピットから出土した。

6・7は3層出土で，8・9は4層上部出土である。6は見込みを施釉後カキ取っている。釉は6・8・9が緑白色で，7が灰白色である。（川村）

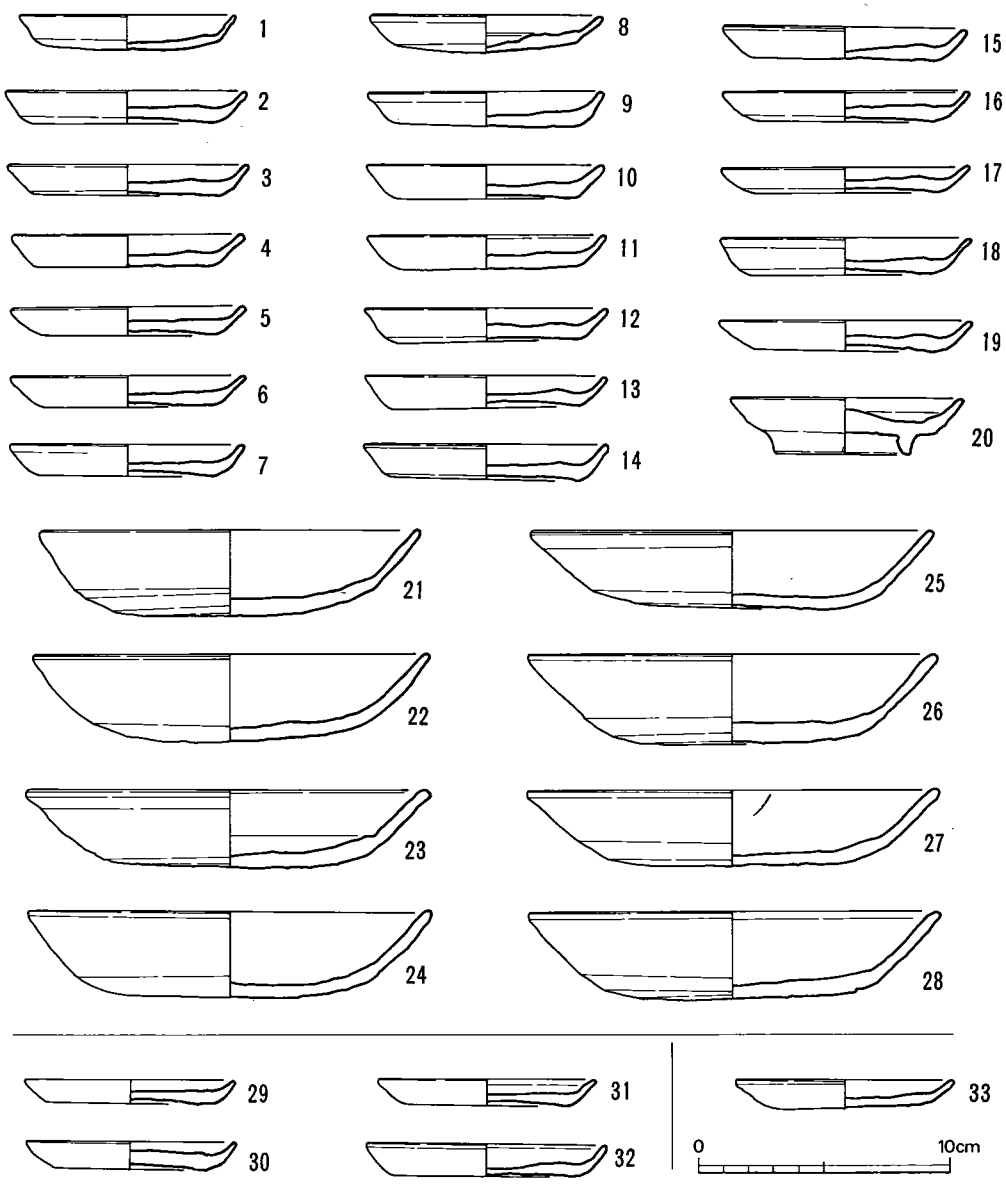
鉄　器（第212図3～7）

鑿（3）　円形竪穴から出土した完形品で，長さ5.6cm，厚さ4.5mmを有

表11　堺Ⅰ-4　出土小皿・杯法量表

（単位cm）

番号	挿図番号	口径	器高	底径	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
方形竪穴								
小　皿								
1	1	8.6	1.4	7.0		○?	○	
2	2	9.1	1.3	7.2		○	○	○
3	3	9.1	1.2	7.3		○	○	○
4	4	9.25	1.25	7.0		○	○	○
5	5	9.3	1.1	6.9		○	○	○
6	6	9.3	1.2	6.9		○	○	○
7	7	9.3	1.3	6.9		○?	○	
8	8	9.3	1.5	7.1	○		○	○
9	9	9.4	1.3	6.9		○	○	
10	10	9.4	1.3	7.1		○	○	
11	11	9.5	1.3	7.1		○	○	○
12	12	9.6	1.3	7.1		○	○	
13	13	9.7	1.3	7.4		○	○	
14	14	9.7	1.4	7.4		○	○	
15	15	9.8	1.2	7.2		○	○	○
16	16	9.9	1.0	7.2		○	○	○
17	17	10.0	1.5	7.1		○	○	
18	18	10.1	1.2	7.1		○	○	
19	19	9.3	1.2	7.1		○	○	○
高台付小皿								
1	20	9.35	2.2	5.4		○	○	○
丸底杯								
1	21	15.2	3.4	—	○		○	
2	22	15.8	3.5	—	○		○	
3	23	16.0	3.1	—	○		○	
4	24	16.0	3.4	—	○		○	○
5	25	16.1	3.05	—	○		○	
6	26	16.4	3.6	—	○		○	
7	27	16.5	3.0	—	○		○ ?	○
8	28	16.5	3.5	—	○		○ ?	○
円形竪穴								
小　皿								
1	29	8·3	0.9	6.6		○	○	○
2	30	8·4	1.1	6.0		○	○	
3	31	8·6	1.05	6.2		○	○	
4	32	9·4	1.3	7.3		○	○	○
楕円形竪穴								
小　皿								
1	33	8.8	1.1	5.6		○	○	○

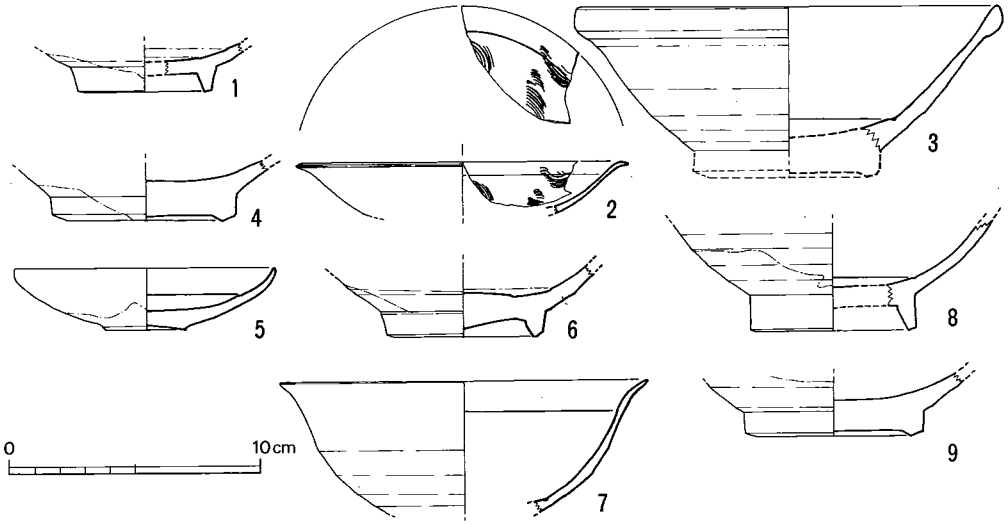


第 207 図　Ⅰ－4 出土土師器実測図（1/3）

し幅1.1cmの刃部から茎部は6㎜以下と細くなり端部は尖る。刃部は片刃で木質の遺存はない。

釘（4～7）　4・5は方形竪穴の床面から出土した角釘で，5の頭部は一方に曲がる。4はやや扁平な方形断面，5は方形断面を呈す。6・7は西拡張区の第4層上部から出土した頭部破片で，頭の平面部は六角形に近い。身の断面は隅丸方形を呈している。

3～5は平安末頃の遺構出土例で6・7の釘は更に時期が下がるものと思われる。

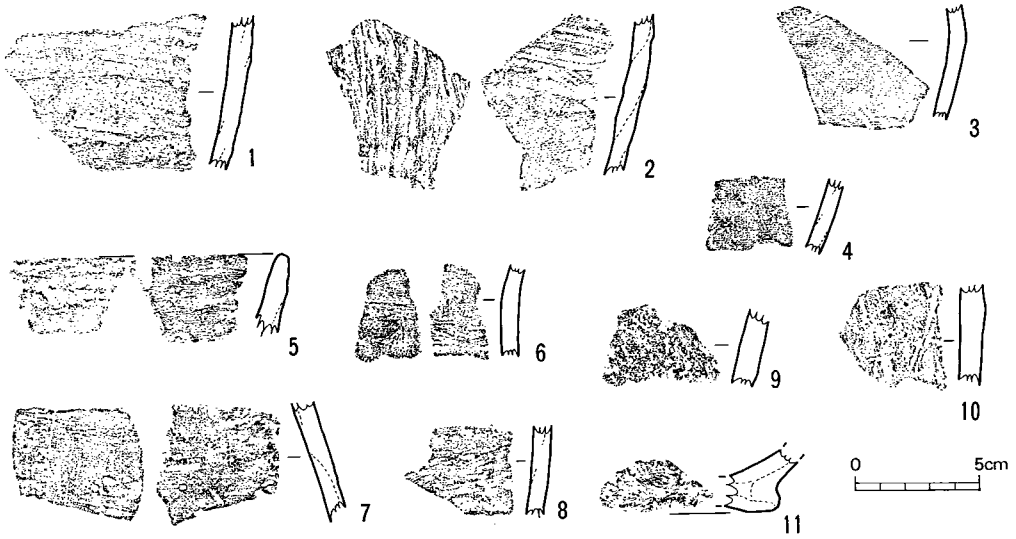


第 208 図 Ⅰ-4 出土陶磁器実測図 (1/3)

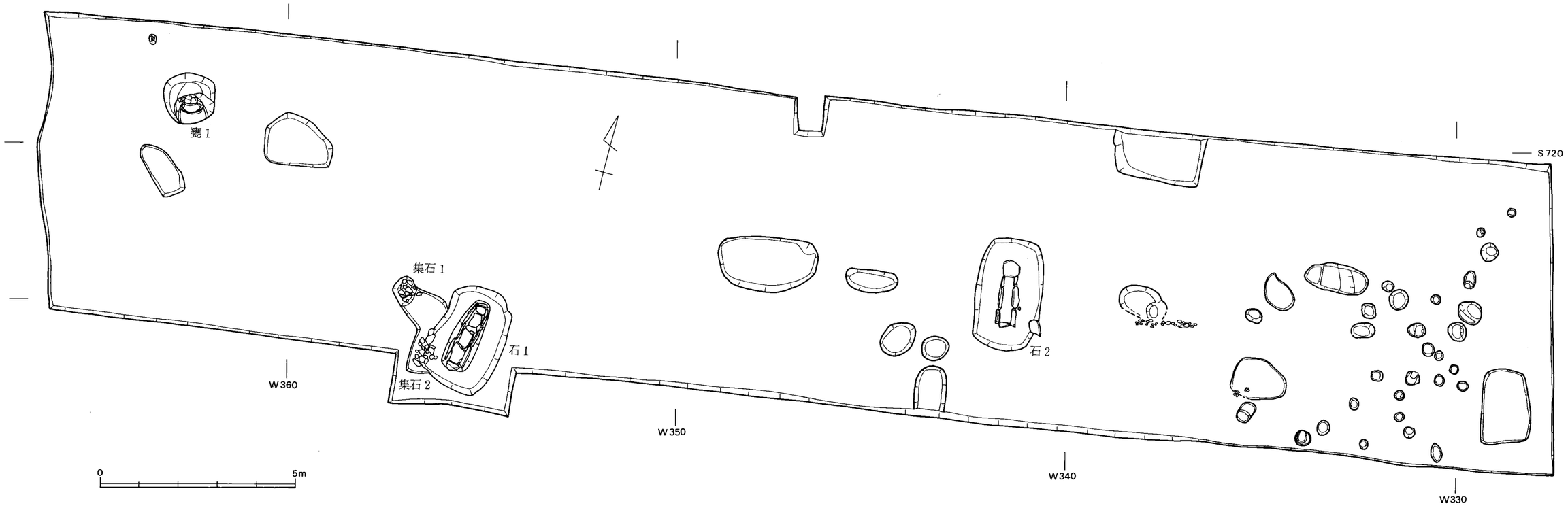
Ⅰ-2a～4出土縄文土器 (図版88，第209図)

Ⅰ－2 aの2号石棺墓壙内(1)，Ⅰ-3の第3層(2)，Ⅰ-4の6号住居跡(3・5・8・9)・7号住居跡（4・6・7)・第4層（10・11）などから出土している。

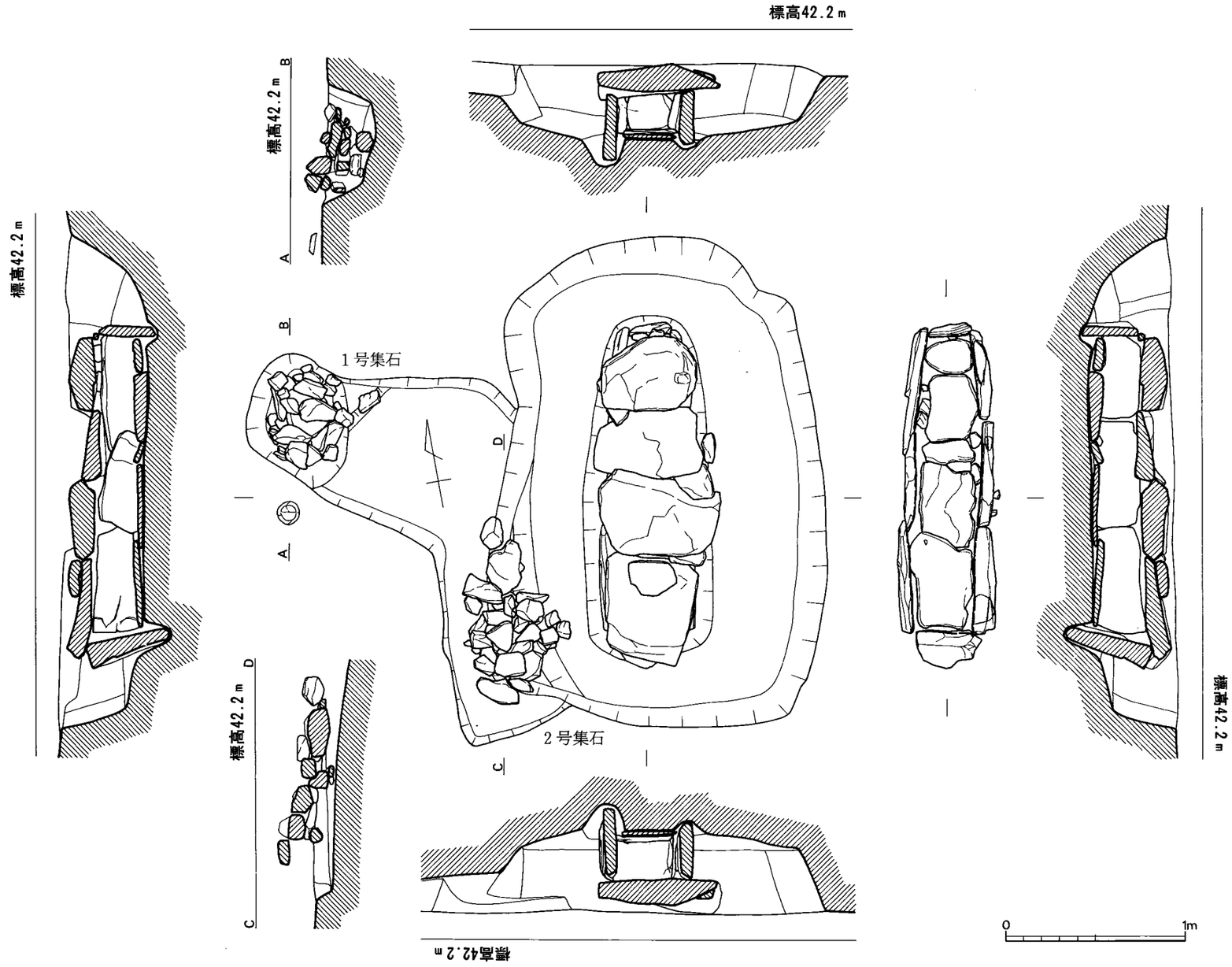
粗製土器のうち，1・8～11は，内面をナデで仕上げるとともに外面をカキナデ状の条痕にしているもの。5・7もこれに近いが，5の内面のナデは雑で、7の内外面には板状原体によるナデがみられる。2は内外面に巻貝系の条痕が施され，内面の下半がナデられる。6はハケ目に



第 209 図 Ⅰ-2～4 出土縄文土器拓影 (1/3)



第 210 図　堺 I-6～8・13　遺構配置図　(1/100)



第 211 図　堺Ⅰ-6～8　1 号 石 棺 墓 と 1・2 号 集 石 遺 構 実 側 図 (1/30)

似た条痕になっており，板状原体の木口による条痕かも知れない。いずれも胎土に金雲母を含み，有機質の混和材を用いるためか気泡が多い。ただ１のみは気泡が少なく，砂粒がめだつ。

精製磨研の破片は3・4の例がある。鉢ないしは深鉢になる胴部破片で，3には鈍い胴部の屈折がみられる。胎土に金雲母・角閃石を含む。

これらの土器の大半は晩期前半～中頃のものであろう。 (小池)

4. I-6～8・13

(1) I-6～8

堺I-6～11は東西に40m，南北に8mの約320m²の調査区を設けた。検出遺構は，弥生後期終末期を中心とする甕棺墓・石棺墓と歴史時代の中世期の集石遺構及び柱穴群を検出した。

1号石棺墓（図版95-1・2，第211図）

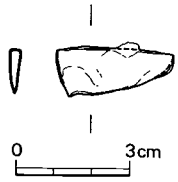
W350とW360の間で，S725に位置するもので，2号石棺墓の西側である。主軸をN10°Eにとり，頭位を南にとるもので，副葬品として鉄製の刀子片が床面より出土している。

掘り方の平面形は隅丸長方形を呈し，中世の1・2号集石に切られているもので，集石をはずした後に西側のコーナーを出した。内法は長軸2.27m，短軸1.27mである。墓壙も長楕円形で，南側が広めで73cmである。蓋石は板石を4石用いて，間隙に小石を入れ粘土にて目貼りをしている。棺の内法は長さ1.66m，幅30～40cmで，棺床には6石をもって，敷石されている。床面から蓋石の間は25cmで，側壁は両側とも3石利用している。棺の小口には南側に大きな板石を立て，それよりも一まわり小さな板石を北側に立てている。使用された石は安山岩が中心である。

出土遺物

1号石棺墓の南側西端の頭位部分付近の床面に鉄製刀子片が1点副葬されていた。

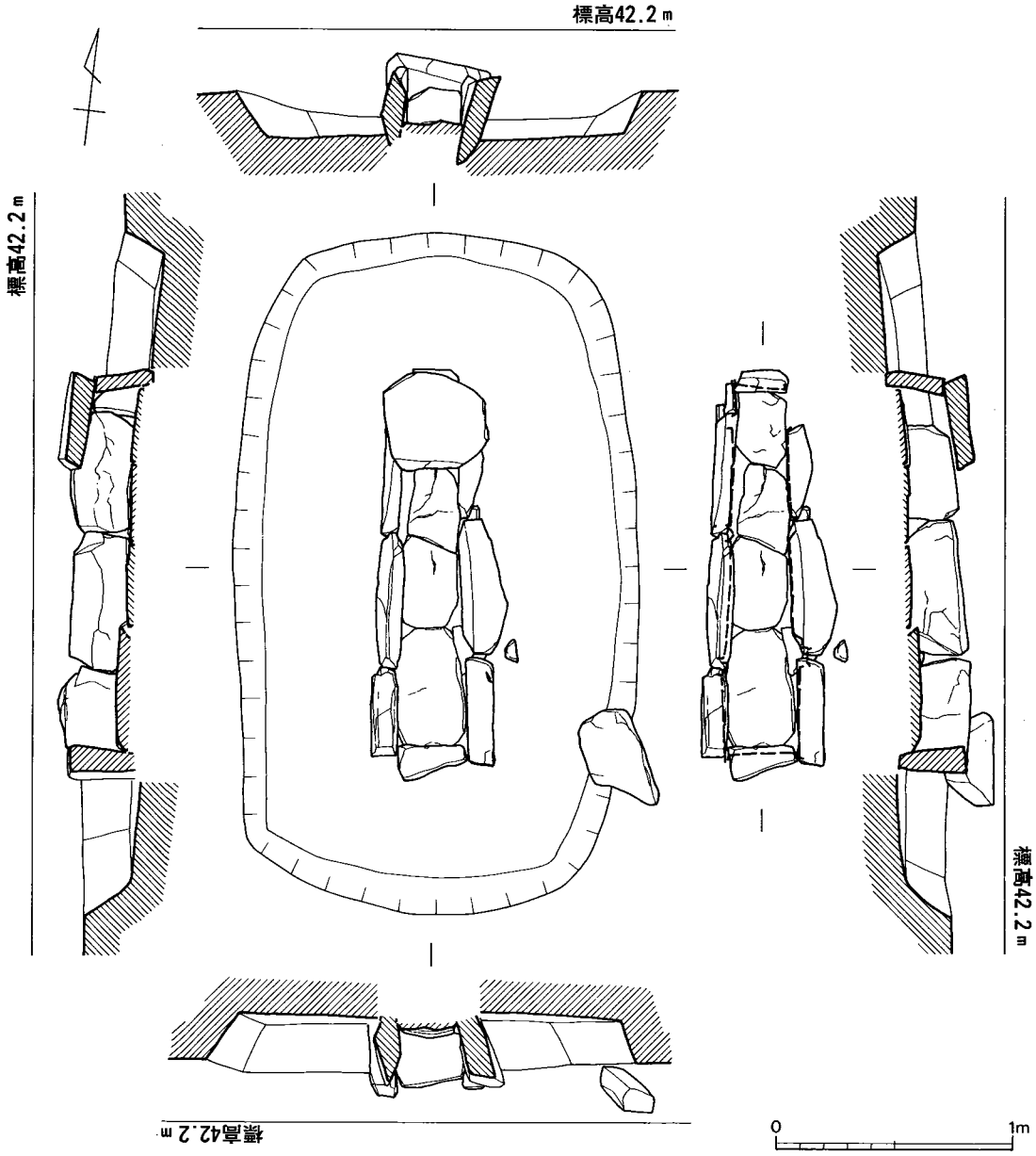
刀　子（第212図）　刃部の破片で，鋒先から2.5cmぐらい残っている。造りは平棟平造である。



第 212 図
1号石棺墓副葬
鉄器実測図 (1/2)

2号石棺墓（図版95-3，第213図）

W341・S723の位置で，1号石棺墓の東側にあるものである。蓋石1石を残しすべて削平されていた。主軸をN7°Wにとり，掘り方の平面形は隅丸長方形で，内法で長軸2.90m，短軸1.64mである。墓壙は長楕円形で，南側が広めで60cmあり，棺の内法は長軸は1.10m，短軸30cmである。西側壁とも4石の板石を立てて使用されている。床面には扁平な河石4石を使って敷石されている。棺内部からの副葬品は検出されていない。

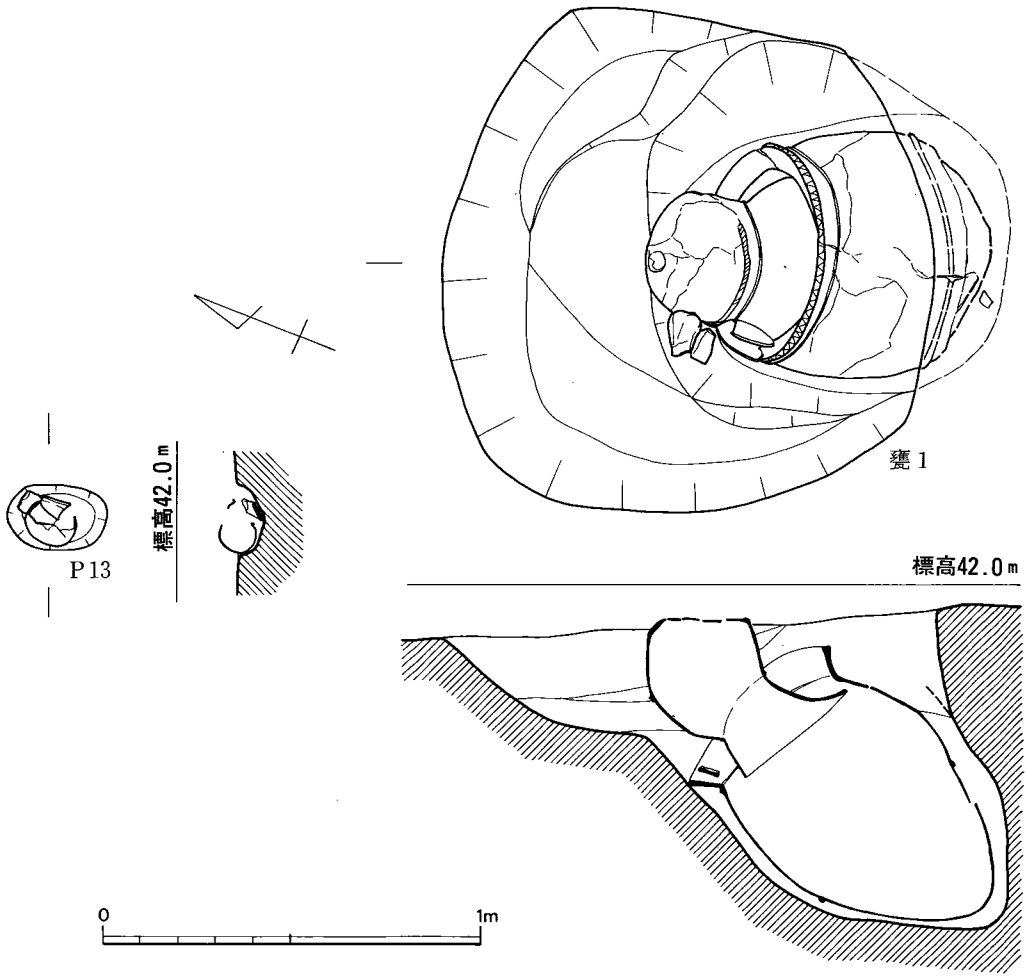


第 213 図　2号石棺墓実測図（1/30）

1号甕棺墓（図版96，第214図）

W363，S719に位置し，調査区の一番西側にある。墓壙は1.30m前後の不整円形を呈し，上甕に壺と下甕に甕の呑口形式のものである。下甕のカーブに沿った横穴内にその大半を挿入する。上甕は下甕に比べて口径の小さな壺を使用したため，呑口など粘土について目貼りを行っ

20

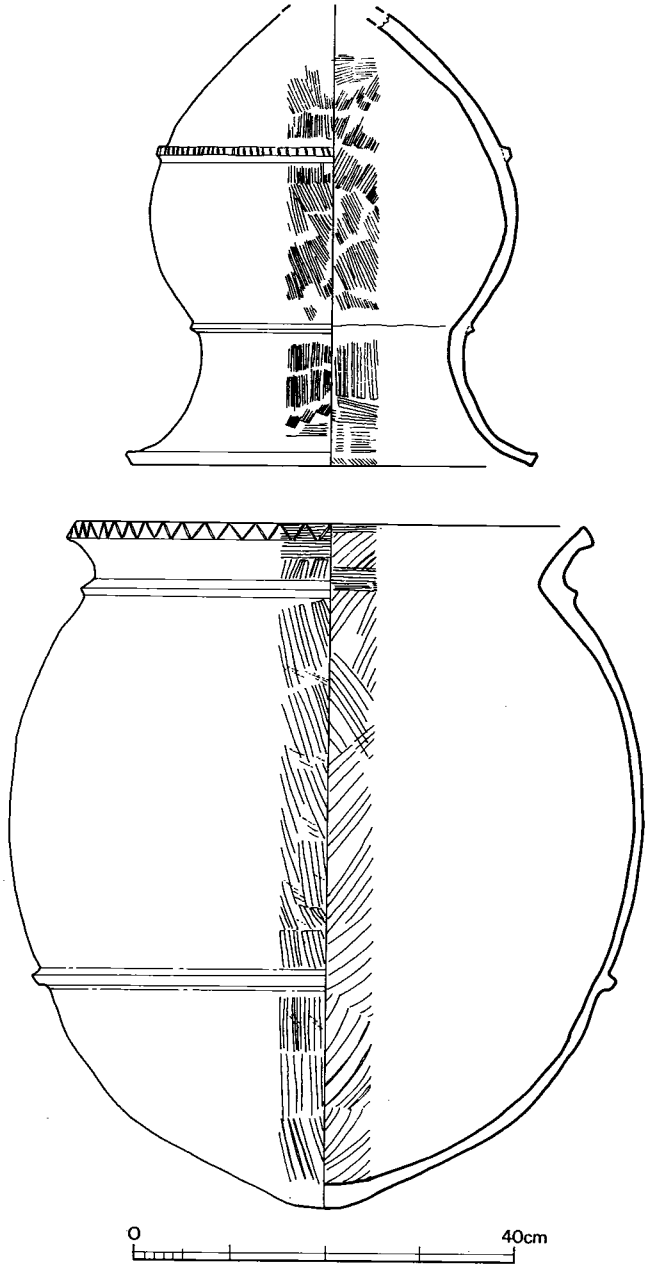


第214図 1号甕棺墓とP13実測図（1/20）

ている。主軸N22°Wである。墓壙外に北西側1.40mに楕円形の柱穴があり，小形丸底壺と鉄製の鋤先が検出されている。時期的には弥生後期の末期の所産と考えられる。

甕　棺（図版97-1，第215図）　上甕は壺形土器で，底部は丸底となるもので内外面の工具はハケ目である。胎土に小石を含み，焼成は良好で，色調は黄褐色を呈し，一部黒斑がある。器形は口縁部はラッパ状にひらいたもので，口唇部はヨコナデし頸部はハケにて斜行し，頸部下半に三角貼付凸帯を有し，胴部下半に「コ」の字状の貼付凸帯で，ハケ工具の小口にてキザミ目を入れている。調整は斜行ないし，直行で上→下へ施している。内面の調整は口唇内部は斜行で，そして横位に縦位方向に斜行，そして内底は横位で，表裏同一原体を使用している。

下甕は甕形土器で，口縁部は外反し，胴部は卵形を呈し，口唇部は肥大する。頸部に三角凸



第 215 図　1号甕棺実測図（1/8）

帯及び胴部下半に「コ」の字形貼付凸帯を1条有する。

底部はほぼ丸底に近い形態である。器面調整はタタキ→ハケ目を基調とし，タタキ痕の凹部が深いために，ハケ目で掻き消されていない部分が残っている。口唇部はナデでハケ目を消している。その上をハケ目原体の小口で，W字状のキザミ目をなしている。

この上甕及び下甕の組み合わせでは，弥生後期終末にはいるもので，橋口氏の編年観ではKVe期頃にいれられるものと考えられる。下甕は興味深い大形甕である。

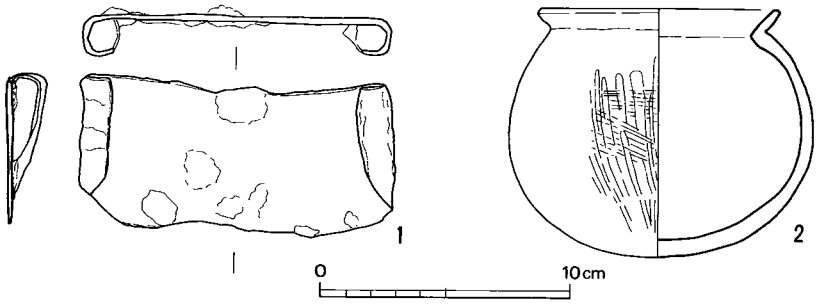
出土遺物（図版97-2・3，第216図）

次に甕棺墓の北西側で検出されたPit 13の中から出土した遺物について説明したい。第214図のように，平面形は楕円形のスリ鉢に落ちた柱穴の中から鉄製鋤先と小形丸底壺の出土をみた。

1は鉄製鋤先で，袋部を有するものである。

2は小形丸底壺で，口径9.8cm，器高9.9cm，胴部が最大径で12.2cmで，胎土に細砂（石英粒・金雲母）を含み粒子は粗い，焼成は良好で，色調は淡褐色である。口縁部は外反し，口縁部付近内外はヨコナデで，胴部から底部はハケ目を消すようにタテ方向のミガキをかけている。

時期的には，先の甕棺墓と同じ時期に捉えてもいいのではないだろうか。



第 216 図　1号甕棺墓供献鉄器と土器実測図（1/3）

歴史時代の遺構

1号集石・2号集石は1号石棺墓の西側にあって，3号集石は調査区の中央部に位置するもので，仲間の内では東西道と称していたものである。

1号集石（第211図）

1号石棺墓の西側にあって，不整円形の落ち込みの中に，人頭大から拳大の河原石を入れたもので，底まで30cmで，落ち込みの断面はスリ鉢状を呈している。その南側で，白磁の皿が検出されている。

2号集石（第211図）

1号石棺墓の西南側に位置しているが，石棺墓の上に造られたもので，全体が浮いた状態で出土している。この集石の中から出土した遺物は見られなかった。1号集石と2号集石は同時期である。

3号集石（第210図）

Pit 10の南側にあたって，東西方向に1.50mで長さ・幅20cm前後の小礫を中心とした集石で，道の路肩の一部と思われる。その集石の中に石鍋片や瓦器片等が出土している。

時期的には遺物から中世期のものである。

柱穴群（第210図）

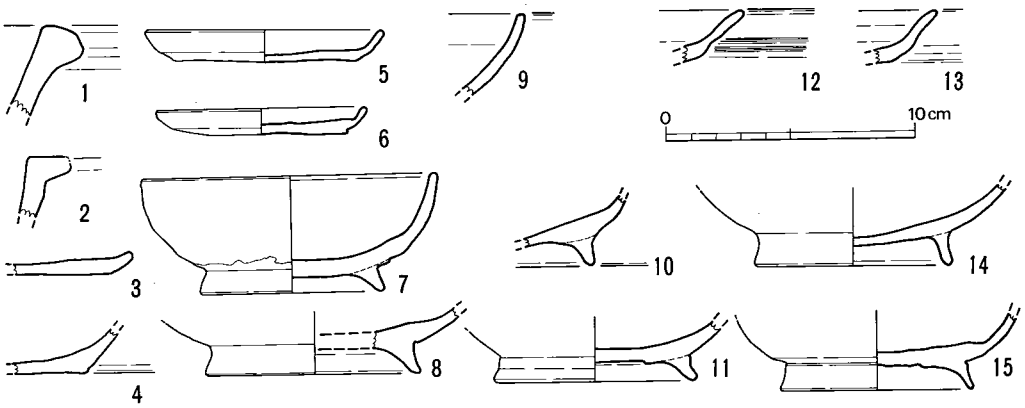
調査区の東側端部周辺に柱穴遺構があって，柱穴の中から，石鍋片・灯明皿片等の遺物が検出されている。

柱穴は建物としてのまとまりがつかなかった。

出土遺物（図版97-4・5，第217・219図）

中世の遺物は灯明皿・瓦器等の土器片・石斧・石庖丁片等の石器で，パンコン半分にも満たない。出土場所が明確に捕捉されるものについて図示した。

土　器（第217図）　1・2は土鍋の口縁部，1は3号集石の中より，2はPit 4から出土している。3・4は皿でPit 9から出土したもので，底部は糸切りで，3はその上に若干の板目痕があ



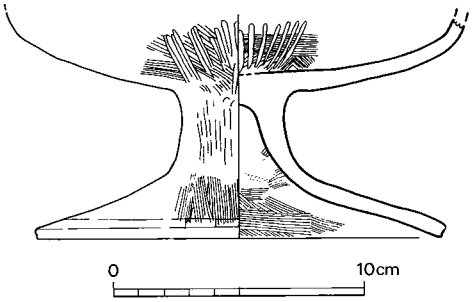
第 217 図 Pit 出土土器実測図 (1/3)

る。口径8.4cm，器高1.1cmで，胎土に微砂粒を含み焼成は良好である。色調は灰味おびた橙色で，調整は内外ともヨコナデで，4は口径9.5cm，器高1.3cm，胎土に微砂粒を含み，色調は橙色，調整は内外ともヨコナデである。灯明皿として使用されたものと考えられる。4～15は Pit 12から出土したもので，高台杯が中心で，内黒土師器である。12・13は杯である。他は高台を有する。器形は7で代表できる口径は11cm前後で，高台形は8cm前後で，貼付高台である。胎土は精良なる粘土を使用し，内面は灰色に黒味を帯びるものが多い。外面は灰褐色から褐色を呈する。焼成は良好で，調整はナデ仕上げで，一部にミガキをかけている。これらのものは，歴史時代の鎌倉のはじめ頃に位置づけられる。

高　杯(第218図)　Pit 10から出土したもので，胎土に細砂を含み，色調は赤褐色で，器面の調整はハケの後にミガキをかけている。内面はハケの後に暗文が残る。脚部から裾部内面はハケを施す。

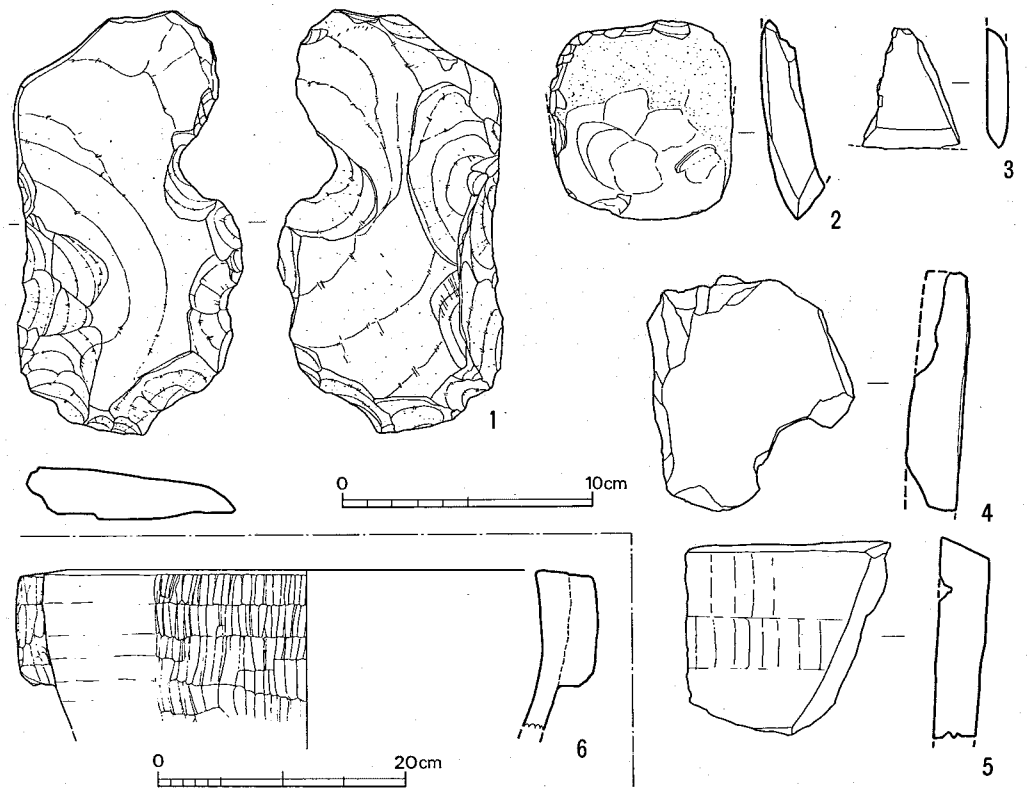
器形から，弥生後期後半と推定される。

石　器(第 219図)　1・2の石斧と4の石鍋片が3号集石から3は表土からで石庖丁の破片である。5は石鍋片で Pit 7から，6は Pit 5から出土している。



第 218 図 I-6 Pit12
出土土器実測図 (1/3)

1は石斧の未製品で，石斧は玄武岩である。側縁部の調整を行っている。2は石斧で刃部の破片で，局部磨製のもので，安山岩製である。3は石庖丁の破片で，刃部を有する。表土から出土したもので，石質は頁岩に似た風化した硬質の砂岩である。4は滑石製の石鍋破片で，裏面に穿孔をこころみている。石脈があってノミ痕は丁寧である。5は，表面にススが付着した滑石製の石鍋片である。6は Pit 5から出土した滑



第 219 図 Ⅰ-6～13 出土石器・石製品実測図 (1/3, 1/6)

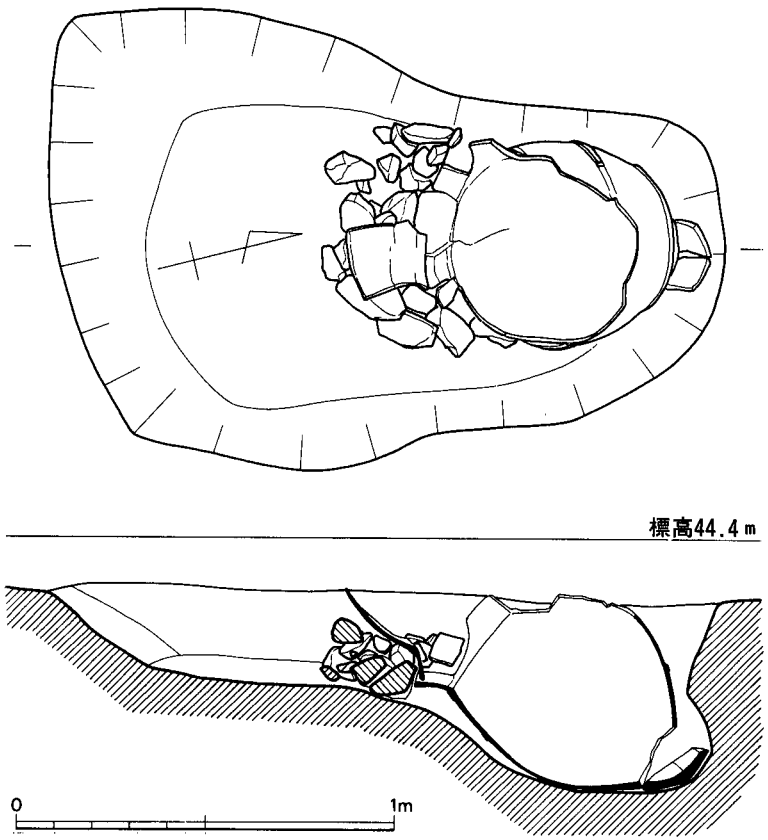
石鍋で，口径42.0cm，ノミ痕跡は明瞭である。外面の半分くらいはススの付着がみられる。全体的にはなめらかな仕上げを行っている。内面の削りはなめらかにしてある。鍔の部分以下はススの付着は厚い。これらの石鍋は鎌倉時代のはじめの13世紀頃にあたるものである。(副島)

(2) Ⅰ-13

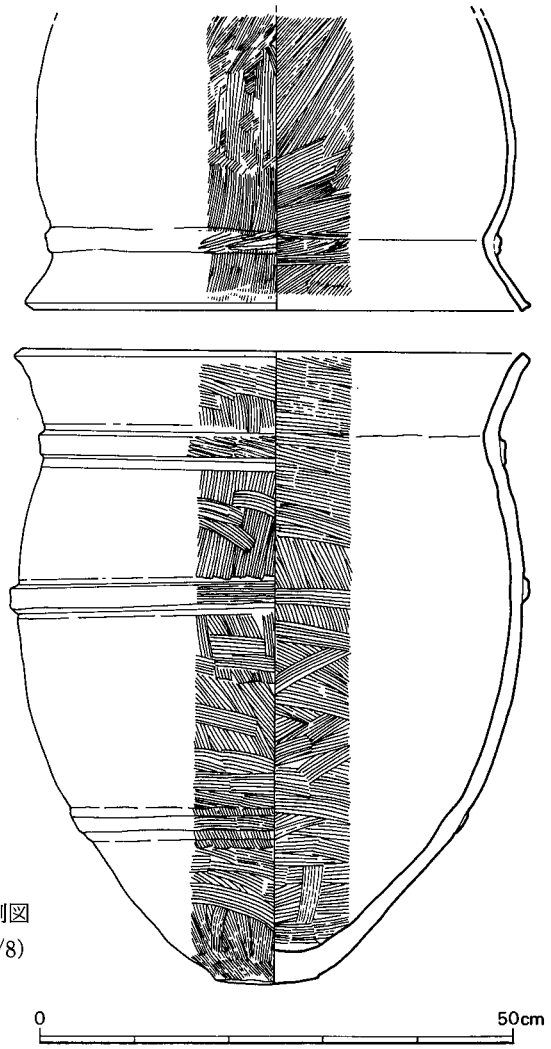
この地区は，昭和49年に試掘をしたもので，長さ6m，幅2mのトレンチを設定した。トレンチは東西に長く設定したが，その西側で甕棺1基のみ検出した。これを堺Ⅰ地区2号甕棺墓とする。

2号甕棺墓（図版98-1，第220図）

甕棺墓は，幅1.2m，長さ1.78mの不整長方形墓壙に挿入されているが，甕棺は斜壙に挿入されることから，墓壙の原形は長さ1.3mの竪穴であったろう。墓壙穴の甕棺は，主軸S14°Wの方向に向けた傾斜角41°30′で埋置し，合口式としている。甕棺は，下甕挿入後に上甕を固定させるために，上甕下の口縁部付近に礫を敷き詰めている。下甕の底部が破損していたが，これが埋



第 220 図　2号甕棺墓実測図 (1/20)



第 221 図
2号甕棺実測図
(1/8)

葬当初のものであるかどうか不明。

甕　棺(図版98-3，第221図)　上甕は，口径53.3cm，胴最大径50.5cmの大きさで，口縁は直線的にのびる。内外面のハケ目は粗いが，丁寧に施される。胴部外面のハケは，斜行ハケ後に口縁側から下にタテハケを施しているが，この時ハケ板に付着した粘土が，ハケ目端に付着して残っている。凸帯は，口縁下に扁平凸帯1本をめぐらすが，胴最大径部位にはなく凸帯を3本めぐらすものではない。凸帯の上面にはタタキ目がそのまま残る。胎土は，細砂(石英・長石・金雲母・赤褐色粒)を含み，赤褐色(橙)で，黒斑を有する。

下甕は，口径55cm，高さ67cm，胴最大径53.5cmの大きさで，口径が胴径を上まわる。口縁は直線的に延びるが先端近くで外反する。胴部は卵形を呈し，扁平凸帯3本をめぐらす。底部は，凸レンズ状の丸底化した平底である。内外面ともにハケ目が著しいが，凸帯を付設する前にもハケ目調整しており，凸帯下の体部に沈線もめぐらしている。凸帯上面にもタタキを行うが，上段凸帯にはタタキがそのまま残り，中・下段はハケ目で消している。胎土は砂粒を含む赤褐色を呈す。

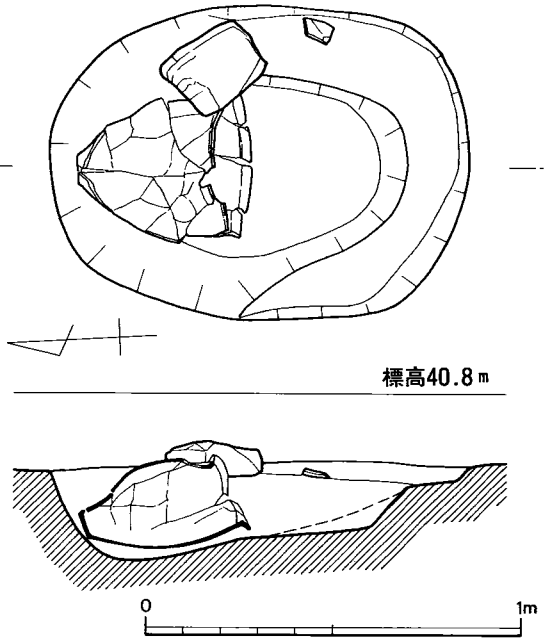
甕棺の時期は，扁平凸帯であることや直線的な口縁部から，西新式の新しいものに属し，土師器Ib式とすることができる。

5．II-27

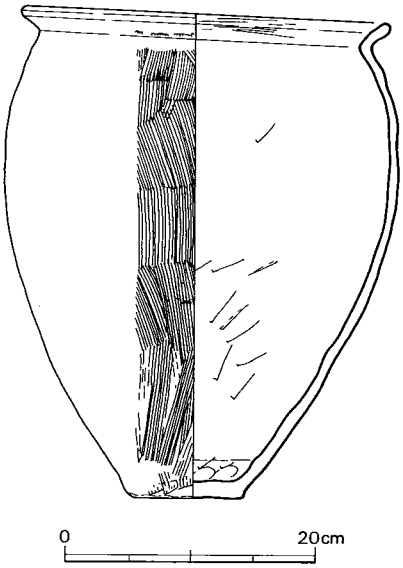
堺II-27地区は調査予定になかったが，圃場整備の表土剝ぎが遺構面に達し，墓壙内の石材の一部が露出したところから，小児単棺1基のみを調査した。

甕棺墓(第222図)

甕棺墓は，長さ1.11m，幅0.84mの角張った楕円形墓壙内に，主軸S 3°Wの方向で，傾斜角19°で埋置されている。墓壙内には，甕棺東側口縁付近に23cm×19cm，厚さ10cmの石が据えてある。この石は墓壙中段にあるところから，意識的に置かれたものであるが，地表に出るものではない。



第 222 図 II-27 甕棺墓実測図 (1/20)



第 223 図 II-27 甕棺実測図(1/6)

甕　棺(第223図)　これは単棺で，口径29.5cm，高さ38.2cmの大きさの小児用。器形は口縁が「く」の字形に外反し，胴部上位に最大径がある。胴外面にはハケ目が残るが，内面はナデられて板アテ痕が残っている。胎土には，粗砂を若干，細砂をかなり含み淡褐色をしている。弥生後期前半の中いもの。　(柳田)

6．II-30～32

Wの138から183，Sの775から805までの間を凵字のように調査区を設けた。発掘面積は1500m²である。

検出された遺構は甕棺墓6・木棺墓2・土壙墓12基で他に溝状遺構及び土壙・柱穴等であった。この調査区の年代は，弥生中期後半から弥生後期前半に位置する。以下説明を付加する。　(副島)

(1)　土壙墓

土壙墓は11基検出された。すべて素掘りの土壙墓で，上部は耕作によってかなり削平されており浅いものが多い。したがって本文中の墓壙の規模は，床面の内法で計測した。主軸は東西方向を示すもの(1・3・5・7・9・10・11号)，これに対して直行し南北方向を示すもの(4・8号)，斜行するもの(2・6号)とがある。出土遺物は，10号土壙墓の床面で石剣の切先が出土したのみである。したがって主軸方向による時期の差，その他の詳細は不明である。年代の決定にも問題があるが，10号出土の石剣から弥生前期末を上限とする時期ものと考えられる。

1号土壙墓(図版99-2，第225図)

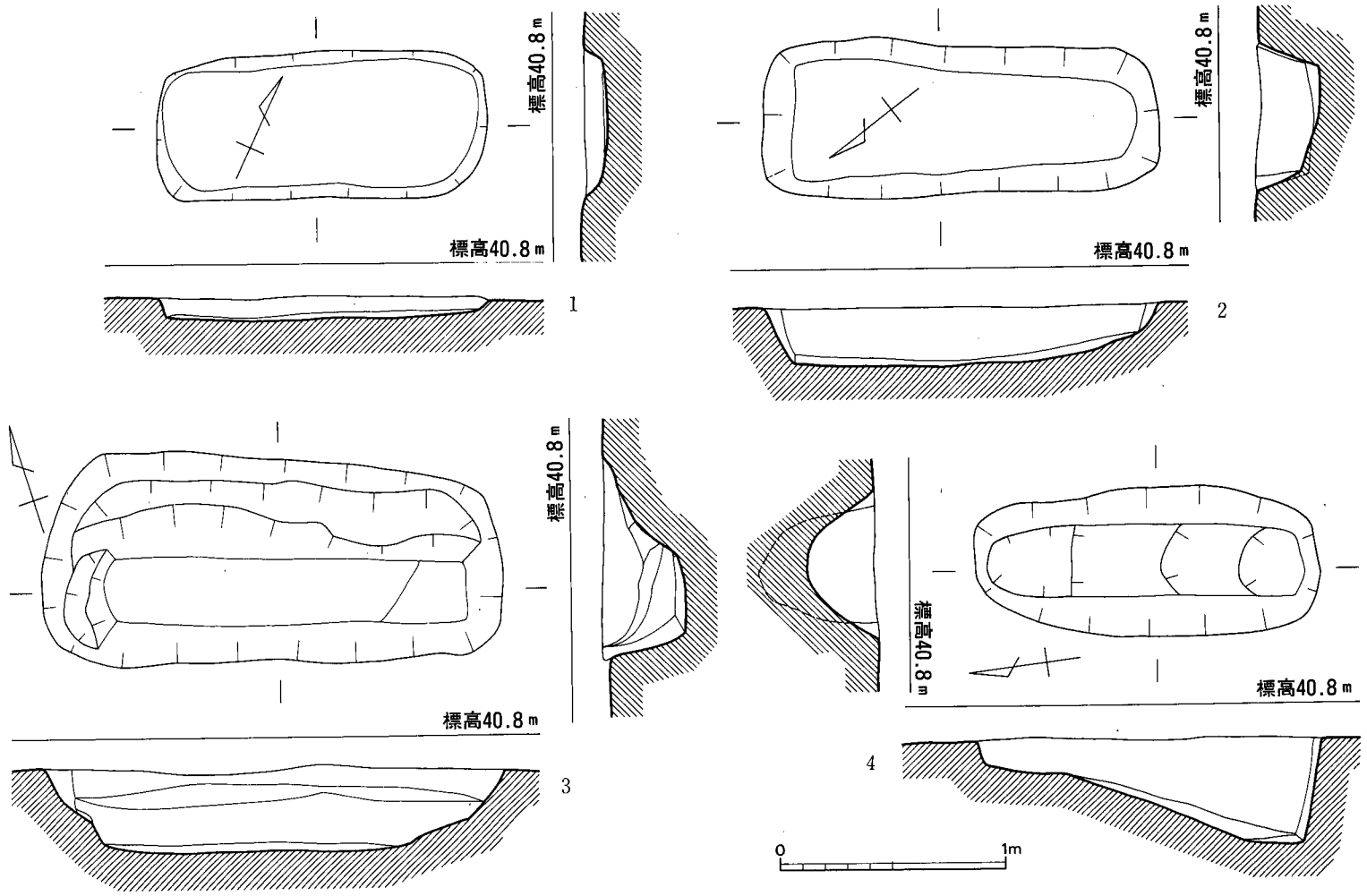
2号土壙墓の東側に位置するもので上部は削平されている。隅丸長方形のプランを呈し，主軸方位はN65°Eを示す。内法は，長さ1.37m，幅55cm，深さは現存で約10cmを測る。出土遺物はない。

2号土壙墓(図版99-3，第225図)

1号甕棺墓の北東側から検出された土壙墓である。隅丸長方形のプランを呈し，主軸方位はN37.5°Eを示す。内法は，長さ1.52m，幅は北東側小口部で約50cm，南西側小口部で約35cmを

甕6
木2
S780
木1
S790
甕3
W180
甕2
土8
土9
土5
土4
土7
土10
S800
甕1
土2
土1
土3
W170
土6
W160
甕4
甕5
土11
W150
W140
0
5m

第 224 図　堺 II-30～32 遺構配置図 (1/100)



第 225 図　1～4号 土 壙 墓 実 測 図 (1/30)

堺
測り，小口幅の広い北東側が頭位と考えられる。壁は斜めに立ち上がる。深さ25cmを測る。出土遺物はない。

3号土壙墓（図版99-4，第225図）

1号甕棺墓の約3mほど南西側から検出した土壙墓である。主軸方位はN72.5°Wを示す。隅丸長方形のプランを呈する。内法は，長さ1.6m，約30cm，深さ約35cmを測る。壁は南側を除き斜めにゆるやかに立ち上がり，わずかな段を有して墓壙上端部につながる。

4号土壙墓（図版99-5，第225図）

主軸方位はN8°Eを示し，プランは隅丸長方形を呈する。内法は長さ1.4m，幅約30cmを測る。床面は，北側から南側に向かって傾斜している。深さは，浅い北側で約15cm，南側の最深部で約45cmを測る。通常の足部掘り込みの土壙墓とは，形態を異にする。出土遺物はない。

5号土壙墓（図版100-1，第226図）

4号・8号土壙墓の間に位置し，主軸はほぼ東西方向を示す。プランは長方形を呈し，内法は，長さ1.73m，幅約40cm，深さ約40cmを測る。床面は平坦で，壁はやや斜めに立ち上がる。東側小口部は，床面から30cmほどの所に段を有するが，他の壁から判断して蓋のせの段とは考えにくい。出土遺物はない。

6号土壙墓（図版226図）

不整長楕円形のプランを呈する小形の土壙墓である。主軸方位はN60°Wを示す。内法は，長さ97cm，幅は中央で約35cm，深さは約20cmを測る。床面は平坦で，壁はやや斜めに立ち上がる。

7号土壙墓（第226図）

隅丸長方形のプランを呈し，主軸方位はN76°Wを示す。内法は，長さ1.38m，幅約35cm，深さ約20cmを測る。床面は中央から西側は平坦で，東側はやや傾斜している。出土遺物はない。

8号土壙墓（第226図）

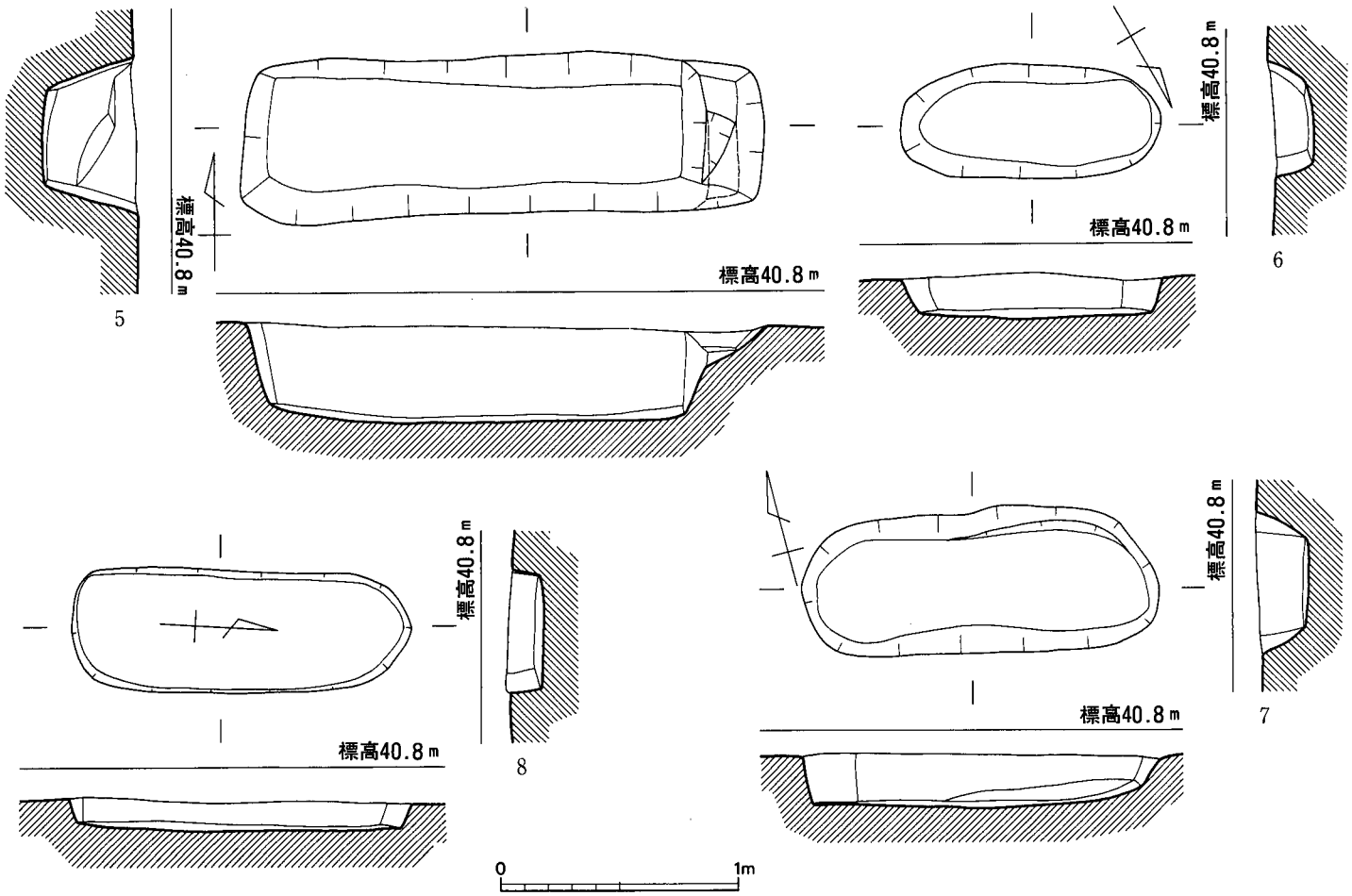
東側に隣接する5号土壙墓に直行する土壙墓で，主軸方位はN4°Wでほぼ南北を示す。隅丸長方形のプランを呈し，内法は，長さ1.37m，幅47cm，深さ約15cmを測る。床面は平坦である。出土遺物はない。

9号土壙墓（図版100-2，第227図）

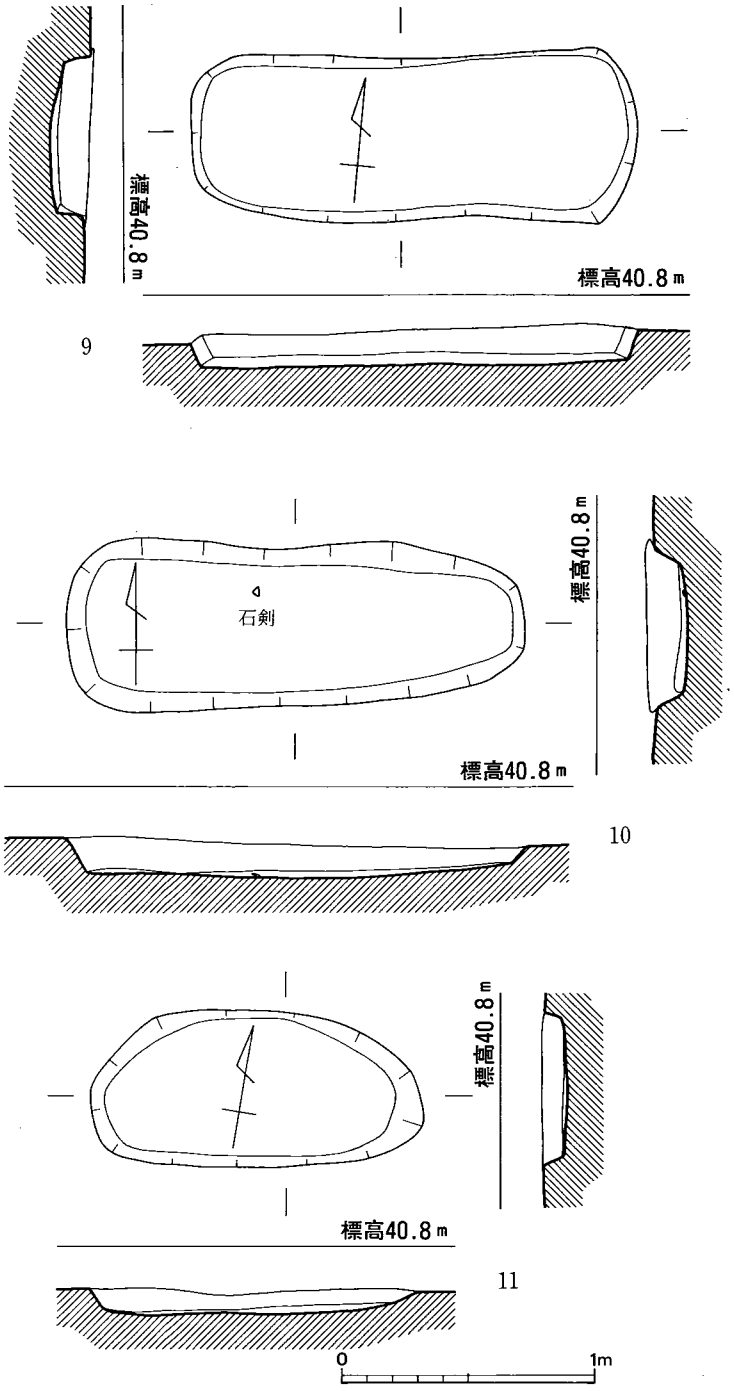
8号土壙墓　2号甕棺墓に隣接して検出された隅丸長方形を呈する土壙墓である。主軸はN85°Eを示す。長さ1.69m，幅は，東側小口部で60cm，西側小口部で約50cmを測る。床面は東側が4cm位高くなっており，東側が頭位と考えられる。現存する深さは約15cmである。出土遺物はない。

10号土壙墓（図版100-3，第227図）

土壙墓群の最も西側に位置する。隅丸長方形を呈し，主軸は東西方向を示す。長さ1.68m，幅は，西側小口部で約50cm，東側小口部で約30cmを測り西側が広い。現存する深さは約15cmであ



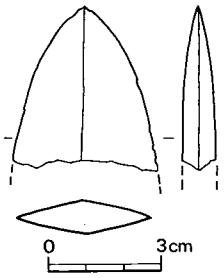
第 226 図　5 ～ 8 号 土 壙 墓 実 測 図 (1/30)



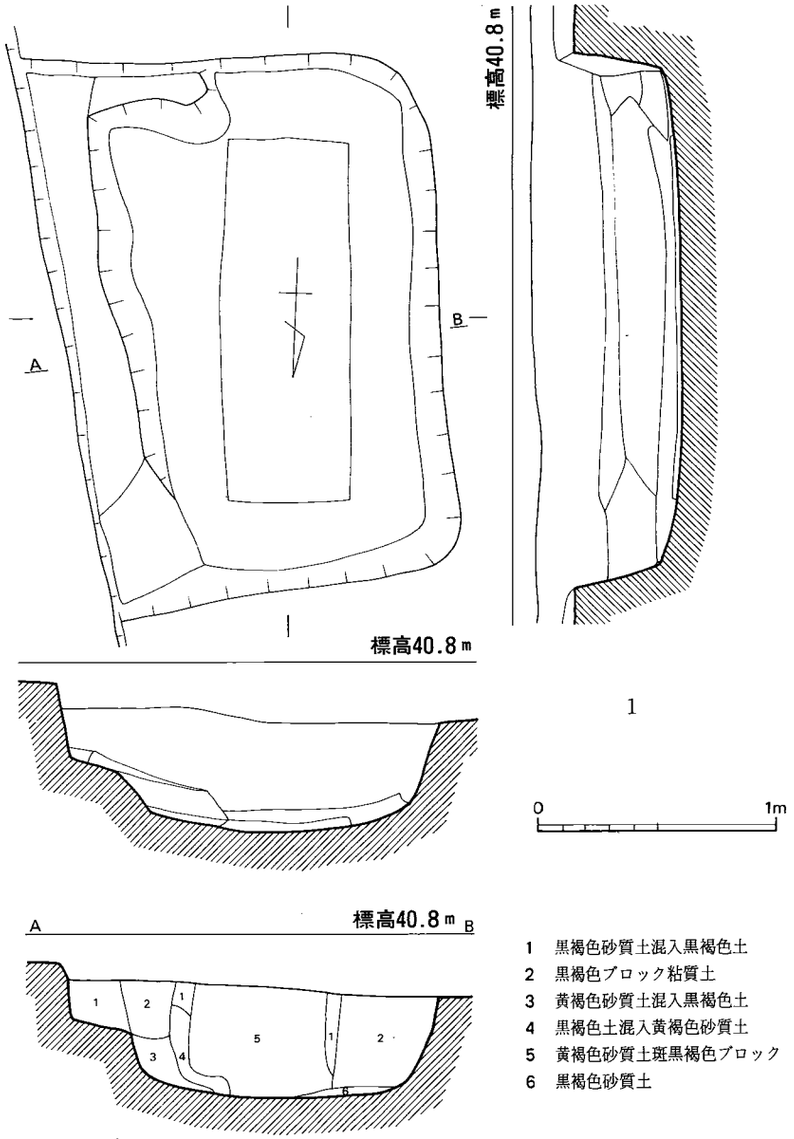
第 227 図　9～11号土壙墓実測図（1/30）

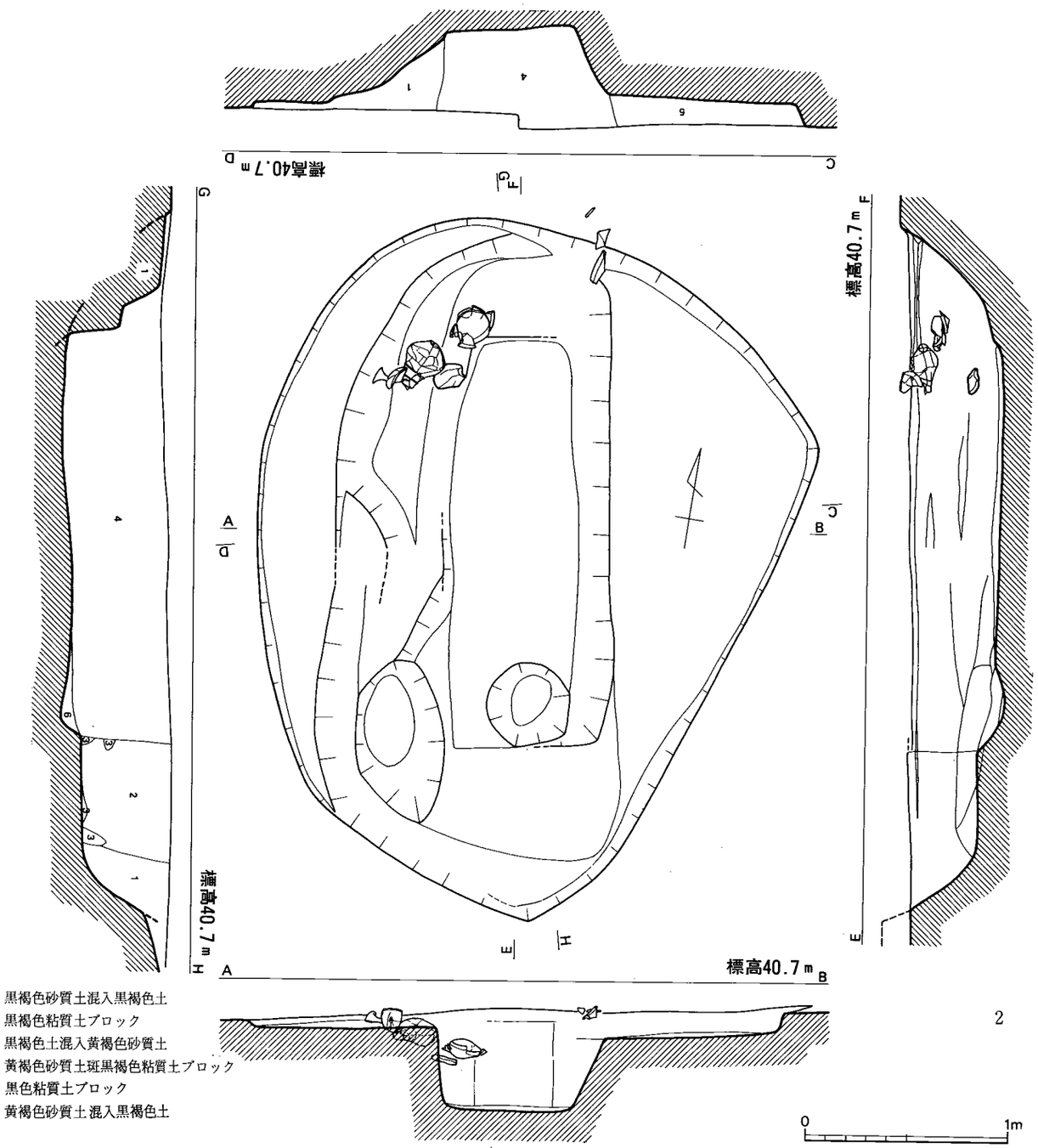
る。床面は中央部が最も低く，両小口部に向かってやや高くなる。頭位は幅の広い西側と考えられる。床面の中央より15cmほど西側で，北壁寄りの所で，磨製石剣の切先が出土した。切先は西側を向き先端がやや上向きになっている。出土位置は，被葬者の頭位を西側と考えると左腰付近にあたる。出土状態等から見て副葬品とするよりも，体内に突き刺していた可能性が高いと思われる。

磨製石剣（図版100-5，第228図）　10号土壙墓の床面からの出土品で切先で折損している。現存長4.3cm，折損部で幅3.8cm，厚さ9㎜，重さ12.9gをはかる。中央に明瞭な鎬が通り，断面は菱形を呈す



第 228 図
10号土壙墓
出土石剣実測図（1/2）





第 229 図　堺 II-30　1・2 号木棺墓実測図 (1/30)

る。丁寧に研磨され刃部は鋭利である。横方向に条線状の研磨痕が観察できる。石材は角閃雲母片岩である。

11号土壙墓（第227図）

検出された土壙墓の中で最も東側に位置するものである。不整楕円形のプランを呈する小形の土壙墓である。主軸はN80°Eを示す。長さ1.14m，幅は中央で54cm，残存する深さは約10cmを測る。床面は東側から西側に向かって傾斜し，壁は斜めに立ち上がる。出土遺物はない。

(2) 木棺墓

木棺墓は調査区の西側端から南北方向に縦に並んで2基検出された。

1号木棺墓（図版101-1，第229図）

1号木棺墓は，調査区の西側に設定したトレンチで発見された成人墓である。まず大きな墓壙を掘り込んだ後，その中央部に棺を組み立て蓋のレベルまで裏込めを行う方法で作られている。

墓壙の規模は，長さ2.28m，中心部幅1.38m，深さ48cmの大きさを測る。この中に棺の組み立てが行われるが，墓壙のプランを検出した面では棺のプランは確認することができなかった。このため墓壙のほぼ中央の短軸に土層観察用の土手を残し，他を墓壙底まで掘り下げた。この結果，墓壙のほぼ中央部に，幅約55cmの黄褐色砂質土斑黒褐色ブロックの土層が確認できた。また側板材の痕跡は認められなかったが，黒褐色砂質土混入黒褐色土・黒褐色土混入黄褐色砂質土が底部から直に立ち上がる状況で観察できた。これと同時に墓壙底にも，長さ1.55m，幅55cmの長方形でやや舟底状を呈する棺の痕跡が確認でき，木棺が内蔵されていたものと判断した。側板・小口板の掘り込みがないため棺の組み合わせ方は不明であるが，墓壙底の痕跡からみて，小口板・両側板の端を合わせて箱式に組み合わせたものと思われる。また底板が使用された可能性も考えられる。棺の主軸はN 2°20′Wを示す。出土遺物はない。

2号木棺墓（図版101-2，第229図）

1号木棺墓の北側に位置し，北西側には6号甕棺墓が隣接している。

2号木棺墓は，1号木棺墓とは作り方がやや異なる。まず長軸約3.4m，短軸約2.7m，深さ約10cmの不整長方形の墓壙を掘り，そのほぼ中央に棺を内蔵するための壙を掘り込む2段掘の成人墓である。1段目を掘り下げた段階で，2段目の掘り込みは確認できたが，棺のプランは1号木棺墓と同様に表面では把握できず，縦・横の土層断面によって観察しなければならなかった。2段目の掘り方は，両小口側では1段目を延長した形で斜めに掘り込まれ，墓壙底での長さは，2.7mを測る。両側は，短軸のほぼ中央部に1.37mの幅で掘り込まれ，1段目から底面までの深さは約30cmある。棺は黄褐色砂質土斑黒褐色粘質ブロックで埋まり，裏込めは，黒褐色砂質土混入黒褐色土・黒褐色粘質ブロックで埋められている。これによると棺の内法は推定で，

堺

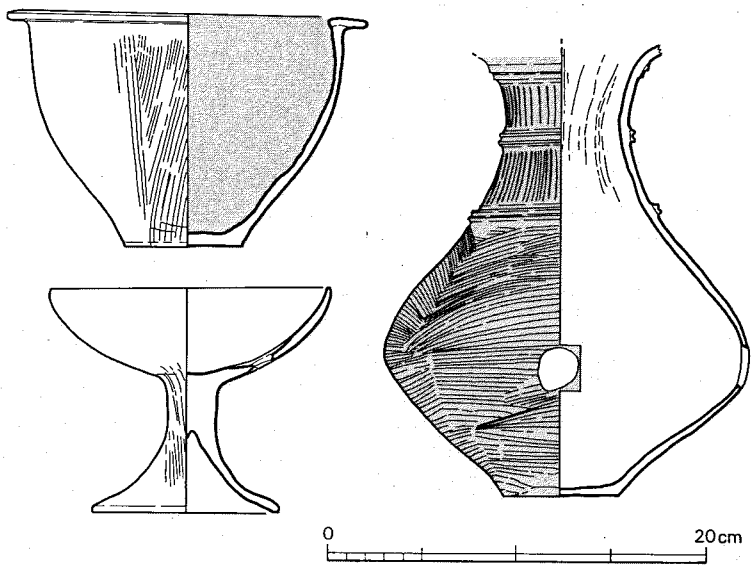
長さ約2m，幅約65cm，深さ約30cmを測る大きなものになる。主軸はN8°Wを示す。棺の組み合わせ方は，南側小口部底面で一部凹みがあるが，小口板・側板の明確な掘り込みはなく詳細は不明である。1号木棺墓と同様に箱式に組み合わせるものではなかろうか。

出土遺物は，木棺の北西側隅に，丹塗土器3個体が副葬されていた。いずれも2段目の裏込め上部にあたる所で，高杯・壺は横に寝た状態で，鉢はこれより一段低い位置で検出された。高杯の杯部と壺の胴部には穿孔がある。木棺墓の年代は，副葬の土器から弥生中期後葉の時期と考える。

土　器（図版102-3，第203図）

鉢（1）　口縁を若干欠く鉢で，口縁部は逆L字状を呈する。口縁径19.3cm，内径は14.9cm，底径6.4cm，器高12.3cmを測る。粗砂・赤褐色の砂粒を含む胎土で，焼成は良く，赤褐色を呈する。口縁部は横方向のナデを施し，内面は横方向に丹塗研磨されている。外面はハケのあとナデている。

壺（2）　口縁部を欠く壺で，残存器高23.9cm，頸部最小径5.8cm，胴部最大径19.4cm，底径6cmを測る。細砂を含み，焼成は普通である。色調は外面赤褐色，内面は淡黄褐色を呈する。頸肩部の屈折はS字を呈し，頸部は大きく外反する。頸部には3状の口唇状凸帯をめぐらし，その間には暗文が施されている。胴部下位は若干外反したカーブから底部に屈折する。胴部の張った安定感のある壺である。外面は横方向に若干弧を描きながら，丹塗磨研が施されている。胴部に約2cmの穿孔が焼成後に行われている。底部はヘラケズリ状である。内面は頸部にしぼり痕が認めるれる。胴部はナデられている。



第230図　2号木棺墓出土土器実測図（1/4）

高　杯（3）　約2分の1を欠損する高杯である。杯部径14.8cm，脚裾径10cm，器高11.9cmを測る。胎土には赤褐色の細砂を含み，焼成は普通である。色調は明赤褐色を呈する。杯部は半球形を呈し，口縁端部は平坦に仕上げられている。外・内面ともにナデられている。杯部下位に焼成後に外側からの穿孔が1個あ

る。脚は杯部との屈接部から直線に下がり，中位から「ハ」の字状に開く。外面はタテ方向のミガキ，内面はしぼり痕が残り，ナデられている。（池辺）

(3) 甕棺墓

この地区の甕棺墓の分布は散発的である。土壙墓みたいな集中はなされていない。

1号甕棺墓（図版103-1，第231図）

W157とS800の位置で，調査区のほぼ中央部にあたる。主軸をN110°Eで，小児甕棺上半部は削平されているため墓壙の全貌を理解できない。しかし一応推定すると墓壙は平面形が70cm前後の方形を呈し，下甕の横穴部を掘り，上甕を差し合わせた接口式のものである。上甕も甕形土器，下甕も甕形土器である。

甕　棺（図版105，第233図1）　上甕は，甕形土器で日常用器を転用したもので，口縁部が「く」の字状に外反し，口縁内側に稜が明瞭に残っている。直下に三角凸帯を有し胴径が口径よりも大きい。胎土に小砂粒を含み，焼成は良好で調整にはハケを使用し，口縁付近はヨコナデし，胴部には縦位方向及び斜行方向に施している。内面はハケをナデ消している。色調は暗黄褐色で，胴部にはススの付着がみられる。

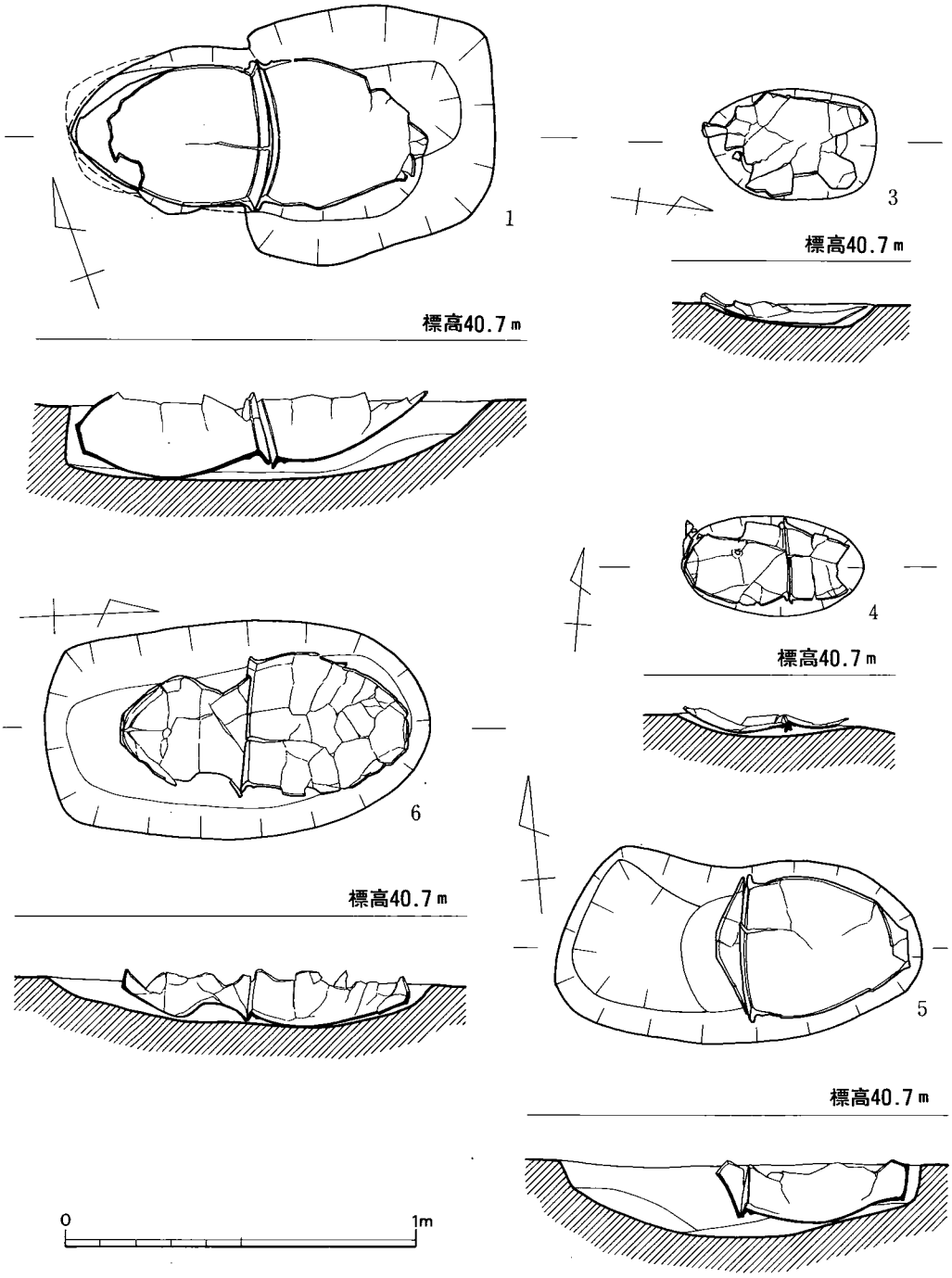
下甕は，甕形土器で日常用器を転用したもので，口縁部が「く」の字状に外反し，内側に稜をもつものである。口縁直下に三角凸帯を有し，最大径が口径と胴部径にある。胎土に小砂粒を含み，焼成は良好で，調整は細いハケを工具として使用し，内面はハケをナデにて消している。口縁部及び輪積の線に沿って指痕が残り，内底には押さえた指痕を明瞭に捕捉する。外面は口唇部から凸帯部にいたるまでヨコナデし，その下半は縦位方向を中心とするハケ目で一部に斜行する。幅は2cmで10～12本を数える。色調は赤褐色で，胴部下半まで黒斑し，その上にススの付着がみられる。

これらの上下の甕形土器は時期的には弥生後期前半に位置づけられ，いわゆる森博士のいう桜馬場式に位置づけられる。

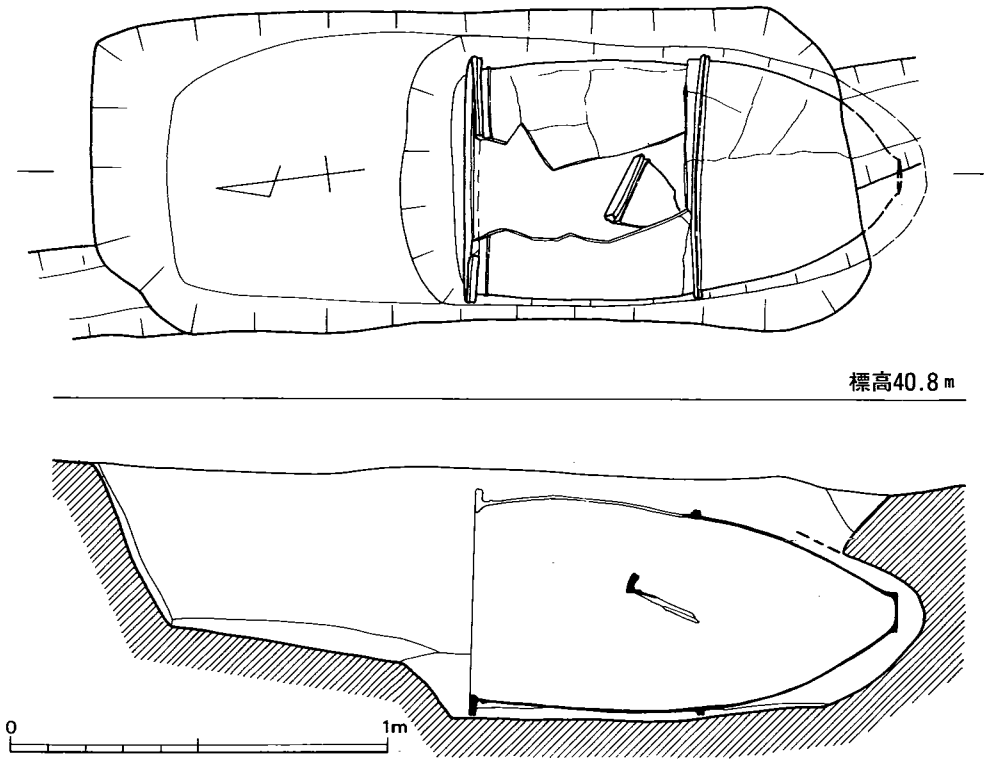
2号甕棺墓（図版103-2，第232図）

調査区の中央部にあって85m前後の方形の墓壙を掘り，それを基として南側に大形の甕形土器にそって1段掘り下げるようにして横穴を掘って水平に埋置したものである。木蓋を使用した単棺の成人棺である。主軸をN7°Wで，ほぼ北を向いている。

甕　棺（図版105，第233図2）　単棺のもので，大形棺である。口径65cm，器高115cm，胴部の最大幅が61cmである。口縁部は逆L字状のもので，口縁は若干内に傾斜して口がすぼまったように見える。口縁直下に1条の三角凸帯を有し，胴部下半に「コ」の字形の2条のシャープな貼付凸帯を有する。器壁は10mm前後の厚さで器面の調整は胴部上半部はハケをナデ消している。



第 231 図　1・3～6号甕棺墓実測図（1/20）



第 232 図　2号甕棺墓実測図（1/20）

ただ工具のトマリが残り，残痕の内面には指痕で押さえた痕跡がのこる。胴部下半から底部にはハケが明瞭に残っている。口縁部から直下の三角凸帯付近までと胴部の2条の「コ」の字貼付凸帯部分はヨコナデで，内面はナデ仕上げで，指痕が残っている。胎土に細砂粒を含み，焼成は良好で色調は黄褐色で，口縁直下から胴部下半まで黒斑が残っている。

この甕棺墓の時期は弥生中期後半の森博士の立岩式で橋口氏のKIIIb式である。

3号甕棺墓（図版103-3，第231図）

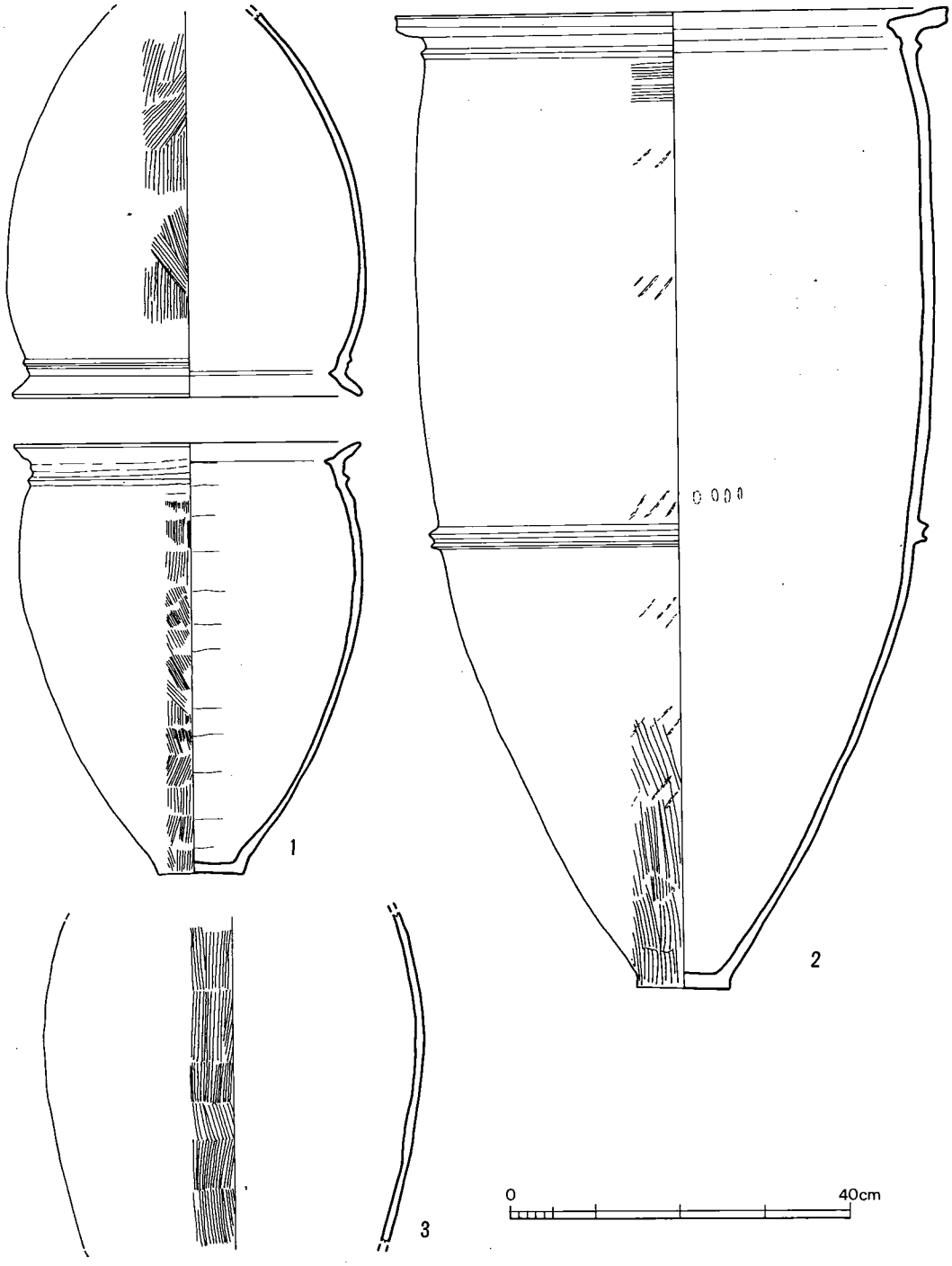
全体が削平されて，残りが悪い甕棺で，調査区の西側にある。下甕の甕形土器の胴部破片である。主軸をN7°Wである。日常用器を転用した小児棺と思われる。

甕　棺（第233図3）　日常用器を転用して使用したもので，胴部の部分だけで器形は不明で，表面にススの付着がみられる。器面の調整はハケ目で，内面はヨコ・斜行ナデである。色調は黒褐色，焼成は良好で，胴部が最大径になるものと推定される。

時期的には不明な点が多いが，弥生中期後半から後期の前半の間と考えた方が妥当である。

4号甕棺墓（図版103-4，第231図）

調査区の東側にあって，大半が削平されたもので，小児棺で，上甕と下甕とも甕形土器で，接口式の甕棺墓であった。主軸をN85°Eで略東西方向に埋置される。



第 233 図　1～3号甕棺実測図 (1/8)

甕　棺(図版105，第234図４）　上甕は口径28cmで，胴部の最大径と同一するが口縁部は外反し，「く」の字を呈し，直下に三角凸帯を有する。内側に稜がはいり，割れ目が１ヵ所に３個ある。土器をつくる時の目安としたもので，器面の調整は粗いハケ目で，口縁部付近はナデ消している。内面はナデである。色調は淡褐色で，胎土に石英・金雲母等を含み，焼成は良好である。

下甕の口縁部は逆Ｌ字を呈し，直下にだらけた三角凸帯を有している。口縁は内傾し，胴部下半が張っている。ほぼ中央部に打欠穿孔の穴がある。胎土に細砂粒を含み，色調は褐色で，器面の調整は縦位方向のハケ目で，口縁部付近はヨコナデでハケ目を消している。内面はナデである。焼成は軟質である。

時期的には弥生中期後半に位置するものと考えられる。

５号甕棺墓（図版104-1，第231図）

調査区の東側にあって，半分以上は削平されている。墓壙は長軸100cm，短軸60cm前後の楕円形を呈し，上甕に蓋形土器と下甕に甕形土器が差し合わせになっている。主軸はN85°Wで，小形の小児棺である。

甕　棺(図版105，第234図５）　上甕は蓋形土器で，口径38.2cm，器高16.5cmを測る。胎土に細砂粒を含み，色調は茶褐色で，器面の調整はハケ目の斜行で，撮部は指痕のナデツケで内面はナデ仕上げで撮部の内面は指痕のナデツケがある。口唇部はヨコナデである。焼成は軟質であるが良好である。

下甕は，甕形土器で，口径38.8cm，器高46cmで，口縁部は逆Ｌ字を呈し，口縁部直下に三角凸帯をもち，口径と胴部最大径と一致する。口縁部は内傾し，内部に稜をもっている。胎土に細砂粒を含み，色調は灰褐色を呈し，器面調整は縦位方向のハケ目で，底部にいたっている。口縁部付近はヨコナデに内面はヨコ方向にナデている。ナデ仕上げで指痕が輪積の接合部に残る。焼成は良好で，器壁は薄手である。

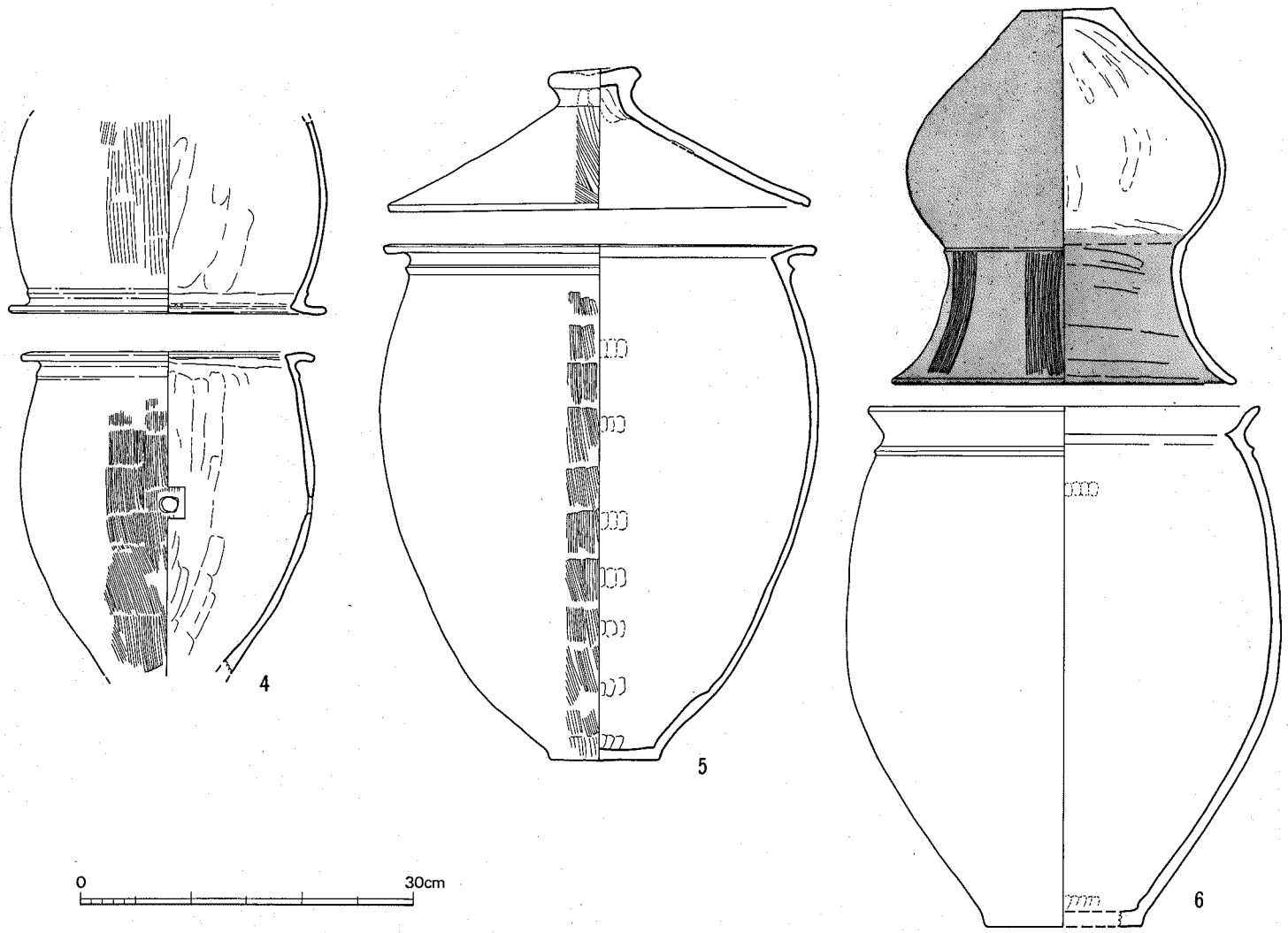
この甕棺墓の時期は下甕によって橋口編年のＫⅣaの弥生後期前半に位置づけられる。

６号甕棺墓（図版104-2，第231図）

調査区の北西端にあって，主軸をN3°Eにとり，上部半分は削平され，墓壙は長軸が1.10m，短軸が65cmの楕円形を呈し，上甕に丹塗りの開口壺形土器，下甕に甕形土器を接合させている。

甕　棺(図版105，第234図６）　上甕は，丹塗りの開口壺形土器で，球形部と開口部の境に三角凸帯を有する。開口部には口唇直下から５ヵ所に暗文が配置され，丹塗りされ，ヨコミガキが施されている。丹は底部までいたり，内面は開口部から球形部直上まで塗られている。それ以下はナデである。胎土に細砂粒を含み，色調は赤褐色で焼成は良好である。

下甕は，甕形土器で，逆Ｌ字が強く，「く」の字に近い口縁部で，内面に稜を有し，口縁直下に１条の三角凸帯をもつ，口径よりも胴部最大径が大きい。胎土に細砂粒を含み，色調は黄褐



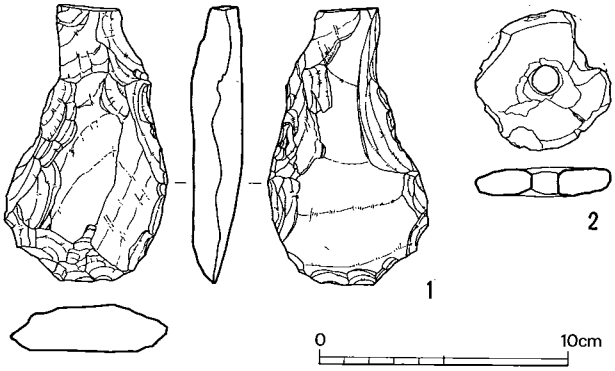
第 234 図　4 ～ 6 号甕棺実測図 (1/6)

色で器面の調整は，両面ともナデ仕上げで，胴部中央部に黒斑がある。底部内面には指痕が残り，三角凸帯の内面にも指痕が残っている。焼成は良好である。

時期的には，下甕から弥生後期前半と位置づけられる。

石　器（第235図）

2点の出土がみられた。1は石斧で，玄武岩製で重量182ｇである。調査区中央南側の土壙より出土している。2は有孔の円盤状を呈するもので，石質は白雲母片岩で重量は47ｇで，おもりとして使用したものと思われる。表土より出土している。　（副島）



第 235 図　II-32 出土石器実測図 (1/3)

7．小　結

堺地区の調査では，弥生期の墓地と古墳期の住居跡の一部が明らかになった。弥生期の墓地としては，II-30～32地区の前期の土壙墓群と中期後半の甕棺墓群と木棺墓群，II-27の後期前半の甕棺墓，Ⅰ-2～13の弥生終末から古墳前期の甕棺墓と石棺墓群が検出された。

II-30～32の前期土壙墓群は，土器副葬がないところから，時期を限定できないところもあるが，10号土壙墓から出土した磨製石剣の切先が時期の目安となる。磨製石剣は，前期から中期前半に盛行するが，中期の鉄剣形石剣には扁平なものはなく，10号土壙墓出土例のような型式は有柄式石剣の新しいものや前期後半の磨製石剣に見られる。

II-30～32地区の中期後半の墓地群は，供献土器を持った木棺墓が含まれていたことで，同時期の墓地群にも木棺墓が存続することが明らかとなった。しかも，北部九州で前期から中期前半に見られ，終末以後になって北部九州の周辺地域に再現する小口掘込式木棺と違って，木板自体を組み立てる木棺であることに意義がある。

2号木棺墓に供献されていた土器は，中期後半のうちでも新しいもので，南小路1・2号甕棺墓と同時期であるところから，棺形式の採用に階級差がうかがえる。中期後半の副葬品を持つ棺の形式は，山口地方は別として北部九州では甕棺墓に限定されていることは，腐食しやすい木棺を避けたとしか思えない。

また，中期後半に木棺墓が存在する意義の一つとして，畿内地方の第三様式の時期に存在する木棺墓との比較である。大阪府内で発見される木棺墓は，棺自体の木材が残っているために，そ

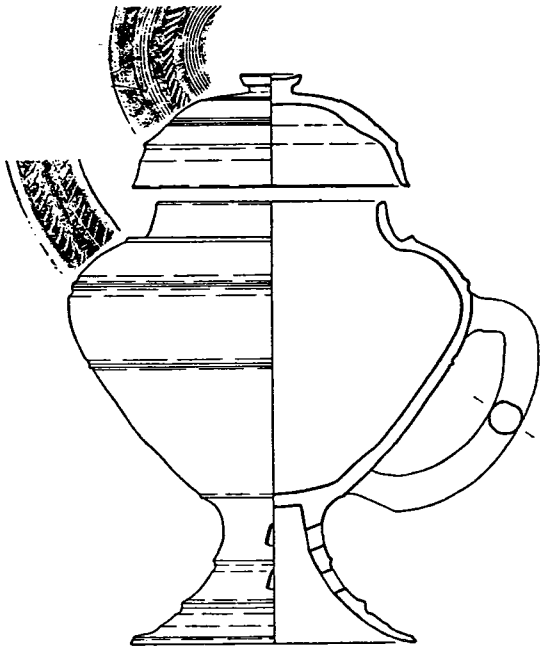
の組み合わせ法が明らかにされている。北部九州の木棺の組み合わせ法は，今後の資料増加に期待したい。

Ⅰ-2～13地区の墓地群は，Ⅰ-6地区1号甕棺墓が弥生終末，Ⅰ-2地区1号石棺墓とⅠ-13の2号甕棺墓がIb期であることから，この墓地群の石棺墓を含めた時期が限定される。石棺墓は，副葬品がない場合は時期決定が困難であるが，堺地区の場合は1号石棺墓や1号甕棺墓に棺外の供献土器があり，1号甕棺墓の場合は鉄鏃先まで供えていた。このように墓壙外に土器を供献する例は，福岡市野方中原6号石棺墓(註9)にもあり，この場合は石棺墓を中心として長方形に土器が配置されていた。時期的にも，堺地区例と野方中原例はほぼ同時期であり，この時期の墓地形態や盛土墳丘墓とも関連してくる問題を含んでいる。

堺Ⅰ-2～4地区の古墳の住居跡群は，ほぼ同時期の5軒を調査した。この住居跡の持つ意義は大きく，第1に陶質土器の年代，第2に同時焼失する原因の2点にある。

第1の陶質土器の年代は，弥生期に伴う瓦質土器の年代がいまだ明らかにされたとはいえないだけに，古墳期に伴う瓦質土器も含めて，硬質陶質土器の日本の年代が問題となってくる。この点において，6号住居跡出土一括土器の資料価値は大きい。

6号住居跡出土の把手脚付短頸壺は，同型式の酷似品が韓国釜山華明洞7号墳から出土している(註10)。この華明洞7号墳の時期については，定森秀夫氏がかの地方の高杯を中心とした編年が発表されており，第Ⅲ段階で4世紀後葉という年代があたえられている(註11)。この年代推定の根拠になっているのは，岐阜県遊塚古墳出土の陶質土器蓋が華明洞7号墳出土の把手付短頸壺の蓋に酷似していることにある。遊塚古墳は4世紀末の年代があたえられていることから，「華明洞古墳群出の大部分の陶質土器を，さらに幅をもたせて，4世紀末を含めたほぼ4世紀後葉頃を中心とした年代」としている。また，遊塚古墳出土の蓋とこれに酷似する華明洞古墳群の土器に黒色粒が多く認められることも根拠の一つにしている。この黒色粒を含有する土器が，洛東江下流域で生産されたものに限定できるのであれば，三雲堺6号・7号住居跡出土の陶質土器2種は舶載土器の裏づけがとれたことになる。ところが，この黒色粒は，



第236図 華明洞7号墳出土把手付短頸壺(1/3)

八龍Ⅰ-18の1号住居跡の須恵器にも，わずかながら含有していることや，甘木市大岩東部5号墳出土須恵器杯数個のように須恵器Ⅲa式までも見られる(註12) ことから一考の必要もあるのではなかろうか。

三雲堺地区6・7号住居跡出土陶質土器は，前述したように土師器Ⅱb式に直接連続する7号住居跡出土甕(18)やそれと同型式，あるいは後続する6号住居跡土器群を4世紀末から5世紀初頭とすることができることから，定森氏と同様な結果が得られる。

時期的には，甘木市池の上墳墓群の調査結果からも同様な発表がある(註13)。池の上墳墓群の陶質土器の年代的根拠は，第1に4世紀後半の方形周溝墓に連続すること，第2にⅡ式陶質土器に共伴する土師器甕の年代を5世紀初頭とし，池の上Ⅱ式には5世紀初頭とされる老司古墳3号石室から出土している馬具・金環等のセットと同様な伴出品も伴っていることをあげている。これは『甘木市史一原始編』(1982)でも述べたように確証にはなり得ず，池の上Ⅰ～Ⅲ式に型式的大差がないことから，池の上Ⅰ・Ⅱ式は5世紀前半に含まれる。池の上Ⅱ式に伴う土師器甕は堺6号住居跡出土甕の一種に近いものがあるが，堺例は池の上例と比較すると全体的に口縁部が直立に近く，肩の張りも強い。池の上Ⅱ式に伴う土師器甕は，わずかであろうが堺6号住居跡出土土器より後出するもので，7号住居跡出土土器よりはさらに後出する。さらに，三雲遺跡ではⅡb式(4世紀後半)・Ⅲ(古)式には確実に軟質に近い縄蓆文土器が伴うし，平行タタキがあってもかなり細めのものである。これに対し池の上では，やや軟質の土器があっても太めの平行タタキであるし，縄蓆文土器を1片も伴っていない。このような傾向は，本年に調査した筑紫野市隈古墳群でも見られる(註14)。

三雲堺6号住居跡出土陶質土器2種の傾向は，華明洞古墳群と同様で，あらゆる面からも両者は共通している。ところが，定森氏が同時期として扱っている，2号墳と7号墳には明らかな型式差があり，今後の研究課題となろう。

堺地区古墳期住居跡群にかかわる第2の問題点として，Ⅲ式古期に比定できる三雲遺跡全体の住居跡が焼失しているということである。三雲土師器Ⅲ式古期の住居跡は，八龍Ⅰ-7の2号・4号，堺Ⅰ-2～4の1号～3号・6号・7号，上覚Ⅰ-9の2号があり，堺の7号以外では炭化物や焼土が伴っていた。調査がトレンチ調査のようなものであったところから，決して多い資料とはいえないので，即断するのは早いかもしれないが，その他の同時期の遺構でも異常な状態がうかがえる。たとえば，下西Ⅱ-10の住居跡状遺構でも炭化材と共に土器や鉄器が出土している。Ⅲ式古期の時期は，築山古墳築造の直後の時期にもあたり，これ以後の古墳は平原遺跡のある曽根丘陵に造営される。Ⅲ式古期の集落全体が焼失した可能性が強いところから，この古墳立地の変改と合わせて興味ある問題である。ところが，三雲遺跡がⅢ式古期以後完全に消滅するのではなく，加賀石Ⅰ-8・9の住居跡，八龍Ⅰ-18の1号，南小路Ⅰ-9の1号，Ⅲ-3cの1号住居跡のようにⅢ式新期にまで営まれているが，それ以前のⅡ式の時期とは比較にならな

ないほどの減少である。III式新期は須恵器出現の時期でもあるが，これ以後の古墳時代遺構が現在のところまったく発見されていない。すなわち，少なくとも5世紀中頃には三雲遺跡は旧伊都国のような主導的な位置を占める集落ではなくなっている。（柳田）

第5節　上覚・ヤリミゾ地区の調査

1．はじめに

上覚地区は三雲遺跡群の南西隅になるが，北側は南小路地区，南側には上覚・上学地区・大字井原のヤリミゾ地区と隣接し，「柳園古記略考」に記される南小路の甕棺・井原鑓溝の甕棺の所在地に挟まれた地区である。

ヤリミゾ地区は，北に中川屋敷地区，南を井原ヤリミゾ地区と接し，境地区・南小路地区などとも接する南北に長い地区である。細々石神社のあるIの範囲が県道の東側であるが，II・IIIは県道敷の西側になる。両地区は南小路の甕棺墓・井原鑓溝の周辺の状況を確認する目的で調査を実施し，併せて井原鑓溝の確認を目的として井原ヤリミゾ地区でも試掘調査を実施した。

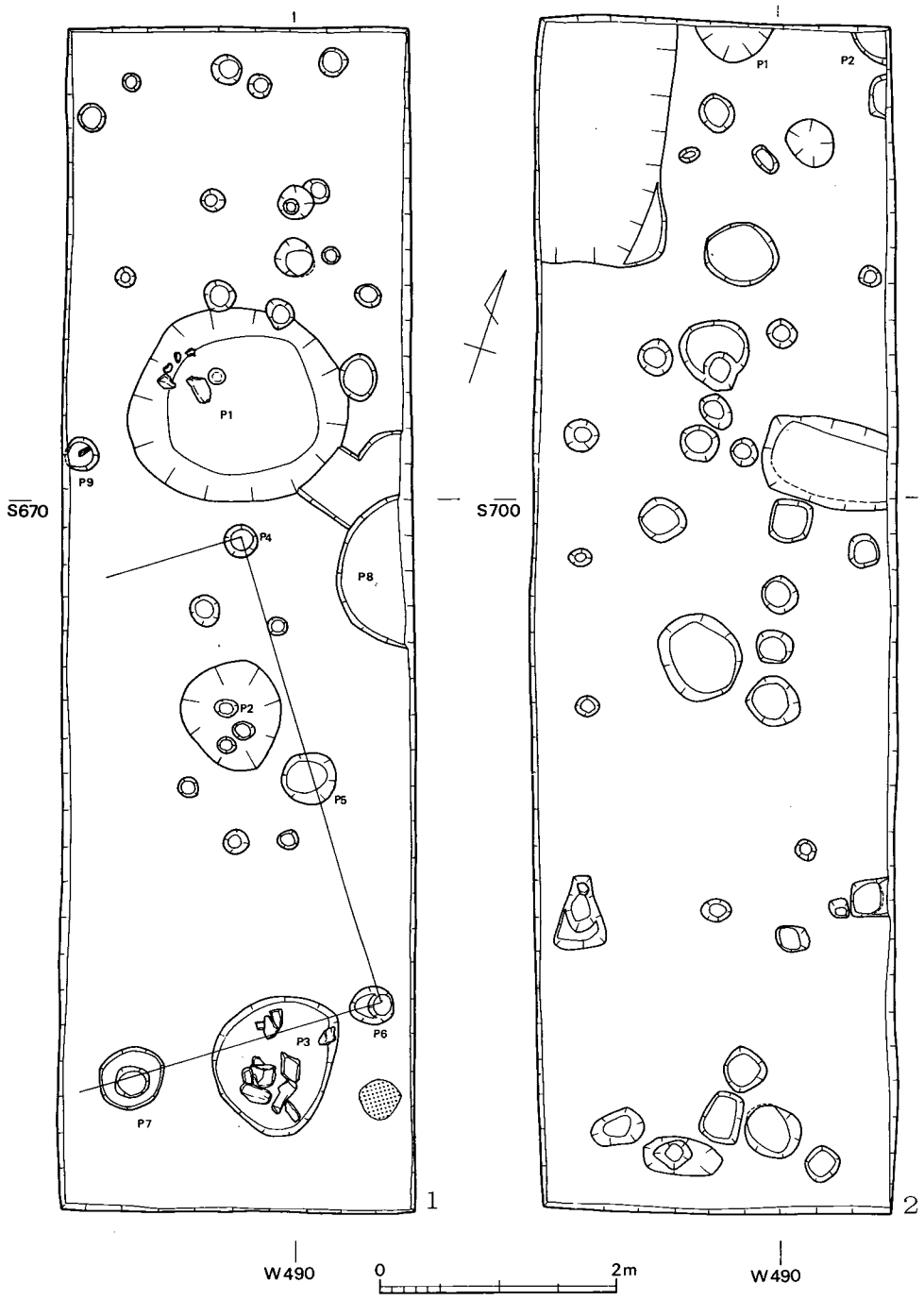
これらの地区の調査では，昭和49年度に，上覚I－1・2・6，ヤリミゾIII－1・2・4，井原ヤリミゾI－1を，昭和50年度には上覚I－9・12，ヤリミゾII－6，井原ヤリミゾII－1を試掘調査したが，昭和53年度には上覚北端の側溝施設工事に伴った上覚I－6 bの緊急調査，昭和56・57年度には宅地造成計画に伴う緊急調査を上覚II－1，ヤリミゾI－2・3，井原ヤリミゾ南端で実施した。

昭和49年度の調査は，柳田康雄・橋口達也が担当し，平島勇夫・小林美孝が参加した。昭和50年度の調査は，柳田康雄・宮崎貴夫が担当し，丸山康晴・小田雅文が参加した。53年度の調査は副島邦弘が担当し，56・57年度の調査は柳田康雄と小池史哲が担当した。（小池）

2．上覚I－1・2・6

(1)　I－1トレンチ（図版106-1・107-1，第237図）

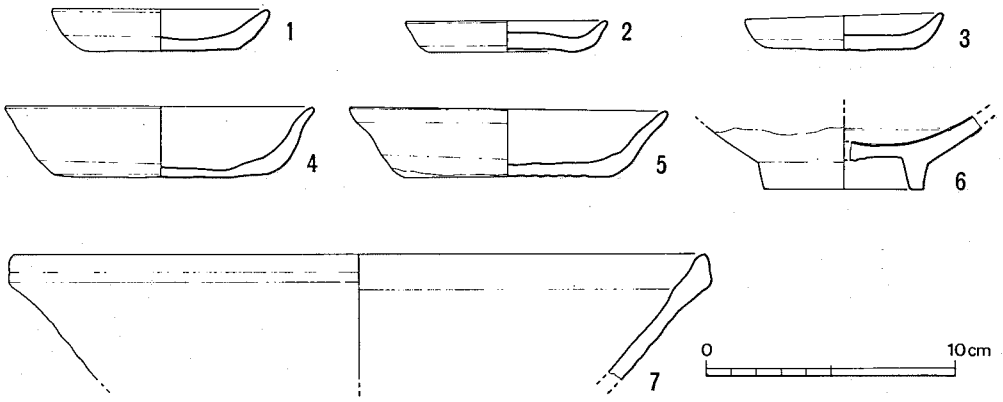
東西3m×南北10mのトレンチを設定して発掘した。多くの柱穴を検出し，また東南隅には径30cm強の炉跡と思われる焼土が認められ住居跡の存在も想定された。P4・P5・P6・P7は柱穴が整然と並び掘立柱建物であることは一目瞭然である。柱間間隔は200cm～220cmの間にあり，梁・桁ともに7尺を基準とした南北2間×東西3間の建物と考えられる。建物の主軸は真北より36°西にふれている。



第 237 図　I-1・2トレンチ実測図（1/60）

P1・P9からは土師器杯・小皿・青磁・須恵質の鉢等が出土している。これらの穴は掘立柱

上　覚



第 238 図　I－1・2 出土歴史時代土器実測図 (1/3)

建物の北側に接し，この建物に伴うものと考えられる。

土　器(第238図)　1はＰ９出土の土師器小皿である。内底はナデ，体部は内外ともにヨコナデ。糸切り底と思われるが不明。淡橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含み，焼成は良。口径88㎜，器高18㎜。

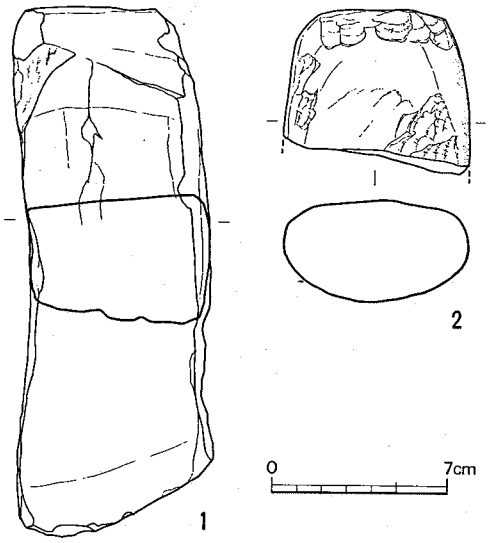
4はＰ１出土の土師器杯である。口径125㎜，器高29㎜弱。糸切り底と思われる。黄橙色を呈し，胎土には精選粘土を用いている。焼成は良。

5はＰ９出土の土師器杯である。糸切り底で，底部は一見板目状のすだれ状痕ともいうべき圧痕がみられる。口径128㎜，器高29㎜弱。黄褐色を呈し，胎土には微細な砂・金雲母等を含む。焼成は良好。

6はＰ１出土の青磁椀の底部である。高台は高く，外底部は露胎。釉は灰緑色を呈し，胎土は灰白色で精選粘土を使用している。

7は須恵質の鉢である。復原口径は27.5㎝。本来こね鉢と考えられるが，内面はいまだ磨れた痕跡はない。灰黒色を呈する焼成良好のものである。

これらの土器は平安末期から鎌倉時代に位置づけられる。したがって前述の掘立柱建物もこの時期のものと考える。　(橋口)



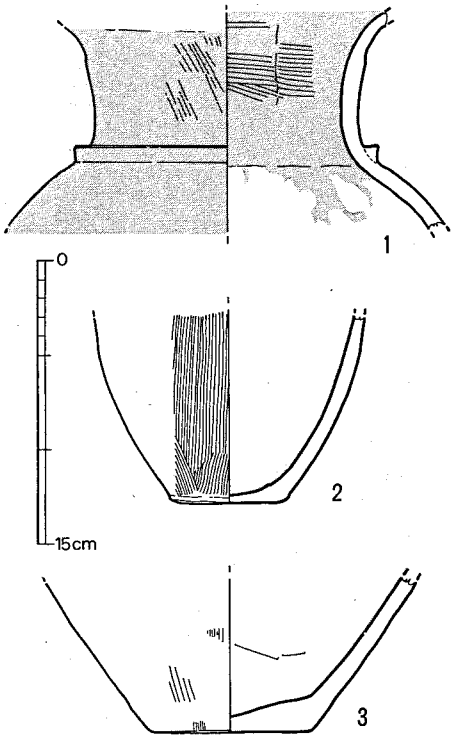
第 239 図　I－1・2 出土石器実測図 (1/3)

石　器(図版109-3，第239図１)　Ｐ３から出土した凝灰質雲母片岩の砥石で，風化が進む。図示する面のみ砥面にされており，図の上方が厚めで下方に薄くなる。　(小池)

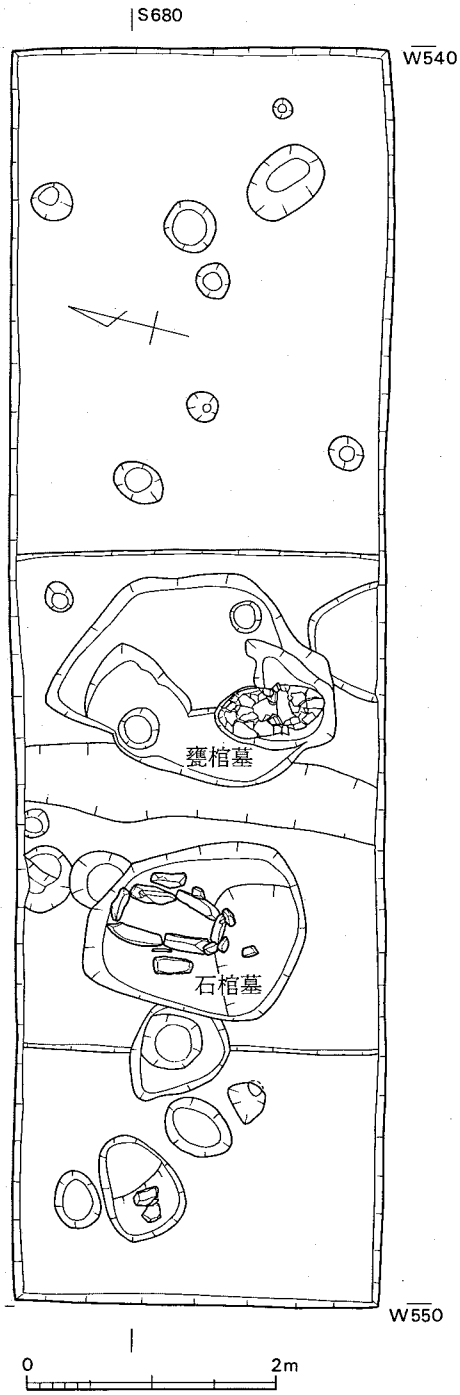
(2) Ⅰ－2トレンチ（図版106-2，第237図）

東西3m×南北10mのトレンチを設定し発掘した。西北隅に住居跡の一角と，他に多くの柱穴を検出された。住居跡は輪郭を確認しただけで掘り下げていないが，一部遺物をとりあげている。それは袋状口縁壺の口縁を欠くもので(第240図1)，2層・3層出土の底部等(第240図2・3)と同時期のものと考えられ，弥生時代後期中頃～後葉に位置づけられる。

また東北隅の小穴P3からは土師器小皿2個が出土している(第248図2・3)。これらの小皿は口径80mm，器高13～15mmを測る。糸切り底ですだれ状痕を残す。これらは 先述の上覚Ⅰ－1の掘立柱



第 240 図
Ⅰ－2出土土器実測図（1/4）



第 241 図 Ⅰ－6トレンチ実測図（1/60）

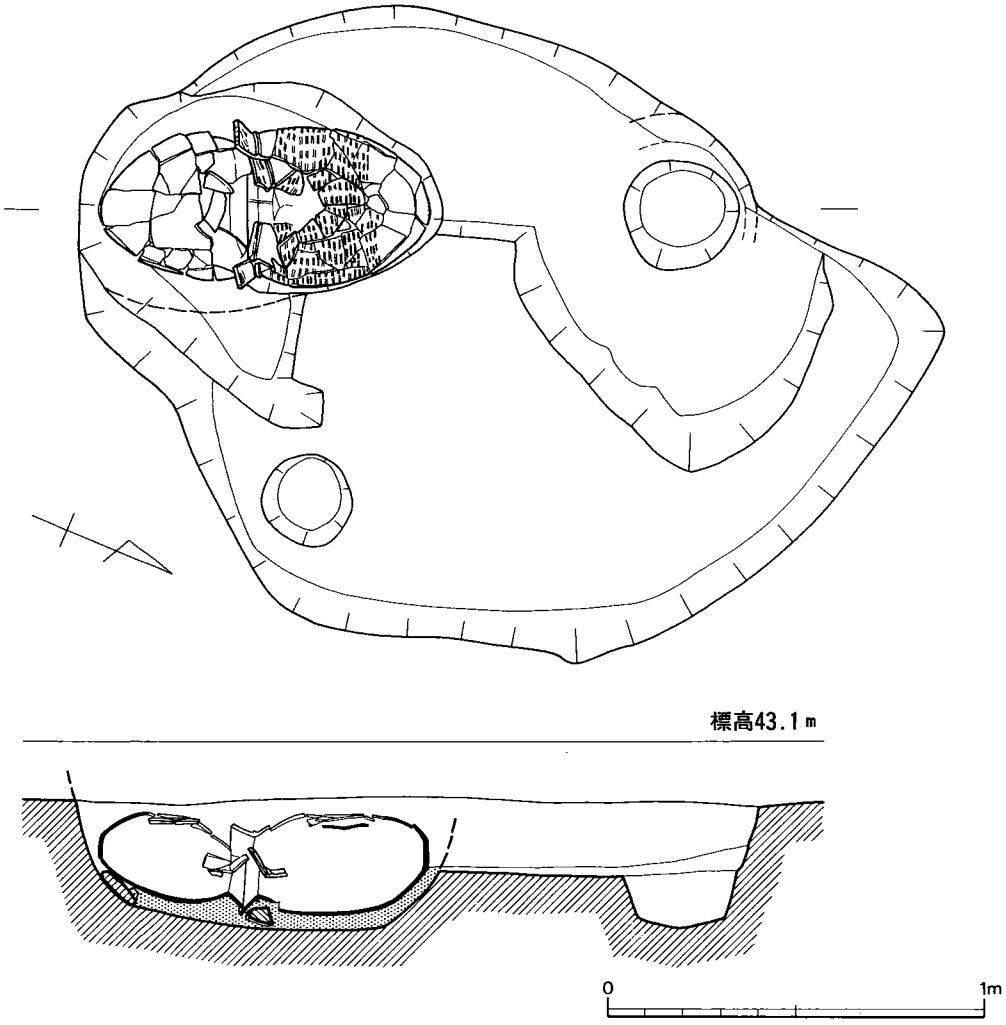
上　覚

建物に伴うと考えられる小皿(第238図１)よりも明らかに後出の要素をもっており，鎌倉時代以後のものと位置づけて大過ない。　(橋口)

石　器(第239図２)　第２層出土の石斧頭部破片。今山産玄武岩製で太型蛤刃石斧の頭部であろう。　(小池)

(3)　Ｉ－６トレンチ（図版106-3，第241図）

南北３ｍ×東西10ｍのトレンチを設定し発掘した。当初歴史時代の柱穴・溝等が検出されたが，Ｐ13の下層には甕棺が，Ｐ14の下層には石棺が認められたので，この部分を長さ４ｍに



第 242 図　Ｉ－６　甕棺墓実測図（1/20）

てさらに掘り下げた。3～5cm下げたところで甕棺・石棺等の墓壙が検出された。

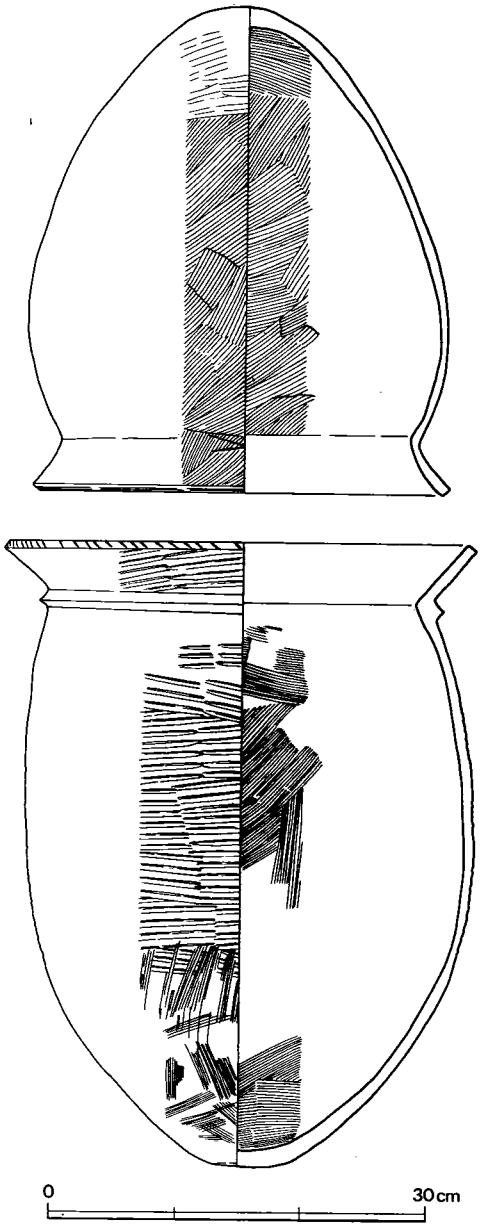
甕棺墓（図版107-2，第242図）

主軸はN22°Wにとる。焼土のはいった大きな穴と重複していたが，墓壙はこれを切って作られているので，大きな穴は甕棺より古い住居跡等の一部であろう。墓壙は96cm×60cmほどの長円形を呈し，甕棺はほぼ水平に埋置された呑口式の合わせ口甕棺である。墓壙底には粘土を敷き，上甕の底部と下甕口縁部には石を置いて安定をはかっている。甕棺の内壁には上下ともに赤色顔料が塗られていた。大きさからいって幼児用のものと考える。

棺内からはガラス小玉1個と碧玉製管玉を小玉に再利用したもの1個が出土した。

甕　棺（図版109-1，第243図）　上甕はほぼ丸底，上位に最大径をもつ長胴形，外反する口縁をもつ甕である。口径32cm，器高38.5cm，胴部最大径33.5cmを測る。器面の調整はハケ目を施すが，底部はナデ仕上げを行う。内面の口縁部はヨコナデ，胴部はハケ目を施し，褐色を呈するが器面には丹塗りの痕跡が認められる。胎土には細粒の石英・金雲母等を含み，焼成は良好である。

下甕は，丸底に近いがいまだ平底を残している。長胴形で，口縁は外反し，口唇部にはヘラによるキザミ目を施し，口縁下に三角凸帯を貼付する。口径36.5cm，胴部最大径35.5cm，器高49.5cmを測る。器面にはやや太めのタタキ痕が明瞭に残る。それを口縁から肩部にかけてはナデを加え，底部付近はハケ目工具で擦過してタタキ痕を消している。内面の口縁部はヨコナデ，胴部はハケ目の後ナデを加えている。褐色を呈し，胎土には石英・金雲母片等を含み，焼成は良好である。



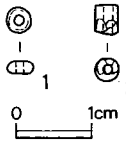
第 243 図　I－6甕棺実測図（1/6）

これらは日常用器の大形品を甕棺に転用したものと思われる。下甕にはまだ平底を残し，上

上　覚・ヤリミゾ

甕は丸底となっており，上甕が新しい要素を示している。上甕に新しいものを使用するのは甕棺葬盛期以来の伝統を守っているのであろう。これらは底部をかきとり，またはナデ仕上げを行うという共通した手法をもっている。このような手法は弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてみられる傾向であるが，上甕が丸底化している点から甕棺墓の時期は古墳時代初頭に位置づけられる。　（橋口）

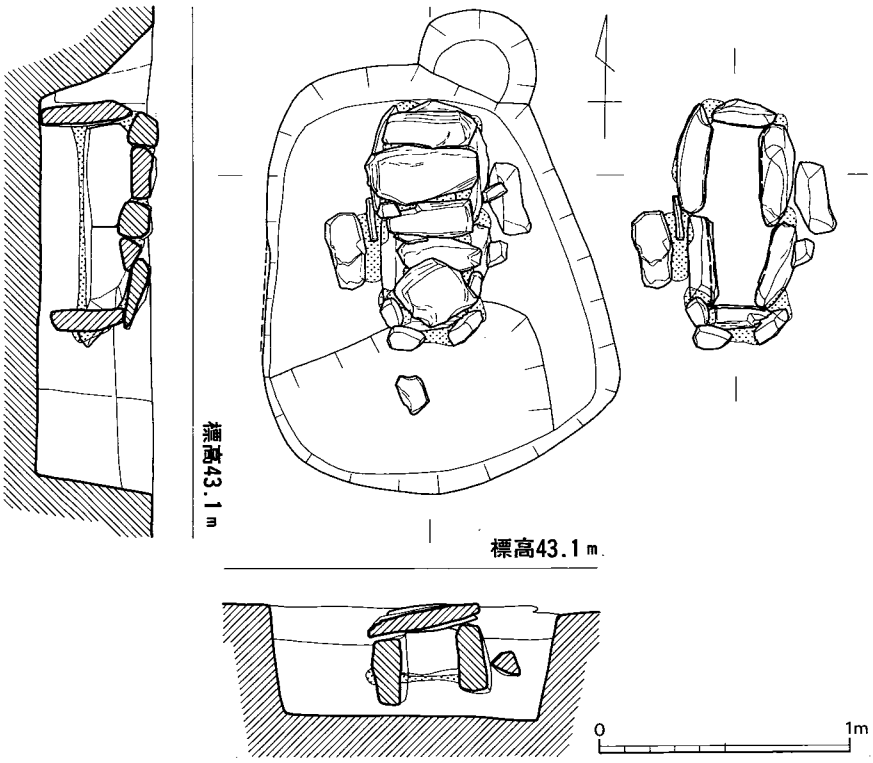
玉　類（図版109-2，第244図）　2点とも棺内から出土した。1はコバルトブルーを呈すガラス小玉。外径3.3mm，孔径1.35mm，厚さ1.75mmを測る。2はにぶい青緑を呈す碧玉製で，折損した管玉の破損面に研磨を加えて小玉に再利用したもの。長さ4.0mm，外径3.0mm，孔径1.3～1.65mmを測る。　（小池）



第 244 図　玉類実測図（実大）

石棺墓（図版 107-3，第245図）

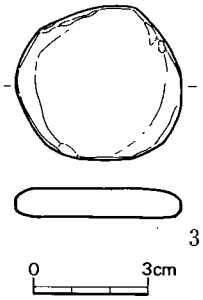
主軸はN 2°Wでほぼ南北である。墓壙は南側がやや広い隅丸長方形で，長さ171cm，幅110～140cm。墓壙の北側によせて小形の石棺をつくっている。石棺より下層には甕棺の墓壙と思われるものを検出したが掘らなかった。石棺は墓壙内に側壁各2枚，木口各1枚の板石で組み立て，土・粘土・石等で裏込めを施し，蓋には5枚の板石を使用している。床には3cmほど粘土を敷きつめ，石と石のすきまにも入念に粘土をつめている。



第 245 図　I－6 石棺墓実測図（1/30）

棺の内法は長さ73㎝・幅は北木口で20㎝・中央部で22㎝・南木口で17㎝と小さく，幼児用のものと考えられる。この墓壙内からは弥生中期・後期土器等が出土したが，年代推定に積極的資料はない。甕棺とほぼ同時期のものと考えてよかろう。

甕棺・石棺ともに幼児用と考えられる小形のものでありながら，そのつくりは入念に行われており，この地域の墳墓が隣接する南小路・井原ヤリミゾ等と連なるものである可能性が強い。（橋口）



第 246 図
Ⅰ-6出土石器
実測図（1/2）

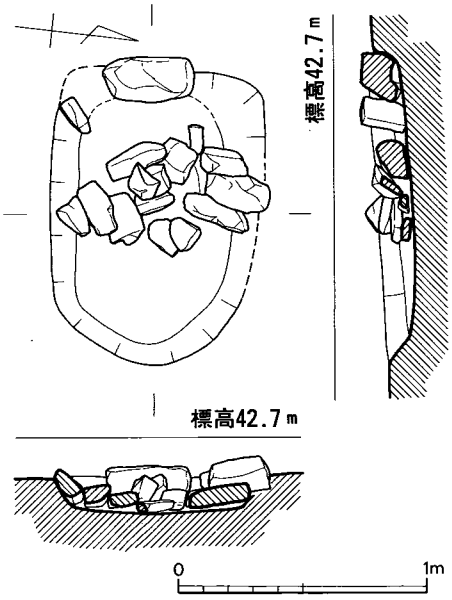
石　器（図版109-3，第246図3）　石棺墓墓壙内埋土から出土した白雲母片岩製の円板。雲母片岩でも細粒の砂岩質に近い。上下両面ともに研磨されており，周縁は敲打整形のあと研磨を加えている。厚さ7.8㎜，重量28.7ｇを有すが，紡錘車未製品であろう。（小池）

(4)　Ⅰ-6ｂトレンチ（図版108-2，第247図）

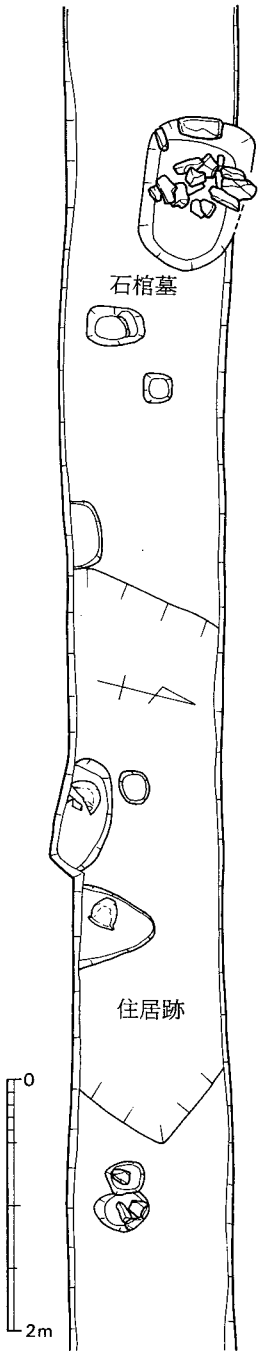
側溝の水路をつくるために，道路の南側を造成した。ほぼ田の中央部に位置する。幅1.20m，長さ12mで面積的には少ない。住居跡が1軒と柱穴及び中世期に破壊された石棺墓の残欠が検出された。側溝のU字溝を入れるためで，それ以上の削平がなされないということで，石棺墓と遺物が出土していた遺構のみ上げることとなった。

石棺墓（図版108-3，第248図）

掘り方の平面形は隅



第 248 図　Ⅰ-6ｂ石棺墓実測図（1/30）



第 247 図
Ⅰ-6ｂトレンチ
実測図（1/60）

上　覚

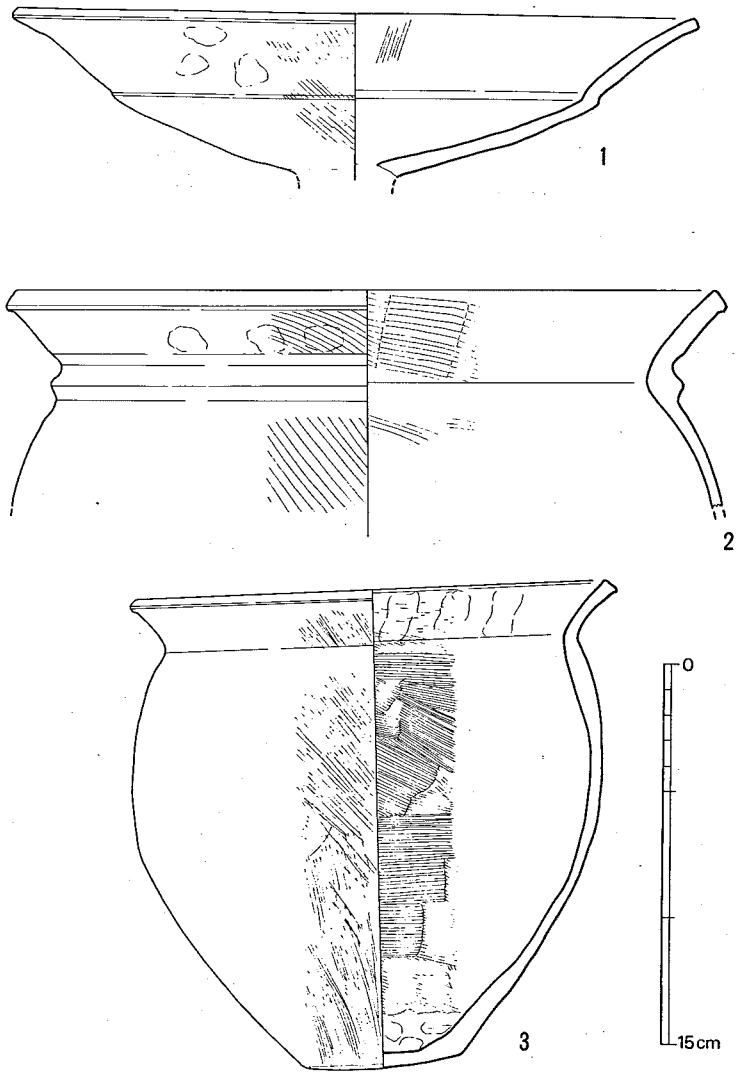
丸の長方形を呈し，幅90cm,長さ1.25mを計測する。主軸をN84°Eで，ほぼ東西に位置する。

石棺は西側の小口の１石が動いていない。他は動いている可能性をもつ。墓壙の石組の中から青白磁・黒色土器片が出土している。中世期に破壊を受けたことが理解できる。

住居跡（第247図）

平面形は方形をなす住居跡で，北東のコーナーが検出できている。一辺の長さは４mで，他辺は未掘のため不明である。

顔をみせていた遺物のみ掘ることとなったＰ２からは高杯の破片，Ｐ３から小形の甕形土器が出土している。



第 249 図　Ｉ－６ｂ 出土土器実測図（1/3）

出土遺物

Ｐ２，Ｐ３から出土した遺物について説明付加する。

土　器（図版109-4，第249図）　１は高杯の杯部の破片で，胎土に細粒砂を含み，金雲母・赤褐色粒が混入している。色調は黄橙色から橙色をもち，口縁部の一部黒色を呈し，器面の調整はハケの斜面を施しその上をナデている。内面は細いハケが残ってナデにて仕上げている。器面の荒れがひどいもので，口縁部は外反し,体部にいたって若干の段を有する。Ｐ２から出土している。

２はＰ３から出土したもので甕形土器で，口縁部は「く」の字状に外反し口縁部直下に

三角凸帯を有し，口唇部は押さえつけられたような感じをうける。胎土に細砂をかなり含むもので，色調は茶褐色で，器面の調整は斜行の粗いハケで三角凸帯はヨコナデされ，胴部も粗い斜行のハケでその上からヨコナデしている。内面は口縁部内面は斜行の粗いハケで，胴部はナデで，一部にハケが残っている。焼成は良好である。

3もP3から出土したもので，口縁部は「く」の字状に外反し，底部は凸レンズに近い平底である。胎土に細かい小砂を多量に含み，金雲母，赤褐色粒や角閃石が混入し，色調は黄褐色で一部に橙色を呈し，内面は茶褐色である。胴部の一部に黒斑がある。器面の調整はハケにて施文し，斜行方向が主体でハケの上から部分的にナデている。またその上から粗いハケを部分であるが施している。内面は口縁部と底部内面に指圧痕が残り，口縁部から胴部下半まで細いハケを使用し，胴部下半から横位方向の施文である。口唇部は押さえつけたような感じで若干のくぼんだ感じである。

時期的にみて弥生後期終末の土器である。　（副島）

3．上覚Ⅰ-9・12のトレンチ

① 1-9の調査

トレンチは，S744～S754，W550～552に囲まれる長さ10m，幅3mを設定し30m²を調査した。

耕作土及び床土35cmを剝ぐとトレンチの南側半分は黄褐色砂質土の地山が表われ，北側半分は住居跡の覆土である黒褐色粘質土が表われた。上覚1-1・2・6の調査では，表土層の下に中世の層が認められ遺構が確認されたが，上覚地区では南下するほど後世の削平等によって失われており，ここでも中世の層は確認できなかった。トレンチ内で検出した遺構は住居跡3軒と柱穴数個のみである。

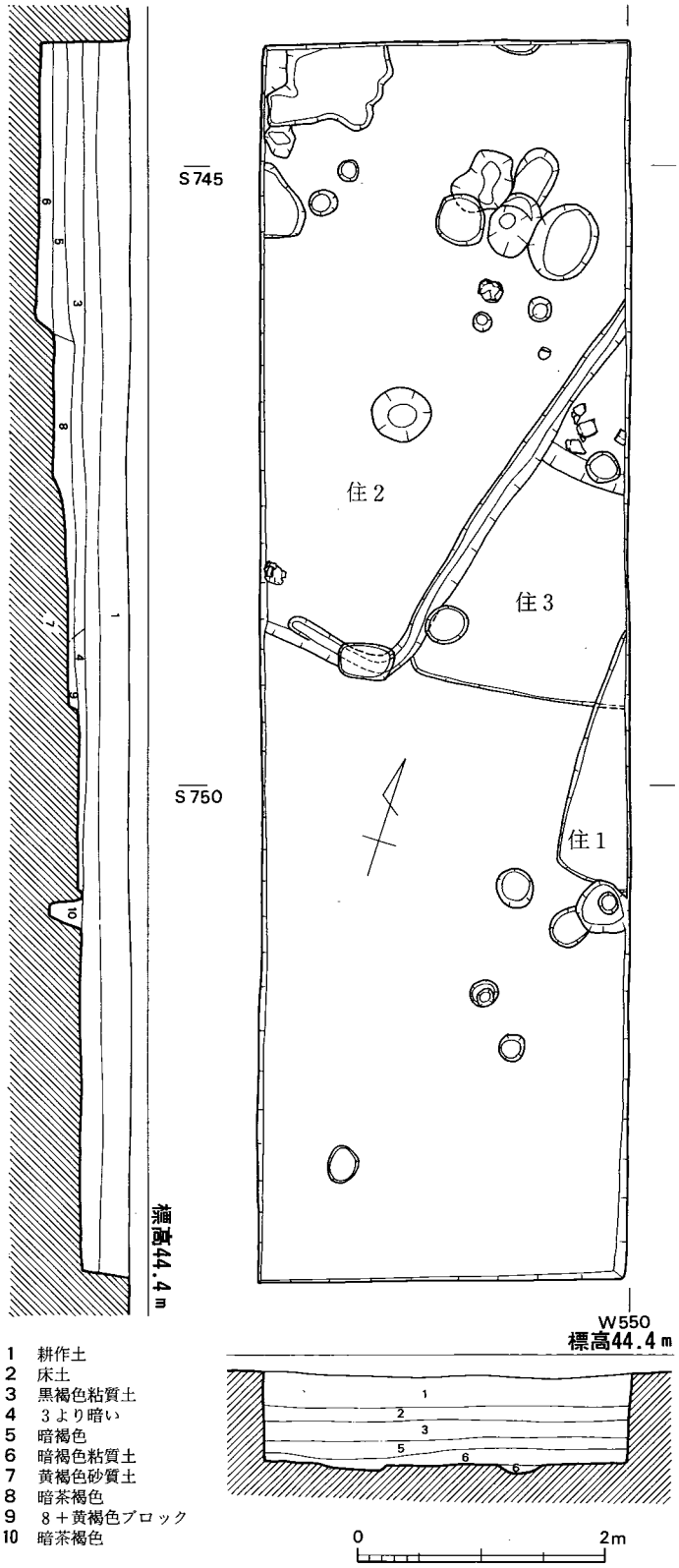
1号住居跡（第250図）

3号住居跡を切って検出された住居跡で南西隅部のみの調査に終わり，全体の様相はつかめなかった。壁高は深いところで6.4cmを残すのみである。遺物は高杯片が出土した。

2号住居跡（第250図）

3号住居跡を切ってその西側に検出された壁溝をめぐらす住居跡である。壁高は18～26cmを残すが，土層観察から深さ30cmの住居跡といえる。主柱穴は不明確で，床面には不整形の落ち込みを土器細片・炭・灰などが混入した土を用いて固めた貼床が認められた。出土遺物は埋土に縄文土器の混入がみられたのをはじめ，手鎌等鉄器類，床面より若干浮いた状態で壺，甕，鉢等の土器類が出土した。　（丸山）

土　器（図版110，第251・252図）　壺・甕・高杯・鉢・手捏土器がある。1の壺は復原口径12.4cm，胴部最大径17.6cm，器高17.7cmの大きさ。丸底の球形体部に，微妙な曲線をもつ直

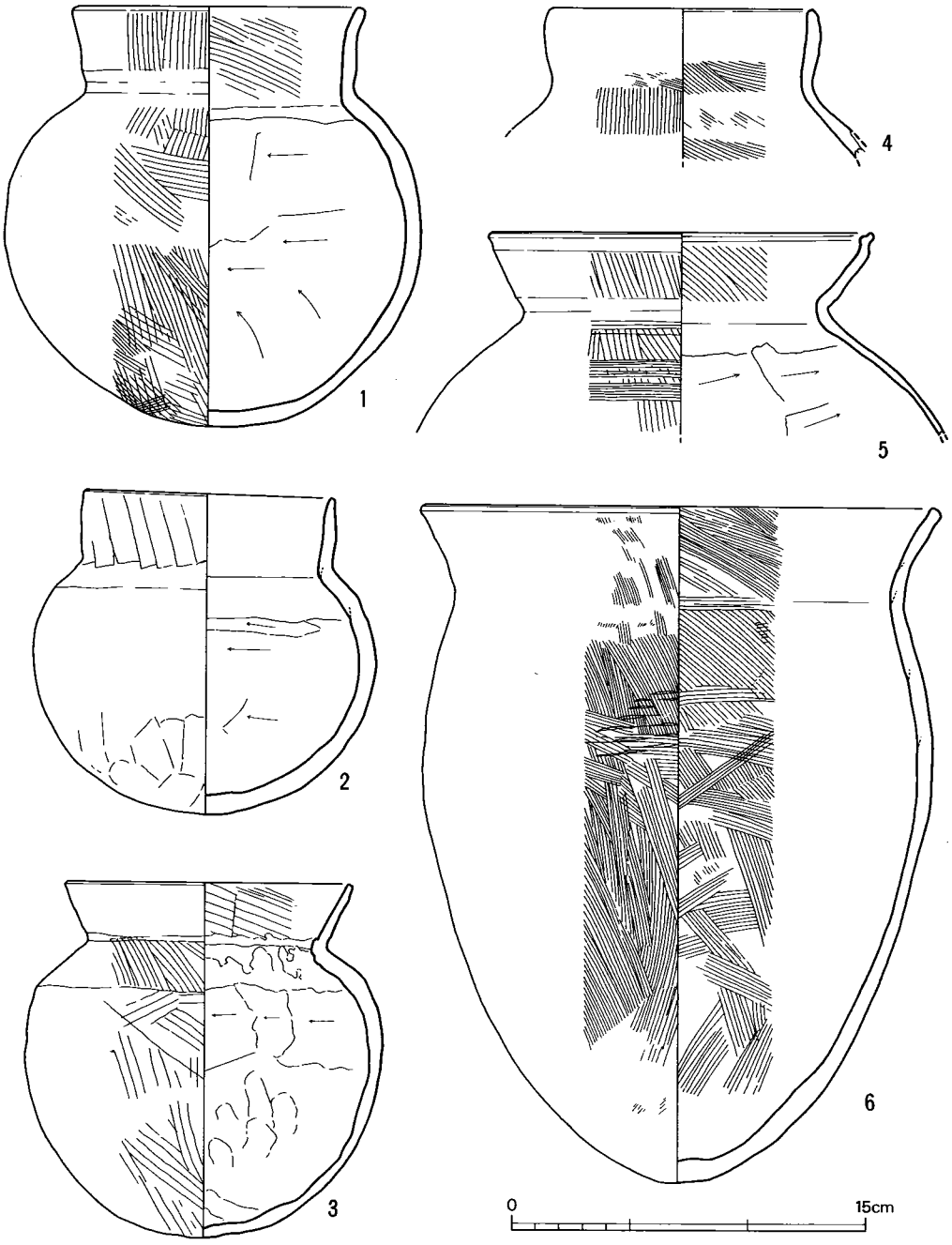


第 250 図　I－9トレンチ実測図（1/60）

口縁がつく。外面はハケ目調整，内面は体部のヘラケズリが頸部直下まで及び口縁部はハケ目調整される。胎土に金雲母・赤褐色粒を含み，茶褐色に焼成されるが，底部から体部の一部にかけてススが付着している。

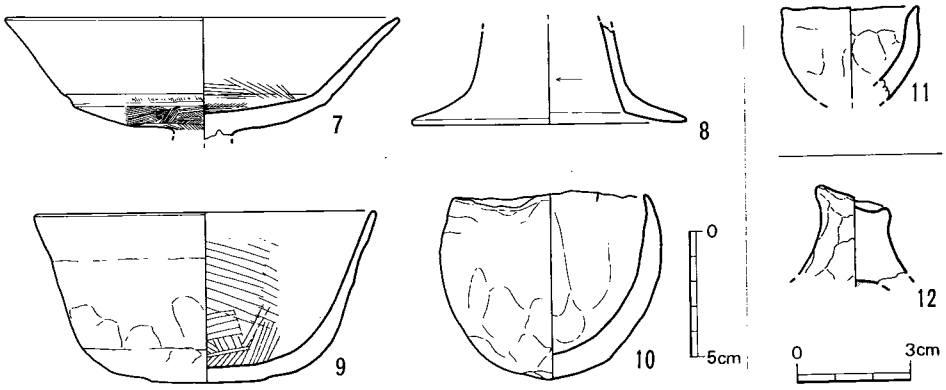
2の壺は，口径10.4cm，器高13.5cmの大きさでやや扁球形の体部に直口縁がつく。体部外面はナデられるが下半にはケズリ痕が残り，底部はわずかに尖りぎみの丸底を呈す。口縁部外面は縦方向に板状工具でナデられてヘラケズリにみられるような稜がわずかに残る。口縁部内面から頸部のやや下にかけてはナデて，口縁部の立ち上がりは内湾ぎみながらも端部が外反する微妙な曲線を描いている。体部内面はヘラケズリされ，内底面はナデられる。胎土に金雲母・赤褐色粒を含み，暗黄褐色に焼成されている。

3の壺は，肩の張る球形体部に外反する口縁部がつき，口径11.9cm，器高4.9cmの大きさ。体部の外面には粗いハケ目が施され，内面は中ほどのみ帯状のヘラケズリ



第 251 図　2号住居跡出土土器実測図①（1/3）

がみられ，他は雑なナデ調整で胴下半に指頭圧痕が残る。外面ヨコナデ，内面ハケ目の直線的に伸びる口縁部をつなぐ頸部は，内面のナデが雑なため，移動した粘土の膜が凹凸を生じて残



第 252 図　2・3号住居跡出土土器実測図（1/3，1/2）

る。外面はハケ目のあとナデられている。胎土に金雲母・赤色粒を含み，淡茶褐色に焼成されている。

4は，壺の口頸部破片で，内湾ぎみに直立する口縁部をもつ。内外面ともにハケ目調整されるが，頸部直下の内面にナデ，口縁部外面にヨコナデ，口縁部内面の上半にハケ原体によるヨコナデが加わる。胎土に金雲母を含み，淡めの茶褐色に焼成されている。

5は，肩部以下を欠く，器壁の薄い甕で，体部内面のヘラケズリは頸部のやや下位まで及ぶ。口縁部は内湾ぎみに外反し，端部は内面に肥厚して上面と外面は凹み，口唇部外面を摘み上げたような形状になる。外面は縦方向のハケ目を施したあと，肩部に横方向のハケ目を施しており，頸部と口縁端部はヨコナデされる。胎土に金雲母を含み淡茶褐色に焼成されている。

6の甕は，口径21.5cm，器高28.6cmの大きさの長胴甕で尖りぎみの丸底と緩やかな「く」の字口縁をもつ。内外面ともにハケ目調整されるが，外面の胴部では一部にタタキ痕が残り，口縁部と底部付近はナデられる。内面の底部付近もハケ目のあとにナデられている。口縁端部は内外面ともに僅かに凹みぎみになるが口唇部は丸くおさまる。胎土に金雲母・赤褐色粒・角閃石を含み，淡茶褐色～茶褐色に焼成されている。

7の高杯杯部破片は，口径15.7cm，杯部高4.7cmの大きさで，平坦な杯下半部から緩やかに屈曲して上半部は外反するが，屈曲部外面に凹線状の境目をつけている。下半部の内外面に細かいハケ目がみられるが，上半部はヨコナデ調整されている。胎土に金雲母・赤褐色粒を含み茶褐色に焼成されている。

8の高杯脚部破片は，7と別個体と思われるが，内面ケズリの脚筒部から明瞭な稜をもって外方に広がる裾部に至り，屈折の位置は低い。外面は風化しているが，ナデもしくはミガキであろう。胎土に金雲母・赤褐色粒を含み，淡褐色に焼成されている。

9は，復原口径13.5cm，器高6.8cmの，広い底面と急傾斜に立ち上がる口縁をもつ鉢。内面はハケ目で外面はナデ調整される。胎土に金雲母を含み，茶褐色に焼成される。

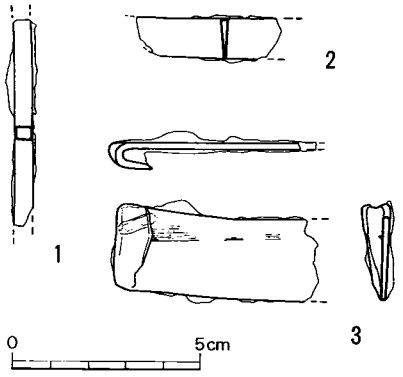
10・11は手捏土器で，胎土に金雲母を含み淡茶褐色に焼成されるが，口縁部の内湾する10は口径7.6cm，器高7.8cmの大きさをもち，口縁部が外反する11は口径3.6cmと小さい。

これらの土器では，5の甕に布留式の特徴が残り，1・2の壺口縁部にみられる微妙な曲線や，6の甕の口唇部，7の高杯杯部の特徴も典型布留式に後続する時期のものとしてよいもので，小形丸底壺や器台等を欠くもののセット関係のつかめる良好な資料といえよう。

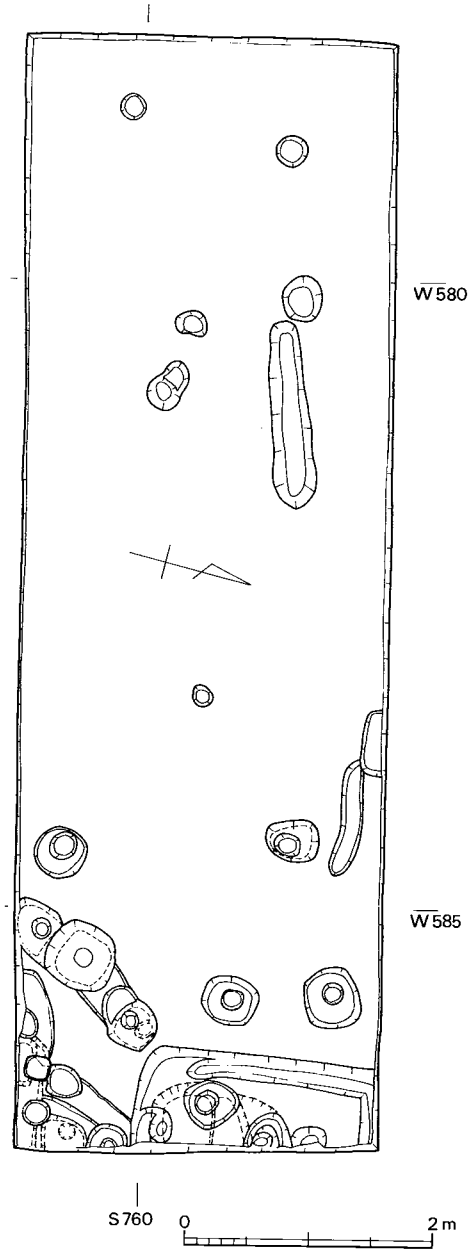
鉄　器(図版110，第253図) 3点の鉄器が埋土から出土している。1は幅4.6mm，厚さ3.5mmの角棒状で，両端を欠失して現存長5.5cmを有すが，鉄鏃の茎部であろう。2は刀子の刃部破片で基部側を欠き長さ3.9cm，幅1cm，背の厚さ2mmを測る。鋒は磨滅している。3は手鎌の半欠品で現存長5.4cm，幅2.2～2.3cm，厚さ2mmで端部は折り曲げられて袋になり厚さ7mmを測る。背側には木質が残り，背から袋部で9mm，中央部で5mmの位置までにみられる。　(小池)

3号住居跡(第250図)

トレンチの中央部で東側を1号住居跡，西側を2号住居跡に切られて確認された幅1.7m，高さ13cmのベッド状遺構を伴う住居跡である。西南コーナー部がわずかに認められ，ベッド状遺構上面まで壁高11cmを残している。遺物は，布留式の特徴を示す甕形土器，手捏土器が出土した。　(丸山)

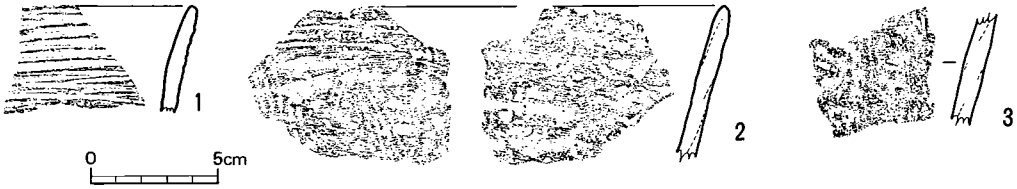


第 253 図
2号住居跡出土鉄器実測図 (1/2)



第 254 図　I-12トレンチ実測図 (1/60)

上　覚



第 255 図　I－9・12出土縄文土器拓影（1/3）

土　器(第252図12)　手捏ねのミニチュア品で，下半を欠失するが現存高2.5cmを有す。沓形を呈す支脚に似るが，上面が凹む。脚部に相当する側の内面には赤色顔料が付着しているので，必ずしも支脚のミニチュアとはいえない。

I－9・12出土の縄文土器(図版110，第255図)

1は，I－9の2号住居跡に混入していた口縁部破片。外面は横方向のアナダラ条痕，内面はナデ調整され，胎土に金雲母・長石を含み堅緻な淡茶褐色に焼成されている。

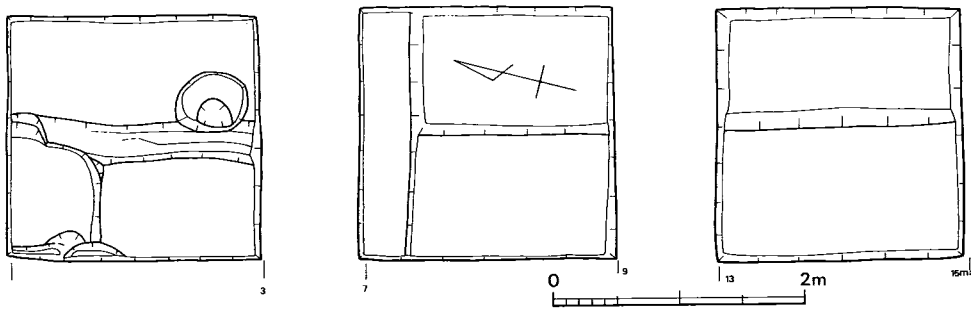
2・3は，I－12のピットと第2層から出土した口縁部と胴部の破片だが，同一個体と思われる。外面はアナダラ条痕のあとナデており口縁部などに条痕の一部が残るが，内面は板状工具によってナデられたような痕跡がある。胎土に金雲母・長石・石英粒を含み，気泡も多いが淡褐色ないしは暗黄褐色に焼成されている。晩期中頃の土器であろう。

② I－12の調査

トレンチは，S760～763，W578～587に囲まれる長さ9m，幅3mを設定し27m²を調査した。

耕作土及び床土25cmを剝ぐと黄褐色砂質土の地山になり，トレンチ東隅に暗褐色粒子混在茶褐色粘性砂質土を埋土とする住居跡1軒と15個のピット群を検出した。埋土中からは土師器とともに弥生式土器片も出土し，第II層(床土)下面には縄文土器の混入もみられた。住居跡は南西の一隅を検出したのみであるが，壁高14cmを残し部分的に壁溝を有している。

なお，II－1は第256図のようなトレンチを調査したが，遺構と判断し得るものはなかった。



第 256 図　II－1 トレンチ実測図（1/60）

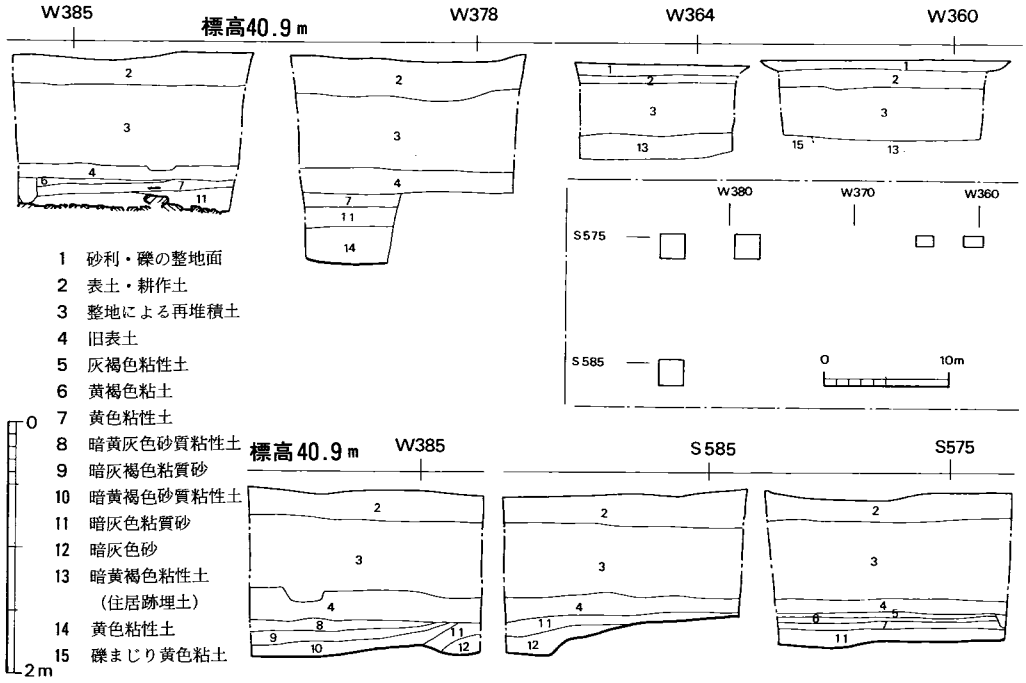
4．ヤリミゾのトレンチ

ヤリミゾ I-2・3（図版111-1・2，第257図）

細々石神社の北方側角地のI-2・3に宅地造成計画があり，事前に発掘調査を実施した。

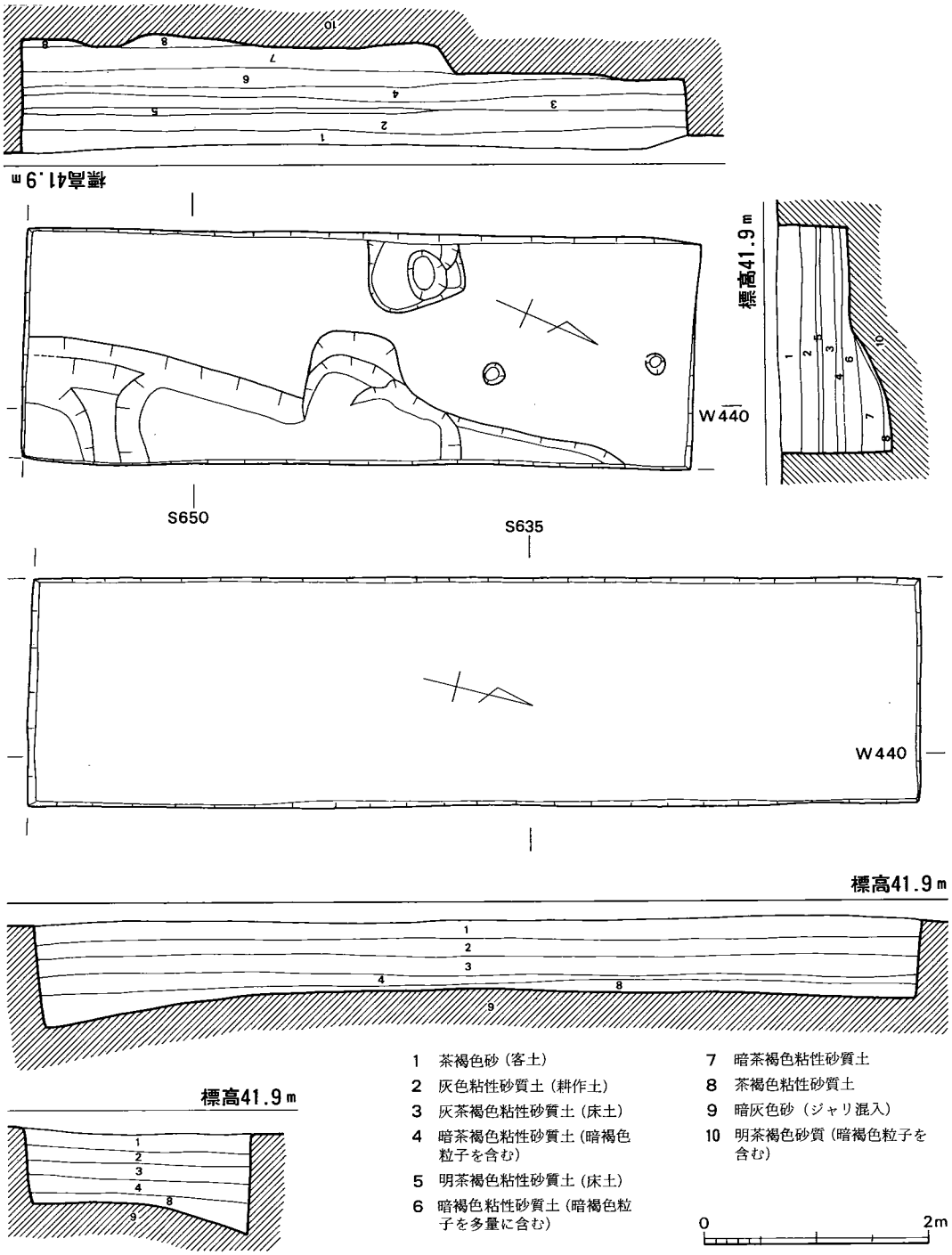
まだ家屋が建ったままなので，まずI-3の空間部分に，2×2mの広さで，東西方向に4mの距離，南北方向に8mの距離をおいてL字形配置の坪掘りから始めた。この結果，20～30cmの表土下に，60cm厚さの整地による再堆積土があり，その下の旧表土の厚さを含めて1m以上掘り下げなければ遺構面に達しないことがわかった。また旧表土下を掘り下げた結果は，S587・W383区で暗黄褐色土（弥生中期土器細片）・暗灰色砂（無遺物）が北西側より南東側に傾斜して堆積しており，暗灰色の礫まじり強砂面は表土下1.2m下の標高39.5m位よりも下に潜る。S587，W383区では灰褐色系の色調を帯びる粘性土の下に黄色系の色調をもつ粘性土があり，旧表土下20～30cm下は大きめの円礫からなる礫層に達し，標高39.55m位である。黄色粘土層から縄文土器片が出土した。S577・W377区では黄色粘性土の間に灰色の砂質土が所々に挟まっており遺物はみられなかった。円礫層は旧表土面から75cm下の標高39.25mを測る。

I-3の調査では北西方向から南東方向へ傾斜しておりI-2側に深くなっていく状況を窺うことができたが，地元の人によるとこの地区は昭和10年頃に整地し，それまでは泥田であった



第 257 図　I-2・3トレンチ断面土層図（1/60，1/600）

ヤリミゾ



第 258 図　II-6　1・2トレンチ実測図（1/60）

という。

Ⅰ-2では，道路や水道管・下水管などがあるために，S577のW359とW363区を試掘した。Ⅰ-3の状況からして東方になるⅠ-2は更に深くなるかと思われたが，表土下の再堆積土はさほど40～50cm程度で，W359では標高40.15m位に礫まじりの黄色粘土を掘り込んだ暗黄褐色粘土の埋土をもつ遺構(住居跡と思われる)が検出された。W363になると遺構検出面の礫まじり黄色粘土層は標高40.00mに下がっており，Ⅰ-3側に深くなるようである。黄色粘土の直上から土師器器台が出土した。Ⅰ-2・3の調査からはW365～W377の間に谷状の落ち込みを想定することができ，Ⅰ-2の両側とⅠ-3は昭和初期まで低い水田としてその名残を留めていたことになる。

ヤリミゾⅡ-6

細々石神社の西方,南小路甕棺墓との間になるⅡ-6の西端部に2m幅のトレンチを北側で8m・南側で6mの長さに6mの距離をおいて調査した。両トレンチともに上部は客土と耕作土の厚さが40～50cmあり,約10cmの厚さをもつ暗茶褐色粘性砂質土層を掘り下げると,黄色系の色調を呈す粘質砂層や礫層が現われ,この層を切り込んだ落ち込みが1トレンチの東南側に現われ,暗茶褐色粘性砂質土・茶褐色粘性砂質土の堆積土がみられた。この落ち込みには遺物が全くなく住居跡等の遺構ではないようである。1トレンチの西側上部より縄文土器片が出土している。

トレンチの隅を小規模に掘り下げた結果では約45cmの厚さがあり，更に黄褐色砂質土を含む暗灰色砂利層へと続くが，暗褐色砂質土の面でも遺構の存在は確認できなかった。

ヤリミゾⅢ

幅3m・長さ10mのトレンチを，Ⅲ-1では東北隅部に南北方向，Ⅲ-2では北西隅部に東西方向，Ⅲ-4では西端部に南北方向に設定して調査した。

各トレンチともに表土下70～80cmまで掘り下げたが，それ以上の掘り下げは地権者からの要望で実施しえなかった。各トレンチともに遺物包含層に達しておらず，Ⅲ-4では約30cm下に旧水田面があるなど，全体として現況より低い地形であった可能性がある。

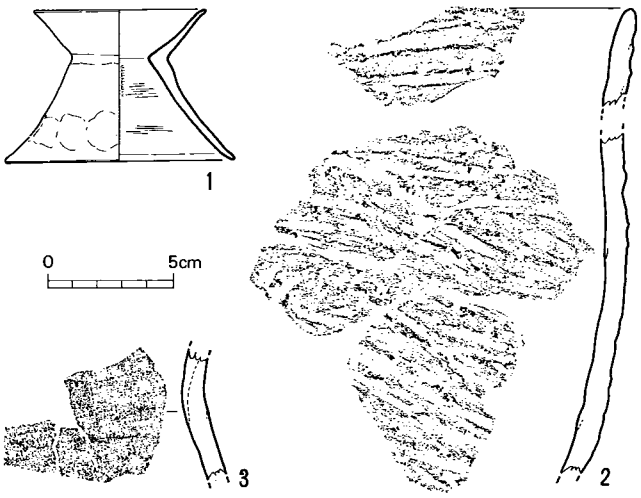
井原ヤリミゾ北端部

「井原鑓溝」は三雲村との境と伝えられており，Ⅰ-1の北西隅に東西方向，Ⅱ-1の東北隅に南北方向の3×10mのトレンチを設定して調査したがⅠ-1では余り深く掘り下げられなかった。Ⅱ-1では表土下50cmが耕作土と床土で，トレンチの半分を更に下げるとその下に20cm厚さの灰褐色粘質土があり下面に薄く黄褐色粘質土を挟み礫を含む暗褐色砂質土へと続く。

井原ヤリミゾ南端部(図版112)

三雲と井原の大字境から県道産の宮・瑞梅寺線を約360m南に向かうと旧道と分岐するが,松井集落から曽根丘陵に向かう道路と交差して,周りを道路に囲まれた水田がある。この水田に宅地造成計画のあることを知り,小字名がヤリミゾで,井原村鑓溝の範囲内でもあるので 試掘調

査を昭和56年5月に実施した。試掘はT字形に配した4ヵ所の坪掘りであったが，水田面から約30cm～40cm下げると砂利層となる。砂利層は北部にやや厚めにみられ，磨滅した須恵器細片や青磁・白磁の細片と鉄滓1点が含まれていた。この遺物の出土は北東部の2つのトレンチに限られるが，各トレンチとも再び掘り下げると総じて礫層となり標高47.15～47.30mで北東側が低くなる。しかし遺物はなく，礫層の下の堆積土にも遺物が含まれ，黄灰色粘質砂を挾んで大きな礫の多い礫層にぶつかる。黄灰色粘質砂の一部が黒っぽい色調を呈す部分もあったが土器細片すら出土しなかった。堆積土の状況からは，南西側から北東側へと傾斜しているが，全体として流水の作用を受けた旧河道ないしは谷のようなものであったかも知れない。



第259図　I-2・3，II-6 出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

土　器（図版113-1，第259図）　1は，I-2のS577・W363から出土した完形に復原できる小形の器台。口径6.9cm，器高6.05cm，裾部径9.2cmの大きさをもち器壁は薄い。筒状のくびれ部から受部・裾部ともに広がるが，鼓形器台の屈折が退化したものと思えるような微妙な曲線を描いて広がる。台部内面にハケ目と，外面の下位に指頭圧痕が残る他はヨコナデないしはナデ仕上げのようである。典型布留期ないしはそれ以降であろう。

縄文土器（図版113-3，第259図）　2はI-3のS577・W383の黄色粘土層から出土した粗製深鉢形土器で，口縁部破片と胴部破片がうまく接合しないものの同一個体である。外面にカキナデ条痕が施され，内面はナデられる。胎土に金雲母・長石・植物性の混和材を含み気泡がめだつ。暗茶褐色に焼成される。3はII-6南端の1トレンチから出土した粗製深鉢のくびれ部破片で内外面ともにナデられるが，外面はややカキナデに近い。胎土に金雲母・角閃石などを含み暗茶褐色に焼成される。いずれも後期末～晩期前半におさまる土器であろう。

5．小　結

上覚地区の調査では，三雲遺跡群が南西方向にも広がることを確認できたが，傾向として弥生時代後期後半以降にその主体があるようにも感ぜられる。I-9の2号住居跡から出土した土

器は，加賀石Ⅰ-23の1号住居跡(『三雲遺跡』Ⅰ)・下西Ⅱ-10の住居跡状遺構上層(『三雲遺跡』Ⅲ)出土土器などに対比しうるもので，どちらかといえば下西の例に近い。典型布留式期に後続する時期の4世紀末～5世紀初頭の土器といえよう。

一方，ヤリミゾ地区の調査では，「井原鑓溝」の確認をなしえていないが，井原集落から細々石神社に向かって流れる現在の用水路に沿った形に谷状をなしていたと想定しうるような状況が各トレンチで窺えた。Ⅰ-2にみるように縄文時代晩期以前に谷が形成されているものの，長い期間にわたってその名残があり，居住地や墓地としては使用されなかったと考えられるので「井原鑓溝」はその西側台地部分の水路沿いを想定すべきであろう。 (小池)

第6節　南小路地区の調査

1．はじめに

南小路地区の調査は，三雲遺跡全体の調査が遺跡の範囲と遺構面の深さ確認に主眼が置かれたのに対し，文政5年発見の甕棺出土地点の確認と重要遺構範囲確認が目的となった。しかし，昭和54年以後の調査は住宅建設に伴う試掘調査もあり，目的とする地点を必ずしも調査できたとはいえない。

昭和49年度の試掘調査は，Ⅰ-6・8，Ⅲ-3・4のトレンチ調査となり，Ⅰ-6では鏡片などが出土し，文政5年(1822)に発見された甕棺に隣接していることが判明した。

昭和50年度の調査は，昨年のⅠ-6の調査結果を踏まえて，その北側にトレンチを設定し，検出遺構に応じて拡張して調査した。その結果，文政5年の盗掘穴とさらに別の甕棺墓も発見することができた。西側のⅠ-7に延ばしたトレンチでは祭祀遺構も検出することができた。

昭和54年度の調査は，Ⅰ-6の北側に隣接するⅠ-5の住宅が解体されたために，この機会に調査することになった。調査の結果は，弥生時代の遺構は発見されず，Ⅰ-6の甕棺の時期には空白であることが判明した。

昭和56年度の調査は，Ⅰ-3に住宅建築がきまり，緊急的に試掘した。同時にⅠ-9では一部植木園に空地ができたことから，遺構確認の試掘を行った。この結果からも，弥生時代遺構はほとんどなく，古墳期の住居跡が検出された。

南小路Ⅰ-5の調査は，柳田康雄が担当し，川村博が参加した。

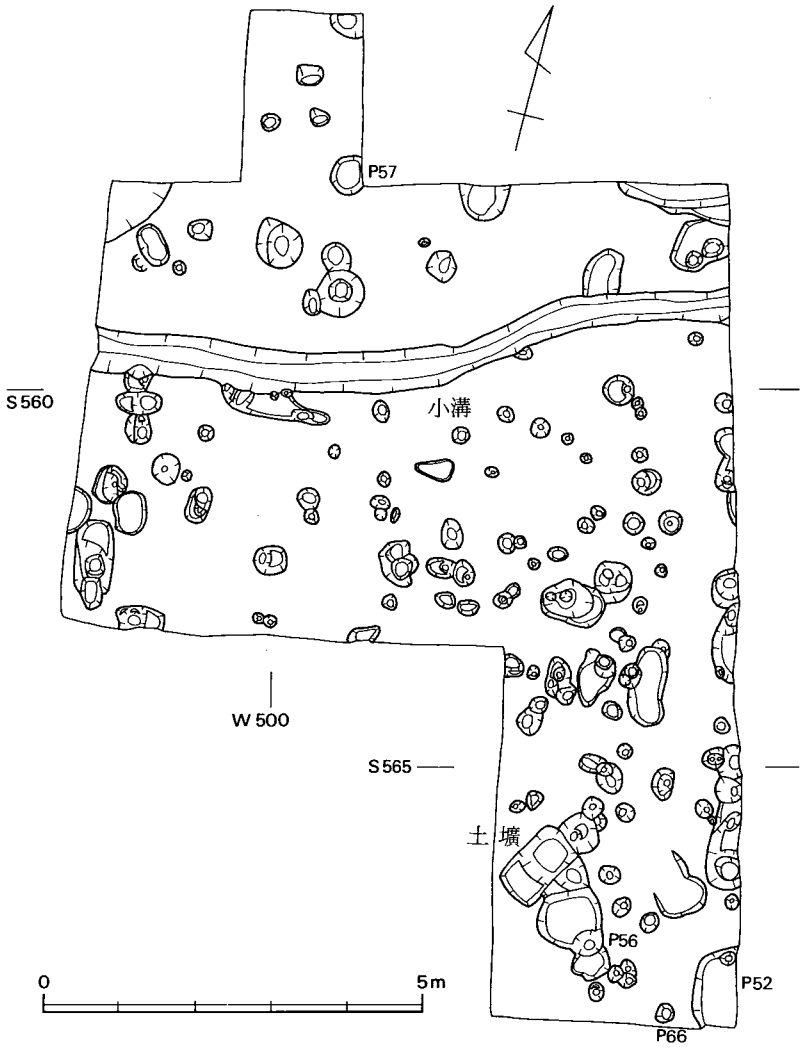
Ⅰ-6～8の調査は，柳田・馬田弘稔・宮崎貴夫が担当し，立石雅文・川村・小林美孝が参加した。

Ⅰ-3・9の調査は，柳田・小池史哲が担当した。

III-3・4の調査は，橋口達也が担当し，三津井知廣・平島勇夫・小林が参加した。　(柳田)

2．I-3

南小路地区の北端東寄りにあたる宅地で，個人住宅が建てられるとのことで，土地所有者の承諾をえて発掘調査した。北側に並ぶ立木を避ける必要と排土置場の確保などの制約があり，南西側などは調査しえなかった。南北13m,東西9mのL字形発掘区には,100余のピット・小溝・土壙などの遺構が検出できたものの，20年位前まで民家として使用されていたこともあってか，近世の攪乱も多く，井戸をはじめとしてガラス片などの混じるピットがかなりある。これらのピットを除外しても，柱穴様のピットから建物などを想定しえるものがない。小溝にも近世陶器片が含まれており，夾雑物のない遺構は少ない。ただ北東隅に検出された落ち込みと，北側の拡張部分に検出したピットでは弥生後期土器片のみであることと，南東隅のP52か



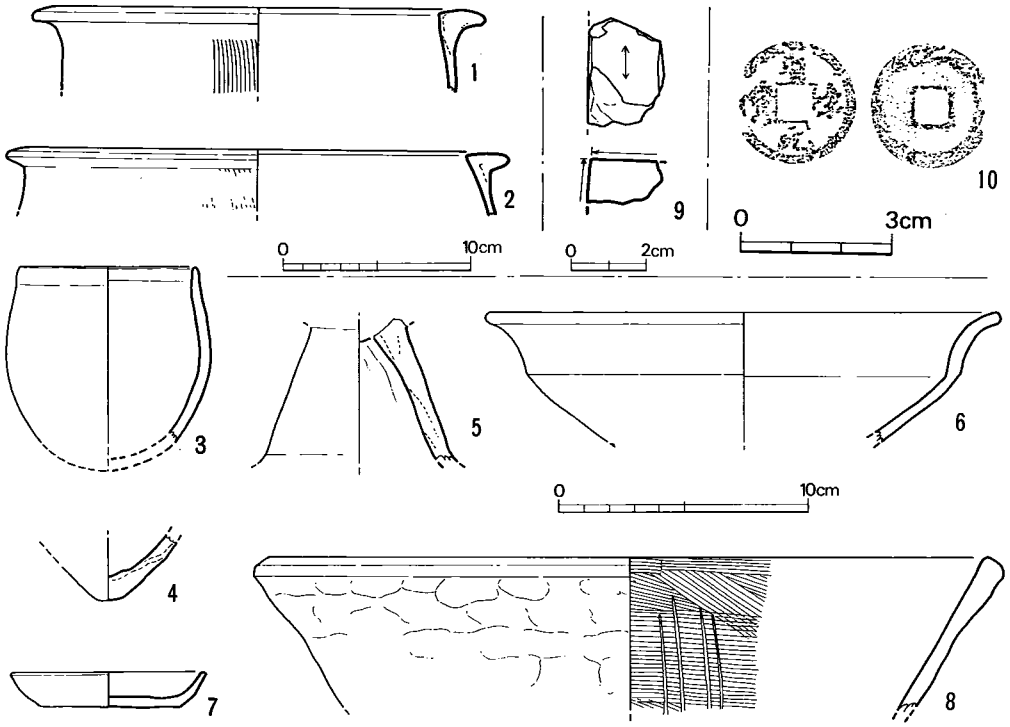
第 260 図　I-3 遺構配置図 (1/100)

ら土師器片がややまとまって出土したことなどが条件の良い例である。また東南部に，南北104cm，東西55cmの長方形プランで南に浅く北に深くなる土壙がある。深さは南端で12cm，北部で35cmの深さをもつ。弥生中期の口縁部破片が出土しているものの，終末ないしは古式土師器と思われる土器細片が混じっている。

出土遺物（図版 113-3，第261図）

図示しえる資料は少なく，10点のみ図示する。1・2は土壙出土の口縁部破片で，当該地区出土破片の古い例として示した。胎土に砂礫・金雲母を含み淡褐色に焼成されるが，外面に縦方向ハケ目が施される他はヨコナデないしはナデ調整される。中期前半に属す。

3～5・9・はP52から出土した。3は底部を欠くが口径7.1cm，残存高7cm，胴最大径8.2cmを有す。短い直口縁をもち丸味をもつ体部へ僅かに脹らむ器形で丸底になるだろう。精良な胎土で器壁を薄く，ミガキないしは丁寧なナデに仕上げている。4はナデ調整が施される尖る底部破片で全体の器形はわからない。5は高杯の脚筒部で，外面を丁寧にナデ，内面はヘラケズリされる。杯底部が挿入される種類のもので短い脚筒部から裾は外方に広がると思われる。布



第 261 図　I－3出土遺物実測図（1/4，1/3，1/2，2/3）

留式の段階であろう。9は中砥程度の砂岩製砥石片で火を受けて変色している。

6はP57から出土した高杯杯部破片。杯上半部が短く外反する弥生終末期のもの。上半部の内外面ともに横方向のミガキ，下半部の内面は縦方向にミガかれる。

7は小溝出土の糸切り底の土師器小皿で，口径7.8cm，器高1.4cm，底径5.6cmを測る。14世紀～15世紀とされている。

8は復原口径30cmの破片資料だが，土師器摺鉢で，2条単位の下ろし目が入る。内面と外面の上部に焦げつきがみられる。P56から出土した。

10は，P66から出土した古銭で，「聖宋元寶」。直径2.5cm，厚さ1.4mmを有している。初鋳年代1101年の北宋銭だが，五反間III-5出土の聖宋元寶とは書体・法量ともに異なる。

南小路I-3では，まとまった遺構を検出するに至らなかったが，弥生時代中期前半の資料の存在，後期後半～終末期の遺構が北部に存在する可能性，布留式期前後の遺構の可能性が，近隣にあろう。 (小池)

3. I-5 (図版114-1，第262図)

南小路I-5は，文政5年に発見された甕棺墓のあるI-6の北側に隣接し，昭和49・50年度の調査時には住宅があり調査できなかったところである。

調査の結果，住居跡状方形竪穴が4基検出され，青磁・白磁や古銭などが出土した。

1号竪穴 (図版114-2，第262図)

2号甕棺の北側で検出した隅丸方形プランの竪穴で，2.54×2.50，深さ約0.3mを測る。床面面南側に不整楕円形の土壙をもち，床面に2個の柱穴状ピットを検出している。

白　磁 (第263図)　1は口径16.6cmで，釉は白灰色である。2は口径17.5cmで，釉が灰白色で，粗い貫入をみる。3は口径17.8cmで，釉が淡緑白色で，体部に沈線をみる。4は高台径7.0cmで，内底に施釉後環状のカキ取りがある。5は口径9.2cm，高台径4.15cm，器高2.1cmを測る。灰白色の釉を施している。

2号竪穴 (図版115-1，第262図)

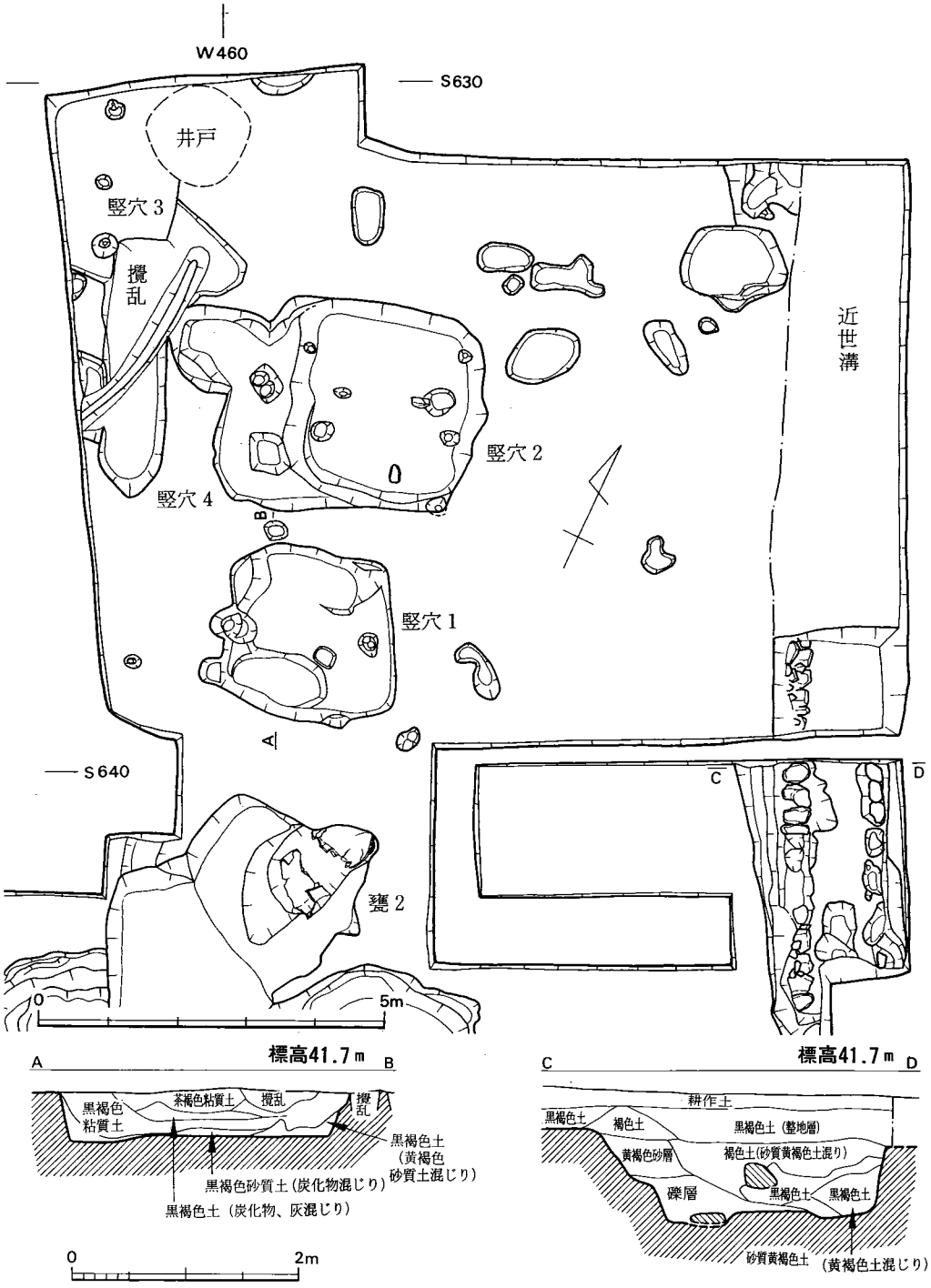
1号竪穴の北側で検出した隅丸方形プランの竪穴で，床面はほぼ平坦で，礫が散乱し，4個の柱穴様ピットを検出している。大きさは2.74×2.86mで，深さは約0.45mである。

白磁，青白磁などが出土した。

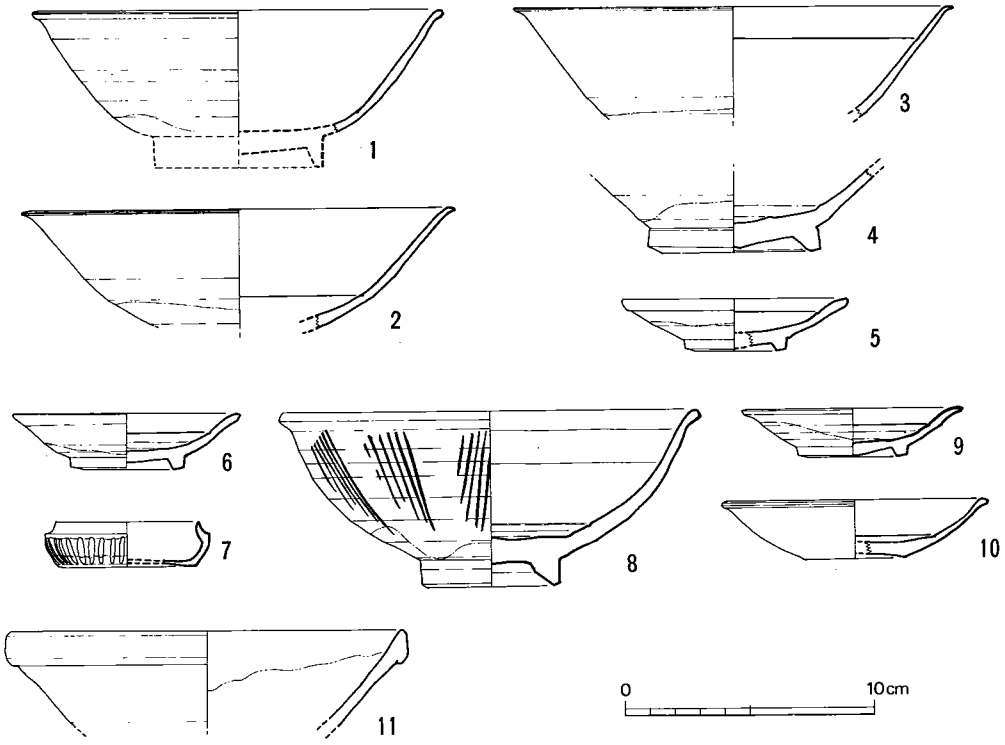
白　磁 (第263図) 6は口径9.2cm，高台径4.5cm，器高2.2cmを測る。見込み部をカキ取っている。釉は淡黄灰白色である。

青白磁 (第263図) 7は口径5.7cm，底径5.5cm，器高1.8cmを測る。青白色な釉で，体部は凹みにより蓮弁をあらわしている。

90



第 262 図　1－5 遺構配置・土層実測図（1/100, 1/60）



第 263 図　I－5 出土陶磁器実測図(1/3)

3号竪穴(図版115-2，第262図)

調査区北西部に検出した竪穴で，東側を現在の井戸で，南側を攪乱の土壙で切られている。床面に3個の柱穴状ピットが並ぶようである。

出土遺物には，青磁，白磁がある。

青　磁(第263図)　8は口径17.0cm，高台径5.6cm，器高7.0cmを測る。体部外面には櫛描き文をみる。釉は濁黄緑色である。

白　磁(第263図)　9は口径9.0cm，高台径4.4cm，器高2.0cmを測る。見込み部は環状にカキ取っている。釉は灰白色である。

4号竪穴(第262図)

2号竪穴に重複した竪穴で，不整形プランを呈し，2.1×2.3cm・深さ約0.2mを測る。床面は舟底状で，床面ほぼ中央に，炭，灰などの炭化物とともに小礫を検出している。

出土遺物には，白磁がある。

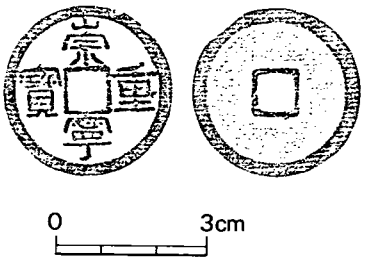
白　磁(第263図)　11は，口径16.0cmを測る玉縁口縁をもつ椀である。

その他の出土土器（第263図10）

白　磁　口径10.7cm，底径4.2cm，器高2.4cmを測る。釉は灰白色である。（川村）

古　銭（図版115-3，第264図）

4号竪穴から1点出土した。「崇寧重寶」で，初鋳年代が崇寧元年（1102年）の北宋銭である。周縁の一部を欠くもののほぼ完形を保ち，外径34.3mm，厚さ2.0mmの大きさを有して，7.6mm四方の方孔が空くが，裏面では方孔の内側に甲張りが残るために7.2mm四方となっている。三雲遺跡では柿木5地区からも出土している（『三雲遺跡』Ⅲに報告）が，本例よりもやや外径が小さい。（小池）



第 264 図
Ⅰ-5　出土古銭拓影（2/3）

南小路出土陶磁器

3号遺構からは白磁が集中して出土している。1～3・5は11世紀後半頃の遺構から多く出土するが，4は12世紀中頃から見い出し得る資料である。このことから3号遺構の埋没は12世紀中頃に上限を求められる。

2号壁穴は，出土資料から3号遺構と同一の時期と考えられる。

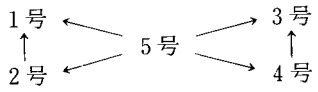
3号住居跡から出土した同安窯系青磁椀は，通例のものとは若干形態を異にし，例は少ない。12世紀後半代に年代を求められる。4号遺構からの出土資料は少なく，図化できたものは口縁部を三角形に仕上げた椀（11）だけである。11世紀後半から12世紀代にかけて多く出土する資料である。

白磁皿10は南小路地区出土資料のなかではもっとも古い。11世紀後半から12世紀初頭頃に集中して出土する。（森田）

4．Ⅲ-3・4

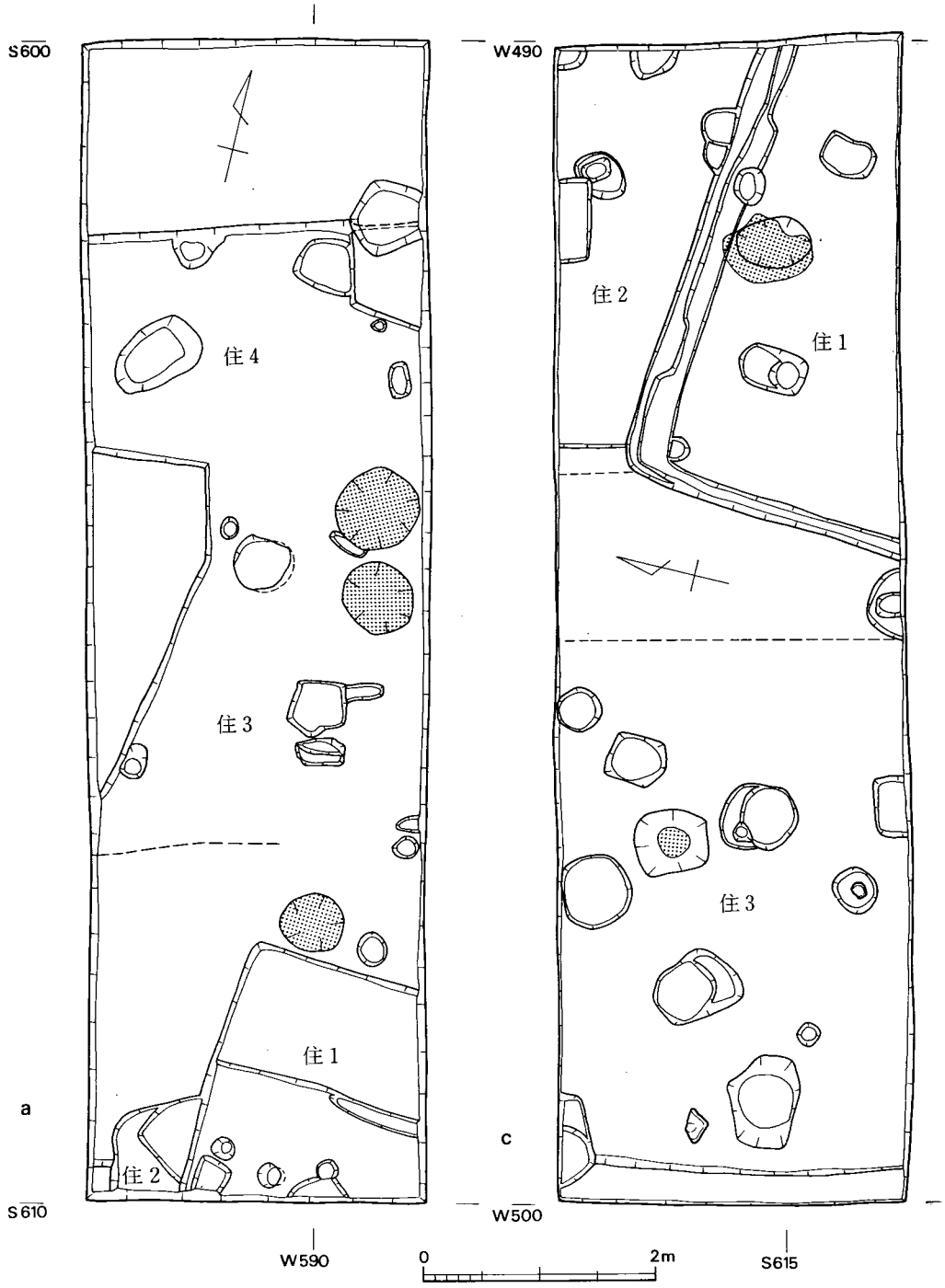
① Ⅲ-3aのトレンチ（図版116-1，第265図）

東西3m×南北10mのトレンチを設定し発掘した。住居跡5棟分が検出された。切り合い関係は次のとおり（古→新の関係で示す）。

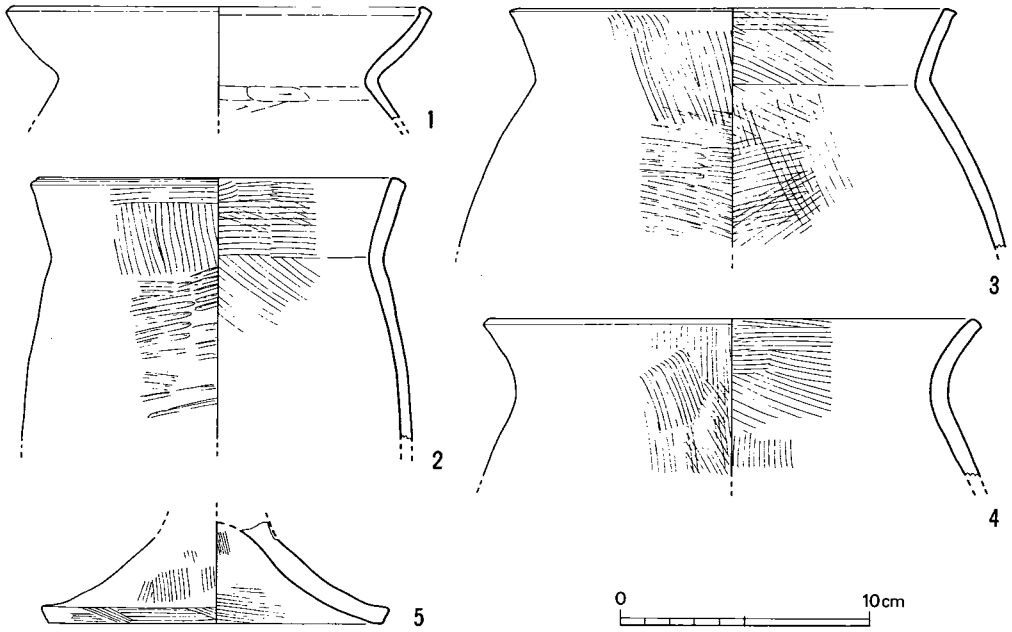


1号住居跡は東南隅にあり，ベッド状遺構をもつ方形住居跡であることがわかる。2号住居跡も方形住居跡である。3号住居跡も方形住居跡で，やや西寄りに炉をもつ。4号住居跡は南北長530cm程のもので，方形を呈する。西南側と東北側にベッド状遺構を，ほぼ中央部と思われる位置に炉をもつ。5号住居跡は西南隅に壁の一部が認められるのみである。

南小路



第 265 図　III-3a・cトレンチ実測図（ 1/60）



第 266 図 Ⅲ-3a 1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

1号住居跡出土の土器(第266図)は，2・3・4は在地系の伝統的な形態・手法をもつ甕であるが，1は器形・手法ともに布留式古期に相当する甕である。

2号住居跡からは碧玉製管玉1が出土した

3号住居跡出土の土器(図版117-1，第267図)は，5の甕にいまだ平底を残し，胴下半から底部をヘラナデするという弥生終末的な要素を残しているが，6の甕は丸底化しており，全体を総合してみると土師器としたほうがよい。

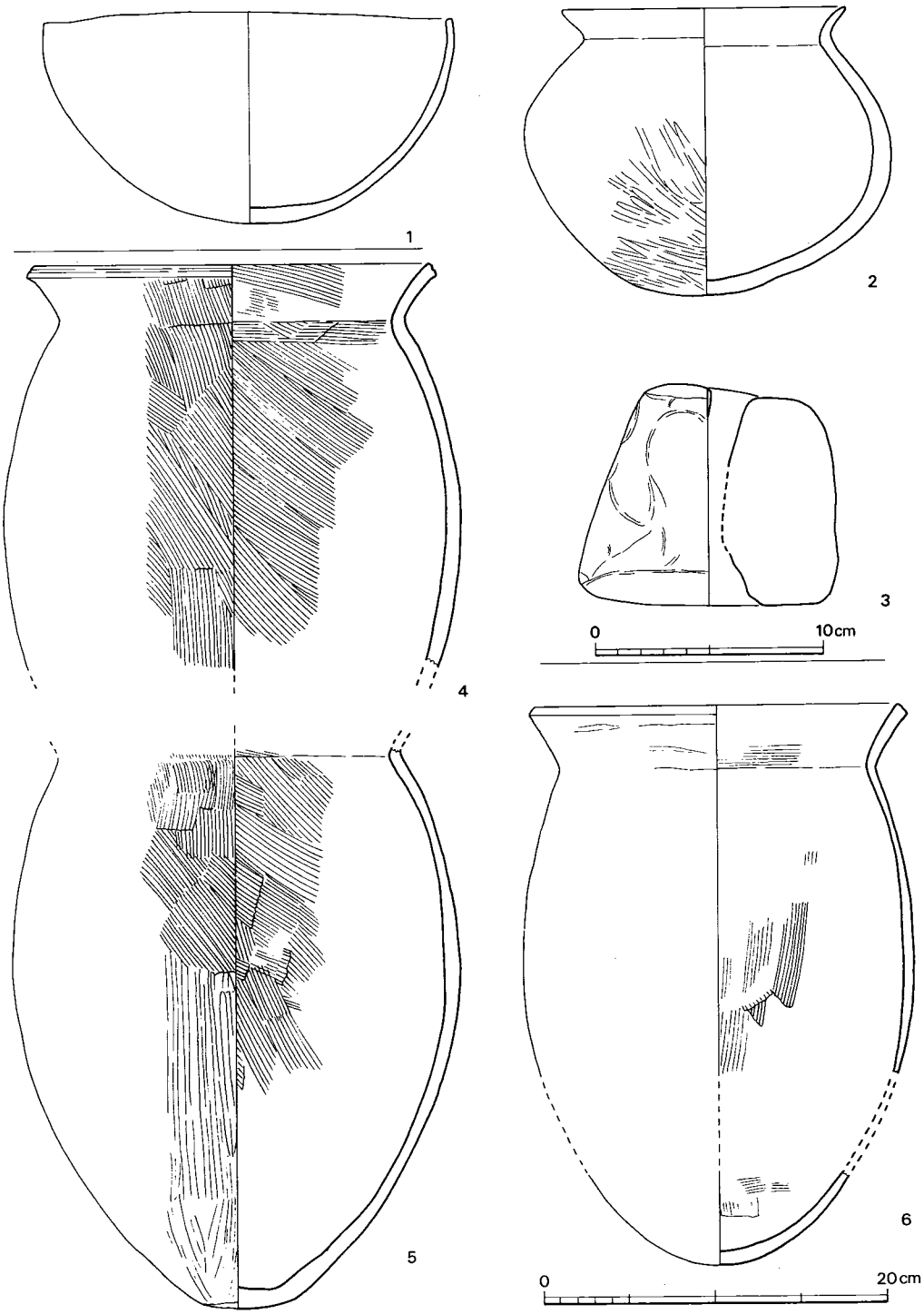
4号住居跡出土の椀および甕(図版117-2，第268図)は，3号住居跡出土の土器(第267図1)とたいして変わるところはなく，ほぼ同時代のものと考えられる。

5号住居跡については，以上のことから弥生終末以前のものであろうと推測できる。(橋口)

石　器(図版118-2，第270・271図1・2・5)いずれも第3層から出土した。1は青灰色粘板岩の砥石で各面ともによく使用されている。2は玄武岩製の大形石斧だが，折損した体部を打欠調整して刃部に再加工している。再加工後の使用による磨耗もみられる。重量は362gを測る。5は白雲母片岩製紡錘車の半欠品で厚さ3.8m，孔径4.3mm，重量の現存値9.15gを測る。図版に示す面には製作時の割付線と思われる細い線刻がある。

鉄　器(図版117-3，第272図4)　ピット2から出土した先端部破片で刃部と背があり刃子と思われる。

(小池)



第 267 図　Ⅲ-3a　3号住居跡出土土器実測図（1/3, 1/4）

② Ⅲ-3cのトレンチ

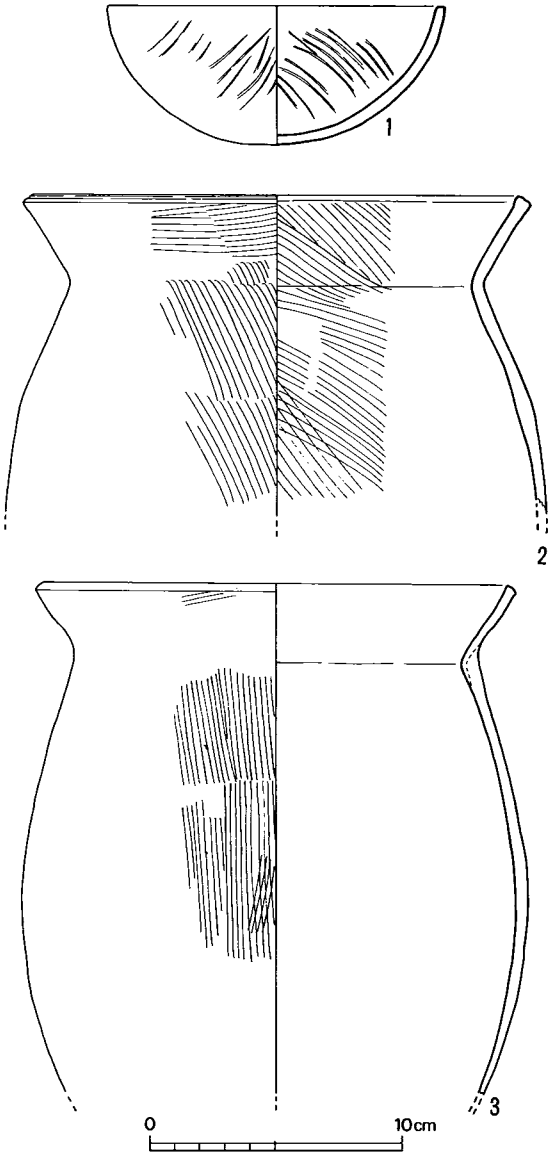
（図版116-2，第265図）

南北3m×東西10mのトレンチを設定し，発掘を行い，3棟分の住居跡を検出した。1号住居跡は周溝をめぐらす方形の住居跡である。北壁寄りに壁よりも低くまた床面からはやや浮いた状態で焼土が認められたが，この住居跡の炉とは思えず，またカマドとも考えられない。

2号住居跡は方形になるものと考えられ，P3には焼土・炭化物がつまっており，これは炉と考えられる。

3号住居跡は東側をやや掘りすぎているが，本来この部分は土層で観察するとベッド状遺構があり，床面より5cm程高く，また壁も5cmほど認められる。東西長600cmほどの方形住居跡で，ベッド状遺構の幅は約145cmである。中央部には炉が認められる。

土　器（図版118-1，第269図）　すべて1号住居跡としてとりあげられているが，弥生土器・土師器・須恵器が混じっている。1は須恵器甕で口径11.5cmを測るやや大形のものである。頸には波状文を施す。ヨコナデで仕上げている。灰黒色を呈し，焼成はよい。瓩は古式のもので2・3・4・5の土師器はこれに伴うものと考えてよく，これらが1号住居跡のものと考えられる。5世紀中頃に位置づけられよう。

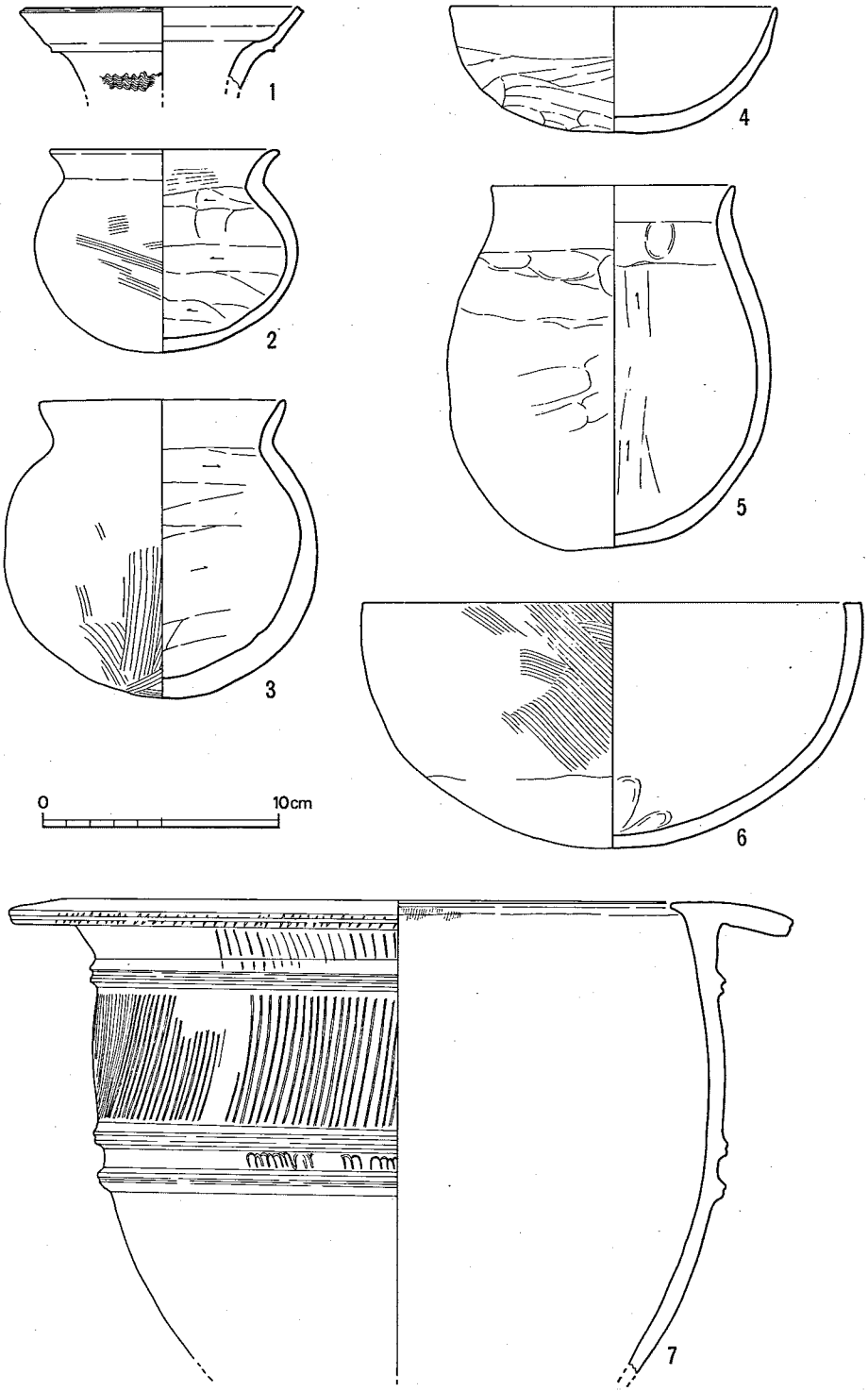


第 268 図
Ⅲ-3a　4号住居跡出土土器実測図（1/3）

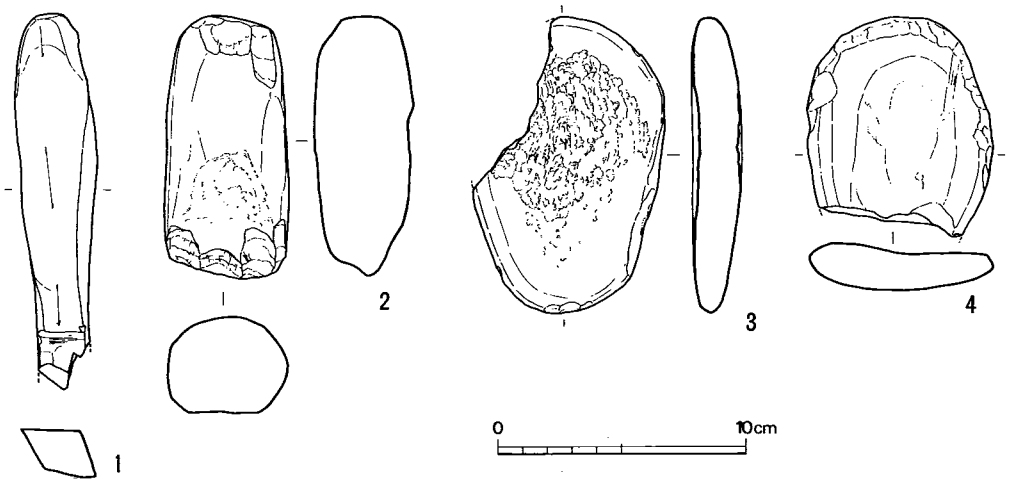
3号住居跡はベッド状遺構を有し，住居跡形態からいえば弥生時代終末～古墳時代初頭のものといえるが，6の椀が古墳時代初頭に属するものであり，この住居跡に伴うと考えてよい。

7は弥生中期後半の丹塗磨研の甕ではあるが，2号住居跡に伴う可能性が強い。　（橋口）

南小路

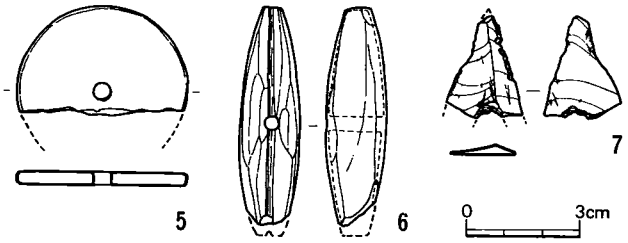


第 269 図　Ⅲ-3c　1号住居跡出土土器実測図（1/3）



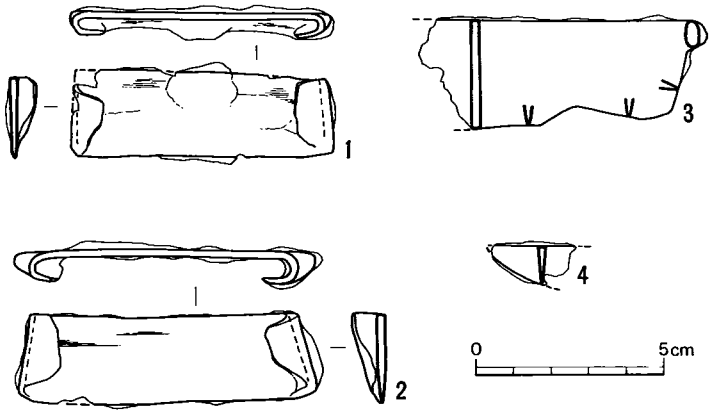
第 270 図　Ⅲ-3a・3c 出土石器実測図（1/3）

石　器(図版 118-2，第270図 3・4）　2点共1号住居跡埋土から出土した。3は角閃雲母片岩の敲打面をもつ板状石器で，両面の中央に凹みをもち周縁は磨耗する。4は白雲母片岩の凹みをもつ板状石器で，中央の凹みの敲打痕は顕著でないが周縁は打欠調整のあと磨耗している。



第 271 図　Ⅲ-3a・4a・5　出土石器実測図（1/2）

鉄　器(図版117-3，第272図1～3）　1は，手鎌で1号住居跡床面から出土した。折返し部の一端を欠損するが，長さ6.9cm，幅2.3cm，厚さ2㎜を測る。2も手鎌で1号住居跡の埋土から出土した。完形品で，長さ7.8cm，幅2.3cm，厚さ2㎜を測る。2点とも上部内面に木質が若干残る。3は1号住居跡内のP2から出土したが，一方を欠き本来の形状は不明。



第 272 図　Ⅲ-3a・3c　出土鉄器実測図（1/2）

南小路

刃部状を呈す部分は蛇行する縁のみで，他は鈍い。 (小池)

③ III-4 a トレンチ(図版116-3，第273図)

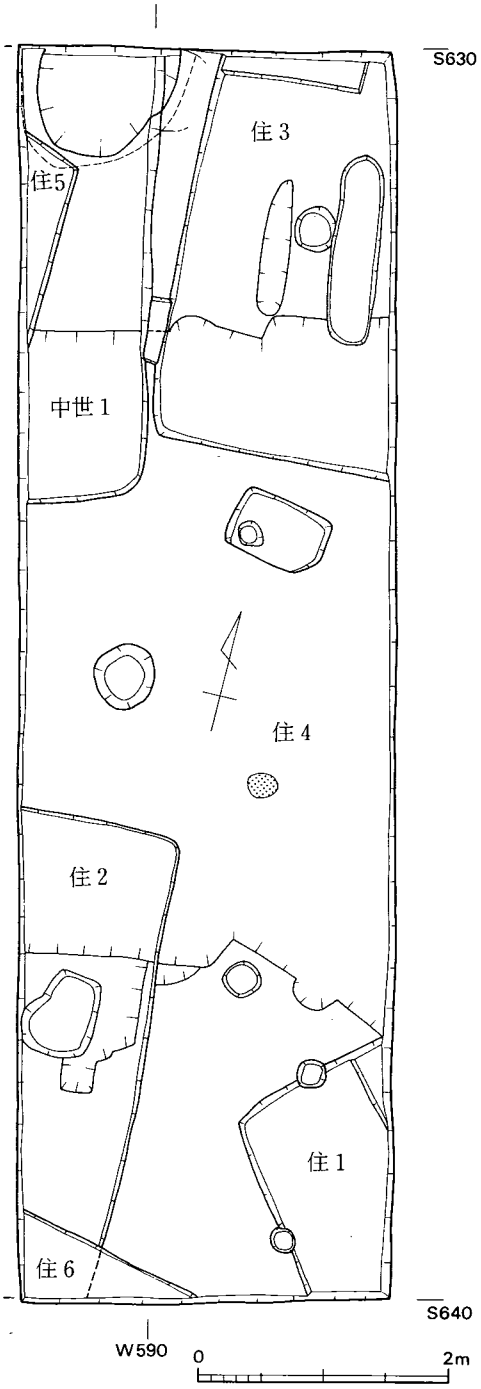
東西3m×南北10mのトレンチを設定し発掘した。番号を付したものだけで6棟分，その他に少なくとも2棟分の未掘の住居跡と貯蔵穴1がある。

1号住居跡はベッド状遺構をもつ方形住居跡である。2号住居跡は6号住居跡に切られており，いずれも方形住居跡である。3号住居跡はベッド状遺構をもつ方形住居跡である。5号住居跡は東北の一角がトレンチにかかっている。4号はトレンチ内では壁はないが，ほぼ中央部に炉と思われる径20cmほどの焼土がある。

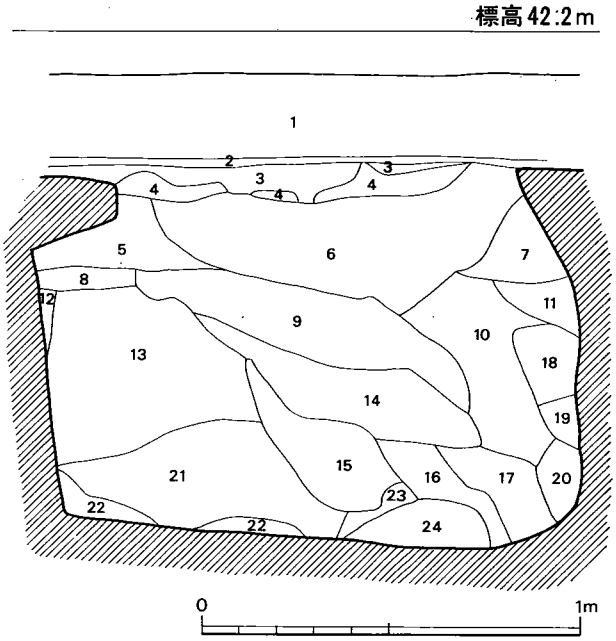
貯蔵穴(第274図)は円形プランの袋状竪穴で上端での径115cm，下端での径137cm，深さは90cmを測る。図示し得るほどの土器がなく時期はわからないが，切り合いからは住居跡より古い。おそらく弥生前期のものであろう。 (橋口)

石　器(図版118-2，第271図) 6は第3層出土の青灰色粘板岩製の有溝石錘。一端を欠失するが，現存長5.7cm，幅1.6cm，厚さ1.65cmの大きさで，長軸方向に一周する溝が刻まれ，体部央にこの溝をつなぐ孔径3.5～4㎜の1孔が穿たれる。重量の現存値は19.1gを測る。

なお7は，III-5の第4層出土の黒曜石製剝片鏃で端部を欠失する。腰岳産黒曜石であろう。 (小池)



第273図　III-4aトレンチ実測図(1/60)



1 耕作土
2 床土
3 灰褐色土(わずかに2を含む)
4 暗茶褐色土(3を含む)
5 茶褐色土(暗茶褐色混じり)
6 暗茶褐色土
7 暗黄褐色土(暗茶褐色混じり)
8 茶褐色土(暗茶褐色混じり)
9 暗茶褐色土(6よりわずかに淡い)
10 暗茶褐色土(茶褐色混じり)
11 暗黄褐色土(暗茶褐色混じり)
12 茶褐色土(黄褐色混じり)
13 茶褐色土
14 茶褐色土(土器・焼土包含)
15 茶褐色土(土器包含)
16 暗茶褐色粘質土(黄褐色土混じり)
17 暗茶褐色粘質土
18 暗茶褐色土(黄褐色土混じり)
19 黄褐色土(暗茶褐色土混じり)
20 暗茶褐色粘質土(黄褐色土混じり)
21 黄褐色土
22 褐色粘質土
23 黄褐色粘質土
24 茶褐色粘質土

第 274 図 Ⅲ-4a 貯蔵穴土層断面実測図 (1/20)

5. 小 結

南小路地区では，東半のⅠ・Ⅱに宅地が多いこともあり近世の攪乱も多いが，Ⅰ-3・Ⅰ-5では12世紀代の遺物やこれを出土させる遺構があり，Ⅰ-3では弥生中期前半・終末～古墳時代前期の遺構の存在を近隣に想定させる。屋敷・南小路・上覚地区とつづく瑞梅寺川流路に沿った台地状地形では，その東半に南小路王墓の占地・井原鑓溝の可能性を有するが，中央部・西半では弥生終末～古墳時代前期の遺構・遺物の存在も傾向として多い。またⅢ-3cの1号住居跡から須恵器を伴って出土した土師器・鉄器のセットは，5世紀前半～中頃にかけての三雲遺跡では集落として極端に減少する時期のもので，その意味においては重要な資料であろう。 (小池)

南小路地区の調査は，この節の「1．はじめに」で書いたように，Ⅰ-6・7に位置する2基の甕棺墓と，これに付随すると思われる祭祀遺構の報告をすることで完了することになっていたし，これを報告することが『三雲遺跡Ⅳ』の使命でもあった。ところが，Ⅰ-6・7の報告をする前に，この小結を書かざるを得なくなったことが残念でならないが，この責務は発掘調査から報告書作成の代表者的位置にあった柳田にあるもので，学術調査報告書とすることはもちろん，行政的報告書にすることもできずに，本命であるはずの「南小路甕棺墓」の報告を欠落する中途半端な報告書となった。深く恥じるところである。昭和49年度を初年度とする発掘調査以来，この調査と報告書作成を指導していただいた指導委員の皆様やこれを担当してきた文化課の皆様に深くお詫びします。

以後は，三雲南小路「王墓」の報告書が「幻」とならないように努力します。

なお，第2章には「糸島の弥生文化」を掲載することになっていたが，これも削除せざるを得なくなった。 (柳田)

註1 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982)

2 小田富士雄他「狐塚遺跡」(筑後市教育委員会，1970)

3 橋口達也「池の上墳墓群」(『甘木市文化財調査報告』5，1979)
柳田康雄『甘木市史一原始編』(1982)

4 註3に同じ。

5 山崎純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式須恵器」(『古文化談業』6，1979)

6 池辺元明「玉類一水晶玉」(『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』2，福岡県教育委員会，1980)

7 馬田弘稔他「上川原遺跡」(『甘木市文化財調査報告』13，1982) 同遺跡出土74号甕棺墓下甕(大型棺)の肩部でも，この逆転が認められたが，この逆転接合部には更に粘土帯を外面に接合させており，更に強度を考慮したものであろう。

8 註7に同じ。

9 柳田純孝「福岡市野方中原遺跡調査概報」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』30，1974)

10 金廷鶴・鄭澄元「釜山華明洞古墳群」(『釜山大学校博物館遺跡調査報告』2，1979)

11 定森秀夫「韓国慶尚南道釜山・金海地域出土陶質土器の検討」(『平安博物館研究紀要』7，1982)

12 註3の柳田康雄に同じ。

13 註3の橋口達也に同じ。

14 福岡県教育委員会が国道200号バイパス建設に伴って発掘調査しているもので，竪穴式石室から古式横穴式石室を主体部とする6墓の古墳群より「池の上II式の陶質土器」から古式須恵器が出土している。調査は柳田が担当。

第３章　科学的分析

第１節　三雲出土の青銅鏡のＩＣＰ分析

望　月　　明　彦

福岡県三雲出土の青銅鏡９点について，その元素組成を知るためにプラスマ発光分光分析（ＩＣＰ分析）により定量分析を行った。

１．ＩＣＰ分析

試料約10mgをとり，塩酸：硝酸：水＝２：１：２の混酸で処理し，10mlの溶液にして測定した。測定した元素は以下のとおりである。

Ag, Al, As, Au, Ba, Ca, Co, Cr, Cu, Fe, K, Li
Mg, Mo, Mn, Na, Ni, Pb, Sb, Sn, Sr, Ti, Zn, Zr

誤差は元素などにより異なるが，約数％程度で微量元素はもっと大きいと思われる。

２．測定試料

測定試料は福岡県教育委員会より提供された三雲南小路I-6 出土の中国鏡９点と仿製鏡１点である。

以下に測定試料を示す。

分析試料

試料No.	遺　物	出土　遺跡
FB004	重圏彩画鏡	三雲南小路１号カメ棺
FB005	重圏文精白鏡	三雲南小路１号カメ棺
FB006	雷　文　鏡	三雲南小路１号カメ棺
FB007	雷　文　鏡	三雲南小路１号カメ棺
FB008	連弧文清白鏡９	三雲南小路１号カメ棺
FB009	連弧文清白鏡９	三雲南小路１号カメ棺
FB010	連弧文清白鏡３	三雲南小路１号カメ棺
FB014	連弧文日光鏡１	三雲南小路２号カメ棺
FB015	連弧文日光鏡２	三雲南小路２号カメ棺外
FB016	小形仿製鏡	三雲塚廻 端山古墳前方部周濠

試料にはかなりの錆が付着しており，前処理によってできるだけ取り除いたが，完全には取り除かれていない。特にFB015は試料中に地の部分がほとんどなかった。

3．分析結果

分析結果を表1に示す。表中の数字はすべて重量％で，Traceは分析の結果微量が検出されたことを，また，N．D．は検出されなかったことを示す。

表1　分析結果 (1)

	FB004	FB005	FB006	FB007	FB008	FB009	FB010B	FB014	FB015	FB016
Ag	0.07	0.10	0.11	0.08	0.04	0.09	0.08	0.07	0.08	0.09
Al	0.15	0.07	0.14	0.29	0.11	0.11	0.17	0.33	0.72	0.03
As	0.10	0.93	0.65	0.66	0.23	0.65	0.43	0.32	0.23	0.46
Au	N.D.	TRACE	N.D.	N.D.	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01
Ba	TRACE	TRACE	0.09	0.003	0.002	0.04	N.D.	0.01	N.D.	N.D.
Ca	0.09	0.06	0.09	0.08	0.09	0.32	0.04	0.07	0.24	0.03
Co	0.04	0.06	0.06	0.11	0.03	0.08	0.05	0.03	0.03	0.01
Cr	N.D.	TRACE	N.D.	0.008	0.005	0.008	TRACE	0.005	0.15	TRACE
Cu	56.6	30.1	31.6	45.1	48.2	43.4	43.9	32.5	16.2	91.2
Fe	0.15	0.25	0.28	0.10	0.14	0.15	0.29	0.51	0.66	0.02
K	N.D.	N.D.	N.D.	TRACE	0.17	0.21	0.13	0.18	0.29	0.10
Li	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE
Mg	0.03	0.01	0.03	0.14	0.01	0.08	0.06	0.09	0.13	0.003
Mo	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	TRACE	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	TRACE
Mn	0.001	0.005	0.001	0.002	0.001	0.001	0.003	0.004	0.006	TRACE
Na	0.10	0.08	0.11	0.22	0.08	0.12	0.05	0.10	0.10	0.03
Ni	0.18	0.17	0.18	0.19	0.07	0.15	0.12	0.08	0.06	0.07
Pb	5.29	9.22	8.55	4.09	4.24	5.51	6.60	8.53	6.41	6.12
Sb	0.23	0.64	0.67	0.53	0.21	0.55	0.50	0.26	0.28	0.67
Sn	28.8	31.8	33.4	26.9	14.8	27.6	24.5	22.9	36.4	1.86
Sr	.0006	.0003	.0006	0.001	.0006	0.001	.0003	.0004	0.001	TRACE
Ti	0.003	TRACE	0.002	0.003	0.003	N.D.	0.002	0.003	0.004	0.003
Zn	0.10	0.06	0.10	0.74	0.07	0.33	0.05	0.06	0.05	0.13
Zr	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	0.005

測定試料のところでも述べたように，これらの試料は腐蝕されているので，分析値は当然鏡のもとの成分とは異なっている。実際主成分である銅，鉛，錫の3元素のトータルをみると，FBO16の仿製鏡の99％を除くと，約60％から多いものでも約90％と少なくなっており，70数％のものが多い。

まず各試料ごとに検討してみよう。

FB004は比較的錆の少ない試料でかなりもとの組成と近いと思われる。FB005，FB006は相当腐蝕の進んでいる試料であるが，非常に組成が似かよっている。同一遺構からの出土であることも考え合わせると，もとの組成もほとんど同じではなかったかと思われる。FB007～

FB010 は FB008 の Sn の含量が15%と少ないことを除けば良く似ているが，細かい所では若干異なっている。

表2　分析結果 (2)

	FB004	FB005	FB006	FB007	FB008	FB009	FB010	FB014	FB015	FB016
Ag	0.08	0.14	0.14	0.10	0.06	0.11	0.10	0.11	0.13	0.09
Al	0.16	0.10	0.18	0.37	0.16	0.14	0.22	0.50	1.16	0.03
As	0.11	1.26	0.85	0.83	0.34	0.82	0.56	0.48	0.37	0.46
Au	N.D.	TRACE	N.D.	N.D.	0.01	0.01	0.01	0.03	0.02	0.01
Ba	TRACE	TRACE	0.12	0.004	0.003	0.05	N.D.	0.02	N.D.	N.D.
Ca	0.10	0.08	0.12	0.10	0.13	0.40	0.05	0.11	0.39	0.03
Co	0.04	0.08	0.08	0.14	0.04	0.10	0.06	0.05	0.05	0.01
Cr	N.D.	TRACE	N.D.	0.01	0.007	0.01	TRACE	0.008	0.24	TRACE
Cu	61.6	40.9	41.5	56.9	70.3	54.6	57.0	49.1	26.1	90.4
Fe	0.16	0.34	0.37	0.13	0.20	0.19	0.38	0.77	1.06	0.02
K	N.D	N.D.	N.D.	TRACE	0.25	0.26	0.17	0.27	0.47	0.10
Li	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE
Mg	0.03	0.01	0.04	0.18	0.01	0.10	0.08	0.14	0.21	0.003
Mo	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	TRACE	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	TRACE
Mn	0.001	0.007	0.001	0.003	0.001	0.001	0.004	0.006	0.01	TRACE
Na	0.11	0.11	0.14	0.28	0.12	0.15	0.06	0.15	0.16	0.03
Ni	0.20	0.23	0.24	0.24	0.10	0.19	0.16	0.12	0.10	0.07
Pb	5.76	12.5	11.2	5.16	6.19	6.94	8.57	12.9	10.3	6.07
Sb	0.25	0.87	0.88	0.67	0.31	0.69	0.65	0.39	0.45	0.66
Sn	31.3	43.2	43.9	33.9	21.6	34.7	31.8	34.6	58.6	1.84
Sr	.0007	.0004	.0008	0.001	.0009	0.001	.0004	.0006	0.002	TRACE
Ti	0.003	TRACE	0.003	0.004	0.004	N.D.	0.003	0.005	0.006	0.003
Zn	0.11	0.08	0.13	0.93	0.10	0.42	0.06	0.09	0.08	0.13
Zr	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	0.005

FB014はCu，Pbの量はFB005，FB006と近いが，Snが約10%ほど少ない。FB015は腐蝕が一番進んでおり，Cuが16%と激減してしまっている。このように，一般に腐蝕が激しい青銅においては，Cuの分析値が減少し，相対的にSnの値が見かけ上増加する傾向がある。FB016は全然錆びていない試料で，唯一の仿製鏡でもあり，他とは全く組成が異なり，Snは非常に少なく，不純物も余り含まれていない。

4．結果の考察

分析試料は大部分錆化しているが比較資料として山崎一雄により分析された立岩，須玖のものを表3・4に挙げる(註1)。表3が分析値で，表4は分析値のトータルが100%となるよう換算したものである。表2が本報告の分析値を100%換算したものであるが，FB007, FB009, FB010

が須玖の星雲文鏡，葉文鏡とよく似た組成をもつことに気がつく。主成分の分析値の合計を見ると75.6～76.5%と須玖のものの77.0，78.5%とほぼ一致し，各成分も似た傾向を示している。あくまでも推測でしかないけれども，もともとほぼ同じ主成分組成ではなかったかと考えられる。

FB004も須玖の鏡と似ているが，もとの3成分の分析値の総計が91%と錆化の程度が少ない。同一試料から錆びている部分とそうでない部分をとって分析すると，必ず錆びている方がCuが少なくなっていることを考えると，もとの組成は立岩の連弧文鏡，須玖の重圏文鏡との類似が考えられる。

表3　鏡の主成分の分析値(註1)

成分＼試料	①立岩・連弧文鏡	②須玖・星雲文鏡	③須玖・葉文鏡	④須玖・重圏文鏡
銅	66.3	49.2	45.7	67.0
鉛	5.2	3.4	3.9	4.3
錫	27.0	24.4	28.9	26.0
合計	98.5	77.0	78.5	97.3

また，表2のFB004の組成が表4の須玖のものとも似ていることを考えあわせると，立岩，須玖の4つの鏡とFB004，FB007，FB009，FB010とはもともと同じ主成分比で製作されていて，Cu：Pb：Sn＝70：5：25位の比が用いられていたのではないだろうか？ この比は今までの舶載鏡の分析値とも一致するのである。

仿製鏡を除くとその他の鏡は錆化が激しく，ここでは議論しないが，ただFB005，FB006，FB015は分析値が類似していることだけを指摘しておく。

FB016は他の鏡と全く異なる組成をもち，Cuが多くSnが極端に少ない。このような鏡は中国では出土しておらず，日本で製作されたことは疑いないことであろう。

表4　鏡の主成分と微量成分の分析値(註1)

成分＼試料		①立岩・連弧文鏡	②須玖・星雲文鏡	③須玖・葉文鏡	④須玖・重圏文鏡
主成分	銅	66.8	62.5	57.7	67.5
	鉛	5.2	4.3	4.9	4.3
	錫	27.3	31.1	36.5	26.2
微量成分	銀	0.05	0.2	0.07	0.2
	アルミニウム	0.04	0.07	0.07	0.05
	蒼鉛	0.04	0.1	0.04	0.1
	鉄	0.1	0.2	0.07	0.3
	ニッケル	0.06	0.2	0.06	0.2
	アンチモン	0.2	0.6	0.3	0.5
	砒素	0.2	0.7	0.3	0.6
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

5．終わりに

今回の分析結果から，いわゆる舶載鏡は，仿製鏡とは主成分比が全く異なることがはっきりしたわけであるが，多くが錆化した試料であったため，微量成分についての検討は不可能であった。しかしながら微量成分の分析は，原鉱石の産地推定には不可欠であり，さらに多くの良好な試料を分析していく必要があり，他に鉛同位体分析，金属組織の分析なども興味深いところであろう。

（国立沼津工業高等専門学校）

註1）山崎一雄『飯塚市立岩および春日市須玖岡本関係試料の化学分析』立岩遺跡（福岡，1977）

第2節　ガラスのＩＣＰ分析

望　月　　明　彦

福岡県三雲出土のガラスと汐井掛出土のガラス20点について，その元素組成を知るためにプラズマ発光分光分析（ＩＣＰ分析）により定量分析を行った。

1．ＩＣＰ分析

試料約20mgをとり，過塩素酸，硝酸，フッ化水素酸で処理，10mlの溶液にして測定した。測定した元素は以下のとおりである。

Al, As, B, Ba, Ca, Co, Cu, Fe, K, Li, Mg

Mn, Na, Ni, Pb, Sb, Sn, Sr, Ti, Zn, Zr

処理などの都合上 Si は測定していない。誤差は元素などにより異なるが，約数%程度である。

2．測定試料

測定試料は福岡県教育委員会より提供された三雲南小路Ｉ-6・仲田Ｉ-16と，鞍手郡若宮町汐井掛出土の弥生時代から古墳時代のガラス小玉・管玉・壁である。

以下に測定資料を示す。

分析試料

試料No.	遺　物	出土　遺跡	色
FG001A	壁	三雲南小路1号カメ棺	青
FG003A	管　　玉	三雲南小路1号カメ棺	白
FG003B	管　　玉	三雲南小路1号カメ棺	白
FG003C	管　　玉	三雲南小路1号カメ棺	白
FG003D	管　　玉	三雲南小路1号カメ棺	白
FG003E	管　　玉	三雲南小路1号カメ棺	白
FG003F	管　　玉	三雲南小路1号カメ棺	白
FG012	ガラス勾玉	三雲石橋II－11　5号石棺	青
FG017	ガラス小玉	三雲南小路1号カメ棺	青
FG018B	ガラス小玉	三雲仲田1-16　3号不整形土壙	青
FG019	ガラス小玉	三雲仲田1-16　3号不整形土壙	青
FG020	ガラス小玉	汐井掛上げ土内	青
FG021A	ガラス小玉	汐井掛91号木棺	青
FG021B	ガラス小玉	汐井掛91号木棺	青
FG021C	ガラス小玉	汐井掛91号木棺	青
FG021D	ガラス小玉	汐井掛91号木棺	青

FG022A	ガラス小玉	汐井掛68号木棺	青
FG022B	ガラス小玉	汐井掛68号木棺	青
FG023A	ガラス小玉	汐井掛19号土壙墓	青
FG023B	ガラス小玉	汐井掛19号土壙墓	青

3．分析結果

分析結果を表1に示す。FG001Aは壁で，青色をしており，鉛を約50%含む鉛ガラスである。立岩の塞杆(註1)・須玖の管玉(註2)などのように，Baを多く含むものが報告されているが，この試料では約0.5%と少ない。Seligman(註3)らによる中国の漢代以前のガラス玉類の分析では，3分の1強がBaを含まない鉛ガラスであり，この試料もこれらと同類であると思われる。

FG003A～FG003Fはすべて管玉であり，風化のため白化してしまっている。そのためにPbの含量が最高約16%とかなり少なくなっている。いずれにしろ，鉛ガラスであることは間違いないが，Baをもともとどれくらい含んでいたかは判断できない。Cuの含量から色は青色で

表1　ガラス試料分析結果

	FG001A	FG003A	FG003B	FG003C	FG003D	FG003E	FG003F	FG012	FG017	FG018B
Al	0.34	1.02	1.00	1.05	1.14	0.78	0.85	11.8	2.68	2.50
As	0.49	0.04	0.14	0.03	TRACE	0.07	0.16	0.06	N.D.	0.02
B	0.02	0.04	0.01	0.006	0.02	0.03	0.04	0.006	0.07	0.02
Ba	0.52	0.82	0.57	0.74	0.75	0.69	0.50	0.06	0.06	0.01
Ca	0.65	0.38	0.39	0.27	0.29	0.32	0.34	14.2	3.13	0.50
Co	0.008	0.003	0.008	0.003	TRACE	TRACE	0.007	0.001	TRACE	TRACE
Cu	0.10	0.29	0.36	0.35	0.37	0.39	0.33	0.01	0.94	1.48
Fe	0.39	0.98	0.94	0.96	1.06	0.98	1.04	2.73	1.33	0.62
K	0.27	0.56	0.53	0.52	0.47	0.39	0.57	1.02	2.16	9.67
Li	0.004	TRACE	N.D.	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	0.002	0.009	0.002
Mg	0.18	0.21	0.22	0.18	0.19	0.18	0.18	0.15	1.08	0.16
Mn	0.006	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.06	0.07	0.01
Na	0.20	0.21	0.14	0.12	0.16	0.16	0.22	0.23	7.50	0.25
Ni	0.03	0.04	0.02	0.01	0.02	0.07	0.05	0.04	0.04	0.02
Pb	49.9	4.28	14.8	4.76	3.00	11.0	15.8	0.02	N.D.	0.54
Sb	0.07	0.10	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	0.08	0.03	TRACE	TRACE
Sn	0.05	0.07	0.03	0.03	0.02	0.02	0.07	0.05	0.07	0.09
Sr	0.007	0.02	0.01	0.02	0.02	0.02	0.01	0.07	0.02	0.002
Ti	0.02	0.07	0.06	0.07	0.08	0.06	0.06	0.14	0.17	0.12
Zn	1.05	0.29	0.43	0.14	0.16	0.33	0.21	0.28	0.36	0.14
Zr	0.007	0.007	TRACE	TRACE	TRACE	N.D.	TRACE	0.005	0.02	0.01

表中の数字は酸化物としての重量%を示す。TRACEは分析の結果、微量が検出されたもの。

あったと思われる。この6試料は，他の微成分の含量が非常によく似ており，同一のガラス塊から製作されたことが考えられる。

FG017～FG023Bはすべてガラス小玉である。FG017はAl・Caがとびぬけて多く，それぞれ12・14%もあり，Na・Kはそれぞれ約1%・0.2%と少ない。Feもかなり多く他の試料とはかなり異なる試料といえよう。また，通常の青色発色元素であるCu・Coがほとんど存在せず，青色が何によるものであるのかが不明である。

FG017は 三雲石橋II－11　5号石棺の出土であるが，FG012とは全く異なる

表2　ガラス試料文献値

出土地 遺物名	立岩 塞杆	須玖 管玉	中国 Bead	中国 Bead
SiO_2	37	38	34.4	30.9
Al_2O_3	0.52	0.35	0.76	｝0.7
Fe_2O_3	0.14	0.29	0.16	
CaO	0.50	1.1	0.12	
BaO	16	14	12.6	
MgO	0.20	0.15		
Na_2O	2.65	3.9	4.32	｝0.7
K_2O	0.50	0.19	1.02	
PbO	40.8	38.5	43.2	65.1
CuO	0.76	0.78		
Ag_2O	0.05	0.01		
文　献	(1)	(1)	(3)	(3)

	FG019	FG020	FG021A	FG021B	FG021C	FG021D	FG022A	FG022B	FG023A	FG023B
Al	1.26	1.57	1.51	2.25	1.19	0.74	4.00	4.26	1.23	1.12
As	TRACE	0.01	0.02	0.02	TRACE	0.14	0.03	0.01	TRACE	TRACE
B	0.007	0.003	TRACE	0.01	0.01	0.008	0.05	0.004	0.007	TRACE
Ba	0.24	0.27	0.30	0.45	0.23	0.18	0.36	0.39	0.29	0.40
Ca	1,13	0.92	1.67	2.26	1.77	0.74	1.97	1.58	2.86	2.91
Co	0.03	0.08	0.05	0.07	0.04	0.03	0.05	0.05	0.04	0.05
Cu	0,02	0.03	0.02	0.08	0.06	0.04	0.04	0.04	0.02	0.02
Fe	1.28	1.86	1.43	1.94	1.03	0.68	1.31	1.22	0.79	0.95
K	11.0	8.90	9.82	17.9	11.4	5.10	1.65	1.51	0.50	0.55
Li	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE
Mg	0.19	0.22	0.25	0.53	0.26	0.12	0.28	0.19	0.23	0.23
Mn	1.06	1.66	1.54	1.98	1.16	0.81	1.40	1.48	1.04	1.47
Na	0.41	0.23	0.49	0.44	0.28	0.21	6.63	6.34	5.28	6.20
Ni	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.009	0.04	0.03	0.03	0.03
Pb	N.D,	N.D.	N.D.	TRACE	N.D.	TRACE	TRACE	TRACE	N.D.	N.D.
Sb	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	TRACE	N.D.	TRACE	TRACE	TRACE
Sn	0.06	0.02	0.04	0.07	0.03	0.02	0.08	0.04	0.04	0.04
Sr	0.01	0.008	0.01	0.02	0.01	0.006	0.04	0.04	0.03	0.04
Ti	0.07	0.19	0.10	0.16	0.08	0.05	0.09	0.09	0.07	0.08
Zn	0.06	0.05	0.26	1.62	0.06	0.71	0.22	0.35	0.12	0.11
Zr	TRACE	TRACE	0.004	0.007	0.004	0.002	0.01	0.003	TRACE	0.01

N.D.は、分析の結果、検出されなかったもの。

組成をもつソーダ石灰ガラスで，他にAl・Fe・Kなどが多い。青色発色元素はCuである。

FG018BはCa・Naが少なく，カリガラスといってよかろう。FG019～F021DもKが多いが，これらよりもCuが多くMnが少ない。青色はCuによるものである。

FG019は三雲仲田出土であるが，FG020～021Cまでの汐井掛出土のものと似た組成をもつ。これらの5試料はKの含量から見てカリウムガラスであるが，とくにFG021Bには18%も含まれている。よく似た組成であるが，Znを1.6%も含むなどFG021Bは特徴的である。FG021Dは各元素の含量が少ないが，組成比はFG019～FG021Cと類似している。

FG022AとFG022Bは汐井掛91号木棺，FG023AとF023Bは汐井掛19号土壙墓出土であるが，遺構ごとにそれぞれよく似た組成を示す。ソーダガラスであるがNaはあまり多くはなく，6%前後である。FG019～FG021Dと同様にMnが1～1.5%とかなり多く含まれる。

4．結果の検討

分析した試料のうち璧・管玉はすべて鉛ガラスで，ガラス小玉には鉛ガラスはなかった。鉛ガラスのうち風化のあまり進んでいないものは唯一FG001Aであるが，Baの多い立岩，須玖のものとは異なる。Baが少ないこと，Na・Kなどのアルカリ元素が少ないことなどが言える。鉛の含量は異なるが，これらの点ではむしろ正倉院の鉛ガラス(註4)に類似していると言える。

もう一つ言えることはZn，が多いことであろう。一般にＩＣＰ分析においても共存元素によって分析値が影響される事は知られているが，それを考えにいれてもZnは多く，このことは他の6試料の管玉についても恐らく言えるであろう。このZnの多いことは，年代，地域，その他の知見とどのように結びつくかは，Znの分析例があまりないため今の時点ではわからないが，これからの分析で注意していってもよいと思われる。

残りの13試料のガラス小玉はほとんどがアルカリ，またはアルカリ石灰ガラスであった。主成分について見てみよう。1%を超える元素はAl，Ca，Fe，K，Naが多く，Kの多いもの(a)，Naの多いもの(b)に大別される。

Alについては FG012が11.8%とかけはなされて多いほかは(a)・(b)の間に有意な差は見られないが，同一遺構の出土遺物は似かよっている傾向がある。

CaについてもFG012が14.2%と多い以外は特に傾向は見られない。

FeはAlと同様に同一遺構のものが似かよっている。

Kは当然の事ながら(a)に多く(b)に少ない。FG012だけはどちらも少ない。FG021Bは17.9%のKを含むが，ほかの(a)グループは9～11%とほぼ同じ位である。(b)グループでは遺構ごとに明確に区別される。

Naについては(b)は5～7%とほぼ一定である。

その他についてはまず着色元素としてCo・Cuが考えられる。FG017，FG018BはCuが

1％，1.5％含まれるが他はCoによる着色であろう。FG012は何によるものかわからない。

MnはFG012, FG017, FG018Bにはほとんど含まれてないがその他の(a)，(b)には1％以上含まれており，意識的に加えられたものか否かは興味深いところである。

Znについては鉛ガラスと同様に多く含まれるものがあり，FG021Bなどは1.6％もある。これがどんな意味をもつか今のところわからないが，検討していくべき問題であろう。

5．終わりに

本研究では20点の試料について分析を行い，いくつかの事実を得た。しかし全体的に確たる結論を出すまでには至らず，さらに多くの試料についての分析が，もっと多方面にわたって必要であると思われる。

(国立沼津工業高等専門学校)

註1　山崎一雄『飯塚市立岩および春日市須久岡本関係試料の化学分析』立岩遺跡，(福岡，1977)
2　同上
3　H. C. Beck, C. G. Seligman "Barium in Ancient Glass", Nature June 30, 1934
4　原田淑人，岡田譲，山崎一雄，名務鑛三『正倉院ガラスの研究』正倉院のガラス，(東京，1965)
5　C. G. Seligman, P. D. Ritchie, H. C. Beck "Early Chinese Glass from Pre-Han to Tang Times", Nature, October 21, 1936

第3節　三雲南小路1号甕棺出土の赤色顔料分析について

森　　彬

1．甕棺片内面の表面に塗布されたと思われる赤色部分をヘラで少量ずつ削り落し，得られた粉末を蛍光X線分析法により分析した。

その結果赤色粉末は水銀を主成分とすることが判明した。

2．この粉末の少量をとり，原子吸光分析法により水銀の含有量を分析した結果，水銀(Hg)として66.8%であった。

3．朱は硫化水銀であるので，上記の値を硫化水銀(HgS)として換算すると77.5%となる。

上記の結果から土器表面の赤色顔料は，朱である。

(福岡県衛生公害センター)

第4節　三雲遺跡出土の平織物について

布　目　　順　郎

福岡県糸島郡前原町三雲遺跡の南小路1号甕棺から出た内行花文清白鏡の鏡背縁に付着していた平織物（第275図）は，織物面が磨滅して，その鏡体に接する部分のみが残存したものであるために，あたかも痕跡のようにみえる。

織り密度が1cmにつき経30本・緯20～30本の小片であって，果たして鏡を包んであった織物の一部かどうかについては，織物としてはこれ以外に出ていないところから，いまのところわからない。

パラフィン切片法によって織糸の断面を鏡検したところ，崩壊が著しくて経・緯ともに不定形物質のみが多く観察されたが，アサ(大麻)の断面に似た形もいくつかみられた。絹らしい断面はみられなかった。

したがって，この織物は，アサ布かとも思われるが，材質の断定は差し控えたい。

終わりに，本資料を提供された福岡県教育庁文化課及び発掘に当たられた方々に感謝の意を表する。

（京都工芸繊維大学）

第 275 図　三雲遺跡南小路1号甕棺出土の内行花文清白鏡
鏡背縁に付着の平織物（Scale：0.5mm）

第5節　ガラス製品の材質について

江本　義理

1．はじめに

福岡県下，弥生時代遺跡・古墳出土ガラスについて材質分析を行った。

非破壊的方法による材質調査を目的としたので，蛍光X線法により元素分析を行った。測定範囲が重金属波長領域に限られるので，ガラスの成分として当然含まれている珪素，アルミニウム，アルカリ金属，アルカリ土類金属は測定を行っていない。しかし，検出された重金属領域元素から，鉛ガラス，アルカリ石灰ガラスの別，呈色金属の測定は可能である。

以下，遺跡別に測定結果を示し，若干考察を加えることとする。

蛍光X線分析測定条件

X線管球：白金

印加電圧－電流　　40kV—20mA

分光結晶－LiF

検出器－シンチレーション・カウンター

上記の条件を標準として，淡色のガラスに対しては，照射X線強度を下げ，変色を防いだ。また，一部軽元素領域の測定にはInSb結晶を用いた。

測定結果の表示は，特性X線スペクトル強度を強，中，弱，微，極微の5段階で示した。各段階も中があり，同じ「微」の表示でも強度の大きいものの順に示した。

2．三雲南小路1・2号甕棺出土玉類の分析

蛍光×線分析による元素分析を非破壊的方法で行った(重元素領域)。

結果

試料A	検出元素 ( )内はX線強度	
№1ペンダント	鉛(強),銅(弱),鉄(微),錫(弱～微),アンチモン(微),バリウム(中),ストロンチウム(微)	……2号棺
№2勾玉(大)	鉛(強),銅(弱),鉄(微),水銀(微),ジルコニウム(微),錫(弱),アンチモン(微),バリウム(微)	1号棺
№3勾玉(小)	鉛(強),銅(弱),鉄(微),水銀(微),ストロンチウム(微?),錫(弱),アンチモン(微),バリウム(微)	1号棺
№4管玉(大)	鉛(弱),銅(弱),鉄(微),水銀(微),バリウム(微)	1号棺
№5管玉(中)	鉛(弱),銅(弱),水銀(微),アンチモン?(微),バリウム(微)	1号棺
№6管玉(小)	鉛(中～弱),銅(弱),鉄(微),バリウム(微)	1号棺
№7ガラス璧	鉛(強),銅(弱),鉄(弱),水銀(微),ストロンチウム(微),銀(微),錫(微),アンチモン(微),バリウム(弱)	
№8勾玉	鉛(強),銅(弱),鉄(微),水銀(微),ストロンチウム(微),アンチモン(微),バリウム(微)	……2号棺

青ガラス以外はすべてガラスの風化生成物（塩基性炭酸鉛－X線回折分析で確認）で蔽われている。

ガラス璧，勾玉，管玉はいずれも鉛を含み，特に璧，勾玉は鉛を酸化鉛として50％程度，またはそれ以上含む鉛ガラスである。管玉も鉛ガラスとアルカリ石灰ガラスの中間的なガラスと考えられる。いずれもバリウムを含み，漢代の中国製ガラスと関連あるものと推定される。

素地の色は白色の変質(風化)生成物に蔽われているので不明であるが，青ガラスが璧の破片，または同種のものの加工品とすれば，青ガラス片からガラスの呈色は銅，鉄によるものと推定される。

また検出された水銀は附着した朱によるものである。

三雲のガラス以外の試料（註1）

1）重圏彩画鏡破片（南小路1号甕棺墓出土）

検出元素：銅，錫，鉛，銀，鉄，砒素

錫を約20％程度含む青銅で，鉛の含有量は少なく，良質のものと考えられるが，さびの附着によって詳細は不明で，銀，鉄，砒素は不純物である。

2）赤色顔料（番上II-6　6号住居跡出土）

泥に附着していた赤色顔料は，蛍光X線分析では12個すべての試料から鉄が主成分として検出され，水銀，鉛は検出されなかった。X線回折分析では，赤鉄鉱(Fe_2O_3)が検出されたので，赤色顔料はベンガラと同定した。

3．三雲仲田・番上出土玉類の分析（註2）

結果

試料B	検出元素( )内はX線強度	
ファイアンス（青色紬）	銅(強),鉛(弱),亜鉛(微～弱),ジルコニウム(微),錫(微),鉄(弱～微) ケイ素(中),塩素(弱),カルシウム(微),カリウム(微),アルミニウム(微),チタン(微)	仲田I-16 1号住居跡
ファイアンス（素地）	ジルコニウム(微),錫(微),鉄(弱～微),銅(弱),ケイ素(中),カルシウム(微) カリウム(微),アルミニウム(微),タリウム(微)	仲田I-16 1号住居跡
丸玉(白)	鉛(強),銅(弱),鉄(弱)	番上II-6　12号住居内ピット
管　玉(青緑)	鉛(強),ジルコニウム(微),バリウム(弱),銅(弱),鉄(弱)	番上II-6　6号住居跡

丸玉，管玉とも鉛ガラスである。玉は風化生成物に蔽われている。

ファイアンスは大変興味ある試料であるので軽元素領域まで測定を行った。釉は鉛釉とアルカリ・石灰釉の中間的な組成のものではないかと考えられる。青色は銅による呈色と考えるが，亜鉛の存在，塩素が検出されているが，不純物として，原料を考える上で，注目されよう。素地は硅素が主成分であるように考えられる。

100

エジプトのファイアンスは，石英粉末が約90%，その他は石灰，長石から成り，石灰，曹達，アルミナが結合材になっており，アルカリ釉で，銅による青色のものが多く，釉はかなり丈夫なもので，心の素地は脆いものであると言われている。

このファイアンスは，釉はうすく，半球の中心部に文様を示すように釉のたまりがある。素地はそれほど脆いようにも見えない。そして珪酸質のものであるように見受けられ，分析結果もそれを裏づけ，カルシウム，カリウムも検出され，エジプトのファイアンスとも似た材質と考えられる。釉もエジプトはアルカリ釉であるのに対し，この試料は鉛釉が主で，アルカリ釉が入ったものと両者異なっている。我が国での分析例がなく，いまだエジプトの試料を分析した経験がないので詳細は不明である。

4．鞍手郡若宮町汐井掛出土玉類の分析 (註3)

結果

試料C		検出元素 ( )内はX線強度
D100	勾玉（白）	ルビジウム(微),水銀(微),銅(弱～微),鉄（泥？・弱),ニッケル？
D100	勾玉（白）	ルビジウム(微),ストロンチウム(微),ジルコニウム(微),水銀(微),銅(弱)，鉄(泥・中),ニッケル？
D100	管玉（大）	ルビジウム(微),ストロンチウム(微),イットリウム(微),ジルコニウム(微),銅(弱),鉄(弱)
D100	管玉（小）	ルビジウム(微),ストロンチウム(？),イットリウム(？),ジルコニウム(微),銅(弱),鉄(微～弱),錫？
D74	ガラス大玉	ルビジウム(微),ストロンチウム(微),イットリウム(微),ジルコニウム(微),錫(微),銅(弱),鉄(弱),マンガン(微)
D68	ガラス小玉	ルビジウム(微？),ストロンチウム(弱強),イットリウム(？),ジルコニウム(弱),錫(微),銅(中弱)鉄(中),水銀(微)
D74	勾玉	ルビジウム(微),ストロンチウム(微),イットリウム(微)　ジルコニウム(微),銅(弱強),鉄(弱強)

勾玉・管玉

いずれも同じような元素を含んでおり，ガラス製ならばアルカリ石灰ガラスであろう。しかし，白い風化生成物に蔽われており，アルカリ石灰ガラスの出土状態と異なっており，さらに検討を要する。

ガラス玉

アルカリ石灰ガラスで，呈色は銅・鉄による。

勾玉（白緑）

玉製で，X線回折によりヒスイであることが確認された。

5．宗像郡津屋崎町清田ヶ浦古墳群出土玉類の分析(註4)

結果

試料E		色	検出元素 ( )内はX線強度
No1	5号墳 玉	淡緑	銅(弱),鉄(強),ストロンチウム(微),ジルコニウム(微),錫?
No2	11号墳 勾玉	緑	銅(強),鉄(中),鉛(弱),ジルコニウム(弱),ストロンチウム(弱),ルビジウム(微),錫(微)
No3	11号墳 管玉	淡緑	銅(中),鉄(弱),ジルコニウム(弱),ストロンチウム(微),錫(弱)
No4	2号墳 管玉	緑	鉛(強),銅(強),鉄(中),ジルコニウム(弱),ストロンチウム(弱),錫(弱)
No5	2号墳 管玉	淡緑	銅(強),鉄(中),鉛(弱),ジルコニウム(弱),ルビジウム(微),錫(微)
No6	5号墳 管玉	濃緑	銅(強),鉄(中),ジルコニウム(弱),ストロンチウム(弱)

試料4　管玉は鉛ガラス，または鉛ガラスにアルカリ・石灰ガラスが混じった組成のもの。試料2，5は，アルカリ・石灰ガラスに鉛ガラスが混入した組成のもの，試料1，3，6はアルカリ・石灰ガラスである。

呈色は他の遺跡の出土ガラスと同様，銅，鉄によるもので，両者の含有量の大小で濃淡の差があらわれる。

また試料1～5，錫が検出されている。

6．宗像郡津屋崎町勝浦41号墳出土玉類の分析(註5)

結果

試料F		検出元素 ( )内はX線強度
No1	青色(大)	鉄(弱),銅(弱),ストロンチウム(微),ジルコニウム(微),水銀(微),鉛(微),コバルト(?)
No2	青色(大)	鉄(弱),銅(弱),ストロンチウム(微),鉛(微),ジルコニウム(微),水銀(微),コバルト(?)
No3	淡青色(大)	銅(強),錫(中弱),鉄(弱),ジルコニウム(微),ストロンチウム(微),バリウム(微),鉛(微)
No4	青色(大)	銅(弱),鉄(中弱),鉛(微),ストロンチウム(微),ジルコニウム(微),水銀(微)
No5	青色(中)	銅(微),鉛(微),鉄(微),ストロンチウム(微)
No6	淡青色(中)	銅(弱),鉄(微),ジルコニウム(微)
No7	茶色(小)	銅(微),鉄(微),鉛(微),ジルコニウム(微)
No8	緑色(小)	銅(弱),鉛(微),鉄(微)

この試料は最終的に破壊して分析してよいものとして提供されたものである。

検出元素から見れば，鉛は検出されているが，わずかであり，ストロンチウム，ジルコニウムが検出されているので，これらの試料はアルカリ・石灰ガラスであろう。呈色はこれらも銅と鉄によるものであり，それぞれの含有量により発色の度合が異なる。なおNo.1，2にコバルトが不確実であるが検出されている。これは鉄のスペクトル FeKβ の裾にふくらみがあり，そ

の位置がコバルトのスペクトル CoKα のに当たるのとガラスの色調から含まれていると推定を行った。ガラスの色調はNo.4が最も濃いので，CoKα が観測されるべきであるが，No.4，5のその部分を測定していないのが残念である。水銀は朱の附着に起因するものである。

これらの試料は，蛍光X線分析の後，東京大学，理学部化学教室，富永研究室の協力を得て，放射化分析を行った。興味ある結果を得ているが，稿を改めて詳細を発表するが，量が少なく蛍光X線分析を行わなかった試料5点も加え，主な成分の分析値を下に掲げる。

勝浦出土　ガラス放射化分析結果

成分＼試料	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
Al_2O_3	2.49	1.57	5.44	1.83	1.29	5.97
Na_2O	16.0	17.7	18.3	19.5	20.3	19.6
K_2O	3.7	3.9	10.2	1.6	1.7	3.1
CaO	5.4	3.8	4.2	4.8	3.2	1.4
TiO_2	0.01	0.04	0.13	0.01	0.02	0.11
MgO	5.1	2.7	3.5	1.8	0.57	2.1
MnO	0.51	0.54	0.08	0.33	0.15	0.12
Fe_2O_3	1.21	1.57	0.71	1.89	1.60	1.21

成分＼試料	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.E-1	No.E-4
Al_2O_3	4.45	15.1	11.8	13.1	4.53	4.29	
Na_2O	29.3	26.3	26.3	26.8	24.8	17.3	23.5
K_2O	7.5	3.3	10.4	7.4	6.7	6.7	13.0
CaO	3.1	2.6	1.8	6.2	6.5	1.1	
TiO_2	0.22	0.48	0.40	0.77	0.28	0.35	
MgO	4.9	7.2	4.2	1.8	2.9	3.1	
MnO	0.13	0.03	0.03	0.09	0.17	0.15	
Fe_2O_3	3.99	1.18	0.81	2.23	2.70	2.03	1.27

アルカリ成分であるナトリウム(Na_2O)カリウム(K_2O)が多いことが全体の特徴で，No.7，10，11の鉄の多いのは色調に関連している。

ガラスの非破壊的な材質研究として，比重，屈折率を測って材質を推定する方法もあるが，今回は蛍光X線法で元素分析を行って，材質を調査した。

極く小さい試料のため，測定精度が上がらず不明な点があり，不本意な結果に終わったものもある。

7．おわりに

遺跡によって，数千個のガラス玉が出土することがあり，その中の数個を化学分析によって，各成分元素の細かい数値を出しても，現段階ではその成分や微量元素から，原材料，年代，産地等の推定を確実に行うことは困難で(鉛同位体比による産地推定のみは可能になり，測定例も増加

しつつあるが)，将来それらの特徴をつかむ元素が確認され，それらが微量試料による分析手法の可能性がしぼられて来てから，多くの遺跡からの試料の分析が行われるべきで，それまでは小破片等を用いて，基礎的な検討を加えられる精度の高い分析に留めて，それ以外は非破壊的方法より，なるべく多くの情報を引き出すことに努力せざるを得ないであろう。

終わりに試料を提供してくださり，調査の機会を与えられた福岡県教育委員会，管理部文化課，藤井功課長，柳田康雄技術主査はじめ，同課の皆さんに御教示，御協力を頂いた。深く感謝の意を表します。

(東京国立文化財研究所)

註1　番上II-6の調査は柳田康雄編「三雲遺跡」I (『福岡県文化財調査報告』第58集 1980)に所収されている。

註2　仲田I-16の調査は，柳田康雄・小池史哲編「三雲遺跡」II (『福岡県文化財調査報告書』第60集 1981)に所収されている。番上II-6は註1に同じ。

註3　汐井掛遺跡の調査は，池辺元明編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XXVIII (福岡県教育委員会 1979) に所収されている。試料の提供は，調査を担当した福岡県教育委員会池辺元明氏の御好意による。

註4　清田ヶ浦古墳群の調査は，小池史哲編「清田ヶ浦古墳群発掘調査報告」(津屋崎町教育委員会 1977) に所収されている。試料の提供は，調査を担当した福岡県教育委員会小池史哲氏の御好意による。

註5　勝浦41号墳の調査については，川述昭人「第41号墳」(石山勲編「新原・奴山古墳群」『福岡県文化財調査報告書』第54集 1977)に所収されている。試料の提供は，調査を担当した福岡県教育委員会川述昭人氏の御好意による。

図　　版

瑞梅寺川・川原川と三雲遺跡（1/8,000）（昭和38年撮影）

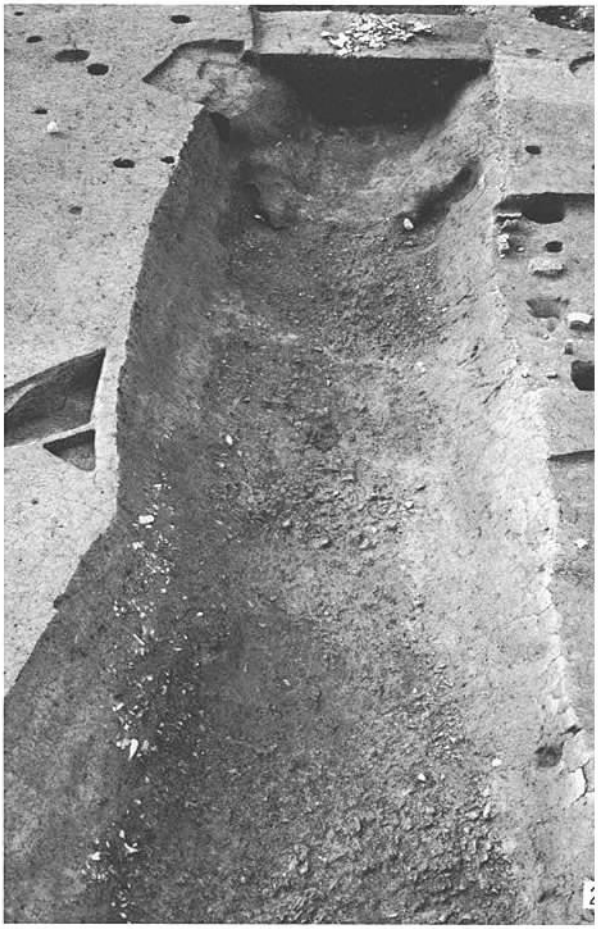
図版 2

1　寺口Ⅰ－8　トレンチ（東から）

2　Ⅱ－17　全景（南から）

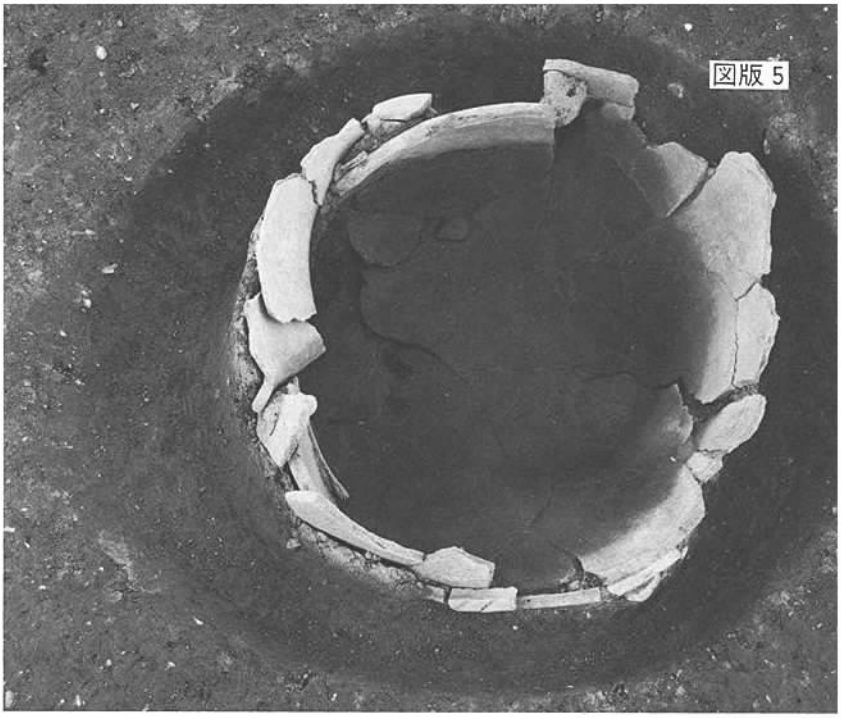
1

2

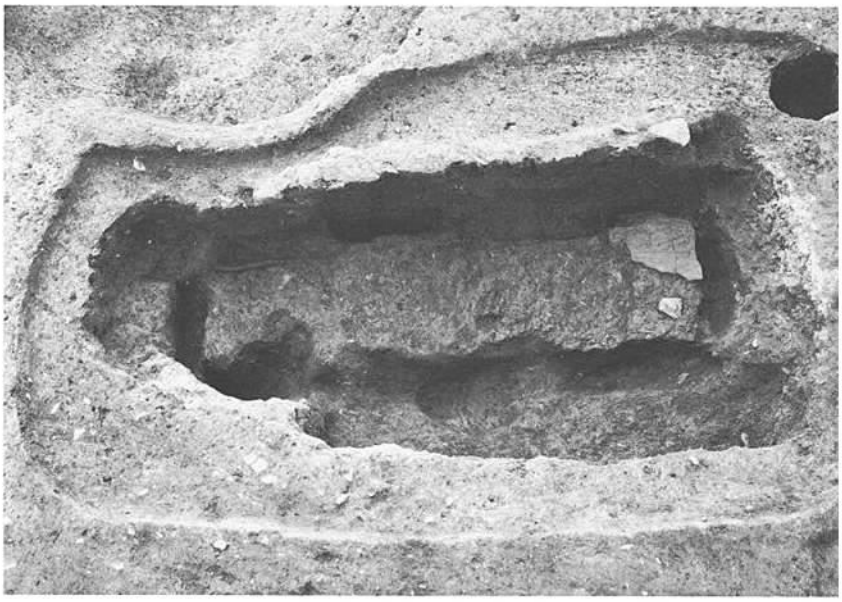


1　寺口 II—17　大溝（南西から）　　2　大溝（北東から）　　3　大溝

1　寺口 II—17　調査区南半（東から）　　2　石棺群と祭祀遺構（北から）



1

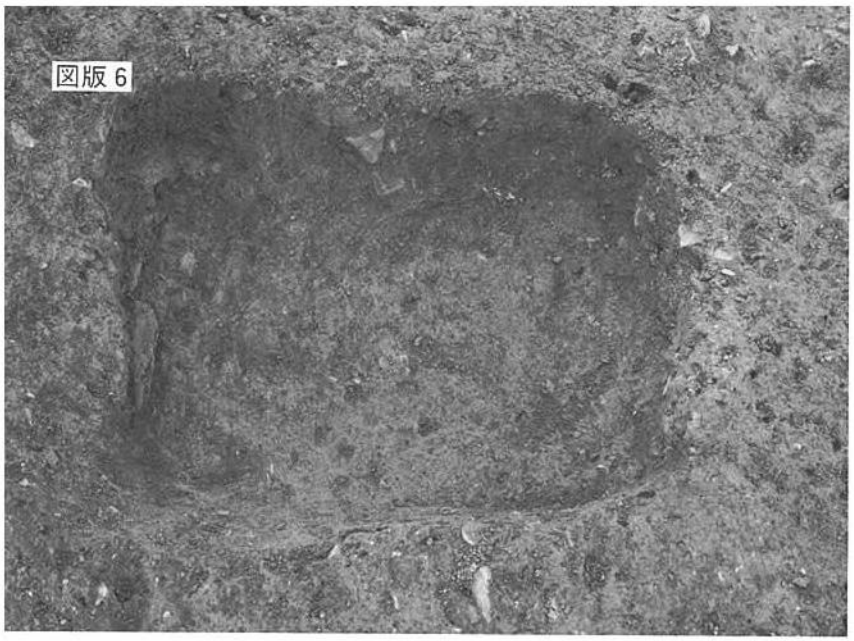


2

3

1　寺口II—17
　　1号甕棺墓
2　1号石棺墓
3　2号石棺墓

図版6



1

2

3

1　寺口II—17
　　3号石棺墓
2　4号石棺墓
3　石棺墓と祭祀遺構

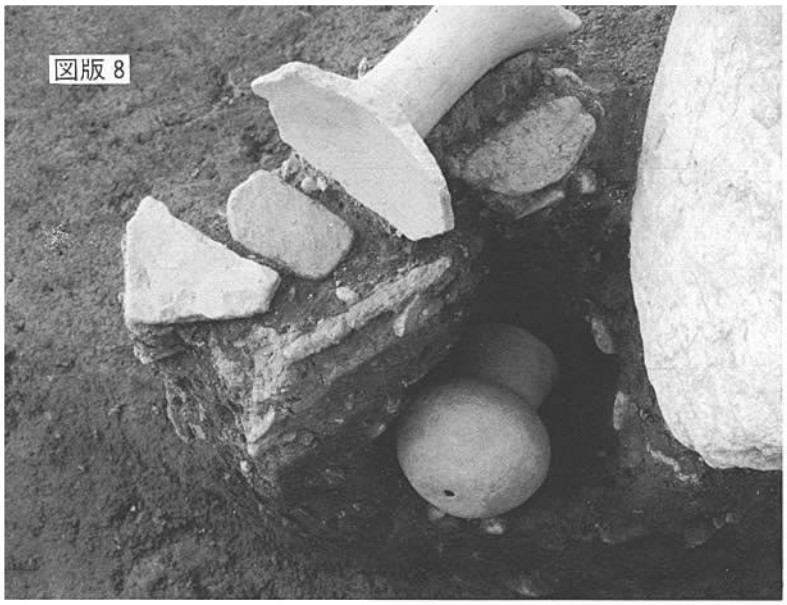
1

2

3

1　寺口Ⅱ—17
　　1号石棺墓祭祀（東から）
2　2号石棺墓祭祀（東から）
3　2号石棺墓祭祀（北から）

図版 8

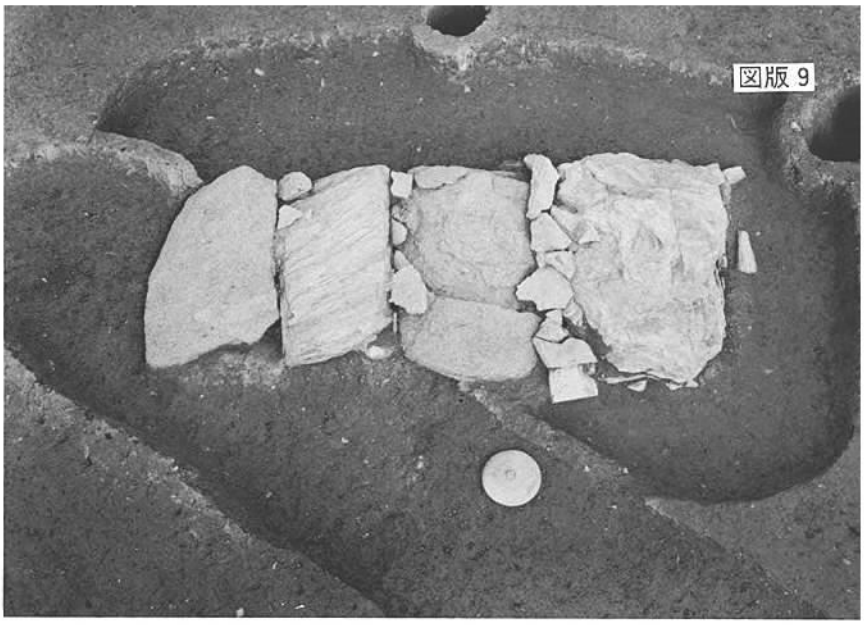


1

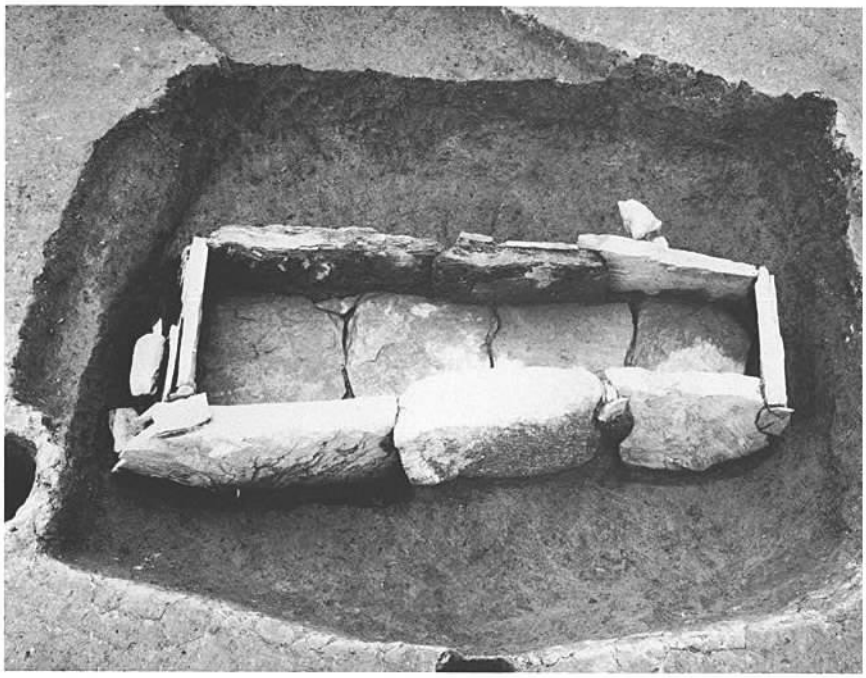
2

3

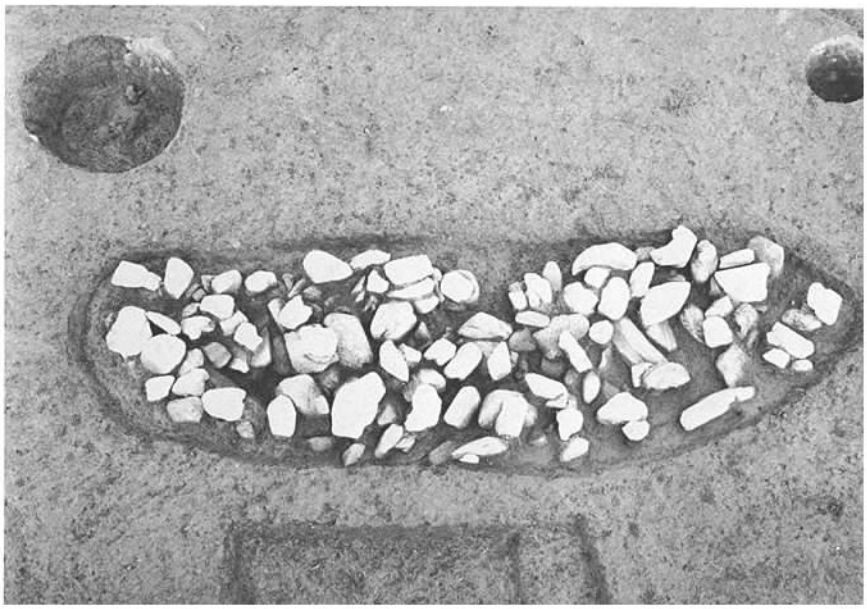
1　寺口Ⅱ—17
　1号石棺墓祭祀
　の土器と鉈
2　2号石棺墓祭祀
　横穴式石蓋土壙
3　横穴式石蓋土壙



1

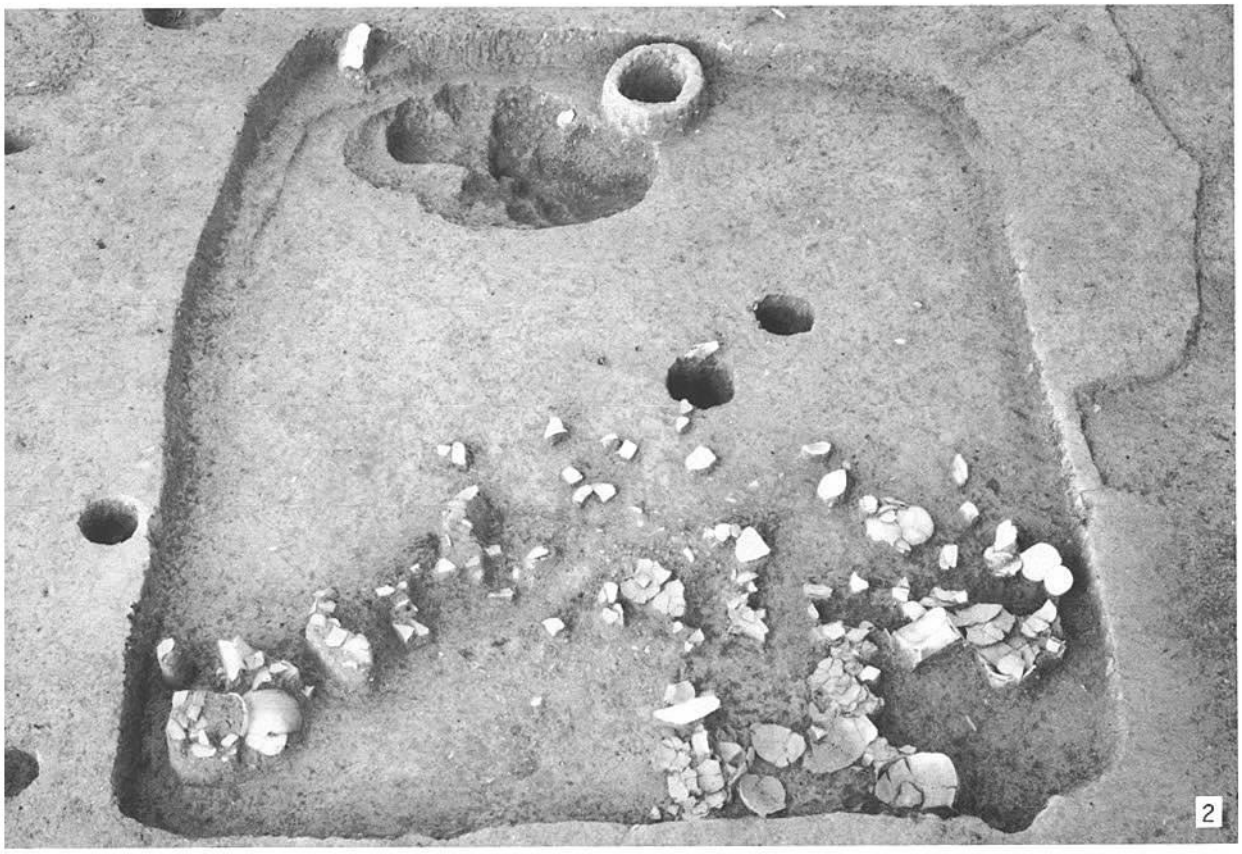


2



3

1　寺口 II—17
　　5 号石棺墓
2　5 号石棺墓
3　2 号土壙墓



1　寺口II—17　大溝と1・3・4・8号住居跡　　2　1号住居跡

1

2

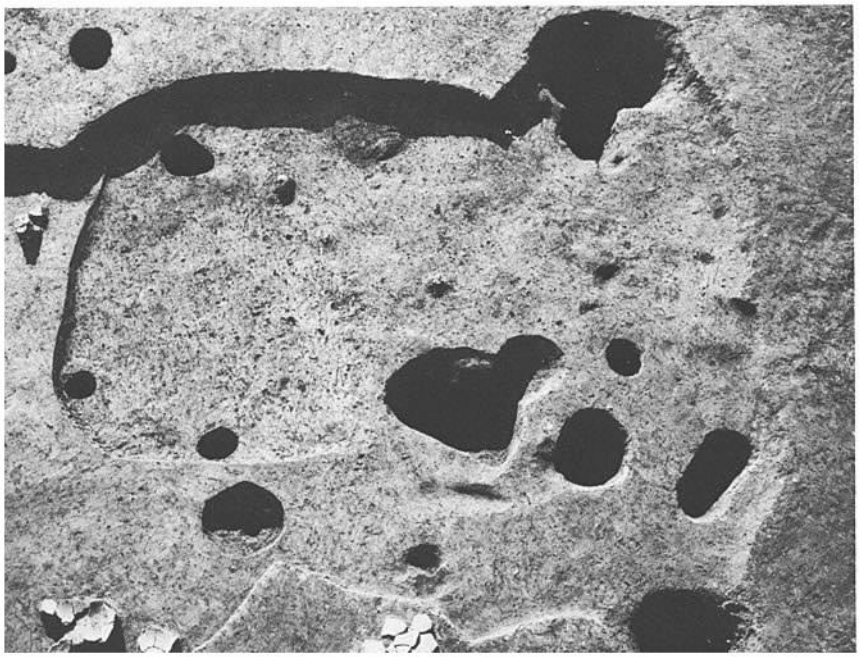
3

1　寺口II—17
　　2号住居跡
2　3号住居跡
3　3・4号住居跡

図版12

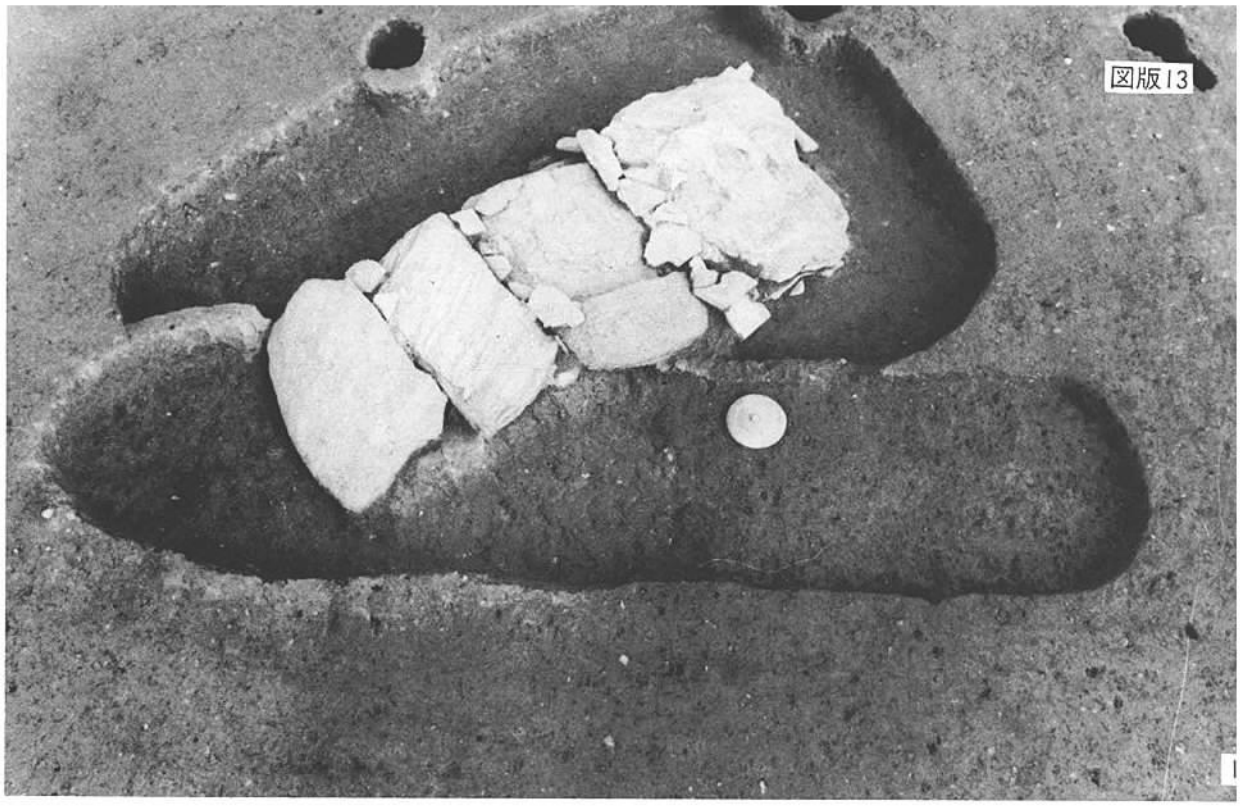
1

2



3

1　寺口II—17
　　大溝と5～7号住居跡
2　6号住居跡
3　7号住居跡



1　寺口II—17　5号石棺墓と1号土壙墓　2　1～4号竪穴

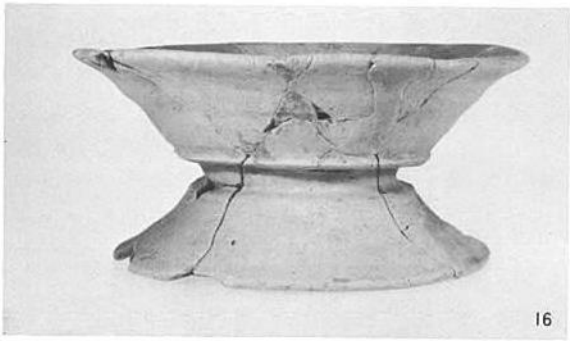
図版14

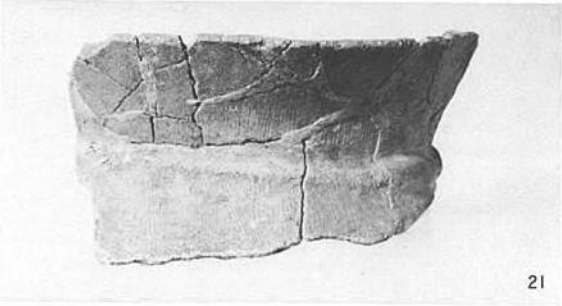
1

2

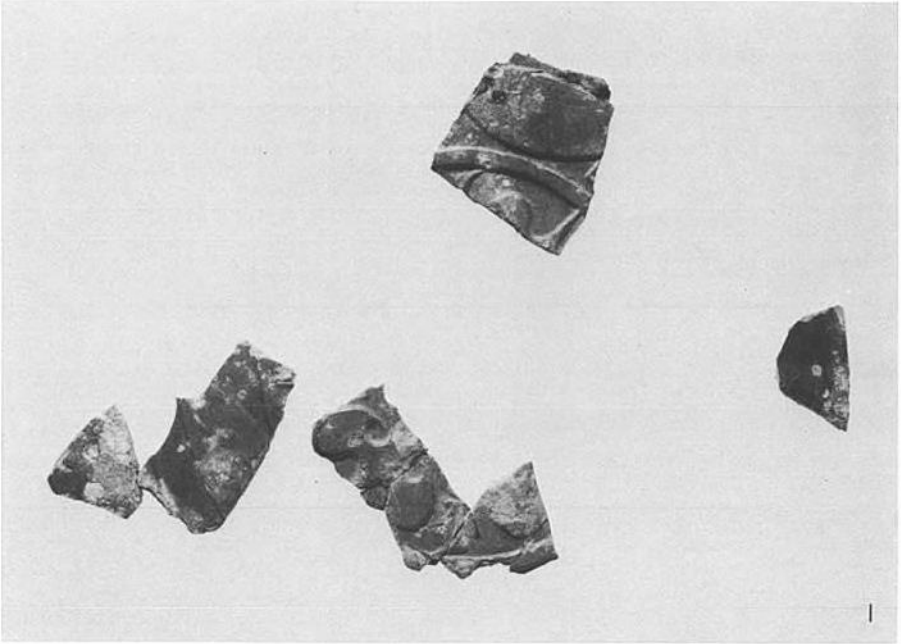
3

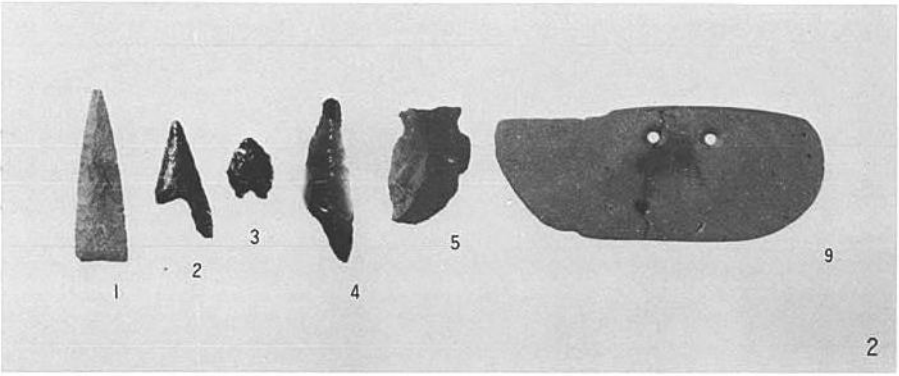
1　寺口II—17
　　2号竪穴
2　3号竪穴
3　4号竪穴

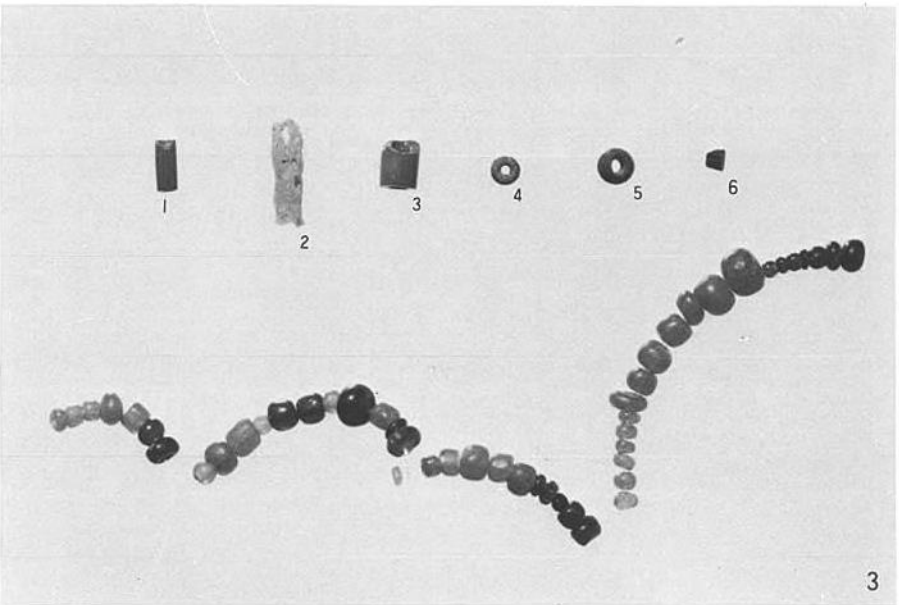




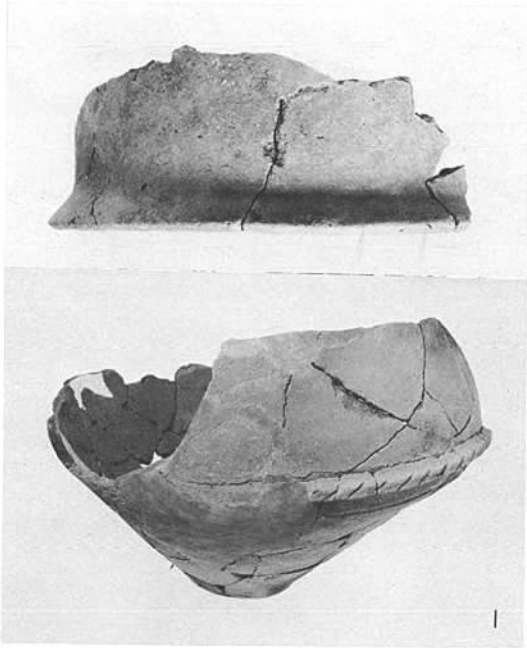
寺口II—17　大溝出土土器

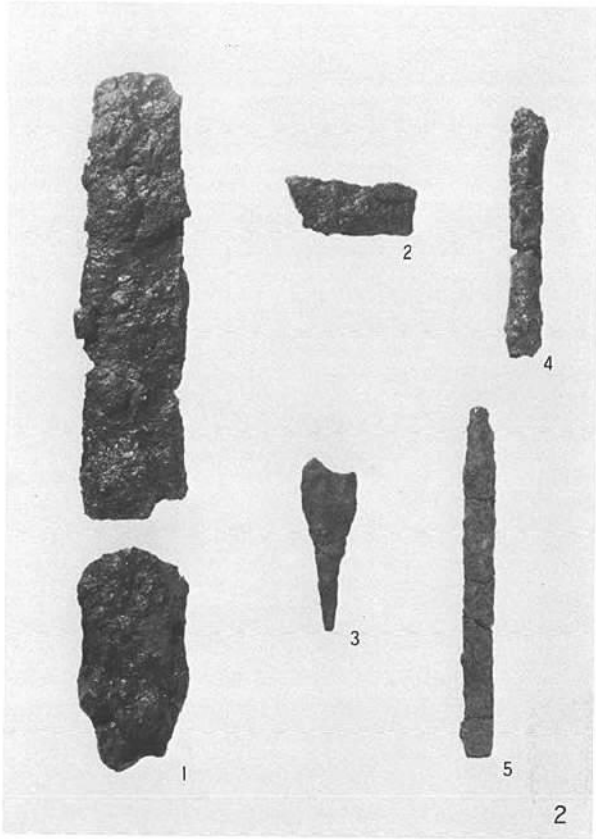


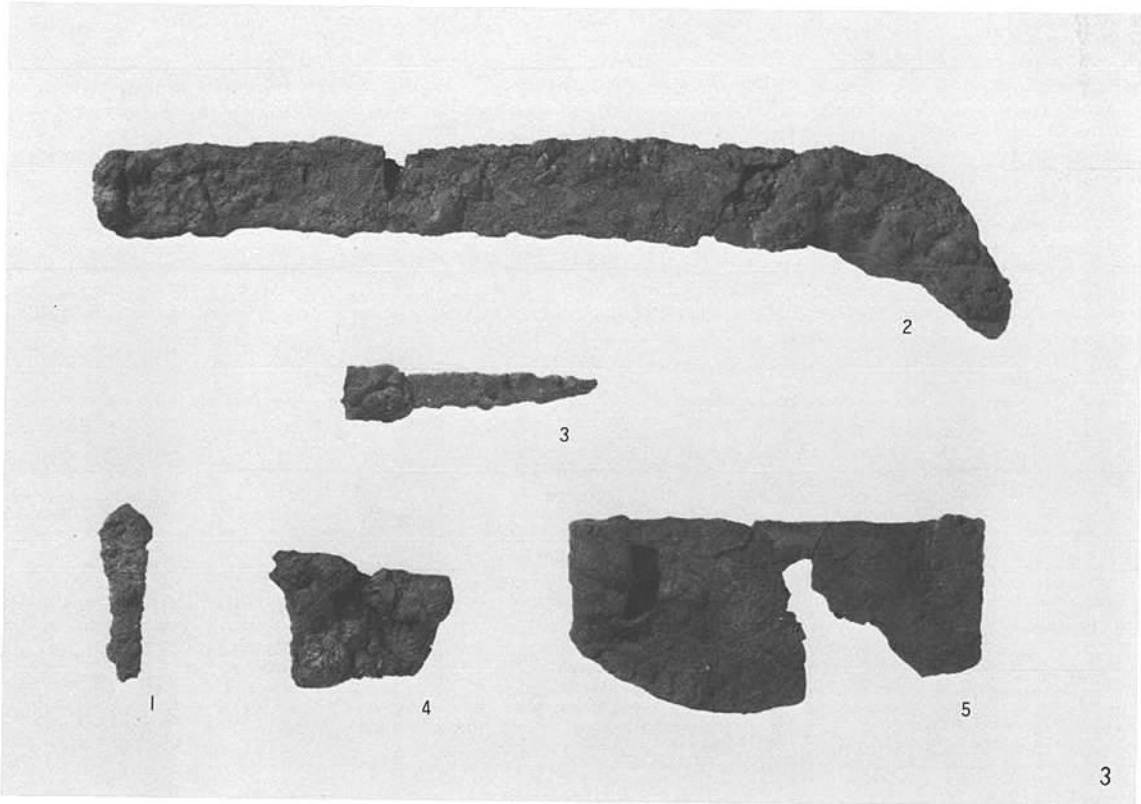




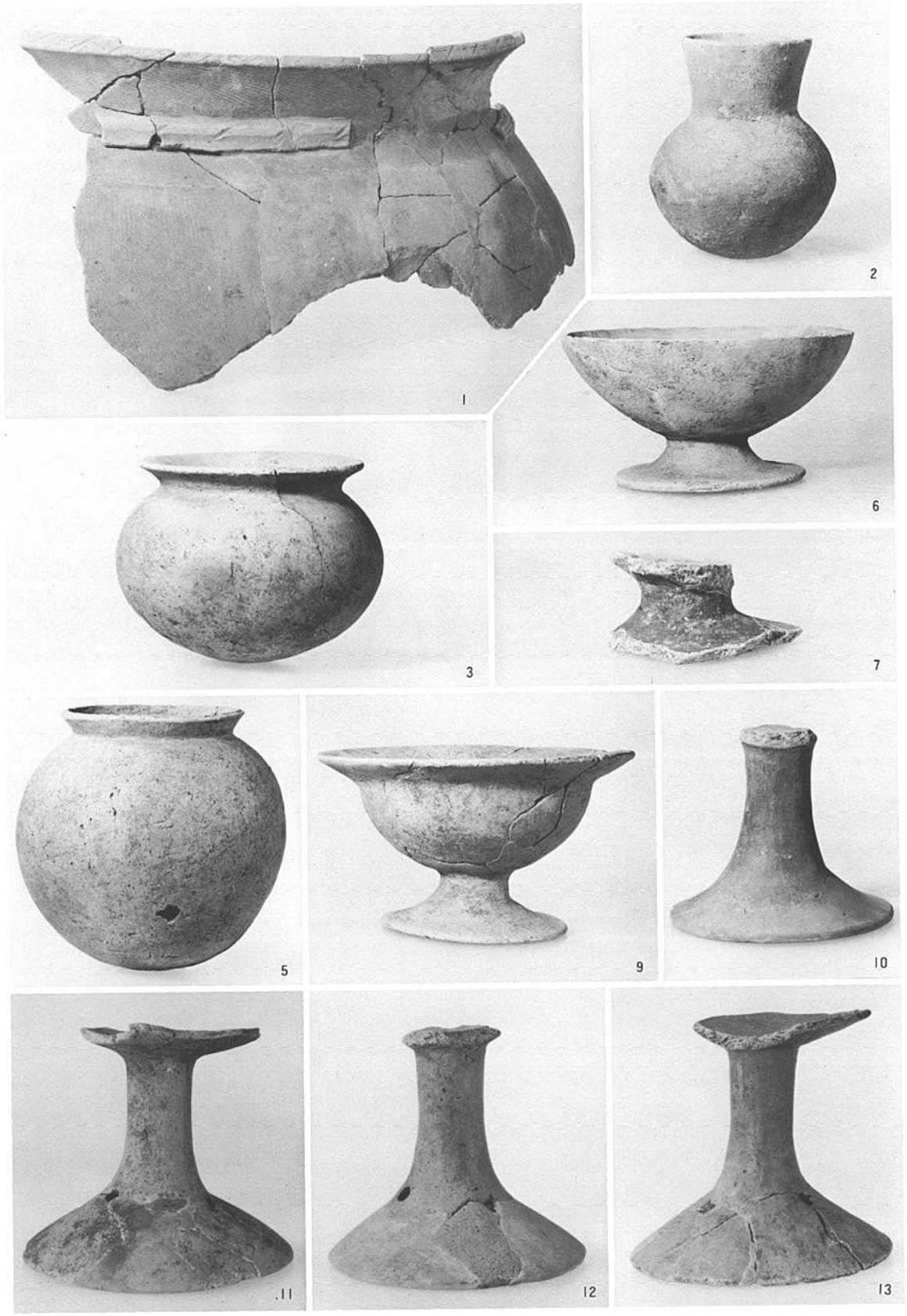
1　寺口II—17　2号石棺墓出土後漢鏡　　2　II—17 出土石器　　3　II—17 出土玉類



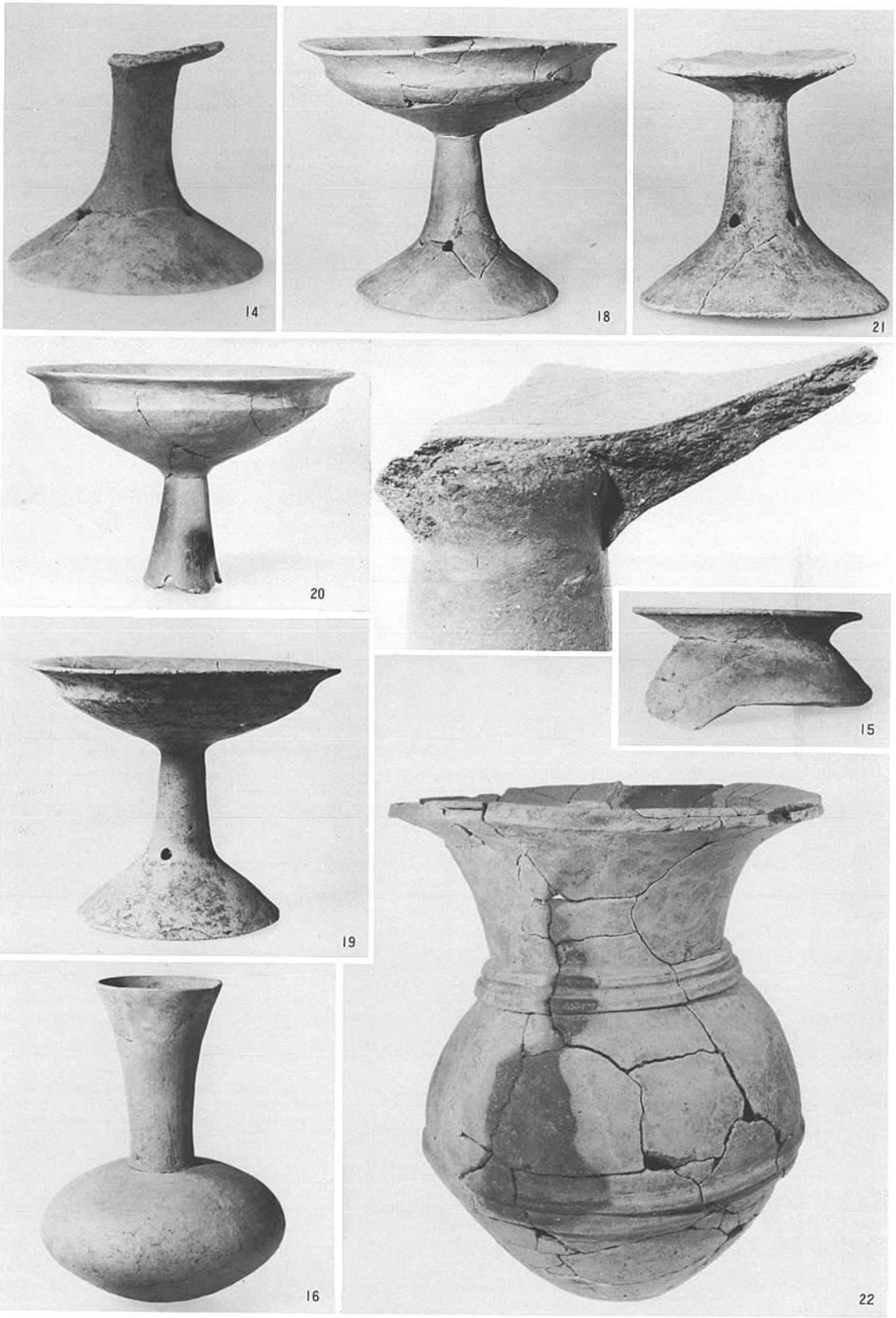




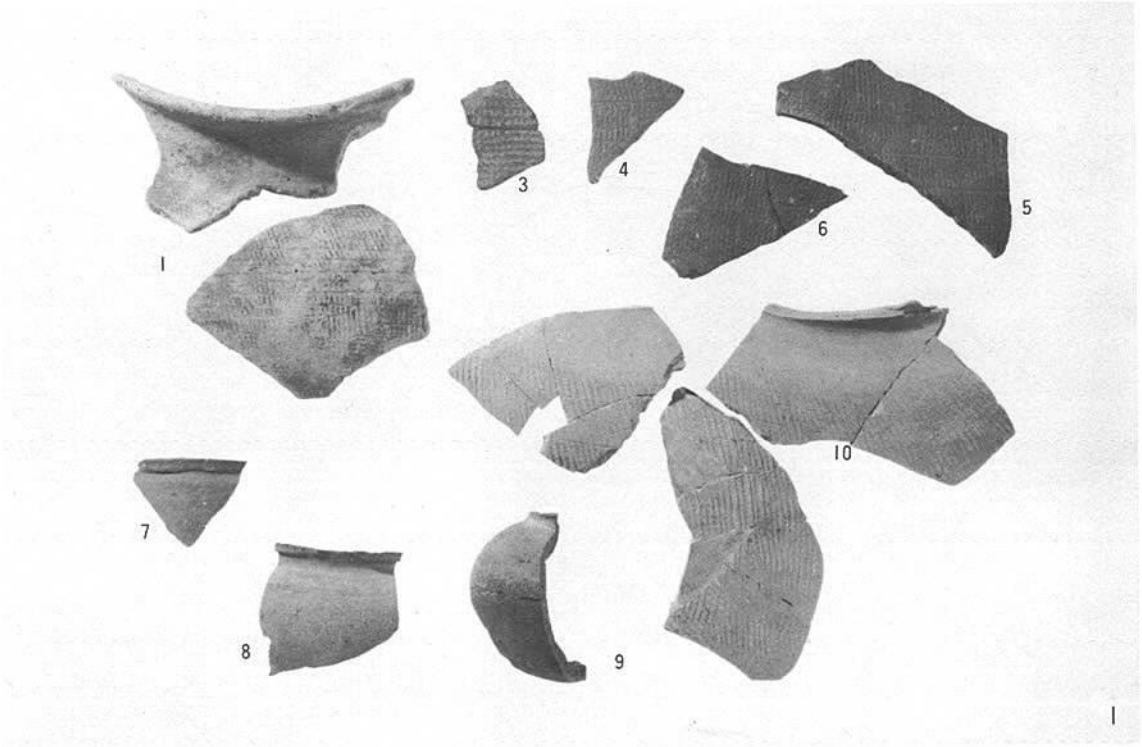
1　寺口II—17　1号甕棺　　2　石棺墓出土鉄器　　3　II—17　出土鉄器

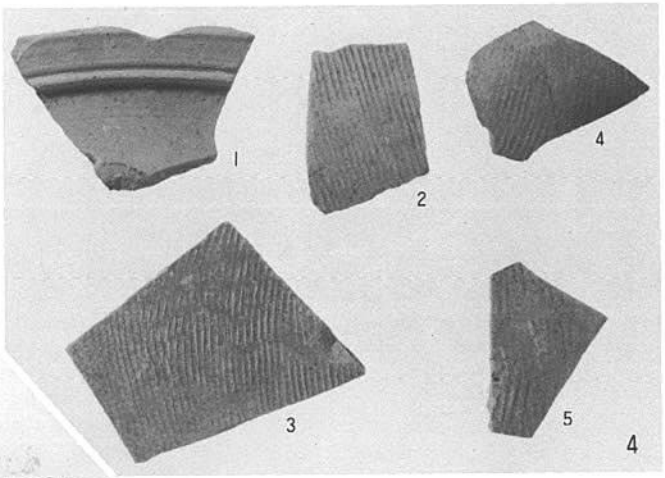


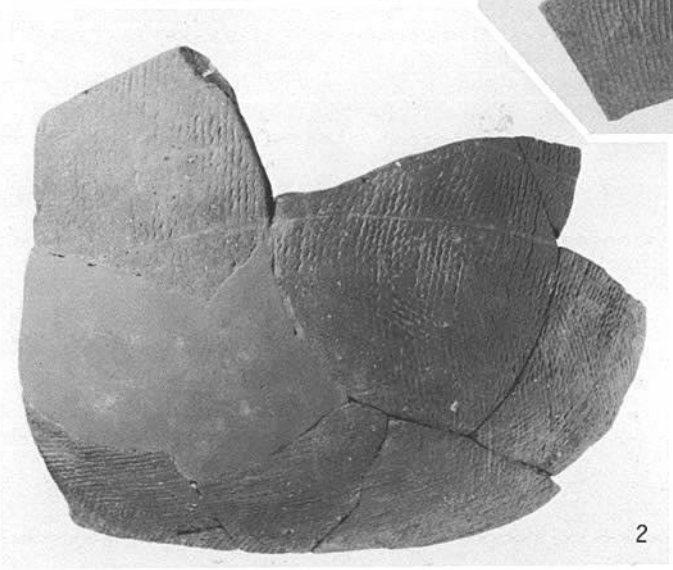
寺口II—17　1号石棺墓祭祀出土土器



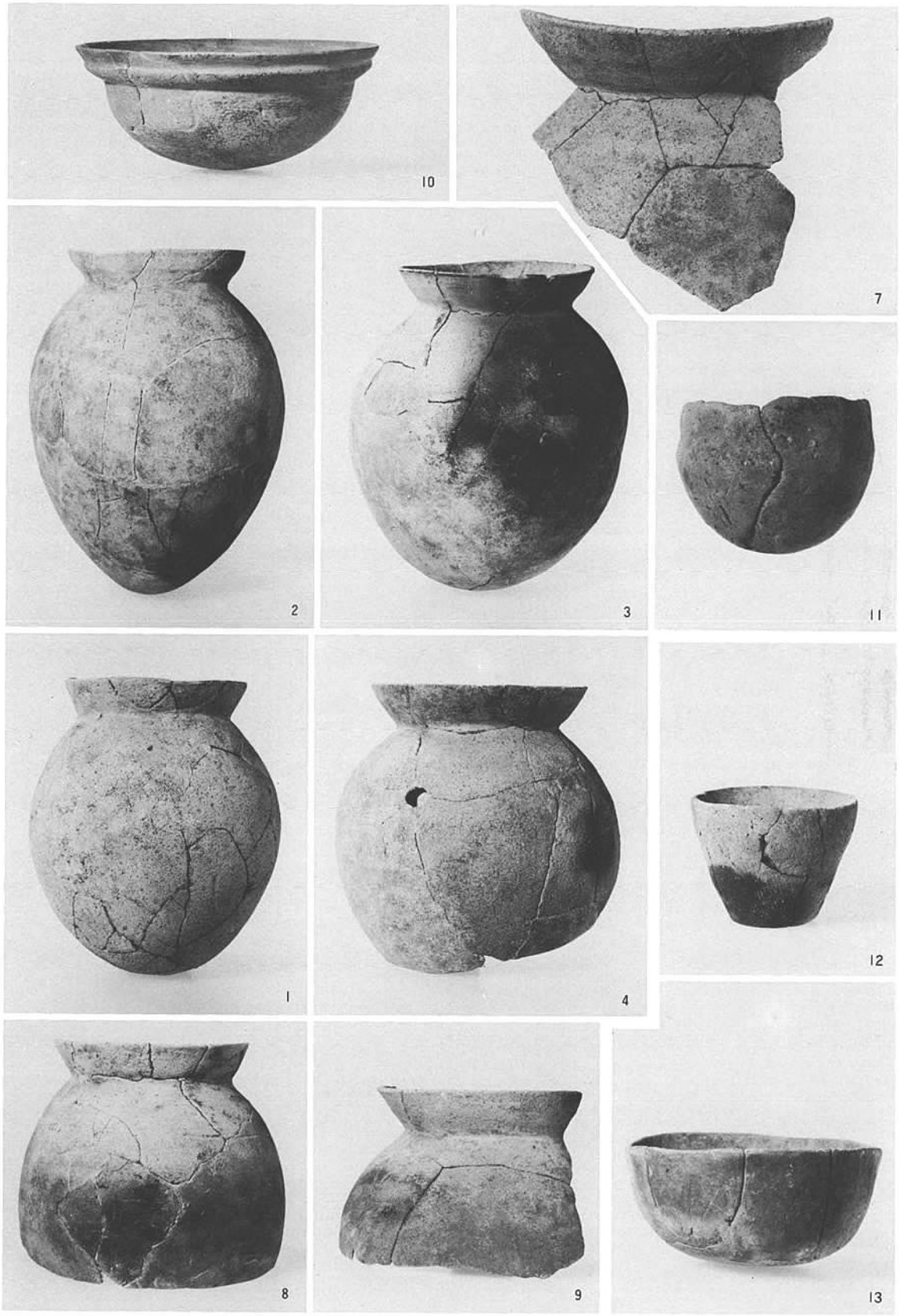
寺口II－17　1・2号石棺墓祭祀出土土器



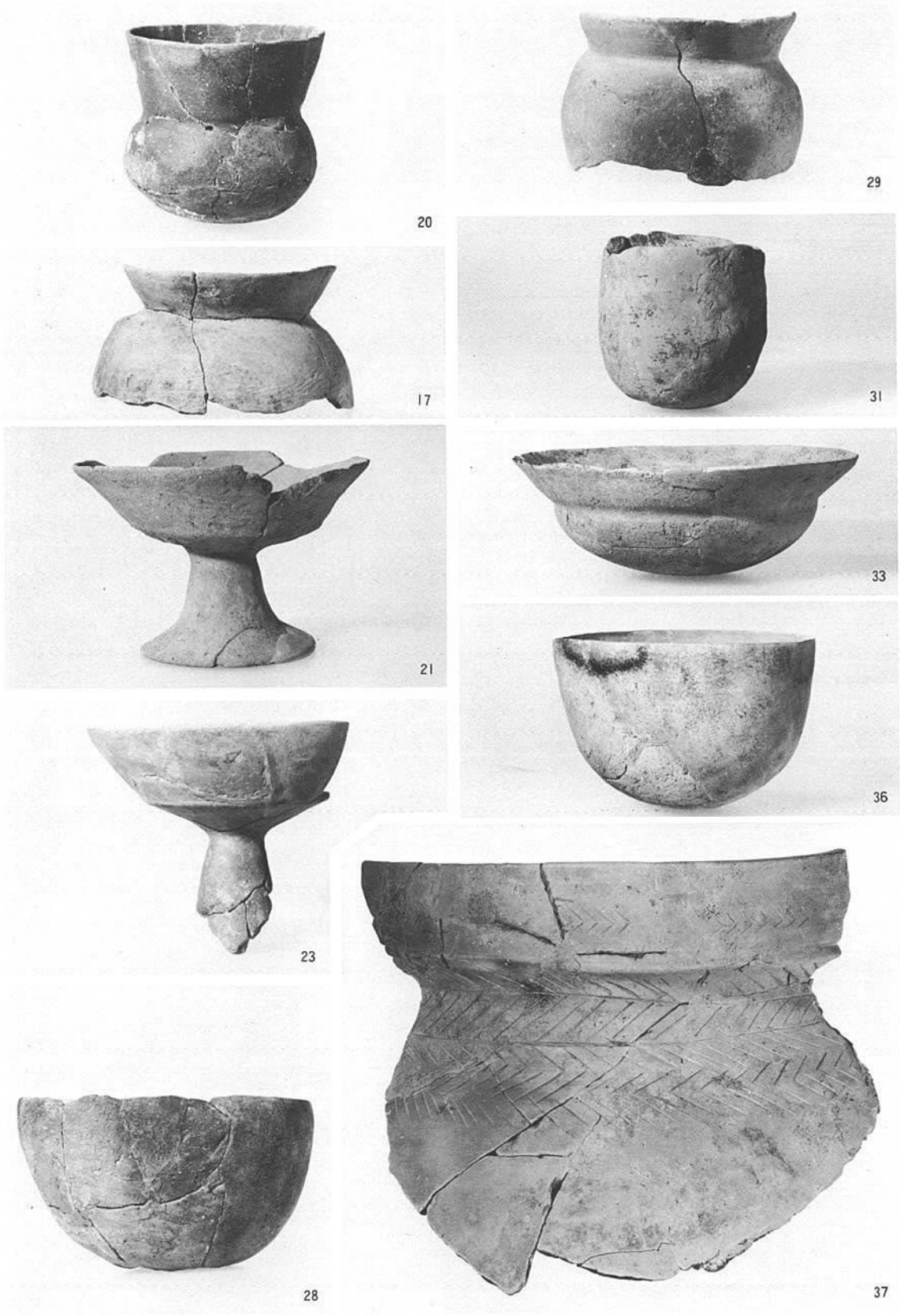




1　寺口II－17　出土瓦質・陶質土器　2　6号住居跡出土陶質土器
3　6号住居跡出土瓦質紡錘車　4　II－17　出土須恵器



寺口II－17　1号・2号（12・13）住居跡出土土器



寺口II—17　3・4・6～8号住居跡・包含層出土土器

1　八龍Ⅰ－3　大溝上層土器出土状態　　2　大溝土層断面

八龍Ⅰ－3　大溝出土土器①

八龍Ⅰ－3　大溝出土土器②

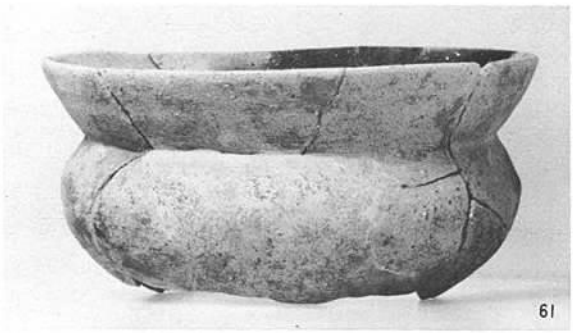
八龍Ⅰ—3　大溝出土土器③

56

58

59

60


61

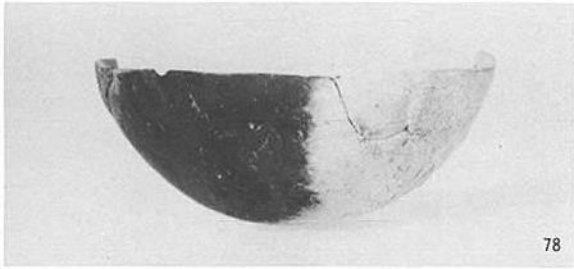
62

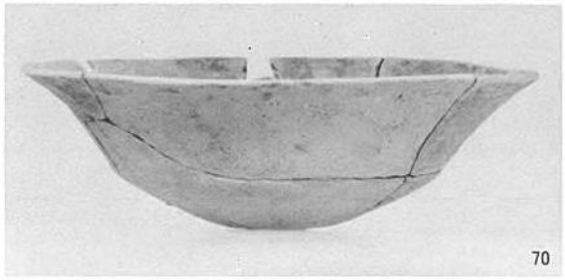
63

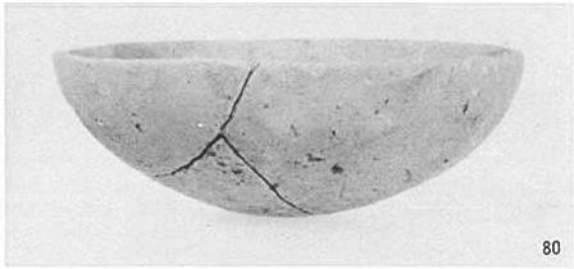
64

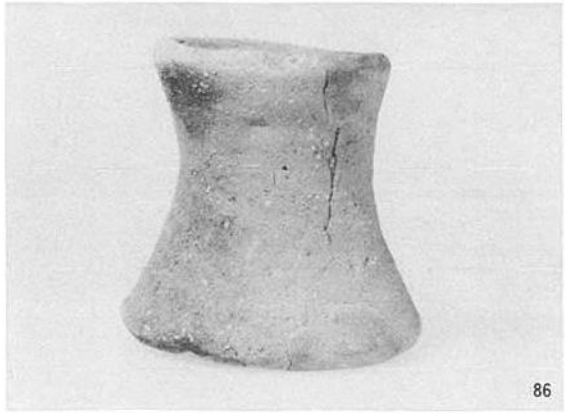
66

八龍Ⅰ—3　大溝出土土器④

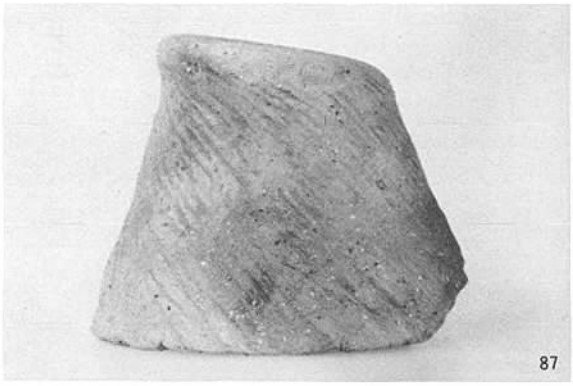


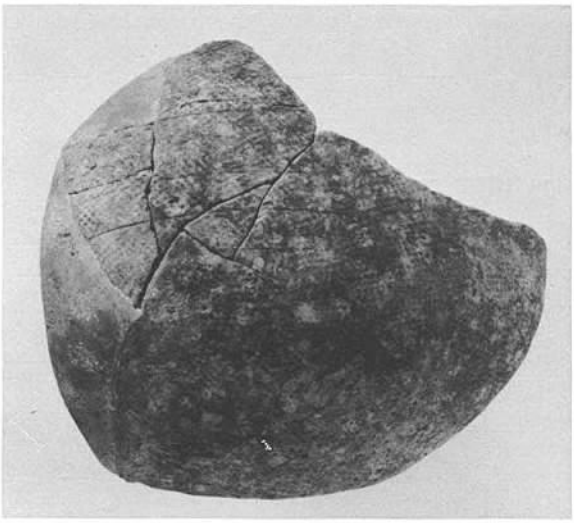






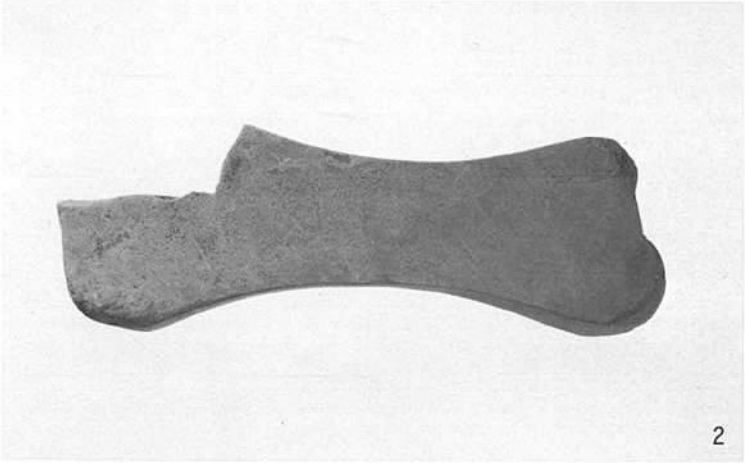
八龍Ⅰ—3　大溝出土土器⑤

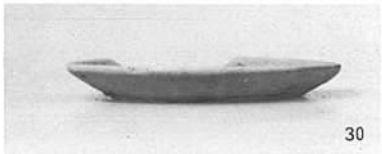




八龍Ⅰ—3　大溝出土土器⑥

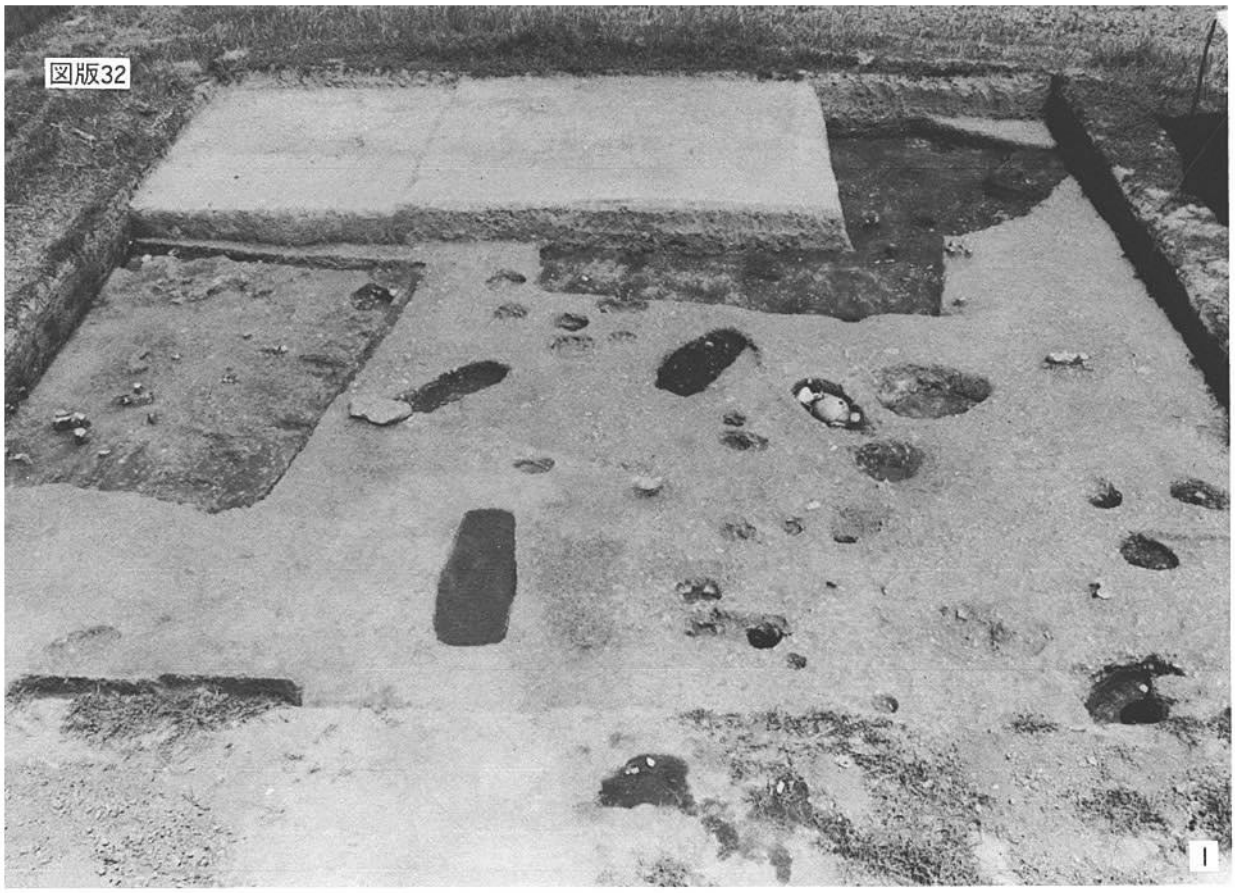
1　八龍Ⅰ—3　1号竪穴
2　Ⅰ—11　2号竪穴と大溝Ⅱ





3

1　八龍Ⅰ—11　4号竪穴　2　Ⅰ—3　大溝出土砥石　3　Ⅰ—3　1号竪穴出土土器



1 八龍Ⅰ—7全景（西から）　　2　墓地群（西から）

1　八龍Ⅰ—7　甕棺墓　2　1号土壙墓

図版34

1

2

3

1　八龍Ⅰ－7
　　石蓋土壙墓
2　石蓋土壙墓
3　2号土壙墓

1

2

3

1　八龍Ⅰ—7
　　1号住居跡
2　2号住居跡
3　2号住居跡内
　　土器出土状態

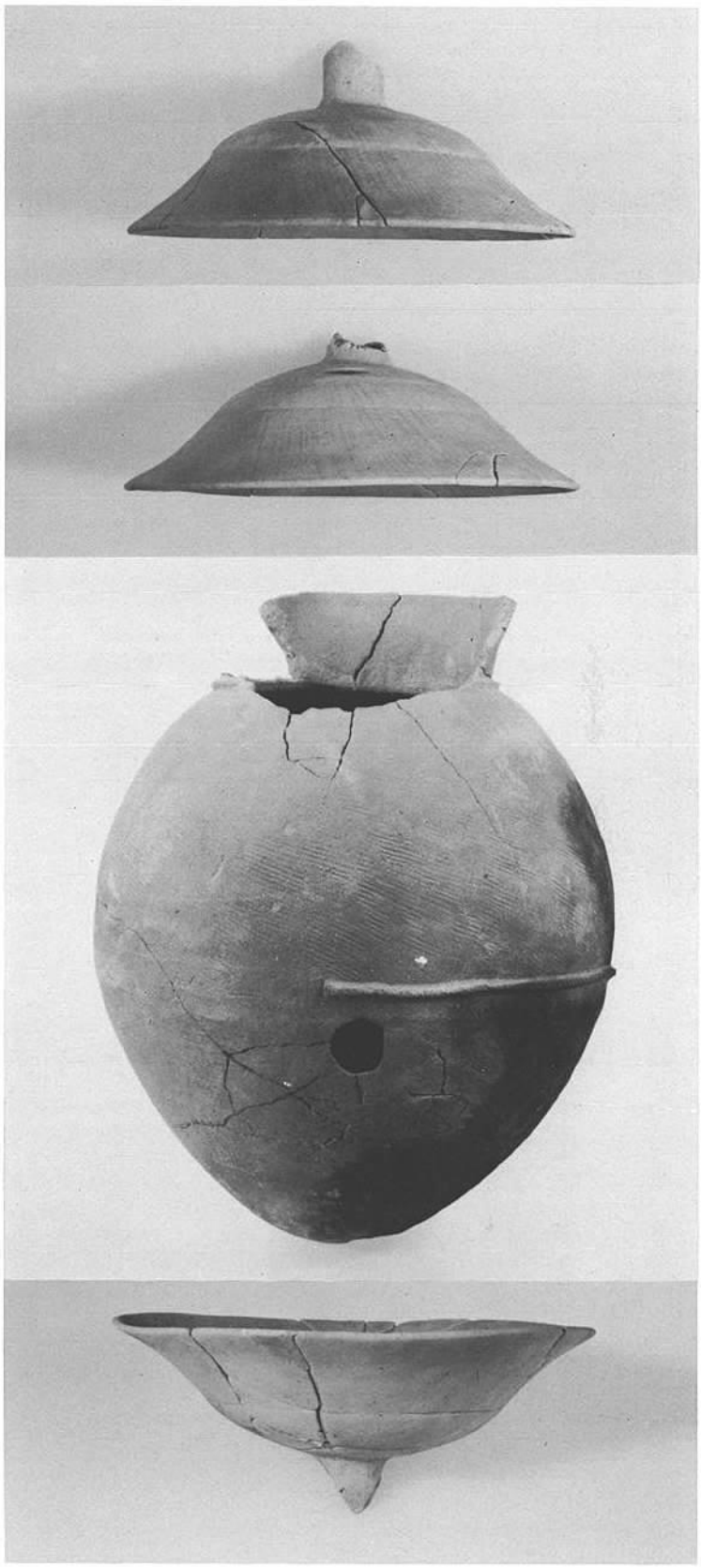
図版36

1

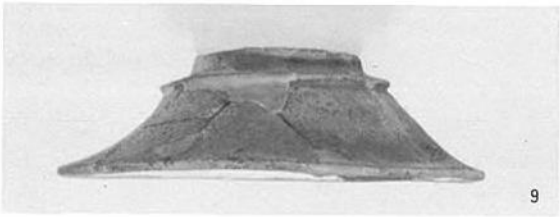
2

3

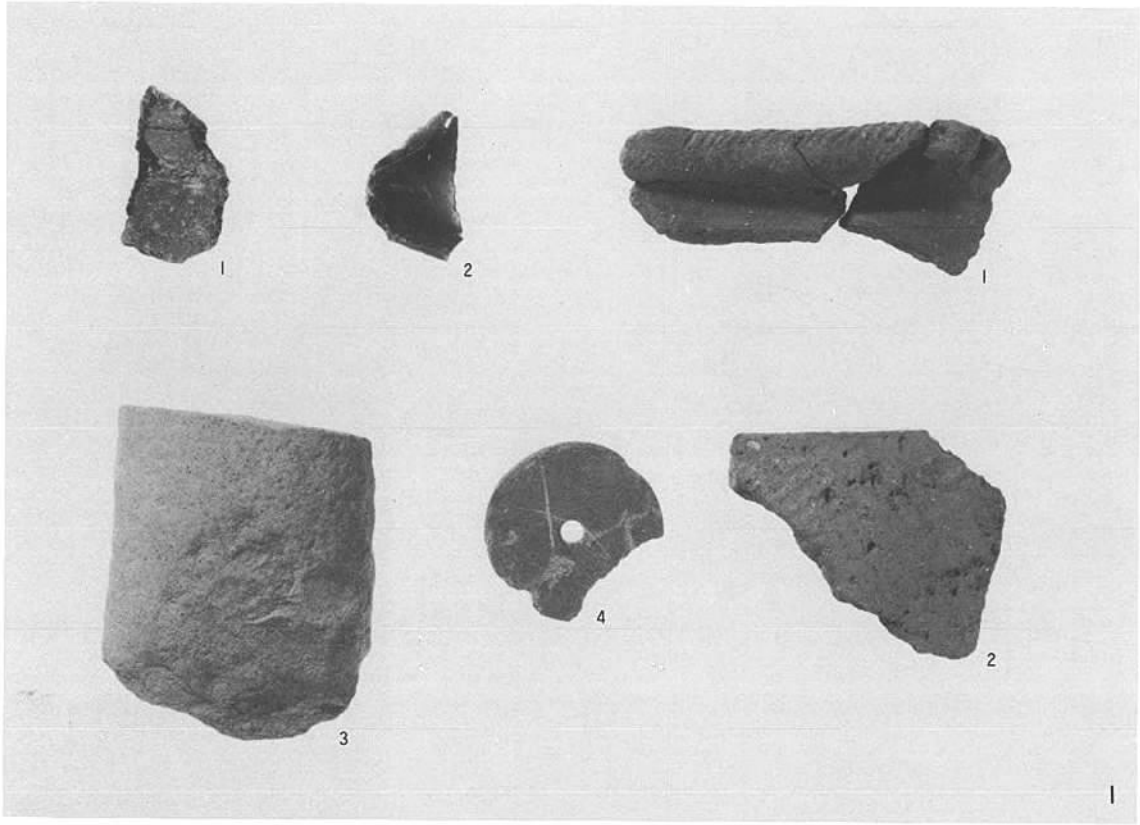
1　八龍Ⅰ—7
　　3号住居跡
2　4号住居跡
3　4号住居跡内
　　土器出土状態

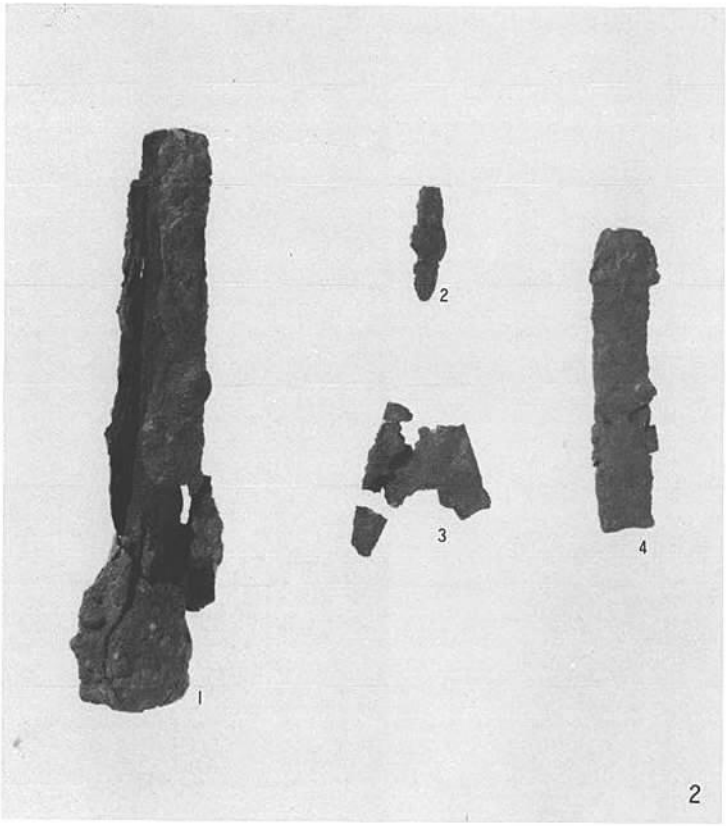


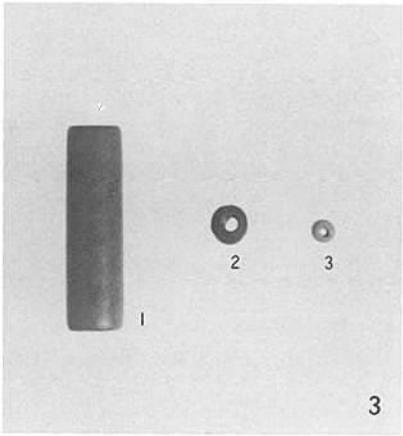
八龍Ⅰ－7　甕棺



八龍Ⅰ—7　1～4号住居跡出土土器

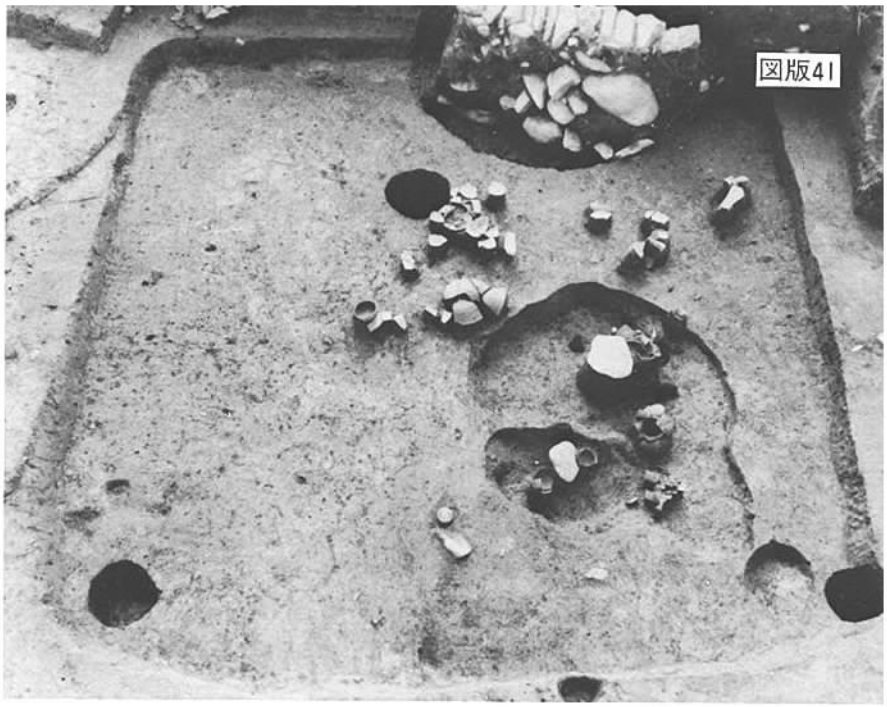






1　八龍Ⅰ—7出土石器・縄文土器　　2　Ⅰ—7出土鉄器　　3　Ⅰ—7出土玉類

1　八龍Ⅰ—18全景（西から）　2　調査区南半（西から）　3　調査区南半（東から）



1

2

1　八龍Ⅰ—18
　　1号住居跡
2　1号住居跡内ピット
3　3号住居跡

3

図版42

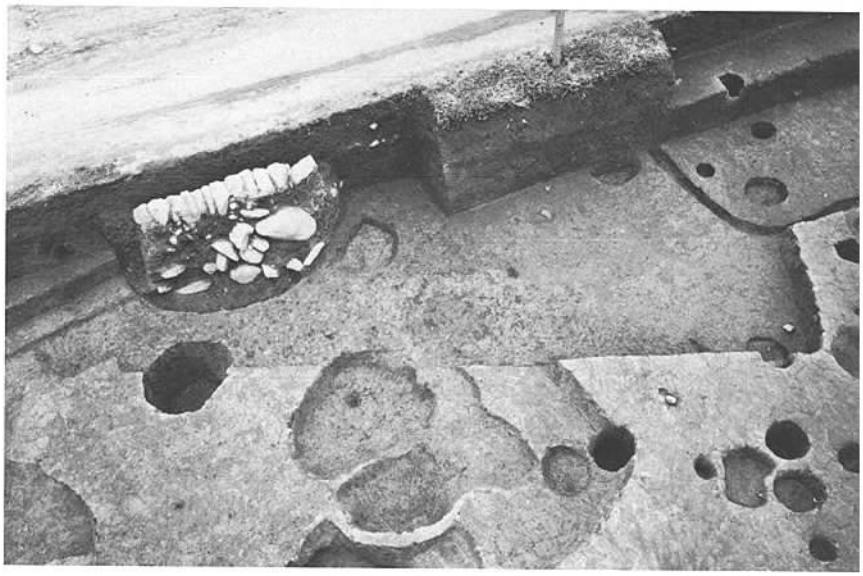
1

2

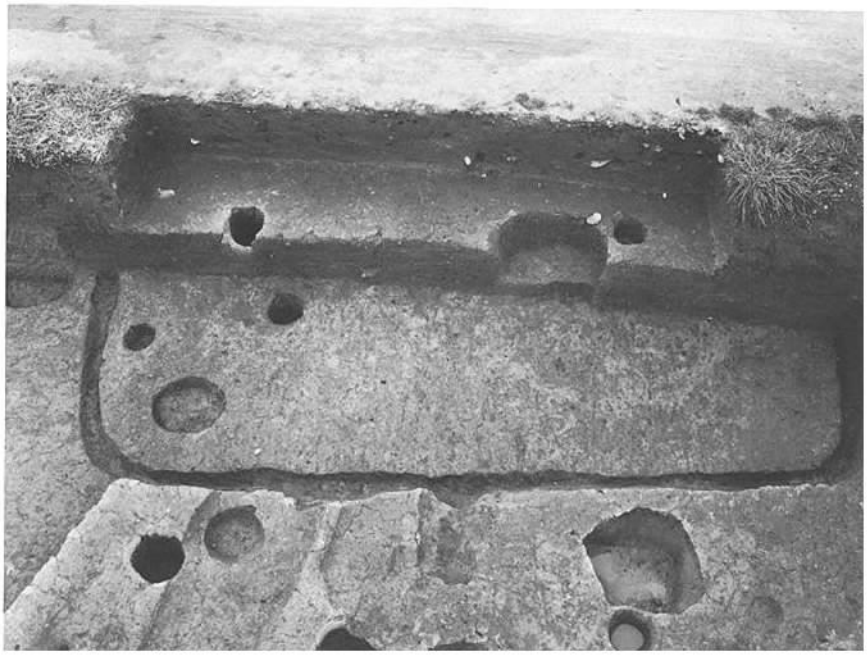
3

1　八龍Ⅰ—18
　　2・5号住居跡付近
2　2号住居跡
3　4号住居跡

1



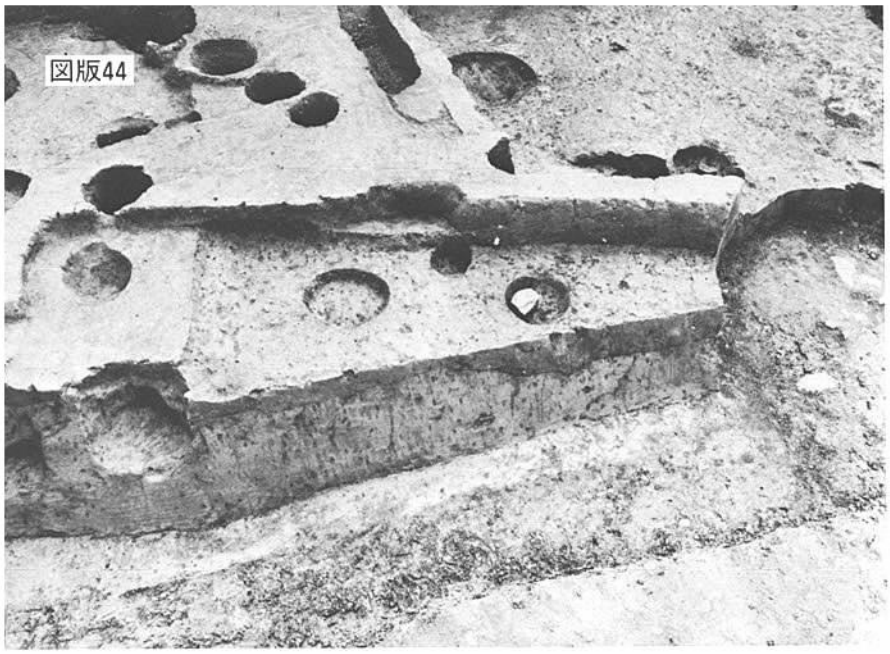
2



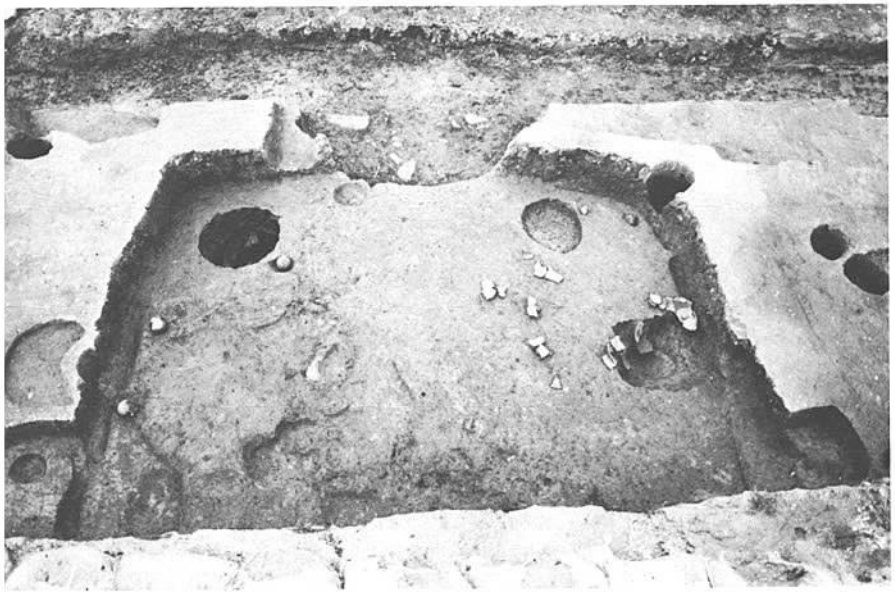
3

1　八龍Ⅰ—18
　　5号住居跡
2　6号住居跡
3　7号住居跡

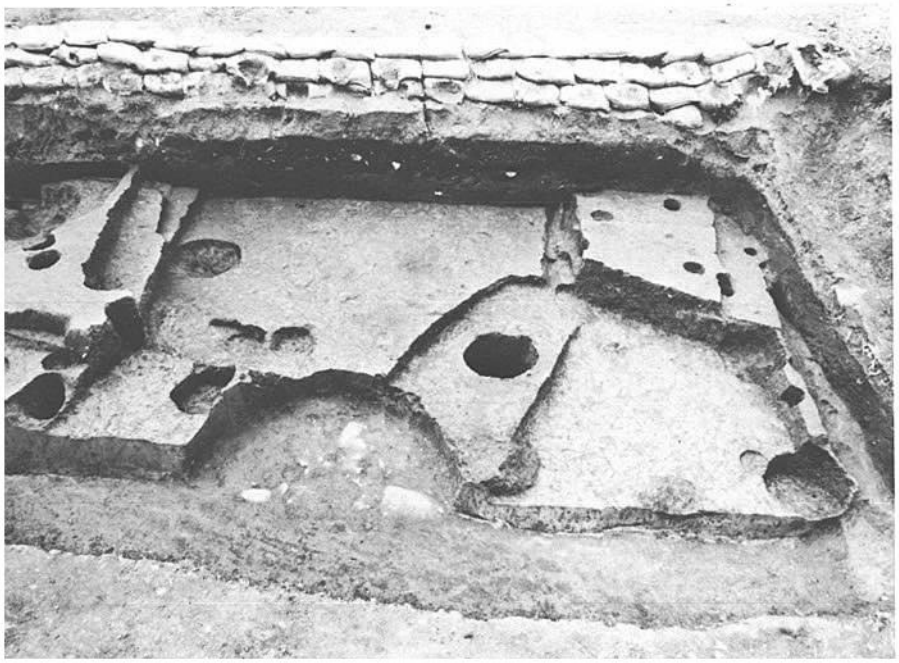
図版44



1

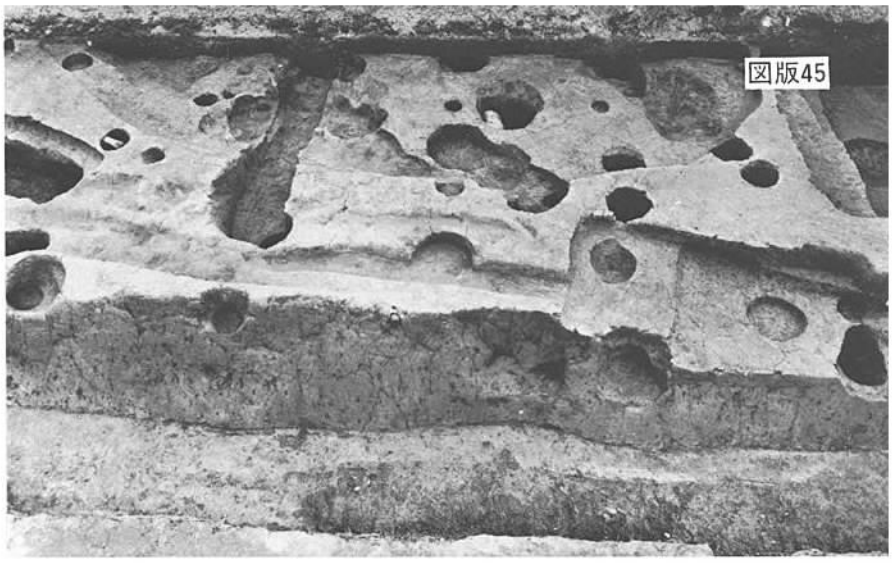


2

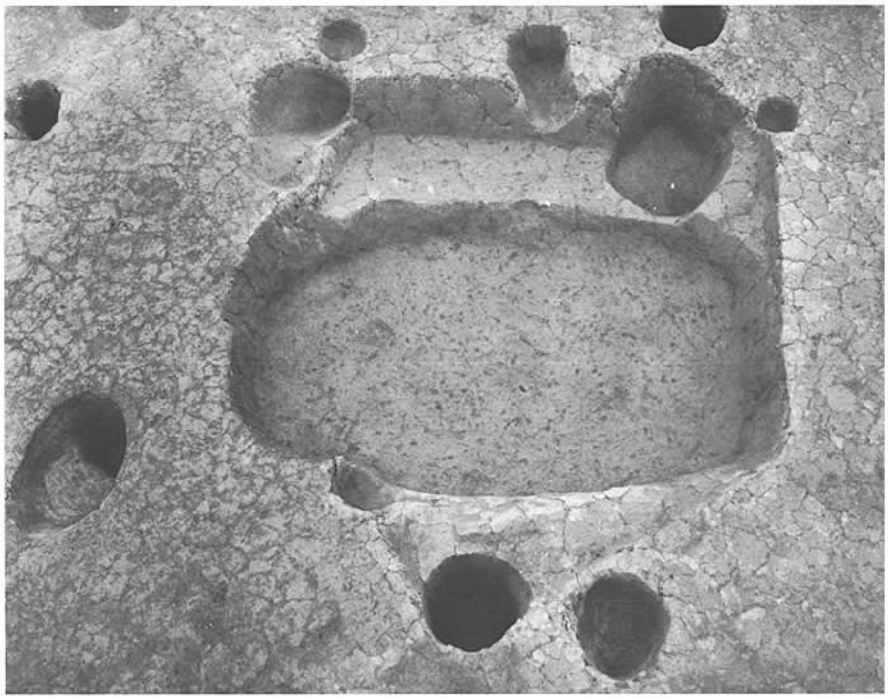


3

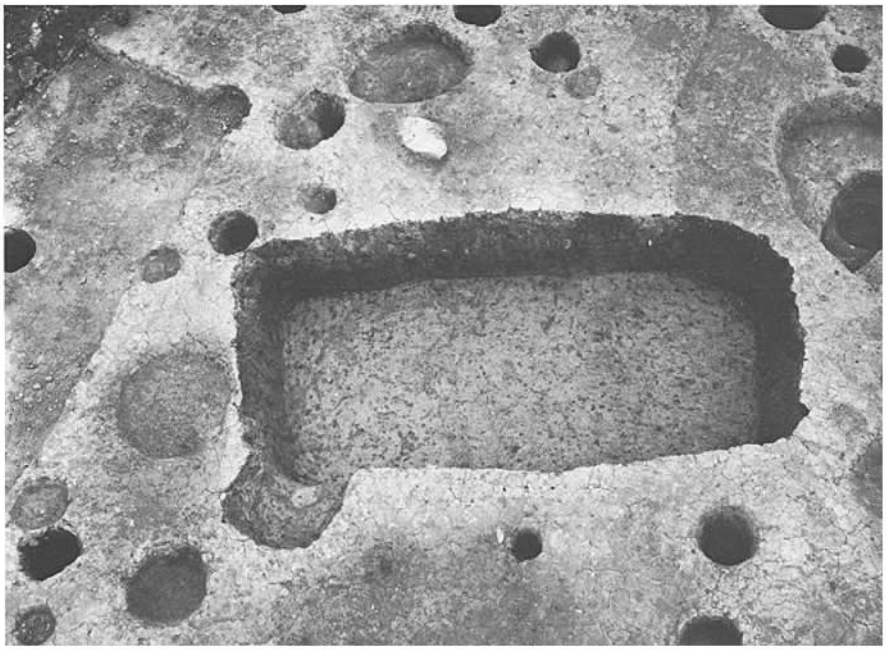
1　八龍Ⅰ—18
　　8号住居跡
2　9号住居跡
3　6・9・10号住居跡



1

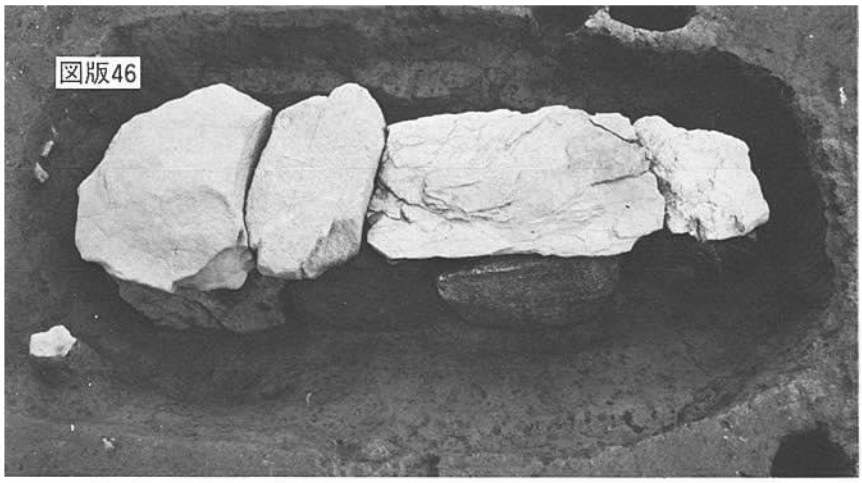


2



3

1　八龍Ⅰ—18
　　11号住居跡
2　1号竪穴
3　2号竪穴

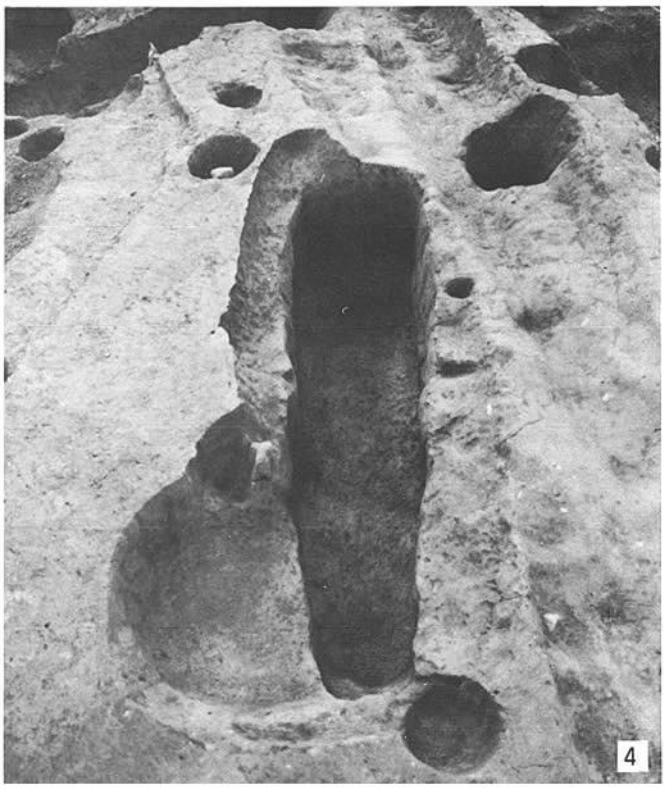


1

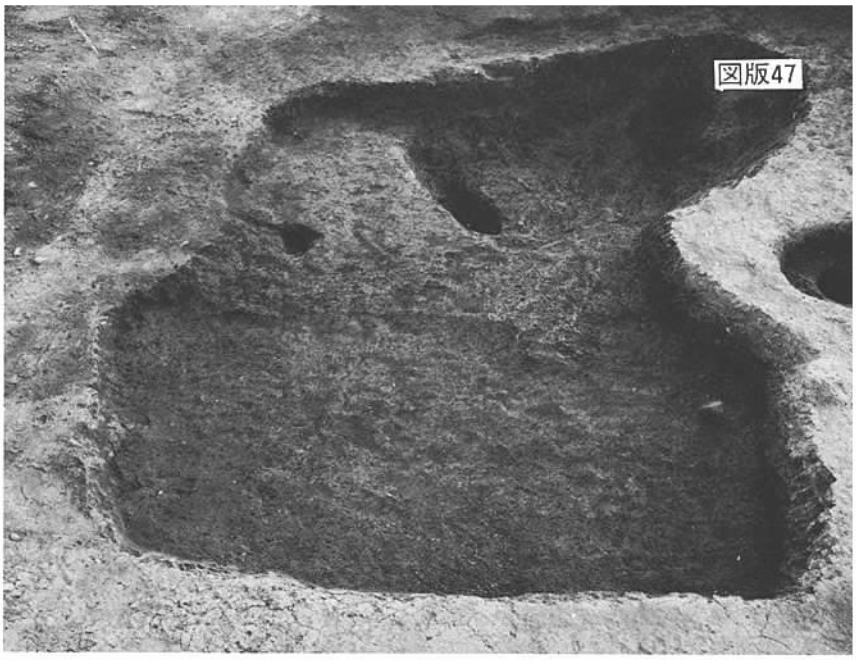
2

1　八龍Ⅰ—18石棺墓
2　石棺墓
3　1号土壙墓
4　2号土壙墓

3



4

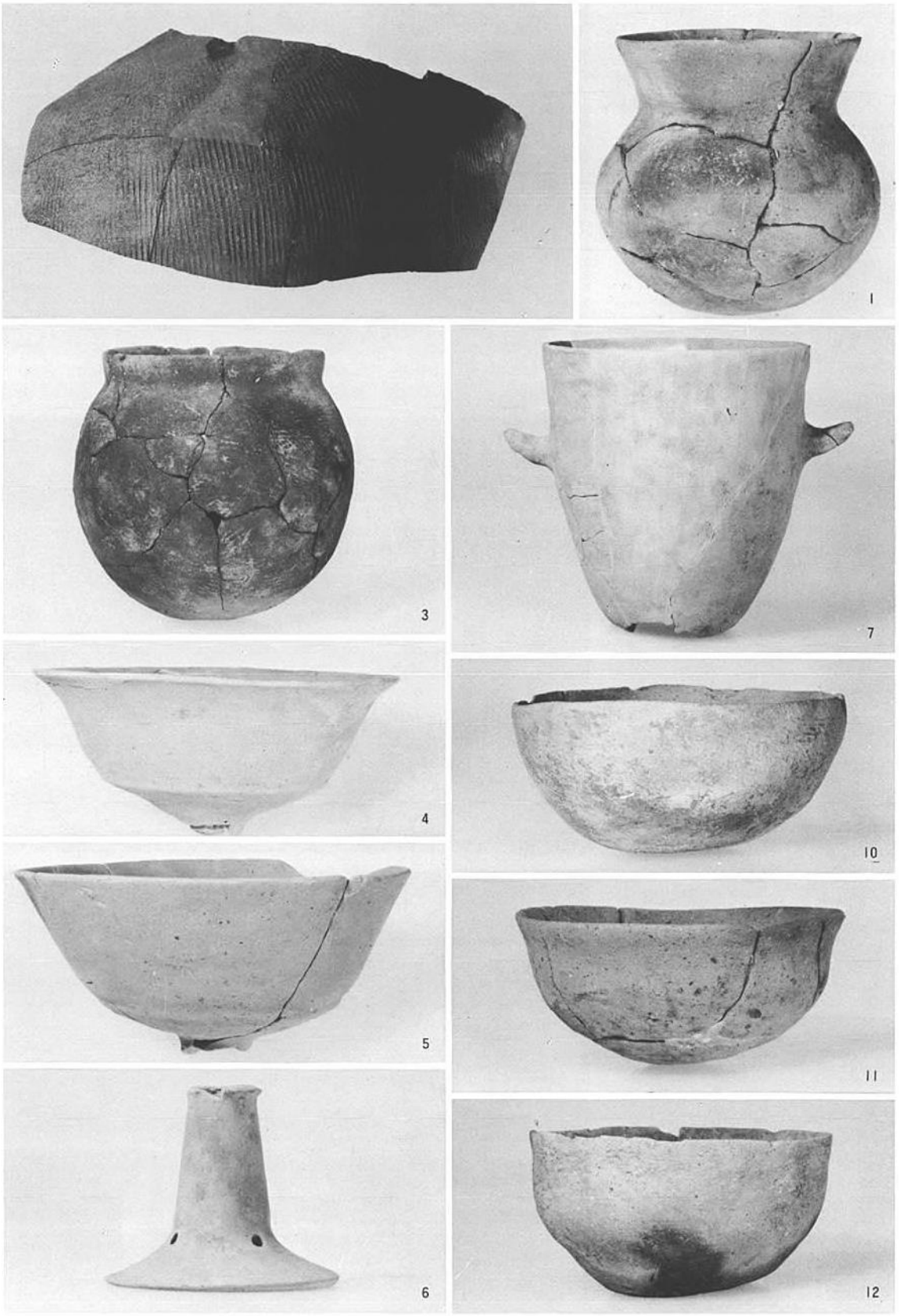


1

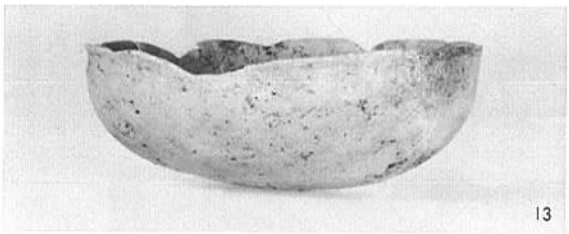
2

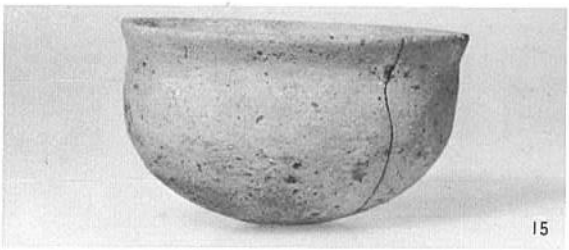
3

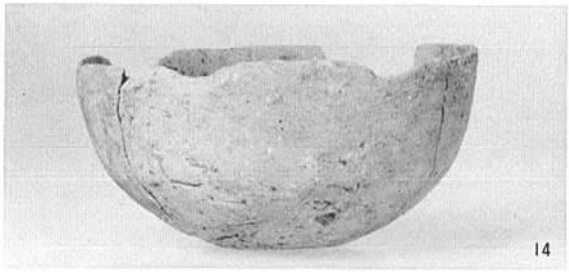
1　八龍Ⅰ—18
　　1・2号土壙
2　2号土壙
3　製鉄遺構

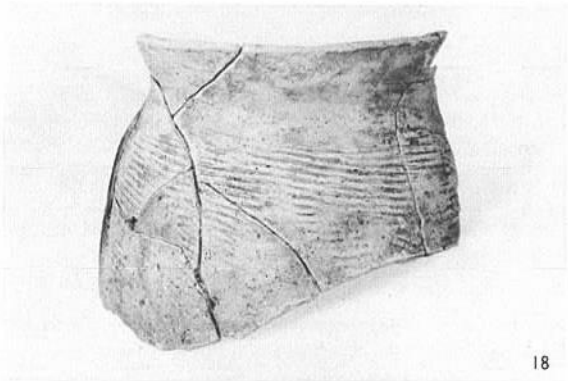


八龍Ⅰ—18　1号住居跡出土土器

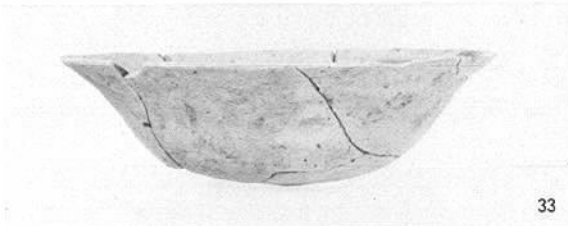




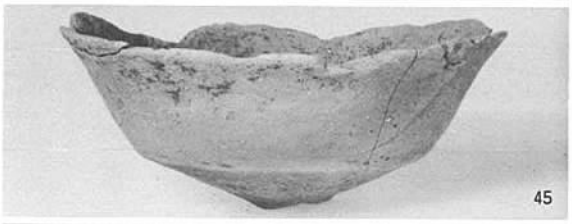


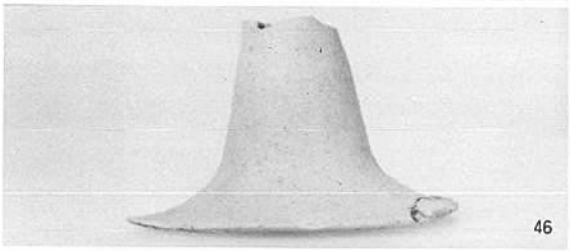


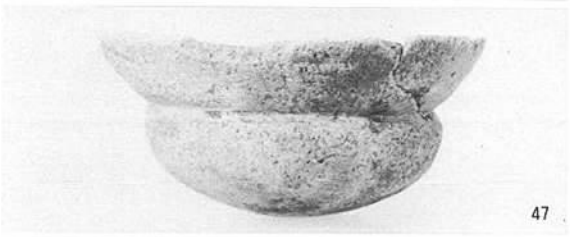
八龍Ⅰ—18　1・2号住居跡出土土器

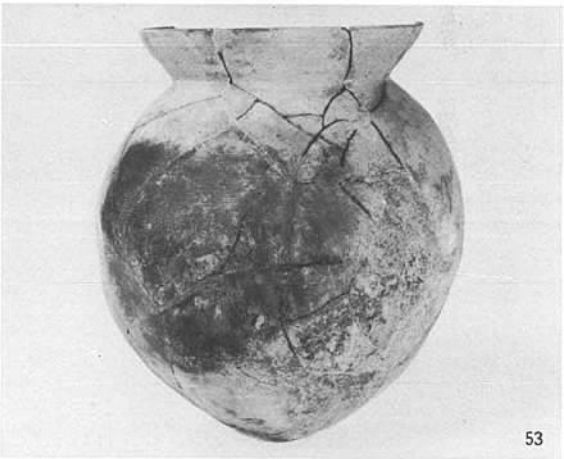


八龍Ⅰ—18　2号住居跡出土土器

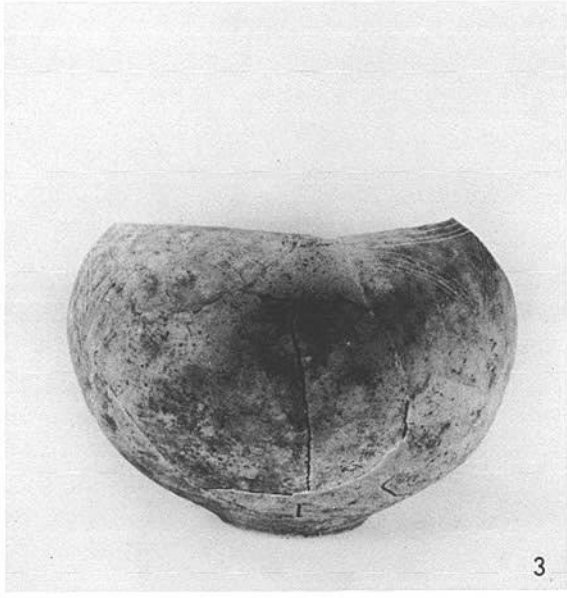


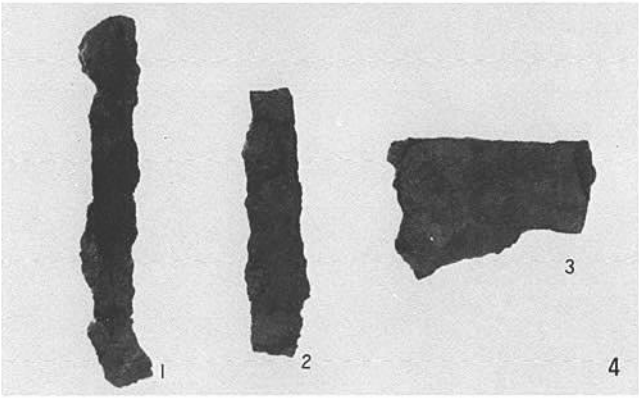




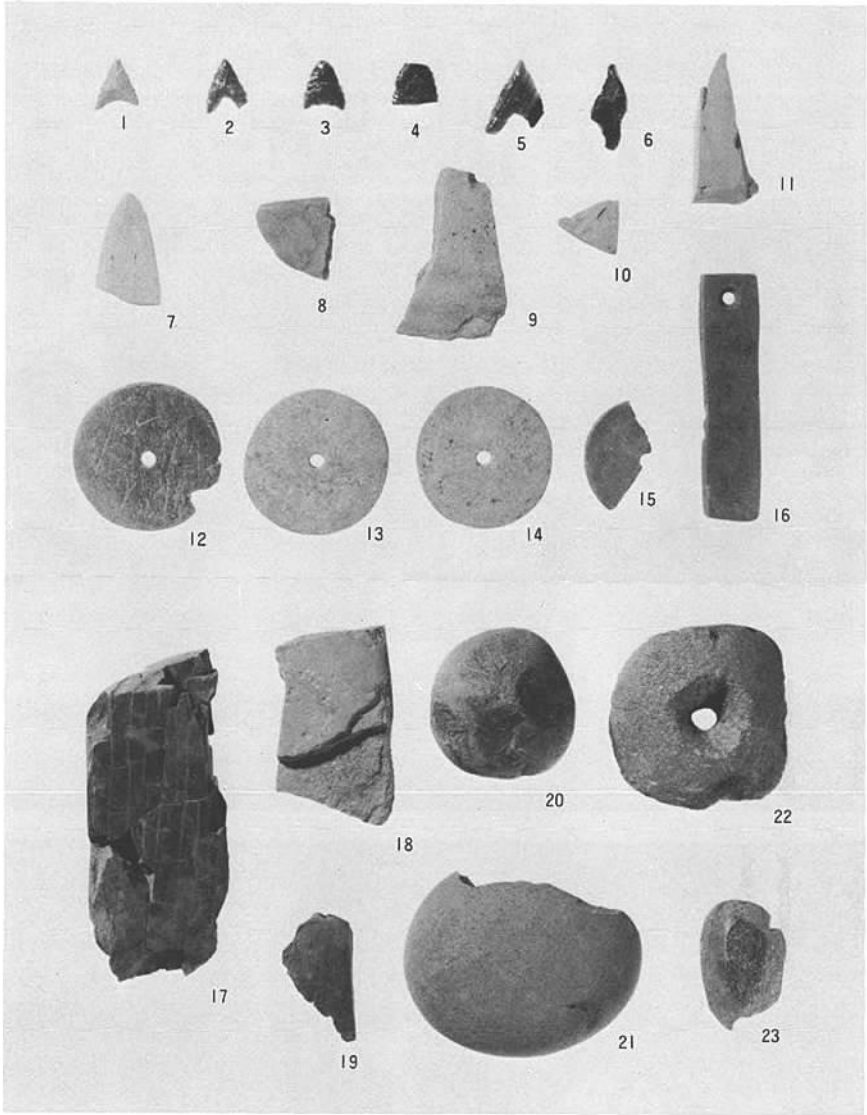


八龍Ⅰ—18　3・4号住居跡出土土器

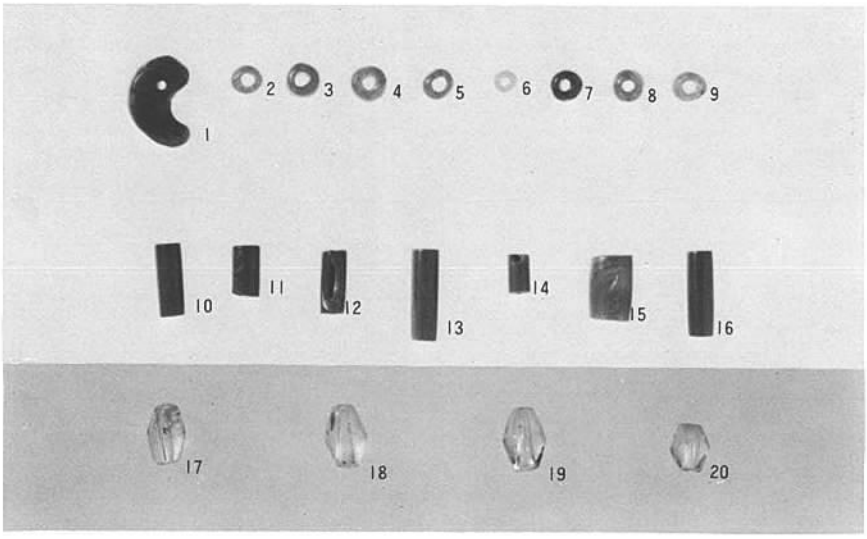




1　八龍Ⅰ—18
　　4号住居跡出土土器
2　5号住居跡上層出土土器
3　2号竪穴出土土器
4　Ⅰ—18　出土鉄器



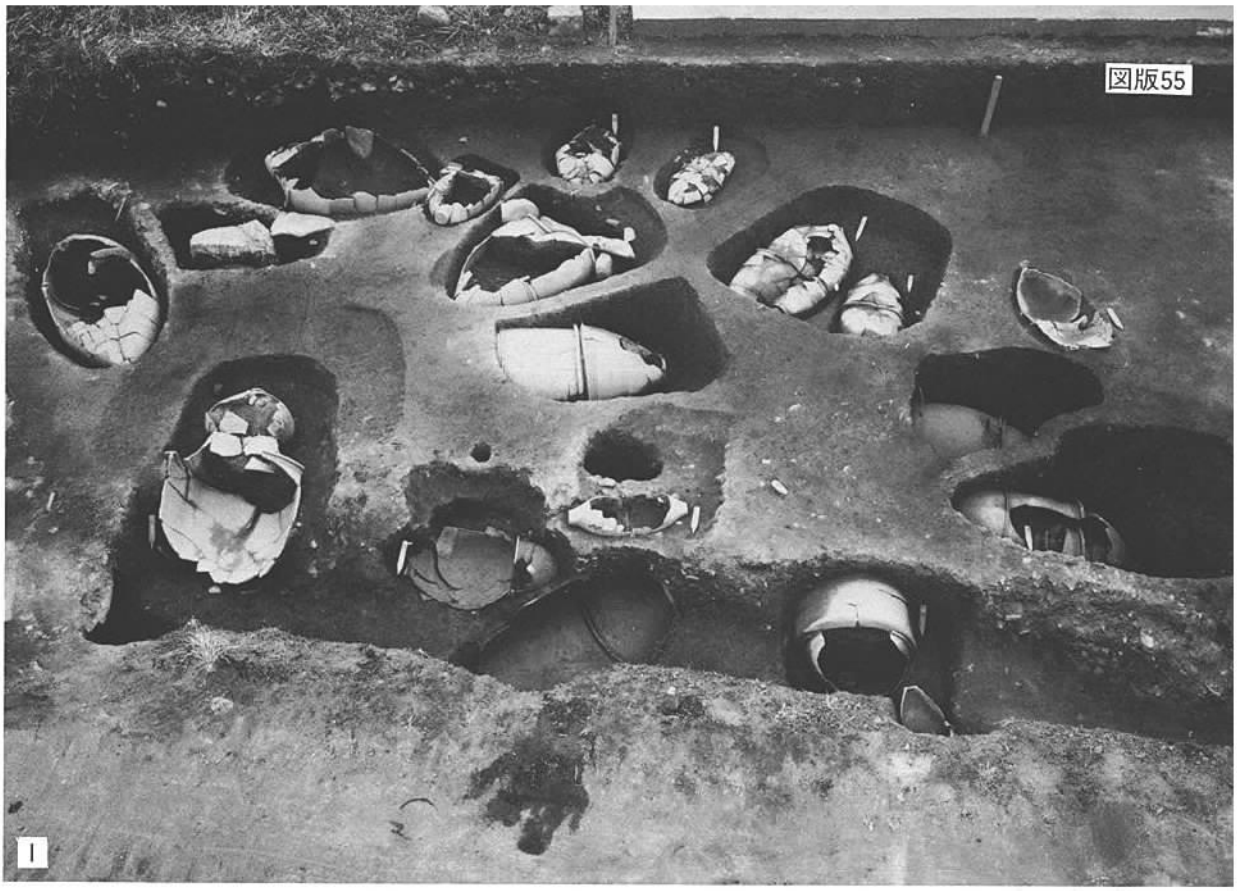
1

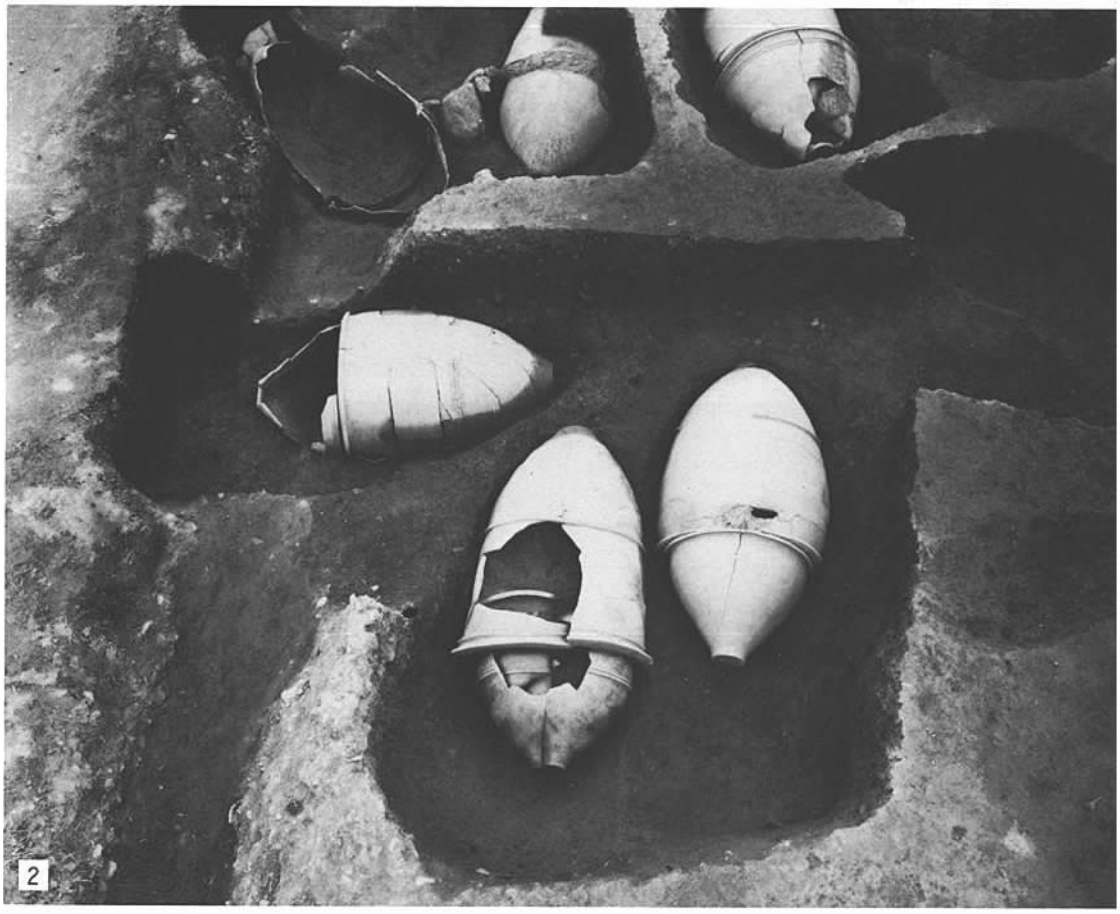


2

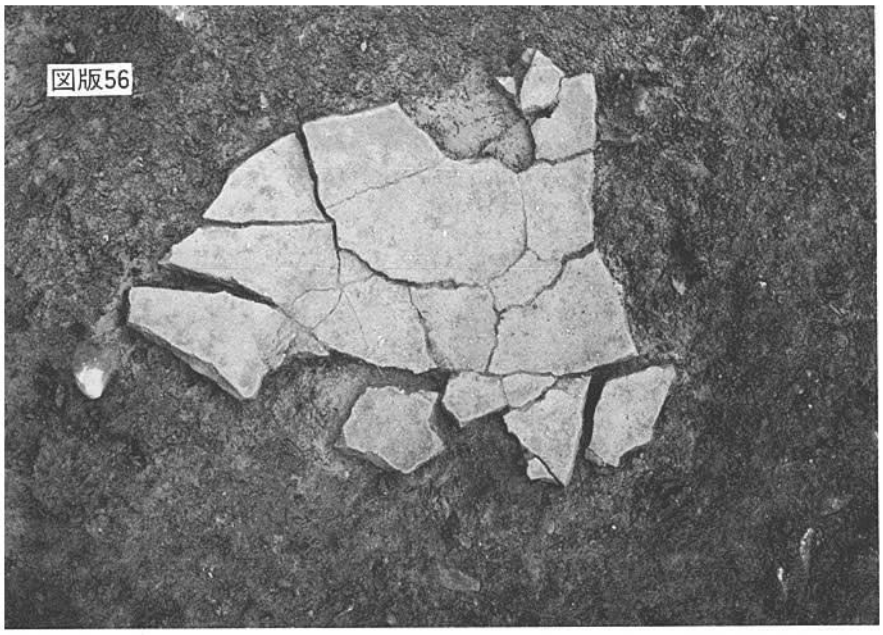
1　八龍Ⅰ—18　出土石器　　2　Ⅰ—18　出土玉類

1　八龍II—10　甕棺墓群（西から）　2　II—10　甕棺墓群（東から）

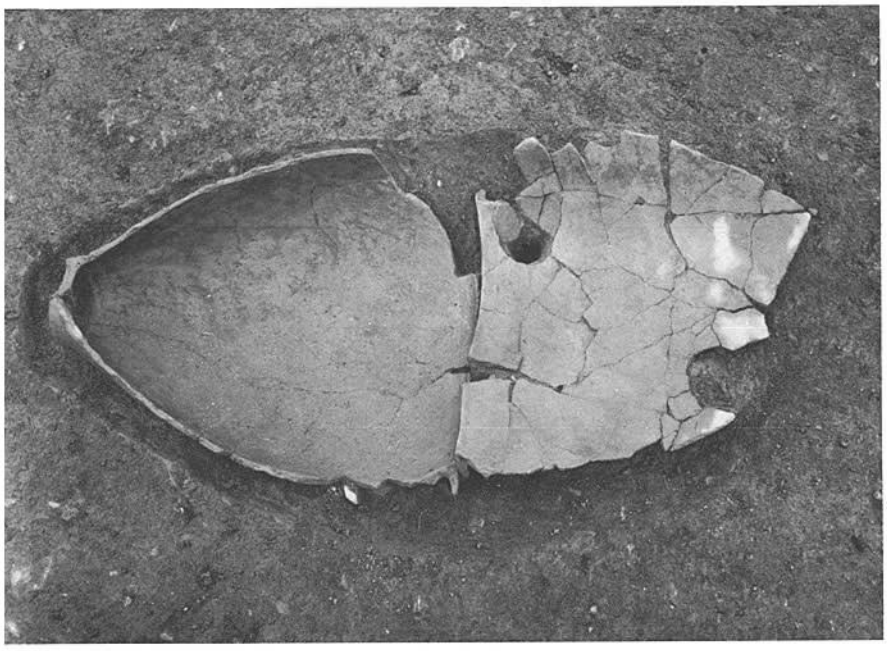




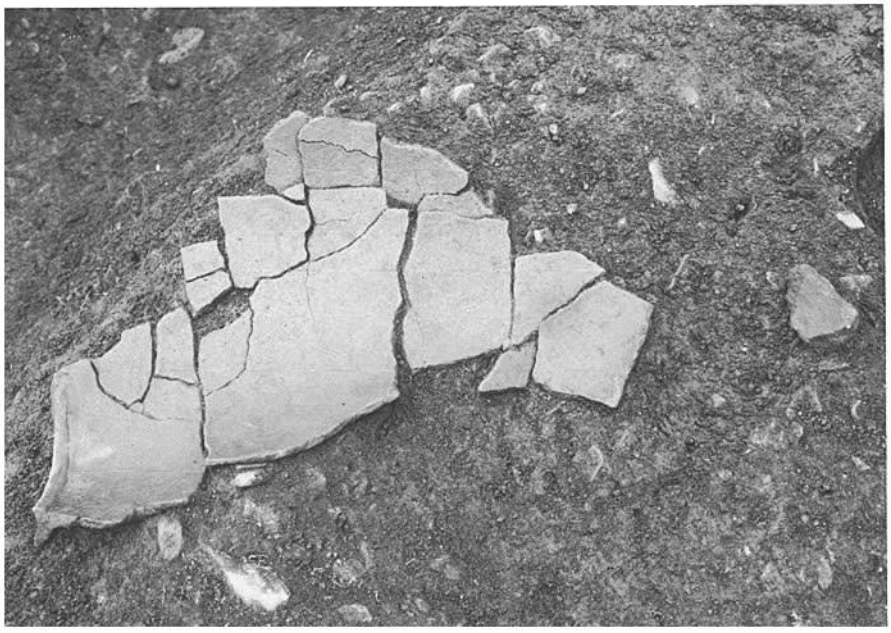
1　八龍II—10　甕棺墓群（北から）　　2　6・7・24号甕棺墓



1

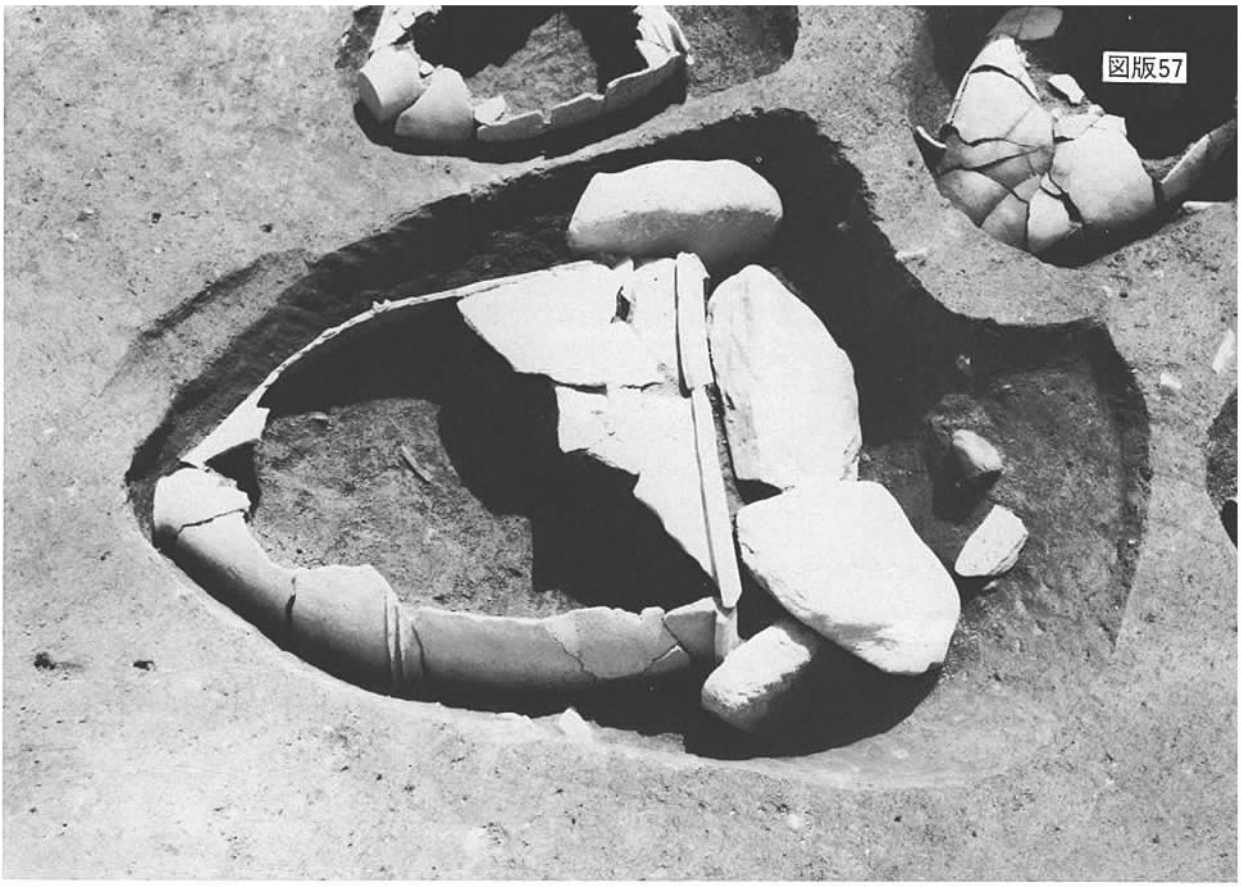


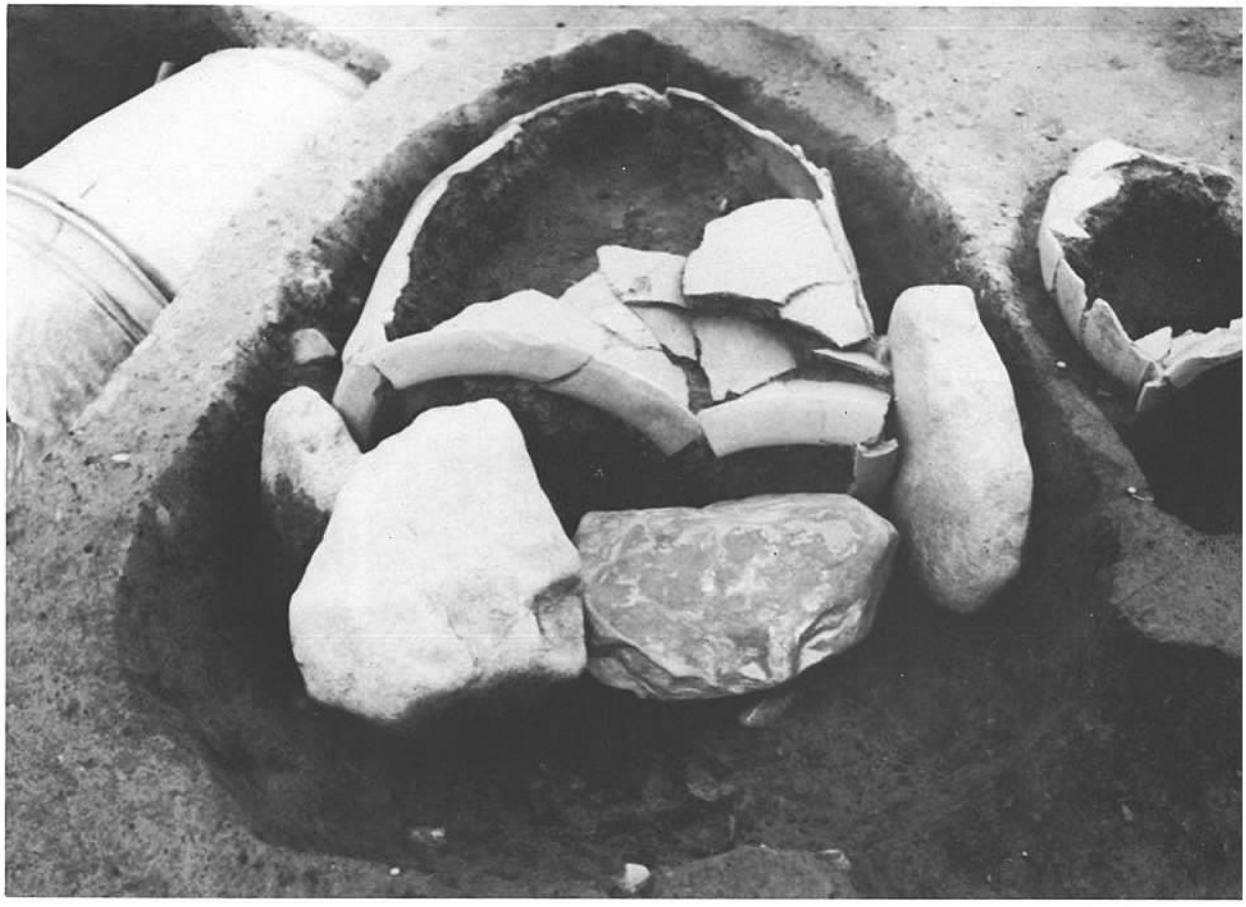
2



3

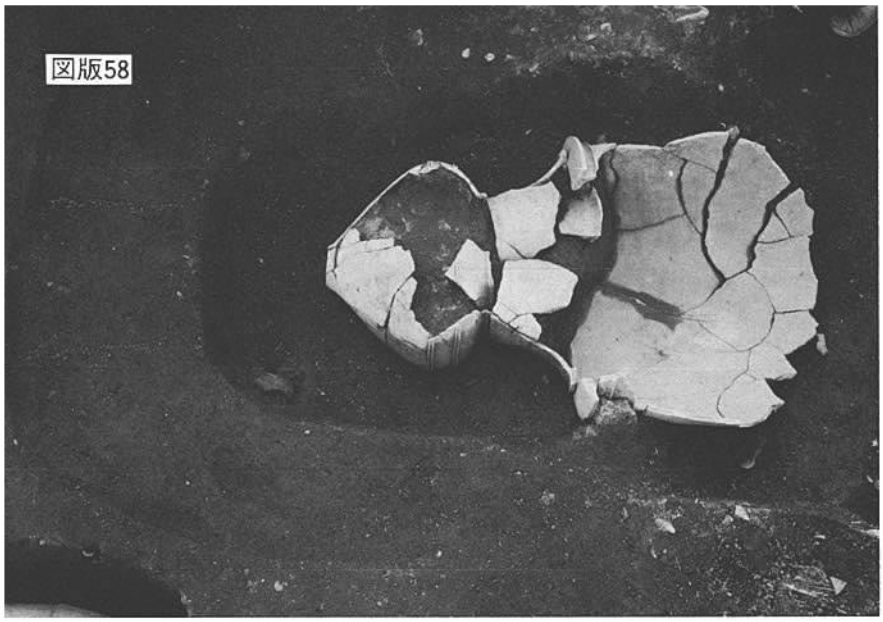
1　八龍Ⅱ—10
　　1号甕棺墓
2　2号甕棺墓
3　4号甕棺墓





八龍II—10　3号甕棺墓

図版58

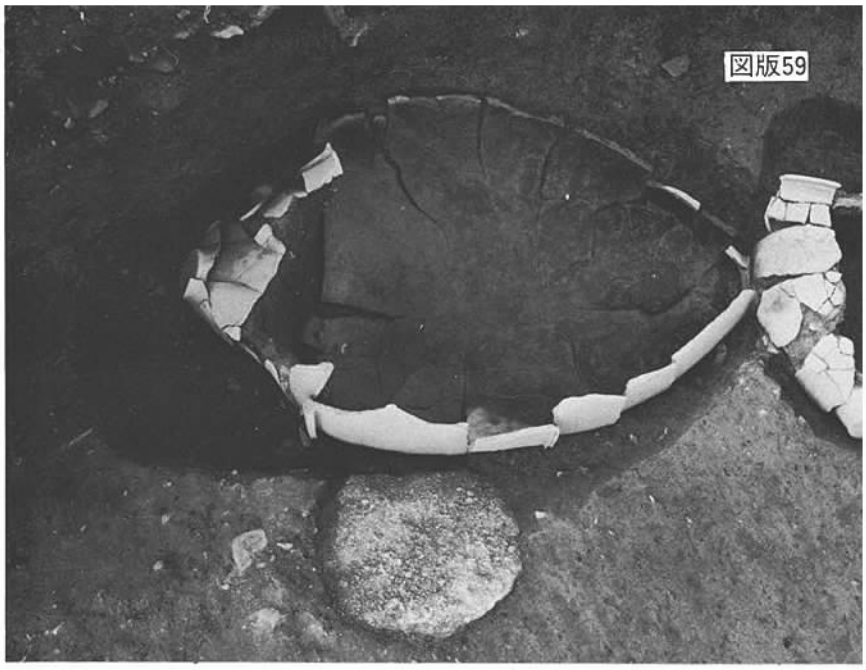


1

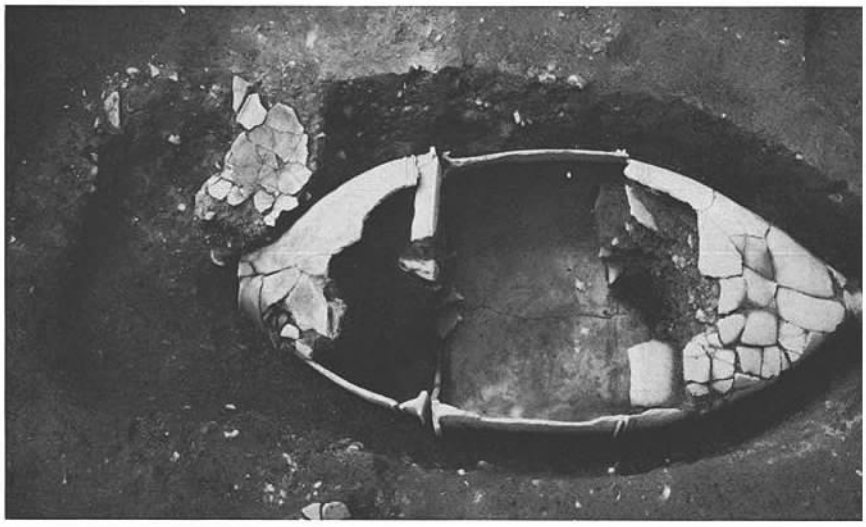
2

3

1　八龍II—10
　　5号甕棺墓
2　6号甕棺墓
3　7・21号甕棺墓



1

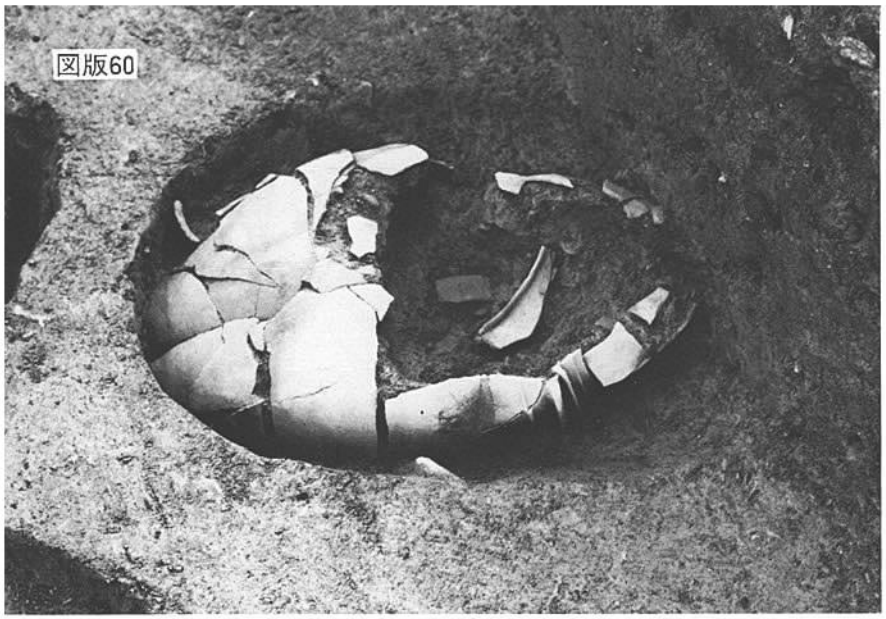


2

3

1　八龍II—10
　　8号甕棺墓
2　9・10号甕棺墓
3　11号甕棺墓

図版60

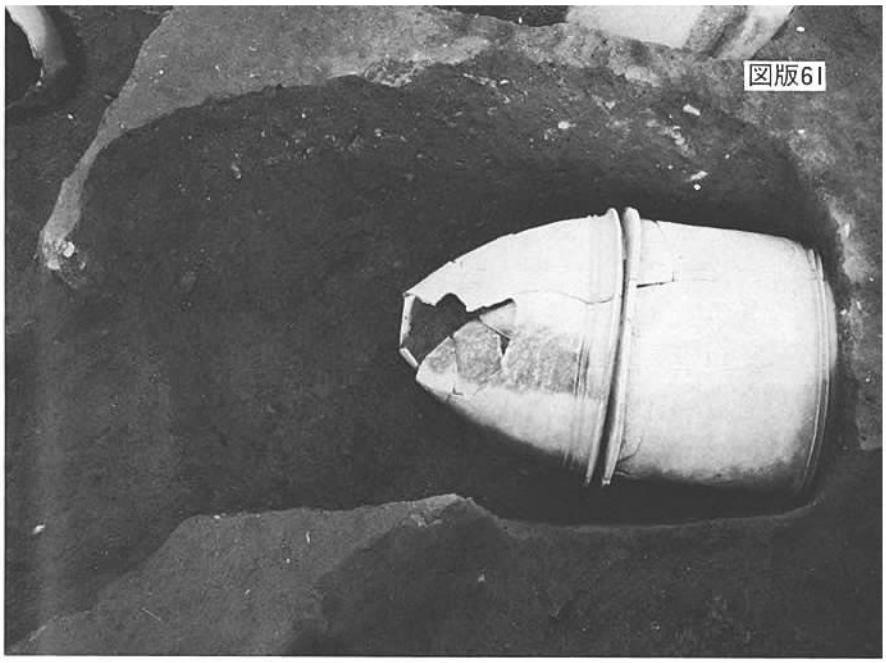


1

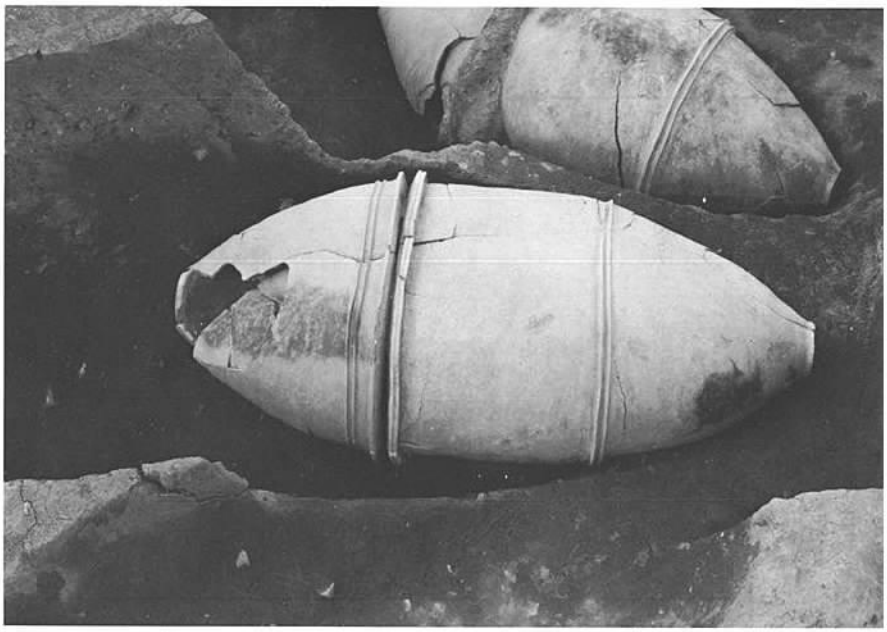
2

3

1　八龍II—10
　　12号甕棺墓
2　13号甕棺墓
3　14・15号甕棺墓



1

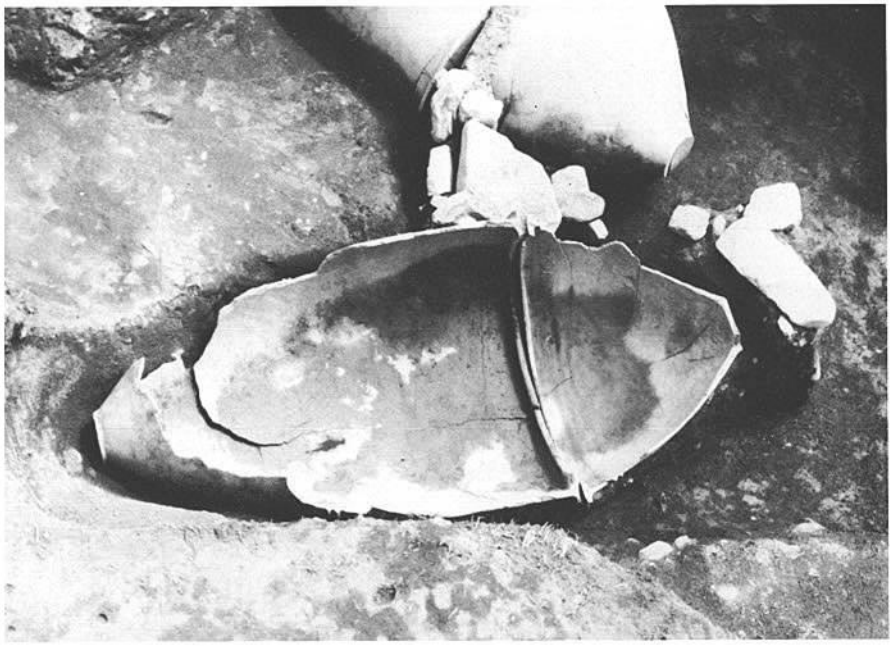


2

3

1　八龍II—10
　　16号甕棺墓
2　16号甕棺墓
3　17号甕棺墓

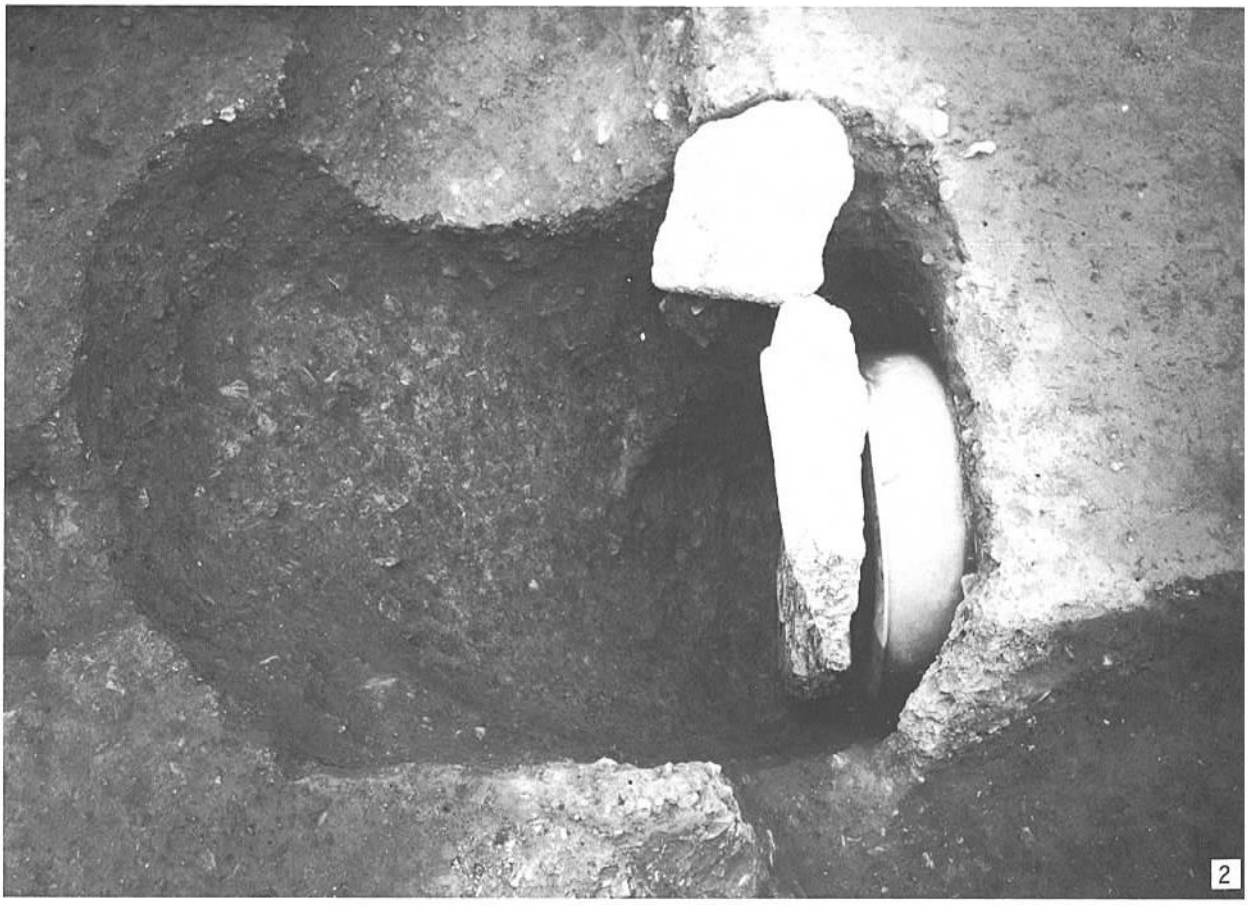
1



2

3

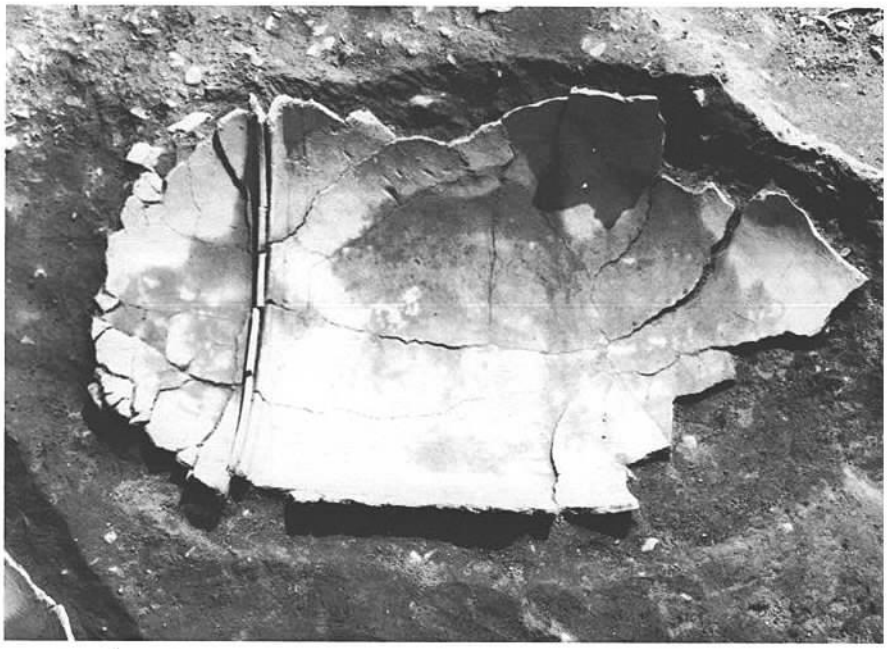
1　八龍II—10
　　18号甕棺墓
2　19号甕棺墓
3　21号甕棺墓



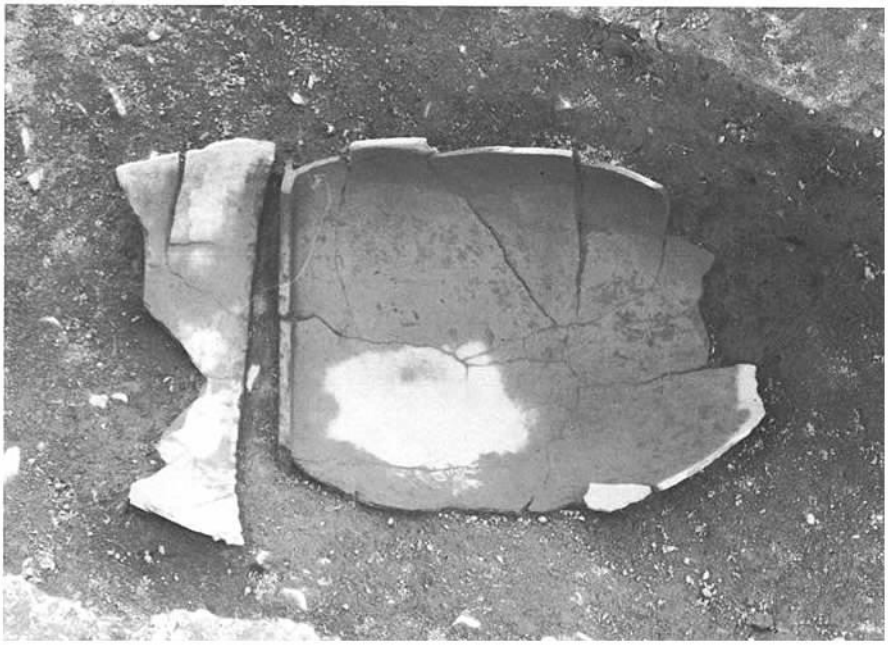
1　八龍II—10　16・20号甕棺墓　　2　22号甕棺墓

八龍II—10　22号甕棺墓

1

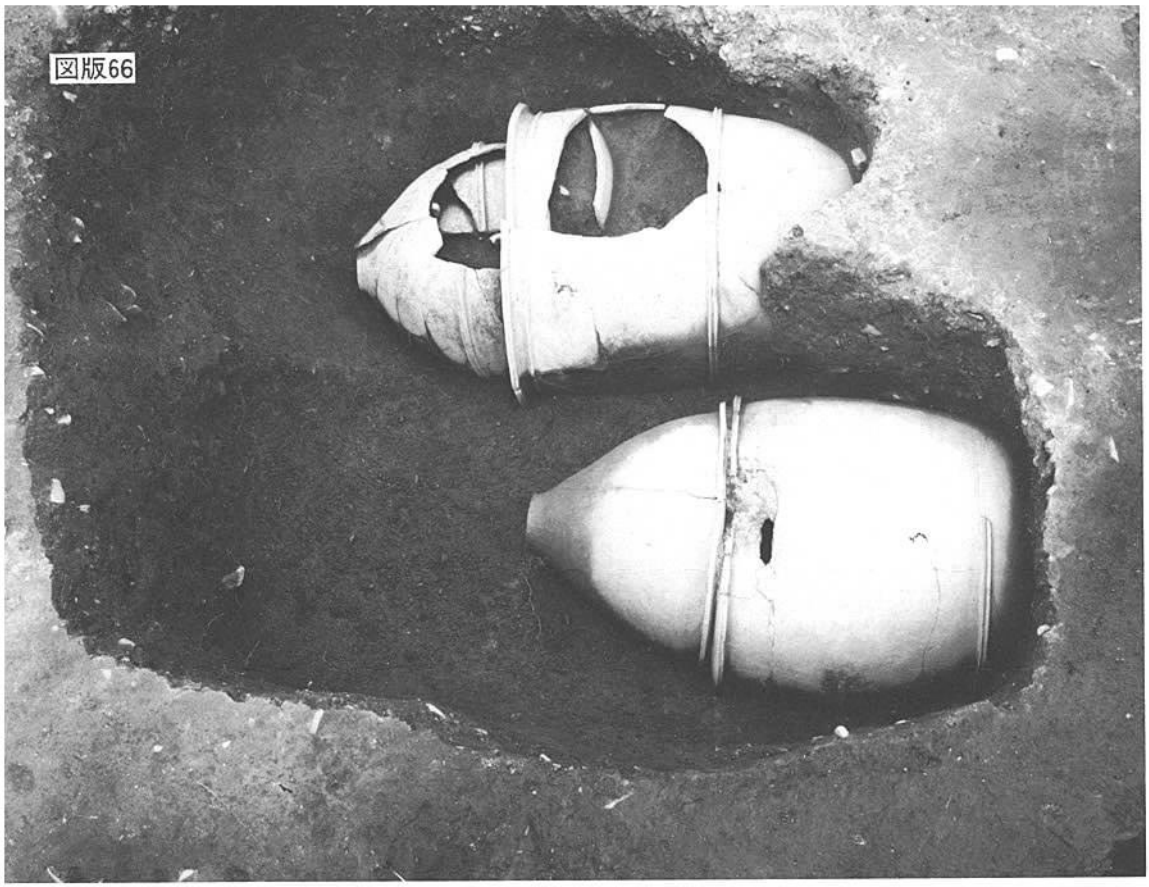


2



3

1　八龍Ⅱ—10
　　22号甕棺墓
2　23号甕棺墓
3　25号甕棺墓

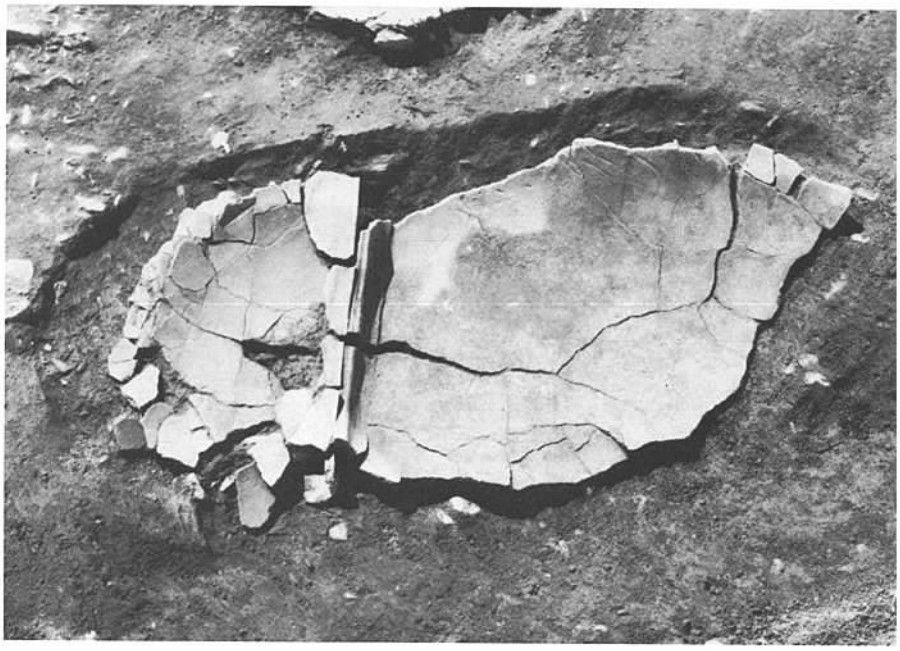


1

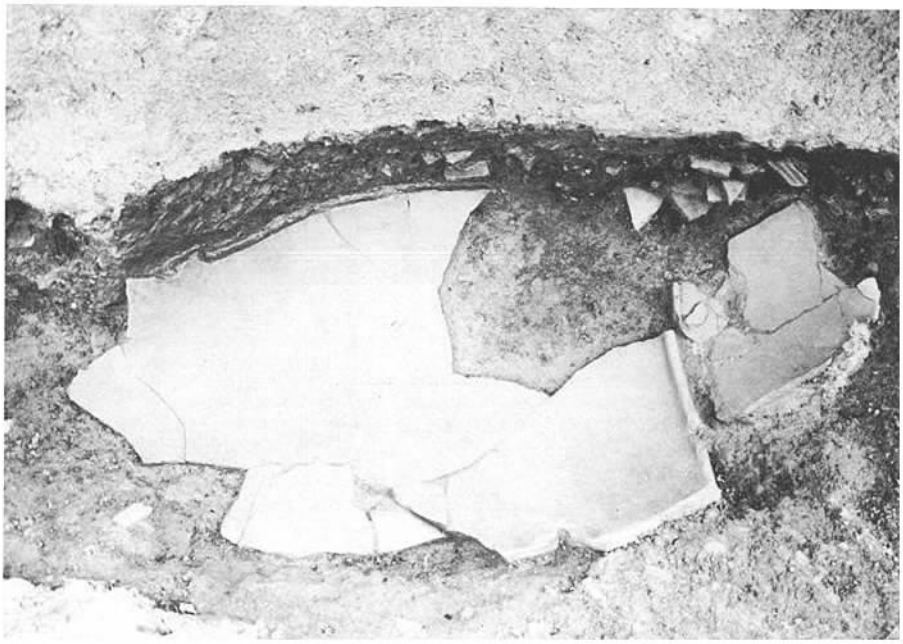
2

1　八龍II—10　6・24号甕棺墓　　2　6・7・24号甕棺墓

1

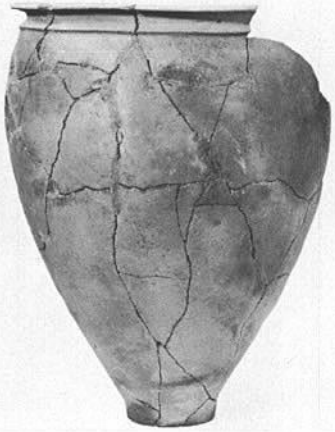


2

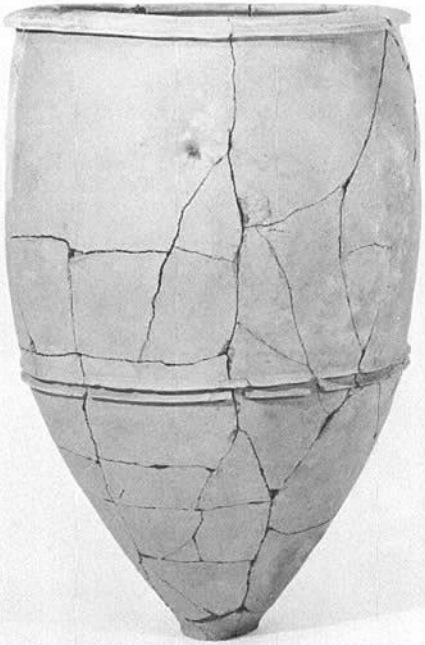


3

1　八龍II—10
　　26号甕棺墓
2　27号甕棺墓
3　28号甕棺墓



2

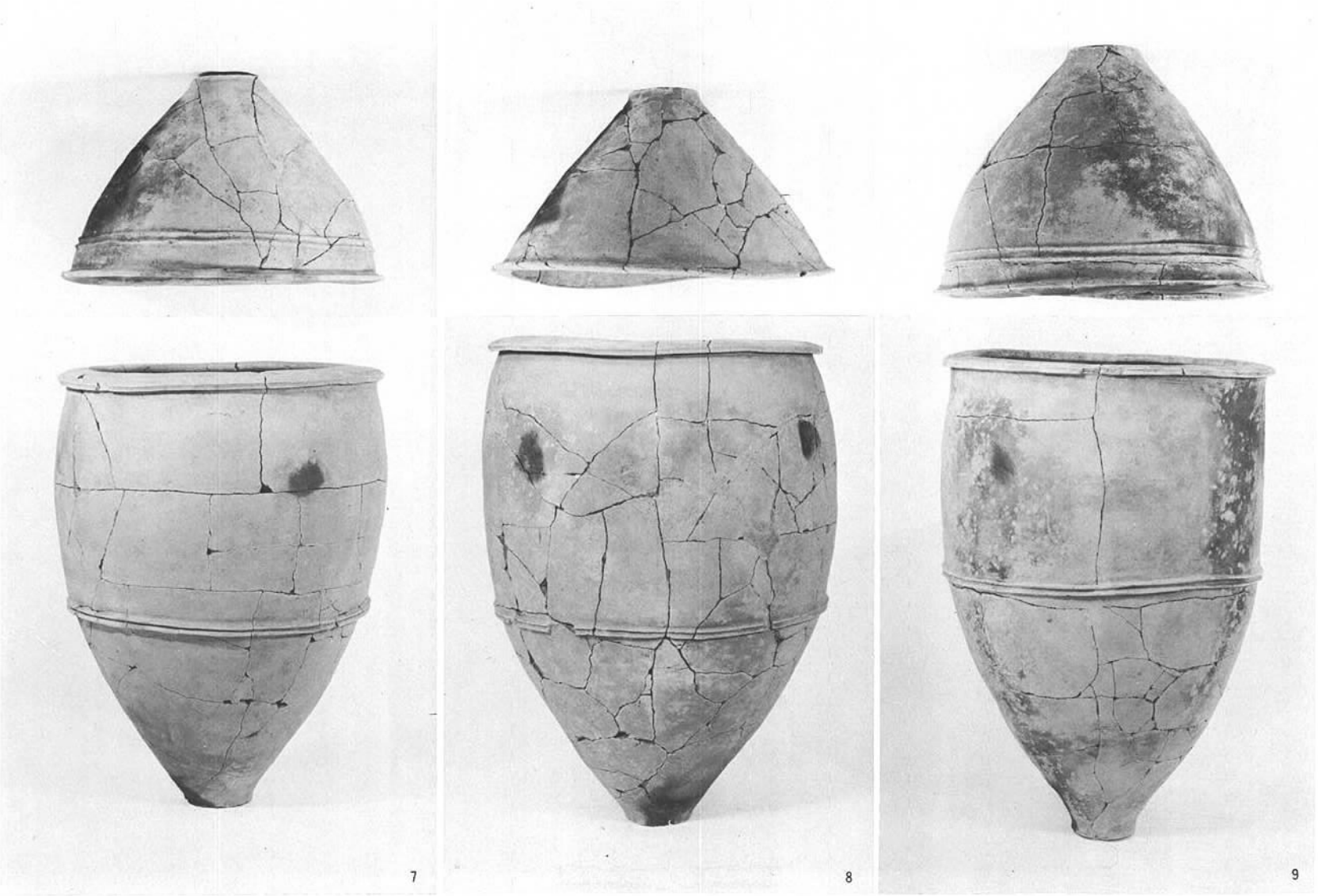


3

5

6

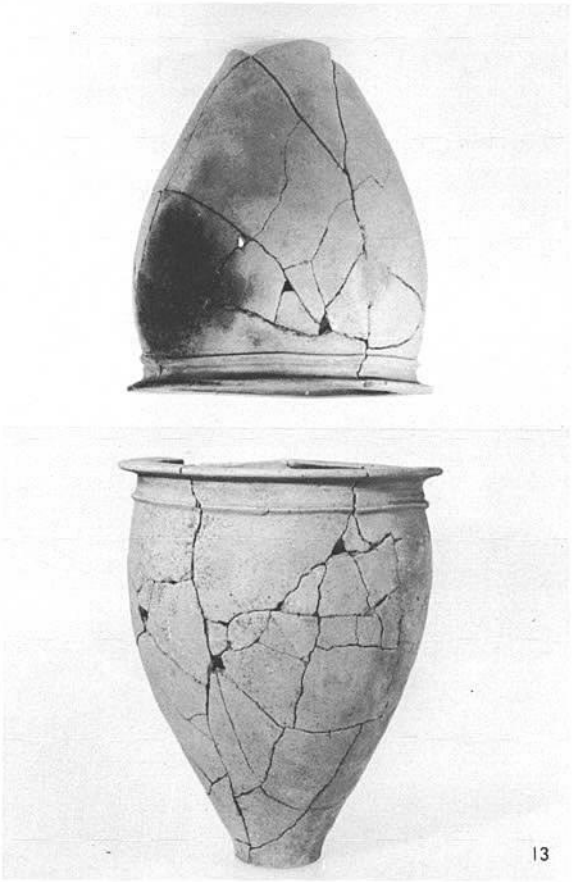
八龍II—10　2・3・5・6号甕棺



八龍II—10　7～9号甕棺

12

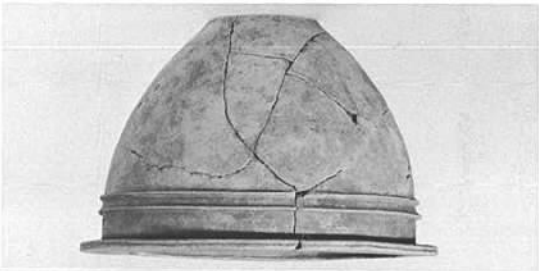
11

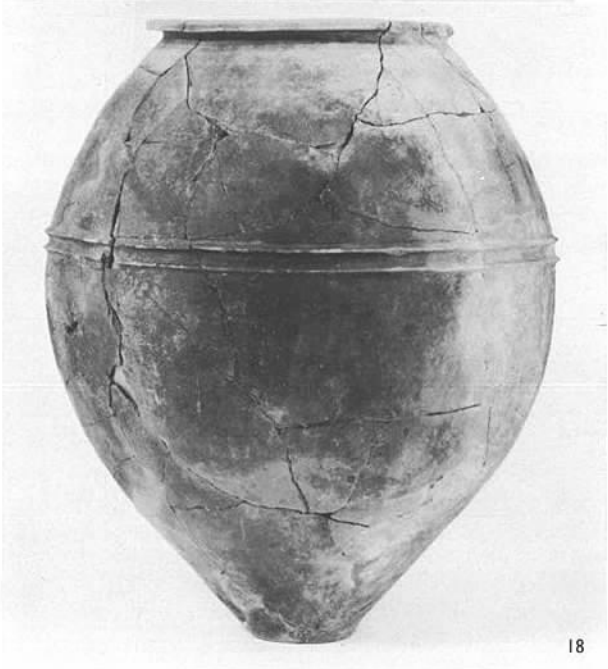


13

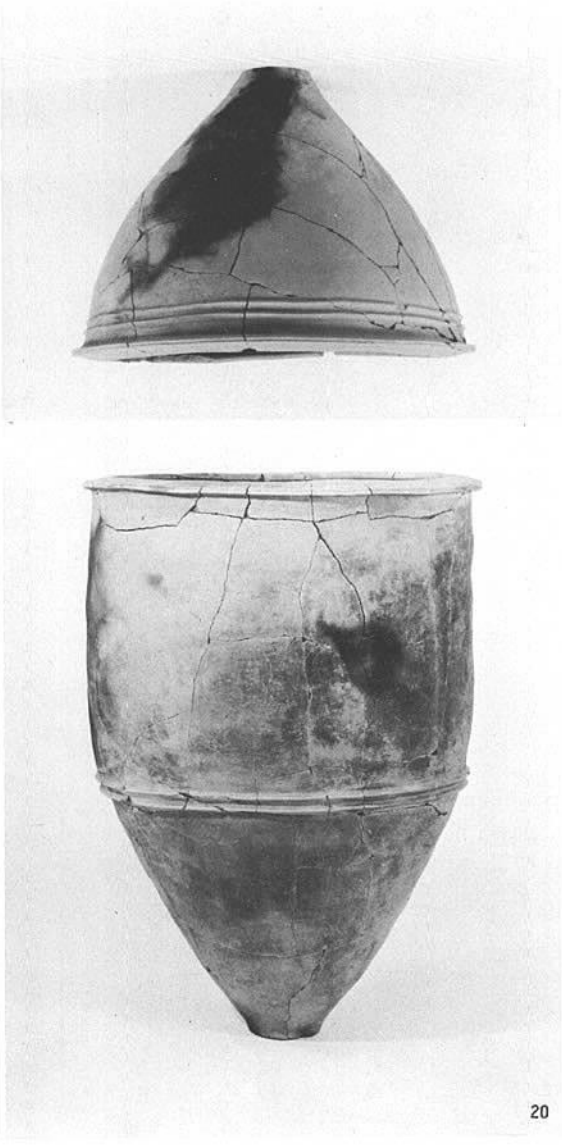
14

八龍Ⅱ—10　11～14号甕棺

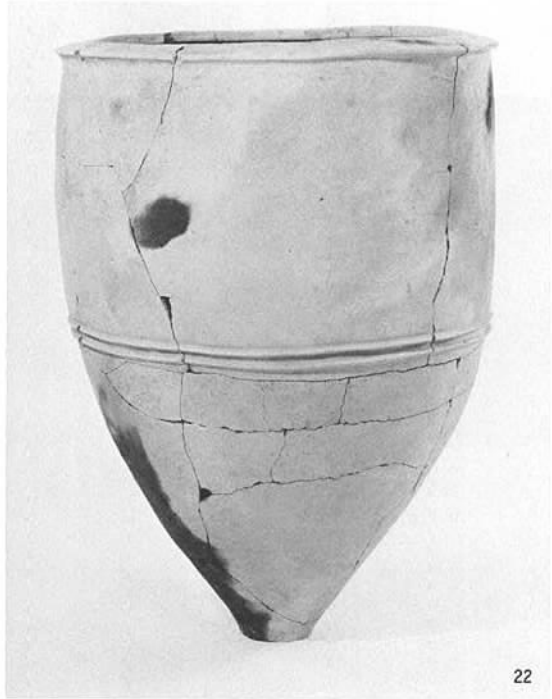




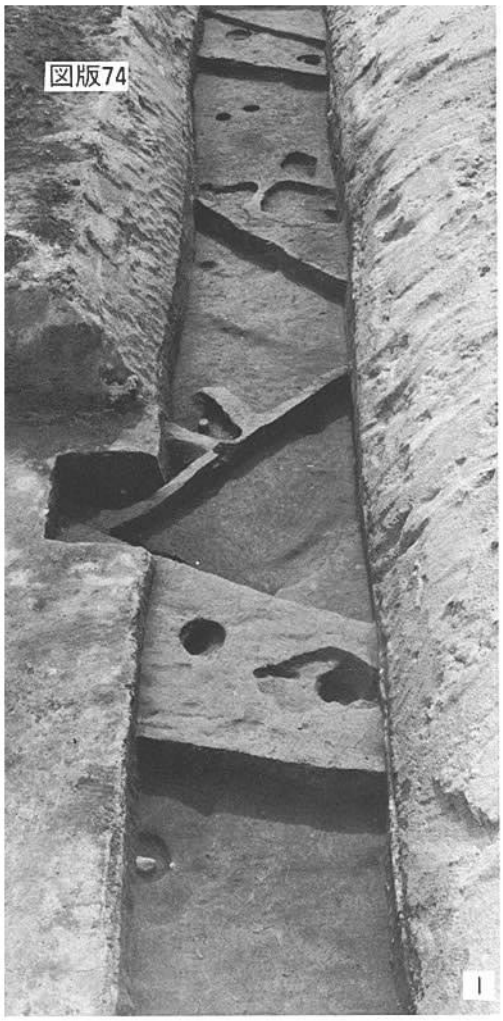
八龍II—10　15・17・18・21号甕棺

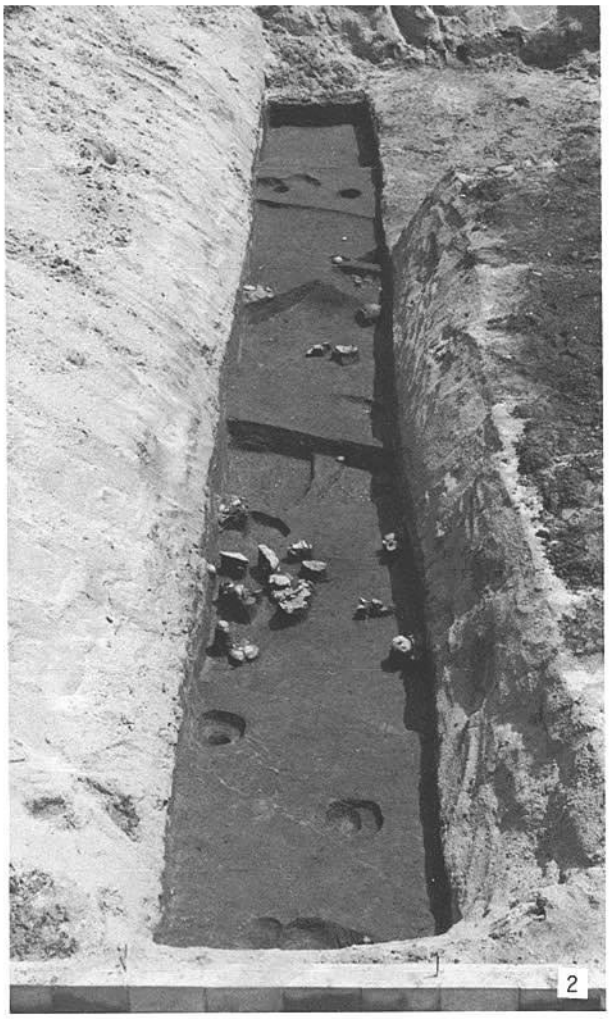


八龍II—10　16・19・20号甕棺



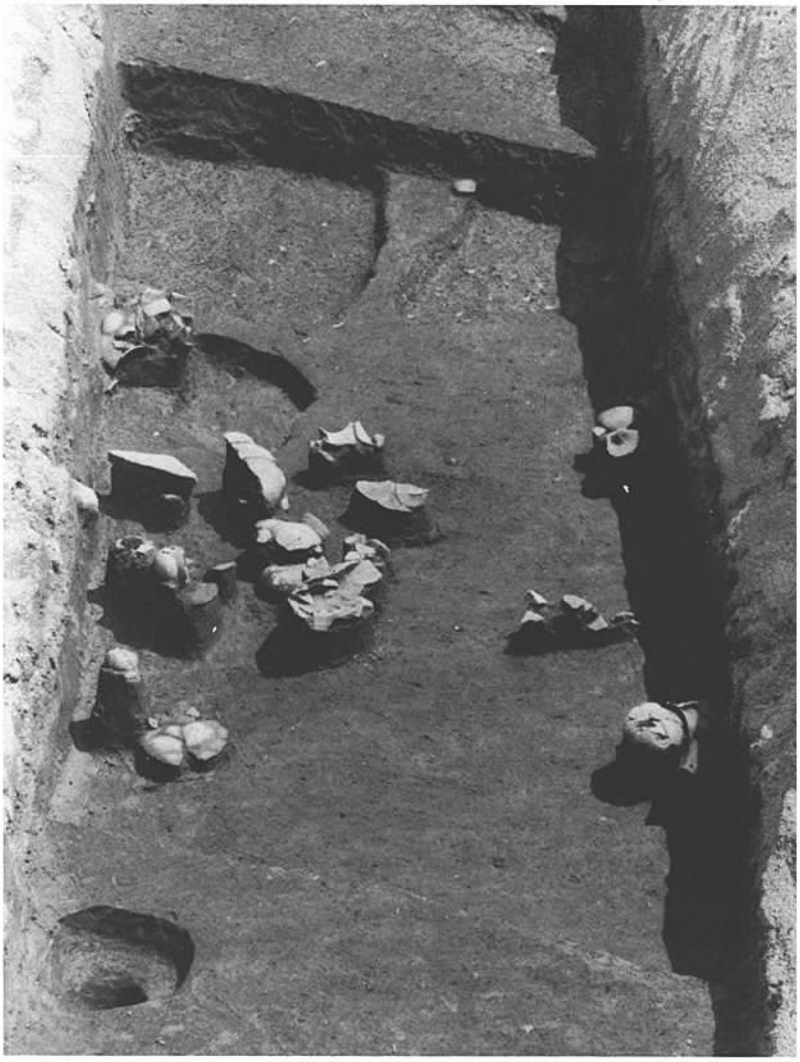
八龍II—10　22・24～26号甕棺





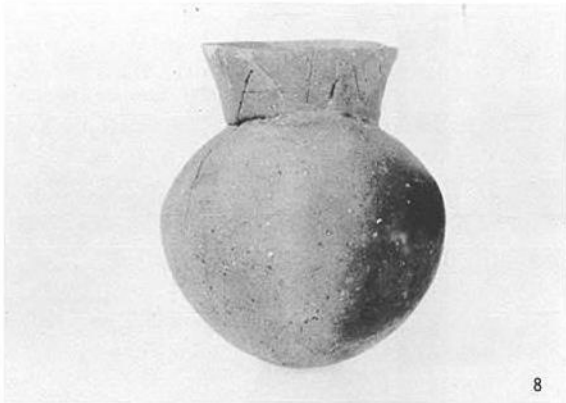
1　中川屋敷Ⅰ—12　北トレンチ全景（東から）　2　北トレンチ全景（西から）
3　2号住居跡と3号住居跡カマド（南から）

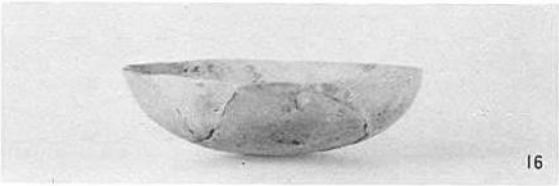
1

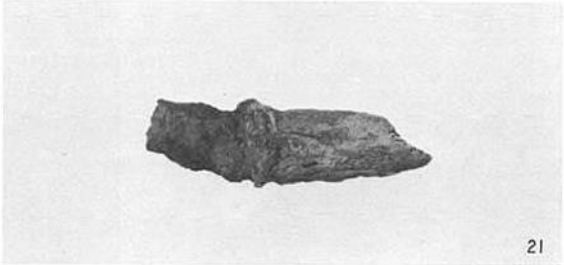


2

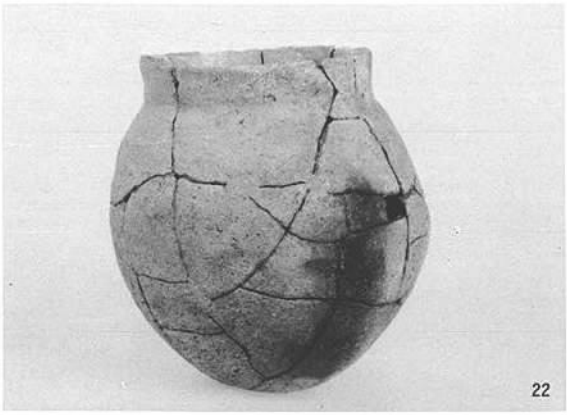
1 中川屋敷Ⅰ—2　3号住居跡カマド（北西から）　2　4号住居跡（西から）

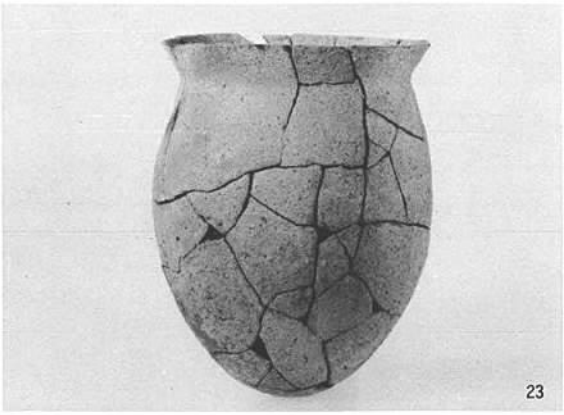


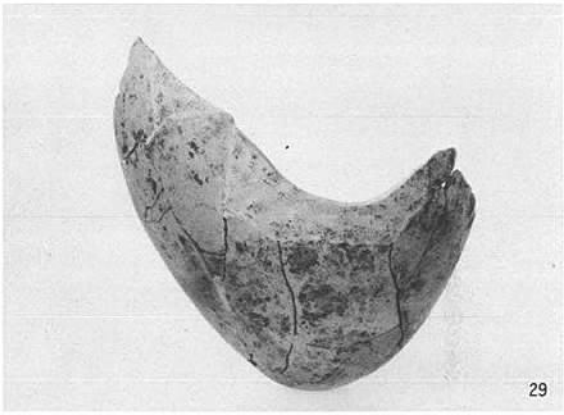


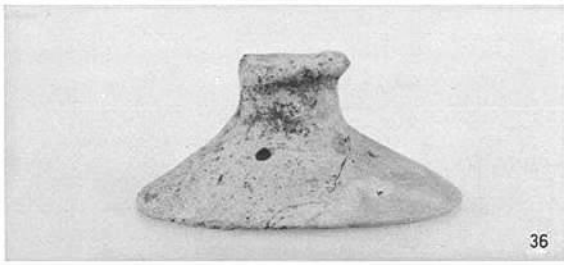


中川屋敷Ⅰ—12　2・3号住居跡出土土器、鉄器跡出土土器・鉄器

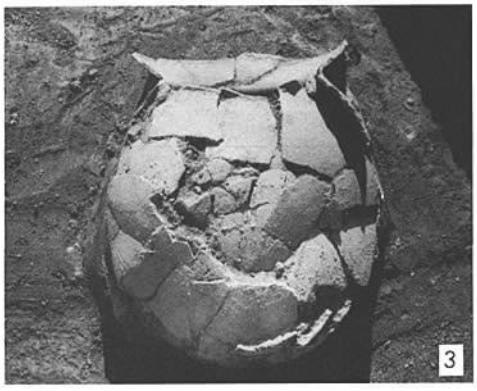


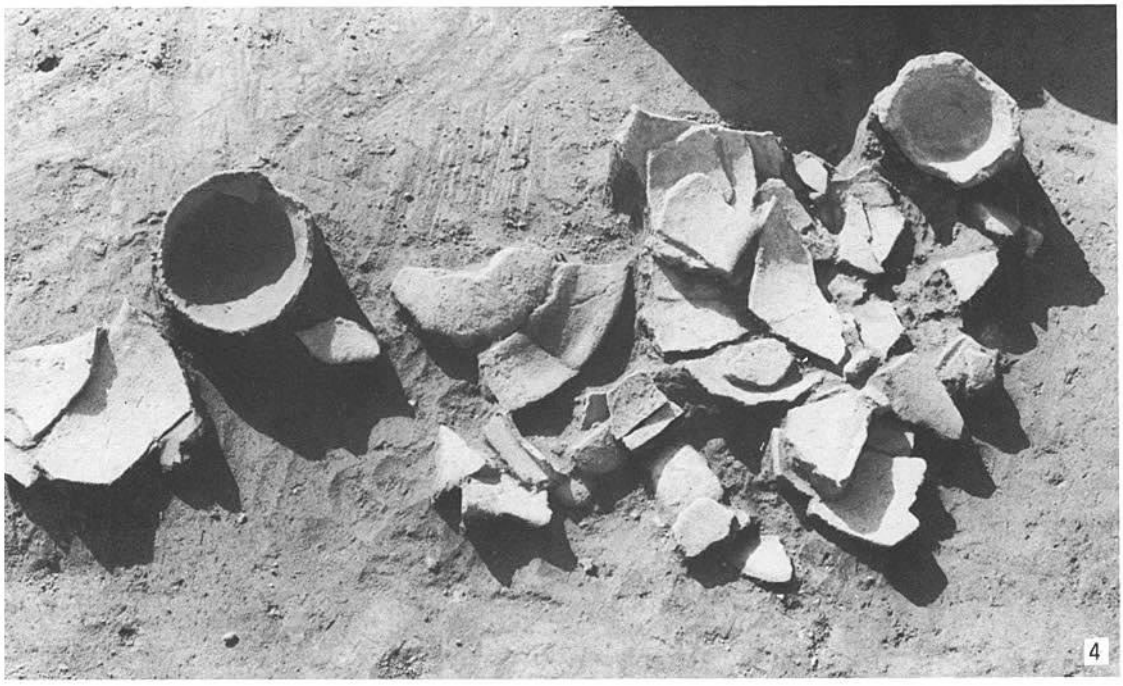






中川屋敷Ⅰ—12　4号住居跡出土土器・石器



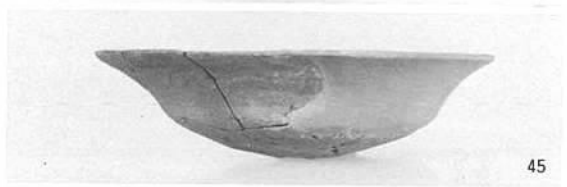


1　中川屋敷Ⅰ—12　南トンチ（東から）
2～4　6号住居跡遺物出土状況

41

42

43


45

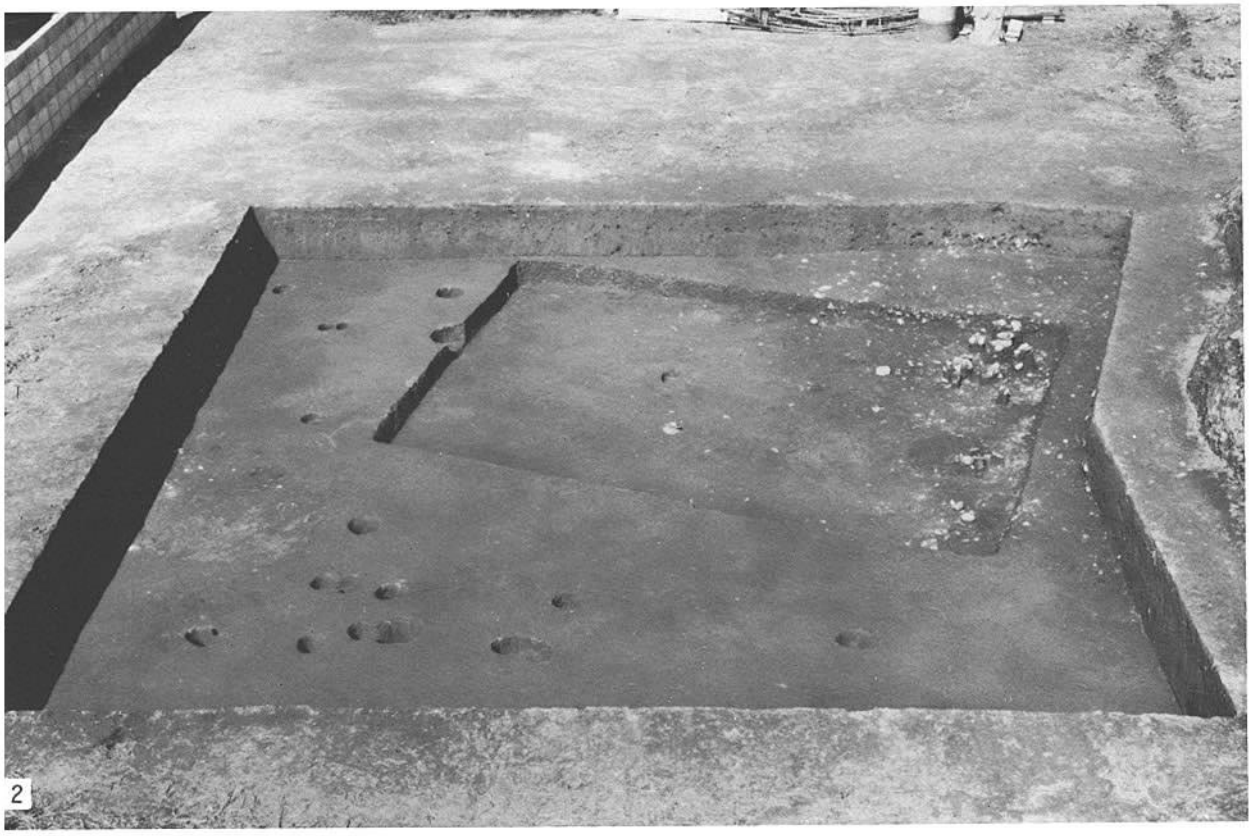
46

47

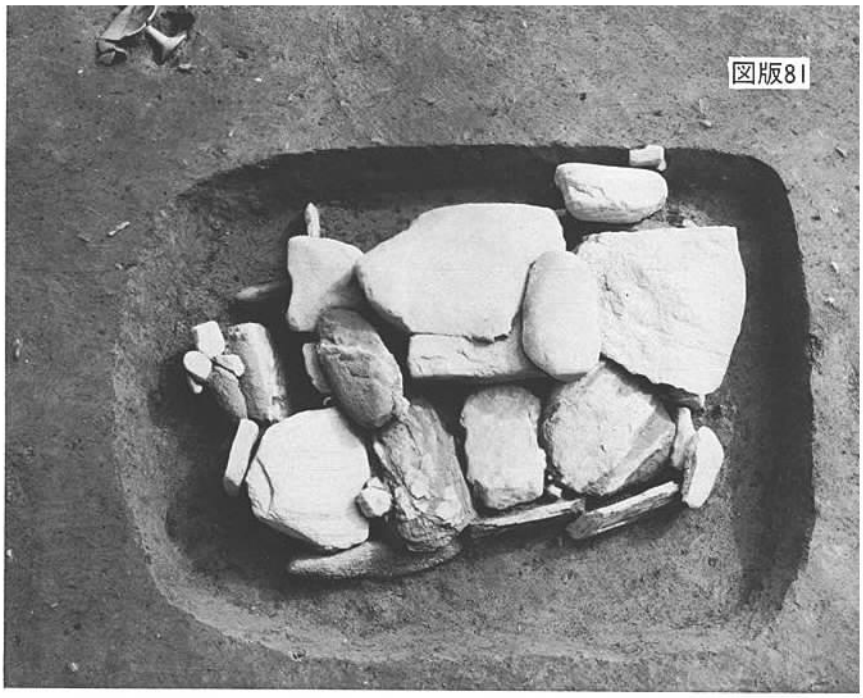
51

53

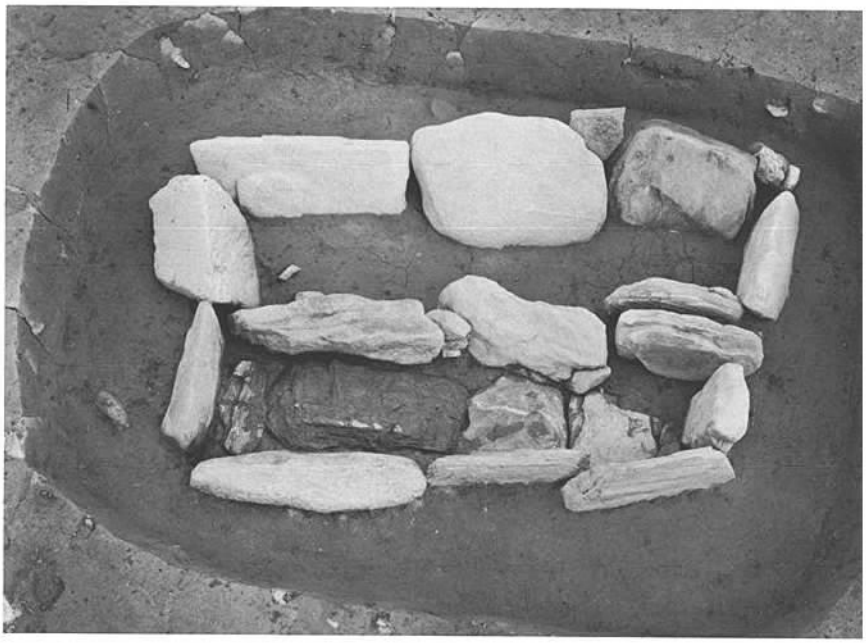
中川屋敷Ⅰ—12　6号住居跡他出土土器



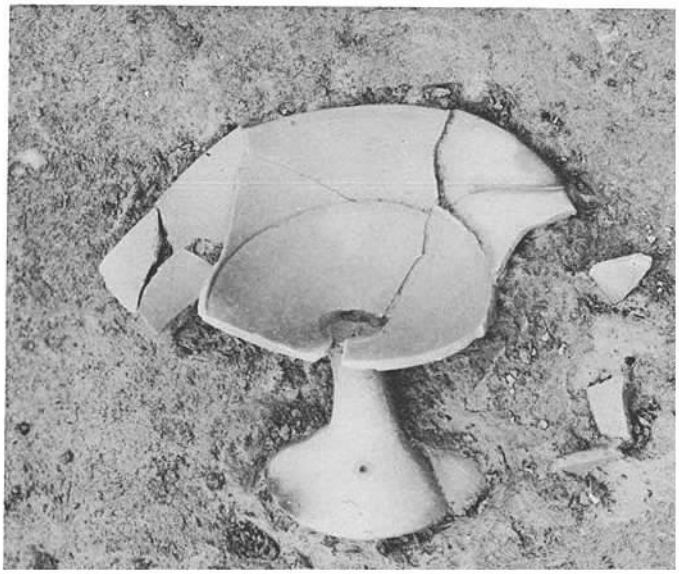
1　堺Ⅰ—2　発掘区全景（西から）
2　　Ⅰ—3　発掘区全景（南から）



1



2

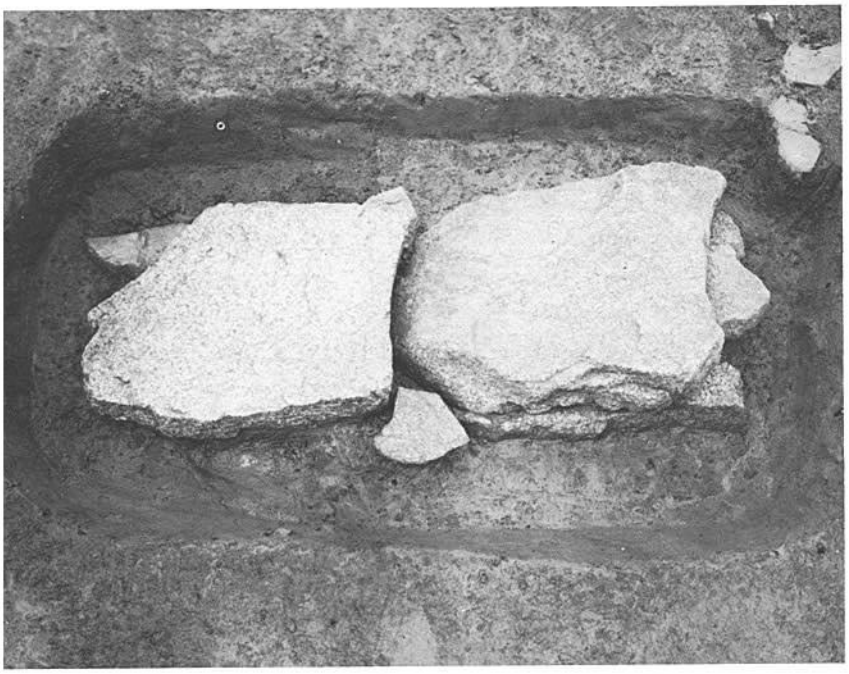


3

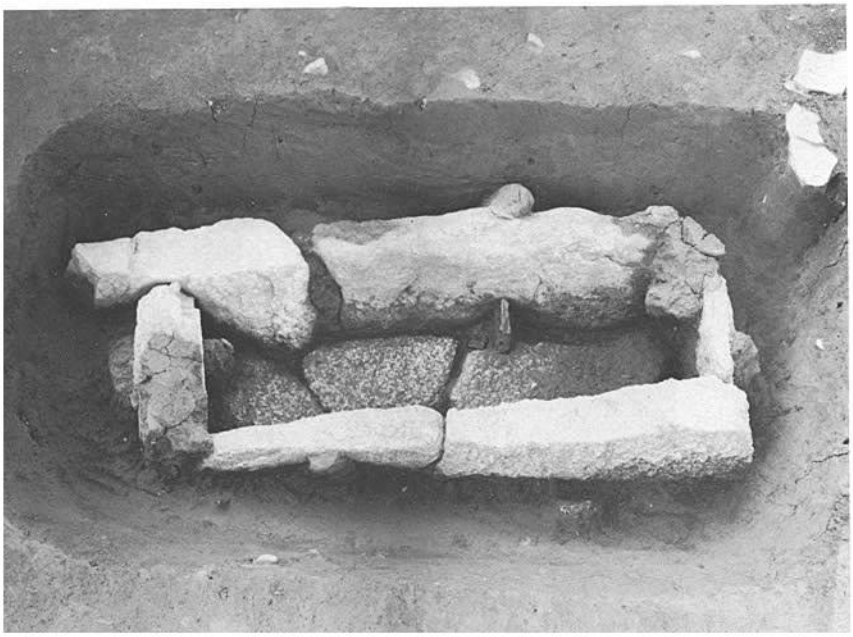
1　堺Ⅰ－2　1号石棺墓
2　1号石棺墓
3　1号石棺墓供献土器出土状態

図版82

1



2

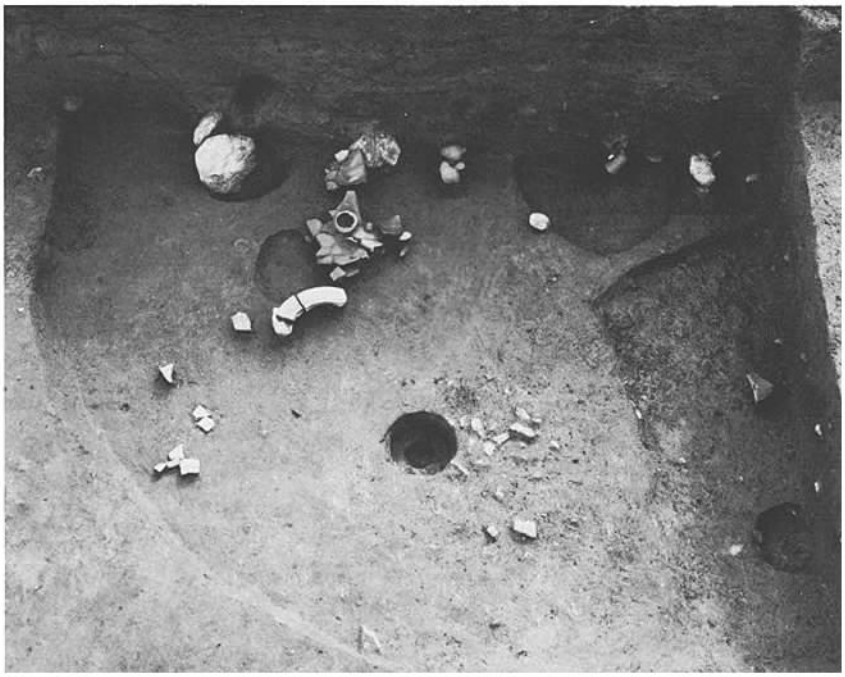


3

1　堺Ⅰ—2
　1号石棺墓供献土器
2　2号石棺墓
3　2号石棺墓

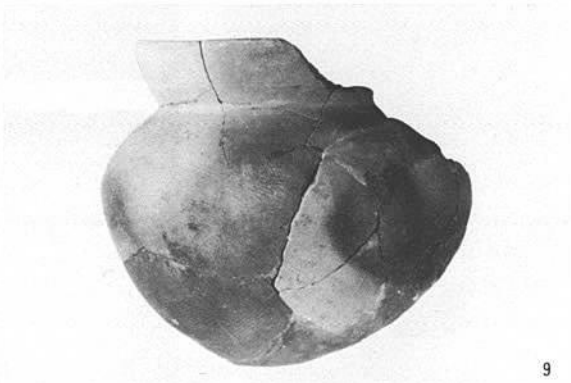
1

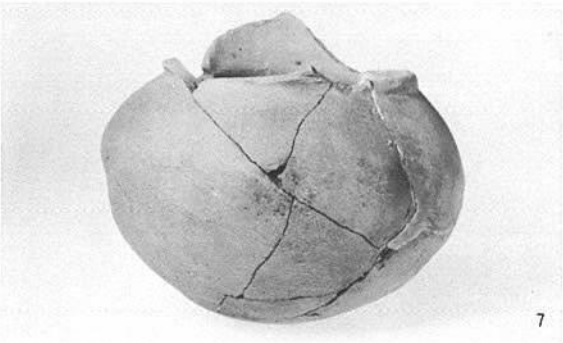
2



3

1　堺Ⅰ—3
　1号住居跡
2　Ⅰ—2　3号住居跡
3　4・5号住居跡





堺Ⅰ—2・3　1～3号住居跡出土土器

堺Ⅰ—2　3号住居跡出土土器

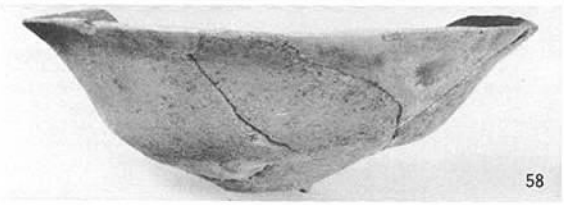
堺Ⅰ－2　4号住居跡・溝出土土器

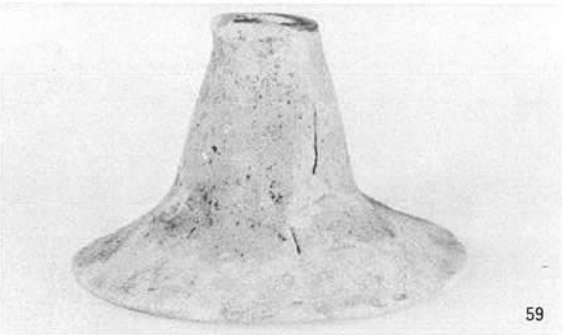
52

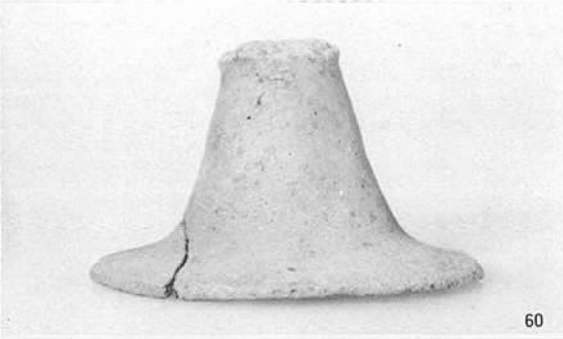
54

55

56


58


59


60

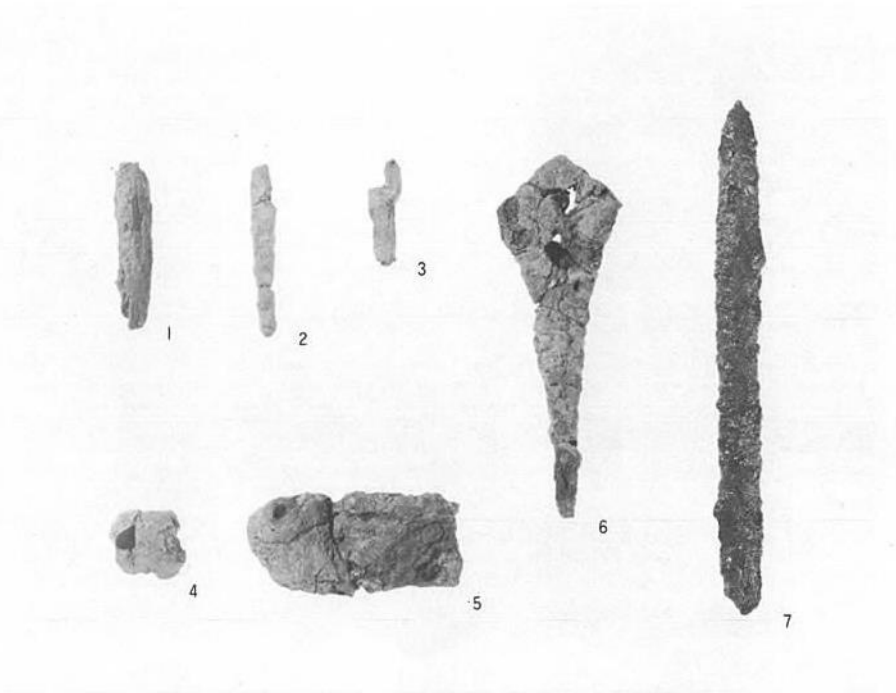
61

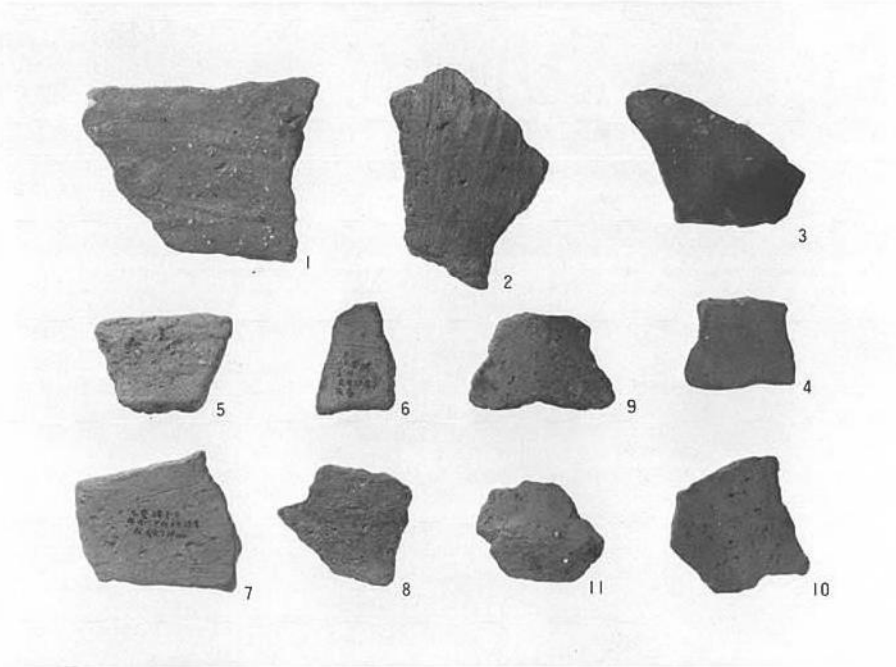
62

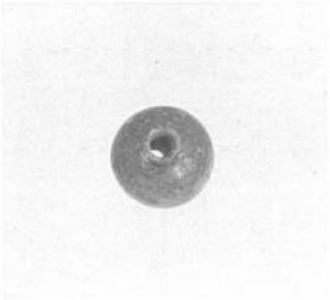
63

64

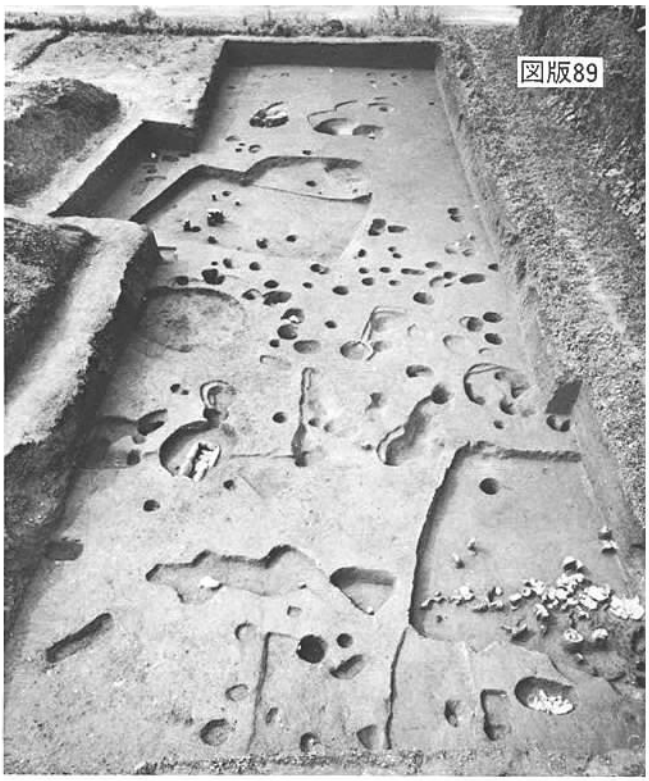
堺Ⅰ—2　溝出土土器





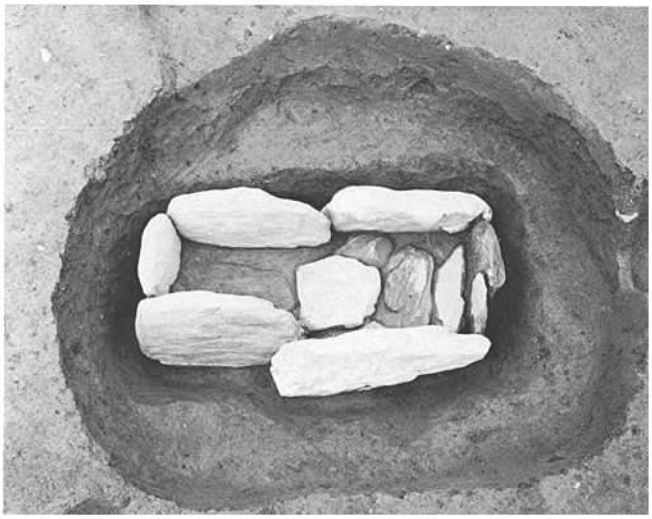


堺Ⅰ—2・3 出土鉄器・縄文土器・玉



1

2

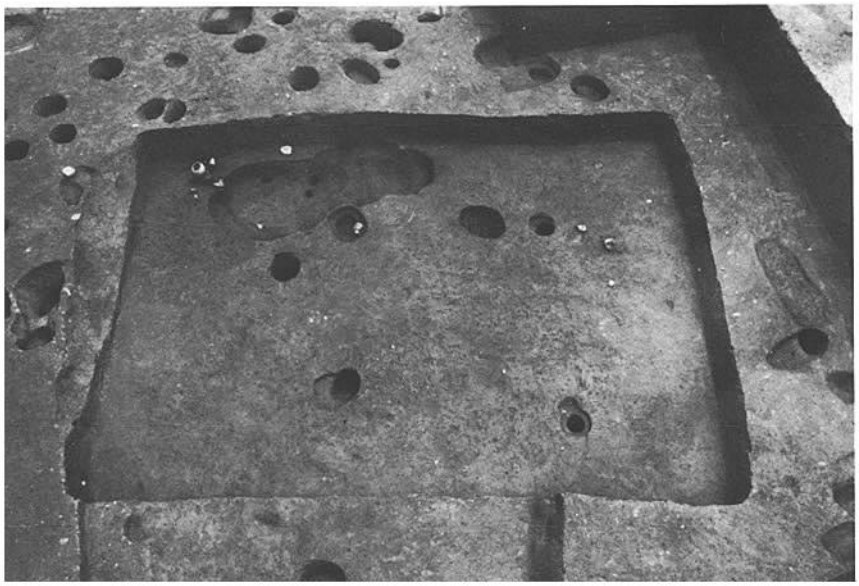


3

1　堺Ⅰ—4発掘区全景（南から）
2　発掘区3層（北から）
3　3号石棺墓

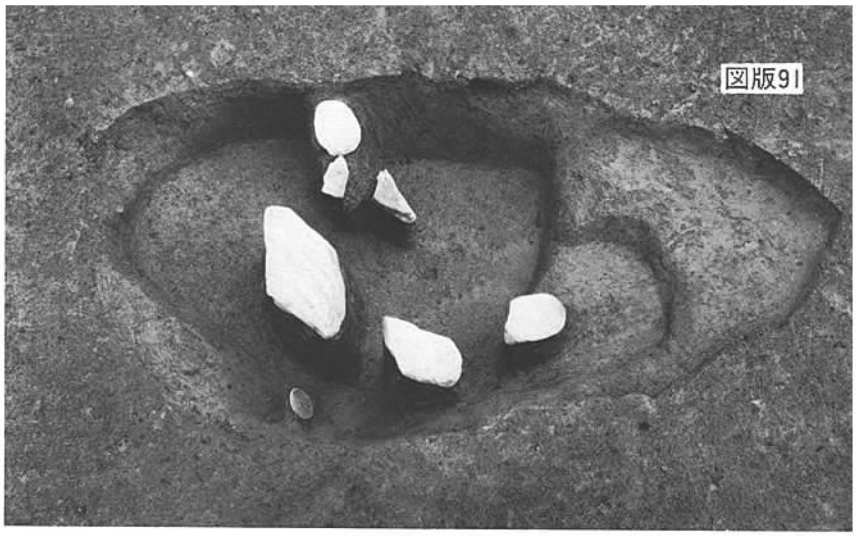
1

2



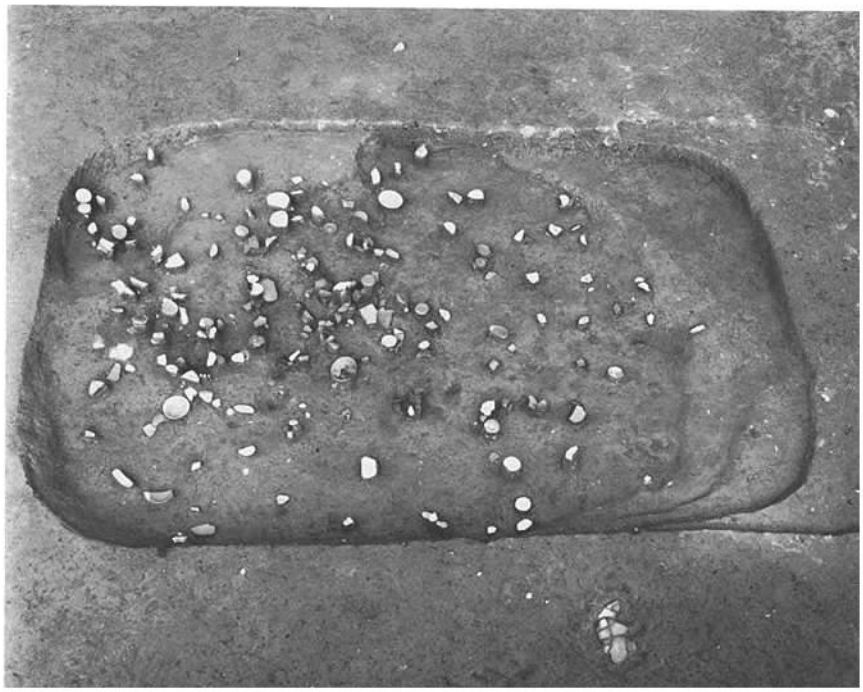
3

1　堺Ⅰ－4　6号住居跡
2　6号住居跡
3　7号住居跡



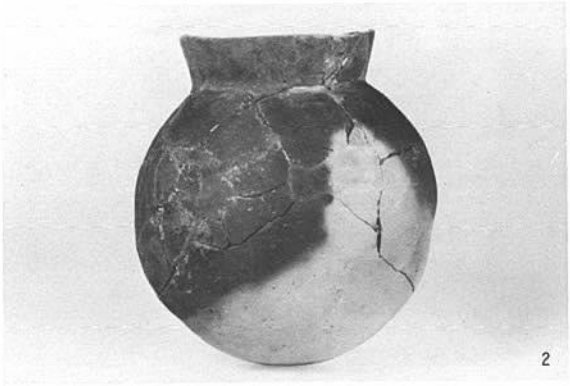
1

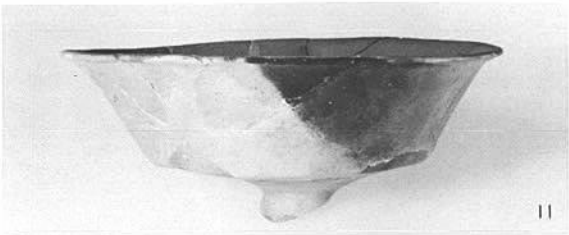
2



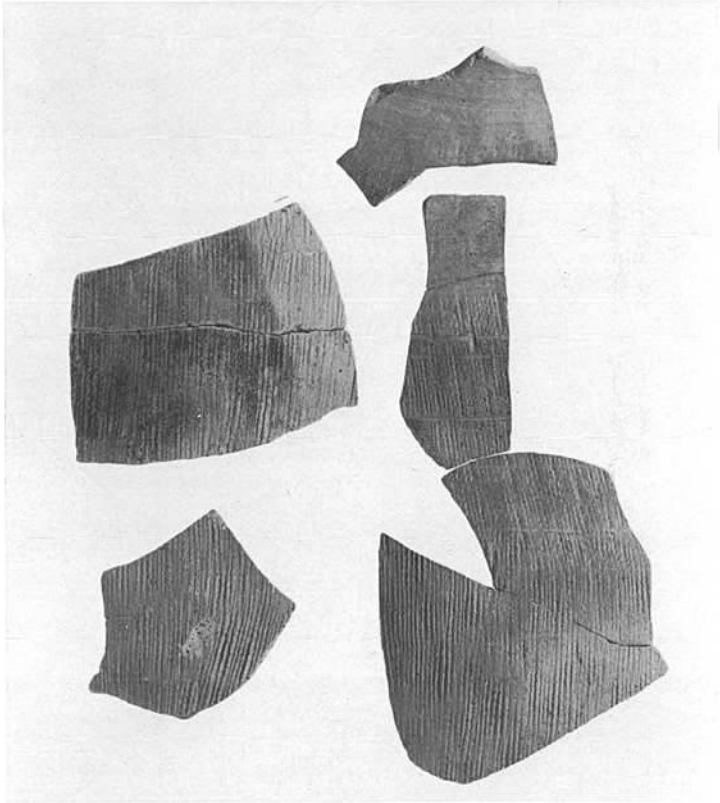
3

1　堺Ⅰ—4
　　楕円形ピット
2　円形竪穴
3　長方形竪穴

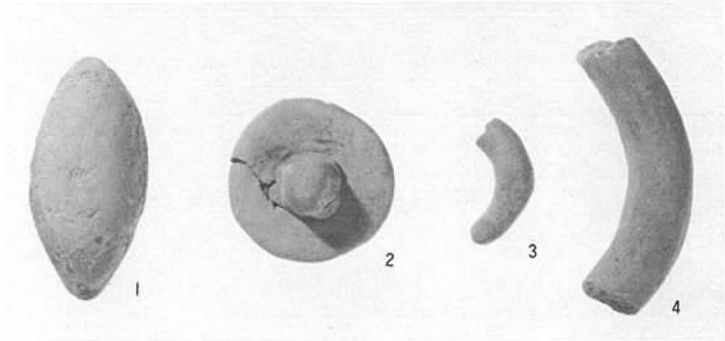




堺Ⅰ－4　6号住居跡出土土器



1



2

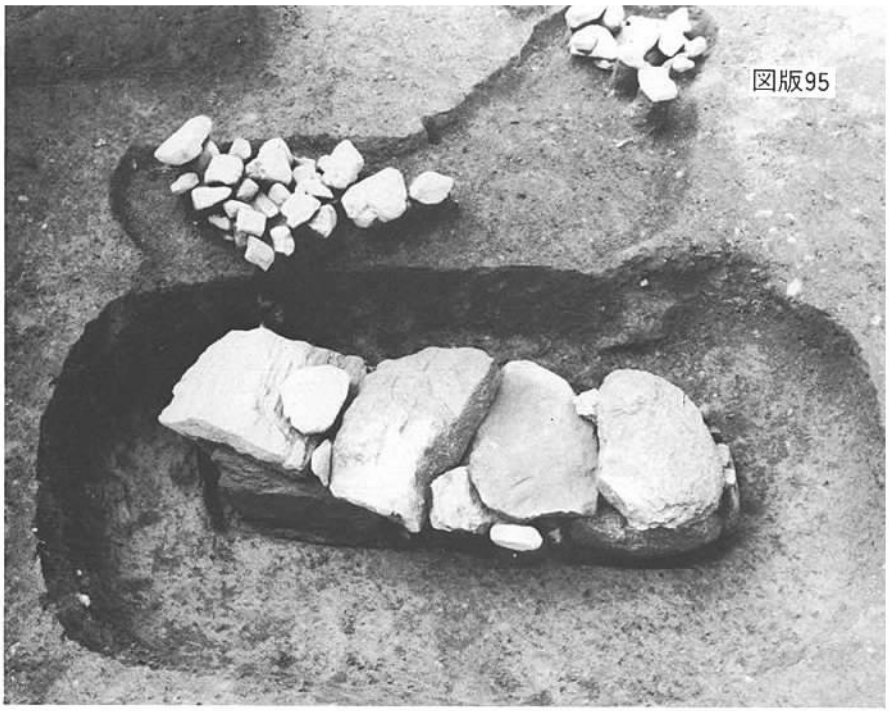
1　堺Ⅰ—4　6・7号住居跡出土土器　2　Ⅰ—3・4　出土土製品

図版94

1

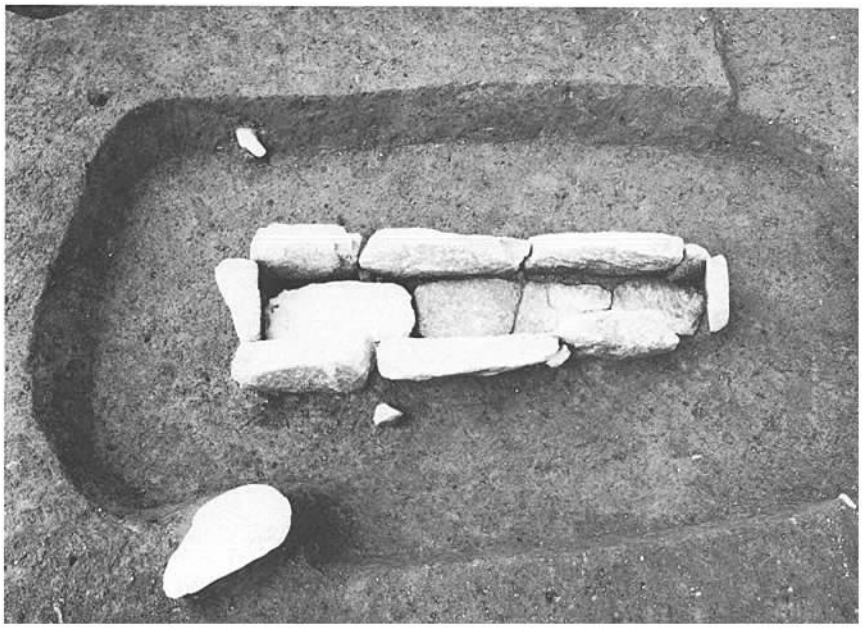
1　堺Ⅰ—6・7　発掘区全景(西から)
2　Ⅰ—6・7　発掘区全景(東から)

2



1

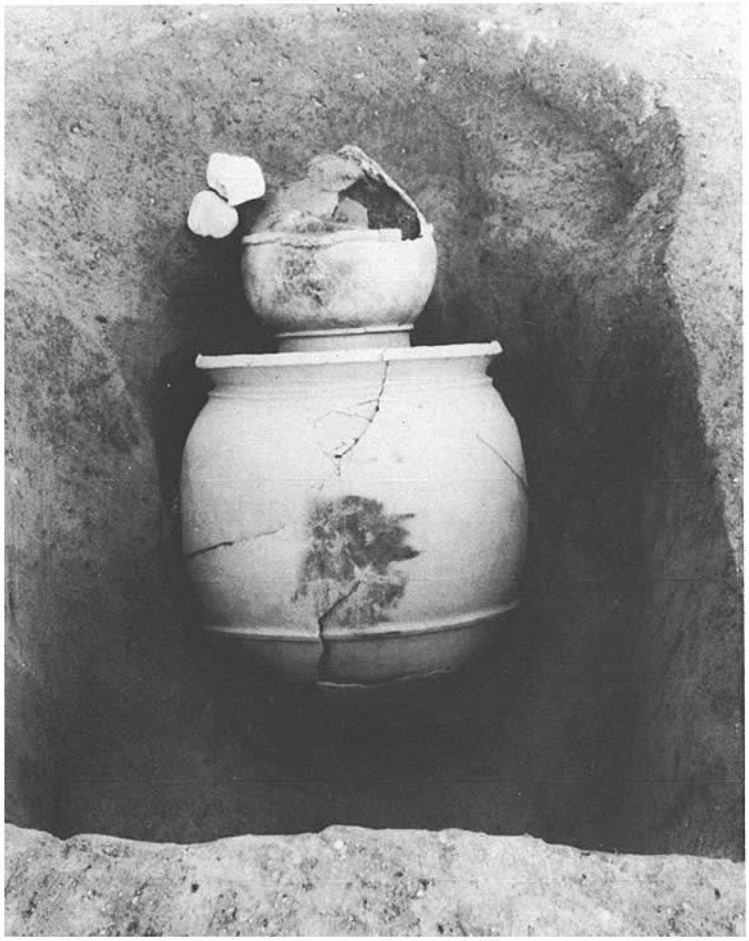
2



3

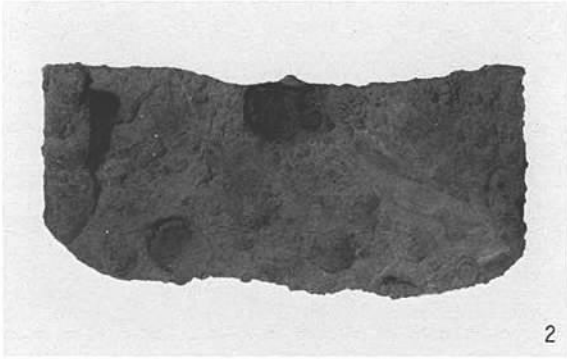
1　堺Ⅰ—6
　1・2号集石と
　1号石棺墓
2　1号石棺墓
3　2号石棺墓

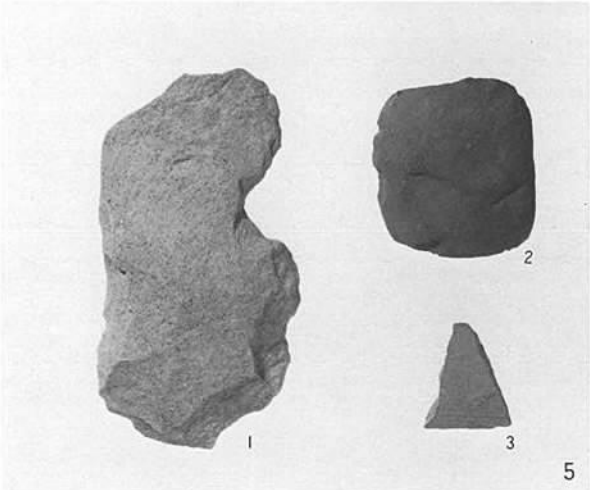
1



2

1　堺Ⅰ－6　1号甕棺墓
2　1号甕棺墓





1　堺Ⅰ－6　1号甕棺
2　1号甕棺供献鉄器
3　1号甕棺供献土器
4　Ⅰ－6　出土土器
5　Ⅰ－6　出土石器

図版98

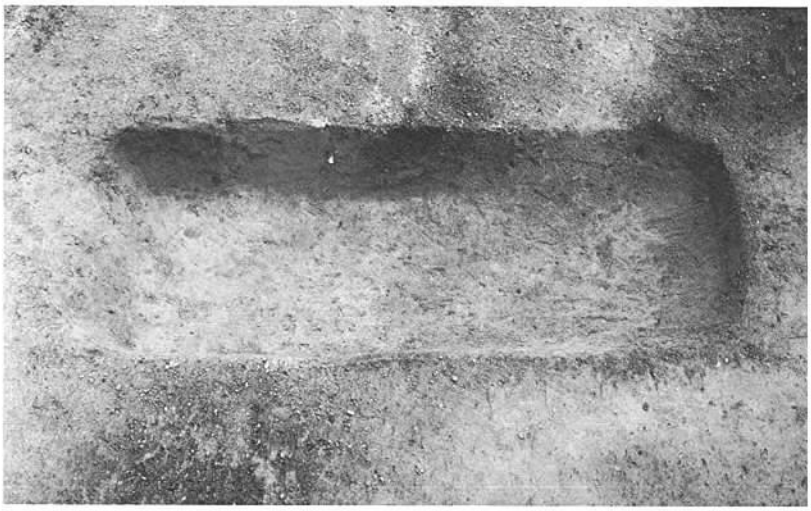
1

2

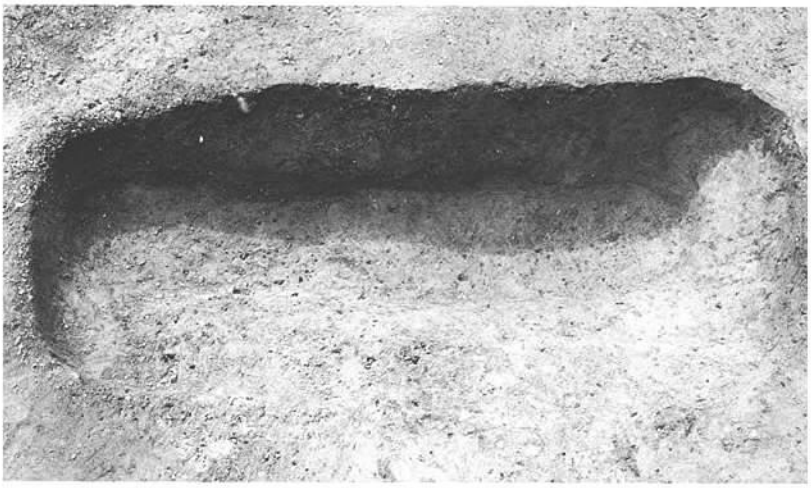
3

1　堺Ⅰ—13　2号甕棺墓
2　2号甕棺墓
3　2号甕棺下甕

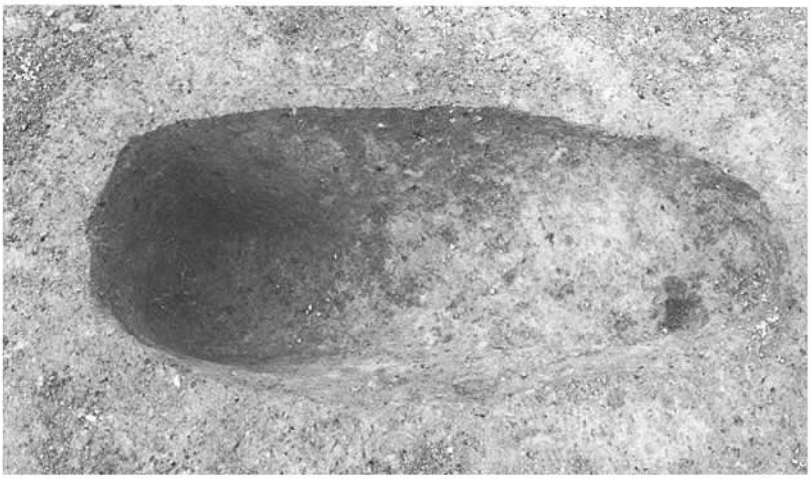
1



2

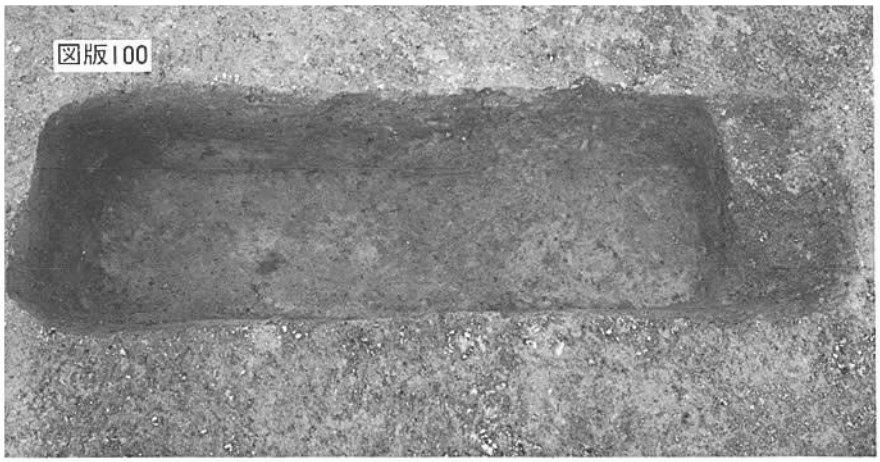


3



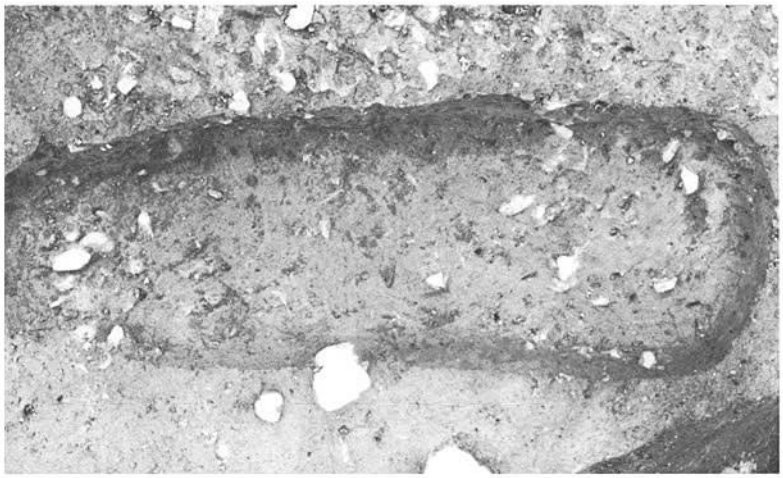
4

1　堺II—30～32
　発掘区南半（西から）
2　1号土壙墓
3　3号土壙墓
4　4号土壙墓



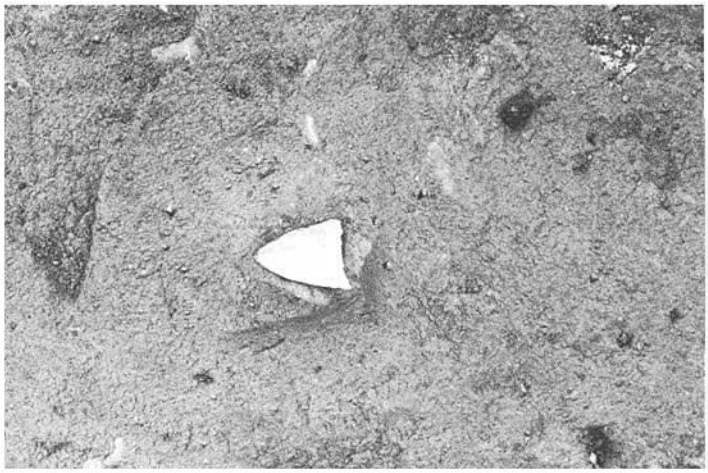
1

2

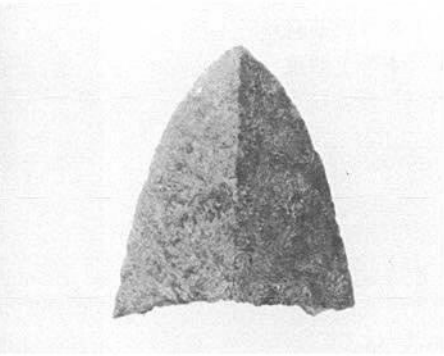


3

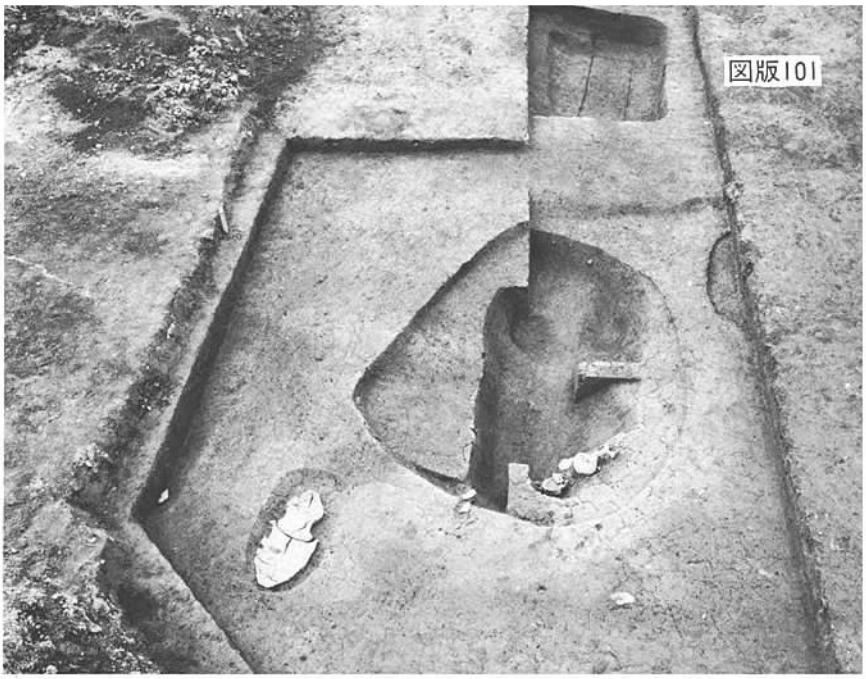
1　堺II—30～32　5号土壙墓
2　9号土壙墓
3　10号土壙墓
4　石剣出土状態
5　磨製石剣切先



4



5



1

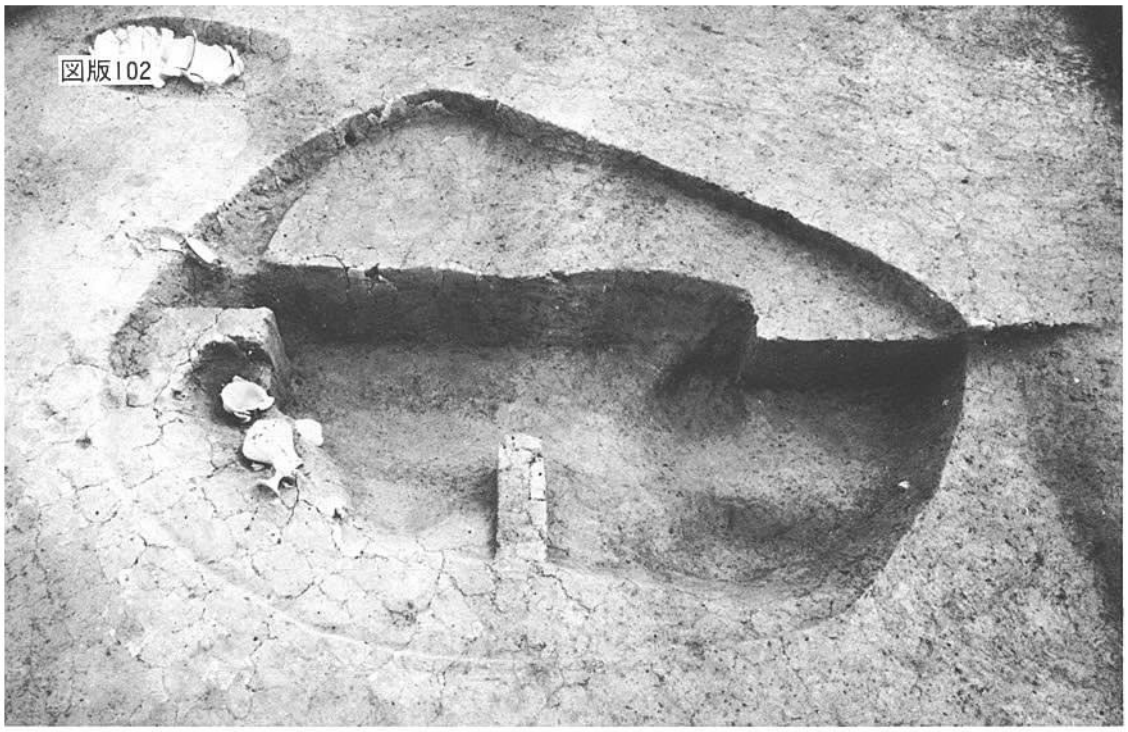
2

3

1　堺II—30～32
　1・2号木棺墓

2　1号木棺墓

3　1号木棺墓横断土層図



1

2

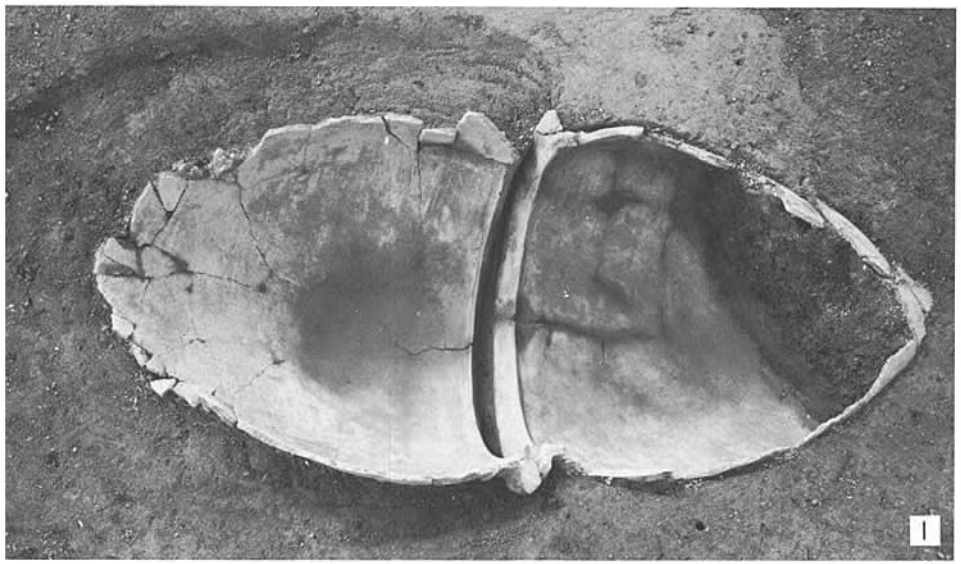
1

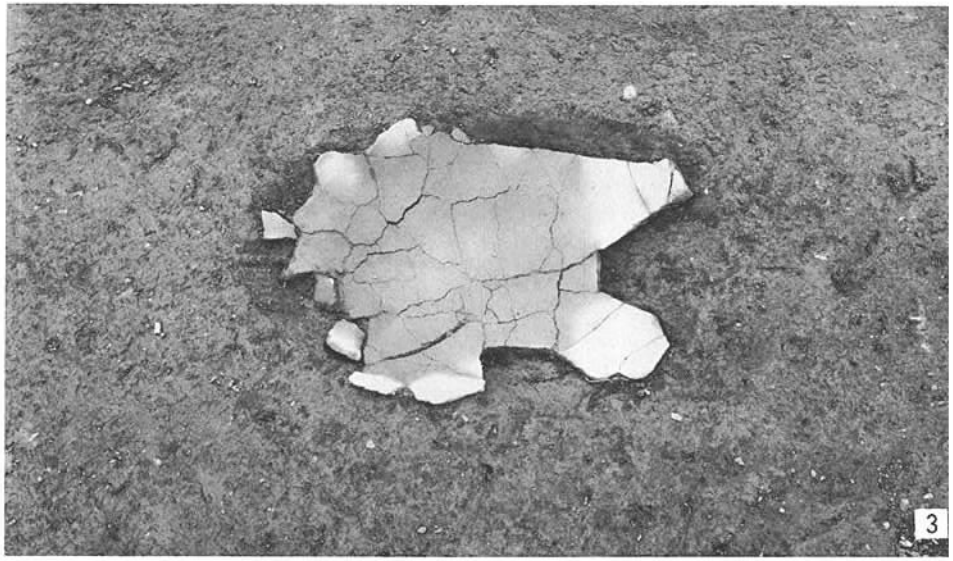
2

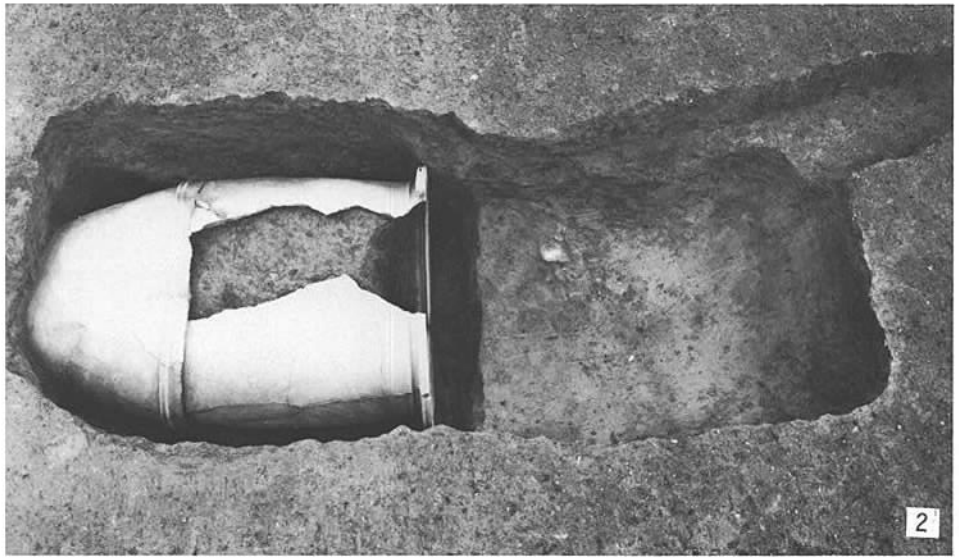
1　堺Ⅱ—30～32　2号木棺墓
2　2号木棺墓土器出土状態
3　2号木棺墓出土土器

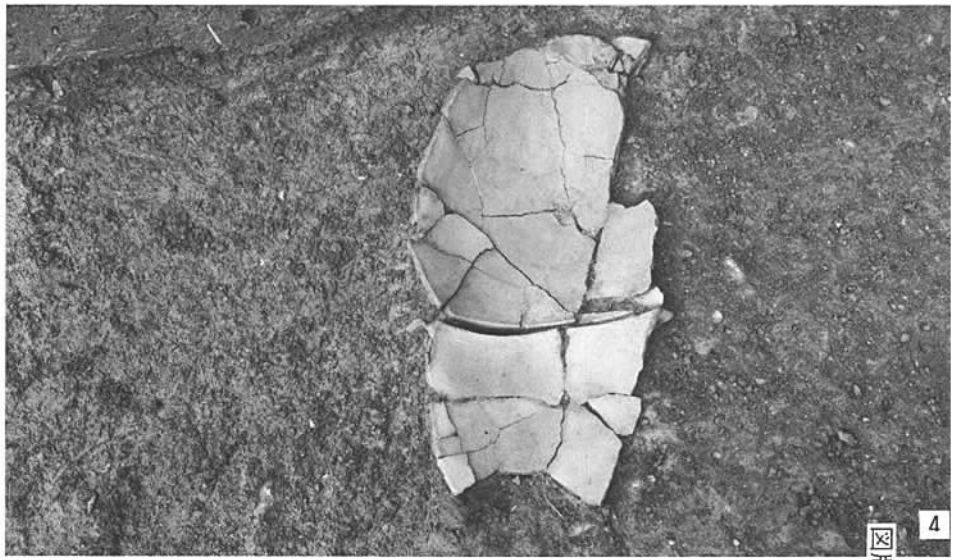
3

3





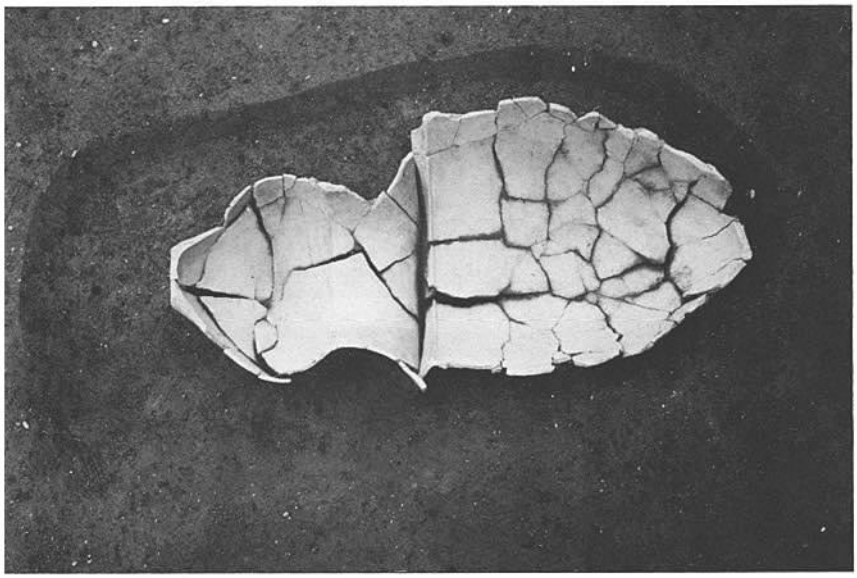




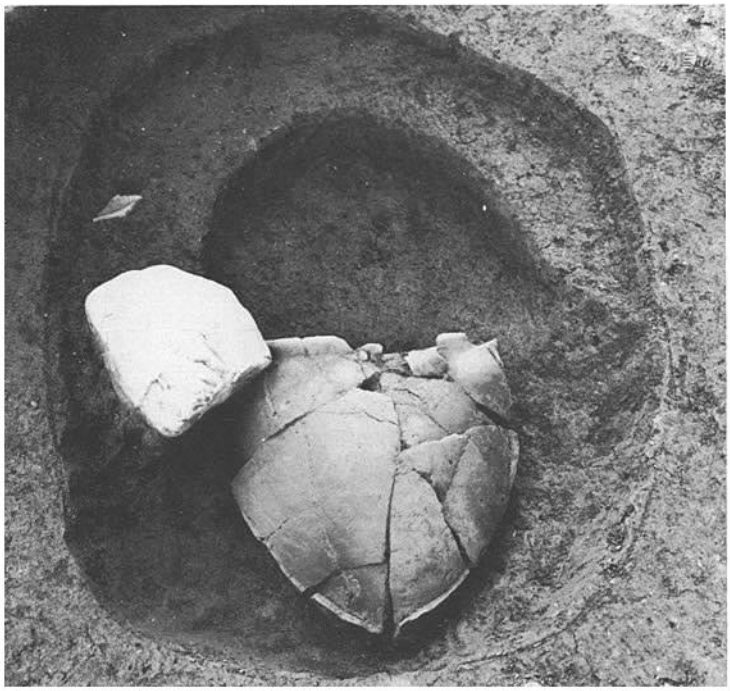
1　堺II－30～32　1号甕棺墓　　2　2号甕棺墓　　3　3号甕棺墓　　4　4号甕棺墓

図版104

1



2

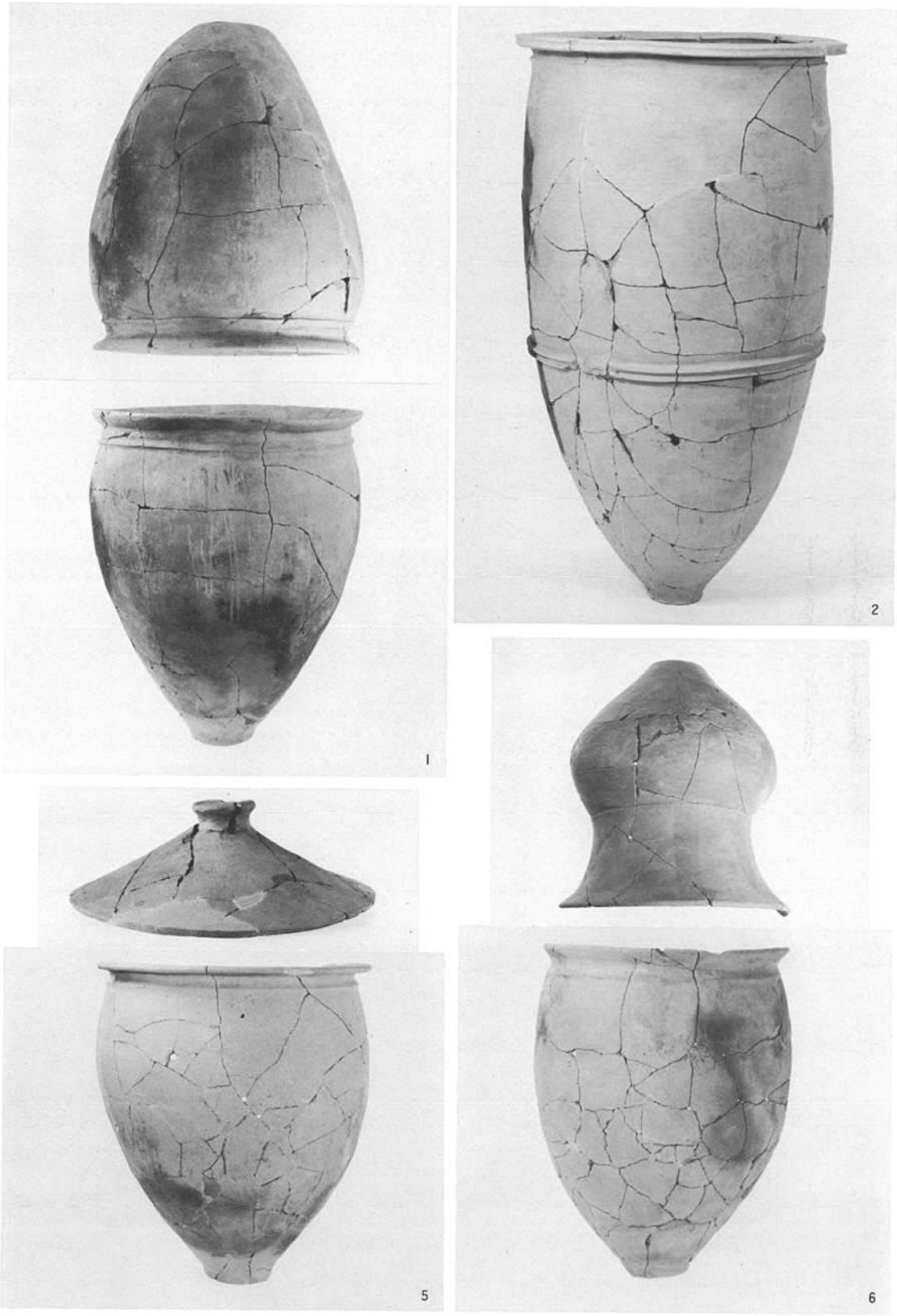


3

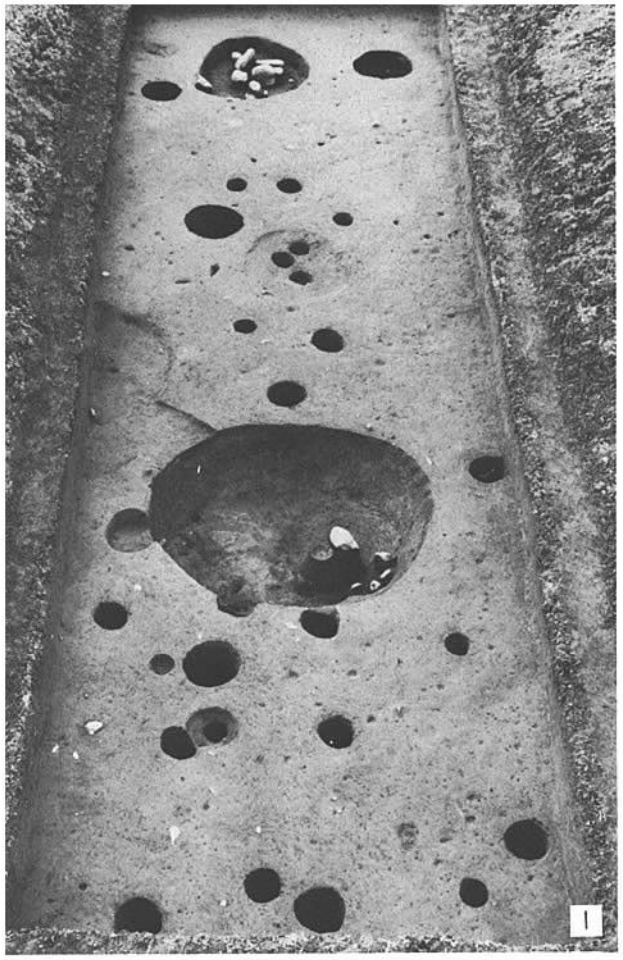
1　堺II—30～32　5号甕棺墓

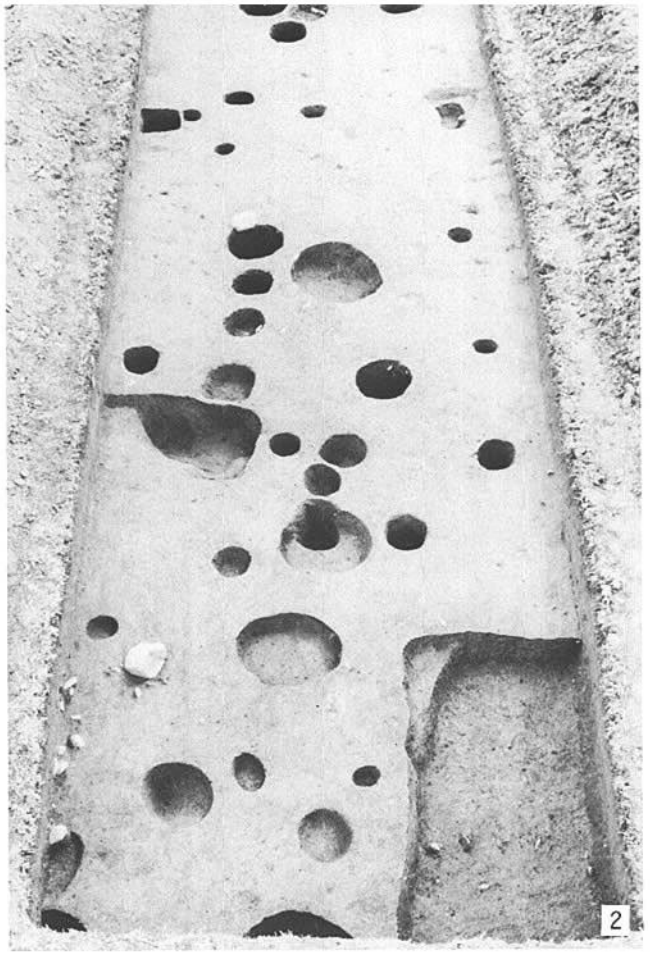
2　6号甕棺墓

3　II—27　甕棺墓



堺II—30～32　1・2・5・6号甕棺





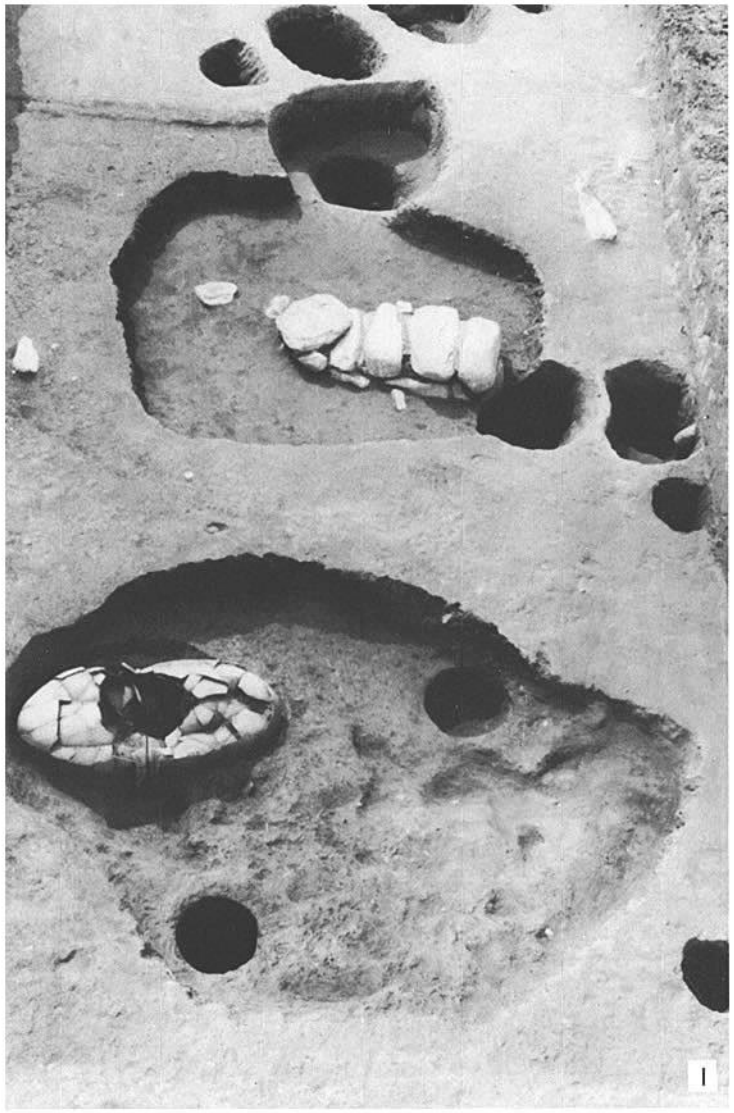
1　上覚Ⅰ—1　トレンチ　　2　Ⅰ—2　トレンチ　　3　Ⅰ—6　トレンチ

1

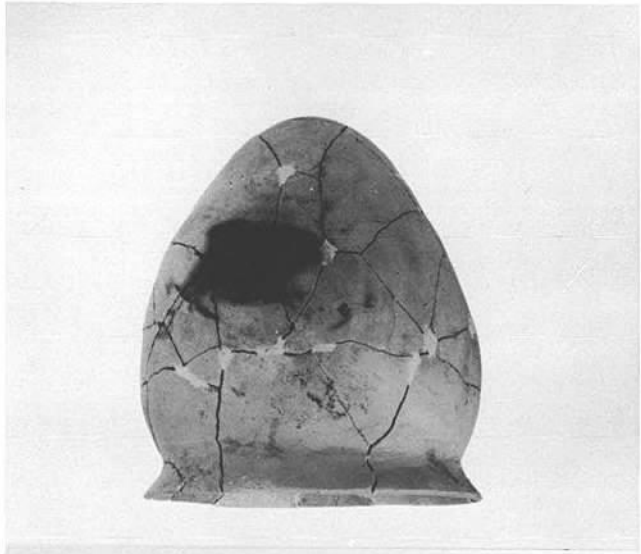
2

3

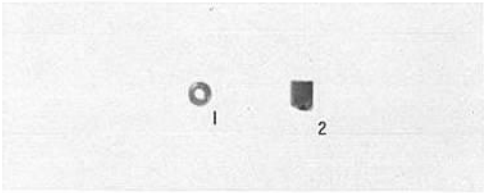
1　上覚Ⅰ—Ⅰ　P1
2　Ⅰ—6　甕棺墓
3　Ⅰ—6　石棺墓



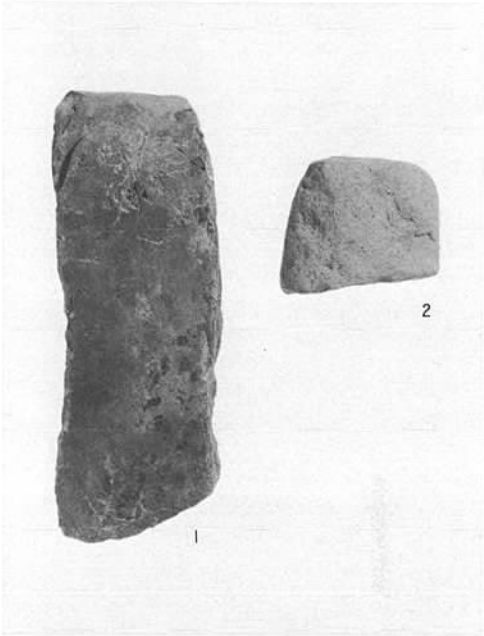
1　上覚Ⅰ－6トレンチの墓地　2　Ⅰ－6bトレンチ　3　Ⅰ－6bトレンチ石棺墓

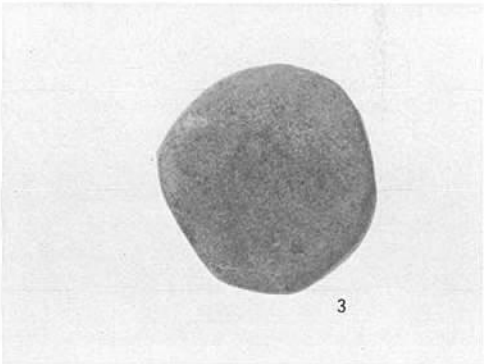


1

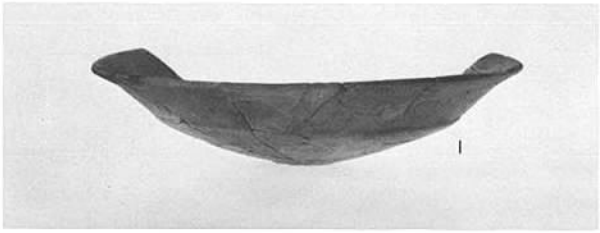


2



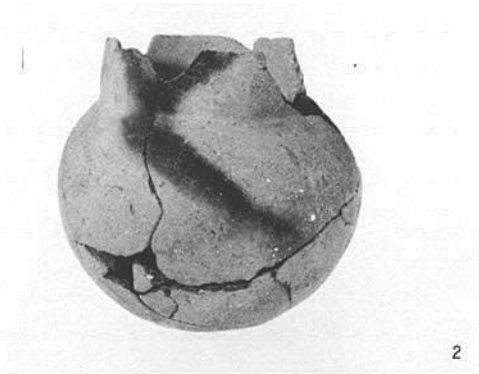


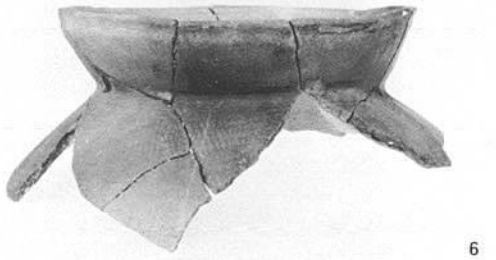
3

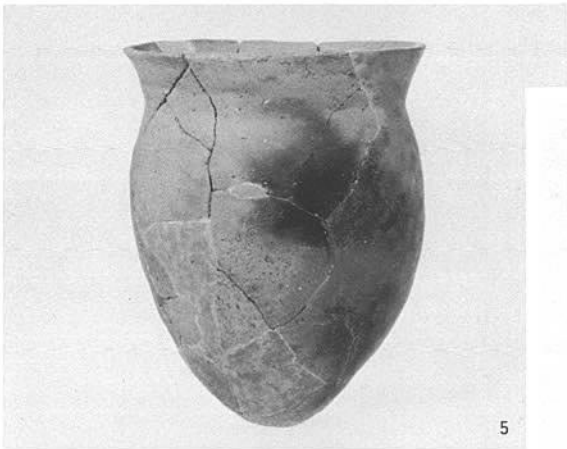


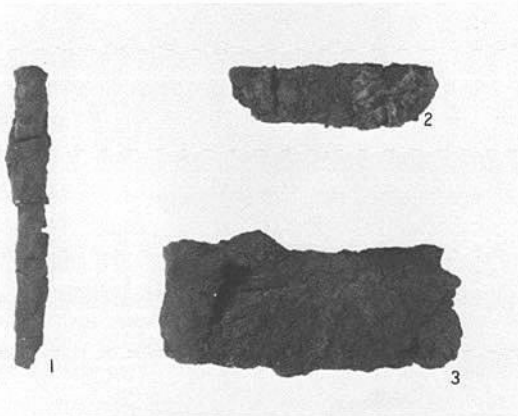
4

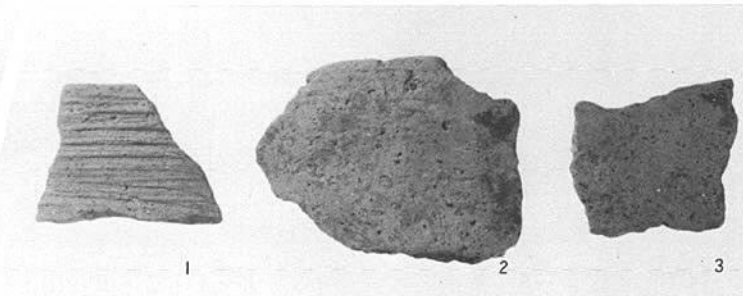
1　上覚Ⅰ－6　甕棺
2　Ⅰ－6　甕棺内出土玉類
3　Ⅰ－1・2・6　出土石器
4　Ⅰ－6b　出土土器





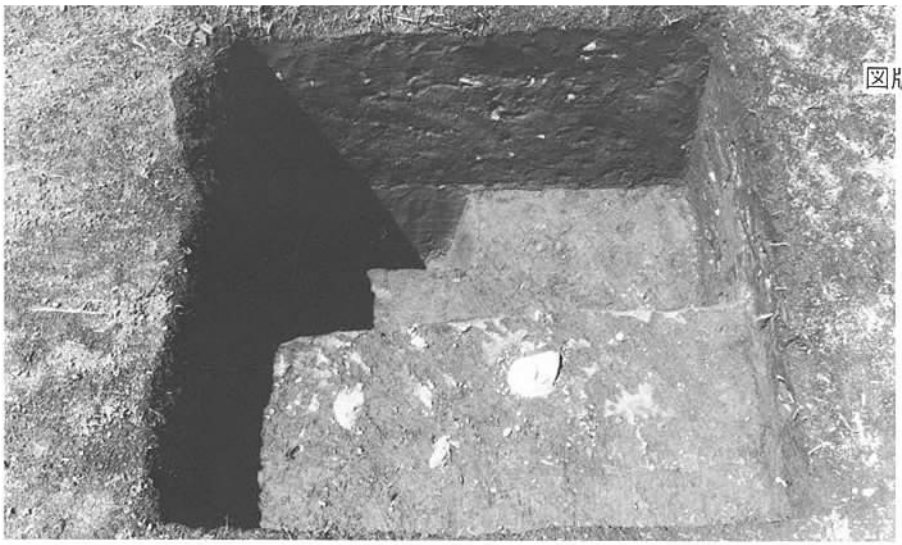






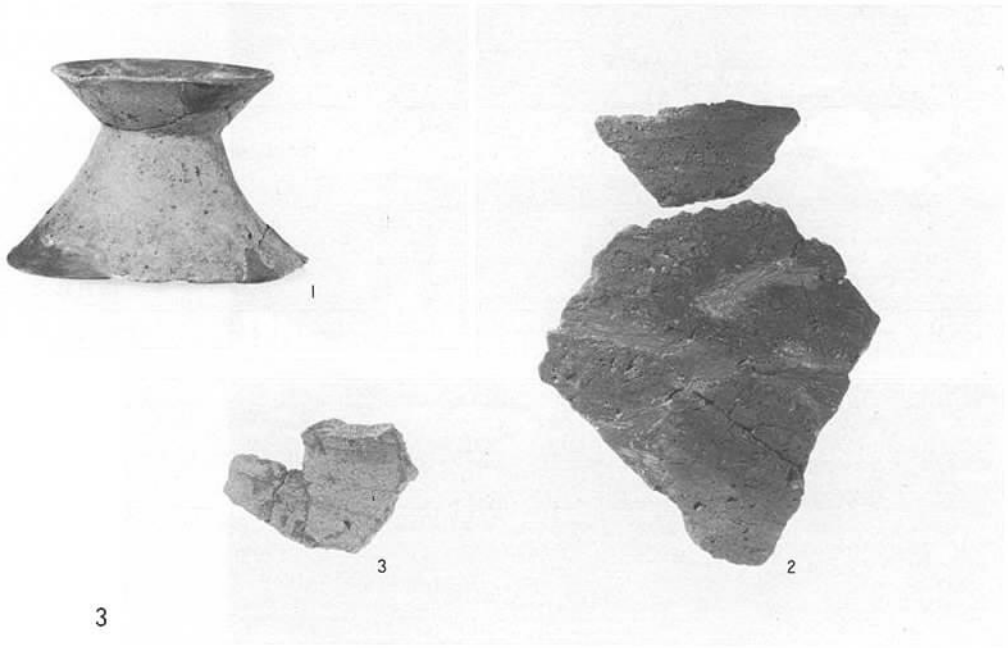
上覚Ⅰ—9　2号住居跡出土土器・

1

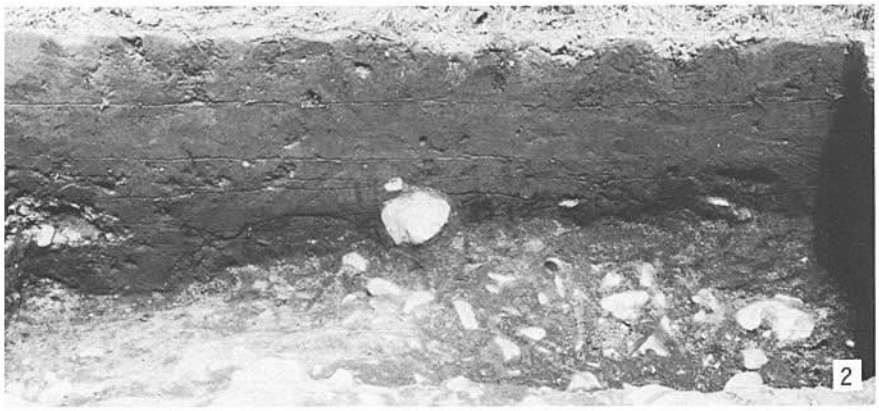


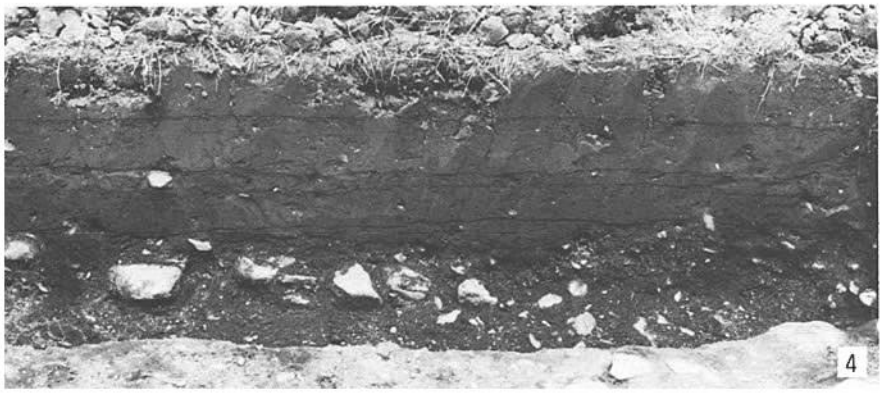
2

3



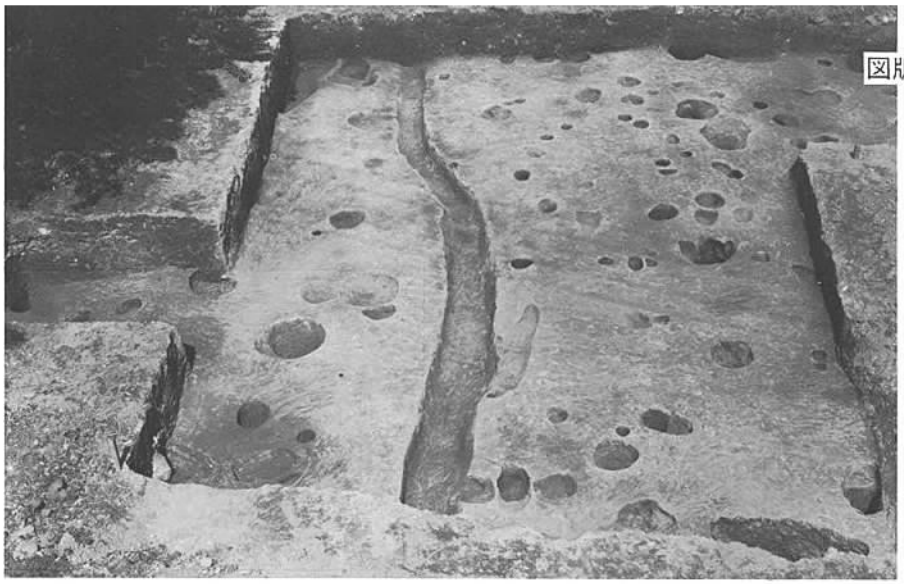
1　ヤリミゾI—2　W377トレンチ　2　I—2　W383トレンチ
3　I—2・3，II—6　出土土器





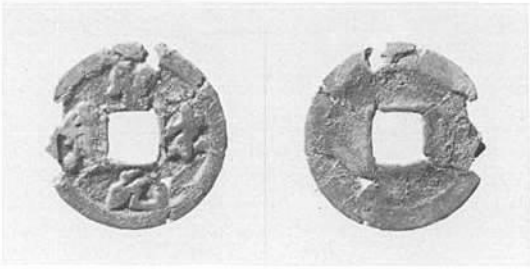
1　井原ヤリミゾ南端調査区
　　全景（南から）
2　南トレンチ（東壁）
3　中トレンチ（東壁）
4　北トレンチ（東壁）

1

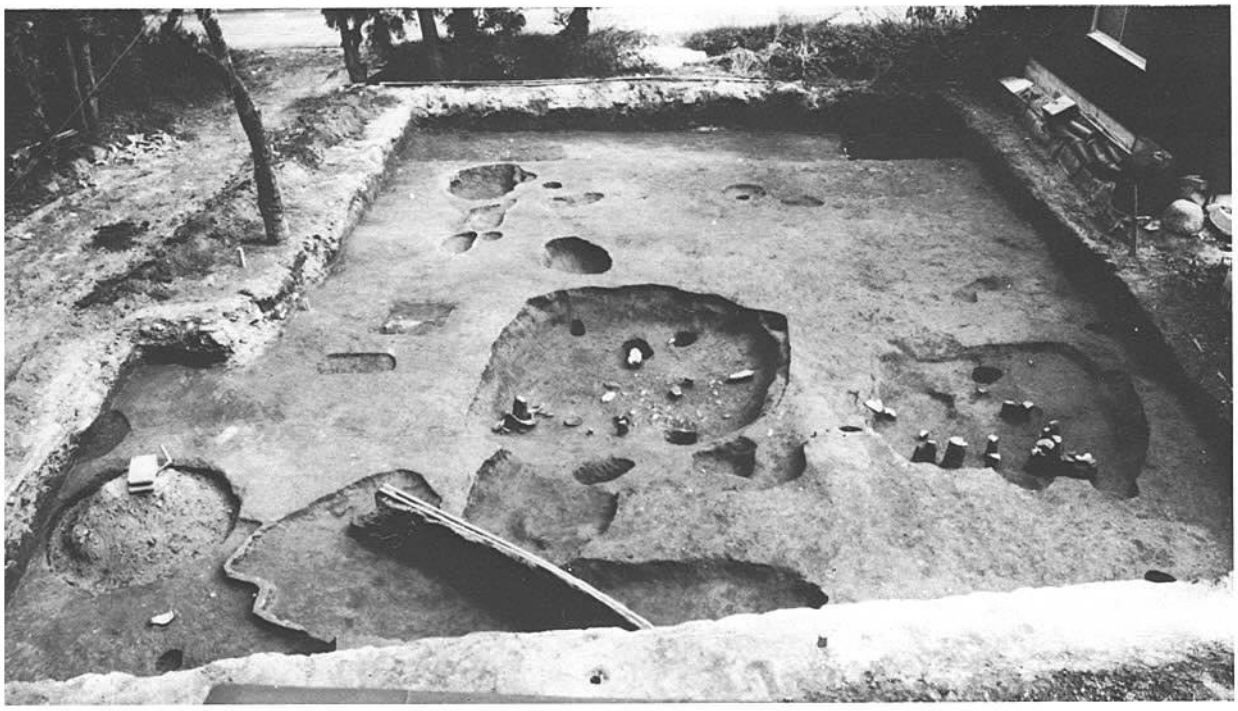


2

3



1　南小路Ⅰ—3　調査区全景（西から）　2　調査区東部（南から）　3　Ⅰ—3 出土古銭

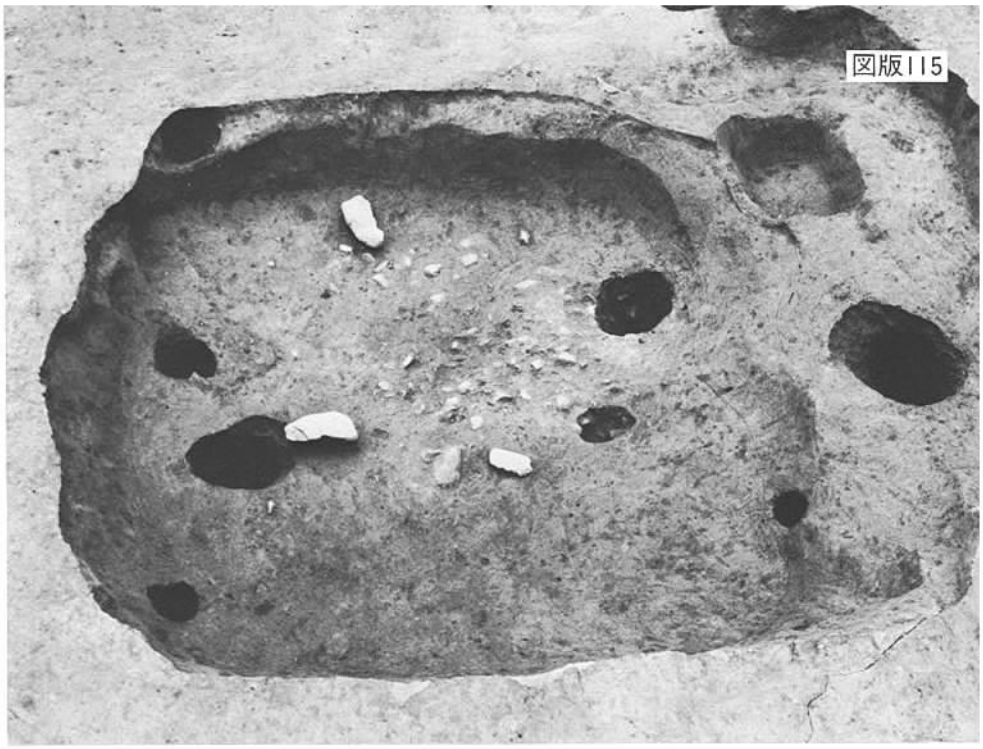


1

2

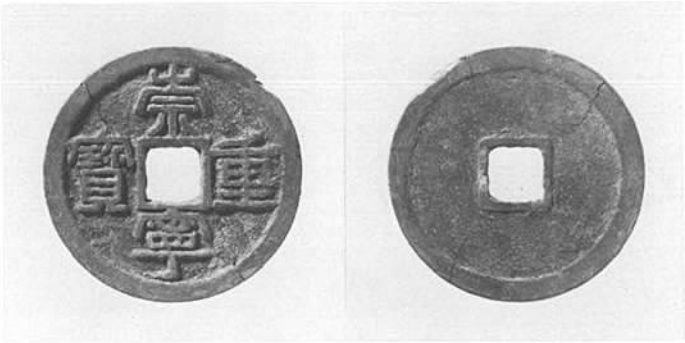
1　南小路Ⅰ—5　調査区全景（西から）　　2　1・2・4号竪穴

1

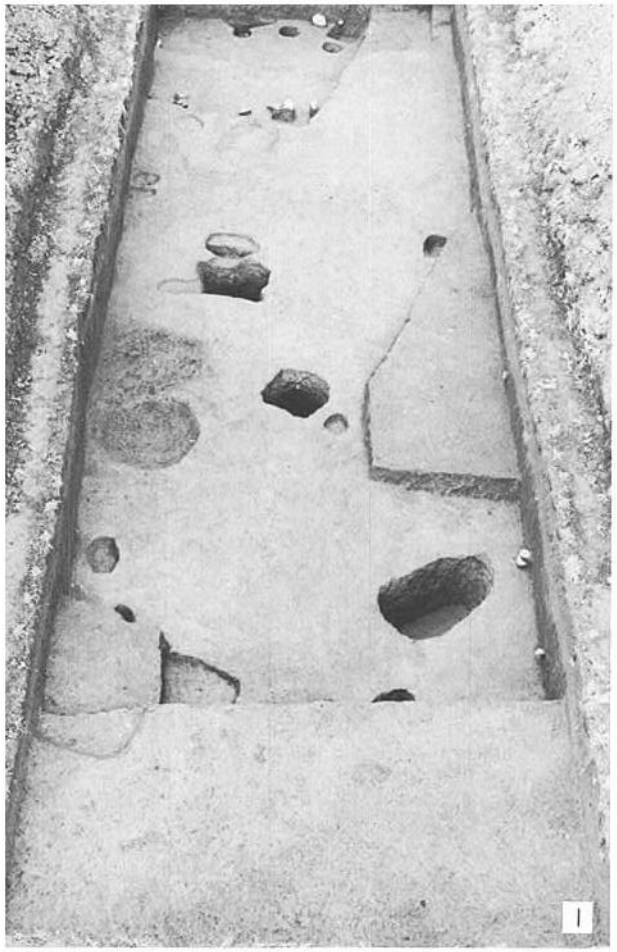


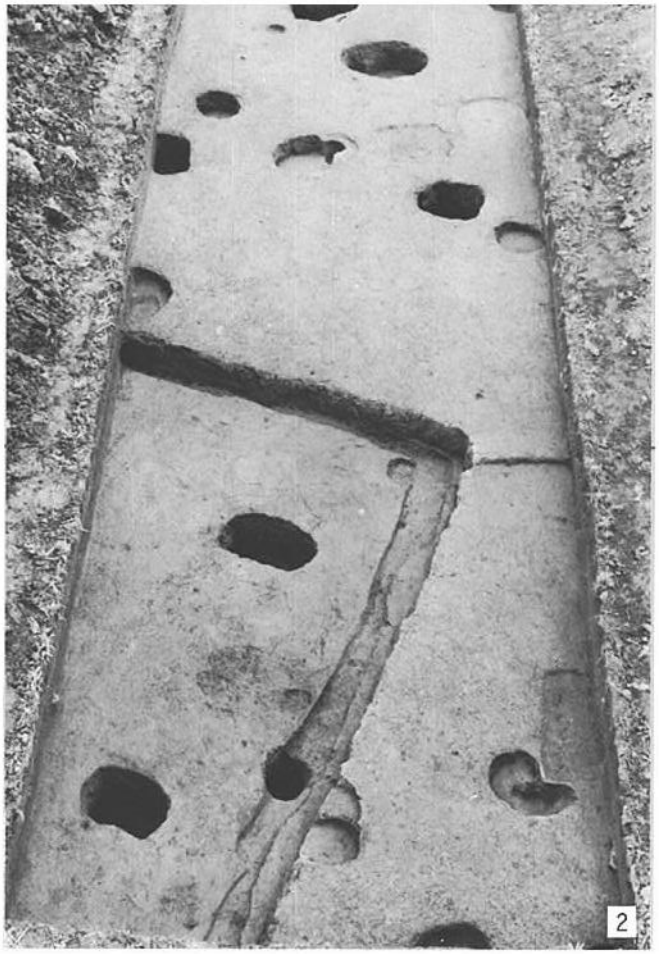
2

3



1　南小路Ⅰ—5　2号竪穴　　2　3号竪穴　　3　Ⅰ—5　出土古銭





1　南小路Ⅲ—3 a　トレンチ　　2　Ⅲ—3 c　トレンチ　　3　Ⅲ—4 a　トレンチ

1

2

3

4

1

3

1

2

1

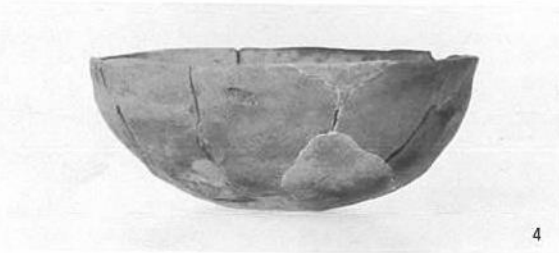
3

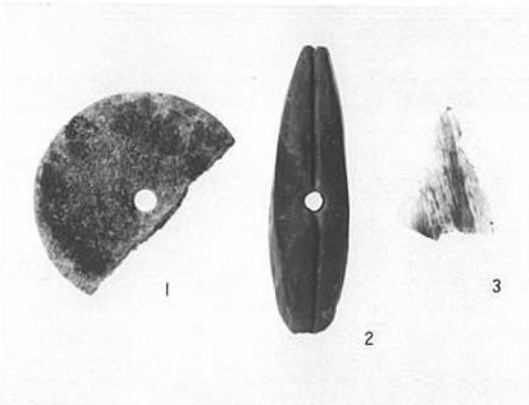
2

4

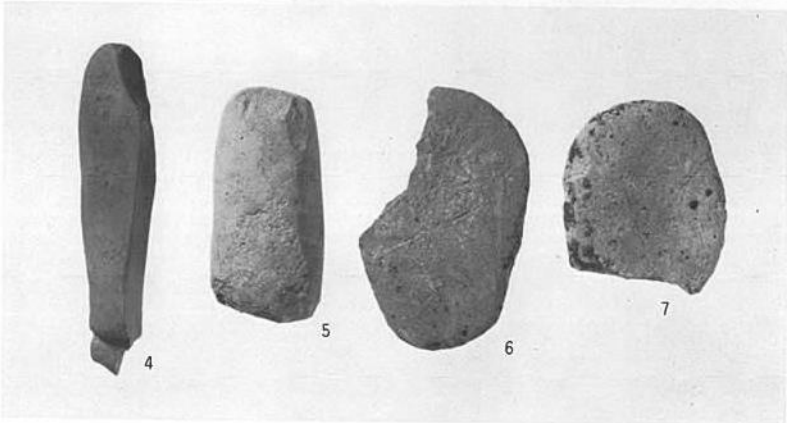
3

1　南小路Ⅲ－3a　3号住居跡出土土器　2　4号住居跡出土土器　3　Ⅲ－3　出土鉄器





1



1　南小路Ⅲ—3c　1号住居跡出土土器　　2　Ⅲ—3～5 出土石器

福岡県文化財調査報告書

第 65 集

昭和58年 3 月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7－7

印刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1－1